



Research Survey Reports in Information Studies, The University of Tokyo

No.37

2021

CONTENTS

Information Behavior and Social Psychology at an Early Stage of the COVID-19 Pandemic in 2020	(ISHIBASHI, Maho YASUMOTO, Shinya ZHU, Qinyi IWASAKI, Masahiro SEKIYA, Naoya) 1
Measuring the Effectiveness of Media Campaigns on How to Prepare for an Earthquake Directly Hitting Tokyo from a Panel Survey	(YASUMOTO, Shinya KAWAI, Daisuke SAITO, Sayaka SEKIYA, Naoya) 73
Problems of Mitigative Action and Disaster Information and How to Solve Them: the Heavy Rain Event of July 2018	(YASUMOTO, Shinya YOKOTA, Takashi USHIYAMA, Motoyuki ISHIGURO, Satoshi SEKIYA, Naoya) 151
Survey Research on Perceptions about the Prediction and Estimation of Earthquake and Tsunami around the Sea of Japan	(SEKIYA, Naoya TANAKA, Atsushi) 189
How Should We Treat Personal Information and Credit Rating Systems in Modern Society?	(SHINODA, Shiori HORIKAWA, Yusuke AMANO, Mihoko OHNO, Shiroh MAGATA, Fumihiko FUJIMURA, Akiko) 235
Problems of Communication in the Internet Society	(OHNO, Shiroh AMANO, Mihoko HASHIMOTO, Yoshiaki HORIKAWA, Yusuke SHINODA, Shiori MAGATA, Fumihiko FUJIMURA, Akiko) 287

情報学研究
調査研究編

37

東京大学大学院情報学環

東京大学大学院情報学環

情報学研究 調査研究編

Research Survey Reports in
Information Studies

Interfaculty Initiative in Information Studies
The University of Tokyo

2021 No. **37**

東京大学大学院情報学環

東京大学大学院情報学環

情報学研究 調査研究編

Research Survey Reports in
Information Studies

Interfaculty Initiative in Information Studies
The University of Tokyo

2021 No. **37**

東京大学大学院情報学環

Research Survey Reports in Information Studies
The University of Tokyo

No.37 目 次 (Contents)

2020年新型コロナウイルス感染症拡大初期の情報行動と社会心理

（石橋 真帆、安本 真也）
朱 沁怡、岩崎 雅宏 …………… 1
（関谷 直也）

パネル調査に基づくドラマ「パラレル東京」の効果—首都直下地震への対策—

（安本 真也、河井 大介） …………… 73
（齋藤さやか、関谷 直也）

平成30年7月豪雨における災害情報と住民の避難行動

（安本 真也、横田 崇）
牛山 素行、石黒 聡士 …………… 151
（関谷 直也）

日本海の地震・津波に関する予知・想定に対する認識に関する調査研究

（関谷 直也、田中 淳） …………… 189

ネット社会の個人情報と信用

（篠田 詩織、堀川 裕介）
天野美穂子、大野 志郎 …………… 235
（間形 文彦、藤村 明子）
（橋元 良明）

ネット社会のコミュニケーションを巡る諸問題

大野 志郎、天野美穂子	} 287
橋元 良明、堀川 裕介	
篠田 詩織、間形 文彦	
藤村 明子	

2020年新型コロナウイルス感染症拡大初期の情報行動と社会心理

Information Behavior and Social Psychology at an Early Stage of the COVID-19 Pandemic in 2020

石橋 真帆 Maho ISHIBASHI

安本 真也 Shinya YASUMOTO

朱 沁怡 Qinyi ZHU

岩崎 雅宏 Masahiro IWASAKI

関谷 直也 Naoya SEKIYA

目 次

1. 調査目的・概要
 - 1.1 調査背景・目的
 - 1.2 調査概要
 - 1.3 調査対象の特徴
2. 生活への影響と不安感
 - 2.1 生活への影響と政府への評価
 - 2.2 不安感の経時的変化
 - 2.3 認知と不安
 - 2.4 自分自身が感染する不安、同居人が感染する不安
 - 2.5 具体的な不安要素
3. 情報行動・情報認知
 - 3.1 情報行動の変化
 - 3.2 役に立った情報源
 - 3.3 情報認知
4. うわさ
 - 4.1 「トイレットペーパーパニック」の周縁
 - 4.2 うわさの流布状況
5. 新型コロナウイルスの感染防止行動
 - 5.1 感染防止の取り組み
 - 5.2 外出に関する自粛
 - 5.3 公共交通機関の利用状況
 - 5.4 テレワークの状況

6. 購買行動の変化

7. 自粛要請・ロックダウンについての意識

附属資料（アンケート調査の単純集計）

キーワード：新型コロナウイルス感染症、情報行動、うわさ、感染防止行動、東京都外出自粛要請

執筆分担：

石橋 真帆（東京大学 学際情報学府博士課程） 1.～3.

安本 真也（東京大学 学際情報学府博士課程） 5.

朱 沁怡（東京大学 学際情報学府修士課程） 4.

岩崎 雅宏（株式会社 サーベイリサーチセンター 営業企画本部）

関谷 直也（東京大学 大学院情報学環総合防災情報研究センター） 6.～7.

1. 調査目的・概要

1.1 調査背景・目的

2020年は全世界の人々にとって混乱の年となった。事の始まりは2019年12月31日に発見された中国武漢における原因不明の肺炎患者である（WHO, 2020a）。翌年の2020年1月に原因不明とされていた当該症状は新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）によるものと判明した（WHO, 2020a）。「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」と命名された当該感染症は2020年1月31日の時点で、中国にて合計11,791件の症例および259人の死亡例を出すほどに蔓延した（中华人民共和国国家卫生健康委员会, 2020）。

その後、強い感染力を持った新型コロナウイルスは瞬時に全世界に拡散した。すでにイタリアを始めとする欧州で猛威を振るい始め、その他の国々にも飛び火しつつあった当時の流行状況を踏まえ、WHOのテドロス事務局長は2020年3月11日に新型コロナウイルス感染症の流行を「パンデミック（感染症の世界的流行）」と宣言した（WHO, 2020b）。無論、日本も例に漏れずその惨禍を被ることとなる。

新型コロナウイルス感染症の蔓延は感染それ自体の実害に留まらず、人々にあらゆるリスク（e.g. 失業によって経済的に困窮するリスク、感染源特定のための追跡調査によって行動履歴等の個人情報第三者に露呈するリスク等）をもたらし、人々の心理や行動に多様な変化をもたらした。加えて、それらリスクに構造的変革によって対応せんとした行政やメディア報道などによっても、人々の社会環境は大きく変化した。例えば、2020年3月2日より実施された公立学校の休校措置、3月25日に東京都に出された「自粛要請」、そして4月16日より全国的に発された緊急事態宣言等は人々の「日常」を大きく揺さぶることとなった。また、その他にも新型コロナウイルス感染症による著名人の逝去等が報道され、人々は不安や危機感を抱いた。

以上のように、2020年の新型コロナウイルス・パンデミックの下では、新興感染症それ自体のリスクや付随する制度の変革、そして人々の社会環境、心理、行動が相互に呼応することで、社会全体がダイナミックに変化していったと言えよう。この未曾有の事態における社会の変化を、人々の心理、行動を中軸として明らかにするため、本稿執筆者を中心として、3月初旬および4月初旬に日本国民を対象とした2回のオンライン調査を行った。日本における当時の流行状況とえば、国内感染者は3月調査前日において累計318名（2020年3月5日時点；厚生労働省, 2020a）、4月調査前日において累計2381名（2020年4月2日時点；厚生労働省, 2020b）であり、本項執筆時の累計感染者数375,607名（2021年1月27日時点；厚生労働省, 2020c）と比較すれば感染初期と見なすことができる。このような日本の流行初期における調査研究は、人々の心理的变化を即時的に捉えた資料として貴重なものと言えよう。そこで、本稿では当該調査の記述および整理をもとに、人々

の心理や諸活動の実態、特に情報行動や感染症に関連する生活実態の変化について幅広く論じていく。

なお、本稿において用いた調査結果の一部は石橋ら（2020）として報告済みである。しかし、先述のように、ここでの目的は2回に渡り行われた調査から観測される人々の生活実態の特徴について、全体的な記述を行うことである。ゆえに、調査全体の収集データについて結果を記述することが望ましいと判断し、既発表部分についても掲載している。

1.2 調査概要

先述のように、2回にわたる本調査は新型コロナウイルス感染症によってもたらされた情報行動や生活実態の変化を把握することを目的として行われた。詳細は以下に示すとおりである（表 1.2.1）。

また、設問内容は目的に沿って、人々の生活実態を幅広く反映できるよう多岐にわたる内容が含まれた（表 1.2.2）。本稿ではこれらの単純集計結果をもとに論じていく。

表 1.2.1 調査概要（石橋ら，2020；一部を改訂）

<p>【調査1】 調査名称：【緊急調査】新型コロナウイルス感染症に関する国民アンケート 調査地域：各都道府県 100 票，計 4700 票 調査機関：株式会社サーベイリサーチセンターSRC 情報総研 調査対象：20 歳以上の個人（性・年代均等割り付け） 調査方法：WEB 調査 有効回答：4700 票 調査期間：2020 年 3 月 6 日～3 月 9 日</p>

<p>【調査2】 調査名称：【第2回】新型コロナウイルス感染症に関する国民アンケート 調査地域：各都道府県 100 票，計 4700 票 （補完サンプル：東京都 n=500・大阪府 n=300・愛知県 n=300 あり） 調査機関：株式会社サーベイリサーチセンターSRC 情報総研 調査対象：20 歳以上の個人（性均等割り付け）※ 調査方法：WEB 調査 有効回答：4700 票（+補完サンプル） 調査期間：2020 年 4 月 3 日～4 月 6 日</p>

調査 1、2 は同一サンプルの予定であったが、離脱が見られたため、サンプルの補填を行った。各都道府県のモニター数の限界から、年代に関しては均等割付とならなかった（20 代：939、30 代：941、40 代・50 代・60 代：940）。

表 1.2.2 設問内容

情報に関する項目	情報行動
	新型コロナウイルスに関する情報認知
	新型コロナウイルスに関する情報源
	情報認知と不安
	うわさの認知
生活実態	生活への影響
	感染防止行動
	自粛状況
	公共交通機関の利用
	購買行動
	テレワーク状況（第2回のみ）
心理	新型コロナウイルスに関連する不安（日本にウイルスが広がる不安、自分自身が感染する不安、重篤化・死への不安、同居人が感染する不安）
属性	リスク要因（高齢、基礎疾患の有無）
	同居人の属性
その他	政府の感染症対策への評価
	テレビの情報提供への評価

1.3 調査対象の特徴

新型コロナウイルス感染症は、高齢者や基礎疾患を持つ人がとりわけ重症化しやすいという特徴を持つ。すなわち、高齢であることや、基礎疾患の保有はリスク要因となり、それらの要因を持つ人は、パンデミックに対して、他の属性の回答者と異なる意識を持つと考えられる。さらに、自分自身のみならず、他者に「感染させてしまう」リスクをも孕む感染症の特徴から、重症化リスクが高い人と同居する人もまた、同様と考えられる。

加えて、子どものような一般的な「弱者」を持つ親や他の家族についても、感染症への不安が高まるだろう。そこで、本調査における高齢者（65歳以上）、基礎疾患保有者および、同居人がいる人（調査1: N=3921, 調査2: N=3930）のうち、高齢者（65歳以上）、基礎疾患保有者、子ども（乳幼児, 小学生, 中学生, 高校生）と同居する回答者に関しては、分析に応じてそれらの属性を考慮する。各属性該当者の割合を図 1.3.1、図 1.3.2 に示す。

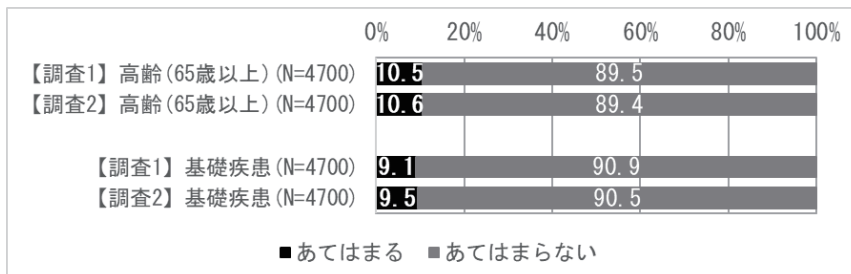


図 1.3.1 リスク属性該当者の割合

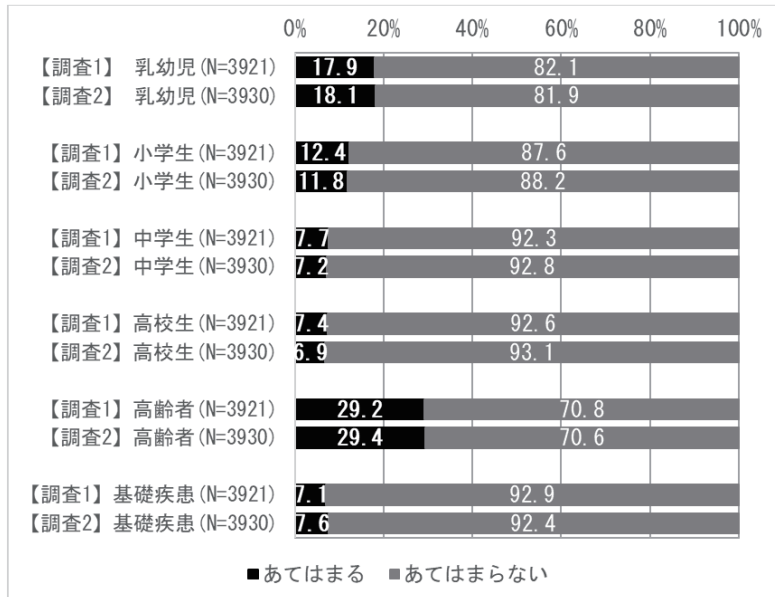


図 1.3.2 各属性該当者と同居する人の割合（母数は同居人がいる人）

2. 生活への影響と不安感

本章では、新型コロナウイルス感染症流行下における本邦の人々の全般的な生活実態¹への影響、および不安感について述べる。

2.1 生活への影響と政府への評価

まず、新型コロナウイルスの流行が人々の「日常」にいかなる影響を与えたのかを把握する。図 2.1.1 に示すのは、人々の生活に及んだ多様な影響に関する回答結果である。まず調査 1、調査 2 を比較すると大半の項目において調査 1 時点のほうが多くの人に影響を感じている様子が伺える。中でも「オリンピック・パラリンピック開催への影響」に関しては 3 月時点に行われた調査 1 のほうが 28.0%と高い値を示しており、調査 2 時点では 8.8%と大きく回答率が低下している。また、同様に調査 1 と調査 2 の間で大きく回答率が変化しているものとして「コンサートや観劇、スポーツ観戦などへの影響」（調査 1: 27.1%; 調査 2: 13.2%）が挙げられる。オリンピック、そしてコンサート等については、調査 2 時点で既に延期や自粛の動きが広がっていた²。いわば、全体的な「自粛ムード」が常態化していた調査 2 の時点ではさほど「影響」というほどの生活の変化は感じられなかったと考えられる。

また、項目ごとに比較を行ってみると、「買い物での品薄・品切れに対する判断」（調査 1: 60.4%; 調査 2: 55.5%）、「外出や移動が気になり」（調査 1: 58.2%; 調査 2: 47.9%）、「経済や景気の影響」（調査 1: 50.5%; 調査 2: 40.9%）、「漠然とした不安が続くこと」（調査 1: 47.9%; 調査 2: 46.0%）について半数前後の回答率が得られている。いずれも生活において基礎的な行動や、一般的心理状態に関わる項目である。つまり、流行初期の人々の日常生活においても、新型コロナウイルスの存在が一定程度精神的・物理的に影響を与えていたと言えよう。

なお、各項目内容についての回答は、回答者が属する社会環境に大いに依存すると考えられる。例えば、「こどもの学校再開や新学期などへの備え」は子どもを持つ家庭でなければ影響は受けないだろう。実際、当該項目に関する回答率は、乳幼児・小学生を持つ家庭に限定すると調査 1 時点で 50.2%、調査 2 時点で 51.2%にまで上昇した（単純集計結果、結果の表記は省略）。すなわち、新型コロナウイルス・パンデミックにおいてはどのようなセクターに属する人が影響を受けやすいかを見極め、適切な政策決定を行うことが重要と言える。

¹ 感染防止行動や外出自粛等、新型コロナウイルス・パンデミック特有の行動については第 5 章及び第 6 章にて述べる。

² 2020 年 2 月 20 日より安倍首相（当時）はイベント自粛に関する声明を公表している（厚生労働省、2020d）。

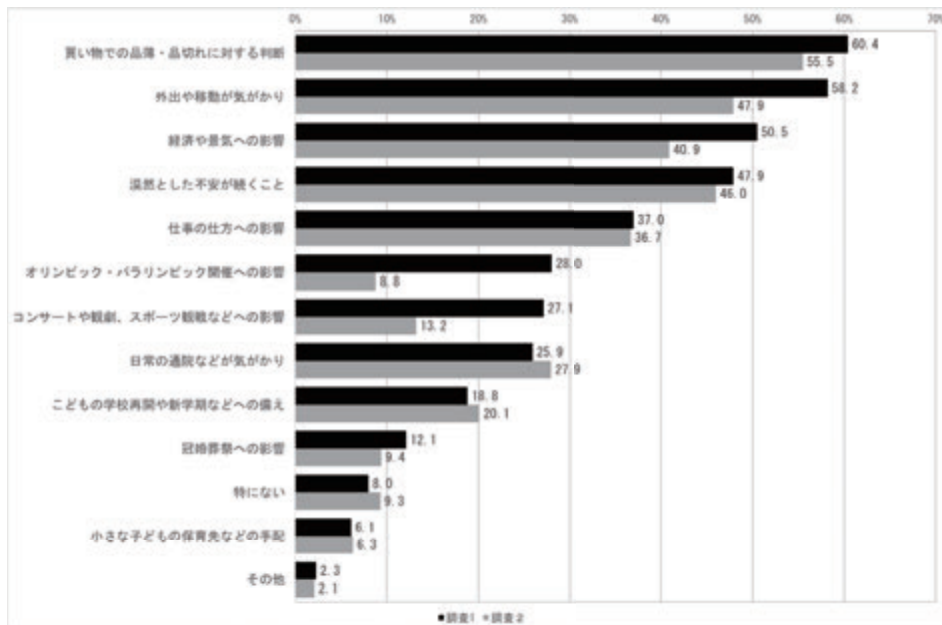


図 2.1.1 生活への影響 (N=4700)

次に、パンデミック下における影響のより主観的な側面、心身の状況について調査2で尋ねた結果を示す(図 2.1.2)。4月初旬では未だ4月16日の「緊急事態宣言」のような対策が取られていなかったためか、自粛によるストレスや疲れを感じている人(「とてもそう思う」および「ややそう思う」)は50%未満に留まっていた。項目間の関係を見ると、「テレビが新型コロナウイルスの話題ばかりで疲れた」(55.8%)、「品切れなどでほしいものが手に入らず、ストレスが増えた」(51.3%)、「新型コロナウイルス感染への対策を行うことに疲れた」(46.3%)において肯定的回答が多い。行動の自粛というよりは、新型コロナウイルスによる社会環境の変化に対する疲れがあったことが伺える。

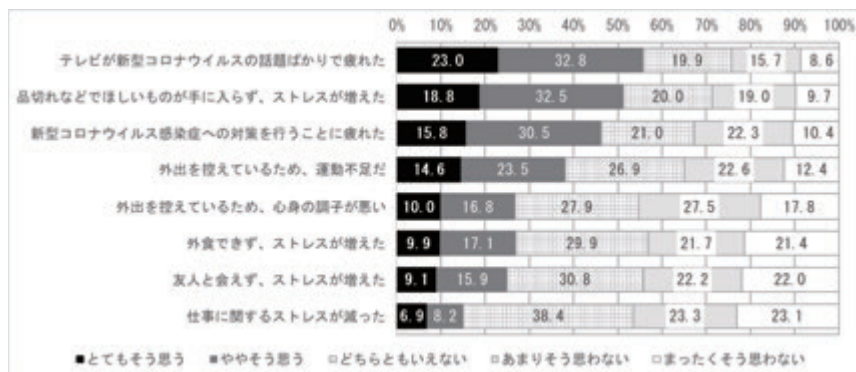


図 2.1.2 新型コロナウイルス・パンデミック下における心身の状況 (調査2, N=4700)

このように、あらゆる影響が国民の生活や心身に及ぶ中、感染症に端を発するあらゆる問題に対し適切に働きかけることで、国民の不安を除くことが政府には求められよう。そこで、回答者に対し政府が行った感染症対策についての評価を尋ねた（図 2.1.3）。

結果として、全般的に政府への評価は高くないといえる。しかし、「イベントなどの自粛の要請」以外の項目については調査 1 時点よりも調査 2 時点で評価が改善している様子が伺える。推測するに、4 月初旬前後では 3 月 20 日のイベントの自粛要請や 3 月 30 日のオリンピック・パラリンピックの延期といった具体的な政府の感染症対策が周知されたためと考えられる。また、3 月調査時点までには日本で感染が広まる象徴的な事象が数多く報告されたため（e.g. ダイヤモンド・プリンセス号における集団感染）、それらを政府の瑕疵と見る人々が多く、相対的に調査 2 よりも評価が低くなったのではないかと考えられる。

また、項目別に見ると、否定的回答（「やや悪いと思う」と「悪いと思う」の合計）が多かった項目として「国内での感染を防ぐ水際対策」（調査 1：56.8%，調査 2：52.5%）、「感染に関する検査（PCR 検査）」（調査 1：57.6%，調査 2：48.1%）が挙げられる。情報開示等も重要には変わりないが、優先的に目の前の脅威を討つ、効果的な政策の推進が求められていたと言えよう。

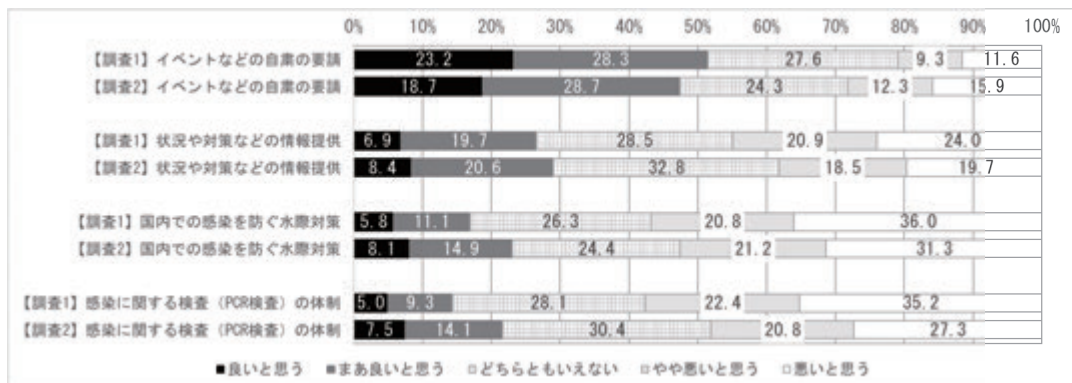


図 2.1.3 政府の感染症対策への評価（N=4700）

2.2 不安感の経時的変化

次に、新型コロナウイルス、あるいはその流行に対して抱かれた人々の不安について理解する。本節では、「日本でウイルスが広がる不安」「自分自身が感染する不安」「重症化・死への不安（調査 2 のみ）」の時系列に沿った変化の様子を捉える。そこで、日本における新型コロナウイルス流行期に起きた象徴的な事象の時点毎に、前述の不安を抱いたか否か尋ねた（図 2.2.1）。

なお、調査1と調査2では基本的に異なる事象（調査1はおもに2019年12月31日～2020年2月、調査2は2020年3月）について抱いた不安を尋ねているが、重複する事象もいくつか含まれていた。そこで、補足的にそれらの重複事象に対する不安の回答結果も図中に示している（図2.2.1 中点線部）。調査1と調査2双方にて示した事象に関する結果は異なっており、調査2における不安感の方が概して低くなっている。これは調査1時点のほうが質問票における提示事象から時を経ておらず、それら事象に関わる記憶が維持されていることが関連していると考えられる³。そこで、2019年12月31日から2020年2月18日の事象については、記憶がより新しい調査1時点のほうが適切に調査回答者の心理が反映されていると見なし、前述の期間については調査1を、2020年3月6日以降については調査2の結果を参照する。ただし、調査2のみ測定を行った「重症化・死への不安」については全期間において調査2の結果を参照する。

結果として、着目すべき点は2点ある。第一に、不安感の質による、その高まり方の差異である。2019年12月31日（中国で、武漢市が「原因不明の肺炎27人」を発表）時点では、「自分自身が感染する不安」（15.2%）よりも「日本でウイルスが広がる不安」（37.0%）のほうが高かった。また、直後の2020年1月23日（中国で、武漢市を封鎖措置）に関して測定された「重症化・死への不安」についても、「自分自身が感染する不安」と同様、18.1%と比較的低い値を示している。また、各不安感についてその後の変化を追うと、「日本でウイルスが広がる不安」に関しては既に2020年1月28日（国内で初の日本人患者を確認）時点で84.4%と多くの人不安感を抱いており、その後ほぼ8割～9割前後の値を保ち続けている⁴。

一方で、その他2つの不安（「自分自身が感染する不安」「重症化・死への不安」）については、いくつかの時点で急激に上昇する傾向が読み取れる。例えば、「自分自身が感染する不安」については2020年2月28日（政府が3月2日から春休みまで、小中高校などの臨時休校を要請）の際に、直前の52.4%から不安を感じる人の割合が増加し、67.4%となっている。また、2020年3月25日（東京都知事が会見で、週末の外出を控えることなどを要請）、および3月30日（タレント志村けんさんの死去）の際も、「自分自身が感染する不安」（2020年3月24日より、56.8%→71.4%→78.6%）、「重症化・死への不安」（39.9%→52.2%→68.0%）双方の値が大きく増加している。

³ 野村（2017）は現在から過去へ記憶を遡行する調査アプローチである「回顧法」について、回答者の記憶の不確かさや歪みを問題点として指摘している（p118.）。本質問も過去を想起するという点で、同様の問題が考えられる。

⁴ 2020年3月6日時点では77.6%まで下がっているが、これは先に述べた通り、調査時点における当該事象に関わる記憶保持の問題によると考えられる。

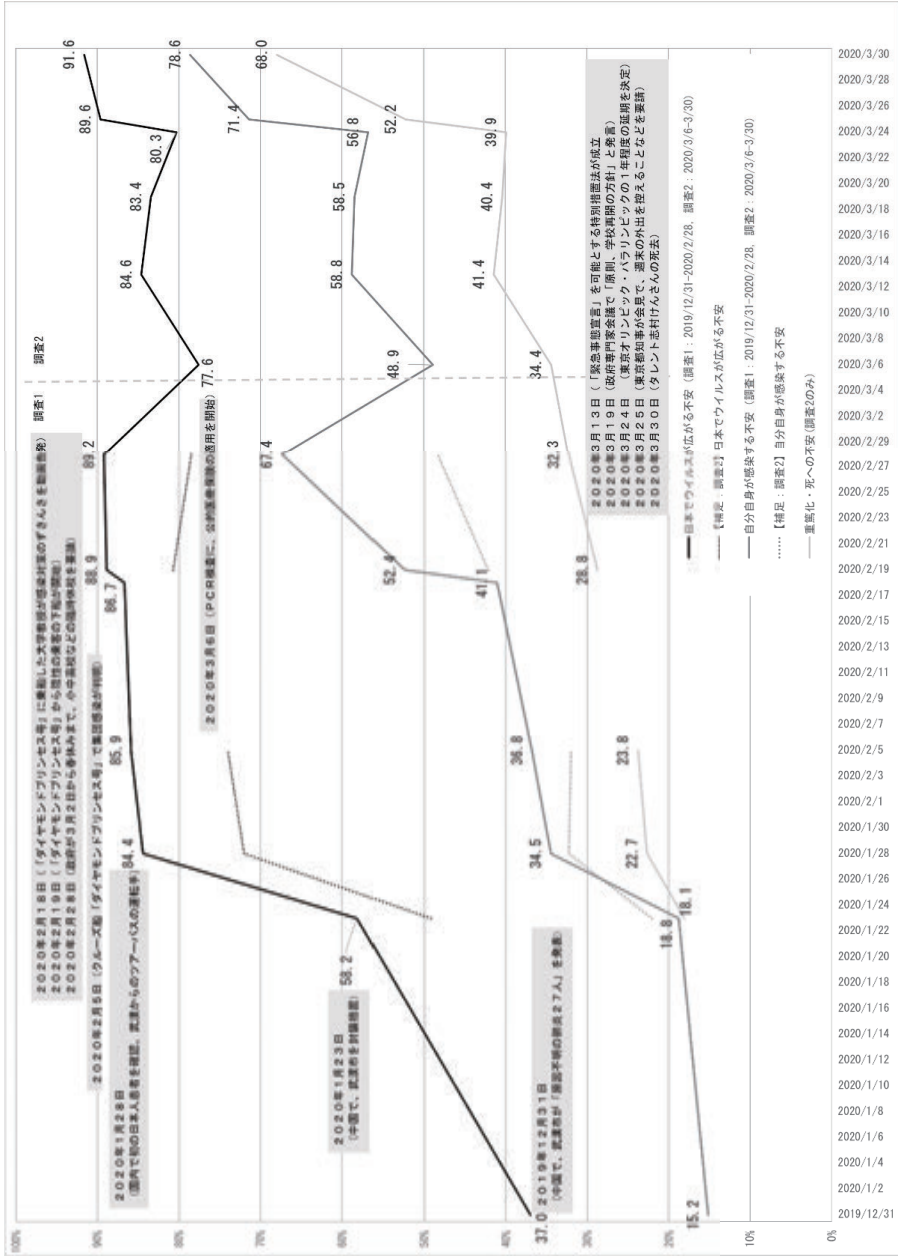


図 2.2.1 不安感の経時的変化 (実線は調査 1: 2019/12/31-2020/2/28 および調査 2: 2020/3/6-3/30, 点線は調査 2: 2020/1/23-2/28, N=4700)

このように、不安感と言っても、それが一般的状況（日本全体にウイルスが広がる状況）に関するものか、個人の状況に関するものか（自分自身の感染や重症化・死亡）によって高まり方が大きく異なると言えよう。また、少なくとも新型コロナウイルス感染症に関しては一般的状況への不安が先行すると考えられる。

第二に着目すべき点として、3つの不安感に共通し、影響を与えたと推測される事象の存在が挙げられる。具体的には、2020年1月28日（国内で初の日本人患者を確認）、3月13日（「緊急事態宣言」を可能とする特別措置法が成立）、そして3月25日（東京都知事が会見で、週末の外出を控えることなどを要請）および3月30日（タレント志村けんさんの死去）において、いずれの不安感も高まる傾向が見て取れる。特に、3月25日の自粛要請後に実際に人々の外出自粛が見られたこと、また、志村けん氏の死去は他の研究においてもその心理的影響力が指摘されていることを踏まえると（cf. 鳥海ら, 2020; 橋元ら, 2020, p24-25.）、これら2つの事象は国民に特に強い影響を与えたとと言える。

2.3 認知と不安

前項では社会的事象に付随する不安感の経時的変化を捉えた。本節でも同様に、社会事象に付随する不安感について論じるが、先とは異なり情報認知の観点を踏まえる。具体的には、前項で取り上げた各事象、および海外における事象について、どの程度の人が当該事象を把握した上で不安を抱いているのかを把握した。

まず、日本に関する事象についての結果を図2.3.1に示す。結果として、最も「知っている不安を感じる」と答えた人が多かった事象は2020年3月30日（タレント志村けんさんの死去; 87.7%）であり、2020年3月25日（東京都知事が会見で、週末の外出を控えることなどを要請; 80.5%）が続いた。これらの事象に対し不安が高いということは、先の不安感の変化に関する結果と一貫しているが、そもそも人々の認知度自体が他の事象と比較して高かったと分かった。

また、海外の事象についても、情報認知と不安感の程度を尋ねた（図2.3.2）。本結果を先の日本の事象に関する結果と比較すると、全体的に認知度や不安の程度の低さが伺える。しかし、中でも「イタリアでは1万人以上がなくなった」は認知度（「知っている不安を感じる」と「知っているが不安を感じない」の合計）が91.0%と高く、その上で不安を抱いている人も74.6%と多かった。一方で、「台湾では、ビッグデータを活用した感染症対策を行っている」については隣国にも関わらず認知度が比較的低い結果となっていた（認知度: 67.6%）。

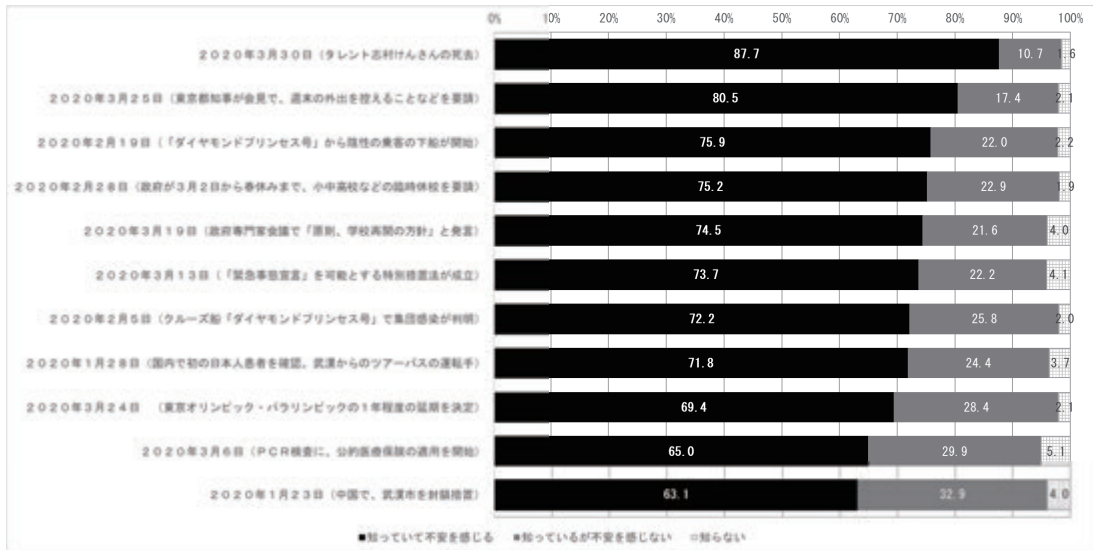


図 2.3.1 情報認知と不安 (日本国内の事象, N=4700)

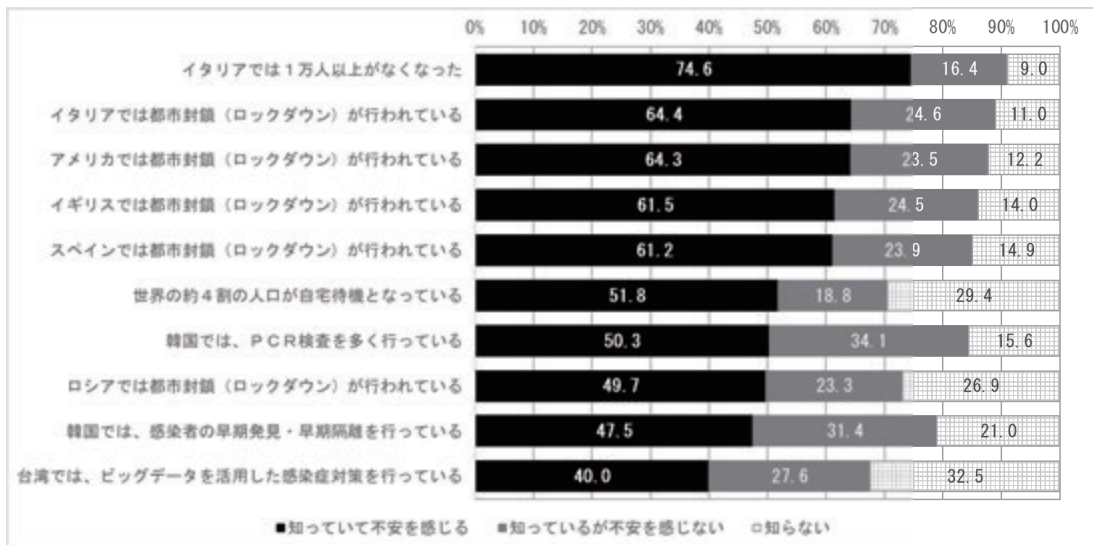


図 2.3.2 情報認知と不安 (日本国外の事象, N=4700)

2.4 自分自身が感染する不安、同居人が感染する不安

次に、調査時点における自分自身が感染する不安、および同居人が感染する不安について述べる。まず、自分自身が感染する不安についての結果が図 2.4.1 である。調査 1 と比較して調査 2 では「とても不安を感じる」と答えた人の割合が大幅に増加していることが見て取れる（調査 1: 24.9%、調査 2: 44.4%）。

一方で、全体的に不安感の上昇が伺える調査 2 時点においてもなお、8.4% の人は不安を感じていないと答えている。そこで、該当する 8.4%（N=394）の回答者に不安を感じない理由を尋ねた。結果が図 2.4.2 である。理由としては回答率が高いものから、「ウイルスに対して、気を付けるべき注意点がわかってきたから」（29.6%）、「重篤な状態になったり、死に至る確率が低そうだから」（29.6%）、「自分が感染することはないと思っているから」（21.5%）となっている。つまり、ウイルスに対して理解しているという意識や、感染・死への楽観によって不安感が抑えられていると言える。

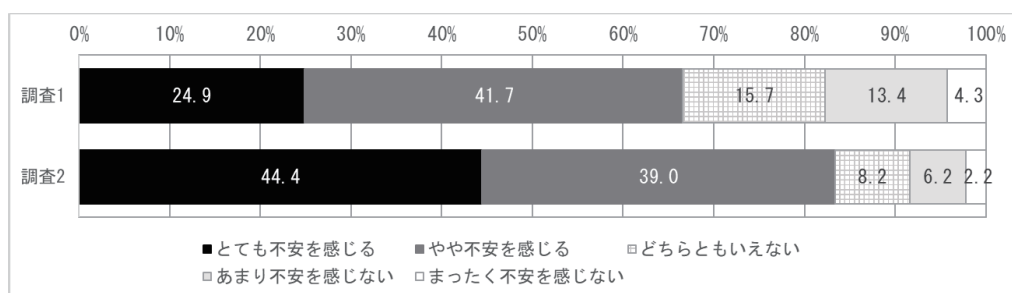


図 2.4.1 自分自身が感染する不安（N=4700，石橋ら，2020 を改訂）

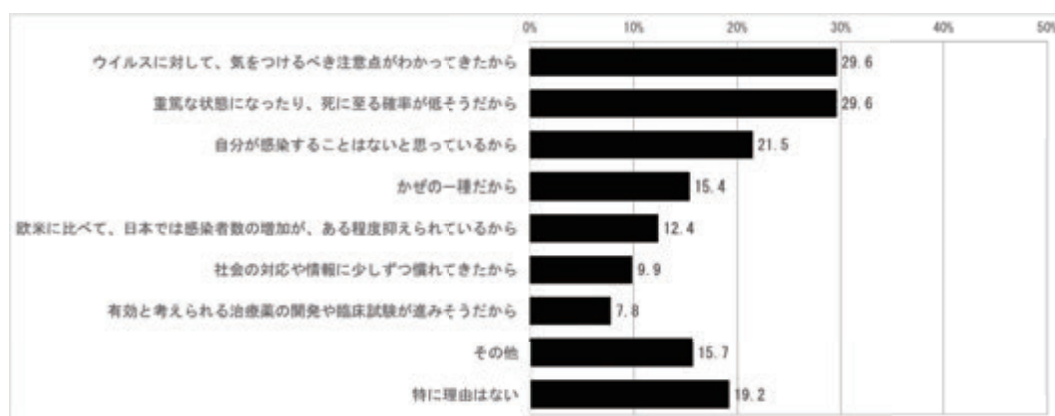


図 2.4.2 自分自身が感染する不安を感じない理由
（調査 2 のみ・複数回答，N=395，石橋ら，2020 を改訂）

続いて、同居人が感染する不安について図 2.4.3 に示す。ここでは高齢者、基礎疾患、乳幼児の同居人がいる人に回答を求めた。結果として、いずれも調査 1 より調査 2 時点のほうが感染する不安感が高まっており、項目間で比較を行うと乳幼児（調査 1：87.2%，調査 2：92.7%）、基礎疾患（調査 1：84.2%，調査 2：91.0%）、高齢者（調査 1：71.3%，調査 2：86.5%）の順に感染する不安が高かった。乳幼児や基礎疾患を持つ人は通院等外出機会が必要な場合が多いが、高齢者は疾患がなければ、人と接触しなくとも過ごすことが可能である。感染しないよう行動を比較的制御可能であることから、高齢者に対する相対的な不安が低くなったのではないかと考える。

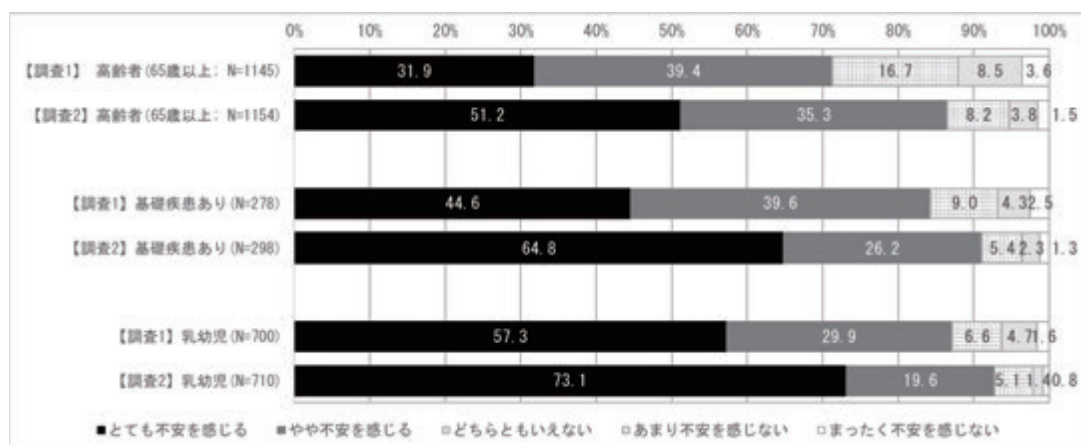


図 2.4.3 リスク要因を持つ同居人が感染する不安
(サンプルは該当する同居人がいる人のみ、石橋ら，2020 を改訂)

2.5 具体的な不安要素

2 章 1 節で明らかになったように、新型コロナウイルスは健康に関するリスクを人々にもたらすのみならず、生活のあらゆる側面に影響を与えた。そこで、具体的にどのような対象・事象に不安を抱いたのか、不安の要因について尋ねた結果が図 2.5.1 である。

結果として、各調査において「いつまで続くのか、見通しがわからないこと」が最も多くの肯定的回答（「とても不安を感じる」「やや不安を感じる」の合計）を得た（調査 1：84.8%；調査 2：88.8%）。その他では、「効果的な治療薬やワクチンがないこと」（調査 1：81.4%，調査 2：86.9%）、「ウイルスが目に見えないものであること」（調査 1：77.0%；調査 2：82.8%）、「日本でも感染者の爆発的な増加が起り得ること」（調査 2 のみ：87.1%）等について多くの人が不安を感じていた。

また、調査 1、2 におけるすべての同一質問について、調査 2 の時点のほうが、調査 1 より「とても不安を感じる」の回答割合が高かった。新型コロナウイルス感染症が日本で拡大するにつれ、あらゆる生活や心理的側面において強い不安が喚起されたものと考えられる。

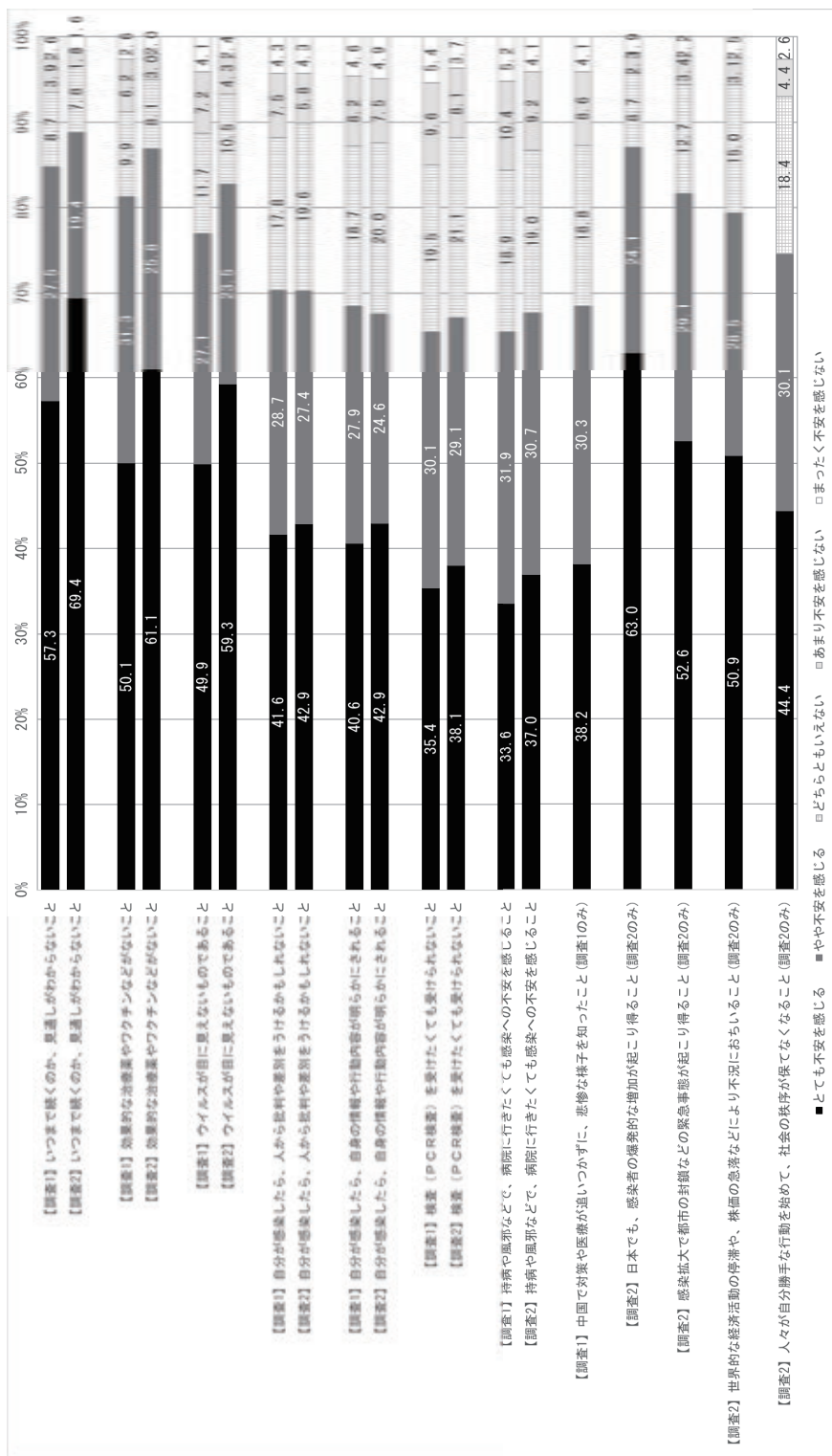


図 2.5.1 具体的な不安の要素 (N=4700)

3. 情報行動・情報認知

本章では、パンデミックにおける情報行動の変化や特徴を把握する。また、本邦の流行初期における人々の新型コロナウイルス関連用語に対する認知も併せて検討する。

3.1 情報行動の変化

図 3.1.1 に示すのは、ふだん（新型コロナウイルスの流行前）、ここ 1 週間（調査 1 回答時）、ここ 1 週間（調査 2 回答時）におけるメディアの平均利用時間⁵である。なお、質問項目に対しては「全く利用しなかった」「30 分未満」「30 分以上 1 時間未満」「1 時間以上 1 時間 30 分未満」「1 時間 30 分以上 2 時間未満」「2 時間以上 3 時間未満」「3 時間以上 4 時間未満」「4 時間以上 5 時間未満」「5 時間以上 8 時間未満」「8 時間以上」より回答を求め、数値換算して分析を行った⁶。結果として、全体平均ではメディア利用時間に若干の変化が見られたが、特徴的なものは見られなかった。利用者平均ではラジオ、新聞、雑誌についてメディア利用時間が調査を経るごとに高まる傾向が伺えた（ラジオ：1.43 時間/1.63 時間/1.79 時間；新聞：0.81 時間/0.94 時間/1.12 時間；雑誌：0.80 時間/0.95 時間/1.33 時間<値は左からふだん/調査 1/調査 2 における利用時間>）。また、インターネット[パソコン]についてもわずかに利用時間が延びていた。しかし、これらのメディア利用時間の変化も決して大きいものとはいえず、新型コロナウイルスの流行がメディア利用全般の量的側面に強い影響を与えたとは言い難い。

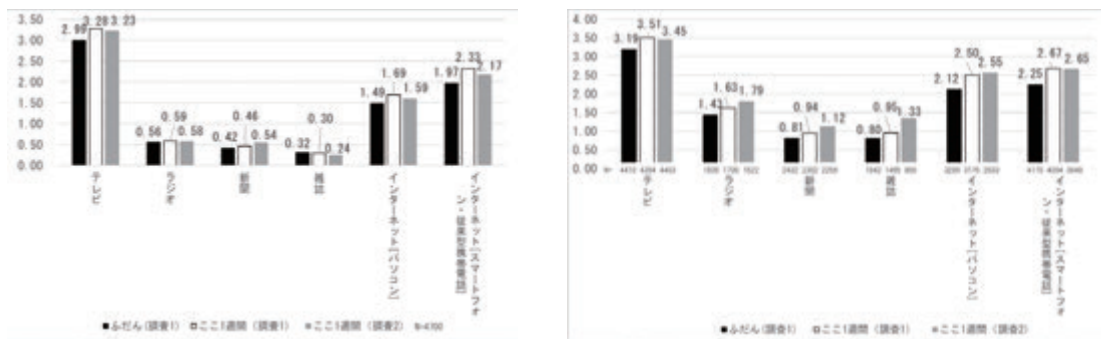


図 3.1.1 メディア平均利用時間の変化(左: 全体, 右: 利用者, 単位: 時間, 石橋ら, 2020 を改訂)

⁵ ここで検討するのは、新型コロナウイルスの情報取得以外の用途も含むメディア利用である。なお、「ふだん（新型コロナウイルスの流行前）」については調査 1 の際に想起して回答するよう求めた。
⁶ 平均利用時間については「全く利用しなかった」=0 時間、「30 分未満」=0.5 時間、「30 分以上 1 時間未満」=0.75 時間、「1 時間以上 1 時間 30 分未満」=1.25 時間、「1 時間 30 分以上 2 時間未満」=1.75 時間、「2 時間以上 3 時間未満」=2.5 時間、「3 時間以上 4 時間未満」=3.5 時間、「4 時間以上 5 時間未満」=4.5 時間、「5 時間以上 8 時間未満」=6.5 時間、「8 時間以上」=8 時間として分析した。

3.2 役に立った情報源

次に、新型コロナウイルスに関する情報取得に焦点を当てる。図 3.2.1 は、新型コロナウイルスに関する情報取得において、回答者にとって役に立った情報源を示している。最も回答率が高かった情報源はテレビであり（調査 1，80.7%；調査 2，82.3%）、次にインターネット（調査 1，51.4%；調査 2，48.5%）であった。その他、新聞や SNS にも一定の回答が見られるが、やはりテレビが 8 割と多くの人に利用される傾向にあったと言える。

また、先述のテレビ利用、特にテレビ報道について評価を尋ねた結果が図 3.2.2 である。「どのように予防対策や行動をすれば良いか、わかりやすかった」という項目に関して、調査 2 時点では半数程度までの肯定的回答を得ており（そう思う：12.6%、ややそう思う：37.9%）、テレビが情報の整理や伝達に一定程度貢献したことが伺える。しかし、否定的な評価に関する項目（「不安を煽るような映像や表現が多かった」「何が正しい情報なのか分かりにくかった」）について肯定する回答も半数弱ほど見られる。

また、調査 1、2 それぞれにおける回答を比較すると、特にテレビを評価する質問項目（「どのように予防対策や行動をすればよいか、わかりやすかった」「事実を適切に伝えている放送が多かった」「医学や保健・衛生の難しい点をわかりやすく伝えられていた」「国民（視聴者）に対して、安心や冷静さにつながる放送が多かった」）について 10%前後、肯定的回答が増加している様子が見られる。

以上を踏まえると、国民の中には肯定・否定的評価の双方が存在しながらも、テレビは情報収集に活用され、特に感染症のリスクが顕在化する中で役に立ったと考えられる。

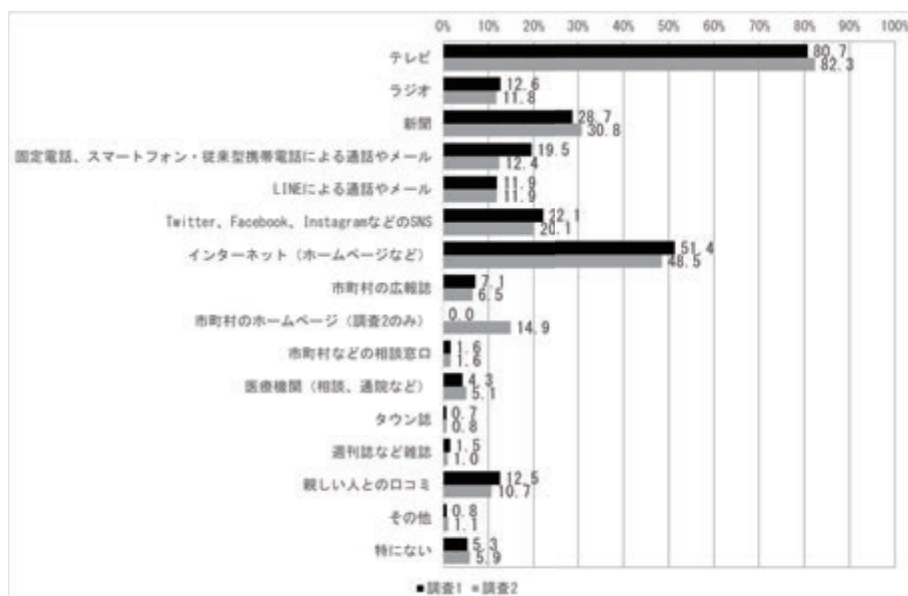


図 3.2.1 新型コロナウイルスに関して役に立った情報源（複数回答，N=4700）

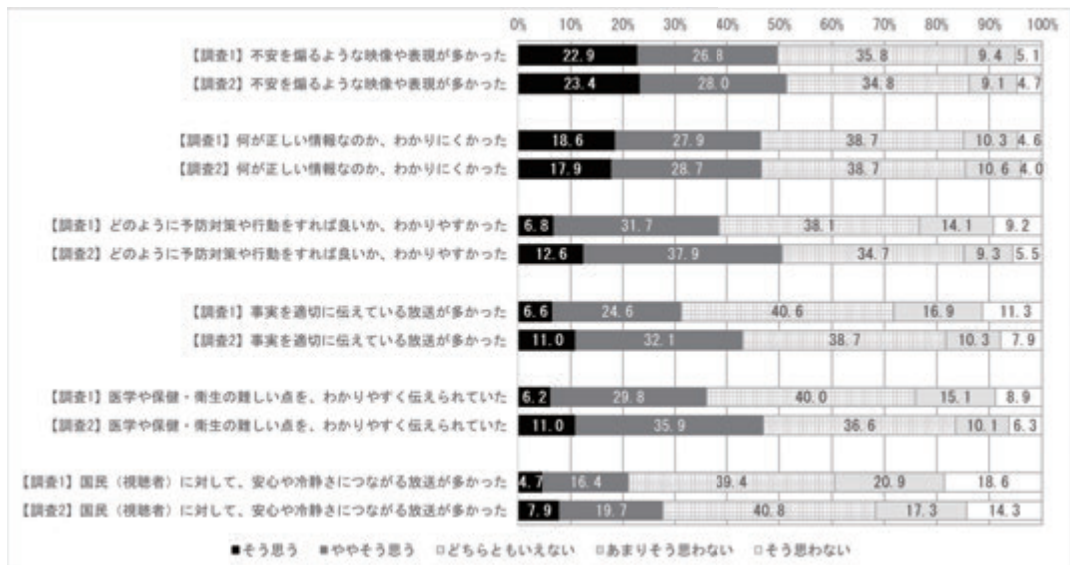


図 3.2.2 テレビ報道に対する評価 (N=4700)

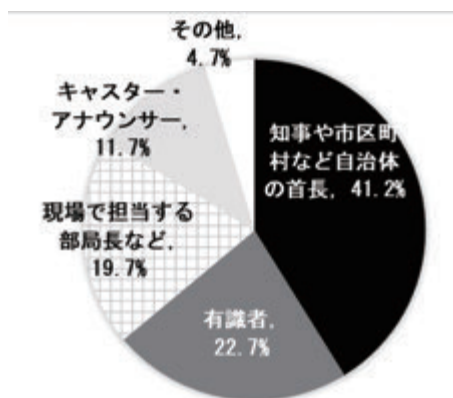


図 3.2.3 安心をもたらす情報発信者 (調査 1, N=4700)

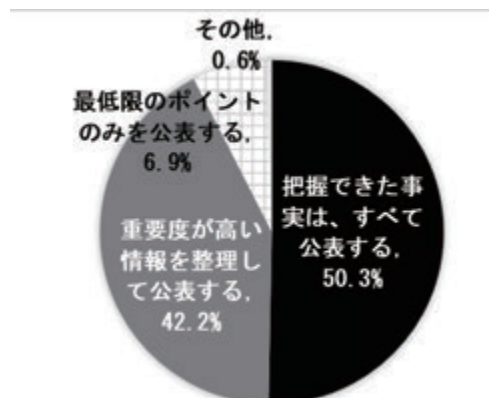


図 3.2.4 安心をもたらす情報発信方法 (調査 1, N=4700)

また、情報流通にはメディア形態のみならず、発信する人物の属性など多くの要素が関わってくる。図 3.2.3 および図 3.2.4 は、居住地域においてどのような情報発信者、および情報発信の方法が安心につながるか尋ねた結果である。情報発信者としては「知事や市区町村など自治体の首長」が 41.2% と最も大きな割合を占め、「有識者」(22.7%)、「現場で担当する部局長など」(19.7%)、「キャスター・アナウンサー」(11.7%) と続く。

情報発信方法としては、「把握できた事実は、すべて公表する」(50.3%) が最も高かったが、「重要度が高い情報を整理して公表する」も 42.2% と同程度に高い割合を占めていた。

このように、人々は地域行政の長、あるいは有識者と言った専門家に心理面で依拠しており、情報発信者には情報の透明性、および整理を期待していることが伺えた。

3.3 情報認知

次に、新型コロナウイルスに関する情報について人々がどの程度認知しているのかを理解する。図 3.3.1 は新型コロナウイルスに関する用語について人々の認知度を 4 段階（「聞いたことがあり、意味も理解している」「聞いたことがあり、意味はなんとなく分かる」「聞いたことはあるが、意味はわからない」「聞いたことがない」）にて尋ねたものである。

まず、項目ごとに比較すると、用語の意味をある程度理解している（「聞いたことがあり、意味も理解している」と「聞いたことがあり、意味はなんとなく分かる」の合計）割合が最も高いのは、「新型コロナウイルス」（調査 1： 98.3%， 調査 2： 98.6%）であり、以降「接触感染」（調査 1： 96.3%， 調査 2： 96.7%）、「飛沫感染」（調査 1： 95.0%， 調査 2： 96.3%）と続く。

一方、認知度に関して、多くの人が十分に理解していなかったものとしては「エアロゾル感染」（調査 1： 55.0%， 調査 2： 59.4%）や「COVID-19」（調査 1： 56.5%， 調査 2： 67.8%）であった。例えば、「接触感染」「飛沫感染」は文字通りの意味を示すため、認知しただけで容易に理解が可能であろう。しかし、「エアロゾル感染」や「COVID-19」は本邦における日常生活では馴染みのない語句である。これらの用語が、新型コロナウイルスの正しい認知と防疫行動にとって必要不可欠であるかは難しいところだが、一般的に新しい情報を提示する場合、報道機関や専門家は人々にとってより分かりやすい表現を使うことも一考する必要があるだろう。

また、調査 1 と調査 2 を比較すると用語への理解がかなり進んでいる項目がある。例えば、「クラスター感染」や「PCR 検査」は 10%程度理解を示す人の割合が増加している。先に挙げた「COVID-19」も、理解している人は 7 割弱程度ではあるが、調査 1 から 10%理解を示す人が増えている。これは、新型コロナウイルスのリスクが顕在化するにつれて、人々の情報への欲求が高まった結果であると推測される。

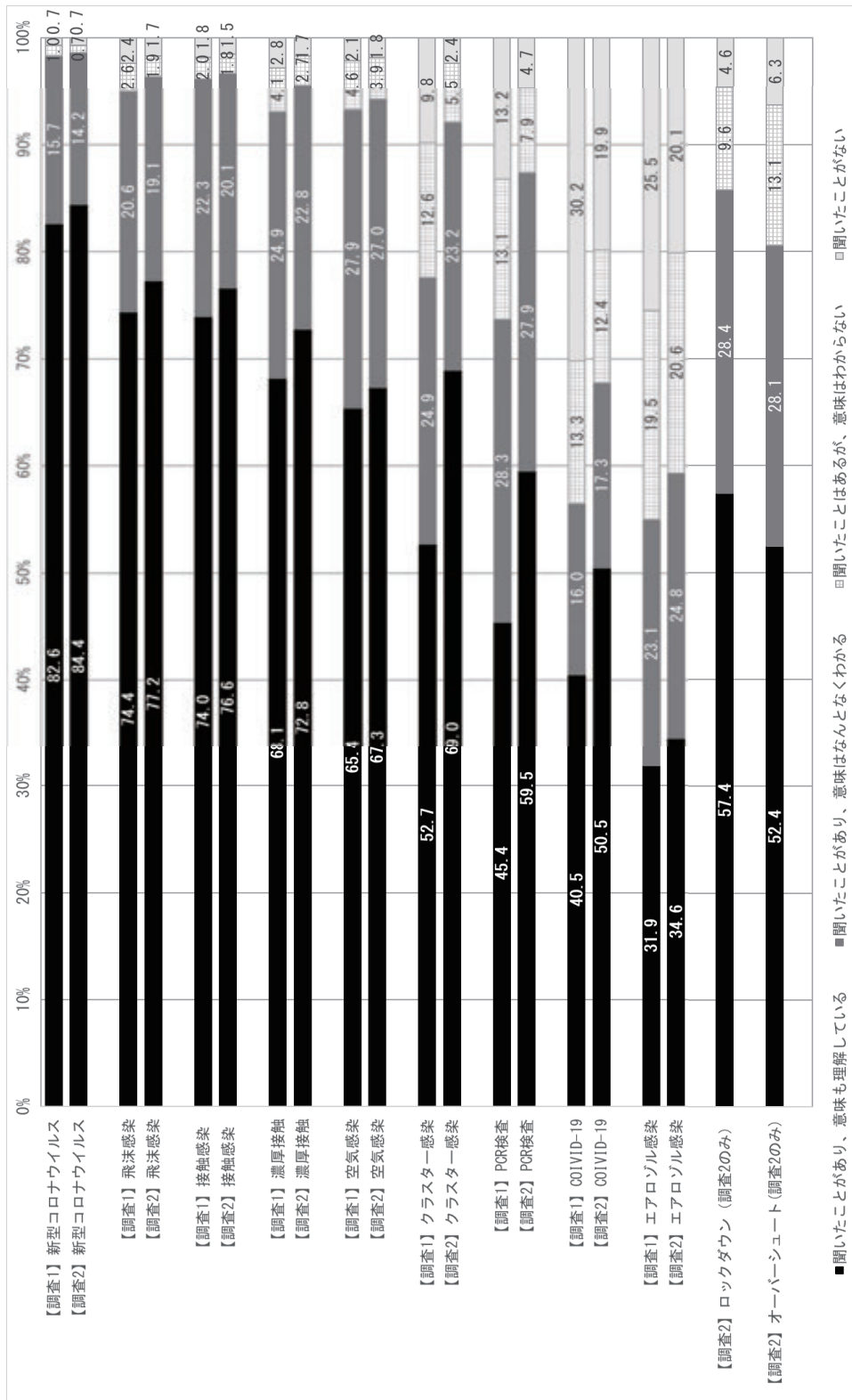


図 3.3.1 新型コロナウイルスに関する用語の認知 (N=4700, 石橋ら, 2020 を改訂)

4. うわさ

新型コロナウイルス感染症に伴う社会不安によって、不正確な情報や誤った情報を含めた大量の情報が急速に拡散し、人々の生活で氾濫している。これに対して、WHO（世界保健機関）が新型コロナウイルス感染症に関するフェイクニュースの拡散を「インフォデミック」と呼び、人々に注意を呼びかけていた。このような状況は、正確な情報が分かりにくくなる社会的混乱の状態をもたらしている。日本も例外ではなく、新型コロナウイルス感染拡大後の偽情報や誤った情報の問題が深刻化していた。例えば、本調査が行われた時点で、「マスク増産による原材料不足でトイレトペーパーが不足する」とのうわさも日本国内で広く拡散していた。以上を踏まえて、本章は主に、トイレトペーパー不足をはじめとするうわさとそれに関連した人々の行動について述べる。

4.1 「トイレトペーパーパニック」の周縁

(1) トイレトペーパー不足に関するうわさ

まずは、回答者に「マスク増産による原材料不足でトイレトペーパーが不足する」といううわさの最初の情報源を聞いた。その結果は図 4.1.1 である。全体では「テレビ」(43.8%)との回答が最も多く、次いで「人との会話・口コミ」(17.6%)、「インターネット（ホームページなど）」(12.9%)が続く。「Twitter」は 10.1%だけであったが、SNS(Twitter、Facebook、Instagram、LINE)の中では最も比率が高かった。「トイレトペーパーが不足する」とのうわさは SNS を中心に拡散したと思われる傾向があるが⁷、以上の結果によって、SNS よりむしろ、テレビによって認識した人が多いと言える。

次に、最初に知った情報源以外の情報源についても問うた。全ての情報源を合わせて加算した結果（図 4.1.2）、「テレビ」は 66.7%となり、「トイレトペーパーが不足する」とのうわさの認知におけるテレビの影響力は非常に大きいことを示している。その中には、流言自体を伝えた報道のほか、流言を打ち消した報道も含まれていると考えられる。

⁷ 例えば、日本経済新聞、2020、「コロナで注意「インフォデミック」とは」、<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ057688620V00C20A4I10000>、2021年1月26日アクセス

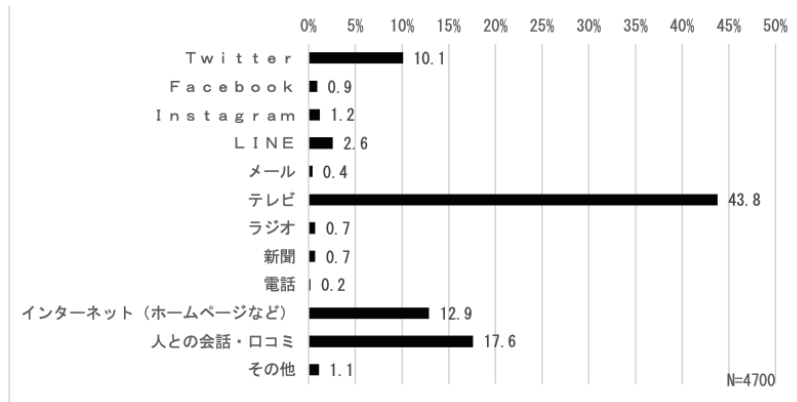


図 4.1.1 トイレットペーパーが不足するとのうわさを最初に知った情報源
(調査 1, N=4700, 聞いていない・わからない人の結果は省略)

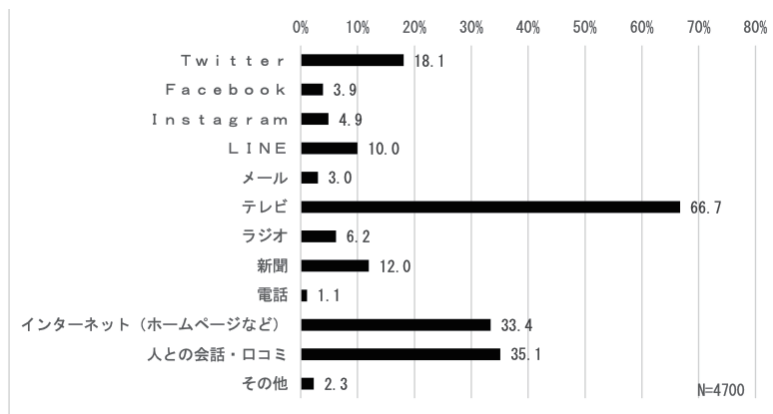


図 4.1.2 トイレットペーパーが不足するとのうわさを知った全ての情報源
(調査 1・複数回答, N=4700)

また、「トイレットペーパーが不足する」とのうわさを知った全ての情報源について、性別、年代別に分析した結果は表 4.1.1 である。カイ 2 乗検定と残差分析を行ったところ、性別では、「Instagram、LINE、人との会話・口コミ」は女性、「メール、ラジオ、新聞、インターネット (ホームページなど)」は男性の方の比率が有意に高かった。年代別では、多くの項目で有意差があり、Twitter、Instagram、LINE において、20 代の比率が高く、40 代、50 代、60 代の比率が低くなっている。一方、テレビ、ラジオ、新聞における比率は、20 代、30 代は 50 代、60 代よりも明らかに低くなっている。また、インターネット (ホームページなど) において、20 代の比率は 40 代、50 代よりも有意に低かった。うわさの情報源は年代別のメディア利用状況とほぼ一致していることを示している。

表 4.1.1 性別、年代別にみたトイレットペーパーが不足するとのうわさの情報源

	N	Twitter	Facebook	Instagram	LINE	メール	テレビ	ラジオ	新聞	電話	インターネット (ホームページなど)	人との会 話・ロコ ミ	その他	聞いて いない・分 からない
男性	2350	17.4%	4.4%	3.5%	8.6%	3.9%	66.8%	8.6%	15.4%	1.2%	39.7%	27.7%	1.5%	9.2%
女性	2350	18.8%	3.4%	6.2%	11.4%	2.2%	66.5%	3.7%	8.6%	1.0%	27.1%	42.4%	3.0%	6.4%
		ns	ns	***	**	***	ns	***	***	ns	***	***	**	***
20代	940	43.8%	4.8%	12.7%	17.7%	3.8%	56.4%	3.7%	6.4%	1.7%	22.6%	32.8%	2.2%	8.3%
30代	940	20.4%	4.3%	7.1%	11.1%	2.0%	62.7%	4.3%	5.6%	0.9%	33.3%	36.6%	2.6%	7.3%
40代	940	13.7%	3.8%	2.3%	8.2%	3.0%	64.9%	5.7%	9.1%	0.4%	39.4%	37.9%	2.3%	7.8%
50代	940	8.2%	3.0%	0.9%	6.4%	3.1%	71.9%	9.3%	15.6%	1.1%	38.1%	36.6%	2.2%	7.2%
60代以上	940	4.3%	3.7%	1.3%	6.8%	3.3%	77.4%	7.9%	23.2%	1.4%	33.8%	31.6%	2.0%	8.3%
		***	ns	***	***	ns	***	***	***	ns	***	*	ns	ns
全体	4700	18.1%	3.9%	4.9%	10.0%	3.0%	66.7%	6.2%	12.0%	1.1%	33.4%	35.1%	2.3%	7.8%

※ アスタリスクは、各属性(性別、年代)×各回答[あてはまる / あてはまらない]のクロス集計のχ²検定結果。ns : no significant、*:p<0.05、**:p<0.01、***:p<0.001

※ 表中の黒太字は残差分析の結果 5%水準で有意に高い値、赤太字は有意に低い値を表す。

(2) トイレットペーパー品切れ情報

うわさが広まってから、店頭からトイレットペーパーが売り切れてしまう状態が一時期続いた。回答者に、「実際にトイレットペーパーなどの品切れが発生している状況を、最初に知った情報源は何ですか」とたずねた結果、図 4.1.3 に示した通り、一番多かったのは「テレビ」の 31.7%、次いで「店頭で見かけて知った」(30.2%)、「人との会話・ロコミ」(13.3%) の順であった。SNS の合計は 9.8%で、「テレビ」には遠く及ばなかった。次に、品切れの状況を最初に知った情報源以外のほかの情報源を加えた結果は図 4.1.4. である。「テレビ」(59.9%) との回答が圧倒的に多かったほか、「店頭で見かけて知った」(51.0%) という人も約半数を占めている。同様に、SNS による認知は高くない。

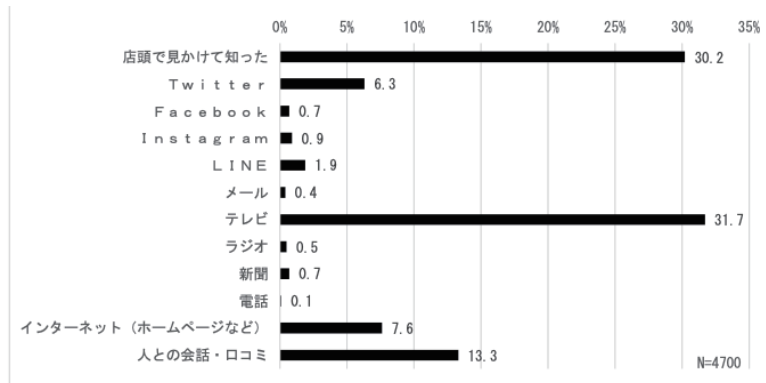


図 4.1.3 トイレットペーパーの品切れ情報を最初に知った情報源
(調査 1, N=4700, 聞いていない・分からない人の結果は省略)

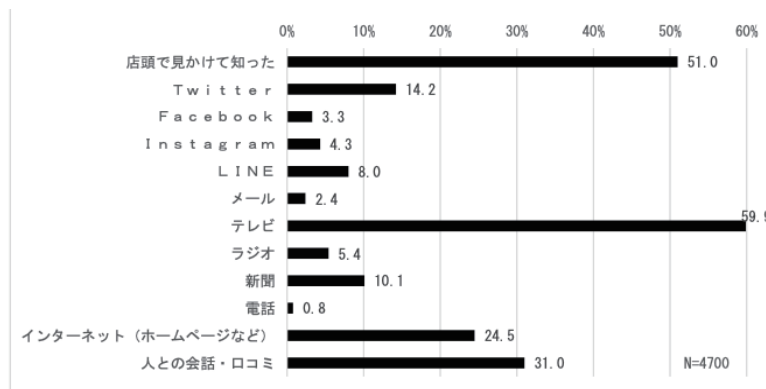


図 4.1.4 トイレットペーパーの品切れ情報を知った全ての情報源
(調査 1・複数回答)

また、実際にトイレットペーパーなどの品切れが発生している状況を知った全ての情報源について、性別・年代別に分析した結果は表 4.1.2 である。性別では、「店頭で見かけて知った、Instagram、LINE、人との会話・ロコミ」は女性、「Facebook、メール、ラジオ、新聞、インターネット (ホームページなど)」は男性の方の比率が有意に高かった。それ以外、「Twitter、テレビ、電話」は有意差が見られなかった。年代別では、うわさの情報源の結果とほぼ同じく、テレビ、新聞、電話においての比率は、20代、30代が50代、60代よりも有意に低くなっている。「店頭で見かけて知った」のは30代が有意に高く、50代と60代は有意に低い。「人との会話・ロコミ」も60代の比率が有意に低く、30代、40代の比率が有意に高い。

表 4.1.2 性別、年代別にみたトイレットペーパーの品切れ情報の情報源

	N	店頭で見かけて知った	Twitter	Facebook	Instagram	LINE	メール	テレビ	ラジオ	新聞	電話	インターネット(ホームページなど)	人との会話・口コミ	その他	聞いていない・分からない
男性	2350	41.7%	13.9%	3.9%	3.1%	7.0%	3.4%	59.2%	7.2%	13.3%	0.8%	31.4%	25.4%	0.3%	7.5%
女性	2350	60.3%	14.6%	2.6%	5.6%	9.0%	1.4%	60.6%	3.6%	6.9%	0.9%	17.7%	36.6%	1.2%	2.5%
		***	ns	*	***	*	***	ns	***	***	ns	***	***	**	***
20代	940	53.2%	35.6%	3.5%	11.6%	14.3%	3.3%	47.9%	3.0%	5.4%	0.7%	16.6%	28.5%	0.2%	6.6%
30代	940	56.0%	16.1%	3.5%	6.0%	8.4%	1.6%	54.4%	3.3%	4.5%	0.6%	22.7%	33.9%	0.3%	5.5%
40代	940	52.6%	10.6%	3.6%	2.2%	7.0%	2.2%	57.0%	5.5%	8.7%	0.9%	28.1%	34.1%	0.9%	4.6%
50代	940	46.9%	5.5%	2.6%	1.2%	5.6%	2.1%	65.1%	8.0%	12.8%	0.9%	27.9%	31.8%	1.3%	4.9%
60代以上	940	46.4%	3.3%	3.2%	0.7%	4.7%	2.9%	75.1%	7.1%	19.0%	1.1%	27.4%	26.5%	1.2%	3.4%
		***	***	ns	***	***	ns	***	***	***	ns	***	***	*	*
全体	4700	51.0%	14.2%	3.3%	4.3%	8.0%	2.4%	59.9%	5.4%	10.1%	0.8%	24.5%	31.0%	0.8%	5.0%

※ アスタリスクは、 χ^2 検定の結果； ns : no significant, *:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001

※ 表中の黒太字は残差分析の結果 5%水準で有意に高い値、赤太字は有意に低い値を表す。

(3) トイレットペーパー品切れ状況を認知した後の行動・結果・相談

まず、「店頭でトイレットペーパーの品切れが発生していることを知って、あなたはどのような対応をしましたか」と問うた。その結果は図 4.1.5 である。「当面必要な分はあるので、無理に購入しようと考えなかった」人は全体の 55.3%に達し、最も多かった。「店を探し回った」人は 4.4%、「念のため購入しようとした」と「自宅に少ないので購入しようとした」人は合わせて 32.3%であり、品切れの状況に対する認知によって日常と違う購買行動に至った人は、全体から見ると決して多くないことが明らかとなった。

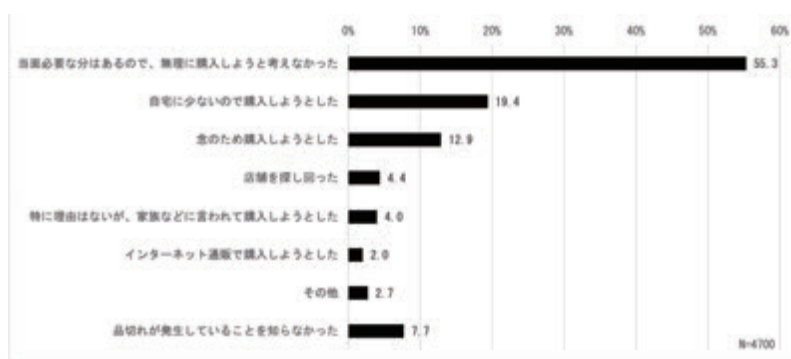


図 4.1.5 トイレットペーパーの品切れが発生していることへの対応 (調査 1, N=4700)

続いて、何らかの理由や方法で購入しようという行動にあたる回答をした人に、「実際に購入できたかどうか」とたずねたところ、希望どおりの購入ができた人 (36.8%) と、希

望どおりのものではなかったが購入できた人（27.9%）を合わせると、約6割が購入できたと回答している（図 4.1.6）。購入意図のある人は、過半数がトイレットペーパーを購入できたが、28.9%の人が購入できなかったことは無視できない。トイレットペーパーのような普段供給面で決して不足しない商品でも、一部の人が集中的に多く購入する場合には、不足も発生することがわかった。

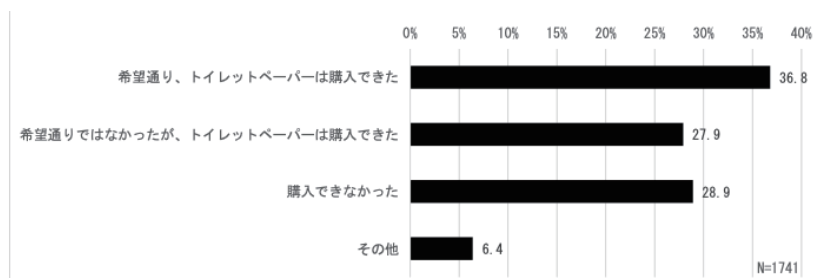


図 4.1.6 （購買意向のある人）購入できたかどうか（調査 1, N=1741）

最後に、「店頭でトイレットペーパーなどの品切れや買い占めが発生していることを知った際に、ご家族など近親者との相談をしましたか」と問うた結果、全体の 73.2%が「特に相談はしなかった」と答えた（図 4.1.7）。

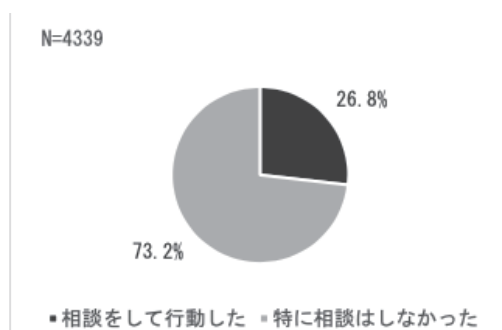


図 4.1.7 ご家族など近親者との相談をしましたか（調査 1, N=4339）

以上の結果を踏まえてまとめると、品切れ状況に対する情報は、主にテレビや店頭から得るため、パニック購買への対応には、テレビの打ち消し報道やリアルタイムの状況放送、および店頭の即時的な対応が重要である。「人々は品切れ情報を手に入れたら買いためをする」と思われているが、実際には無理にトイレットペーパーを過剰購入しようとした人は少なく、品切れに関する情報共有や拡散も少なかった。買い溜めのような大きな集合行動は発生しなかったものの、一時的にトイレットペーパー不足が起こった。このことから、新型コロナウイルス感染症のような緊急事態にうまく対応するためには、予め商品の流通環境を整え、予防対策を講じることが重要であることがわかる。

4.2 うわさの流布状況

「マスク増産による原材料不足でトイレトペーパーが不足する」とのうわさ以外、新型コロナウイルスに関する代表的なうわさへの認知についても調べた。結果として、下記のそれぞれのうわさを「本当のことだと信じなかった」という比率が全体的に高かった(図4.2.1)。その中で、「新型コロナウイルスは熱に弱く、26～27度のお湯を飲むと殺菌効果がある」(50.6%)、「新型コロナウイルスは中国でつくられた生物兵器である」(52.6%)、「東京オリンピックが中止される」(65.5%)、「トイレトペーパーは中国でつくっているので不足する」(55.2%)とのうわさは過半数の回答者が「聞いたことがある」と回答した。ウイルスが未知であった感染拡大の初期には、科学的な知見が少なく、このような曖昧な状況のために予防もしくは治療についてのうわさが広まりやすかったと考えられる。

また、オリンピック開催延期が正式に発表されたのは3月24日であったが、大会の中止や延期のうわさは早くから広まり、認知度も高く、大会に対する国民の関心の高さと大きく関係していることが考えられる。さらに、「新型コロナウイルスは中国でつくられた生物兵器である」を「本当のことだと信じた」のは14.1%であり、全体から見れば高かった。これは中国もしくは中国政府へのイメージあるいは不信感につながる可能性があるだろう。

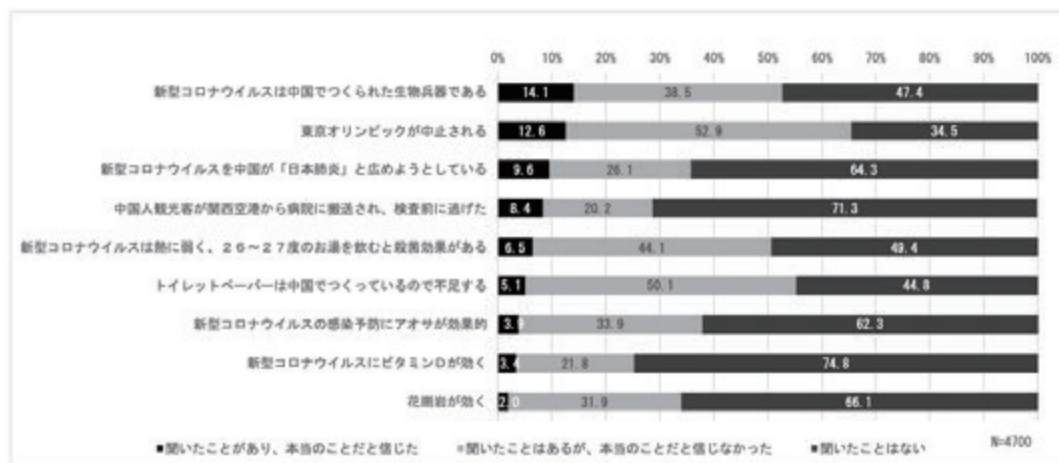


図 4.2.1 新型コロナウイルスに関するうわさへの認知 (調査1, N=4700)

4月に、日本での新型コロナウイルスのさらなる感染拡大に伴い、真偽が混在しているうわさも広がり続けていた。調査2では調査1と異なるうわさについて再度調査を実施した。その結果は図4.2.2である。

図中のうわさの認知度(聞いたことがあり本当のことだと信じた、聞いたことはあるが本当のことだと信じなかった)は全体的に高かった。これは感染状況が深刻化すると共に、

コロナに関する情報への接触も増えたことを示しているのであろう。その中では、「若い人は新型コロナウイルスに感染しても死んだり重症化することはない」について認知したという回答が 82.2%と最も高く、それを「本当のことだと信じなかった」人も最も多かった（56.5%）。重症化する人の割合や死亡する人の割合は年齢によって異なり、高齢者は高く、若者は低い傾向にあるが（厚生労働省，2020e）、若年層の重症化や死亡の報告自体は存在するため、人々はそれを認識していると言える。また、「聞いたことがあり、本当だと信じた」人が多かった項目としては、「政府は新型コロナウイルスの死者数・感染者数を低く抑えるために、PCR 検査をしていない」（34.3%）、「政府は新型コロナウイルスの感染者数を正確に発表していない」（31.9%）に多く、認知者のうちの約半数が信じたと回答している。この結果には、政府の対策に対し、国民が不足を感じていることが反映されていると言えるだろう。

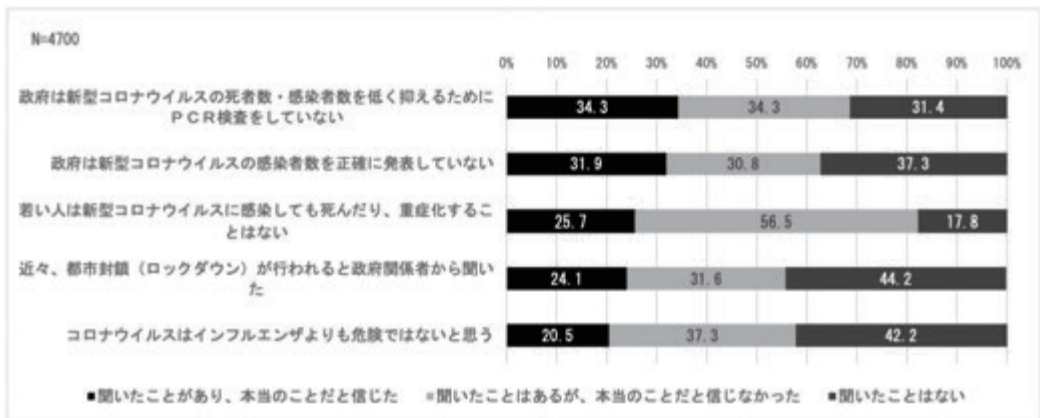


図 4.2.2 新型コロナウイルスに関するうわさへの認知（調査 2，N=4700）

5. 新型コロナウイルスの感染防止行動

5.1 感染防止の取組

本節では新型コロナウイルスの感染防止の取組について述べる。

まず、「あなたご自身が、感染防止のために、特に気をつけて行っていることは何ですか」とそれぞれの感染防止の取組について複数回答で問うた。この設問は調査1、調査2のいずれにおいても問うており、その結果が図5.1.1である。最も多かったのはいずれの調査でも「手洗いやアルコール消毒」という手からの感染パターンへの防止であり、次いで「咳エチケット・マスクの着用」という飛沫対策であった。特に後者は自分自身がかからないため、というだけではなく、他人にうつさないことも目的にしていると考えられる。また、全体としてみた場合に調査1と調査2を比較すると、ほとんどの項目で取り組みを行っている割合は変わらない。そうした中で、「屋内の換気」は他の項目と比較して行う人が増えており、これは厚生労働省の専門家会議で「新型コロナウイルス感染症対策の状況分析・提言」として感染拡大のリスクを高める環境の一つに「換気の悪い密閉空間」があげられ（厚生労働省、2020f）、そうした場所を避けるように呼びかけられたことが影響していると考えられる。

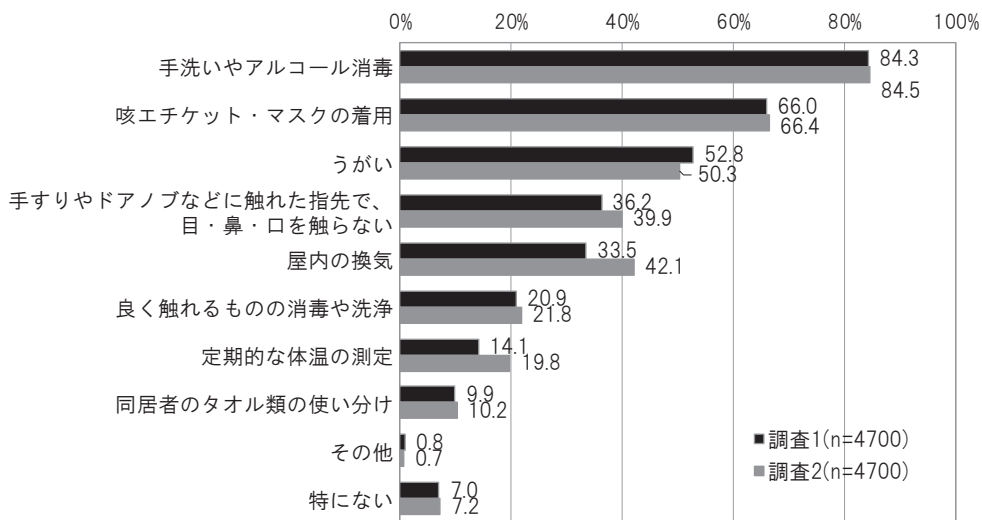


図 5.1.1 感染防止の取組状況（調査1，調査2いずれも N=4700）

次に、それ以外の感染防止の取組である。調査2の前には、先述の専門家会議からの提言を基に政府は「換気の悪い密閉空間、多数が集まる密集場所、間近で会話や発声をする密接場面」のいわゆる「3密」を避けるように呼びかけ（図5.1.2）、3月25日に小池百合

子東京都知事が週末（3/28～29）の外出自粛を強く要請するなど、行動の変容が求められた。そこで、さらに感染防止の取組状況について「上記（※調査票では問番号）で示した感染防止の行動の他に、感染症の拡大などを防ぐために、あなたが行っていることは何ですか」と複数回答で問うた。その結果が図 5.1.3 である。最も多かったのは「人が密集するような場所へ行くことを避ける」で 79.0%であった。「3密」を避けることが意識された結果と言える。また、直接的な感染防止の取組ではないが、「ニュースや解説などの情報は、自分が信頼できる情報源を選ぶ」が 39.0%、「うわさや伝聞にまどわされないようにする」が 42.6%と多くの人が情報面でも対策を意識していることがわかる。これは、3月の「トイレトーパーパニック」や新型コロナウイルスという未知の病気に対して、何が正しいか分からない、という状況を反映した結果と言える。

こうした様々な感染防止の取組について、人びとは続けられると考えているのか。調査時点ではどれほどの期間、事態が続くかは不明瞭ではあるが、人びとに「あなたは、前述で行っている行動や、大切だと考えていることについて、事態が収束するまでの期間、実行し続けることができますか」と意識を問うた（調査 2）。その結果が図 5.1.4 である。8割以上の方が感染防止の取組を続けられると答えた。

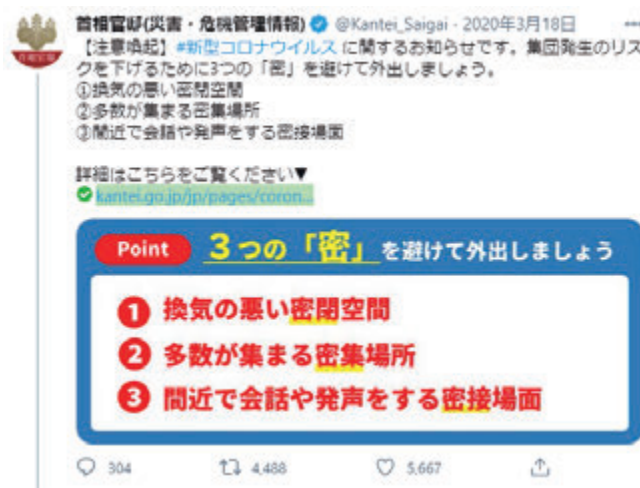


図 5.1.2 「3密」を呼びかけるツイート（出典：首相官邸（災害・危機管理情報）twitter）

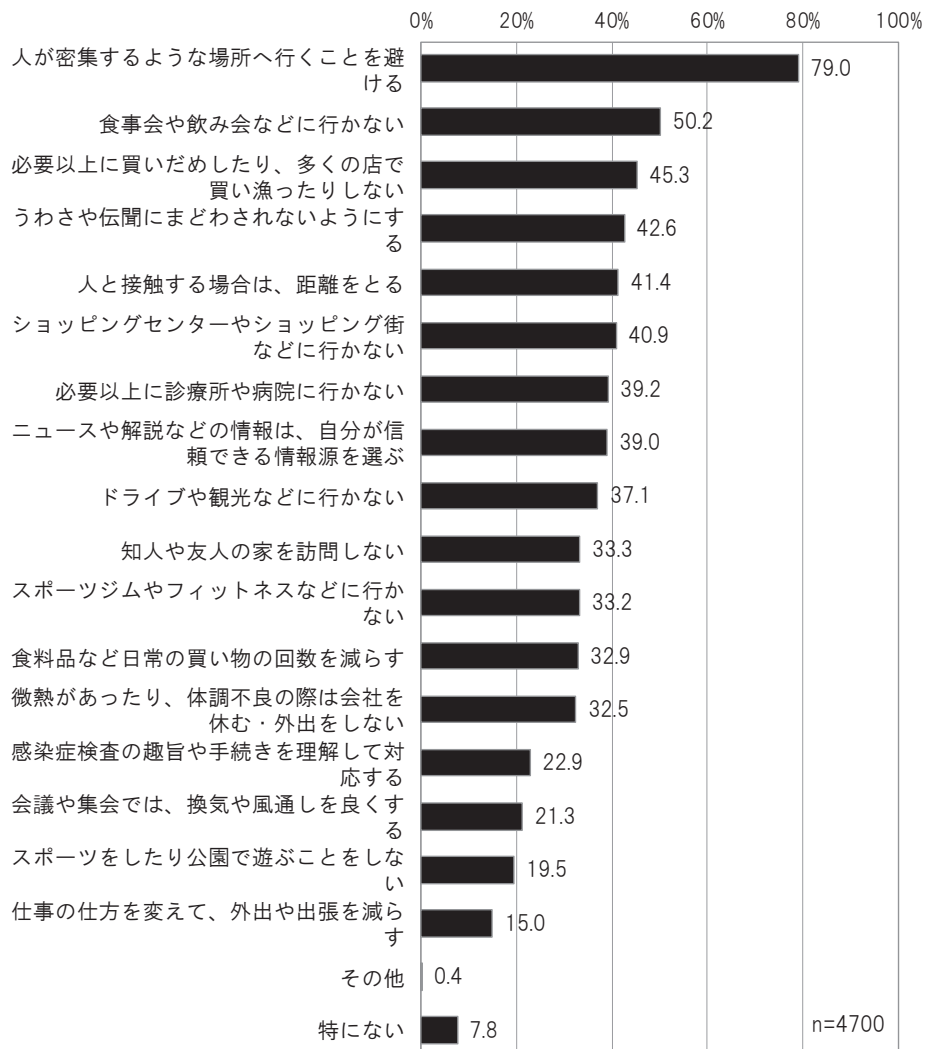


図 5.1.3 それ以外の感染防止の取組状況（調査 2, N=4700）

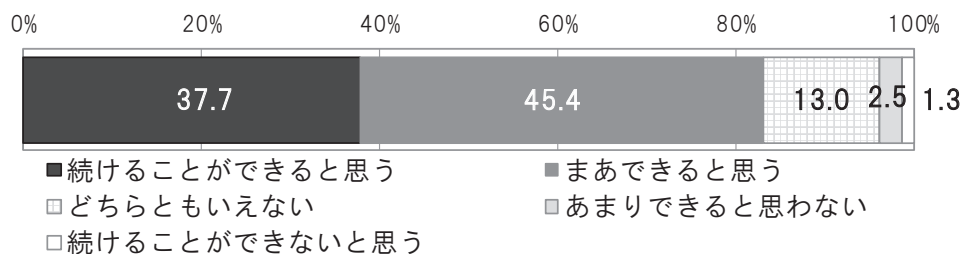


図 5.1.4 感染防止の取組を続けられるか（調査 2, N=4484）

さらに、マスクの着用理由も問うた。第1回の調査が行われた3月上旬の時点では、新型コロナウイルス対策としてマスクを購入したくとも品薄で出来ない、という状況であった。また、その後研究が進み、新型コロナウイルス対策としてマスクの着用が有効であることが明らかとなり (Ueki et al, 2020)、2021年1月時点では街中でマスクを着用していない人を見かけることはほとんどなくなったが、当時はマスクを着用していない人も散見された (図 5.1.5)。実際に図 5.1.1 の通り、感染防止の取組として全ての人がマスクを着用していたわけではない。



図 5.1.5 2020年2月時点の街の様子 (出典:朝日新聞, 2020年2月17日 夕刊 8頁)

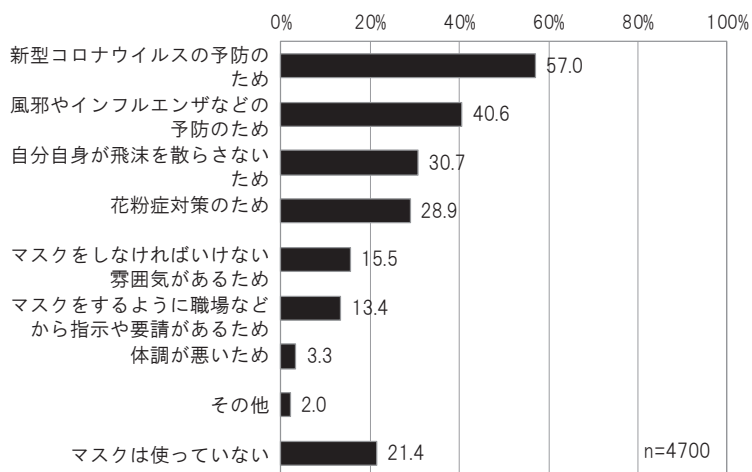


図 5.1.6 マスクの着用理由 (調査1, N=4700)

その結果が図 5.1.6 である。「新型コロナウイルスの予防のため」が 57.0%と最も多かったが、「風邪やインフルエンザなどの予防のため」が 40.6%や「花粉症対策のため」が

28.9%と、他の病気やアレルギー対策としてマスクを着用していた人も多い。また、「マスクをしなければいけない雰囲気があるため」が15.5%、「マスクをするように職場などから指示や要請があるため」が13.4%と社会的な要請からマスクをしていた人も、一定程度存在していた。

5.2 外出に関する自粛

本節では外出に関する自粛の状況について述べる。

まず、調査1で「新型コロナウイルス感染症を知ってから、あなたが利用や参加などを控えたものはありますか」と問うた結果が図5.2.1である。ここでは具体的な期間を定めるといふより、新型コロナウイルス感染症を知って以降の自粛の様子について問うた。その結果、家の外での飲食ならびに旅行やカラオケなどのレジャーに関して、予定のあった人の約半数の人が「実施や参加をやめた」と答えている。

調査2でも同様に「ここ1週間くらいの間、あなたが利用や参加などを控えたものはありますか」と問うた結果が図5.2.2である。調査1とは対象として問うた期間が異なるために単純な比較はできないが、「もともと予定がなかった」と答えた人の割合が上がっている。また、予定があった人の中でも「実施や参加・利用をやめた」割合が上がっている。中でも「コンサートやライブ、演劇、映画の鑑賞（84.2%）」「飲み会・宴会（78.1%）」「カラオケ（71.6%）」などの娯楽、「結婚式（72.6%）」や「お葬式（54.3%）」が1回目と比較して高くなった。3月25日に東京都知事が「週末の外出自粛を強く要請」したが、全国でみても、自粛をした人が多くなったといえよう。

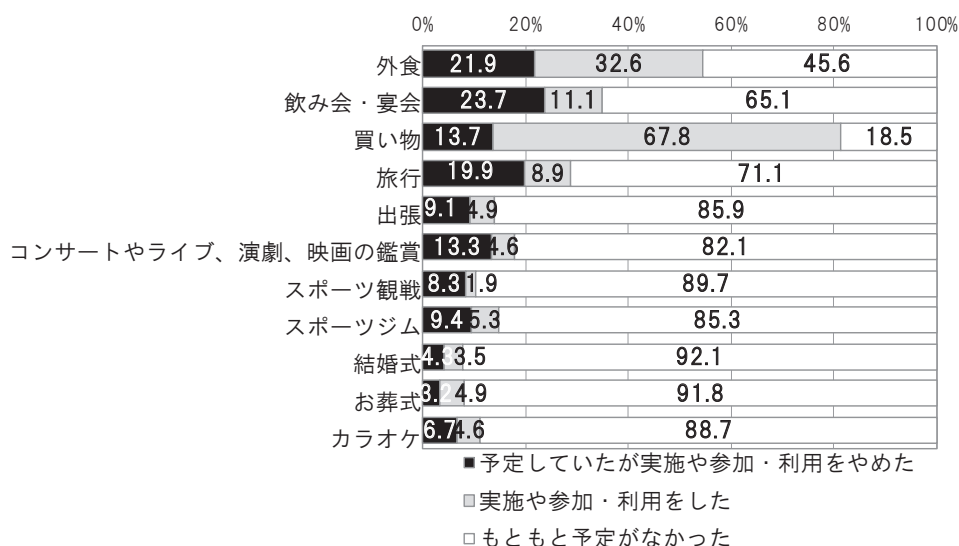


図 5.2.1 自粛の状況（調査1, N=4700）

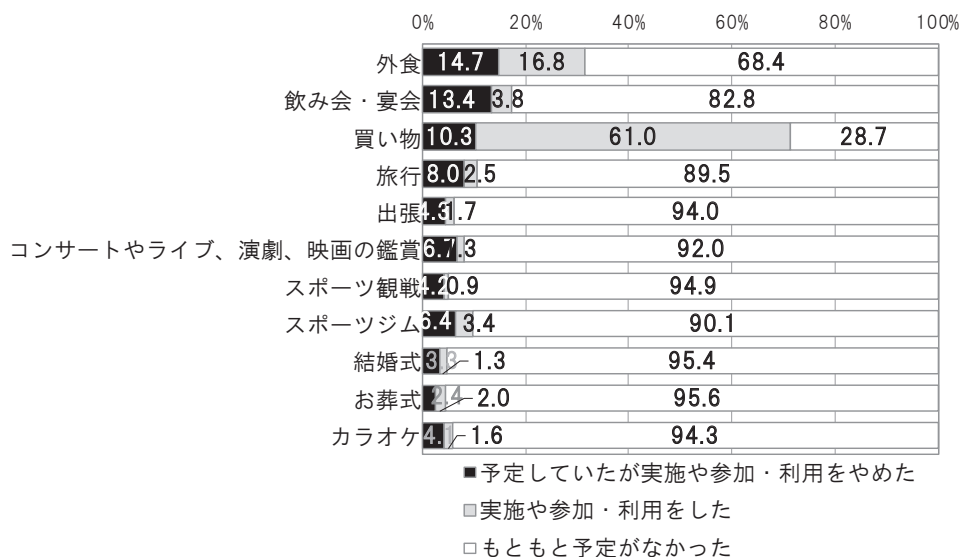


図 5.2.2 自粛の状況（調査 2, N=4700）

5.3 公共交通機関の利用状況

本節では公共交通機関の利用状況について述べる。前節で述べたように、多くの人が外出に際して自粛を経験した。さらに人々の新型コロナウイルスに対する意識の指標として、公共交通機関の利用状況を問うた。

調査 1、調査 2 のいずれでも聞いているのだが、ここでは調査 2 の結果についてのみ取り上げる。電車やバス、タクシーといった公共交通機関の利用状況について「ここ 1 週間くらいの間、あなたが利用を控えているものはありますか」と問うた結果が図 5.3.1 である。公共交通機関の利用を「避けている」と答えた人がどの項目でも 2 割程度存在している。また、出勤などで使う人が多い電車の移動などは「避けたいが、やむを得ず利用している」という人も一定程度存在している。

そこでさらに、移動手段として公共交通機関を利用している人が多いと考えられる大都市圏（東京都・愛知県・大阪府）に絞った結果が図 5.3.2 である。特に「混雑時の電車の移動」を「避けている」人は 31.0% である一方、「避けたいが、やむを得ず利用している」人も 21.3% 存在している。大都市圏では自家用車を持たない人も多いために、公共交通機関を使わなければ移動できないことが多く、新型コロナウイルス感染症対策の上で、葛藤を抱きながら利用していることがわかる。当然、こうしたことは大都市圏以外に居住する自家用車を出勤時や移動時に利用できない人にもあてはまるであろう。

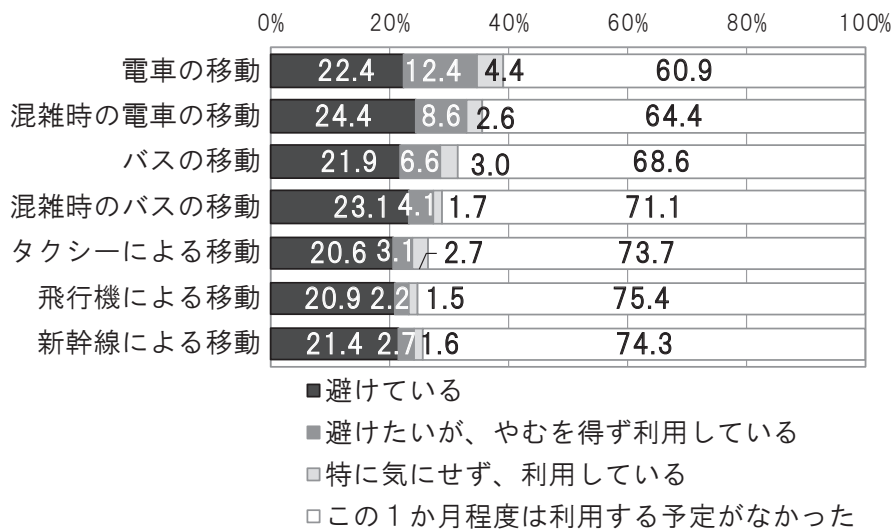


図 5.3.1 公共交通機関の利用への意識（調査 2, N=4700）

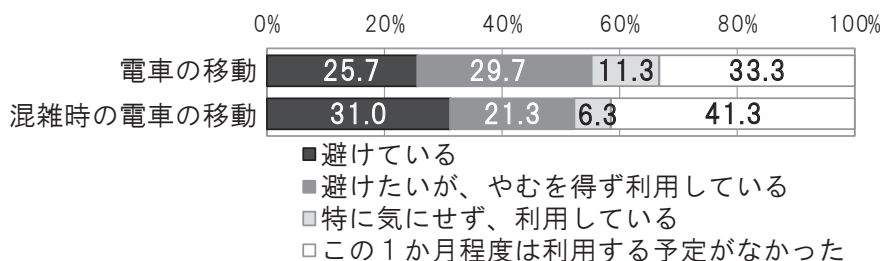


図 5.3.2 公共交通機関の利用への意識（調査 2、東京・愛知・大阪のみ, N=300）

5.4 テレワークの状況

本節ではコロナウイルス感染症対策を機に多くの企業が導入したテレワーク（在宅ワーク）について述べる。

まず、テレワーク（在宅ワーク）の利用状況が図 5.4.1 である。なお、ここでは調査 2 において、現在の職業が会社員（正社員・契約社員）、公務員、会社役員・経営者、パート・アルバイトと答えた人（n=3075）を対象としている。テレワーク（在宅ワーク）を「利用している」と答えた人は 9.4%である。79.0%の人が「職場では行われていない」と答えている。サービス業などの職種によってはテレワーク（在宅ワーク）が難しいが、それをふまえてもテレワーク（在宅ワーク）がそこまで普及していないことが明らかである。

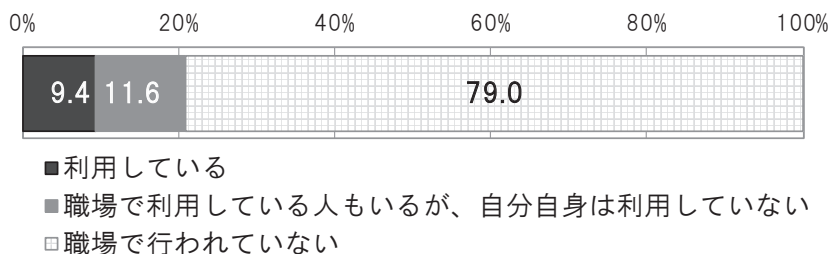


図 5.4.1 テレワーク（在宅ワーク）の利用状況（調査 2, N=3075）

次に、このテレワーク（在宅ワーク）を「利用している」と答えた人（n=288）にその評価を「テレワーク（在宅ワーク）による仕事の仕方をどう感じますか」と問うた。その結果が図 5.4.2 である。「良好である」割合が高く、テレワーク（在宅ワーク）に対する評価は高いといえる。

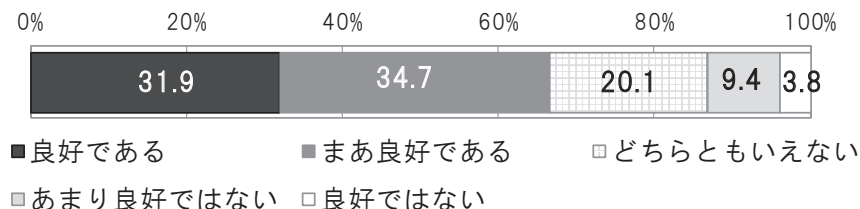


図 5.4.2 テレワーク（在宅ワーク）の評価（調査 2, N=288）

そこで、評価が「良好である」「まあ良好である」と答えた人（n=192）に対して、「テレワーク（在宅ワーク）による仕事で、良いと感じることはどのようなことですか」とテレワーク（在宅ワーク）のメリットを問うた。その結果が図 5.4.3 である。「外出による感染の心配を避けることができること」が最も高く 78.1%であった。自分自身の感染のリスクを低減させることができる、という点で評価している人が最も多かった。また、「移動や通勤にあてていた時間が有効に使える」も 59.4%と半数以上の人が答えており、時間の有効活用が可能になったと評価されている。一方で「集中して仕事ができること」は 30.2%と、それ以外の項目と比べて少し低くなっている。テレワーク（在宅ワーク）では同居している家族の声などを気にせざるを得ず、そうした点から集中力が低くなる人もいると考えられる。

次に、評価で「良好ではない」「あまり良好ではない」と答えた人（n=38）に対して、「テレワーク（在宅ワーク）による仕事で、不都合や課題を感じることはどのようなことですか」とデメリットを問うた。その結果が図 5.4.4 である。最も多かったのは仕事環境に関する「職場と比べて机や椅子など仕事がしやすい状態ではないこと」で 52.6%、また、「生

活と仕事のけじめがつきにくくなること」も 50.0%と多く、テレワーク（在宅ワーク）にどのように各自が適応していくのかという課題もみられた。

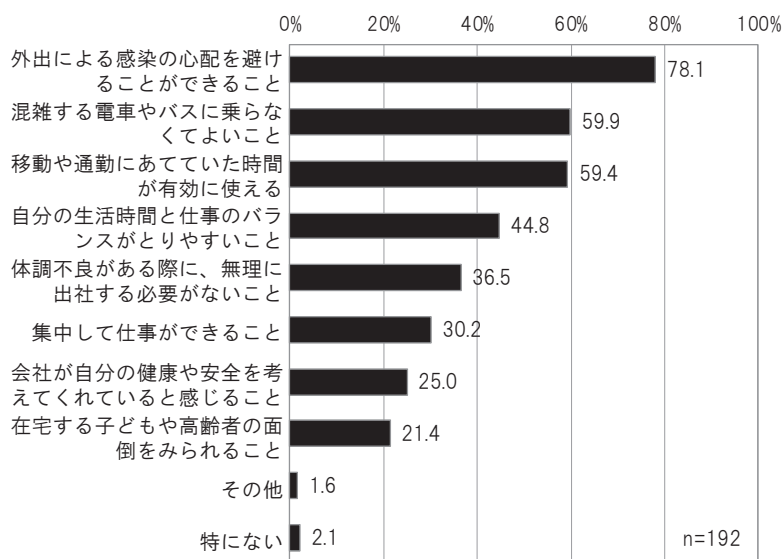


図 5. 4. 3 テレワーク（在宅ワーク）のメリット（調査 2, N=192）

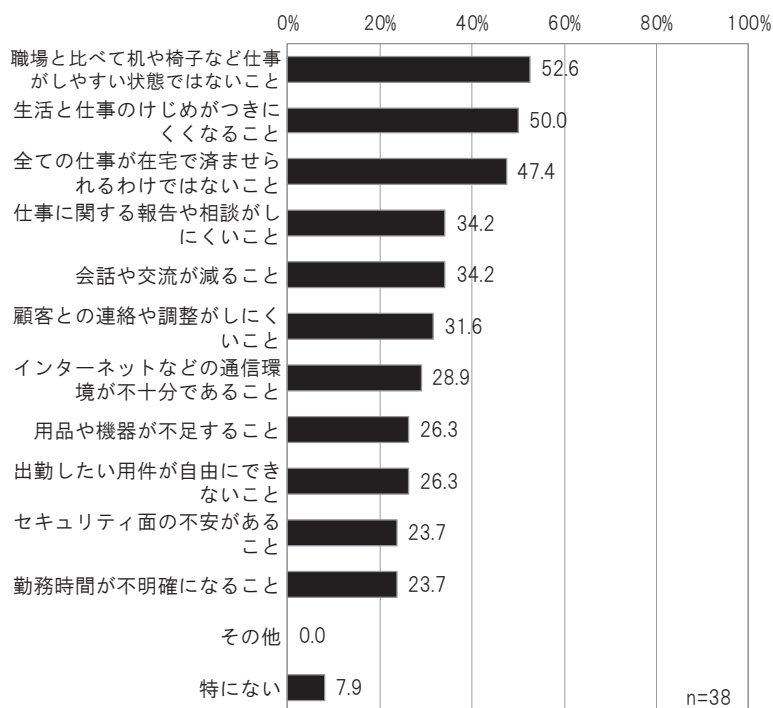


図 5. 4. 4 テレワーク（在宅ワーク）のデメリット（調査 2, N=38）

6. 購買行動の変化

2020年、コロナ禍において、購買行動には大きな変化があった。2月から世界的にいわゆる「トイレットペーパーパニック」といわれるトイレットペーパーの品切れが発生した。マスク、アルコール消毒液、除菌・抗菌用品（スプレー、シートなど）、トイレットペーパー、ティッシュなどコロナ対策としての衛生用品がモノ不足として大きな問題となった。

なお、インターネット上では最も話題になり続けたのはマスクであり、それらと比べると他の商品は総体的に話題とはなっていないことがわかる。トイレットペーパーもマスメディアでは2月末から3月初めにかけてとりあげられたが、ほんの一時期であったこと、そのほかの商品も話題になったのは2月から5月までのほんの一時期であることがわかる（図6.1）。

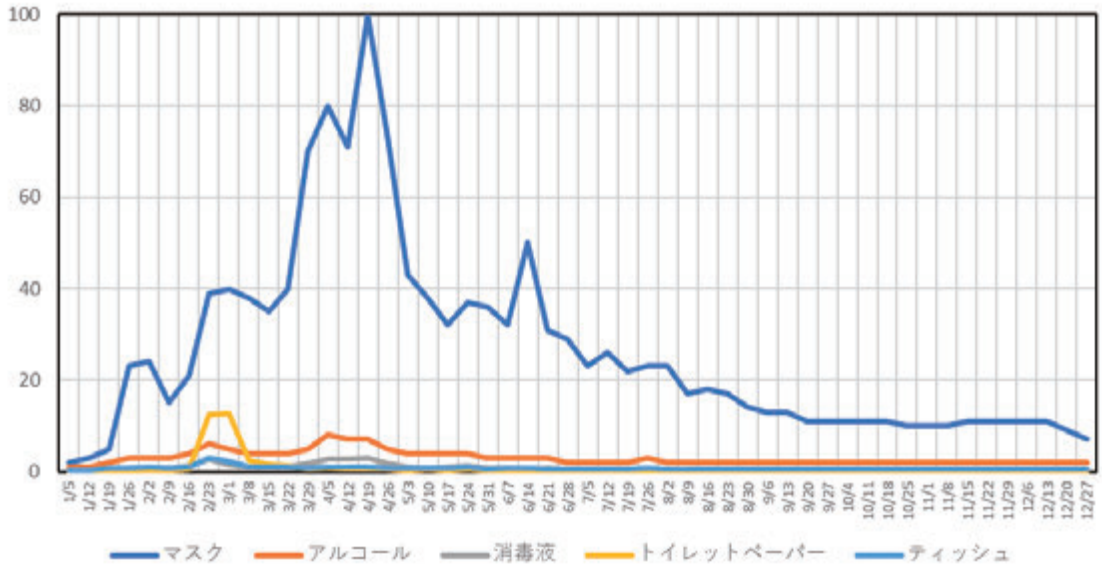


図 6.1 Google トレンドの相対値「マスク」「アルコール」「消毒液」「トイレットペーパー」「ティッシュ」

またこれらに関する消費行動の詳細をみても、多くの人が買いたくても買えていないものは、マスク、アルコール消毒液、除菌・抗菌用品（スプレー、シートなど）であった。トイレットペーパーは一時期話題になってはいたものの、買いたくても買えていないという人はそこまで多くはないことがわかる。

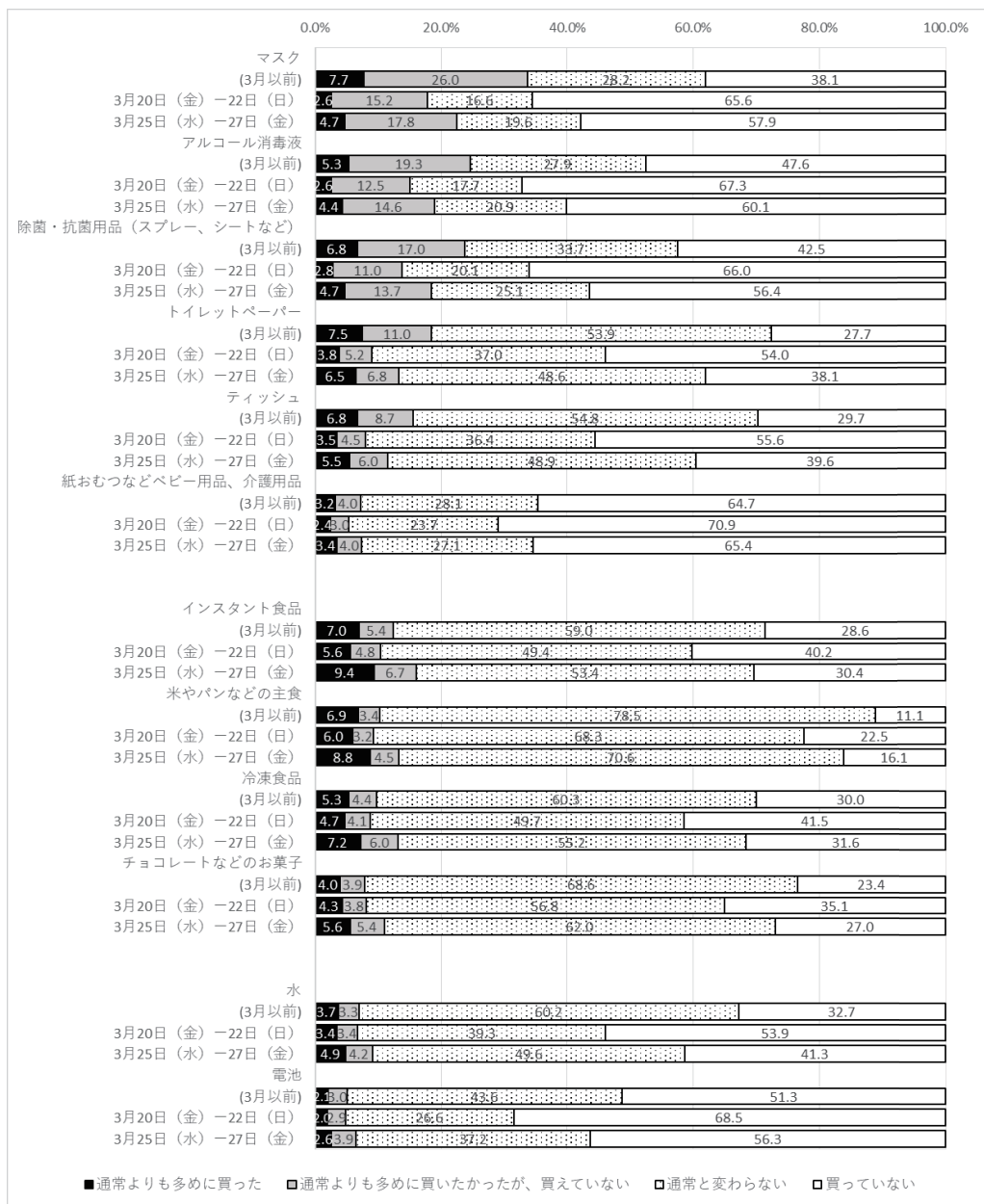


図 6.2 3 月以前（調査 1）、20 日—22 日、25 日-27 日（調査 2）時点の購買行動

7. 自粛要請・ロックダウンについての意識

まず、「あなたは、現在の『自粛要請』についてどう思いますか」と問うたところ、「感染症予防のためにやむを得ない」「医療崩壊を防ぐためにやむを得ない」という意見が多数であった。また「東京都など大都市において、都市封鎖（ロックダウン）の可能性があるとされるようになりました。これについて、どう思いますか」という質問に対しても、ほぼ同様の意見であった（図 7.1、図 7.2）。2020 年 3 月、4 月の段階では、概ね、自粛要請、ロックダウンについてはやむを得ないものととらえられていたことがわかる。

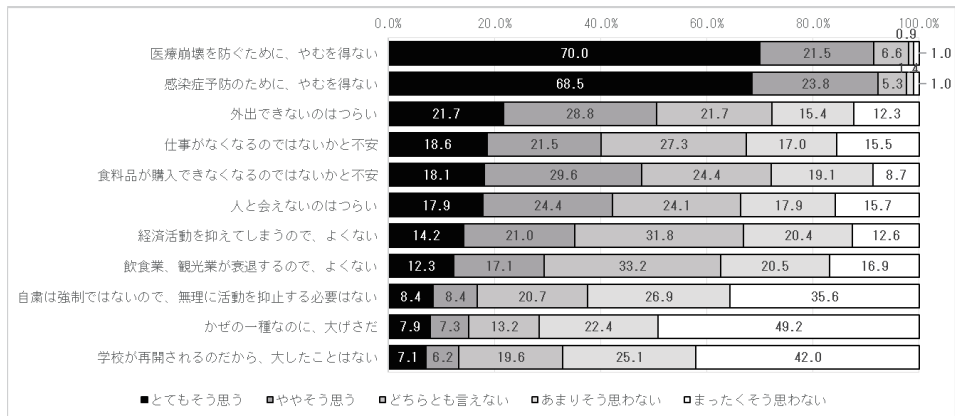


図 7.1 「自粛要請」についてどう思うか（調査 2, N=4700）

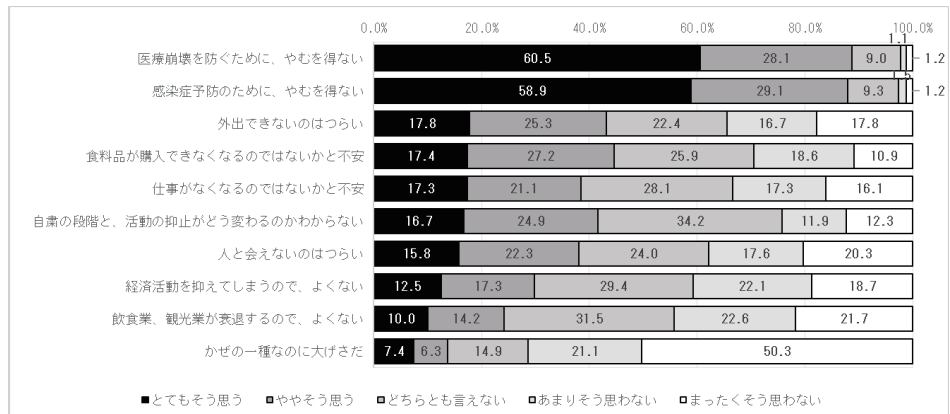


図 7.2 「都市封鎖（ロックダウン）の可能性」についてどう思うか（調査 2, N=4700）

だが、詳細にみていくと、属性によって、意見の傾向に違いがあることもわかった。これらの意見を因子分析（最尤法、プロマックス回転）したところ、「感染症対策への否定的意見」「外出・接触への不満」「行動制限への理解」「仕事・生活支障への不安」の 4 つの因

子に分かれたが（表 7.1）、「行動制限への理解」は、女性ほど、高齢ほど、基礎疾患のある人、乳幼児や小学生などを同居家族に持つ人、基礎疾患を持つ人が同居家族にいる人ほど、同意していた（「行動制限への理解」についての因子得点が相対的に高かった）。

逆に、若いほど、基礎疾患がない人、乳幼児や小学生などを同居家族に持つ人、基礎疾患を持つ人が同居家族にいない人は、「感染症対策への否定的意見」「外出・接触への不満」「仕事・生活支障への不安」を持つ傾向があった（「行動制限への理解」についての因子得点が相対的に高かった）（表 7.2、図 7.1、図 7.3）。

表 7.1 自粛要請・ロックダウンについての意識に関する因子分析

	因子1 対策否定	因子2 外出・接触	因子3 感染症予防	因子4 仕事・生活支障
感染症対策への否定的意見				
自粛について思うこと・かぜの一種なのに、大げさだ	0.901	-0.077	-0.015	-0.071
ロックダウンについて思うこと・かぜの一種なのに大げさだ	0.880	-0.056	-0.075	-0.049
自粛について思うこと・学校が再開されるのだから、大したことはない	0.851	-0.026	-0.030	-0.058
自粛について思うこと・自粛は強制ではないので、無理に活動を抑止する必要はない	0.800	0.045	-0.059	-0.058
ロックダウンについて思うこと・飲食業、観光業が衰退するので、よくない	0.674	0.063	-0.008	0.106
自粛について思うこと・飲食業、観光業が衰退するので、よくない	0.672	0.034	0.050	0.089
ロックダウンについて思うこと・経済活動を抑えてしまうので、よくない	0.669	0.014	0.032	0.063
自粛について思うこと・経済活動を抑えてしまうので、よくない	0.628	0.031	0.086	0.059
ロックダウンについて思うこと・自粛の段階と、活動の抑止がどう変わるのかわからず	0.295	0.265	0.065	0.116
外出・接触への不満				
ロックダウンについて思うこと・人と会えないのはつらい	0.010	0.936	-0.025	-0.024
ロックダウンについて思うこと・外出できないのはつらい	-0.008	0.916	-0.037	0.010
自粛について思うこと・人と会えないのはつらい	-0.005	0.886	0.007	-0.026
自粛について思うこと・外出できないのはつらい	-0.016	0.848	0.006	0.009
行動制限への理解				
ロックダウンについて思うこと・医療崩壊を防ぐために、やむを得ない	0.053	-0.014	0.944	-0.032
ロックダウンについて思うこと・感染症予防のために、やむを得ない	0.017	-0.013	0.925	-0.006
自粛について思うこと・医療崩壊を防ぐために、やむを得ない	-0.026	-0.011	0.771	-0.001
自粛について思うこと・感染症予防のために、やむを得ない	-0.066	0.006	0.770	0.020
仕事・生活支障に対する不安				
ロックダウンについて思うこと・仕事がなくなるのではないかと不安	-0.039	-0.013	-0.067	0.930
自粛について思うこと・仕事がなくなるのではないかと不安	-0.007	-0.107	-0.043	0.922
ロックダウンについて思うこと・食料品が購入できなくなるのではないかと不安	0.063	0.158	0.056	0.528
自粛について思うこと・食料品が購入できなくなるのではないかと不安	0.061	0.086	0.094	0.524
固有値	7.879	3.835	1.819	1.460
累積固有値 (%)	37.5	55.8	64.4	71.4

因子抽出法: 最尤法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表 7.2 自肅要請・ロックダウンについての意識に関する因子得点
(性別、年齢別、基礎疾患の有無別、同居者の属性別)

		対策否定 (F値)	外出・接触 (F値)	感染症予防 (F値)	仕事・生活支障 (F値)
性別				5.586 *	133.838 ***
	男性	0.1395	99.881 ***	-0.0335	-0.1611
	女性	-0.1395		0.0335	0.1611
年代				8.785 ***	24.295 ***
	20代	0.2181	21.098 ***	0.2820	-0.1365
	30代	-0.0080		0.1091	0.0160
	40代	0.0042		-0.0318	-0.0204
	50代	-0.0295		-0.1276	0.0174
	60代以上	-0.1845		-0.2314	0.1234
基礎疾患 (本人)				12.339 ***	8.641 **
	あてはまらない	0.0105	5.257 *	0.0162	-0.0135
	あてはまる	-0.0996		-0.1535	0.1278
同居：乳幼児				33.081 ***	9.780 **
	あてはまらない	-0.0053	3.4860	-0.0391	0.0130
	あてはまる	-0.0795		0.1907	0.1336
同居：小学生				13.382 ***	1.543
	あてはまらない	-0.0198	0.036	-0.0182	0.0281
	あてはまる	-0.0108		0.1565	0.0852
同居：中学生				0.800	0.347
	あてはまらない	-0.0205	0.688	0.0013	0.0387
	あてはまる	0.0033		0.0165	-0.0152
同居：高校生				0.194	0.020
	あてはまらない	-0.0232	1.150	0.0006	0.0342
	あてはまる	0.0415		0.0274	0.0426
同居：高齢者 (65歳以上)				18.400 ***	0.136
	あてはまらない	-0.0008	3.320	0.0450	0.0383
	あてはまる	-0.0619		-0.1000	0.0263
同居：基礎疾患				14.108 ***	10.137 ***
	あてはまらない	-0.0032	12.643 ***	0.0190	0.0213
	あてはまる	-0.2083		-0.1996	0.1996

F検定 * p<.05, ** p<.01, *** p<.001

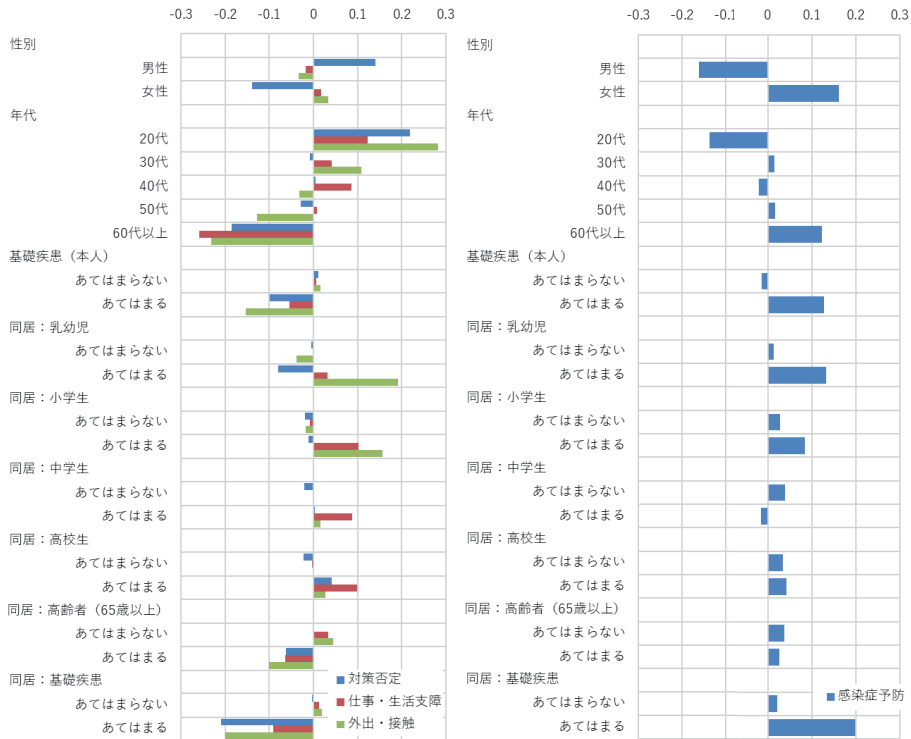


図 7.3 自肅要請・ロックダウンについての意識に関する因子得点
(性別、年齢別、基礎疾患の有無別、同居者の属性別)

また、「あなたが暮らす地域で『3週間（21日間）程度の間、人の外出や移動を制限する措置などが行なわれた場合』、自分自身に影響が大きいと思うのはどのようなことですか」と聞いたところ、「経済全体が大きな打撃を受ける」（59.3%）、「食料をはじめ生活必需品が不足する」（55.7%）と、経済、生活支障についての問題が多く挙げられた（図 7.4）。

「3月25日、東京都知事が『感染爆発の重大局面』とし、週末の不要不急の外出等を控えることを要請しました。これを見聞きして、どう行動しようと思いましたが」と自粛要請について問うたところ、「社会の深刻な状況を感じて、外出を控えたいと思った」（60.8%）、「自分自身への危険の高まりを感じて、外出を控えたいと思った」（50.5%）と、実際に不安を感じて、外出を控えていることが分かった（図 7.5）

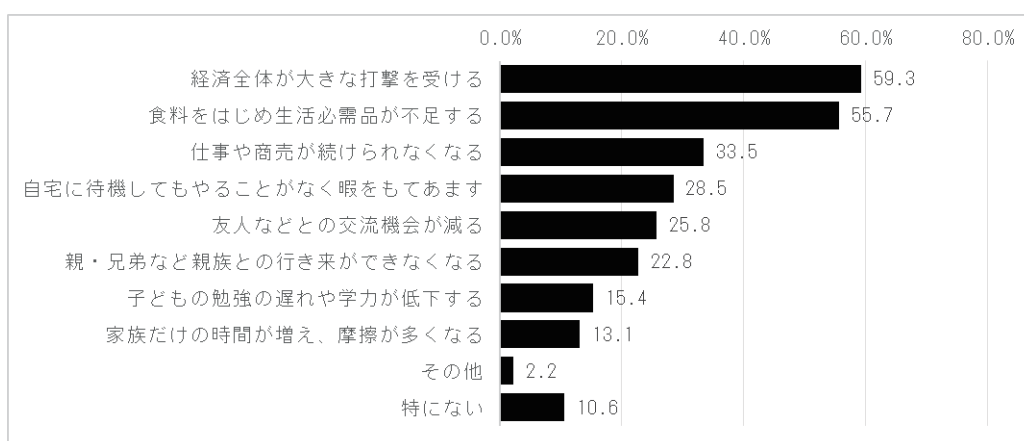


図 7.4 あなたが暮らす地域で3週間（21日間）程度の間、人の外出や移動を制限できる措置などが行われた場合、自分自身に影響が大きいと思うのはどのようなことですか(複数回答・N=4700)

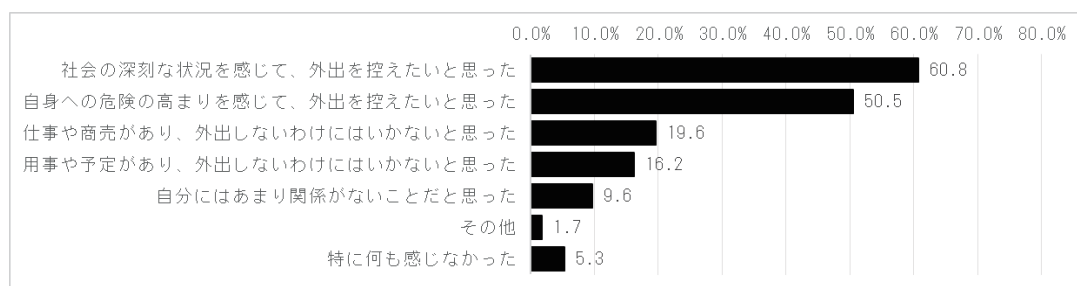


図 7.5 3月25日、東京都知事が「感染爆発の重大局面」とし、週末の不要不急の外出等を控えることを要請しました。これを見聞きして、どう行動しようと思いましたが(複数回答・N=4700)

調査2実施の1週間前、外出自粛の要請がでた3月28日(土)と29日(日)に、「あなたは主にどのように過ごしましたか」と聞いたところ、約半数が、「普段の土日よりも家にいることが多かった」と答えた(図7.6)。

その「普段の土日よりも家にいることが多かった」2231人に理由を問うたところ、上位から「感染するのではと人混みが怖かったから」(72.6%)、「外出自粛要請があったから」(58.0%)と、感染への懸念や外出自粛要請をまじめに受け止めての結果であることが分かった(図7.7)。

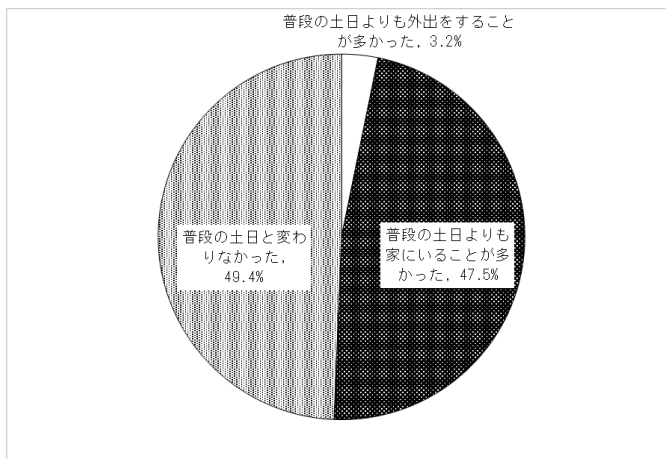


図 7.6 3月28日(土)と29日(日)に、あなたは主にどのように過ごしましたか(N=4700)

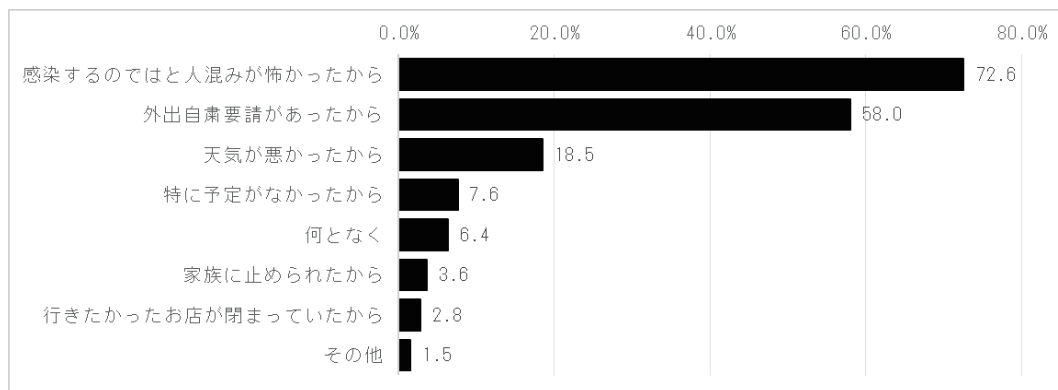


図 7.7 普段の土日よりも家にいることが多かった理由は何ですか
(複数回答・「普段の土日よりも家にいることが多かった」人、N=2231)

引用・参考文献

橋元良明・大野志郎・天野美穂子・堀川裕介・篠田詩織（2020）『緊急事態宣言で人々の行動・意識は変わったか？ [電子書籍版]』丸善出版.

Hiroshi Ueki, Yuri Furusawa, Kiyoko Iwatsuki-Horimoto, Masaki Imai, Hiroki Kabata, Hidekazu Nishimura, and Yoshihiro Kawaoka (2020) Effectiveness of face masks in preventing airborne transmission of SARSCoV-2, *mSphere*, 5(5), e00637-20

石橋真帆・安本真也・岩崎雅宏・石川俊之・藁谷峻太郎・関谷直也（2020）「新型コロナウイルス感染症への不安と情報行動の関連性」『災害情報』No. 19, (印刷中) .

厚生労働省（2020a）「新型コロナウイルス感染症の現在の状況と厚生労働省の対応について（令和2年3月5日版）」https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_09993.html（アクセス日：2021年1月28日）

厚生労働省（2020b）「新型コロナウイルス感染症の現在の状況と厚生労働省の対応について（令和2年4月2日版）」https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_10668.html（アクセス日：2021年1月28日）

厚生労働省（2020c）「新型コロナウイルスに関連した患者等の発生について（1月27日各自治体公表資料集計分）」https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_16398.html（アクセス日：2021年1月28日）

厚生労働省（2020d）「イベントの開催に関する国民の皆様へのメッセージ」https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/newpage_00002.html（アクセス日：2021年1月28日）

厚生労働省（2020e）「新型コロナウイルス感染症の“いま”についての10の知識」,
<https://www.mhlw.go.jp/content/000699304.pdf>（アクセス日：2021年1月26日）

厚生労働省（2020f）「新型コロナウイルス感染症対策の状況分析・提言」
<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000610566.pdf>（アクセス日：2021年1月22日）

野村康（2017）『社会科学の考え方 認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会

首相官邸（災害・危機管理情報）twitter, 2020年3月18日,
https://twitter.com/Kantei_Saigai/status/1240057648835252224?s=20（アクセス日：2021年1月22日アクセス）

鳥海不二夫・榊剛史・吉田光男（2020）「ソーシャルメディアを用いた新型コロナ禍における感情変化の分析」『人工知能学会論文誌』35（4），F-K45_1-7

中华人民共和国国家卫生健康委员会（2020）「2020年1月全国法定传染病疫情概况」

<http://www.nhc.gov.cn/jkj/s3578/202002/f1dd61c00acf4e5caf2f755cc48b9063.shtml>

(アクセス日: 2021年1月28日)

WHO (2020a) Novel Coronavirus (2019-nCoV) SITUATION REPORT-1 (21 JANUARY, 2020)

https://www.who.int/docs/default-source/coronaviruse/situation-reports/20200121-sitrep-1-2019-ncov.pdf?sfvrsn=20a99c10_4 (アクセス日: 2021年1月20日)

WHO (2020b) WHO Director-General's opening remarks at the media briefing on

COVID-19 (11 March 2020) <https://www.who.int/director-general/speeches/detail/who-director-general-s-opening-remarks-at-the-media-briefing-on-covid-19---11-march-2020> (アクセス日: 2021年1月20日)

付属資料 単純集計結果

調査 1: 【緊急調査】新型コロナウイルス感染症に関する国民アンケート

Q1、Q2 居住都道府県、市区町村 ※省略

Q3 同居人数

平均値 2.90 人

Q4 高齢・基礎疾患への該当（回答者本人）

高齢への該当	10.5%	いずれもあてはまらない	81.7%
基礎疾患への該当	9.1%		

Q5 同居家族（N=3921）

乳幼児との同居	17.9%	高齢者との同居	29.2%
小学生との同居	12.4%	基礎疾患がある人との同居	7.1%
中学生との同居	7.7%	いずれも該当しない	37.9%
高校生との同居	7.4%		

Q6 あなたのご家庭のお子さんの通学する学校は3月2日以降、休校になりましたか（N=817）

1. 休校になった	67.9%
2. 3月2日からではないが、休校になった	28.4%
3. 休校にはならなかった	3.7%

Q7 あなたが日常生活で、情報源としてよく利用しているものを教えてください

1. テレビ	85.4%
2. ラジオ	19.3%
3. 新聞	37.4%
4. 固定電話、スマホ等による通話・メール	38.8%
5. LINEによる通話やメール	39.9%
6. Twitter等SNS	38.3%
7. インターネット（ホームページなど）	70.9%
8. 市区町村の広報誌	24.6%
9. 市区町村などの相談窓	1.8%
10. 医療機関（相談、通院など）	8.0%
11. タウン誌	9.8%
12. 週刊誌など雑誌	7.4%
13. 親しい人との口コミ	24.0%
14. その他	0.3%
15. 特にない	1.9%

Q8 以下のメディアについて、ふだん1日平均どのくらい利用していますか

	テレビ	ラジオ	新聞	雑誌	パソコンでのインターネット	スマートフォン・従来型携帯電話でのインターネット
全く利用しなかった	6.2%	61.0%	48.3%	60.8%	29.8%	12.4%
30分未満	7.6%	19.1%	33.2%	28.8%	15.5%	15.3%
30分以上1時間未満	7.6%	6.8%	11.6%	5.4%	11.9%	14.4%
1時間以上1時間30分未満	8.4%	3.5%	2.9%	2.2%	10.1%	11.9%
1時間30分以上2時間未満	11.3%	2.4%	1.7%	1.0%	8.7%	11.0%
2時間以上3時間未満	18.4%	2.4%	1.0%	0.6%	8.7%	13.6%
3時間以上4時間未満	13.1%	1.5%	0.3%	0.4%	5.3%	7.7%
4時間以上5時間未満	10.4%	0.9%	0.4%	0.2%	3.4%	5.5%
5時間以上8時間未満	10.6%	1.3%	0.2%	0.3%	3.2%	4.7%
8時間未満	6.6%	1.1%	0.4%	0.4%	3.4%	3.5%

Q9 以下のメディアについて、この1週間程度、1日平均どのくらい利用しましたか

	テレビ	ラジオ	新聞	雑誌	パソコンでのインターネット	スマートフォン・従来型携帯電話でのインターネット
全く利用しなかった	6.5%	63.7%	51.0%	68.8%	32.4%	12.9%
30分未満	6.8%	15.7%	28.5%	19.6%	12.5%	13.7%
30分以上1時間未満	7.5%	6.6%	10.8%	5.4%	10.1%	11.6%
1時間以上1時間30分未満	8.8%	3.3%	4.0%	2.3%	9.6%	11.9%
1時間30分以上2時間未満	9.5%	2.4%	1.9%	1.4%	7.6%	10.4%
2時間以上3時間未満	16.2%	2.6%	1.4%	1.2%	8.8%	12.2%
3時間以上4時間未満	12.8%	1.7%	0.9%	0.4%	5.4%	7.9%
4時間以上5時間未満	9.8%	1.1%	0.7%	0.3%	4.0%	5.9%
5時間以上8時間未満	10.2%	1.5%	0.4%	0.3%	3.8%	5.7%
8時間未満	11.9%	1.3%	0.4%	0.4%	5.7%	7.8%

Q10 あなたは以下の言葉をご存知ですか

	聞いたことがあり、意味も理解している	聞いたことがあり、意味はなんとなくわかる	聞いたことはあるが、意味はわからない	聞いたことがない
1. 新型コロナウイルス	82.6%	15.7%	1.0%	0.7%
2. 接触感染	74.0%	22.3%	2.0%	1.8%
3. 飛沫感染	74.4%	20.6%	2.6%	2.4%
4. エアロゾル感染	31.9%	23.1%	19.5%	25.5%
5. 空気感染	65.4%	27.9%	4.6%	2.1%
6. 濃厚接触	68.1%	24.9%	4.1%	2.8%
7. クラスター感染	52.7%	24.9%	12.6%	9.8%
8. COIVID-19	40.5%	16.0%	13.3%	30.2%
9. PCR検査	45.4%	28.3%	13.1%	13.2%

Q11 年末から年始にかけて、中国の武漢で原因不明の肺炎や、新型コロナウイルスの存在が明らかになってから現在に至るまで、日本でウイルスが広がるかどうかについて、不安を感じましたか

		この日本では、 たは、 と いう 不安 を感じる	この日本では、 なは、 つた という 不安 は 感じる
2019年12月31日	中国で、武漢市が「原因不明の肺炎27人」を発表	37.0%	63.0%
2020年1月23日	中国で、武漢市を封鎖措置	58.2%	41.8%
2020年1月28日	国内で初の日本人患者を確認。武漢からのツアーバスの運転手	84.4%	15.6%
2020年2月5日	クルーズ船「ダイヤモンドプリンセス号」で集団感染が判明	85.9%	14.1%
2020年2月18日	「ダイヤモンドプリンセス号」に乗船した大学教授が感染対策のずさんさを動画告発	86.7%	13.3%
2020年2月19日	「ダイヤモンドプリンセス号」から陰性の乗客の下船が開始	88.9%	11.1%
2020年2月28日	政府が3月2日から春休みまで、小中高校などの臨時休校を要請	89.2%	10.8%
2020年3月	アンケートに回答している現在	91.4%	8.6%

Q12 年末から年始にかけて、中国の武漢で原因不明の肺炎や、新型コロナウイルスの存在が明らかになってから現在に至るまで、自分自身が感染する不安を感じましたか

		自分自身 が感染 する 不安 を感じ ました	自分自身 が感染 しない 不安 を感じ ました
2019年12月31日	中国で、武漢市が「原因不明の肺炎27人」を発表	15.2%	84.8%
2020年1月23日	中国で、武漢市を封鎖措置	18.8%	81.2%
2020年1月28日	国内で初の日本人患者を確認。武漢からのツアーバスの運転手	34.5%	65.5%
2020年2月5日	クルーズ船「ダイヤモンドプリンセス号」で集団感染が判明	36.8%	63.2%
2020年2月18日	「ダイヤモンドプリンセス号」に乗船した大学教授が感染対策のずさんさを動画告発	41.1%	58.9%
2020年2月19日	「ダイヤモンドプリンセス号」から陰性の乗客の下船が開始	52.4%	47.6%
2020年2月28日	政府が3月2日から春休みまで、小中高校などの臨時休校を要請	67.4%	32.6%
2020年3月	アンケートに回答している現在	73.7%	26.3%

Q13 新型コロナウイルス感染症を知ってから、あなたが具体的に不安を感じていることはありますか

	とても不安を感じる	やや不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	まったく不安を感じない
1 効果的な治療薬やワクチンがないこと	50.1%	31.3%	9.9%	6.2%	2.6%
2 ウイルスが目に見えないものであること	49.9%	27.1%	11.7%	7.2%	4.1%
3 検査（PCR 検査）を受けたくても受けられないこと	35.4%	30.1%	19.5%	9.6%	5.4%
4 中国で対策や医療が追い付かず、悲惨な様子を知ったこと	38.2%	30.3%	18.8%	8.6%	4.1%
5 持病や風邪などで、病院に行きたくても感染への不安を感じる	33.6%	31.9%	18.9%	10.4%	5.2%
6 いつまで続くのか、見通しがわからないこと	57.3%	27.5%	8.7%	3.9%	2.6%
7 自分が感染したら、自身の情報や行動内容が明らかにされること	40.6%	27.9%	18.7%	8.2%	4.6%
8 自分が感染したら、人から批判や差別をうけるかもしれないこと	41.6%	28.7%	17.8%	7.5%	4.3%

Q14 新型コロナウイルス感染症の問題に関して、あなたの生活に影響が及んでいるものはありますか

	全数	乳幼児・小学生がいる (N=1053)
1. こどもの学校再開や新学期などへの備え	18.8%	50.2%
2. 小さな子どもの保育先などの手配	6.1%	18.9%
3. 買い物での品薄・品切れに対する判断	60.4%	69.2%
4. 日常の通院などが気がかり	25.9%	29.3%
5. 外出や移動が気がかり	58.2%	66.2%
6. 冠婚葬祭への影響	12.1%	12.3%
7. コンサートや観劇、スポーツ観戦などへの影響	27.1%	20.2%
8. 仕事の仕方への影響	37.0%	40.4%
9. 経済や景気への影響	50.5%	48.3%
10. オリンピック・パラリンピック開催への影響	28.0%	26.4%
11. 漠然とした不安が続くこと	47.9%	48.9%
12. その他	2.3%	1.5%
13. 特になし	8.0%	3.8%

Q15 あなたは、自分自身が感染するか、不安はありますか

とても不安を感じる	24.9%
やや不安を感じる	41.7%
どちらともいえない	15.7%
あまり不安を感じない	13.4%
まったく不安を感じない	4.3%

Q16 あなたは、同居されている乳幼児が感染するか、不安はありますか (N=700)

とても不安を感じる	57.3%
やや不安を感じる	29.9%
どちらともいえない	6.6%
あまり不安を感じない	4.7%
まったく不安を感じない	1.6%

Q17 あなたは、同居されている高齢者が感染するか、不安はありますか (N=1145)

とても不安を感じる	31.9%
やや不安を感じる	39.4%
どちらともいえない	16.7%
あまり不安を感じない	8.5%
まったく不安を感じない	3.6%

Q18 あなたは、同居されている基礎疾患がある方が感染するか、不安はありますか (N=278)

とても不安を感じる	44.6%
やや不安を感じる	39.6%
どちらともいえない	9.0%
あまり不安を感じない	4.3%
まったく不安を感じない	2.5%

Q19 あなたご自身が、感染防止のために、特に気をつけて行っていることは何ですか

1. 手洗いやアルコール消毒	84.3%
2. 手すりやドアノブなどに触れた指先で、目・鼻・口を触らない	36.2%
3. うがい	52.8%
4. 咳エチケット・マスクの着用	66.0%
5. 屋内の喚起	33.5%
6. 良く触れるものの消毒や洗浄	20.9%
7. 同居者のタオル類の使い分け	9.9%
8. 定期的な体温の測定	14.1%
9. その他	0.8%
10. 特にない	7.0%

Q20 あなたは、現在マスクを使っていますか。それはどのような理由ですか

1. 新型コロナウイルスの予防のため	57.0%
2. 風邪やインフルエンザなどの予防のため	40.6%
3. 自分自身が飛沫を散らさないため	30.7%
4. 体調が悪いため	3.3%
5. 花粉症対策のため	28.9%
6. マスクをしなければならない雰囲気があるため	15.5%
7. マスクをするように職場などから指示や要請があるため	13.4%
8. その他	2.0%
9. マスクは使っていない	21.4%

Q21 新型コロナウイルス感染症を知ってから、あなたが利用や参加などを控えたものはありますか

	もともと予定がなかった	予定していたが実施や参加・利用をやめた	実施や参加・利用をした
1. 外食	45.6%	21.9%	32.6%
2. 飲み会・宴会	65.1%	23.7%	11.1%
3. 買い物	18.5%	13.7%	67.8%
4. 旅行	71.1%	19.9%	8.9%
5. 出張	85.9%	9.1%	4.9%
6. コンサートやライブ、演劇、映画の鑑賞	82.1%	13.3%	4.6%
7. スポーツ観戦	89.7%	8.3%	1.9%
8. スポーツジム	85.3%	9.4%	5.3%
9. 結婚式	92.1%	4.3%	3.5%
10. お葬式	91.8%	3.2%	4.9%
11. カラオケ	88.7%	6.7%	4.6%

Q22 新型コロナウイルス感染症を知ってから、あなたが利用を控えたものはありますか

	避けている	避けたいが、やむを得ず利用している	特に気にせず、利用している	この一カ月程度は利用する予定がなかった
1. 電車の移動	20.6%	15.5%	11.3%	52.6%
2. 混雑時の電車の移動	24.1%	11.6%	6.1%	58.3%
3. バスの移動	20.8%	9.0%	7.9%	62.3%
4. 混雑時のバスの移動	22.7%	6.5%	4.3%	66.4%
5. タクシーによる移動	19.2%	5.0%	7.1%	68.7%
6. 飛行機による移動	19.5%	5.3%	4.3%	70.9%
7. 新幹線による移動	20.1%	5.9%	4.7%	69.3%

Q23 新型コロナウイルス感染症を知ってから、現在までのお買い物は、普段と比べて変わりましたか

	通常よりも多めに買った	通常よりも多めに買ったかったが、買えていない	通常と変わらない	買っていない
1. 米やパンなどの主食	6.9%	3.4%	78.5%	11.1%
2. 水	3.7%	3.3%	60.2%	32.7%
3. マスク	7.7%	26.0%	28.2%	38.1%
4. アルコール消毒液	5.3%	19.3%	27.9%	47.6%
5. 除菌・抗菌用品（スプレー、シートなど）	6.8%	17.0%	33.7%	42.5%
6. トイレtpーパー	7.5%	11.0%	53.9%	27.7%
7. ティッシュ	6.8%	8.7%	54.8%	29.7%
8. 紙おむつなどベビー用品、介護用品	3.2%	4.0%	28.1%	64.7%
9. インスタント食品	7.0%	5.4%	59.0%	28.6%
10. 冷凍食品	5.3%	4.4%	60.3%	30.0%
11. 電池	2.1%	3.0%	43.6%	51.3%
12. チョコレートなどのお菓子	4.0%	3.9%	68.6%	23.4%

Q24 今回の、新型コロナウイルス感染症関連で役立った情報源は何ですか

1.	テレビ	80.7%
2.	ラジオ	12.6%
3.	新聞	28.7%
4.	固定電話、スマートフォン・従来型携帯電話による通話やメール	19.5%
5.	LINEによる通話やメール	11.9%
6.	Twitter、Facebook、InstagramなどのSNS	22.1%
7.	インターネット（ホームページなど）	51.4%
8.	市町村の広報誌	7.1%
9.	市町村などの相談窓口	1.6%
10.	医療機関（相談、通院など）	4.3%
11.	タウン誌	0.7%
12.	週刊誌など雑誌	1.5%
13.	親しい人との口コミ	12.5%
14.	その他	0.8%
15.	特にない	5.3%

Q25 あなたが、「マスク増産による原材料不足でトイレットペーパーが不足する」とのうわさを最初に知った情報源は何ですか

Twitter	10.1%	人との会話・口コミ	17.6%
Facebook	0.9%	その他	1.1%
Instagram	1.2%	聞いていない・わからない	7.8%
LINE	2.6%		
メール	0.4%		
テレビ	43.8%		
ラジオ	0.7%		
新聞	0.7%		
電話	0.2%		
インターネット(ホームページなど)	12.9%		

Q26 「マスク増産による原材料不足でトイレットペーパーが不足する」とのうわさを最初に知った情報源以外に、このうわさを知った情報源があれば、すべてあげてください(N=4334)

1.	Twitter	8.7%
2.	Facebook	3.2%
3.	Instagram	3.9%
4.	LINE	8.0%
5.	メール	2.9%
6.	テレビ	24.8%
7.	ラジオ	5.9%
8.	新聞	12.3%
9.	電話	1.0%
10.	インターネット（ホームページなど）	22.3%
11.	人との会話・口コミ	19.0%
12.	その他	1.3%
13.	全問（Q25）以外にはない	27.0%

Q27 あなたが、実際にトイレットペーパーなどの品切れが発生している状況を、最初に知った情報源は何ですか

店頭で見かけて知った	30.2%
Twitter	6.3%
Facebook	0.7%
Instagram	0.9%
LINE	1.9%
メール	0.4%
テレビ	31.7%
ラジオ	0.5%
新聞	0.7%
電話	0.1%
インターネット	7.6%
人との会話・口コミ	13.3%
その他	0.8%
聞いていない・わからない	5.0%

Q28 実際にトイレットペーパーなどの品切れが発生している状況を、最初に知った情報源以外に、この状況を知った情報源があれば、すべてあげてください

1. 店頭で見かけて知った	21.9%	8. ラジオ	5.2%
2. Twitter	8.3%	9. 新聞	9.9%
3. Facebook	2.7%	10. 電話	0.7%
4. Instagram	3.7%	11. インターネット(ホームページなど)	17.8%
5. LINE	6.5%	12. 人との会話・口コミ	18.7%
6. メール	2.1%	13. その他	0.7%
7. テレビ	29.7%	14. 全問(Q27)の情報源以外にはない	21.2%

Q29 店頭でトイレットペーパーの品切れが発生していることを知って、あなたはどのような対応をしましたか

自宅に少ないので購入しようとした	19.4%
特に理由はないが、家族などに言われて購入しようとした	4.0%
念のため購入しようとした	12.9%
当面必要な分はあるので、無理に購入しようと考えなかった	55.3%
店舗を探し回った	4.4%
インターネット通販で購入しようとした	2.0%
その他	2.7%
品切れが発生していることを知らなかった	7.7%

Q30 結果的にトイレットペーパーを購入できましたか (N=1741)

希望通り、トイレットペーパーは購入できた	36.8%
希望通りではなかったが、トイレットペーパーは購入できた	27.9%
購入できなかった	28.9%
その他	6.4%

Q31 店頭でトイレットペーパーなどの品切れや買い占めが発生していることを知った際に、ご家族など近親者との相談をしましたか (N=4339)

相談をして行動した	26.8%
特に相談はしなかった	73.2%

Q32 「マスク増産による原材料不足でトイレトペーパーが不足する」とのうわさ以外に、今回の新型コロナウイルス感染症に関連したうわさ話を聞いたことがありますか

	聞いたことがあり、本当のことだと信じた	聞いたことはあるが、本当のことだと信じなかった	聞いたことはない
1. 新型コロナウイルスは熱に弱く、26～27度のお湯を飲むと殺菌効果がある	6.5%	44.1%	49.4%
2. 花崗岩が効く	2.0%	31.9%	66.1%
3. 新型コロナウイルスは中国で作られた生物兵器である	14.1%	38.5%	47.4%
4. 新型コロナウイルスの感染予防にアオサが効果的	3.9%	33.9%	62.3%
5. 新型コロナウイルスにビタミンDが効く	3.4%	21.8%	74.8%
6. 中国人観光客が関西空港から病院に搬送され、検査前に逃げた	8.4%	20.2%	71.3%
7. 新型コロナウイルスを中国が「日本肺炎」と広めようとしている	9.6%	26.1%	64.3%
8. 東京オリンピックが中止される	12.6%	52.9%	34.5%
9. トイレトペーパーは中国でつくっているのが不足する	5.1%	50.1%	44.8%
10. トイレトペーパーの在庫は足りている	69.9%	15.8%	14.3%

Q33 新型コロナウイルス感染症に関する、ここまでの政府の対応について、あなたはどのように感じになりますか

	良いと思う	まあ良いと思う	どちらともいえない	やや悪いと思う	悪いと思う
1. 感染症対策（体制や手順、基準など）の整備	7.7%	15.4%	29.9%	20.7%	26.1%
2. 状況や対策などの情報提供	6.9%	19.7%	28.5%	20.9%	24.0%
3. 国内での感染を防ぐ水際対策	5.8%	11.1%	26.3%	20.8%	36.0%
4. クルーズ船集団感染への対応	5.4%	11.0%	27.1%	20.6%	35.9%
5. 感染に関する検査（PCR検査）の体制	5.0%	9.3%	28.1%	22.4%	35.2%
6. 小・中学校や高校などの臨時休校	12.5%	21.5%	34.2%	14.7%	17.1%
7. イベントなどの自粛の要請	23.2%	28.3%	27.6%	9.3%	11.6%

Q34 テレビの報道（情報番組を含む）における、新型コロナウイルス感染症関連の情報提供について、お聞きます

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
1. 事実を適切に伝えている放送が多かった	6.6%	24.6%	40.6%	16.9%	11.3%
2. 医学や保健・衛生の難しい点を、わかりやすく伝えられていた	6.2%	29.8%	40.0%	15.1%	8.9%
3. どのように予防対策や行動をすれば良いか、わかりやすかった	6.8%	31.7%	38.1%	14.1%	9.2%
4. 国民（視聴者）に対して、安心さや冷静さにつながる放送が多かった	4.7%	16.4%	39.4%	20.9%	18.6%
5. 何が正しい情報なのか、わかりにくかった	18.6%	27.9%	38.7%	10.3%	4.6%
6. 不安を煽るような映像や表現が多かった	22.9%	26.8%	35.8%	9.4%	5.1%

Q35 あなたが暮らす地域で、新型コロナウイルス感染症の状況などの説明を聴く場合、どのような人が伝えることが、あなたの安心感につながりますか

1. 知事や市区町村など自治体の首長	41.2%
2. 現場で担当する部長など	19.7%
3. 有識者	22.7%
4. キャスター・アナウンサー	11.7%
5. その他	4.7%

Q36 あなたが暮らす地域で、新型コロナウイルス感染症の状況などの説明を聴く場合、どのような情報の伝え方をすることが、あなたの安心感につながりますか

1. 把握できた事実は、すべて公表する	50.3%
2. 重要度が高い情報を整理して公表する	42.2%
3. 最低限のポイントのみを公表する	6.9%
4. その他	0.6%

F1 性別

男性	50.0%
女性	50.0%

F2 年齢

平均 45.03 歳

調査 2: 【第 2 回】新型コロナウイルス感染症に関する国民アンケート

SC1 居住地 ※省略

SC2 同居人数

平均 2.91 人

SC3 高齢・基礎疾患への該当（回答者本人）

高齢者（65 歳以上）	10.6%
基礎疾患がある	9.5%
いずれもあてはまらない	81.3%

SC4 同居家族

乳幼児	18.1%
小学生	11.8%
中学生	7.2%
高校生	6.9%
高齢者（65 歳以上）	29.4%
基礎疾患	7.6%
該当しない	38.3%

Q1 あなたは以下の言葉をご存知ですか

	意味も理解している	意味はなんとなく分かる	意味はわからないが、	聞いたことがない
1. 新型コロナウイルス	84.4%	14.2%	0.7%	0.7%
2. 接触感染	76.6%	20.1%	1.8%	1.5%
3. 飛沫感染	77.2%	19.1%	1.9%	1.7%
4. エアロゾル感染	34.6%	24.8%	20.6%	20.1%
5. 空気感染	67.3%	27.0%	3.9%	1.8%
6. 濃厚接触	72.8%	22.8%	2.7%	1.7%
7. クラスター感染	69.0%	23.2%	5.5%	2.4%
8. COVID-19	50.5%	17.3%	12.4%	19.9%
9. PCR検査	59.5%	27.9%	7.9%	4.7%
10. オーバーシュート	52.4%	28.1%	13.1%	6.3%
11. ロックダウン	57.4%	28.4%	9.6%	4.6%

Q2. あなたは、これまでのコロナウイルス感染症に関する出来事や呼びかけなどについて、下記のことを知っていますか

		不 知 つ て い て 不 安 を 感 じ る	不 知 つ て い る が い い	知 ら な い
2020/1/23	中国で、武漢市を封鎖措置	63.1%	32.9%	4.0%
2020/1/28	国内で初の日本人患者を確認。武漢からのツアーバスの運転手	71.8%	24.4%	3.7%
2020/2/5	クルーズ船「ダイヤモンドプリンセス号」で集団感染が判明	72.2%	25.8%	2.0%
2020/2/19	「ダイヤモンドプリンセス号」から陰性の乗客の下船が開始	75.9%	22.0%	2.2%
2020/2/28	政府が3月2日から春休みまで、小中高校などの臨時休校を要請	75.2%	22.9%	1.9%
2020/3/6	PCR検査に、公的医療保険の適用を開始	65.0%	29.9%	5.1%
2020/3/13	「緊急事態宣言」を可能とする特別措置法が成立	73.7%	22.2%	4.1%
2020/3/19	政府専門家会議で「原則、学校再開の方針」と発言	74.5%	21.6%	4.0%
2020/3/24	東京オリンピック・パラリンピックの1年程度の延期を決定	69.4%	28.4%	2.1%
2020/3/25	東京都知事が会見で、週末の外出を控えることなどを要請	80.5%	17.4%	2.1%
2020/3/30	タレント志村けんさんの死去	87.7%	10.7%	1.6%

Q3 新型コロナウイルスの存在が明らかになってから現在に至るまで、日本でウイルスが広がるかどうかについて、不安を感じましたか

		と 日 本 で ウ イ ル ス が 広 が る の で は、 不 安 を 感 じ た	と 日 本 で ウ イ ル ス が 広 が る の で は、 不 安 は 感 じ な か つ た
2020/1/23	中国で、武漢市を封鎖措置	49.2%	50.8%
2020/1/28	国内で初の日本人患者を確認。武漢からのツアーバスの運転手	72.0%	28.0%
2020/2/5	クルーズ船「ダイヤモンドプリンセス号」で集団感染が判明	74.0%	26.0%
2020/2/19	「ダイヤモンドプリンセス号」から陰性の乗客の下船が開始	80.7%	19.3%
2020/2/28	政府が3月2日から春休みまで、小中高校などの臨時休校を要請	78.5%	21.5%
2020/3/6	PCR検査に、公的医療保険の適用を開始	77.6%	22.4%
2020/3/13	「緊急事態宣言」を可能とする特別措置法が成立	84.6%	15.4%
2020/3/19	政府専門家会議で「原則、学校再開の方針」と発言	83.4%	16.6%
2020/3/24	東京オリンピック・パラリンピックの1年程度の延期を決定	80.3%	19.7%
2020/3/25	東京都知事が会見で、週末の外出を控えることなどを要請	89.6%	10.4%
2020/3/30	タレント志村けんさんの死去	91.6%	8.4%

Q4 新型コロナウイルスの存在が明らかになってから現在に至るまで、自分自身が感染する不安を感じましたか

		自分自身が感染する不安を感じた	自分自身が感染する不安は感じなかった
2020/1/23	中国で、武漢市を封鎖措置	22.1%	77.9%
2020/1/28	国内で初の日本人患者を確認。武漢からのツアーバスの運転手	32.3%	67.7%
2020/2/5	クルーズ船「ダイヤモンドプリンセス号」で集団感染が判明	32.0%	68.0%
2020/2/19	「ダイヤモンドプリンセス号」から陰性の乗客の下船が開始	42.2%	57.8%
2020/2/28	政府が3月2日から春休みまで、小中高校などの臨時休校を要請	48.4%	51.6%
2020/3/6	PCR検査に、公的医療保険の適用を開始	48.9%	51.1%
2020/3/13	「緊急事態宣言」を可能とする特別措置法が成立	58.8%	41.2%
2020/3/19	政府専門家会議で「原則、学校再開の方針」と発言	58.5%	41.5%
2020/3/24	東京オリンピック・パラリンピックの1年程度の延期を決定	56.8%	43.2%
2020/3/25	東京都知事が会見で、週末の外出を控えることなどを要請	71.4%	28.6%
2020/3/30	タレント志村けんさんの死去	78.6%	21.4%

Q5 新型コロナウイルスの存在が明らかになってから現在に至るまで、自分自身が感染で重篤化したり死ぬのではないかと、不安を感じましたか

		自分自身が感染で重篤化したり、死ぬのではないかと不安を感じた	自分自身が感染で重篤化したり、死ぬのではないかと不安は感じなかった
2020/1/23	中国で、武漢市を封鎖措置	18.1%	81.9%
2020/1/28	国内で初の日本人患者を確認。武漢からのツアーバスの運転手	22.7%	77.3%
2020/2/5	クルーズ船「ダイヤモンドプリンセス号」で集団感染が判明	23.8%	76.2%
2020/2/19	「ダイヤモンドプリンセス号」から陰性の乗客の下船が開始	28.8%	71.2%
2020/2/28	政府が3月2日から春休みまで、小中高校などの臨時休校を要請	32.3%	67.7%
2020/3/6	PCR検査に、公的医療保険の適用を開始	34.4%	65.6%
2020/3/13	「緊急事態宣言」を可能とする特別措置法が成立	41.4%	58.6%
2020/3/19	政府専門家会議で「原則、学校再開の方針」と発言	40.4%	59.6%
2020/3/24	東京オリンピック・パラリンピックの1年程度の延期を決定	39.9%	60.1%
2020/3/25	東京都知事が会見で、週末の外出を控えることなどを要請	52.2%	47.8%
2020/3/30	タレント志村けんさんの死去	68.0%	32.0%

Q6 あなたは、自分自身が感染することについて、どの程度不安を感じますか

とても不安を感じる	44.4%
やや不安を感じる	39.0%
どちらとも言えない	8.2%
あまり不安を感じない	6.2%
まったく不安を感じない	2.2%

Q8 あなたは、同居されている乳幼児が感染するか、不安はありますか (N=710)

とても不安を感じる	73.1%
やや不安を感じる	19.6%
どちらとも言えない	5.1%
あまり不安を感じない	1.4%
まったく不安を感じない	0.8%

Q9 あなたは、同居されている高齢者が感染するか、不安はありますか (N=1154)

とても不安を感じる	51.2%
やや不安を感じる	35.3%
どちらとも言えない	8.2%
あまり不安を感じない	3.8%
まったく不安を感じない	1.5%

Q10 あなたは、同居されている基礎疾患がある方が感染するか、不安はありますか (N=298)

とても不安を感じる	64.8%
やや不安を感じる	26.2%
どちらとも言えない	5.4%
あまり不安を感じない	2.3%
まったく不安を感じない	1.3%

Q11 あなたは、現在の「自粛要請」についてどう思いますか (単位：%)

	とても そう 思う	やや そう 思う	どちら とも 言え ない	あ ま り そ う 思 わ な い	ま っ た く そ う 思 わ な い
1. 感染症予防のために、やむを得ない	68.5%	23.8%	5.3%	1.4%	1.0%
2. 医療崩壊を防ぐために、やむを得ない	70.0%	21.5%	6.6%	0.9%	1.0%
3. 経済活動を抑えてしまうので、よくない	14.2%	21.0%	31.8%	20.4%	12.6%
4. かぜの一種なのに、大げさだ	7.9%	7.3%	13.2%	22.4%	49.2%
5. 飲食業、観光業が衰退するので、よくない	12.3%	17.1%	33.2%	20.5%	16.9%
6. 食料品が購入できなくなるのではないかと不安	18.1%	29.6%	24.4%	19.1%	8.7%
7. 仕事がなくなるのではないかと不安	18.6%	21.5%	27.3%	17.0%	15.5%
8. 外出できないのはつらい	21.7%	28.8%	21.7%	15.4%	12.3%
9. 人と会えないのはつらい	17.9%	24.4%	24.1%	17.9%	15.7%
10. 自粛は強制ではないので、無理に活動を抑止する必要はない	8.4%	8.4%	20.7%	26.9%	35.6%
11. 学校が再開されるのだから、大したことはない	7.1%	6.2%	19.6%	25.1%	42.0%

Q12 現在、東京都など大都市において、都市封鎖（ロックダウン）の可能性があるとされるようになりました。これについてどう思いますか

	とてもそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1. 感染症予防のために、やむを得ない	58.9%	29.1%	9.3%	1.5%	1.2%
2. 医療崩壊を防ぐために、やむを得ない	60.5%	28.1%	9.0%	1.1%	1.2%
3. 経済活動を抑えてしまうので、よくない	12.5%	17.3%	29.4%	22.1%	18.7%
4. かぜの一種なのに大げさだ	7.4%	6.3%	14.9%	21.1%	50.3%
5. 飲食業、観光業が衰退するので、よくない	10.0%	14.2%	31.5%	22.6%	21.7%
6. 食料品が購入できなくなるのではないかと不安	17.4%	27.2%	25.9%	18.6%	10.9%
7. 仕事がなくなるのではないかと不安	17.3%	21.1%	28.1%	17.3%	16.1%
8. 外出できないのはつらい	17.8%	25.3%	22.4%	16.7%	17.8%
9. 人と会えないのはつらい	15.8%	22.3%	24.0%	17.6%	20.3%
10. 自粛の段階と、活動の抑止がどう変わるのかわからない	16.7%	24.9%	34.2%	11.9%	12.3%

Q13 あなたは、海外における次のことを知っていますか

	不安を感じている	不安を感じない	知らない
1. アメリカでは都市封鎖（ロックダウン）が行われている	64.3%	23.5%	12.2%
2. イギリスでは都市封鎖（ロックダウン）が行われている	61.5%	24.5%	14.0%
3. イタリアでは都市封鎖（ロックダウン）が行われている	64.4%	24.6%	11.0%
4. スペインでは都市封鎖（ロックダウン）が行われている	61.2%	23.9%	14.9%
5. ロシアでは都市封鎖（ロックダウン）が行われている	49.7%	23.3%	26.9%
6. 世界の約4割の人口が自宅待機となっている	51.8%	18.8%	29.4%
7. イタリアでは1万人以上がなくなった	74.6%	16.4%	9.0%
8. 台湾では、ビッグデータを活用した感染症対策を行っている	40.0%	27.6%	32.5%
9. 韓国では、PCR検査を多く行っている	50.3%	34.1%	15.6%
10. 韓国では、感染者の早期発見・早期隔離を行っている	47.5%	31.4%	21.0%

Q14 あなたが暮らす地域で、「3週間（21日間）程度の間、人の外出や移動を制限する措置などが行なわれた場合」、自分自身に影響が大きいと思うのはどのようなことですか

1.	仕事や商売が続けられなくなる	33.5%
2.	自宅に待機してもやることなく暇をもてあます	28.5%
3.	親・兄弟など親族との行き来ができなくなる	22.8%
4.	友人などとの交流機会が減る	25.8%
5.	家族だけの時間が増え、摩擦が多くなる	13.1%
6.	子どもの勉強の遅れや学力が低下する	15.4%
7.	食料をはじめ生活必需品が不足する	55.7%
8.	経済全体が大きな打撃を受ける	59.3%
9.	その他	2.2%
10.	特にない	10.6%

Q15 あなたの現在の心身の状況について、以下の項目にどの程度あてはまるかお答えください

	とても そう思う	やや そう思う	どちら とも いえない	あまり そう 思わない	ま ったく そう 思わ ない
1. 新型コロナウイルス感染症への対策を行うことに疲れた	15.8%	30.5%	21.0%	22.3%	10.4%
2. 品切れなどでほしいものが手に入らず、ストレスが増えた	18.8%	32.5%	20.0%	19.0%	9.7%
3. テレビが新型コロナウイルスの話題ばかりで疲れた	23.0%	32.8%	19.9%	15.7%	8.6%
4. 外出を控えているため、運動不足だ	14.6%	23.5%	26.9%	22.6%	12.4%
5. 外出を控えているため、心身の調子が悪い	10.0%	16.8%	27.9%	27.5%	17.8%
6. 仕事に関するストレスが減った	6.9%	8.2%	38.4%	23.3%	23.1%
7. 友人と会えず、ストレスが増えた	9.1%	15.9%	30.8%	22.2%	22.0%
8. 外食できず、ストレスが増えた	9.9%	17.1%	29.9%	21.7%	21.4%

Q16 3月25日、東京都知事が「感染爆発の重大局面」とし、週末の不要不急の外出等を控えることを要請しました。これを見聞きして、この週末をどう行動しようと思いましたか

1.	社会の深刻な状況を感じて、外出を控えたいと思った	60.8%
2.	自身への危険の高まりを感じて、外出を控えたいと思った	50.5%
3.	仕事や商売があり、外出しないわけにはいかないと考えた	19.6%
4.	用事や予定があり、外出しないわけにはいかないと考えた	16.2%
5.	自分にはあまり関係がないことだと思った	9.6%
6.	その他	1.7%
7.	特に何も感じなかった	5.3%
8.	この要請を知らなかった	2.5%

Q17 3月25日（水曜日）の東京都知事が記者会見から、週末を迎える3月27日（金曜日）までのお買い物は、普段と比べて変わりましたか

	通常よりも多めに買った	通常よりも多めに買いたいが、思っていたが、買えていない	通常と変わらない	買っていない
1. 米やパンなどの主食	8.8%	4.5%	70.6%	16.1%
2. 水	4.9%	4.2%	49.6%	41.3%
3. マスク	4.7%	17.8%	19.6%	57.9%
4. アルコール消毒液	4.4%	14.6%	20.9%	60.1%
5. 除菌・抗菌用品（スプレー、シートなど）	4.7%	13.7%	25.1%	56.4%
6. トイレットペーパー	6.5%	6.8%	48.6%	38.1%
7. ティッシュ	5.5%	6.0%	48.9%	39.6%
8. 紙おむつなどベビー用品、介護用品	3.4%	4.0%	27.1%	65.4%
9. インスタント食品	9.4%	6.7%	53.4%	30.4%
10. 冷凍食品	7.2%	6.0%	55.2%	31.6%
11. 電池	2.6%	3.9%	37.2%	56.3%
12. チョコレートなどのお菓子	5.6%	5.4%	62.0%	27.0%

Q18 先週末の3月28日（土曜日）と29日（日曜日）に、あなたは主にどのように過ごしましたか

1. 普段の土日よりも外出をすることが多かった	3.2%
2. 普段の土日よりも家にいることが多かった	47.5%
3. 普段の土日と変わりなかった	49.4%

Q19 普段の土日よりも家にいることが多かった理由は何ですか（N=2231）

1. 外出自粛要請があったから	58.0%
2. 感染するのではと人混みが怖かったから	72.6%
3. 天気が悪かったから	18.5%
4. 行きたかったお店が閉まっていたから	2.8%
5. 家族に止められたから	3.6%
6. 何となく	6.4%
7. その他	1.5%
8. 特に予定がなかったから	7.6%

Q20 先週末の3月27日（金曜日）～30日（月曜日）の間に、以下のような外出をしましたか

	3/27 (金)	3/28 (土)	3/29 (日)	3/30 (月)
1. 仕事	55.8%	25.1%	16.5%	50.4%
2. 出張	1.0%	1.0%	0.8%	0.9%
3. 外食	5.7%	9.2%	7.8%	4.0%
4. 近隣での用事や買い物	23.4%	33.2%	33.1%	21.1%
5. ショッピングセンター・アウトレットやショッピング街での買い物	3.8%	7.4%	7.6%	4.1%
6. お花見	0.8%	1.0%	1.4%	0.6%
7. 日帰りのドライブ、観光など	1.2%	1.9%	2.4%	0.9%
8. 宿泊をともなうドライブ、観光など	0.8%	1.0%	0.9%	0.5%
9. スポーツジムやフィットネス、エステなど	1.6%	1.8%	1.2%	1.2%
10. スポーツをしたり公園で遊ぶ	1.9%	3.0%	3.4%	1.7%
11. 近隣の散歩	7.7%	10.3%	10.4%	7.7%
12. コンサートやスポーツ感染	0.4%	0.5%	0.3%	0.3%
13. 映画館での映画鑑賞	0.5%	0.3%	0.5%	0.3%
14. 図書館など文化施設の利用	0.6%	1.2%	0.9%	0.4%
15. その他	1.7%	2.0%	2.1%	2.1%
16. まったく外出しなかった	20.1%	30.4%	35.9%	23.7%

Q21 ここ1週間くらいの間、あなたが利用や参加などを控えているものはありますか

	がも なと も と 予 定	利 が 予 定 し て い た ・ 利 用 を や め 参 加 し た	用 実 施 し た 参 加 ・ 利
1. 外食	68.4%	14.7%	16.8%
2. 飲み会・宴会	82.8%	13.4%	3.8%
3. 買い物	28.7%	10.3%	61.0%
4. 旅行	89.5%	8.0%	2.5%
5. 出張	94.0%	4.3%	1.7%
6. コンサートやライブ、演劇、映画の鑑賞	92.0%	6.7%	1.3%
7. スポーツ観戦	94.9%	4.2%	0.9%
8. スポーツジム	90.1%	6.4%	3.4%
9. 結婚式	95.4%	3.3%	1.3%
10. お葬式	95.6%	2.4%	2.0%
11. カラオケ	94.3%	4.1%	1.6%

Q22 ここ1週間くらいの間、あなたが利用を控えているものはありますか

	避けている	避けたいが、やむを得ず利用している	特に気にせず、利用している	利用する予定がなかった
1. 電車の移動	22.4%	12.4%	4.4%	60.9%
2. 混雑時の電車の移動	24.4%	8.6%	2.6%	64.4%
3. バスの移動	21.9%	6.6%	3.0%	68.6%
4. 混雑時のバスの移動	23.1%	4.1%	1.7%	71.1%
5. タクシーによる移動	20.6%	3.1%	2.7%	73.7%
6. 飛行機による移動	20.9%	2.2%	1.5%	75.4%
7. 新幹線による移動	21.4%	2.7%	1.6%	74.3%

Q24 3月20日（金曜日・祝日）～22日（日曜日）の間のお買い物は、普段と比べて変わりましたか

	通常よりも多めに買った	通常よりも多めに買いたかったが、買えていない	通常と変わらない	買っていない
1. 米やパンなどの主食	6.0%	3.2%	68.3%	22.5%
2. 水	3.4%	3.4%	39.3%	53.9%
3. マスク	2.6%	15.2%	16.6%	65.6%
4. アルコール消毒液	2.6%	12.5%	17.7%	67.3%
5. 除菌・抗菌用品（スプレー、シートなど）	2.8%	11.0%	20.1%	66.0%
6. トイレtpペーパー	3.8%	5.2%	37.0%	54.0%
7. ティッシュ	3.5%	4.5%	36.4%	55.6%
8. 紙おむつなどベビー用品、介護用品	2.4%	3.0%	23.7%	70.9%
9. インスタント食品	5.6%	4.8%	49.4%	40.2%
10. 冷凍食品	4.7%	4.1%	49.7%	41.5%
11. 電池	2.0%	2.9%	26.6%	68.5%
12. チョコレートなどのお菓子	4.3%	3.8%	56.8%	35.1%

Q25 新型コロナウイルス感染症を知ってから、あなたが具体的に不安を感じていることはありますか

	とても不安を感じる	やや不安を感じる	どちらとも言えない	あまり不安を感じない	まったく不安を感じない
1. 効果的な治療薬やワクチンがないこと	61.1%	25.8%	8.1%	3.0%	2.0%
2. ウイルスが目に見えないものであること	59.3%	23.5%	10.5%	4.3%	2.4%
3. 検査（PCR検査）を受けたくても受けられないこと	38.1%	29.1%	21.1%	8.1%	3.7%
4. 持病や風邪などで、病院に行きたくても感染への不安を感じる	37.0%	30.7%	19.0%	9.2%	4.1%
5. 感染者が増えて病院などが対応能力を超えてしまうこと	56.7%	27.5%	10.8%	2.9%	2.1%
6. 日本でも、感染者の爆発的な増加が起こり得ること	63.0%	24.1%	8.7%	2.3%	1.9%
7. 感染拡大で都市の封鎖などの緊急事態が起こり得ること	52.6%	29.1%	12.7%	3.4%	2.2%
8. いつまで続くのか、見通しがわからないこと	69.4%	19.4%	7.8%	1.8%	1.6%
9. 自分が感染したら、自身の情報や行動内容が明らかにされること	42.9%	24.6%	20.0%	7.5%	4.9%
10. 自分が感染したら、人から批判や差別をうけるかもしれないこと	42.9%	27.4%	19.6%	5.8%	4.3%
11. 人々が自分勝手な行動を始めて、社会の秩序が保てなくなる	44.4%	30.1%	18.4%	4.4%	2.6%
12. 世界的な経済活動の停滞や、株価の急落などにより不況におちいること	50.9%	28.5%	15.0%	3.1%	2.5%

Q26 新型コロナウイルス感染症の問題に関して、あなたの生活に影響が及んでいるものはありますか

	全数	乳幼児・小学生がいる (N=1039)
1. 子どもの学校再開や新学期などの備え	20.1%	51.2%
2. 小さな子どもの保育先などの手配	6.3%	20.8%
3. 買い物での品薄・品切れに対する判断	55.5%	62.2%
4. 日常の通院などが気がかり	27.9%	29.9%
5. 外出や移動が気がかり	47.9%	54.0%
6. 冠婚葬祭への影響	9.4%	8.7%
7. コンサートや観劇・スポーツ観戦などへの影響	13.2%	8.8%
8. 仕事の仕方への影響	36.7%	39.5%
9. 経済や景気への影響	40.9%	36.5%
10. オリンピック・パラリンピック開催への影響	8.8%	8.2%
11. 漠然とした不安が続くこと	46.0%	46.6%
12. その他	2.1%	1.3%
13. 特になし	9.3%	4.6%

Q27 あなたご自身が、感染防止のために、特に気をつけて行っていることは何ですか

1. 手洗いやアルコール消毒	84.5%
2. 手すりやドアノブなどに触れた指先で目・鼻・口を触らない	39.9%
3. うがい	50.3%
4. 咳エチケット・マスクの着用	66.4%
5. 屋内の換気	42.1%
6. 良く触れるものの消毒や洗浄	21.8%
7. 同居者のタオル類の使い分け	10.2%
8. 定期的な体温の測定	19.8%
9. その他	0.7%
10. 特にない	7.2%

Q28 Q27 で示した感染防止の行動の他に、感染症の拡大などを防ぐために、あなたが行っていることは何ですか

1. 人が密集するような場所へ行くことを避ける	79.0%
2. 人と接触する場合は、距離をとる	41.4%
3. 仕事の仕方を変えて、外出や出張を減らす	15.0%
4. 食料品など日常の買い物の回数を減らす	32.9%
5. ショッピングセンターやショッピング街などに行かない	40.9%
6. ドライブや観光などに行かない	37.1%
7. スポーツジムやフィットネスなどに行かない	33.2%
8. スポーツをしたり公園で遊ぶことをしない	19.5%
9. 知人や友人の家を訪問しない	33.3%
10. 食事会や飲み会などに行かない	50.2%
11. 必要以上に買いだめしたり、多くの店で買い漁ったりしない	45.3%
12. 微熱があったり、体調不良の際は会社を休む・外出をしない	32.5%
13. 必要以上に診療所や病院に行かない	39.2%
14. 感染症検査の趣旨や手続きを理解して対応する	22.9%
15. 会議や集会では、換気や風通しを良くする	21.3%
16. ニュースや解説などの情報は自分が信頼できる情報源を選ぶ	39.0%
17. うわさや伝聞にまどわされないようにする	42.6%
18. その他	0.4%
19. 特にない	7.8%

Q29 あなたは、Q27やQ28で行っている行動や、大切だと考えていることについて、事態が収束するまでの期間、実行し続けることができますか (N=4484)

続けることができると思う	37.7%
まあできると思う	45.4%
どちらともいえない	13.0%
あまりできると思わない	2.5%
続けることができないと思う	1.3%

Q30 今回の新型コロナウイルス感染症に関連したうわさ話を聞いたことがありますか

	聞いたことがあり、 本当のことだと信じた	聞いたことはあるが、 本当のことだと信じなかった	聞いたことはない
1. コロナウイルスはインフルエンザよりも危険ではないと思う	20.5%	37.3%	42.2%
2. 近々、都市封鎖（ロックダウン）が行われると政府関係者から聞いた	24.1%	31.6%	44.2%
3. 若い人は新型コロナウイルスに感染しても死んだり、重症化することはない	25.7%	56.5%	17.8%
4. 政府は新型コロナウイルスの感染者数を正確に発表していない	31.9%	30.8%	37.3%
5. 政府は新型コロナウイルスの死者数・感染者数を低く抑えるためにPCR検査をしていない	34.3%	34.3%	31.4%

Q31 今回の、新型コロナウイルス感染症関連で役立った情報源は何ですか

1. テレビ	82.3%
2. ラジオ	11.8%
3. 新聞	30.8%
4. 固定電話、スマートフォン・従来型携帯電話による通話やメール	12.4%
5. LINEによる通話やメール	11.9%
6. Twitter、Facebook、InstagramなどのSNS	20.1%
7. インターネット（ホームページなど）	48.5%
8. 市町村の広報誌	6.5%
9. 市町村のホームページ	14.9%
10. 市町村などの相談窓口	1.6%
11. 医療機関（相談、通院など）	5.1%
12. タウン誌	0.8%
13. 週刊誌など雑誌	1.0%
14. 親しい人との口コミ	10.7%
15. その他	1.1%
16. 特になし	5.9%

Q32 テレビの報道（情報番組を含む）における、新型コロナウイルス感染症関連の情報提供について、お聞きします

	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
1. 事実を適切に伝えている放送が多かった	11.0%	32.1%	38.7%	10.3%	7.9%
2. 医学や保健・衛生の難しい点を、わかりやすく伝えられていた	11.0%	35.9%	36.6%	10.1%	6.3%
3. どのように予防対策や行動をすれば良いか、わかりやすかった	12.6%	37.9%	34.7%	9.3%	5.5%
4. 国民（視聴者）に対して、安心や冷静さにつながる放送が多かった	7.9%	19.7%	40.8%	17.3%	14.3%
5. 何が正しい情報なのか、わかりにくかった	17.9%	28.7%	38.7%	10.6%	4.0%
6. 不安を煽るような映像や表現が多かった	23.4%	28.0%	34.8%	9.1%	4.7%

Q33 以下のメディアについて、この1週間程度、1日平均どのくらい利用しましたか

	テレビ	ラジオ	新聞	雑誌	パソコンでのインターネット	スマートフォン・従来型携帯電話でのインターネット
全く利用しなかった	6.3%	67.6%	52.0%	81.8%	37.6%	18.1%
30分未満	6.8%	12.8%	25.0%	9.6%	10.6%	13.6%
30分以上1時間未満	8.4%	5.8%	10.6%	3.0%	10.3%	12.3%
1時間以上1時間30分未満	9.7%	3.3%	4.6%	1.6%	8.6%	11.0%
1時間30分以上2時間未満	9.9%	2.7%	3.0%	1.2%	6.9%	9.0%
2時間以上3時間未満	15.6%	2.3%	1.4%	0.9%	8.3%	9.9%
3時間以上4時間未満	12.6%	1.4%	1.0%	0.5%	4.9%	8.1%
4時間以上5時間未満	9.0%	1.0%	0.8%	0.5%	3.4%	5.2%
5時間以上8時間未満	9.1%	1.4%	0.5%	0.3%	3.2%	4.8%
8時間以上	12.6%	1.7%	1.0%	0.6%	6.2%	8.0%

Q34 あなたの現在のお仕事をお答えください

1. 会社員（正社員）	37.8%
2. 会社員（契約社員）	4.9%
3. 公務員	7.4%
4. 自営業・自由業	6.7%
5. 会社役員・経営者	1.4%
6. パート・アルバイト	14.0%
7. 学生	1.8%
8. 専業主婦（主夫）	14.3%
9. その他	1.8%
10. 無職	9.9%

Q35 あなたの職場では、今回の新型コロナウイルス感染症への対応として、テレワーク（在宅ワーク）を実施していますか（N=3075）

利用している	9.4%
職場で利用している人もいるが、自分自身は利用していない	11.6%
職場で行われていない	79.0%

Q36 テレワーク（在宅ワーク）による仕事の仕方をどう感じますか（N=288）

良好である	31.9%
まあ良好である	34.7%
どちらともいえない	20.1%
あまり良好ではない	9.4%
良好ではない	3.8%

Q37 テレワーク（在宅ワーク）による仕事で、良いと感じることはどのようなことですか（N=192）

1. 外出による感染の心配を避けることができること	78.1%
2. 混雑する電車やバスに乗らなくてよいこと	59.9%
3. 移動や通勤にあてていた時間が有効に使える	59.4%
4. 自分の生活時間と仕事のバランスがとりやすいこと	44.8%
5. 在宅する子どもや高齢者の面倒をみられること	21.4%
6. 体調不良がある際に、無理に出勤する必要がないこと	36.5%
7. 集中して仕事ができること	30.2%
8. 会社が自分の健康や安全を考えてくれていると感じること	25.0%
9. その他	1.6%
10. 特になし	2.1%

Q38 テレワーク（在宅ワーク）による仕事で、不都合や課題を感じることはどのようなことですか（N=38）

1. 職場と比べて机や椅子など仕事がしやすい状態ではないこと	52.6%
2. 用品や機器が不足すること	26.3%
3. インターネットなどの通信環境が不十分であること	28.9%
4. セキュリティ面の不安があること	23.7%
5. 勤務時間が不明確になること	23.7%
6. 生活と仕事のけじめがつきにくくなること	50.0%
7. 仕事に関する報告や相談がしにくいこと	34.2%
8. 会話や交流が減ること	34.2%
9. 顧客との連絡や調整がしにくいこと	31.6%
10. 出勤したい用件が自由にできないこと	26.3%
11. 全ての仕事が在宅で済ませられるわけではないこと	47.4%
12. その他	0.0%
13. 特になし	7.9%

Q39 あなたの職場では、今回の新型コロナウイルス感染症への対応として、時差出勤を実施していますか（N=3075）

利用している	9.9%
職場で時差出勤している人もいるが、自分自身は時差出勤していない	13.2%
職場で時差出勤は行われていない	76.9%

Q40 新型コロナウイルス感染症に関する、ここまでの政府の対応について、あなたはどのように感じになりますか

	良いと思う	まあ良いと思う	どちらともいえない	やや悪いと思う	悪いと思う
1. 感染症拡大の防止策	9.0%	18.4%	26.9%	20.7%	25.0%
2. 国内での感染を防ぐ水際対策	8.1%	14.9%	24.4%	21.2%	31.3%
3. 状況や対策などの情報提供	8.4%	20.6%	32.8%	18.5%	19.7%
4. 感染に関する検査（PCR検査）の体制	7.5%	14.1%	30.4%	20.8%	27.3%
5. 感染者への医療体制	9.3%	20.1%	35.4%	17.9%	17.4%
6. 小・中学校や高校などの学校再開への対応	8.7%	19.4%	38.0%	17.0%	16.9%
7. イベントなどの自粛の要請	18.7%	28.7%	24.3%	12.3%	15.9%
8. オリンピック・パラリンピック延期決定への対応	26.0%	28.6%	23.9%	8.4%	13.1%
9. 企業の資金繰り支援や家計への現金給付などの経済対策	9.2%	13.6%	30.0%	16.5%	30.7%

性別

男性	50.0%
女性	50.0%

年齢

平均 45.08 歳

同居人数

1人	16.4%
2人	29.3%
3～5人	50.6%
6人以上	3.8%

居住地

北海道	2.1%
東北	12.8%
関東	14.9%
中部	21.3%
近畿	12.8%
中国	10.6%
四国	8.5%
九州	17.0%

パネル調査に基づくドラマ「パラレル東京」の効果—首都直下地震への対策—

Measuring the Effectiveness of Media Campaigns on How to Prepare for an Earthquake Directly Hitting Tokyo from a Panel Survey

安本 真也 Shinya YASUMOTO 河井 大介 Dasisuke KAWAI
齋藤 さやか Sayaka SAITO 関谷 直也 Naoya SEKIYA

目 次

1. はじめに
 - 1.1 調査目的
 - 1.2 首都直下地震の想定
 - 1.3 体感「首都直下ウィーク」
 - 1.4 調査概要
2. デモグラフィック・普段の情報接触状況
3. 「パラレル東京」の視聴状況
 - 3.1 番組の認知度
 - 3.2 「パラレル東京」の視聴状況
 - 3.3 「パラレル東京」の評価
 - 3.4 LINEのグループチャットの確認状況と評価
4. 態度や行動への番組効果
 - 4.1 首都直下地震に対する態度の変化
 - 4.2 災害に関する意見の変化
 - 4.3 知識の変化
 - 4.4 視聴後の行動
5. 不安感の変化
 - 5.1 首都直下地震による首都圏への影響に対する不安感
 - 5.2 自宅や自分、家族への影響に対する不安感
 - 5.3 不安感の変化に関するまとめ
6. 居住地域による差異
 - 6.1 居住地域による「パラレル東京」接触・態度
 - 6.2 地域ごとの「パラレル東京」視聴有無による影響の比較

引用・参考文献

付属資料（アンケート調査の単純集計）

キーワード：首都直下地震、パネル調査、マスコミュニケーションの効果、テレビドラマ

執筆分担：

安本 真也	東京大学大学院学際情報学府 博士課程	1, 3, 4 章
河井 大介	東京大学大学院情報学環 総合防災情報研究センター	6 章
齋藤さやか	東京大学大学院情報学環 総合防災情報研究センター	5 章
関谷 直也	東京大学大学院情報学環 総合防災情報研究センター	2 章

1. はじめに

1.1 調査目的

日本では、毎年のように大雨や台風、大雪、それ以外にも地震や津波、火山の噴火など様々な自然災害が発生し、人的・物的被害をもたらしている。そうした現状に対して、我が国では被災時の行政などからの支援には限界があることから「災害を『他人事』ではなく『自分事』として捉え、国民一人一人が減災意識を高め、具体的な行動を起こすことが重要である」（内閣府，2018：p.31）としており、個々人が災害に対して興味を持ち、対策を行うことが求められるようになっている。

だが、ひとえに具体的な行動を起こす、といってもそれは簡単ではない。たとえば、地震対策を考えた場合、地震保険への加入や家の耐震化、家具の転倒防止などが考えられるが、経済的コストが生じるし、水・食料の備蓄は地震発生後、生き残った後の対策で、そもそも地震の揺れそのもので亡くなってしまうと、意味がない。そもそも、歴史的にみても人が、人的・物的被害が出るような地震にあうのは一生に一度あるかないかであり、不確実性が高い。そのため、人々に地震対策を行ってもらうように仕向けることは簡単ではない。

そうした中で、地震対策に関する教育的効果を考えるうえで、マスメディアの役割は重要である。特にテレビは速報性、広範性、明快性、耐災性という特性を有していることから、災害が発生した場合、もしくは災害の発生が予想される場合に、災害の形態や被害の様子といった事実情報を伝えることが放送法第一〇八条によって義務付けられている。それにより、被害の拡大を防ぐ、防災の機能が求められる（廣井，2004）。地震においても、発生するとその被害の様子を伝え、多くの人の情報源となる（関谷ほか，2012など）。それにより、被害を受けていない人の防災に関する意識も向上するだろう。さらに、緊急時の報道だけではなく、平時においても災害啓発に関する情報を発信し、防災の機能を担う。たとえば、日本放送協会（以下、NHK）は、「災害時だけでなく日ごろから防災の課題を積極的に取り上げ、安全な社会づくりに寄与するとともに、人々に防災知識が広がるように努める」（NHKホームページ，2020：p.44）としており、実際に防災に関する番組を制作している。東海地震に関連する情報に着目した想定ドキュメント番組「巨大地震・情報パニックの恐怖」（1978年5月12日放送）や、不定期に放送されたNHKスペシャル「MEGAQUAKE 巨大地震」（2010年～全13回）などもその一例である。こうした番組を通して、人々は災害に関する知識を取得し、対策をとることもあろう。

だが、こうした番組が人びとにどのような効果を与えたのかは実証がされていない。つまり、テレビの教育的効果、そしてその結果としての知識や行動への影響は明らかではない。その理由として、第一にこれまで防災に関する番組はキャンペーン放送のように継続的に行われることはほとんどなかった点があげられる。マスコミュニケーションの効果研

究でしばしばテーマとされた選挙や環境問題のような集中的なキャンペーン放送が、防災をテーマとしては行われてこなかった。先に述べたような、防災啓発を目的としたような単発の番組はあるが、防災について一定期間集中的に放送が行われることはほとんどない。大きな災害のあった1月17日や3月11日には、周年報道と呼ばれるような、1年ごとに過去の災害の振り返りが行われ、災害に関する報道は増加する。これらも災害に対する注意を喚起しており、防災啓発を目的としている側面もあるが、どちらかといえば、被災地を想起させる内容が多い。第二に、集中的な報道は当然のことながら、実際の災害が発生した（または風水害などの場合は、発生が予期される事前から）場合に行われる。だが、災害がいつ発生するか分からないため、その後にマスメディア、テレビに関する調査を実施したとしても、災害が発生する前に調査を実施していないために、その効果を明らかにすることに限界があった。そのため、防災に関して、テレビの効果を実証できていない。

そうした中で、NHKは2019年12月1～8日にかけて、首都直下地震を題材としたキャンペーン放送を行った。中でも、中核となったのが2～5日にかけて放送されたドラマ「パラレル東京」である。このドラマは内閣府の想定に基づき、制作された。こうしたキャンペーン放送が実施されることを事前に知り得たことから、このキャンペーン放送の前後でインターネットパネルを用いたアンケート調査を実施することとした。これにより、防災に関するキャンペーン放送の効果としての人々の首都直下地震に関する知識や意識、行動の変化をみるのが可能となった。本稿ではその調査結果を論ずる。

1.2 首都直下地震の想定

本節ではまず、内閣府が公表している首都直下地震の想定について述べる。

内閣府は2003年9月に首都直下地震対策の専門調査会を発足させ、2005年2月に被害想定公表を行った（内閣府ホームページ）。その後、2011年3月の東日本大震災を機に見直しが行われ、防災対策の検討に活かすことを主眼とした新たな被害想定、社会・経済への影響について検討がなされた（内閣府ホームページ、2013a）。

想定される被害として、上下水道や電力供給などのライフラインの被害、道路や鉄道などの交通施設の被害、避難者・被災者の発生、物資不足、情報の混乱などがあげられている。特に、避難者・被災者の発生では、揺れによる被害だけではなく、火災による被害の想定も多く行われている。ここでは「環状六号線から八号線の間をはじめとして、（中略）大規模な延焼に至ることが想定され、同時に複数の地点で出火し、延焼拡大による火炎の合流や、四方を火災で取り囲まれたり、火災旋風の発生等により、的確に火災からの避難を行わないと、逃げ惑いが生じることで大量の焼死者が発生するおそれがある」（内閣府、2013：p.22）と記述されている。また、風向きや季節によるが、火災による死者が最大約

16,000人という想定がなされている。この数字は揺れによる死者数（最大約11,000人）よりも多い。想定される死者数の大小で比較するべきではないが、首都直下地震において火災への対策も重視すべきといえよう。実際、首都圏をおそった巨大地震として知られる1923年の関東大震災においても、揺れによる死者数よりも火災による死者数の方が圧倒的に多い（内閣府ホームページ, 2006）。こうした想定を受け、東京都は地震に関する危険度測定調査に基づくパンフレット「あなたのまちの地域危険度」の作成や「木密地域不燃化プロジェクト」などの火災対策を行っている。

つまり、同じ地震というハザードであるが東日本大震災のような津波被害とは異なる想定がなされている。首都直下地震では特に、23区内を中心とした火災への対策が重要である。

そして、この内閣府の被害想定を基に、「漠然と恐れるのではなく、どんなことが起こりえるのかを知っておくことが命を守ることに繋がります」（NHKホームページ, 2020）と防災啓発を目的として制作されたのが、ドラマ「パラレル東京」である。

1.3 体感「首都直下ウィーク」

本節では、NHKの行った防災に関するキャンペーン放送の「体感 首都直下ウィーク」ならびにその中核たるドラマ「パラレル東京」（以下、「パラレル東京」）の概要について述べる。

このキャンペーン放送は2019年12月1～8日にかけて行われた。実際の防災訓練、インターネット上のホームページやTwitter、ドラマ独自のLINEグループチャットといったネットメディア、「おはようニッポン」などの通常編成のテレビ番組、ドラマなどが組み合わせられて行われた。例えば、渋谷区役所などで実際に行われた首都直下地震対策の防災訓練の様子や、地震の影響で、電気や水道、ガスなどが通じないという状況を現実で作り、番組ディレクターが在宅避難を体験する様子などを通常編成の番組内で生中継したり、子供や障害者などの災害弱者の備えや支援に焦点をあてた番組も放送された。

そうした中でも、中核となったのが2～5日にかけて放送されたドラマ「パラレル東京」である。この「パラレル東京」はマグニチュード7.3の大地震が12月2日午後4時4分に架空の「東京」で発生した、という想定で、その後、都心に変化する様子をVFXを用いながら、現実世界の時間軸に沿って描かれた作品である。つまり、ドラマ内の時間軸での12月2日（月）19時30分は、現実世界の時間軸でも12月2日（月）19時30分、現実世界で30分が経過すると、ドラマの中でも30分が経過している、という設定である。物語は架空のテレビ放送局であるNNJを舞台として、主人公のアナウンサー・倉石美香の目線で開催する。テレビ局が舞台のため、様々な情報が集まっており、それによって我々視聴者も首都直下地震の一端を「体感」できる。ここでは、発災後の4日間という、発災直

後から初期対応（約 100 時間まで）が描かれている。放送日ごとにテーマが決められ、その事象が発生し、その出来事をどのように報道するかという点に主眼が置かれつつ、一方で、主人公の倉石は、自身の妹と連絡がつかずに心配する、というストーリーが展開された。たとえば、発災から 30 時間ほど経過したという設定の 2 日目には、火災旋風の発生、ソーシャルメディア上のデマ情報に振り回されるテレビ局の人々の姿などが描かれている。なお、この番組中、約半分はドラマパート、残りの約半分の時間は実際のスタジオで、アナウンサーや専門家らによる解説にあてられていた。これにより、人々は首都直下地震に関する知識などを得ることが可能となり、防災につながると考えられる。4 夜連続で放送された時間とタイトル、テーマは表 1.1 の通りである。

表 1.1 「パラレル東京」概要

放送日時	タイトル	テーマ
12 月 2 日（月） 19 時 30 分～20 時 41 分	「あなたを襲う震度 7 の 衝撃」（発災当日）	建物倒壊・同時多発火災・群衆 雪崩 ¹
12 月 3 日（火） 22 時 00 分～23 時 00 分	「多発する未知の脅威」 （発災 2 日目）	火災旋風・デマによる情報混乱・ 広域通信ダウン
12 月 4 日（水） 22 時 00 分～23 時 00 分	「命の瀬戸際 新たな危機」 （発災 3 日目）	避難所 食糧不足・通電火災・ 閉じ込め被災者 救出難航
12 月 5 日（木） 22 時 00 分～23 時 00 分	「危機を生きぬくために」 （発災 4 日目）	相次ぐ余震で土砂崩れ・堤防決 壊の危機

1.4 調査概要

本節では用いる調査の概要について述べる。

この防災啓発番組として放送された「パラレル東京」が人々に与える影響や効果を測定することを目的として、インターネットパネルを用いた 3 波のアンケート調査を実施した。調査の概要は表 1.2 の通りである。第 1 波の調査は、東京都在住のインターネットモニター（NTT コムリサーチのモニターを利用）を対象として、10,680 サンプルを回収した（680 は予備サンプル）。調査実施期間は、2019 年 11 月 29 日から、「体感 首都直下地震ウィーク」が開始する前の 12 月 1 日までである。なお、性別や年代の割付などは行っていない。第 2 波の調査は「体感 首都直下地震ウィーク」が終了した直後の 2019 年 12 月 11～12 日

¹ 本来は「群集雪崩」が正しい表現と考えられるが、本稿では実際の放送内容に従い「群衆」雪崩と表記する。

に実施した。つまり、キャンペーン放送から1週間が経過した時期である。ここでは第1波の回答者に対して、80%を目途として実施した。第3波の調査は「体感 首都直下地震ウィーク」から3か月後の2020年3月2～23日に実施した。回収は第2波の回答者に対して、可能な限り行った。その結果、第1波の回答者のうち68.8%、第2波の回答者のうち88.2%の7,349サンプルが有効回答となった。以下では、この3波ともに回答のあった7,349サンプルを調査対象として論ずる。

なお、本稿では紙幅の都合上、第1波、第2波の結果に絞って分析をする。

表 1.2 調査概要

調査対象	東京都在住の男女（N T T コムリサーチ）
調査方法	WEB 調査（パネル調査）
第1波「首都直下地震に関する調査」	
有効回答	10,680 サンプル
調査期間	2019年11月29日～12月1日（キャンペーン放送開始直前）
第2波「首都直下地震に関する調査（2回目）」	
有効回答	8,329 サンプル（1回目と同一パネル、回収率80.0%を目途）
調査期間	2019年12月11～12日（キャンペーン放送終了直後）
第3波「首都直下地震に関する調査（3回目）」	
有効回答	7,349 サンプル（2回目と同一パネル、可能な限り回収）
調査期間	2020年3月2～23日（キャンペーン放送終了直後）

2. デモグラフィック・普段の情報接触状況

本調査の男女、回答者年代、居住地、LINE フォローの有無などは表 2.1 の通りである。なお、「視聴あり」「視聴なし」については3章2節で詳説するが、「パラレル東京」の視聴の有無についてである。回答者は第1波の時点で4つのグループに分けた。それぞれ、「パラレル東京」の視聴を願ひし、かつLINEのグループチャット「NHKドラマ パラレル東京」のフォローを願ひする（Aグループ）、「パラレル東京」の視聴を願ひするのみ（Bグループ）、LINEのグループチャット「NHKドラマ パラレル東京」のフォローを願ひするのみ（Cグループ）、何も願ひしない（Dグループ）とした。これらはあくまで「願ひ」であり、強制力はない。それぞれ、2,670サンプルに対して表示した。だが、結果的に視聴の有無についてはほとんど差がなかった。

本調査は、できるだけ多くの視聴経験者パネルを確保するために割り当てを行っていない

いので、これらの特性は、調査パネルそのものの特性を表しているといえる。

表 2.1 調査対象者の概要

		視聴あり (n=1825)	視聴なし (n=5524)	合計 (N=7349)			視聴あり (n=1825)	視聴なし (n=5524)	合計 (N=7349)
性別	男性	59.5%	51.4%	53.4%	居住地	23区内	69.7%	70.1%	70.0%
	女性	40.5%	48.6%	46.6%		23区外	30.3%	29.9%	30.0%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%		合計	100.0%	100.0%	100.0%
回答者年代	10・20代	4.2%	7.0%	6.3%	LINEフォロワー	あり	20.6%	1.4%	6.2%
	30代	13.4%	17.4%	16.4%		なし	79.4%	98.6%	93.8%
	40代	21.5%	28.6%	26.9%	合計	100.0%	100.0%	100.0%	
	50代	31.3%	29.0%	29.5%	グループ分け	Aグループ	25.7%	24.8%	25.0%
	60代	20.4%	12.9%	14.8%		Bグループ	26.3%	24.1%	24.6%
70代以上	9.2%	5.1%	6.2%	Cグループ		25.0%	25.5%	25.4%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	Dグループ		23.0%	25.6%	25.0%	
				合計	100.0%	100.0%	100.0%		

なお、このパネルのメディアへの接触時間（第1波 Q27）は図 2.1、それらのメディアの信頼感（第1波 Q29）は図 2.2 の通りである。なお、信頼感に関して、利用していないメディアについては、大体の印象で回答していただいた。必ずしも、接触時間と信頼感の度合いが比例しているわけではない。

本調査の前提として、アプリやNHKに関連するホームページを普段見ている人の割合（第1波 Q28）は、図 2.3 の通りである。

また、いわゆる「ながら視聴」（テレビ放送を見ながらスマートフォン、携帯電話を利用することがよくありますか）の程度（第1波 Q31）は図 2.4 の通りである。

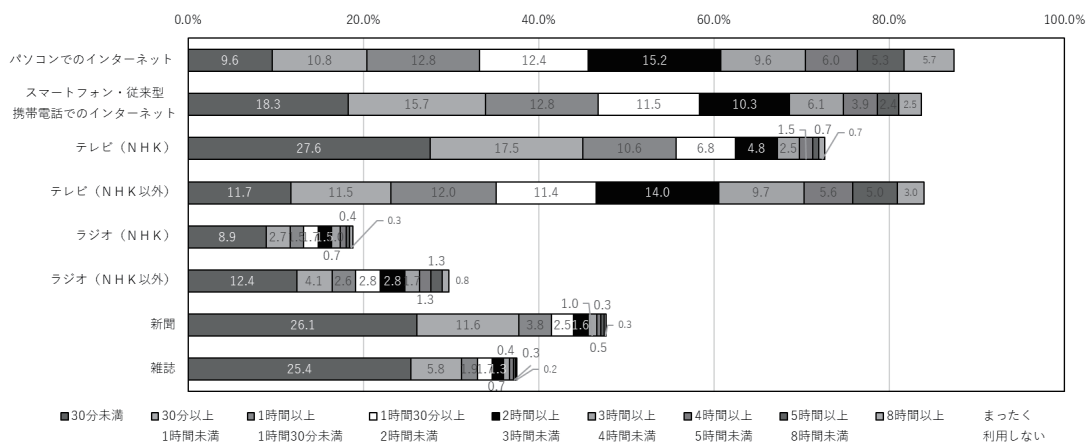


図 2.1 メディアの接触頻度 (※「ラジオ」は radiko 含む)

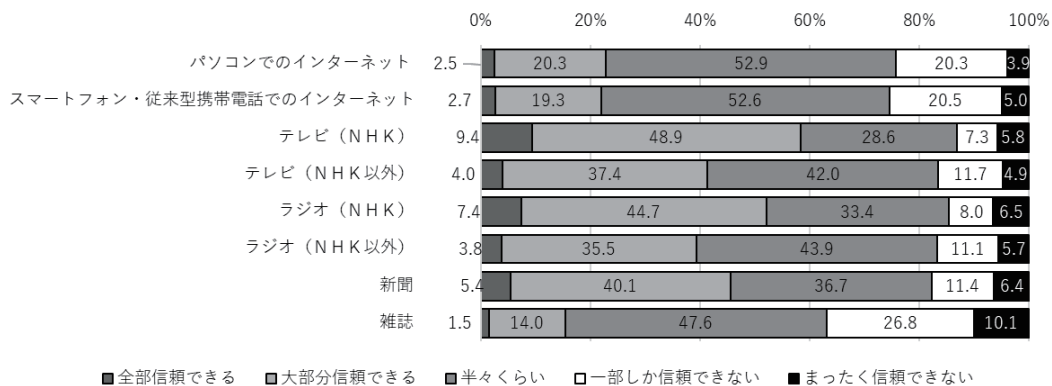


図 2.2 各メディアの情報の信頼できる情報の程度

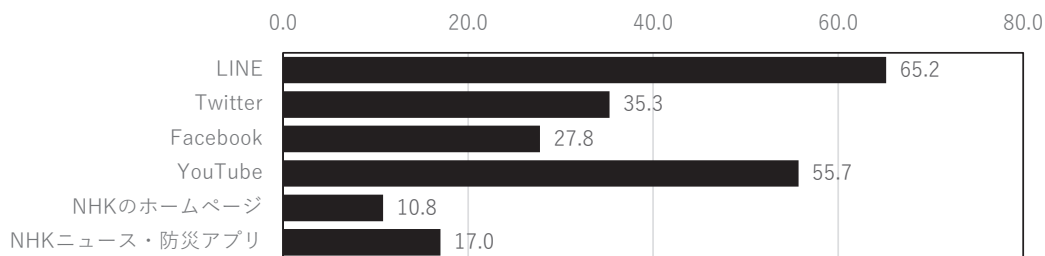


図 2.3 アプリやNHKに関連するホームページの普段の利用状況

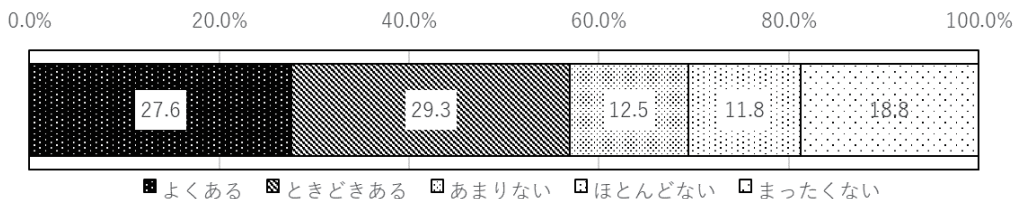


図 2.4 「ながら視聴」の頻度

3. 「パラレル東京」の視聴状況

3.1 番組の認知度

本節では番組視聴状況について述べる。

まず、普段のNHKの番組の視聴状況を問うた結果が図 3.1.1 である（第1波 Q30）。これらの番組は「体感 首都直下ウィーク」と連動した番組である。2019年12月時点での各番組の概要は次の通りである。「NHKスペシャル」は毎週日曜 21時からNHK総合テレビで放送されているドキュメンタリー番組である。シリーズ企画などによっては別の曜

日に派生することもある。「おはよう日本」は曜日によって時間は異なるが、毎朝、NHK総合テレビジョンで放送しているニュース番組である。「あさイチ」は「おはよう日本」の後、連続テレビ小説を挟んで平日朝8時15分から放送される情報番組である。「まいにちスクスク」は毎週月曜から木曜の10時55分から5分間、NHK Eテレ（教育テレビ）で放送されている5分間の育児に関する情報番組である。「ごごナマ」は平日13時からNHK総合テレビで放送されている情報番組である。「シブ5時」は平日16時50分からNHK総合テレビで放送されているニュース番組である。「首都圏ネットワーク」は平日18時10分からNHK総合テレビで放送されている、関東ローカルのニュース番組である。「沼にハマってきいてみた」は毎週月～水曜18時55分からNHK Eテレ（教育テレビ）で放送されているバラエティ番組である。「ハートネットTV」は毎週月～水曜20時からNHK Eテレ（教育テレビ）で放送されている福祉情報番組である。

これらの番組の中で「毎回必ず見る」と「よく見る」の合計が最も高かったのが「NHKスペシャル（26.2%）」であった。「見たことがない」割合も最も低く、32.4%であった。なお、ここで挙げたいずれの番組も「見たことがない」と答えた人は全体の22.9%であった。

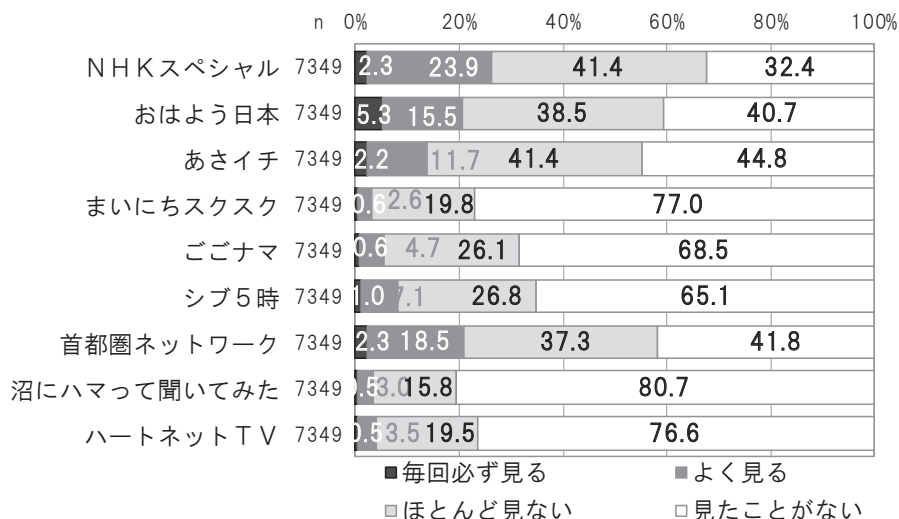


図 3.1.1 普段の番組視聴状況

次に、第1波の時点でのこのキャンペーン放送「体感 首都直下地震ウィーク」の認知度について問うた（第1波 Q32）。その結果、全体の10.7%が「知っている」と答えた。その情報入手元はほとんどがNHKの番組内であった（第1波 Q33）（図 3.1.2）。また、NHKスペシャルを「毎回必ず見る」と答えた人（n=172）の53.5%が、「よく見る」と答えた人

(n=1,753) の 24.5%が「体感 首都直下地震ウィーク」を「知っている」と答えている。次にこのキャンペーン放送内で、NHKスペシャルとして4夜連続で放送される「パラレル東京」の認知度について問うた（第1波 Q34）。その結果、全体の10.0%が「知っている」と答えた。その情報入手元は先と同様にほとんどがNHKの番組内であった（第1波 Q35）（図 3.1.3）。

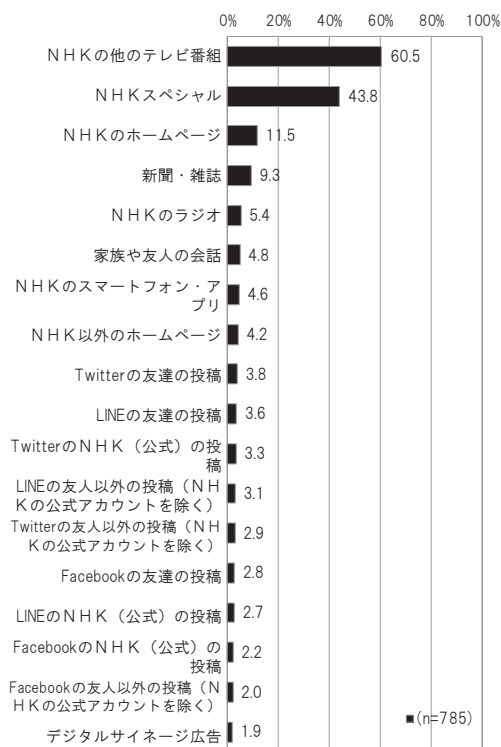


図 3.1.2 「体感 首都直下地震ウィーク」の情報入手手段

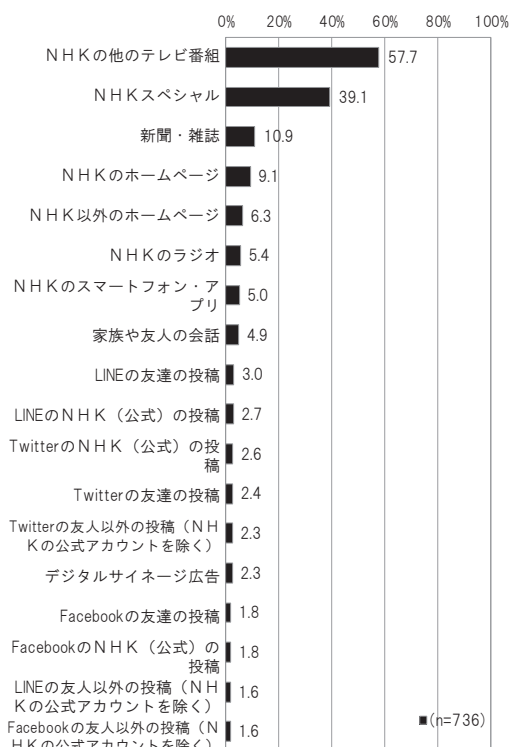


図 3.1.3 「パラレル東京」の情報入手手段

3.2 「パラレル東京」の視聴状況

本節では「パラレル東京」の視聴状況について述べる。

まず、キャンペーン放送「体感 首都直下地震ウィーク」に参加した番組の中で「毎回必ず見る」と「よく見る」の合計が最も高かったNHKスペシャルの視聴状況について、「あなたは、以下のNHK『体感 首都直下地震ウィーク（12/1～12/8）』に関する番組を見ましたか。それぞれの番組について、複数回見た場合には、最初に見た時のことについてお答えください」と問うた（第2波 Q3）。その結果が図 3.2.1 である。「放送中にすべて見た」人はいずれの日も6%前後である。12月1日（日）のレギュラー放送日が最も見た人の割合が高い。4夜連続で放送された「パラレル東京」はいずれの日も約2割程度

の人が見ている。

本稿ではこの「パラレル東京」を12月2日～5日のいずれか1日でも「放送中にすべて見た」「放送中に一部見た」「録画したのを見た」「NHKオンデマンドで見た」と答えた人（n=1,825）を「パラレル東京」を視聴した人として分析を行った（視聴しなかった人はn=5,524）。

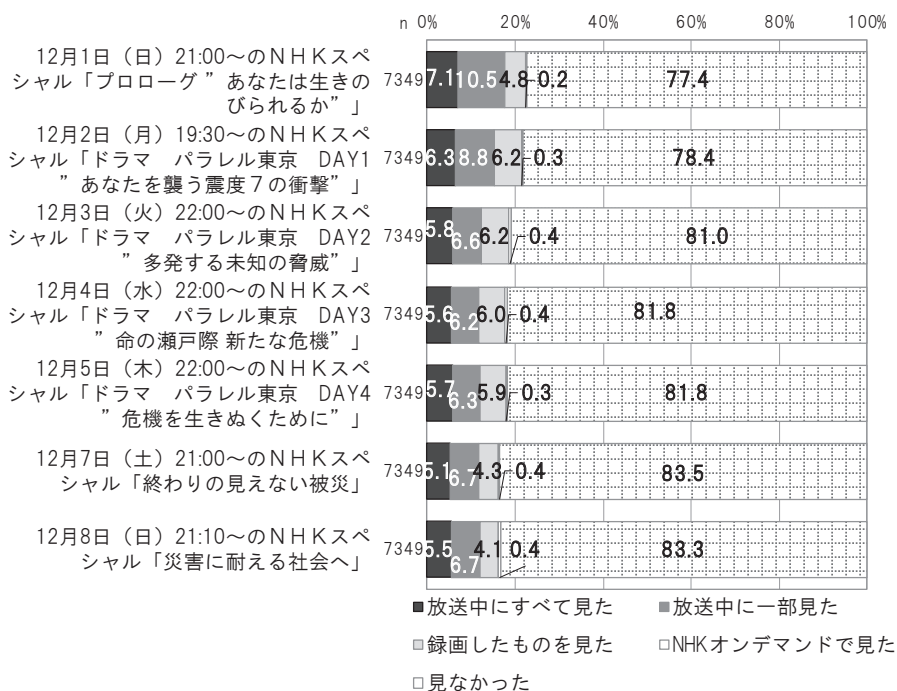


図 3.2.1 視聴状況

この「パラレル東京」視聴のきっかけについて複数回答を問うた結果が図 3.2.2 である（第2波 Q4）。最も多かったのは「NHKスペシャルの予告」で46.7%であった。「テレビをつけたら放送していた」が次いで31.3%、「前回（※第1波調査のこと）のアンケート調査での告知」は14.4%と極端に多いわけではなかった。

また、この「パラレル東京」は番組独自のLINEのグループチャット「NHKドラマパラレル東京」と連動して行われていた。「パラレル東京」ではLINEがコミュニケーションツールとして登場しており、そのLINE上でのやりとり（グループチャット）は視聴者も各々のLINEなどを通じて見ることが出来る仕組みになっていた（図 3.2.3）。時には登場人物からアドバイスを求められる場面があるなど、視聴者もあたかも参加しているかのような体験が出来た。

そこで、こうした LINE のグループチャットへの参加などの「ながら視聴」が行われているか、どのような視聴スタイルかを明らかにするために『ドラマ パラレル東京』を視聴しているときに、以下のようなことをしましたか」と複数回答で問うた（第2波 Q5）。その結果が図 3.2.4 である。約半数の 57.0% が「テレビだけを見ていた」と答えており、「番組に連動した LINE を見ながら、視聴した」とした人は 7.0% と少なかった。スマートフォンなどの他のメディアを見るというよりはむしろ、テレビだけ見る、もしくは家族などと番組について話しながら視聴するスタイルの人が多かった。

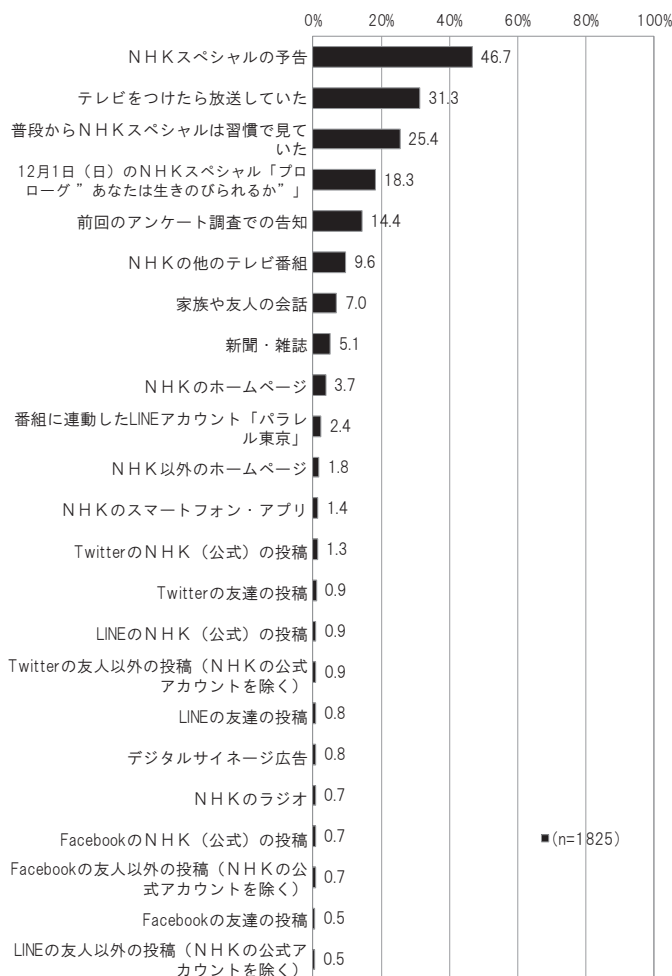


図 3.2.2 「パラレル東京」視聴のきっかけ



図 3.2.3 「パラレル東京」の LINE 画面（出典：筆者撮影）

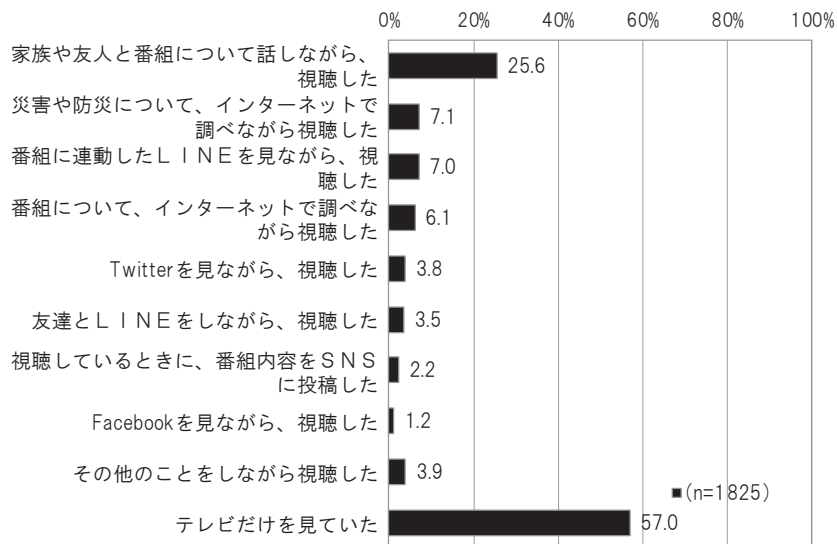


図 3.2.4 「ながら視聴」の有無

3.3 「パラレル東京」の評価

本節では「パラレル東京」を視聴した人 (n=1,825) の評価を述べる。

まず、「パラレル東京」を視聴して、印象に残ったことを問うた (第2波 Q6)。その結果が図 3.3.1 である。最も多かったのは「火災旋風」で 22.1%であった。この火災旋風は発災 2 日目に扱われた。この現象は、ときに高さ 200m を超える巨大な炎の渦が竜巻のように家屋や人を吹き飛ばし、街を焼き尽くす現象のことで、移動し、火の粉を遠くまでまき散らすことから延焼を拡大させるもの (NHK ホームページ, 2020)、として番組内で VFX を用いて描かれた。火災とは異なり、これまでほとんどの人が映像などでも実際に見たことがない現象であり、大々的に描かれた結果、人々の印象に残ったと考えられる。ただし、全体として、どれか一つに集中しているというより、分散している。

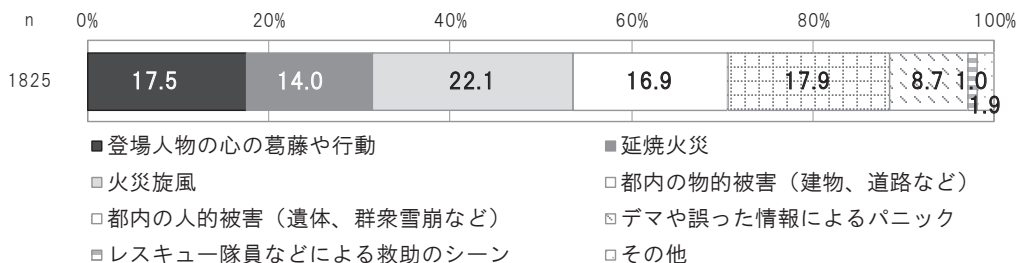


図 3.3.1 「パラレル東京」でもっとも印象に残ったこと

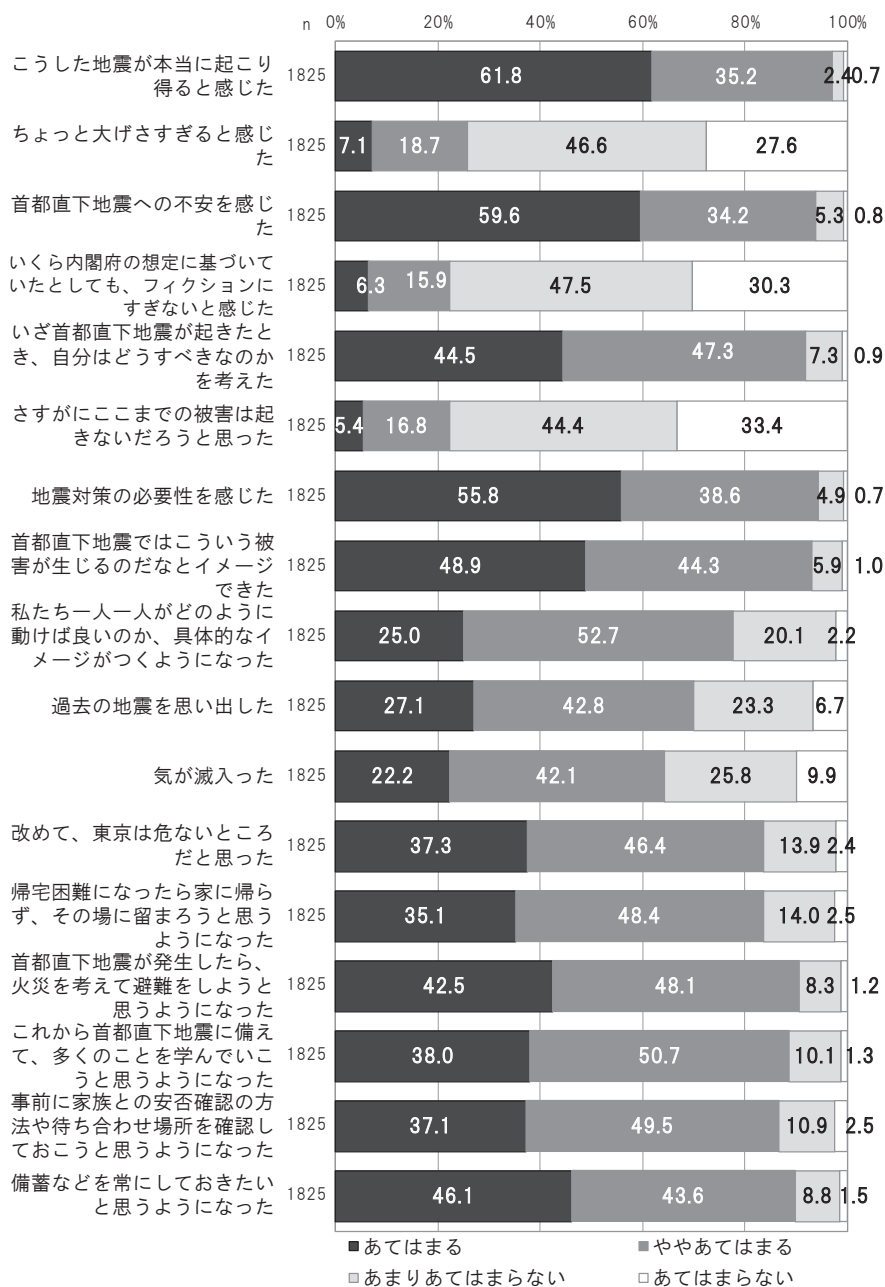


図 3.3.2 「パラレル東京」の感想

次に、どのような心理状態になったかを「あなたは『ドラマ パラレル東京』をご覧になって、どのようなことを感じましたか」と問うた（第2波 Q7）。ここでは「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4点尺度でそれぞれ回

答していただいた。その結果が図 3.3.2 である。全体として「こうした地震が本当に起こり得ると感じた」「首都直下地震ではこういう被害が生じるのだなとイメージできた」など、番組への肯定的な反応が目立つ。また、「パラレル東京」では火災に関するシーンが多くあったのだが、「首都直下地震が発生したら、火災を考えて避難をしようと思うようになった」に肯定的な反応も非常に多かった。一方で、「さすがにここまでの被害は起きないだろうと思った」「いくら内閣府の想定に基づいていたとしても、フィクションにすぎないと感じた」といったネガティブな反応は少数であった。

3.4 LINE のグループチャットの確認状況と評価

本節では、LINE のグループチャットについても同様に確認状況と評価を問うたので、その結果を述べる。

全員に対して LINE のグループチャットの視聴状況について「あなたは、『ドラマ パラレル東京』に連動した LINE のグループチャットを、この 1 週間にどの程度見ましたか。見ていなくて、フォローしていない場合は、『フォローしていない』を選択してください」と問うた（第 2 波 Q8）。その結果が図 3.4.1 である。75.8% の人が「フォローしていない」と答えている。

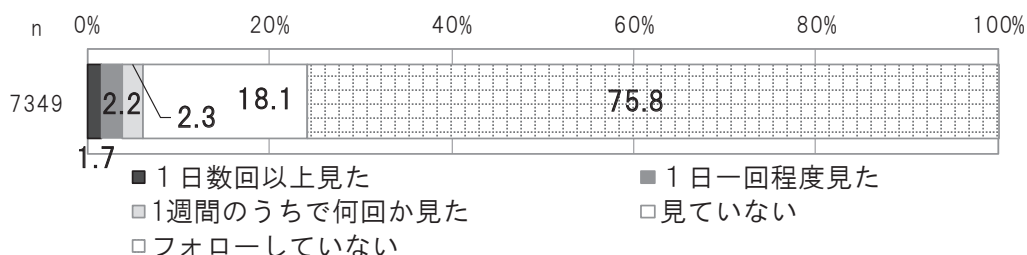


図 3.4.1 「パラレル東京」の感想

以下では、ここで LINE のグループチャットをフォローしていた人 (n=1,782) について述べる。

まず、LINE のグループチャットをフォローしたきっかけを問うた（第 2 波 Q9）。その結果が図 3.4.2 である。最も多かったのは「前回のアンケート調査での告知」で 40.5% であった。次いで「NHKスペシャル」で 32.7% であり、テレビからの流入は約 3 割程度であった。

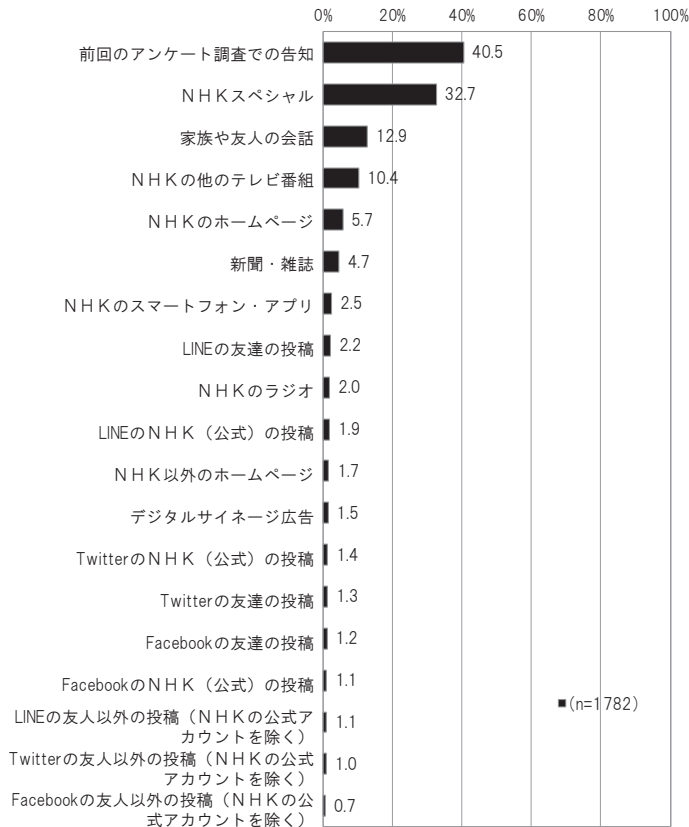


図 3.4.2 LINE のグループチャットフォローのきっかけ

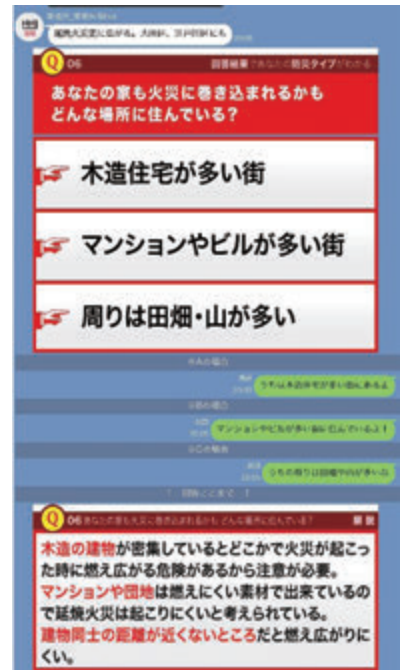


図 3.4.3 LINE のグループチャットの設問画面（デモ画面）

では、実際にフォローした人の印象はどうであったか。次に、「あなたは、『ドラマ パラレル東京』に連動した LINE のグループチャットをご利用になって、いかがでしたか」と複数回答で問うた（第 2 波 Q11）。その結果が図 3.4.4 である。最も多かったのは「防災行動につながった」で 37.1% であった。このグループチャットでは「あなたの防災タイプ診断」という試みが行われた（図 3.4.3）。グループチャットの中で 1 日に何回か登場人物たちからアドバイスを求められたり、質問を投げかけられる。たとえば「あなたの家も火災に巻き込まれるかも、どんな場所に住んでいる？」と問われ、提示された選択肢に回答をすると、「木造の建物が密集しているところかで火災が起こった時に燃え広がる危険があるから注意が必要」などと回答に対する評価が提示される。最終的に、その回答結果に基づいて、回答者が災害時にどのような行動を取りがちか、簡単な診断結果がフィードバックされることとなっていた。こうした設問があったことが「防災行動につながった」と答えた人が増加した一因と考えられる。また、「ドラマと連動したチャットは新規性があり、好奇心が満たされた」や「ドラマの登場人物とやり取りしているようで、親近感がわいた」などのドラマと連動したことに対して評価していたのはいずれの項目も 1 割程度であった。

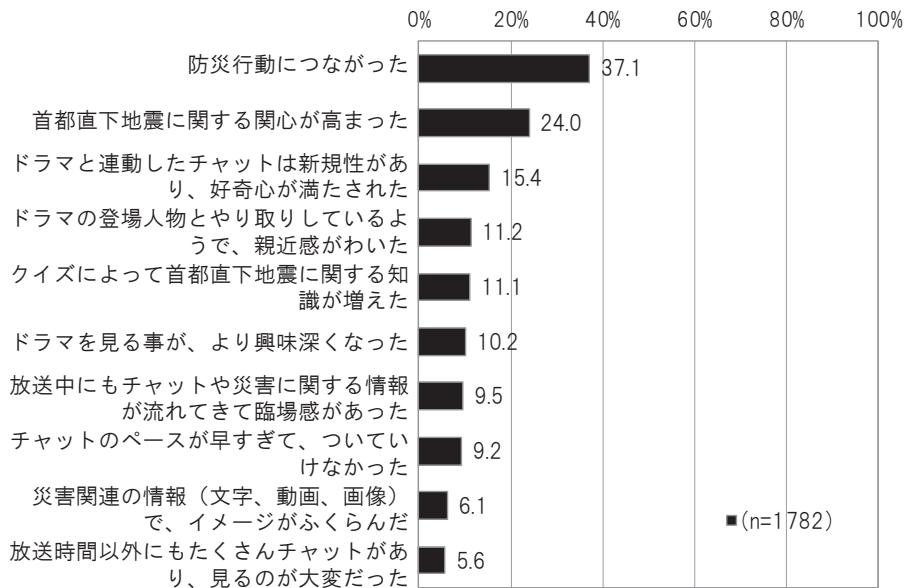


図 3.4.4 LINE のグループチャット的印象

最後に、前節と同様に、グループチャットを見てどのような心理状態になったかを「あなたは、『ドラマ パラレル東京』に連動した LINE のグループチャットをご覧になって、どのようなことを感じましたか」と問うた（第 2 波 Q12）。その結果が図 3.4.5 である。

全体として「パラレル東京」と比較して反応が弱い（図 3.3.2）。多くの項目で「あてはまらない」「あまりあてはまらない」の割合が増加している。コンテンツへの効果を問う項目（たとえば「こうした地震が本当に起こり得ると感じた」「首都直下地震ではこういう被害が生じるのだなとイメージできた」など）では「あてはまる」の割合が「パラレル東京」よりも減少している。これはテレビという映像メディアの有効性を示すものであろう。LINE のグループチャットでは当然、被災状況に関する動画も流れているが、常に見ているわけでもない（図 3.4.1）。テレビの方が心理面により影響を及ぼしていると考えられる。

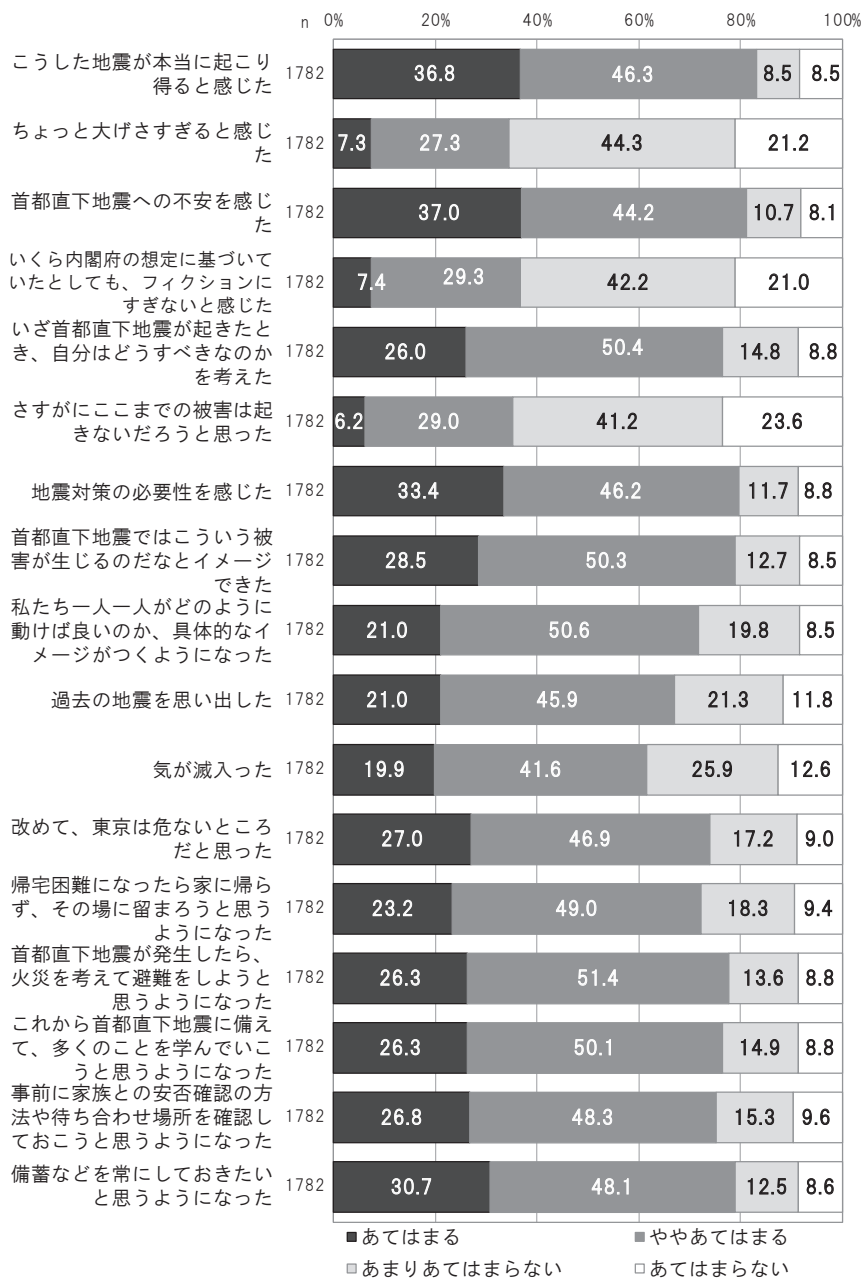


図 3.4.5 LINE グループチャットの感想

4. 態度や行動への番組効果

4.1 首都直下地震に対する態度の変化

本節では首都直下地震に対する態度について述べる。

まず、今回のキャンペーン放送にあたり、NHKは「防災減災の必要性を『自分ごと』

として捉えることを目的」としている（NHKホームページ，2019）。そこで、この目的が達成されるかを「あなたは、首都直下地震によって被害を受けることを『自分ごと』としてとらえていますか」と直接的に問い、「強く『自分ごと』としてとらえている」「やや『自分ごと』としてとらえている」「どちらともいえない」「あまり『自分ごと』としてとらえていない」「全く『自分ごと』としてとらえていない」の5点尺度で第1波、第2波両方で回答してもらった（第1波 Q17、第2波 Q28）。その結果を番組視聴の有無で分析をすると、番組を視聴した人（36.5%→48.8%）は番組を視聴していない人（22.7%→25.6%）と比較して「強く『自分ごと』としてとらえている」の割合が増加している（図 4.1.1）。

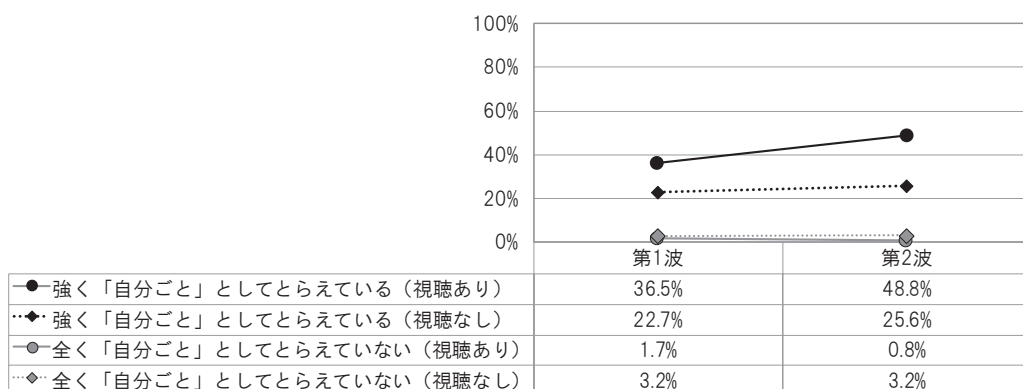


図 4.1.1 首都直下地震を「自分ごと」ととらえているか

次に、自分ならびに周囲の人の意識の変化である。

Davison(1983)はテレビ番組などの接触により、自分はメディアからの影響を受けにくいと考えるが、自分以外の他者（第三者）は影響を受けやすいと考える、という他者へのマスメディアの影響を過大視する第三者効果仮説を提唱した。そうした仮説を踏まえ、「あなたは、『首都直下地震ウィーク』のキャンペーンを見聞きして、あなたご自身および周囲の人の防災に対する意識は高まったと思いますか」と問うた（第2波 Q42）。その結果が図 4.1.2（回答者自身）ならびに図 4.1.3（周囲の人）である。「パラレル東京」を視聴した人の94.7%が回答者自身の「意識が高まった」と答えており、視聴していない人の60.6%より3割以上多い。また、回答者自身が「非常に意識は高まったと思う」が26.2%である一方、周囲の人が「非常に意識は高まったと思う」は12.2%と、影響を受けにくいと考えている。

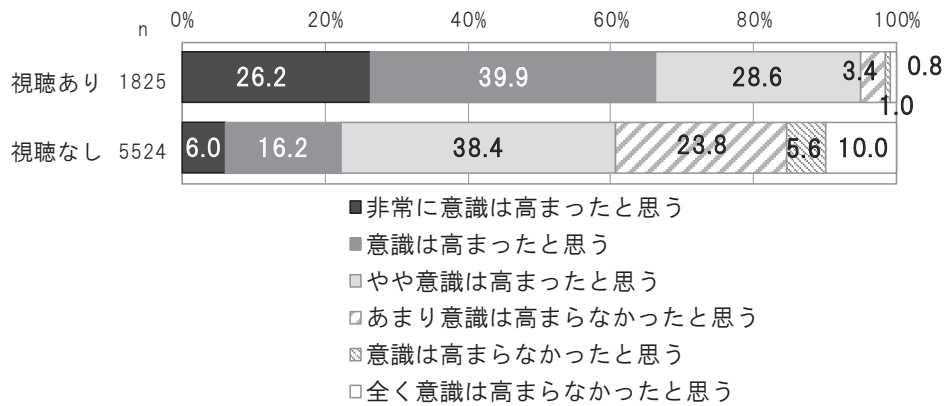


図 4.1.2 回答者自身の防災に対する意識の高まり

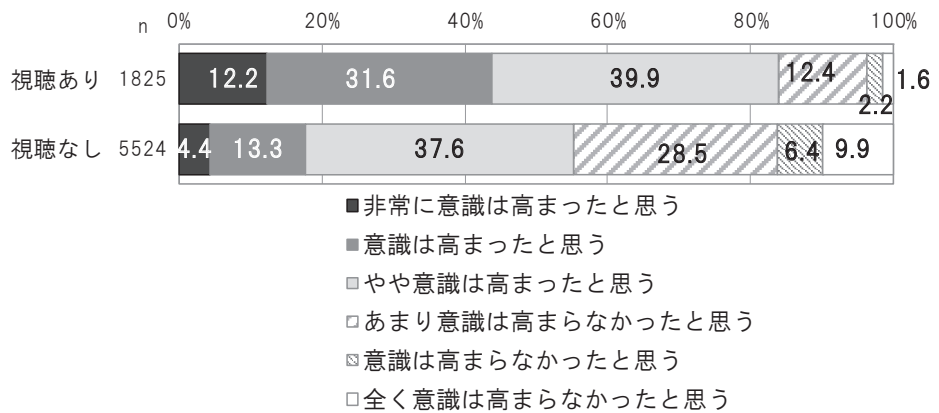


図 4.1.3 周囲の人の防災に対する意識の高まり

さらに、「非常に意識は高まったと思う」=5点、「意識は高まったと思う」=4点、「やや意識は高まったと思う」=3点、「あまり意識は高まらなかったと思う」=2点、「意識は高まらなかったと思う」=1点、「全く意識は高まらなかったと思う」=0点として得点化した結果が表 4.1.2 である。「パラレル東京」を視聴した人（3.8点）の方が視聴しなかった人（2.6点）よりも有意に意識が高くなった（U検定）。そして、それは回答者本人だけではなく、周囲の人に対する評価においても同様である（それぞれ3.3点と2.5点）。また、視聴した人は回答者自身の意識に関する得点の方が（3.8点）、周囲の人の意識に関する得点（3.3点）よりも高く、第三者効果がみられなかった。

表 4.1.1 視聴の有無と防災に対する意識の関係 (***) : $p < .001$

	平均値 (SD)		Mann-Whitney の U	有意確率
	視聴あり (n=1825)	視聴なし (n=5524)		
回答者自身	3.8点 (0.9)	2.6点 (1.6)	2258901.50	***
周囲の人	3.3点 (1.0)	2.5点 (1.5)	3066059.50	***

4.2 災害に関する意見の変化

本節では Noelle-Neumann (1982=2013) の沈黙の螺旋仮説を実証するために設定した設問の単純集計を示す。沈黙の螺旋理論とは時間の経過とともに少数派意見の保持者が多数派からの反対をおそれて意見を表明しなくなり、そこにマスメディアが特定の「多数派意見」を提示することで多数派の意見が大きくなり、ますます少数派は沈黙してしまう、という循環が螺旋状に生じ、それが多数派に反対する人が 0 になるまで続く、というものである。本研究では安野 (2006) を基に、災害に関して意見が分かれる設問を設定した (第 1 波 Q7~15、第 2 波 Q18~26)。両極端な 2 つの意見を提示し、それぞれに対して①回答者自身の意見 (設問文は「あなた自身は A と B のどちらの意見に近いですか」、②マスメディアの論調 (設問文は「マスメディアの論調は A と B のどちらの意見に近いですか」、③周囲他者の意見 (設問文は「世間の人はどうに考えている人が多いと思いますか」) をそれぞれ問うた。選択肢は、①、②は「A」「A に近い」「どちらかといえば A」「どちらかといえば B」「B に近い」「B」、③は「圧倒的に A の意見の人が多く」「A の意見の人が多く」「どちらかといえば A の意見が多い」「どちらかといえば B の意見が多い」「B の意見の人が多く」「圧倒的に B の意見の人が多く」の 6 点尺度で回答していただいた。以下ではこの 6 点尺度を順位尺度とみなし、分析を行う。

(1) 災害への向き合い方

まずは、災害への向き合い方である。自分自身がハザードそのものから生き延びることを考えるべきか、それとも被災者支援、復興などを考えるべきか、を明らかにするため「災害時の対応、救援活動について、次のような二つの意見があります。A. 災害時、まず自分や家族が助かるための対策を考えておくことが重要である/B. 災害時、いかに被災者を支援したり、ボランティアをしたりするかが重要である」と 2 つの意見を提示して問うた。①回答者自身の意見、②マスメディアの論調、③周囲他者の意見の結果に関して、視聴の有無で差が生じるかをみた結果がそれぞれ順番に図 4.2.1 から図 4.2.6 である。

「パラレル東京」視聴の有無に関わらず、全ての項目で第 1 波と第 2 波の間で有意な差がみられず (Wilcoxon の符号付き順位検定)、意見の割合はほとんど変化がなかった。

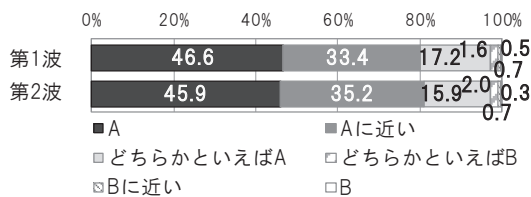


図 4.2.1 災害時の対応、救援活動に関する回答者の意見（視聴あり、n=1,825、n.s.）

（Wilcoxon の符号付き順位検定，n.s.：有意差なし、*：p<.05、**：p<.01、***：p<.001）

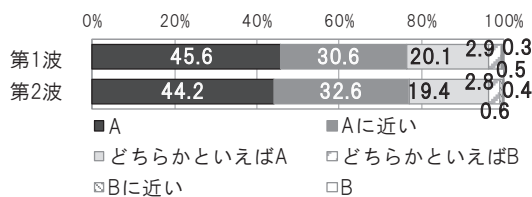


図 4.2.2 災害時の対応、救援活動に関する回答者の意見（視聴なし、n=5,524、n.s.）

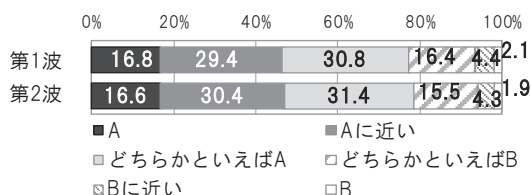


図 4.2.3 災害時の対応、救援活動に関するマスメディアの論調（視聴あり、n=1,825、n.s.）

（Wilcoxon の符号付き順位検定，n.s.：有意差なし、*：p<.05、**：p<.01、***：p<.001）

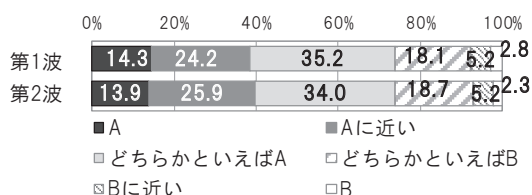


図 4.2.4 災害時の対応、救援活動に関するマスメディアの論調（視聴なし、n=5,524、n.s.）

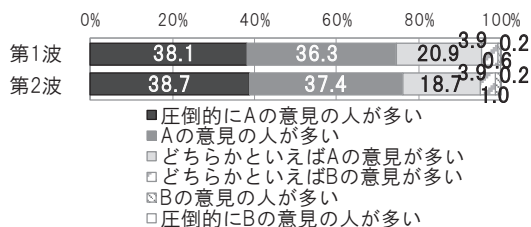


図 4.2.5 災害時の対応、救援活動に関する他者の意見（視聴あり、n=1,825、n.s.）

（Wilcoxon の符号付き順位検定，n.s.：有意差なし、*：p<.05、**：p<.01、***：p<.001）

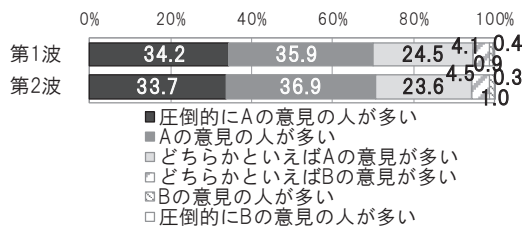


図 4.2.6 災害時の対応、救援活動に関する他者の意見（視聴なし、n=5,524、n.s.）

(2) 災害対策への考え方

次に、災害対策への考え方である。ハザードそのものから生き延びることを考えるべきか、それとも、ハザードによる生死は分からないので（もしくは自分が死ぬとは考えたくない）、生き延びた後の避難生活を考えるべきか、を明らかにするため「災害時の事前対応、事後対応について、次のような二つの意見があります。A. 災害が起こってしまったからでは遅いので、災害発生前の対策を考えておくことが重要である／B. 災害は防げないのだから、災害発生後の対応を考えておくことが重要である」と2つの意見を提示して問

うた。①回答者自身の意見、②マスメディアの論調、③周囲他者の意見の結果に関して、視聴の有無で差が生じるかをみた結果がそれぞれ順番に図 4.2.7 から図 4.2.12 である。

「パラレル東京」を視聴していない人は全ての項目で第1波と第2波の間で有意な差がみられず、意見の割合にほとんど変化がなかった (Wilcoxon の符号付き順位検定)。一方、「パラレル東京」を視聴した人の中では第1波から第2波の間で有意な差がみられた。回答者が「A (災害が起こってしまってからでは遅いので、災害発生前の対策を考えておくことが重要である)」と答える人の割合が若干、増加している (図 4.2.7)。同様にマスメディアの論調も「A」ならびに「Aに近い」と答える人の割合が増加している。これは、「パラレル東京」が地震発生から4日間を描いており、災害発生後の対応、つまり避難生活にはほとんど言及がなされなかったことが影響していると考えられる。「パラレル東京」によって「災害が起こってしまってからでは遅いので、災害発生前の対策を考えておくことが重要である」という回答者の意見ならびにマスメディアの論調の割合が増加したと言える。ある種、番組の効果と言えよう。

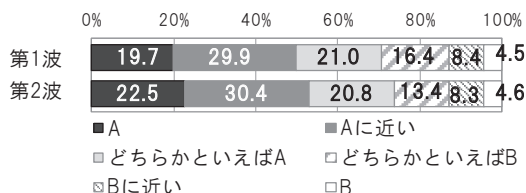


図 4.2.7 発生前の対策か発生後の対応に関する回答者の意見 (視聴あり、n=1,825、*)

(Wilcoxon の符号付き順位検定, n. s. : 有意差なし, * : p<.05, ** : p<.01, *** : p<.001)

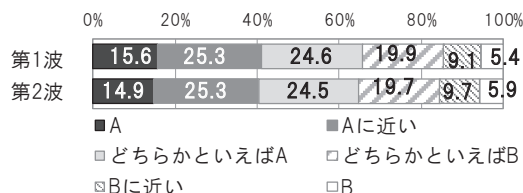


図 4.2.8 発生前の対策か発生後の対応に関する回答者の意見 (視聴なし、n=5,524、n. s.)

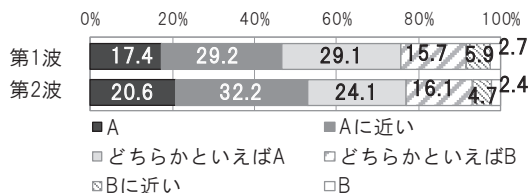


図 4.2.9 発生前の対策か発生後の対応に関するマスメディアの論調 (視聴あり、n=1,825、***)

(Wilcoxon の符号付き順位検定, n. s. : 有意差なし, * : p<.05, ** : p<.01, *** : p<.001)

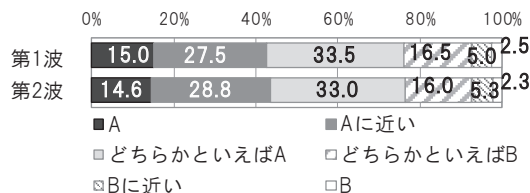


図 4.2.10 発生前の対策か発生後の対応に関するマスメディアの論調 (視聴なし、n=5,524、n. s.)

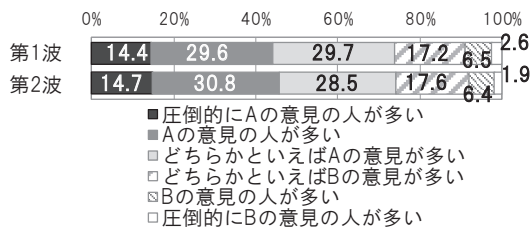


図 4.2.11 発生前の対策か発生後の対応に関する他者の意見（視聴あり、n=1,825、n. s.）
 （Wilcoxon の符号付き順位検定，n. s. : 有意差なし，* : p<.05，* * : p<.01，* * * : p<.001）

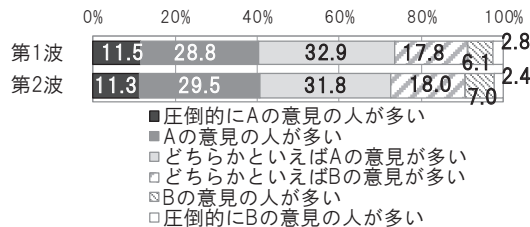


図 4.2.12 発生前の対策か発生後の対応に関する他者の意見（視聴なし、n=5,524、n. s.）
 （Wilcoxon の符号付き順位検定，n. s. : 有意差なし，* : p<.05，* * : p<.01，* * * : p<.001）

（3）自助・公助

最後に、自助・公助への考え方である。近頃、政府などの公共機関を中心に災害対策を行うことの限界があることから（内閣府，2018）、国民ひとりひとりが防災意識を持ち、自らの命は自らが守ることが求められるようになってきている。そこで、災害対策を誰が中心的に実施すると考えられているのかを明らかにするため、「災害対策を誰が中心的に実施するかについて、次のような二つの意見があります。A. 災害時には、自治体や政府は何もできないので、まず自分や家族で自分たちの身を守るべきだ／B. 災害時には、まず公的な機関である自治体や政府が住民の身を守るために何とかすべきだ」と2つの意見を提示して問うた。①回答者自身の意見、②マスメディアの論調、③周囲他者の意見の結果に関して、視聴の有無で差が生じるかをみた結果がそれぞれ順番に図 4.2.13 から図 4.2.18 である。

こちらはほとんどすべての項目に関して、第1波と第2波の間で有意な差がみられた（Wilcoxon の符号付き順位検定）。いずれの項目も「A（災害時には、自治体や政府は何もできないので、まず自分や家族で自分たちの身を守るべきだ）」という自助の考え方に関して、有意に増加している。前項と同様に「パラレル東京」を視聴した人が①回答者自身の意見、②マスメディアの論調に関して自助の意見が有意に増加になることは番組の影響と考えられる。だが、それだけではなく、③周囲他者の意見、ならびに「パラレル東京」を視聴していない人の①回答者自身の意見、②マスメディアの論調に対しても自助の意見が有意に増加している。だが、その要因についてここからは読み取れない。これについて明らかにすることは今後の課題ともいえる。

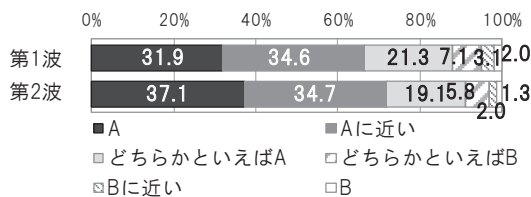


図 4.2.13 自助・公助に関する回答者の意見（視聴あり、n=1825、***）

（Wilcoxon の符号付き順位検定，n.s.：有意差なし、*：p<.05、**：p<.01、***：p<.001）

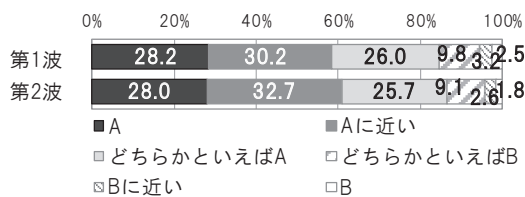


図 4.2.14 自助・公助に関する回答者の意見（視聴なし、n=5524、***）

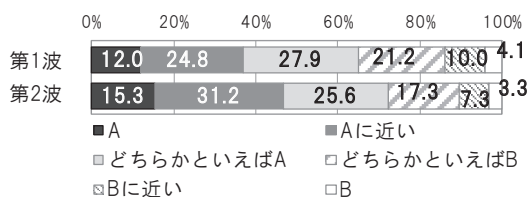


図 4.2.15 自助・公助に関するマスメディアの論調（視聴あり、n=1825、***）

（Wilcoxon の符号付き順位検定，n.s.：有意差なし、*：p<.05、**：p<.01、***：p<.001）

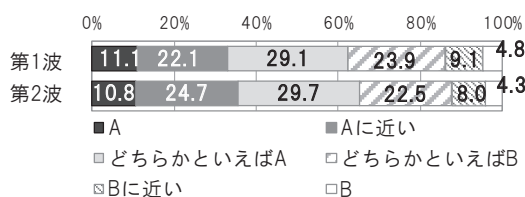


図 4.2.16 自助・公助に関するマスメディアの論調（視聴なし、n=5524、***）

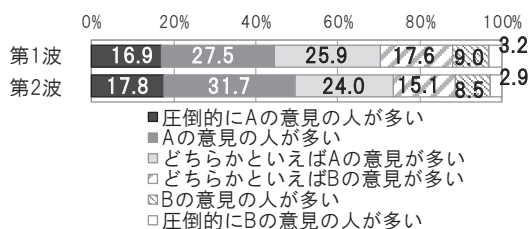


図 4.2.17 自助・公助に関する他者の意見（視聴あり、n=1,825、***）

（Wilcoxon の符号付き順位検定，n.s.：有意差なし、*：p<.05、**：p<.01、***：p<.001）

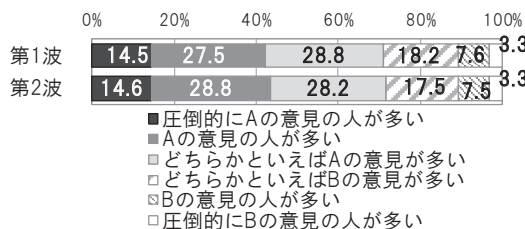


図 4.2.18 自助・公助に関する他者の意見（視聴なし、n=5,524、n.s.）

4.3 知識の変化

本節では知識の変化について述べる。

マスコミュニケーションの効果研究の一つに知識ギャップ仮説がある。これは社会にマスメディアからの情報が流入すると、社会経済的地位の高い層から情報を取得して知識量を増やす。さらに、その知識増大のペースが速いことから、社会経済的地位の低い層との知識格差が増加する傾向があるというものである（Tichenor et al, 1970）。こうした考えを本研究にあてはめるならば、首都直下地震に関する知識を持っている人ほど「パラレル

東京」を視聴し、視聴した人ほどさらに首都直下地震に関する知識を手にすることで、その後も知識を増加させ、時間の経過とともに視聴していない人との知識の差が拡大する、と考えられる。

そこでまず、地震や火災に関する用語を10項目用意し、「知っている」「知らない」で単純に認知を問うた。第1波と第2波それぞれで問うており（第1波Q2、第2波Q13）、その結果がそれぞれ図4.3.1ならびに図4.3.2である。「火災旋風」や「群衆雪崩」といった「パラレル東京」のテーマとなった用語の認知率が上昇していることがわかる。

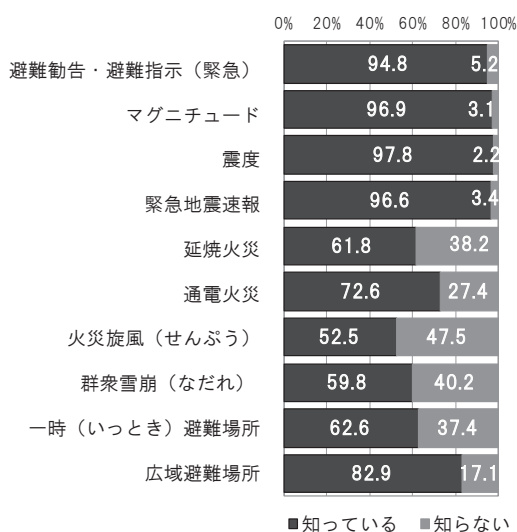


図 4.3.1 地震・火災に関する用語の認知度（第1波、n=7,349）

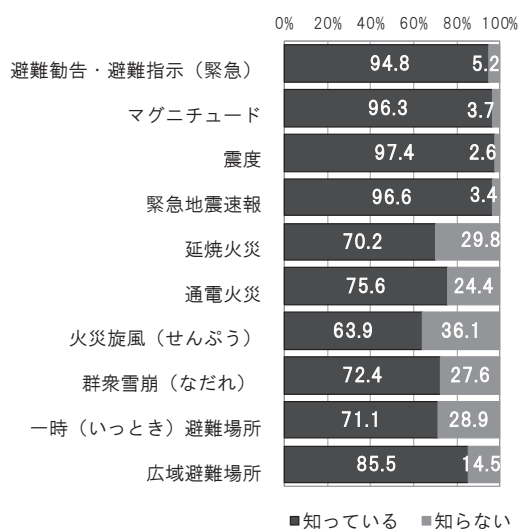


図 4.3.2 地震・火災に関する用語の認知度（第2波、n=7,349）

この中でも特に第1波調査で認知率の低かった「火災旋風」に関して、第1波から第2波の認知率の変化を「パラレル東京」の視聴の有無で差をみたのが図4.3.3である。そもそも「火災旋風」という用語を認知しているような人が「パラレル東京」を視聴しており、第2波では視聴した人の認知度は約20%上昇し、視聴しなかった人との認知度の差がさらに増大した。ただし、視聴しなかった人でも増加している。また、紙幅の都合上省略するが、「延焼火災」、「通電火災」、「群衆雪崩」、「一時避難場所」、「広域避難場所」の認知率に関しても同様の傾向であった。

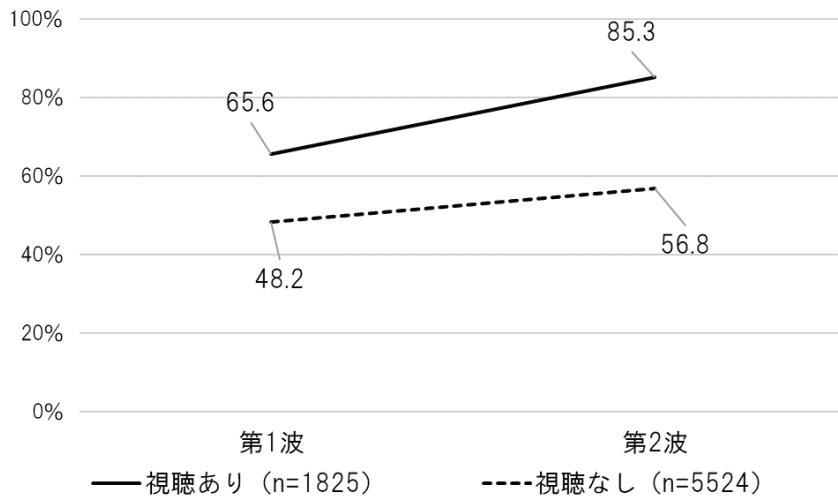


図 4.3.3 火災旋風の認知度の変化

次に、火災に関する知識について、さらに具体的に問うた。「あなたは火災について、次のことを知っていますか」として、9つの項目に対して、「知っている」「知らない」「意味がよく分からない」の3択で回答していただいた（第1波 Q6、第2波 Q17）。ここで設定した項目は首都直下地震に備えるうえで重要と考えられる項目を筆者らが設定したものである。第1波と第2波それぞれで問うており、その結果がそれぞれ図 4.3.4 ならびに図 4.3.5 である。ほとんどの項目で、第1波から第2波にかけて「知っている」割合が増加している。

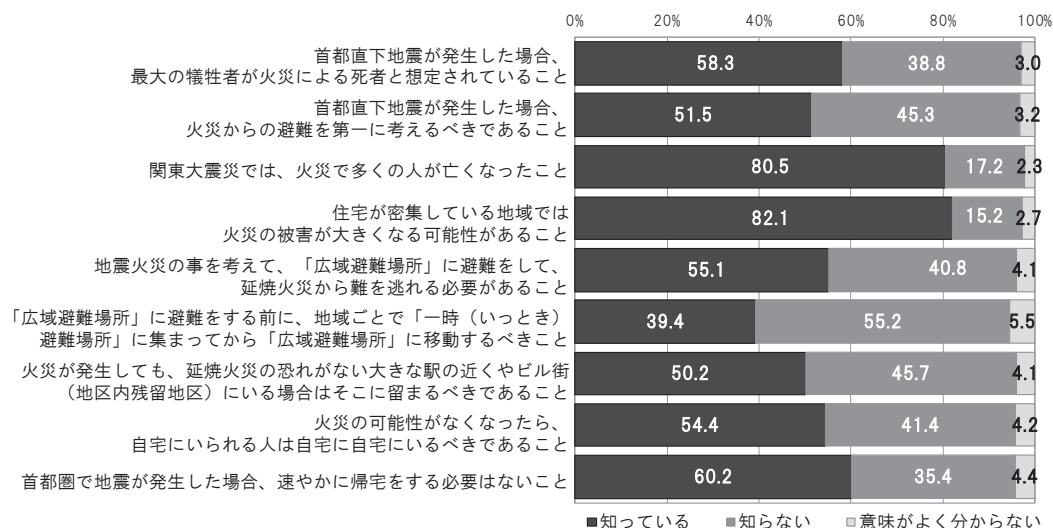


図 4.3.4 火災に関する知識（第1波、n=7,349）

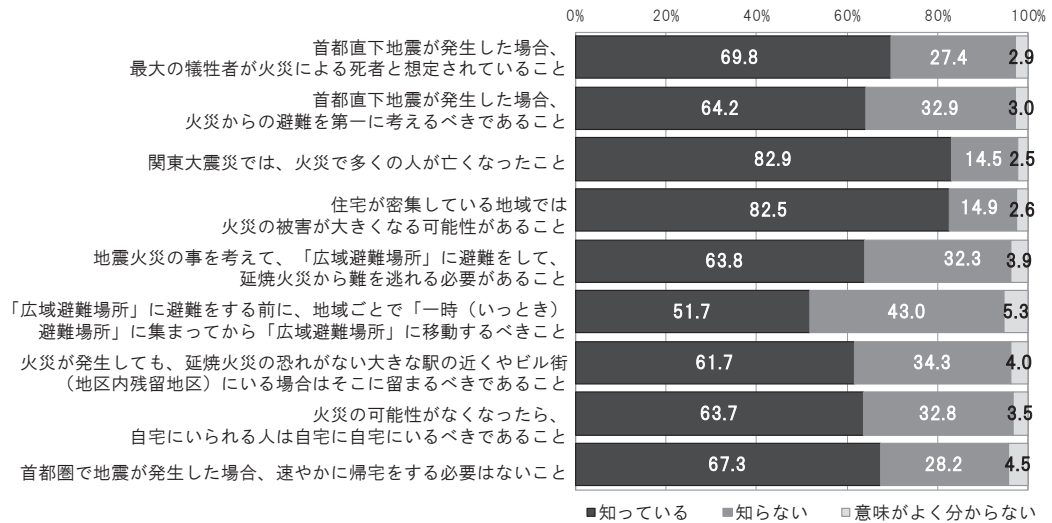


図 4.3.5 火災に関する知識（第2波、n=7,349）

そこでさらに、「パラレル東京」を視聴した効果を明らかにするために、この9つの項目に対して「知っている」と答えた数を算した。その平均値が第1波の時点では、「パラレル東京」を視聴した人は6.4個、「パラレル東京」を視聴していない人は5.0個であった。これも先と同様に火災に関する知識がある人が「パラレル東京」を視聴している。これらの差はU検定の結果、有意な差であった（表4.3.6）。そして第2波になると、「パラレル東京」を視聴した人は7.5個、「パラレル東京」を視聴していない人は5.7個であった。こちらも先と同様に視聴した人の方が知識を多く得ており、知識の差が開いている。これらの差もU検定の結果、有意な差であった（表4.3.6）。つまり、知識ギャップがみられた。

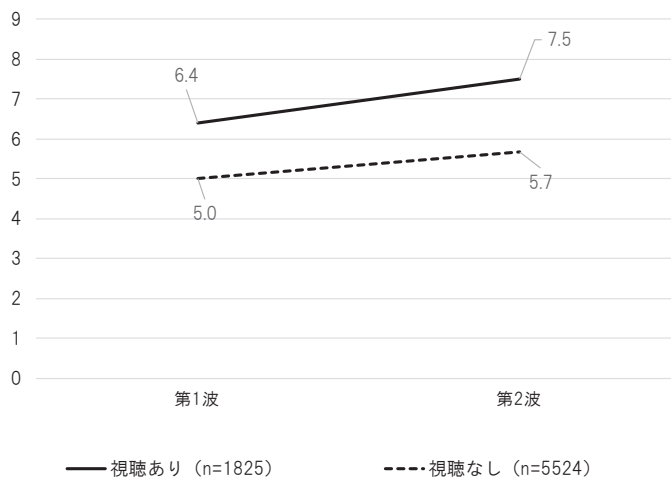


図 4.3.6 火災に関する知識の変化

表 4.3.6 視聴の有無と火災に関する知識の関係 (***) : p<.001)

	平均値 (SD)		Mann-Whitney の U	有意確率
	視聴あり (n=1825)	視聴なし (n=5524)		
第1波	6.4個 (6.8)	5.0個 (9.6)	3784119.50	***
第2波	7.5個 (4.8)	5.7個 (10.2)	3338224.50	***

以上のように、首都直下地震に関する知識を持っている人ほど「パラレル東京」を視聴し、視聴した人ほどさらに首都直下地震に関する知識を手にする事で、視聴していない人との知識の差が拡大したことが実証された。今後は、時間が経過した後知識がどのような推移をたどるのかを明らかにする必要がある。

4.4 視聴後の行動

本節では「パラレル東京」を視聴した人の視聴後の防災に関する行動について述べる。

まず、首都直下地震に関する情報への接触度である。第2波の調査で「あなたは12月に入ってから、首都直下地震に関する情報に接しましたか」と複数回答で問うた(第2波Q36)。その結果が図4.4.1である。いずれの項目でも「パラレル東京」を視聴した人の方が多い(検定は参考として記載)。「パラレル東京」を視聴していない人でも43.4%の人が何かしらの首都直下地震に関する情報に接触していることがわかる。

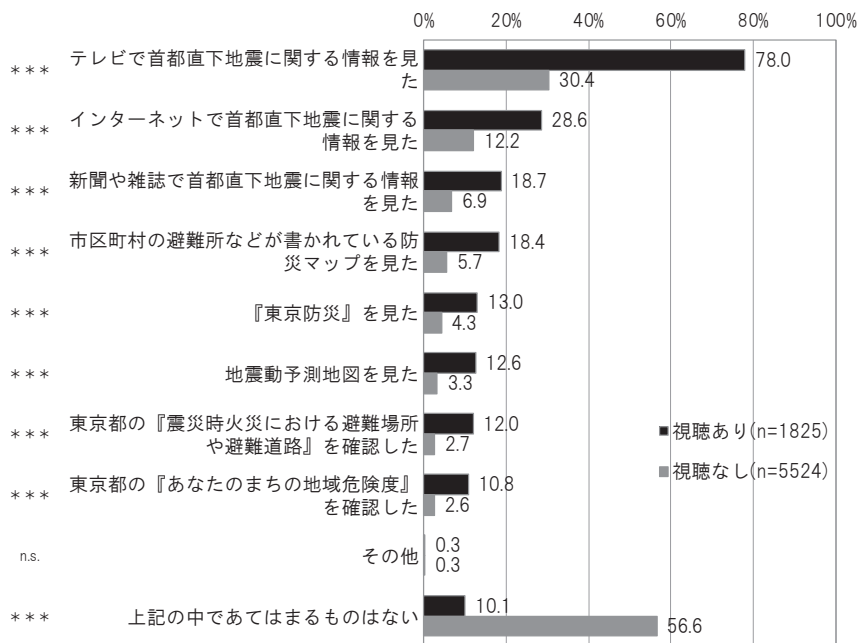


図 4.4.1 首都直下地震に関する情報接触度

(χ^2 検定, n. s. : 有意差なし、* : p<.05、** : p<.01、*** : p<.001)

次に具体的な地震対策行動である。「パラレル東京」を視聴した人はどれほど、対策行動をとったのか。第2波調査は、番組終了からすぐの調査であったため、比較的、短時間で可能であり、経済的コストが低いものに絞って「あなたは12月に入ってから、次のような地震対策の中で、新たに行うようになったもの、もしくは改めて行ったものはありますか」と複数回答で問うた（第2波 Q15）。その結果が図 4.4.2 である。いずれの項目も「パラレル東京」を視聴した人の方が多（検定は参考として記載）。最も多かったのは「水の備蓄」で視聴した人の約半数が行っていた。多くの人が何かしらの地震対策行動をとったことがわかる。

以上のように、「パラレル東京」を視聴した人には態度や意見、知識、行動の面で視聴していない人と比較して、一定の効果がみられた。

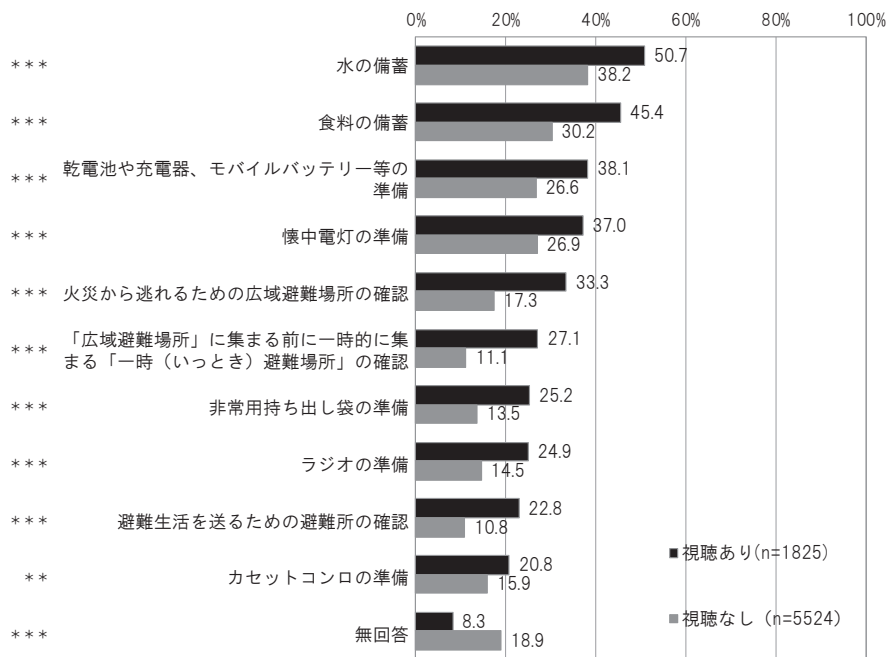


図 4.4.2 12月に入ってからの地震対策行動

(χ^2 検定, n. s. : 有意差なし、* : $p < .05$ 、** : $p < .01$ 、*** : $p < .001$)

5. 不安感の変化

5.1 首都直下地震による首都圏への影響に対する不安感

ここでは、首都直下地震が起きた場合の被害を想定した「不安感」（中でも「とても不安を感じる」と回答した人の割合）が、番組放送前に実施した第1波調査と、放送後に実施した第2波調査ではどのように変化したのか、また番組視聴有無でいかに異なるのか、それぞれの意識の違いや変化を捉える。

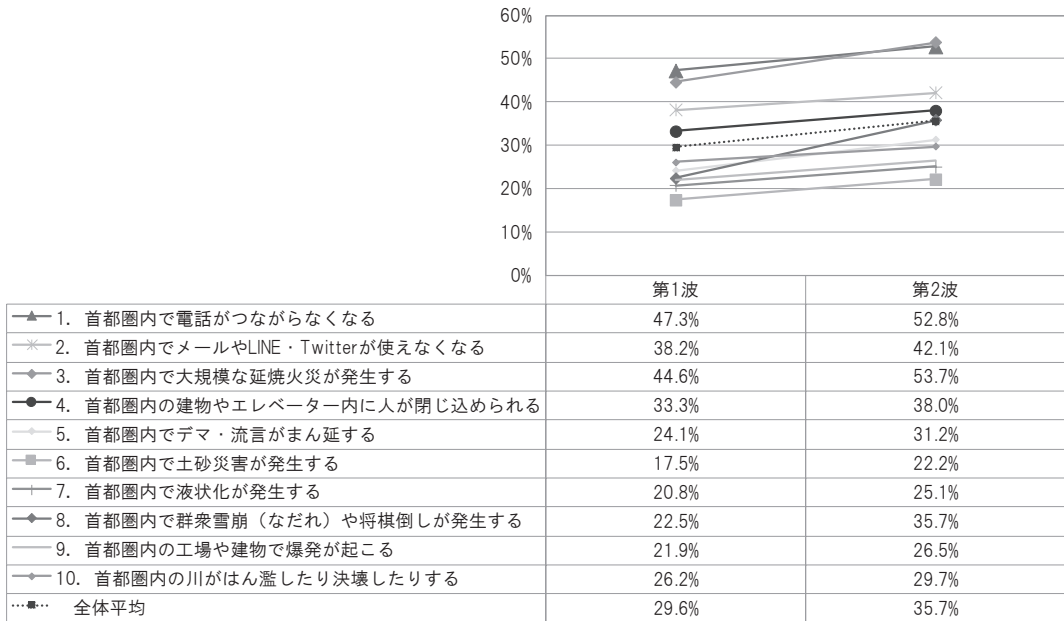


図 5.1.1 「とても不安を感じる」と回答した人の割合の変化（視聴あり）（n=1,825）

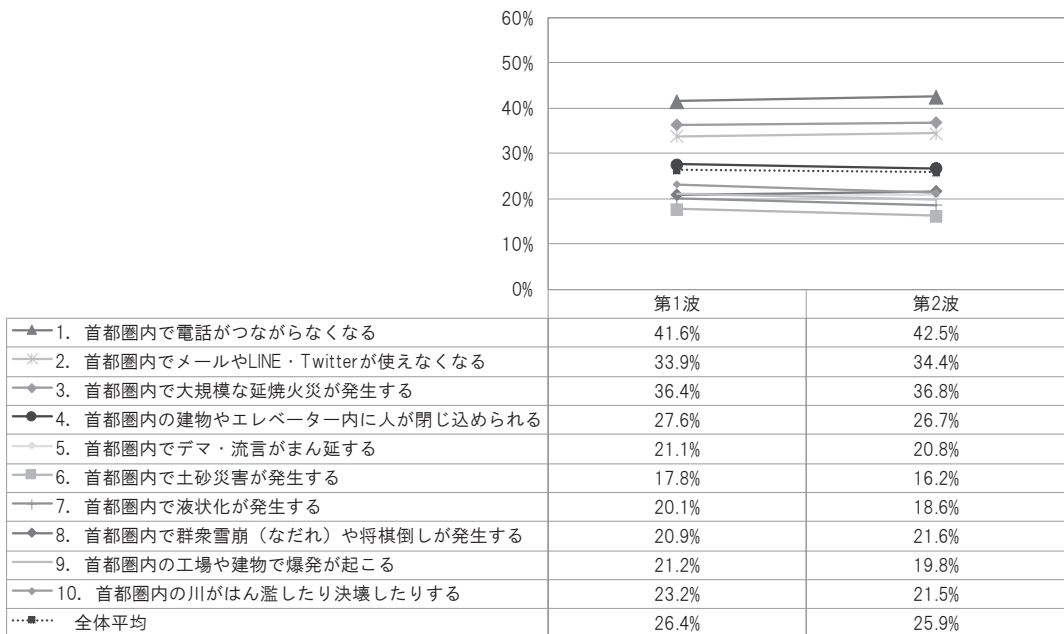


図 5.1.2 「とても不安を感じる」と回答した人の割合の変化（視聴なし）（n=5,524）

まず、「首都直下地震が起きた場合、以下のような被害が発生することに対して、どの程度不安を感じますか」と質問し、次の10項目に対する不安感を尋ねた。すなわち「1. 首都圏内で電話が繋がらなくなる」、「2. 首都圏内でメールやLINE・Twitterが使えなくなる」、「3. 首都圏内で大規模な延焼火災が発生する」、「4. 首都圏内の建物やエレベーター内に人が閉じ込められる」、「5. 首都圏内でデマ・流言がまん延する」、「6. 首都圏内で土砂災害が発生する」、「7. 首都圏内で液状化が発生する」、「8. 首都圏内で群衆雪崩（なだれ）や将棋倒しが発生する」、「9. 首都圏内の工場や建物で爆発が起こる」、「10. 首都圏内の川がはん濫したり決壊したりする」の10項目である（第1波 Q22、第2波 Q32）。これらは主にドラマ「パラレル東京」内で取り上げられていたり、触れられていた首都直下地震によるさまざまな被害の内容を軸に作成した項目である。回答は「とても不安を感じる」、「やや不安を感じる」、「どちらともいえない」、「あまり不安を感じない」、「全く不安を感じない」の5件法で、いずれか1つ選択する形で回答を得た。

結果は、図 5.1.1、図 5.1.2、表 5.1.1 の通りである。まず、第1波調査から第2波調査にかけて、「視聴あり」の人たちの間で、10項目いずれについても「とても不安を感じる」と回答した人の割合が数値的に増加していた。中でも「首都圏内で群衆雪崩（なだれ）や将棋倒しが発生する」は最も多く 13.3%増加していた。次に「首都圏内で大規模な延焼火災が発生する」が9.1%、第三に「首都圏内でデマ・流言がまん延する」が7.1%増加していた。表 5.1.1 には、「とても不安を感じる」を「1」、それ以外を「0」とし、「1」を回答した人の割合と、マクネマー検定を行った結果を示した。

表 5.1.1 視聴有無によって異なる第1波と第2波間の不安意識の変化

項目	視聴あり (N=1,825)			視聴なし (N=5,524)		
	第1波	第2波	差	第1波	第2波	差
1. 首都圏内で電話が繋がらなくなる	47.3%	52.8%	5.5% ***	41.6%	42.5%	0.9%
2. 首都圏内でメールやLINE・Twitterが使えなくなる	38.2%	42.1%	3.9% **	33.9%	34.4%	0.6%
3. 首都圏内で大規模な延焼火災が発生する	44.6%	53.7%	9.1% ***	36.4%	36.8%	0.5%
4. 首都圏内の建物やエレベーター内に人が閉じ込められる	33.3%	38.0%	4.7% ***	27.6%	26.7%	-0.9%
5. 首都圏内でデマ・流言がまん延する	24.1%	31.2%	7.1% ***	21.1%	20.8%	-0.3%
6. 首都圏内で土砂災害が発生する	17.5%	22.2%	4.7% ***	17.8%	16.2%	-1.5% **
7. 首都圏内で液状化が発生する	20.8%	25.1%	4.3% ***	20.1%	18.6%	-1.5% **
8. 首都圏内で群衆雪崩（なだれ）や将棋倒しが発生する	22.5%	35.7%	13.3% ***	20.9%	21.6%	0.7%
9. 首都圏内の工場や建物で爆発が起こる	21.9%	26.5%	4.7% ***	21.2%	19.8%	-1.3%
10. 首都圏内の川がはん濫したり決壊したりする	26.2%	29.7%	3.5% **	23.2%	21.5%	-1.8% **

(McNemarの検定, ***p<.001, **p<.01)

5.2 自宅や自分、家族への影響に対する不安感

次に、「自宅や自分、家族への影響」に対する不安感について、「首都直下地震が起きた場合、以下のような被害にあうことに対して、どの程度不安を感じますか」

と質問し、以下の8項目に対する不安感を尋ねた（第1波 Q24、第2波 Q34）。すなわち、「1. 自宅が倒壊する」、「2. 自宅が火災に遭う」、「3. 自宅のインフラ（電気・

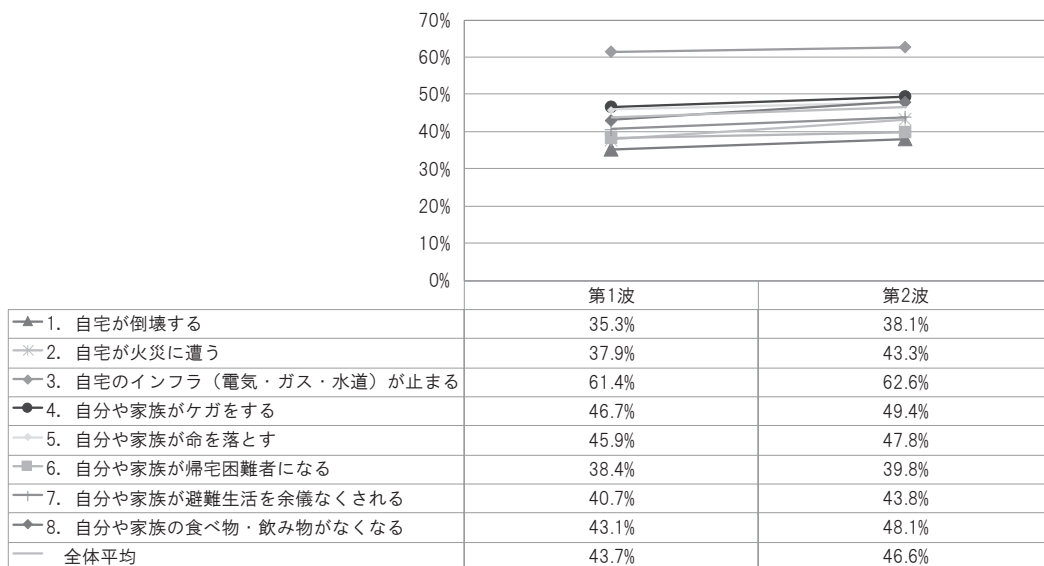


図 5.2.1 「とても不安を感じる」と回答した人の割合の変化（視聴あり）（n=1,825）

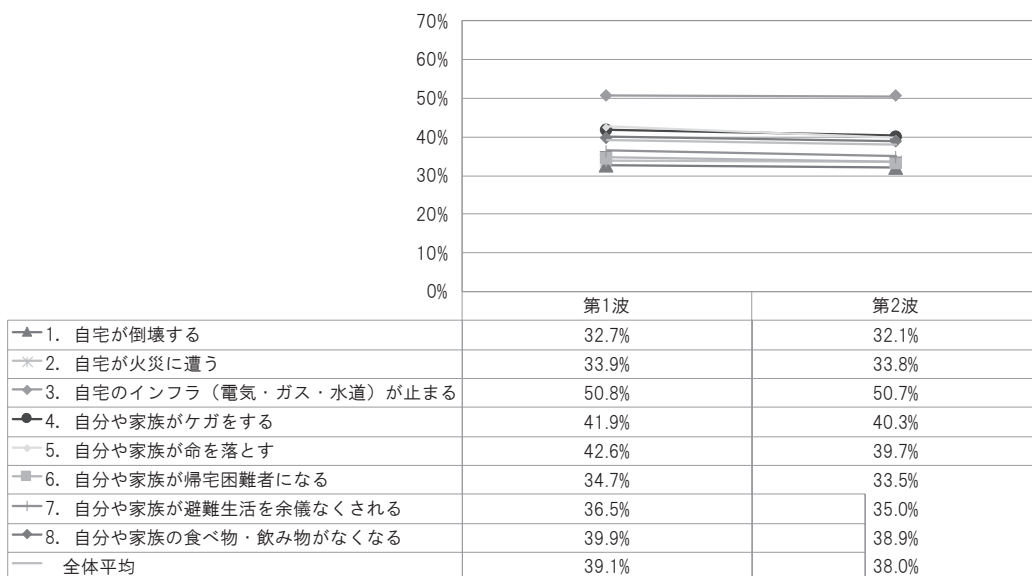


図 5.2.2 「とても不安を感じる」と回答した人の割合の変化（視聴なし）（n=5,524）

ガス・水道)が止まる」、「4. 自分や家族がケガをする」、「5. 自分や家族が命を落とす」、「6. 自分や家族が帰宅困難者になる」、「7. 自分や家族が避難生活を余儀なくされる」、「8. 自分や家族の食べ物・飲み物がなくなる」の8項目である。これらは、地震が発生した際に遭うことが予想される被害を軸に作成した項目である。回答は、「とても不安を感じる」～「全く不安を感じない」の5件法から回答を得た。

結果は、図 5.2.1、図 5.2.2、表 5.2.1 の通りである。全体として視聴有無に関わらず、「自宅のインフラ（電気・ガス・水道）が止まる」が、他の項目と比べ不安感が高かった。また、5.1と同様、第1波調査から第2波調査にかけて変化を見ると、「視聴あり」の人達の間で8項目いずれにおいても不安感（「とても不安を感じる」と回答した人の割合）が数値的に増加していた。中でも「自宅が火災に遭う」が比較的多く、5.4%増加していた。ドラマ「パラレル東京」においては、延焼火災や火災旋風など首都直下地震による火災の被害が象徴的に取り上げられていた。表 5.1.1と同様、表 5.2.1には「とても不安を感じる」を「1」、それ以外を「0」とし、「1」を回答した人の割合と、マクネマー検定を行った結果を示した。

表 5.2.1 視聴有無によって異なる第1波と第2波間の不安意識の変化

項目	視聴あり (N=1,825)			視聴なし (N=5,524)		
	第1波	第2波	差	第1波	第2波	差
1. 自宅が倒壊する	35.3%	38.1%	2.7%	32.7%	32.1%	-0.6%
2. 自宅が火災に遭う	37.9%	43.3%	5.4% ***	33.9%	33.8%	0.0%
3. 自宅のインフラ（電気・ガス・水道）が止まる	61.4%	62.6%	1.2%	50.8%	50.7%	-0.1%
4. 自分や家族がケガをする	46.7%	49.4%	2.7%	41.9%	40.3%	-1.5%
5. 自分や家族が命を落とす	45.9%	47.8%	1.9%	42.6%	39.7%	-3.0% ***
6. 自分や家族が帰宅困難者になる	38.4%	39.8%	1.5%	34.7%	33.5%	-1.2%
7. 自分や家族が避難生活を余儀なくされる	40.7%	43.8%	3.2% **	36.5%	35.0%	-1.5%
8. 自分や家族の食べ物・飲み物がなくなる	43.1%	48.1%	5.0% ***	39.9%	38.9%	-1.0%

(McNemarの検定, **p<.01, ***p<.001)

5.3 不安感の変化に関するまとめ

以上、首都直下地震が起きた場合の被害を想定した上での、「不安感」（「とても不安を感じる」と回答した人の割合）に注目して、第1波調査（番組放送前）と第2波調査（番組放送後）における変化について見た結果、下記の諸点が明らかになった。

第一に、「視聴あり」の人の中で、特に「首都圏内で群衆雪崩（なだれ）や将棋倒しが発生する」について、「とても不安を感じる」と回答した人の割合が大きく増加し

ていた。第二に、「首都圏内で大規模な延焼火災が発生する」や「自宅が火災に遭う」においても「とても不安を感じる」と回答した人の割合が相対的に高くなっていた。いずれについても、「パラレル東京」で取り上げられていた首都直下地震による被害のうちの一つであり、映像としてもインパクトのあるシーンであったことが考えられる。第三に、全体的に見て「視聴あり」の人は、放送後に「とても不安を感じる」と回答した人の割合が全体的に高くなっていた。

以上のことから、「パラレル東京」が放送されたことによって、「視聴あり」の人達の間、首都直下地震に対する不安感、中でも群衆雪崩や将棋倒し、火災に対する「不安感」（「とても不安を感じる」とする人の割合）が増加し、影響が生じていたものと推測される。

6. 居住地域による差異

今回の調査では東京都内在住者を対象としているが、「パラレル東京」の題材である首都直下地震における被害の程度は、東京都内といえどもさまざまである。地震による家屋倒壊は震源地に近いほど被害が大きいであろう。内閣府の「首都直下地震の被害想定と対策について(最終報告)」によると(内閣府ホームページ, 2013b)、冬の夕方に発災した場合、揺れによる全壊よりも地震火災による被害の方が大きくなる。そこで、この内閣府の都心南部直下地震の焼失棟数を参考に、回答者を居住地で表6.1.1のように23区東部(n=1,717)、23区中部(n=1,187)、23区西部(n=2,243)、多摩地域(n=2,198)、島しょ部(n=4)に分けた。23区東部では建物の倒壊と焼失棟数が多く、23区西部は焼失棟数が多い。23区中部は東部や西部ほどではないがある程度の被害が想定されるが、多摩地域はそれほどでもない。また島しょ部は回収サンプルサイズが小さいため除外した。本章では、この4つの地域で、視聴態度や視聴の影響、等について比較していく。

表 6.1.1 地域の区分とサンプルサイズ

地域	対象市区町村（カッコ内はサンプルサイズ）			
23区東部 (1717人)	足立区(325人) 北区(206人)	荒川区(99人) 江東区(301人)	江戸川区(310人) 墨田区(141人)	葛飾区(228人) 台東区(107人)
23区中部 (1187人)	新宿区(195人) 千代田区(29人)	板橋区(315人) 豊島区(169人)	渋谷区(113人) 文京区(138人)	中央区(97人) 港区(131人)
23区西部 (2243人)	大田区(386人) 世田谷区(499人)	品川区(244人) 中野区(201人)	杉並区(357人) 練馬区(405人)	目黒区(151人)
多摩地域 (2198人)	昭島市(44人) 清瀬市(43人) 国分寺市(76人) 多摩市(86人) 八王子市(257人) 東村山市(85人) 福生市(33人) 武蔵野市(102人) 瑞穂町(11人)	あきる野市(32人) 国立市(36人) 小平市(99人) 調布市(148人) 羽村市(18人) 東大和市(41人) 町田市(228人) 武蔵村山市(26人) 檜原村(0人)	稲城市(40人) 小金井市(70人) 狛江市(44人) 西東京市(133人) 東久留米市(51人) 日野市(112人) 三鷹市(98人) 奥多摩町(1人)	青梅市(50人) 立川市(97人) 府中市(134人) 日の出町(3人)
島しょ部 (4人)	大島町(1人) 神津島村(1人) 小笠原村(0人)	八丈町(1人) 三宅村(0人)	利島村(0人) 御蔵島村(0人)	新島村(1人) 青ヶ島村(0人)

6.1 居住地域による「パラレル東京」接触・態度

まず、4つの地域で「パラレル東京」の視聴（第2波 Q3）について差異があるのか確認する。「パラレル東京」自体はプロローグと DAY1～DAY4 までであるが、NHKが「首都直下ウィーク」として放送した2回のNHKスペシャルも含めた合計7本の番組を対象とする。なお、ここでは DAY1～DAY4 以外の視聴者について示すが、以下の分析ではこれまでと同じく、DAY1～DAY4 を「放送中にすべて見た」「放送中に一部見た」「録画したのを見た」「NHKオンデマンドで見た」を視聴者、「見なかった」を非視聴者とした。地域ごとの各回の視聴者の比率、およびいずれか1回でも見た人の比率をまとめたものが表 6.1.2 である。いずれの地域でも初回の「プロローグ」の視聴者が最も多く 20% 強で、回を追うごとに視聴者の比率が小さくなっていく。また、いずれか1回でも見た人の意率は 25% 前後であった。いずれにおいても 23 区東部がもっとも低い傾向はあるものの、 χ^2 検定の結果では 5% 水準で有意な差は見られなかった。

表 6.1.2 地域ごとの「パラレル東京」視聴者の比率

	23 区東部 (n=1717)	23 区中部 (n=1187)	23 区西部 (n=2243)	多摩地域 (n=2198)	χ^2 値	p 値
プロローグ (12/1)	21.5%	24.5%	22.2%	22.7%	3.74	0.2912
DAY1 (12/2)	20.1%	21.9%	22.0%	22.4%	3.43	0.3303
DAY2 (12/3)	18.0%	18.9%	19.4%	19.4%	1.62	0.6540
DAY3 (12/4)	16.8%	18.8%	18.4%	18.7%	3.06	0.3828
DAY4 (12/5)	16.8%	19.0%	18.5%	18.7%	3.33	0.3428
NHK スペシャル (12/7)	14.7%	17.3%	16.9%	17.2%	5.37	0.1467
NHK スペシャル (12/8)	14.8%	17.9%	16.5%	17.7%	7.46	0.0586
いずれか 1 回でも見た	23.3%	25.0%	25.6%	25.2%	3.09	0.3778

※23 区東部の NHK スペシャル (12/7・12/7) は、残差分析の結果 5%水準で有意に低い。

次に「パラレル東京」を視聴した人に対して、もっとも印象に残ったものが何であるか（第 2 波 Q6）を比較する（表 6.1.3）。 χ^2 検定では有意ではなかったものの、残差分析を行った結果、23 区東部では延焼火災が低く、23 区西部では火災旋風が高くデマや誤った情報によるパニックが低く、多摩地域で火災旋風が低かった（いずれも 5%未満の水準）。23 区東部は 23 区中部や多摩地域と比べて延焼火災のリスクが高いにもかかわらず他の地域よりも低くなっているが、単一選択式であるため有意ではないものの火災旋風が高くなっており、火災旋風の印象が強かったのであろう。

表 6.1.3 地域ごとの「パラレル東京」でもっとも印象に残ったもの (SA・視聴者のみ)

	23 区東部 (n=400)	23 区中部 (n=297)	23 区西部 (n=575)	多摩地域 (n=553)
登場人物の心の葛藤や行動	16.3%	19.2%	16.9%	18.1%
延焼火災	10.5% -	13.5%	15.1%	15.7%
火災旋風	24.5%	18.9%	25.4% +	18.6% -
都内の物的被害（建物、道路など）	17.5%	15.8%	17.0%	17.0%
都内の人的被害（遺体、群衆雪崩など）	18.0%	20.2%	16.5%	17.9%
デマや誤った情報によるパニック	9.8%	9.1%	6.4% -	9.9%
レスキュー隊員などによる救助のシーン	1.8%	1.0%	1.0%	0.5%
その他	1.8%	2.4%	1.6%	2.2%

※ $\chi^2(21)=25.55$ 、 $p=0.2238$

※数値横の+-は、残差分析の結果、5%水準で+は高い、-は低いことを示す。

表 6.1.4 地域ごとの「パラレル東京」で感じたこと

	23区東部 (n=400)	23区中部 (n=297)	23区西部 (n=575)	多摩地域 (n=553)	F値	p値
こうした地震が本当に起こり得ると感じた	3.57	3.59	3.58	3.59	0.10	0.9576
ちょっと大きすぎると感じた	2.05	2.10	2.06	2.03	0.42	0.7354
首都直下地震への不安を感じた	3.47	3.51	3.55	3.55	1.58	0.1912
いくら内閣府の想定に基づいていたとしても、フィクションにすぎないと感じた	2.02	2.00	1.96	1.97	0.57	0.6368
いざ首都直下地震が起きたとき、自分はどうすべきなのかを考えた	3.35	3.38	3.35	3.35	0.16	0.9225
さすがにここまで被害は起きないだろうと思った	1.95	2.01	1.93	1.92	0.86	0.4598
地震対策の必要性を感じた	3.48	3.47	3.50	3.52	0.61	0.6090
首都直下地震ではこういう被害が生じるのだなとイメージできた	3.39	3.42	3.42	3.41	0.19	0.9050
私たち一人一人がどのように動けば良いのか、具体的なイメージがつくようになった	3.03	3.01	2.95	3.03	1.35	0.2550
過去の地震を思い出した	2.98	2.87	2.83	2.94	2.72	0.0430
気が滅入った	2.86	2.81	2.75	2.70	2.68	0.0455
改めて、東京は危ないところだと思った	3.24	3.12	3.17	3.20	1.49	0.2155
帰宅困難になったら家に帰らず、その場に留まろうと思うようになった	3.15	3.15	3.16	3.18	0.14	0.9334
首都直下地震が発生したら、火災を考えて避難をしようと思うようになった	3.28	3.29	3.33	3.35	1.11	0.3451
これから首都直下地震に備えて、多くのことを学んでいこうと思うようになった	3.23	3.25	3.24	3.29	0.73	0.5318
事前に家族との安否確認の方法や待ち合わせ場所を確認しておこうと思うようになった	3.16	3.21	3.21	3.25	1.26	0.2869
備蓄などを常にしておきたいと思うようになった	3.33	3.29	3.32	3.41	2.59	0.0516

※ Tukey の多重範囲検定では、5%水準で有意なものは見られなかった。

※ 「あてはまる」を4～「あてはまらない」を1とした平均値。

地域ごとに「パラレル東京」をみて感じたこと（第2波 Q7）を確認したものが表 6.1.4 である。各数値は、「あてはまる」を4～「あてはまらない」を1とした平均値である。5%水準で見た場合、ほとんどの項目で地域による差異は見られなかった。「過去の地震を思い出した」と「気が滅入った」の2項目で分散分析による関連は見られたが、具体的な差異は Tukey の多重範囲検定の結果で有意なものは見られなかった。

以上のように、「パラレル東京」の接触や印象等について、地域による明確な差異はほとんど見られなかった。

6.2 地域ごとの「パラレル東京」視聴有無による影響の比較

居住地域によって、「パラレル東京」の視聴態度にはほとんど差異がみられなかったが、視聴の有無によって首都直下地震に対する不安や被害を受ける想定などの態度の変化に差異はないのであろうか。

まず初めに、地域ごとに視聴の有無で、首都直下地震に対する不安とどの程度自分事と

考えているかの変化に差があるのか確認する。首都直下地震に対する不安（第1波 Q1、第2波 Q13）について、「とても不安を感じる」を6～「まったく不安を感じない」を1としたうえで、第2波調査－第1波調査として首都直下不安の変化量とした。また首都直下地震をどの程度自分事としてとらえているか（第1波 Q17、第2波 Q28）について、「強く「自分ごと」としてとらえている」を6～「全く「自分ごと」としてとらえていない」を1としたうえで、第2波調査－第1波調査として自分事程度の変化量とした。これらを各地域で「パラレル東京」の視聴者と非視聴者で差異があるのか確認したものが表6.2.1である。

表 6.2.1 各地域の「パラレル東京」視聴有無による首都直下地震への不安の変化と
首都直下地震の自分事程度の变化

	23区東部		23区中部		23区西部		多摩地域	
	視聴者	非視聴者	視聴者	非視聴者	視聴者	非視聴者	視聴者	非視聴者
n	400	1317	297	890	575	1668	553	1645
首都直下不安	0.10	-0.06 ***	0.01	-0.01	0.11	-0.02 **	0.09	-0.03 **
自分事程度	0.23	0.12 *	0.27	0.08 *	0.27	0.06 ***	0.29	0.12 ***

※数値は2回目調査－1回目調査。

※数値横の記号は、視聴者と非視聴者の間にKruskal-Wallis 検定の結果、***：p<.001、

**：p<.01、*、p<.05で有意差があることを示す。

首都直下不安の変化量は、23区東部、23区西部、多摩地域で有意に視聴者が非視聴者よりも高くなっている。つまりこの3地域では、「パラレル東京」を視聴したことによって首都直下地震に対する不安が増加しているといえよう。ここで、非視聴者の不安が若干ではあるが負の値を示しているが、これは単純集計を見ても明らかであるが天井効果であろう。また、多摩地域の不安も増加しているが、これは多摩直下地震や立川断層帯地震のためであろう。一方23区中部では比較的非木造建築が多く、地震による揺れは大きい、他の地域に比べて倒壊や地震火災による延焼が多くないことによるものであろう。

また、自分事程度はいずれの地域においても視聴者が非視聴者よりも高くなっている。つまりすべての地域で「パラレル東京」を視聴したことによって首都直下地震が自分ごとであるという意識が高まったといえる。

つぎに、地域ごとに視聴の有無で、首都直下地震での被害に対する不安と自分自身が被害にあふ確率の変化に差があるのか確認する。首都直下地震の被害に対する不安（第1波 Q20 および Q24、第2波 Q30 および Q34）について、「とても不安を感じる」を6～「まったく不安を感じない」を1としたうえで、第2波調査－第1波調査として不安の変化量とした。また首都直下地震の被害に自分があふ確率（第1波 Q21 および Q25、第2波 Q31 および Q35）について、「10%以下」を10～「100%」を100としたうえで、第2波調査－第

1 波調査として被害にあう確率の変化量とした。

これらを各地域で「パラレル東京」の視聴者と非視聴者で差異があるのかを、それぞれの被害ごとに不安・確率の順に確認したものが表 6.6 である。ここで、不安と被害にあう確率の関係について触れておく。いずれも視聴者が高くなる前提であるが、分析結果は不安と被害にあう確率が有意か否かで、以下の 4 象限に分けることができる。【象限 1】不安と被害にあう確率のいずれも有意である場合、視聴によって不安を持つと同時に被害にあう確率が高いと考え何らかの備えを考えるであろう。【象限 2】不安が有意であるが被害にあう確率が有意でない場合、視聴によって不安ではあるが被害にあうと思っておらず、いわゆる正常性バイアスの状態で、備えがおろそかになる可能性がある。【象限 3】不安は有意でないが被害にあう確率が有意である場合、視聴によって被害にあると思っているにもかかわらず不安でなく、その被害が大きな問題でないと思っているかすでに準備が整っていることが想定できる。【象限 4】不安と被害にあう確率のいずれも有意でない場合、視聴による影響は受けていないと考えられる。

これらを前提に表 6.2.1 の結果のうち特徴的な部分を見ていく。23 区東部では、③の延焼火災や⑫の自宅火災、⑭⑮の人的被害、⑰⑱の被災後、④の閉じ込めや⑤のデマ・流言、⑥の土砂災害で、不安は高まったが被害にあう確率の見積もりは高まっていない。特に③⑫といった火災についてリスクの高い地域にもかかわらず、それらにあう確率の見積もりが高まっていない点は、今後、対策が必要であろう。一方で、⑦の液化化や⑩の河川の氾濫や決壊については不安と被害にあう確率の見積もりの双方が高まっている。

23 区中部では、⑭のケガや④の閉じ込め、⑤のデマ・流言、⑥の土砂災害で、不安は高まったが被害にあう確率の見積もりは高まっていない。また、⑧の群衆雪崩や⑨の爆発被害、⑩の河川の氾濫や決壊、⑯の帰宅困難者、⑰の避難生活では不安と被害にあう確率の見積もりの双方が高まっている。しかし、23 区中部では、視聴者と非視聴者で不安や被害にあう確率の変化に差異がみられないものが多く、比較的被害想定が小さい地域とはいえ、課題であろう。

23 区西部では、⑪の自宅の倒壊でのみ不安は高まったが被害にあう確率の見積もりは高まっていない。一方で、③～⑩、⑫⑭～⑱と多くの項目で不安と被害にあう確率の見積もりのいずれもが高まっている。この点は被害の想定と一致している。

多摩地域では、④の閉じ込め、⑪の自宅倒壊、⑫の自宅火災、⑮の人命で不安は高まっているが、被害にあう確率の見積もりは高まっていない。また、③の延焼火災や⑤のデマ・流言、⑧の群衆雪崩、⑨の爆発被害、⑩の河川の氾濫や決壊、⑰の避難生活で、不安と被害にあう確率の見積もりのいずれもが高まっている。多摩地域は内閣府の都心南部直下地震の想定では被害は少ないものの、多摩直下地震や立川断層帯地震などを含めると、「パラレル東京」の視聴による影響がみられるのであろう。

表 6.2.2 各地域の「パラレル東京」視聴有無による、
被害に対する不安の変化と自分自身が被害にあう確率の変化

		23区東部		23区中部		23区西部		多摩地域	
		視聴者	非視聴者	視聴者	非視聴者	視聴者	非視聴者	視聴者	非視聴者
	n	400	1317	297	890	575	1668	553	1645
①自分自身の電話が繋がらなくなる	不安	0.09	0.02	0.10	0.04	0.08	0.08	0.11	0.03 †
	確率	2.15	-1.36 ***	0.57	-0.31	3.10	-0.26 ***	0.11	0.16
②自分自身のメールやLINE・Twitterが使えなくなる	不安	0.17	0.04 *	0.05	0.02	0.02	0.06	0.08	0.04
	確率	3.05	-0.46 **	1.11	-0.10	1.37	-0.05 †	1.14	0.15
③自分自身が大規模な延焼火災に巻き込まれる	不安	0.07	-0.10 ***	0.08	-0.01	0.08	-0.02 *	0.09	-0.07 ***
	確率	2.43	0.37	2.36	1.38	4.38	0.80 ***	4.12	0.96 ***
④自分自身が建物やエレベーター内に閉じ込められる	不安	0.07	-0.08 **	0.08	-0.04 *	0.15	-0.03 ***	0.00	-0.11 *
	確率	2.40	1.10	3.06	1.83	3.06	1.18 *	2.22	0.57
⑤自分自身がデマ・流言にまどわされる	不安	0.20	-0.04 ***	0.14	-0.01 *	0.18	0.01 ***	0.20	-0.00 ***
	確率	2.83	1.33	3.40	2.52	2.90	1.11 *	4.34	1.05 ***
⑥自分自身が土砂災害に巻き込まれる	不安	0.21	-0.06 ***	0.07	-0.07 *	0.11	-0.05 ***	0.09	-0.04 **
	確率	2.73	1.63	3.30	2.33	3.83	0.64 ***	2.80	1.21 †
⑦自分自身が液化化被害に巻き込まれる	不安	0.21	-0.08 ***	0.14	-0.06 **	0.12	-0.01 *	0.13	-0.02 *
	確率	4.13	0.16 ***	4.78	2.09 †	3.58	1.40 **	3.83	1.76 †
⑧自分自身が群衆雪崩（なだれ）や将棋倒しに巻き込まれる	不安	0.41	0.01 ***	0.41	0.03 ***	0.38	0.01 ***	0.28	0.06 ***
	確率	7.25	2.00 ***	8.45	2.82 ***	8.47	1.37 ***	7.79	2.50 ***
⑨自分自身が工場や建物の爆発被害に巻き込まれる	不安	0.25	-0.03 ***	0.16	-0.06 **	0.21	-0.01 ***	0.15	-0.01 **
	確率	2.98	0.77 †	5.96	0.98 **	4.30	1.36 **	4.81	1.32 ***
⑩自分自身が川のはん濫や決壊被害に巻き込まれる	不安	0.12	-0.07 **	0.13	-0.05 **	0.14	0.00 **	0.10	-0.02 *
	確率	2.25	-0.02 *	4.81	1.63 *	3.46	1.16 *	3.63	1.77 *
⑪自宅が倒壊する	不安	0.06	-0.02	0.07	0.03	0.10	-0.00 *	0.09	-0.04 **
	確率	1.33	0.57	0.44	1.22	1.70	0.25	0.90	-0.09
⑫自宅が火災に遭う	不安	0.12	-0.00 *	0.01	0.03	0.09	0.00 *	0.09	-0.02 **
	確率	1.95	0.84	0.24	1.01	3.58	0.18 ***	0.61	0.45
⑬自宅のインフラ（電気・ガス・水道）が止まる	不安	0.03	-0.04	0.07	0.02	0.01	-0.02	0.02	0.00
	確率	1.68	0.06	1.58	-0.18	3.43	0.36 ***	1.27	0.26
⑭自分や家族がケガをする	不安	0.09	-0.06 **	0.07	-0.06 *	0.11	-0.03 **	0.04	-0.03 †
	確率	0.00	-0.51	1.28	-0.27	1.72	-0.86 *	1.21	-0.23
⑮自分や家族が命を落とす	不安	0.05	-0.09 *	0.02	-0.09 †	0.05	-0.07 **	0.05	-0.06 *
	確率	1.55	0.73	0.20	-1.06	1.44	-0.04 *	1.72	0.32
⑯自分や家族が帰宅困難者になる	不安	0.07	-0.02 †	0.08	-0.07 *	0.11	-0.03 **	0.01	-0.04
	確率	1.88	-0.37 †	3.23	-0.35 *	1.70	-0.45 *	0.99	0.74
⑰自分や家族が避難生活を余儀なくされる	不安	0.07	-0.05 *	0.11	-0.03 *	0.08	-0.02 *	0.09	-0.04 **
	確率	1.38	-0.43	3.67	0.81 *	2.50	0.06 *	2.48	0.15 *
⑱自分や家族の食べ物・飲み物がなくなる	不安	0.12	-0.05 ***	0.08	-0.02	0.09	-0.03 ***	0.08	-0.03 **
	確率	1.98	-0.41	2.93	0.13 *	3.11	0.65 *	2.80	0.63 †

※数値は 2 回目調査 - 1 回目調査。

※「確率」は自分自身があう確率

※数値横の記号は、視聴者と非視聴者の間にKruskal-Wallis 検定の結果、*** : p<.001、** : p<.01、*、p<.05で有意差があることを示す。†<.10で、参考値。

本章では、居住地域を被害想定により分類し、その地域による視聴態度や視聴の影響、等について比較した。視聴態度については地域に差は見られないが、その影響については地域特性（被害の特徴）と関連がみられた。しかし「パラレル東京」での被害の映像が、自分の居住している地域、もしくは近隣でよく知っている地域であれば、より影響が強くなることが想定できる。その点を考えると、「パラレル東京」での被害の映像がどこの地域であるのかといった分析を加えて、地域の区分や比較を行うことが今後の課題である。

引用・参考文献

- Davison, P. , 1983, The Third-Person Effect in communication, *Public Opinion Quarterly*, 47(1), pp.1-15
- Hester, J.B. and Gonzenbach, W.J.: 'The environment: TV news, real-world cues, and public opinion over time', *Mass Communication Review*, 22, pp.5-20, 1995
- 廣井脩, 2004, 災害情報と社会心理, 北樹出版
- 内閣府ホームページ, 過去の首都直下地震対策について
<http://www.bousai.go.jp/jishin/syuto/past/index.html>, 2021年1月29日アクセス
- 内閣府ホームページ, 2006, 災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 1923 関東大震災,
http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1923_kanto_daishinnsai/index.html アクセス
- 内閣府ホームページ, 2013a, 首都直下地震の被害想定と対策について (最終報告),
http://www.bousai.go.jp/jishin/syuto/taisaku_wg/pdf/syuto_wg_report.pdf,
2021年1月29日アクセス
- 内閣府ホームページ, 2013b, 首都直下地震の被害想定と対策について (最終報告) 別添資料1 ～人的・物的被害(定量的な被害)～,
http://www.bousai.go.jp/jishin/syuto/taisaku_wg/pdf/syuto_wg_siry01.pdf,
2021年1月29日アクセス
- 内閣府, 2018, 平成30年版防災白書
- NHKホームページ, 2019, プレスリリース 「12月に体感・首都直下地震ウィーク」,
<https://www.nhk.or.jp/info/pr/toptalk/assets/pdf/soukyoku/2019/09/001.pdf>,
2021年1月26日アクセスNHKホームページ, 2020, 放送ガイドライン2020インターネットガイドライン統合版, <https://www.nhk.or.jp/pr/keiei/bc-guideline/pdf/guideline2020.pdf>, 2021年1月29日アクセス
- NHKホームページ, 2020, 首都直下地震 助かるためのキーワード
https://www3.nhk.or.jp/news/special/saigai/natural-disaster/natural-disaster_16.html, 2020, 2021年1月28日アクセス
- Noelle-Neumann E., 1982=2013, 池田謙一・安野智子訳, 沈黙の螺旋理論[改訂復刻版]: 世論形成過程の社会心理学, 北大路書房
- 関谷直也・橋元良明・中村功・小笠原盛浩・山本太郎・千葉直子・関良明・高橋克巳,
2012, 東日本大震災における首都圏住民の震災時の情報行動, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編, No.28, pp.65-113

竹下俊郎，1998，メディアの議題設定機能—マスコミ効果研究における理論と実証—，学
文社

Tichenor, P. J., Donohue, G. A., & Olien, C. N., 1970, Mass media flow and
differential growth in knowledge. *Public Opinion Quarterly*, 34, pp.159-170.

東京都ホームページ， 2014，首都直下地震等による東京の被害想定—概要版—，
https://www.bousai.metro.tokyo.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/000/401/assumption_h24outline.pdf，2021年1月29日アクセス

安野智子，2006，重層的な世論形成過程—メディア・ネットワーク・公共性，東京大学出版
会

付属資料（アンケート調査の単純集計）

【第1波】

(SA)1回目F1. あなたの性別をお知らせください。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	男性	53.4
2	女性	46.6

(SA)1回目F2. あなたの年齢をお知らせください。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	19歳以下	0.5
2	20代	5.8
3	30代	16.4
4	40代	26.9
5	50代	29.5
6	60代	14.8
7	70歳以上	6.2

(SA)1回目F3. あなたがお住まいの地域を、以下の中から選択してください。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	新宿区	2.7
2	足立区	4.4
3	荒川区	1.3
4	板橋区	4.3
5	江戸川区	4.2
6	大田区	5.3
7	葛飾区	3.1
8	北区	2.8
9	江東区	4.1
10	品川区	3.3
11	渋谷区	1.5
12	杉並区	4.9
13	墨田区	1.9
14	世田谷区	6.8
15	台東区	1.5
16	中央区	1.3
17	千代田区	0.4
18	豊島区	2.3
19	中野区	2.7
20	練馬区	5.5
21	文京区	1.9
22	港区	1.8
23	目黒区	2.1
24	昭島市	0.6
25	あきる野市	0.4
26	稲城市	0.5
27	青梅市	0.7
28	清瀬市	0.6
29	国立市	0.5
30	小金井市	1.0
31	国分寺市	1.0

32	小平市	1.3
33	狛江市	0.6
34	立川市	1.3
35	多摩市	1.2
36	調布市	2.0
37	西東京市	1.8
38	八王子市	3.5
39	羽村市	0.2
40	東久留米市	0.7
41	東村山市	1.2
42	東大和市	0.6
43	日野市	1.5
44	府中市	1.8
45	福生市	0.4
46	町田市	3.1
47	三鷹市	1.3
48	武蔵野市	1.4
49	武蔵村山市	0.4
50	奥多摩町	0.0
51	日の出町	0.0
52	瑞穂町	0.1
53	大島町	0.0
54	八丈町	0.0
55	檜原村	0.0
56	利島村	0.0
57	新島村	0.0
58	神津島村	0.0
59	三宅村	0.0
60	御蔵島村	0.0
61	青ヶ島村	0.0
62	小笠原村	0.0

(SA)1回目F4. あなたが主に通勤・通学している市区町村をお知らせください。

		%
	全体 (n=7349)	100.0
1	新宿区	6.6
2	足立区	1.5
3	荒川区	0.6
4	板橋区	1.4
5	江戸川区	1.6
6	大田区	2.5
7	葛飾区	1.1
8	北区	1.0
9	江東区	2.5
10	品川区	3.2
11	渋谷区	3.6
12	杉並区	1.9
13	墨田区	1.2
14	世田谷区	3.0
15	台東区	1.5
16	中央区	4.3
17	千代田区	7.1
18	豊島区	2.2
19	中野区	1.2

20	練馬区	1.7
21	文京区	1.6
22	港区	6.9
23	目黒区	1.1
24	昭島市	0.4
25	あきる野市	0.2
26	稲城市	0.2
27	青梅市	0.4
28	清瀬市	0.1
29	国立市	0.2
30	小金井市	0.4
31	国分寺市	0.4
32	小平市	0.5
33	狛江市	0.2
34	立川市	0.9
35	多摩市	0.6
36	調布市	0.7
37	西東京市	0.4
38	八王子市	1.7
39	羽村市	0.2
40	東久留米市	0.2
41	東村山市	0.3
42	東大和市	0.2
43	日野市	0.4
44	府中市	0.8
45	福生市	0.1
46	町田市	1.1
47	三鷹市	0.4
48	武蔵野市	0.7
49	武蔵村山市	0.2
50	奥多摩町	0.0
51	日の出町	0.0
52	瑞穂町	0.1
53	大島町	0.0
54	八丈町	0.0
55	檜原村	0.0
56	利島村	0.0
57	新島村	0.0
58	神津島村	0.0
59	三宅村	0.0
60	御蔵島村	0.0
61	青ヶ島村	0.0
62	小笠原村	0.0
63	東京都以外	4.4
64	通勤も通学もしていない	24.3

(FA)1回目Q0_1. あなたは「首都直下地震」について、どのようなイメージをお持ちですか。どのようなことでも構いませんので、ご自由にお書きください（単語でも文章でも結構です）。

	%	
全体(n=7349)	100.0	
回答者数(n=7349)	100.0	省略

(SA) 1回目Q1. あなたは、以下の災害について不安を感じていますか。 あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。

		全体	とても不安を感じている	やや不安を感じている	どちらともいえない	あまり不安を感じていない	全く不安を感じていない	
1回目Q1項目1	首都直下地震 (n=7349)	%	100.0	49.2	35.7	10.0	3.7	1.5
1回目Q1項目2	南海トラフ地震 (n=7349)	%	100.0	28.7	40.2	20.9	7.5	2.7
1回目Q1項目3	津波 (n=7349)	%	100.0	14.6	24.1	26.0	23.6	11.6
1回目Q1項目4	高潮 (n=7349)	%	100.0	12.0	20.9	28.8	24.6	13.8
1回目Q1項目5	富士山噴火・浅間山噴火などの大規模降灰 (n=7349)	%	100.0	17.7	35.2	28.5	14.0	4.7
1回目Q1項目6	首都圏での河川の大規模はん濫（荒川や多摩川など） (n=7349)	%	100.0	23.0	35.1	23.2	13.3	5.4
1回目Q1項目7	内水はん濫や中小河川のはん濫 (n=7349)	%	100.0	17.3	31.3	29.1	15.1	7.1
1回目Q1項目8	土砂災害 (n=7349)	%	100.0	11.5	21.5	31.3	23.7	12.0
1回目Q1項目9	台風 (n=7349)	%	100.0	27.0	44.0	20.1	6.5	2.3
1回目Q1項目10	台風による停電 (n=7349)	%	100.0	29.1	44.3	19.2	5.5	2.0

(SA) 1回目Q2. あなたは以下の災害に関する用語を知っていますか。 あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。

		全体	知っている	知らない	
1回目Q2項目1	避難勧告・避難指示（緊急） (n=7349)	%	100.0	94.8	5.2
1回目Q2項目2	マグニチュード (n=7349)	%	100.0	96.9	3.1
1回目Q2項目3	震度 (n=7349)	%	100.0	97.8	2.2
1回目Q2項目4	緊急地震速報 (n=7349)	%	100.0	96.6	3.4
1回目Q2項目5	延焼火災 (n=7349)	%	100.0	61.8	38.2
1回目Q2項目6	通電火災 (n=7349)	%	100.0	72.6	27.4
1回目Q2項目7	火災旋風（せんぷう） (n=7349)	%	100.0	52.5	47.5
1回目Q2項目8	群衆雪崩（なだれ） (n=7349)	%	100.0	59.8	40.2
1回目Q2項目9	一時（いつとき）避難場所 (n=7349)	%	100.0	62.6	37.4
1回目Q2項目10	広域避難場所 (n=7349)	%	100.0	82.9	17.1

(MA) 1回目Q3. あなたはふだん、次のような地震対策を行っていますか。 あてはまるものをいくつでもお選びください。

		%
全体 (n=6612)		100.0
1	家具の転倒防止	52.1
2	パソコンやテレビなどの滑り止め	32.3
3	家具の配置の工夫	40.2
4	ガラスの飛散防止	17.2
5	消火器の準備	31.4
6	食器棚に掛け金をかけるなど、飛び出し防止	21.5
7	地震保険への加入	39.6

(MA) 1回目Q4. 前問で選択したこと以外で、次のような地震対策を行っていますか。 あてはまるものをいくつでもお選びください。

		%
全体 (n=6947)		100.0
1	火災から逃れるための広域避難場所の確認	40.0
2	「広域避難場所」に集まる前に一時的に集まる「一時（いつとき）避難場所」の確認	24.7
3	避難生活を送るための避難所の確認	25.2
4	水の備蓄	64.1
5	食料の備蓄	55.5
6	非常用持ち出し袋の準備	36.2
7	懐中電灯の準備	65.3
8	乾電池や充電器、モバイルバッテリー等の準備	51.9
9	ラジオの準備	41.1
10	カセットコンロの準備	35.5

(SA) 1回目Q5. あなたは同居する家族と地震で連絡が取れなくなった場合を想定して、安否確認方法や待ち合わせ場所を決めていますか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	安否確認方法と待ち合わせ場所の両方を決めている	15.6
2	安否確認方法のみ決めている	9.9
3	待ち合わせ場所のみ決めている	13.9
4	安否確認方法と待ち合わせ場所の両方とも決めている	37.8
5	同居している家族はいない（一人暮らし）	22.8

(SA) 1回目Q6. あなたは火災について、次のことを知っていますか。 あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。

		全体	知っている	知らない	意味がよく分からない	
1回目Q6項目1	首都直下地震が発生した場合、最大の犠牲者が火災による死者と想定されていること (n=7349)	%	100.0	58.3	38.8	3.0
1回目Q6項目2	首都直下地震が発生した場合、火災からの避難を第一に考えるべきであること (n=7349)	%	100.0	51.5	45.3	3.2
1回目Q6項目3	関東大震災では、火災で多くの人が亡くなったこと (n=7349)	%	100.0	80.5	17.2	2.3
1回目Q6項目4	住宅が密集している地域では火災の被害が大きくなる可能性があること (n=7349)	%	100.0	82.1	15.2	2.7
1回目Q6項目5	地震火災の事を考えて、「広域避難場所」に避難をして、延焼火災から難を逃れる必要があること (n=7349)	%	100.0	55.1	40.8	4.1
1回目Q6項目6	「広域避難場所」に避難をする前に、地域ごとで「一時（いつとき）避難場所」に集まってから「広域避難場所」に移動するべきこと (n=7349)	%	100.0	39.4	55.2	5.5
1回目Q6項目7	火災が発生しても、延焼火災の恐れがない大きな駅の近くやビル街（地区内残留地区）にいる場合はそこに留まるべきであること (n=7349)	%	100.0	50.2	45.7	4.1
1回目Q6項目8	火災の可能性がなくなったら、自宅にいられる人は自宅に自宅にいるべきであること (n=7349)	%	100.0	54.4	41.4	4.2
1回目Q6項目9	首都圏で地震が発生した場合、速やかに帰宅をする必要はないこと (n=7349)	%	100.0	63.8	32.3	3.9

(SA) 1回目Q7. 災害時の対応、救援活動について、次のような二つの意見があります。 A. 災害時、まず自分や家族が助かるための対策を考えておくことが重要である B. 災害時、いかに被災者を支援したり、ボランティアをしたりするかが重要である

(1) あなた自身はAとBのどちらの意見に近いですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	A	45.8
2	Aに近い	31.3
3	どちらかといえばA	19.3
4	どちらかといえばB	2.5
5	Bに近い	0.6
6	B	0.4

(SA)1回目Q8. (2) マスメディアの論調はAとBのどちらの意見に近いですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	A	14.9
2	Aに近い	25.5
3	どちらかといえばA	34.2
4	どちらかといえばB	17.7
5	Bに近い	5.0
6	B	2.7

(SA)1回目Q9. (3) 世間の人はどうに考えている人が多いと思いますか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	圧倒的にAの意見の人が多い	35.2
2	Aの意見の人が多い	36.0
3	どちらかといえばAの意見が多い	23.6
4	どちらかといえばBの意見が多い	4.1
5	Bの意見の人が多い	0.8
6	圧倒的にBの意見の人が多い	0.3

(SA)1回目Q10. 災害時の事前対応、事後対応について、次のような二つの意見があります。 A. 災害が起こってしまってからでは遅いので、災害発生前の対策を考えておくことが重要である B. 災害は防げないのだから、災害発生後の対応を考えておくことが重要である

(1) あなた自身はAとBのどちらの意見に近いですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	A	16.6
2	Aに近い	26.5
3	どちらかといえばA	23.7
4	どちらかといえばB	19.1
5	Bに近い	8.9
6	B	5.2

(SA)1回目Q11. (2) マスメディアの論調はAとBのどちらの意見に近いですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	A	15.6
2	Aに近い	27.9
3	どちらかといえばA	32.4
4	どちらかといえばB	16.3
5	Bに近い	5.2
6	B	2.6

(SA)1回目Q12. (3) 世間の人はどうに考えている人が多いと思いますか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	圧倒的にAの意見の人が多い	12.2
2	Aの意見の人が多い	29.0
3	どちらかといえばAの意見が多い	32.1
4	どちらかといえばBの意見が多い	17.7
5	Bの意見の人が多い	6.2
6	圧倒的にBの意見の人が多い	2.7

(SA)1回目Q13. 災害対策を誰が中心的に実施するかについて、次のような二つの意見があります。 A. 災害時には、自治体や政府は何もできないので、まず自分や家族で自分たちの身を守るべきだ B. 災害時には、まず公的な機関である自治体や政府が住民の身を守るために何とかすべきだ

(1) あなた自身はAとBのどちらの意見に近いですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	A	29.1
2	Aに近い	31.3
3	どちらかといえばA	24.9
4	どちらかといえばB	9.2
5	Bに近い	3.2
6	B	2.4

(SA)1回目Q14. (2) マスメディアの論調はAとBのどちらの意見に近いですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	A	11.3
2	Aに近い	22.8
3	どちらかといえばA	28.8
4	どちらかといえばB	23.2
5	Bに近い	9.3
6	B	4.6

(SA)1回目Q15. (3) 世間の人はどうに考えている人が多いと思いますか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	圧倒的にAの意見の人が多い	15.1
2	Aの意見の人が多い	27.5
3	どちらかといえばAの意見が多い	28.1
4	どちらかといえばBの意見が多い	18.1
5	Bの意見の人が多い	7.9
6	圧倒的にBの意見の人が多い	3.3

(SA)1回目Q16. あなたは、Q7～Q15まででお伺いしたような、救援活動、災害時の事前対応と事後対応、災害対策を誰が中心に実施するかなどの災害対策のありかたについて、もし意見を求められた場合、次のようなことをするつもりはありますか。あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。

			全体	するつもりがある	するつもりはない
1回目Q16項目1	Twitterで意見を述べる (n=7349)	%	100.0	10.7	89.3
1回目Q16項目2	Facebookで意見を述べる (n=7349)	%	100.0	7.0	93.0
1回目Q16項目3	LINEで友人・知人に意見を述べる (n=7349)	%	100.0	20.8	79.2
1回目Q16項目4	家族に積極的に意見を述べる (n=7349)	%	100.0	45.6	54.4
1回目Q16項目5	家族に意見を求められれば意見を述べる (n=7349)	%	100.0	65.1	34.9
1回目Q16項目6	友人に意見を求められれば意見を述べる (n=7349)	%	100.0	59.7	40.3
1回目Q16項目7	友人に積極的に意見を述べる (n=7349)	%	100.0	24.2	75.8
1回目Q16項目8	署名運動に協力する (n=7349)	%	100.0	26.8	73.2
1回目Q16項目9	街頭インタビューに応じる (n=7349)	%	100.0	19.3	80.7

(SA)1回目Q17. あなたは、首都直下地震によって被害を受けることを「自分ごと」としてとらえていますか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	強く「自分ごと」としてとらえている	26.2
2	やや「自分ごと」としてとらえている	40.1
3	どちらともいえない	20.7
4	あまり「自分ごと」としてとらえていない	10.3
5	全く「自分ごと」としてとらえていない	2.8

(SA)1回目Q19. 今後30年以内に首都直下地震はどれくらいの確率で発生すると思いますか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	100%	15.2
2	90%	8.8
3	80%	18.4
4	70%	20.7
5	60%	8.6
6	50%	16.4
7	40%	2.4
8	30%	4.7
9	20%	1.7
10	10%以下	3.1

(SA) 1回目Q20. 首都直下地震が起きた場合、以下のような被害にあうことに対して、どの程度不安を感じますか。

			全体	とても不安を感じる	やや不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	全く不安を感じない
1回目Q20項目1	自分自身の電話が繋がらなくなる (n=7349)	%	100.0	40.3	36.7	14.5	6.3	2.2
1回目Q20項目2	自分自身のメールやLINE・Twitterが使えなくなる (n=7349)	%	100.0	33.0	31.6	19.3	8.6	7.5
1回目Q20項目3	自分自身が大規模な延焼火災に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	40.5	34.4	18.5	5.2	1.4
1回目Q20項目4	自分自身が建物やエレベーター内に閉じ込められる (n=7349)	%	100.0	33.7	34.0	22.0	7.9	2.4
1回目Q20項目5	自分自身がデマ・流言にまどわされる (n=7349)	%	100.0	17.2	29.8	32.8	14.0	6.2
1回目Q20項目6	自分自身が土砂災害に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	18.6	20.7	29.4	21.3	10.1
1回目Q20項目7	自分自身が液状化被害に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	19.5	24.6	30.7	17.6	7.6
1回目Q20項目8	自分自身が群衆雪崩（なだれ）や将棋倒しに巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	19.9	25.1	30.8	15.8	8.5
1回目Q20項目9	自分自身が工場や建物の爆発被害に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	20.4	25.6	30.6	16.0	7.4
1回目Q20項目10	自分自身が川のはん濫や決壊被害に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	22.5	26.7	27.9	15.5	7.4

(SA) 1回目Q21. 首都直下地震が起きた場合、以下のような被害に、どれくらいの確率であろうと思いますか。

			全体	100%	90%	80%	70%	60%	50%	40%	30%	20%	10%以下
1回目Q21項目1	自分自身の電話が繋がらなくなる (n=7349)	%	100.0	32.8	16.9	20.3	10.6	6.1	9.5	1.1	1.0	0.4	1.2
1回目Q21項目2	自分自身、メールやLINE・Twitterが使えなくなる (n=7349)	%	100.0	27.8	15.7	18.8	11.8	7.8	11.1	1.6	1.6	0.7	3.0
1回目Q21項目3	自分自身が大規模な延焼火災に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	6.5	5.2	12.4	15.7	14.8	24.8	6.1	6.9	3.2	4.4
1回目Q21項目4	自分自身が建物やエレベーター内に閉じ込められる (n=7349)	%	100.0	5.2	4.3	9.1	11.5	12.9	26.0	8.0	9.5	5.5	7.9
1回目Q21項目5	自分自身がデマ・流言にまどわされる (n=7349)	%	100.0	4.9	3.7	8.2	10.5	12.5	23.1	8.6	10.5	6.5	11.6
1回目Q21項目6	自分自身が土砂災害に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	3.9	3.0	5.3	7.3	9.6	19.9	9.3	12.9	8.5	20.5
1回目Q21項目7	自分自身が液状化被害に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	4.2	3.5	6.6	8.5	11.0	20.4	9.1	11.9	8.4	16.3
1回目Q21項目8	自分自身が群衆雪崩（なだれ）や将棋倒しに巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	4.0	3.4	6.5	9.5	11.4	21.1	9.0	11.6	8.6	15.0
1回目Q21項目9	自分自身が工場や建物の爆発被害に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	4.1	3.3	6.5	9.4	11.2	20.9	8.9	11.6	9.1	15.0
1回目Q21項目10	自分自身が川のはん濫や決壊被害に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	4.7	5.1	8.0	10.1	11.3	19.7	7.9	10.3	8.2	14.7

(SA) 1回目Q22. 首都直下地震が起きた場合、以下のような被害が発生することに対して、どの程度不安を感じますか。

			全体	とても不安を感じる	やや不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	全く不安を感じない
1回目Q22項目1	首都圏内で電話が繋がらなくなる (n=7349)	%	100.0	43.0	36.3	13.5	5.3	1.9
1回目Q22項目2	首都圏内でメールやLINE・Twitterが使えなくなる (n=7349)	%	100.0	34.9	33.4	18.5	7.2	6.0
1回目Q22項目3	首都圏内で大規模な延焼火災が発生する (n=7349)	%	100.0	38.4	37.7	18.6	3.8	1.6
1回目Q22項目4	首都圏内の建物やエレベーター内に人が閉じ込められる (n=7349)	%	100.0	29.0	37.8	23.9	7.0	2.4
1回目Q22項目5	首都圏内でデマ・流言がまん延する (n=7349)	%	100.0	21.9	34.9	29.4	9.4	4.5
1回目Q22項目6	首都圏内で土砂災害が発生する (n=7349)	%	100.0	17.7	27.2	32.1	16.2	6.9
1回目Q22項目7	首都圏内で液状化が発生する (n=7349)	%	100.0	20.3	32.9	29.4	12.4	5.0
1回目Q22項目8	首都圏内で群衆雪崩 (なだれ) や将棋倒しが発生する (n=7349)	%	100.0	21.3	31.7	28.7	12.0	6.3
1回目Q22項目9	首都圏内の工場や建物で爆発が起こる (n=7349)	%	100.0	21.3	33.4	29.2	11.4	4.6
1回目Q22項目10	首都圏内の川がはん濫したり決壊したりする (n=7349)	%	100.0	24.0	34.1	26.5	11.0	4.4

(SA) 1回目Q23. 首都直下地震が起きた場合、以下のような被害に、どれくらいの確率であろうと思いますか。

			全体	100%	90%	80%	70%	60%	50%	40%	30%	20%	10%以下
1回目Q23項目1	首都圏内で電話が繋がらなくなる (n=7349)	%	100.0	33.9	17.4	18.6	10.7	6.1	9.4	1.5	1.1	0.4	1.1
1回目Q23項目2	首都圏内でメールやLINE・Twitterが使えなくなる (n=7349)	%	100.0	28.2	16.9	17.5	11.5	8.5	11.0	1.9	1.5	0.8	2.2
1回目Q23項目3	首都圏内で大規模な延焼火災が発生する (n=7349)	%	100.0	16.0	11.3	18.8	15.6	12.6	15.7	3.3	2.9	1.5	2.1
1回目Q23項目4	首都圏内の建物やエレベーター内に人が閉じ込められる (n=7349)	%	100.0	15.7	9.9	15.1	14.8	12.3	17.5	4.3	4.6	2.5	3.3
1回目Q23項目5	首都圏内でデマ・流言がまん延する (n=7349)	%	100.0	12.6	8.4	14.3	14.6	14.0	19.3	4.5	5.1	3.2	4.0
1回目Q23項目6	首都圏内で土砂災害が発生する (n=7349)	%	100.0	7.4	5.4	10.2	12.5	14.3	20.3	8.3	8.4	5.2	8.0
1回目Q23項目7	首都圏内で液状化が発生する (n=7349)	%	100.0	10.4	8.0	13.6	13.6	12.6	18.8	6.9	6.6	4.0	5.5
1回目Q23項目8	首都圏内で群衆雪崩 (なだれ) や将棋倒しが発生する (n=7349)	%	100.0	9.7	7.2	12.8	12.5	13.3	19.0	7.0	6.6	4.5	7.3
1回目Q23項目9	首都圏内の工場や建物で爆発が起こる (n=7349)	%	100.0	9.0	7.4	12.8	13.9	13.5	19.4	7.2	6.7	4.7	5.6
1回目Q23項目10	首都圏内の川がはん濫したり決壊したりする (n=7349)	%	100.0	9.9	8.5	14.0	13.1	13.1	18.8	6.1	6.5	4.4	5.6

(SA) 1回目Q24. 首都直下地震が起きた場合、以下のような被害にあうことに対して、どの程度不安を感じますか。

		全体	とても不安を感じる	やや不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	
1回目Q24項目1	自宅が倒壊する (n=7349)	%	100.0	33.3	31.0	19.7	13.0	3.0
1回目Q24項目2	自宅が火災に遭う (n=7349)	%	100.0	34.9	34.8	20.3	8.3	1.8
1回目Q24項目3	自宅のインフラ（電気・ガス・水道）が止まる (n=7349)	%	100.0	53.5	31.0	12.5	2.2	0.9
1回目Q24項目4	自分や家族がケガをする (n=7349)	%	100.0	43.1	34.0	18.0	3.5	1.5
1回目Q24項目5	自分や家族が命を落とす (n=7349)	%	100.0	43.4	29.1	20.4	5.1	2.0
1回目Q24項目6	自分や家族が帰宅困難者になる (n=7349)	%	100.0	35.6	33.2	21.7	6.7	2.7
1回目Q24項目7	自分や家族が避難生活を余儀なくされる (n=7349)	%	100.0	37.5	34.7	20.8	5.2	1.7
1回目Q24項目8	自分や家族の食べ物・飲み物がなくなる (n=7349)	%	100.0	40.7	35.7	18.1	4.3	1.3

(SA) 1回目Q25. 首都直下地震が起きた場合、以下のような被害に、どれくらいの確率であると思いますか。

		全体	100%	90%	80%	70%	60%	50%	40%	30%	20%	10%以下	
1回目Q25項目1	自宅が倒壊する (n=7349)	%	100.0	7.7	7.0	13.8	13.3	11.8	19.9	6.3	8.2	4.7	7.4
1回目Q25項目2	自宅が火災に遭う (n=7349)	%	100.0	7.1	7.0	14.4	14.5	13.5	21.8	5.8	7.2	4.1	4.6
1回目Q25項目3	自宅のインフラ（電気・ガス・水道）が止まる (n=7349)	%	100.0	25.6	15.8	18.4	12.7	9.2	12.3	1.8	2.0	0.8	1.4
1回目Q25項目4	自分や家族がケガをする (n=7349)	%	100.0	9.1	8.2	15.0	15.2	13.8	23.9	3.9	5.0	2.7	3.2
1回目Q25項目5	自分や家族が命を落とす (n=7349)	%	100.0	6.9	5.6	10.8	10.9	12.0	25.5	5.5	7.5	5.4	9.9
1回目Q25項目6	自分や家族が帰宅困難者になる (n=7349)	%	100.0	12.8	10.2	15.3	12.2	11.5	19.6	3.8	5.1	3.3	6.2
1回目Q25項目7	自分や家族が避難生活を余儀なくされる (n=7349)	%	100.0	12.1	9.4	14.9	13.5	12.7	20.7	4.0	5.0	3.4	4.4
1回目Q25項目8	自分や家族の食べ物・飲み物がなくなる (n=7349)	%	100.0	14.1	11.0	15.8	13.7	12.5	18.6	4.0	4.3	2.8	3.3

(MA) 1回目Q26. あなたはこの1か月の間、首都直下地震に関する情報に接しましたか。あてはまるものをいくつでもお選びください。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	テレビで首都直下地震に関する情報を見た	29.1
2	新聞や雑誌で首都直下地震に関する情報を見た	10.2
3	インターネットで首都直下地震に関する情報を見た	13.0
4	地震動予測地図を見た	6.5
5	市区町村の避難所などが書かれている防災マップを見た	13.3
6	東京都の『震災時火災における避難場所や避難道路』を確認した	7.1
7	東京都の『あなたのまちの地域危険度』を確認した	6.4
8	『東京防災』を見た	9.0
9	その他	0.2
10	上記の中であてはまるものはない	54.8

(SA)1回目Q27. 以下のメディアについて、ふだん1日平均どのくらい利用していますか。あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。
※「ラジオ」はradikoも含みます。

			全体	8時間以上	5時間以上8時間未満	4時間以上5時間未満	3時間以上4時間未満	2時間以上3時間未満	1時間以上2時間未満	1時間以上1時間30分未満	30分以上1時間未満	30分未満	まったく利用しない
1回目Q27項目1	テレビ（NHK）(n=7349)	%	100.0	0.7	0.7	1.5	2.5	4.8	6.8	10.6	17.5	27.6	27.4
1回目Q27項目2	テレビ（NHK以外）(n=7349)	%	100.0	3.0	5.0	5.6	9.7	14.0	11.4	12.0	11.5	11.7	16.1
1回目Q27項目3	ラジオ（NHK）(n=7349)	%	100.0	0.3	0.4	0.7	1.0	1.5	1.7	1.5	2.7	8.9	81.2
1回目Q27項目4	ラジオ（NHK以外）(n=7349)	%	100.0	0.8	1.3	1.3	1.7	2.8	2.8	2.6	4.1	12.4	70.2
1回目Q27項目5	新聞(n=7349)	%	100.0	0.3	0.3	0.5	1.0	1.6	2.5	3.8	11.6	26.1	52.3
1回目Q27項目6	雑誌(n=7349)	%	100.0	0.2	0.3	0.4	0.7	1.3	1.7	1.9	5.8	25.4	62.5
1回目Q27項目7	パソコンでのインターネット（n=7349）	%	100.0	5.7	5.3	6.0	9.6	15.2	12.4	12.8	10.8	9.6	12.6
1回目Q27項目8	スマートフォン・従来型携帯電話でのインターネット（n=7349）	%	100.0	2.5	2.4	3.9	6.1	10.3	11.5	12.8	15.7	18.3	16.4

(MA)1回目Q28. あなたは、以下のホームページやアプリをふだん見たり利用したりしますか。あてはまるものをいくつでもお選びください。

		%
全体(n=6868)		100.0
1	LINE	65.2
2	Twitter	35.3
3	Facebook	27.8
4	YouTube	55.7
5	NHKのホームページ	10.8
6	NHKニュース・防災アプリ	17.0

(SA)1回目Q29. あなたは、次のメディアの情報のうち、信頼できる情報はどの程度あると思いますか。あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。なお、利用していないメディアについては、大体の印象でお答えください。※「ラジオ」はradikoも含みます。

			全体	全部信頼できる	大部分信頼できる	半々くらい	一部しか信頼できない	まったく信頼できない
1回目Q29項目1	テレビ（NHK）(n=7349)	%	100.0	9.4	48.9	28.6	7.3	5.8
1回目Q29項目2	テレビ（NHK以外）(n=7349)	%	100.0	4.0	37.4	42.0	11.7	4.9
1回目Q29項目3	ラジオ（NHK）(n=7349)	%	100.0	7.4	44.7	33.4	8.0	6.5
1回目Q29項目4	ラジオ（NHK以外）(n=7349)	%	100.0	3.8	35.5	43.9	11.1	5.7
1回目Q29項目5	新聞(n=7349)	%	100.0	5.4	40.1	36.7	11.4	6.4
1回目Q29項目6	雑誌(n=7349)	%	100.0	1.5	14.0	47.6	26.8	10.1
1回目Q29項目7	パソコンでのインターネット（n=7349）	%	100.0	2.5	20.3	52.9	20.3	3.9
1回目Q29項目8	スマートフォン・従来型携帯電話でのインターネット（n=7349）	%	100.0	2.7	19.3	52.6	20.5	5.0

(SA)1回目Q30. あなたは、以下のNHKの番組を見ることがありますか。それぞれあてはまるものを1つ選択してください。

		全体	毎回必ず見る	よく見る	ほとんど見ない	見たことがない	
1回目Q30項目1	NHKスペシャル(n=7349)	%	100.0	2.3	23.9	41.4	32.4
1回目Q30項目2	おはよう日本(n=7349)	%	100.0	5.3	15.5	38.5	40.7
1回目Q30項目3	あさいち(n=7349)	%	100.0	2.2	11.7	41.4	44.8
1回目Q30項目4	まいにちススキ(n=7349)	%	100.0	0.6	2.6	19.8	77.0
1回目Q30項目5	ごごナマ(n=7349)	%	100.0	0.6	4.7	26.1	68.5
1回目Q30項目6	シブ5時(n=7349)	%	100.0	1.0	7.1	26.8	65.1
1回目Q30項目7	首都圏ネットワーク(n=7349)	%	100.0	2.3	18.5	37.3	41.8
1回目Q30項目8	沼にハマって聞いてみた(n=7349)	%	100.0	0.5	3.0	15.8	80.7
1回目Q30項目9	ハートネットTV(n=7349)	%	100.0	0.5	3.5	19.5	76.6

(SA)1回目Q31. あなたはテレビ放送を見ながらスマートフォン、携帯電話を利用することがよくありますか。

		%
全体(n=7349)		100.0
1	よくある	27.6
2	ときどきある	29.3
3	あまりない	12.5
4	ほとんどない	11.8
5	まったくない	18.8

(SA)1回目Q32. NHKが12月1日から始める「体感 首都直下地震ウイーク」をご存知ですか。

		%
全体(n=7349)		100.0
1	知っている	10.7
2	知らない	89.3

(MA)1回目Q33. あなたは、「体感 首都直下地震ウイーク」を何で見聞きしましたか。あてはまるものをすべて選択してください。

		%
全体(n=785)		100.0
1	NHKスペシャル	43.8
2	NHKの他のテレビ番組	60.5
3	NHKのラジオ	5.4
4	新聞・雑誌	9.3
5	NHKのホームページ	11.5
6	NHKのスマートフォン・アプリ	4.6
7	NHK以外のホームページ	4.2
8	LINEの友達の投稿	3.6
9	Twitterの友達の投稿	3.8
10	Facebookの友達の投稿	2.8
11	LINEのNHK(公式)の投稿	2.7
12	TwitterのNHK(公式)の投稿	3.3
13	FacebookのNHK(公式)の投稿	2.2
14	LINEの友人以外の投稿(NHKの公式アカウントを除く)	3.1
15	Twitterの友人以外の投稿(NHKの公式アカウントを除く)	2.9
16	Facebookの友人以外の投稿(NHKの公式アカウントを除く)	2.0
17	家族や友人の会話	4.8
18	デジタルサイネージ広告	1.9

(SA)1回目Q34. NHKが12月2日から4夜連続で放送をする、NHKスペシャル「ドラマ パラレル東京」をご存知ですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	知っている	10.0
2	知らない	90.0

(MA)1回目Q35. あなたは、NHKスペシャル「ドラマ パラレル東京」を何で見聞きましたか。あてはまるものをすべて選択してください。

		%
全体 (n=736)		100.0
1	NHKスペシャル	39.1
2	NHKの他のテレビ番組	57.7
3	NHKのラジオ	5.4
4	新聞・雑誌	10.9
5	NHKのホームページ	9.1
6	NHKのスマートフォン・アプリ	5.0
7	NHK以外のホームページ	6.3
8	LINEの友達の投稿	3.0
9	Twitterの友達の投稿	2.4
10	Facebookの友達の投稿	1.8
11	LINEのNHK（公式）の投稿	2.7
12	TwitterのNHK（公式）の投稿	2.6
13	FacebookのNHK（公式）の投稿	1.8
14	LINEの友人以外の投稿（NHKの公式アカウントを除く）	1.6
15	Twitterの友人以外の投稿（NHKの公式アカウントを除く）	2.3
16	Facebookの友人以外の投稿（NHKの公式アカウントを除く）	1.6
17	家族や友人の会話	4.9
18	デジタルサイネージ広告	2.3

(SA)1回目Q36. あなたが最後に在籍していた、または現在在学中の学校は、次のどれですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	中学校	1.0
2	高校	18.3
3	短大・高専・専門学校	21.0
4	大学	52.9
5	大学院	6.9

(SA)1回目Q37. お宅の世帯年収（税込）は、次のうちどれですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	～200万未満	11.8
2	200万円以上～400万円未満	19.5
3	400万円以上～600万円未満	21.6
4	600万円以上～800万円未満	16.5
5	800万円以上～1000万円未満	12.7
6	1000万円以上～1200万円未満	7.2
7	1200万円以上～1400万円未満	4.1
8	1400万円以上～	6.7

【第2波】

(SA) 2回目Q1. あなたは首都直下地震に関心がありますか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	とても関心がある	32.0
2	関心がある	33.4
3	やや関心がある	22.0
4	あまり関心がない	8.0
5	関心がない	1.6
6	全く関心がない	2.9

(FA) 2回目Q2_1. あなたは「首都直下地震」について、どのようなイメージをお持ちですか。どのようなことでも構いませんので、ご自由にお書きください（単語でも文章でも結構です）。

		%
全体 (n=7349)		100.0
回答者数 (n=7349)		100.0

省略

(SA) 2回目Q3. あなたは、以下のNHK「体感 首都直下地震ウィーク（12/1～12/8）」に関する番組を見ましたか。あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。それぞれの番組について、複数回見た場合には、最初に見た時のことについてお答えください。

		%	全体	放送中にすべて見た	放送中に一部見た	録画したものを見た	NHKオンデマンドで見た	見なかった
2回目Q3項目1	12月1日（日）21:00～のNHKスペシャル「プロローグ “あなたは生きのびられるか”」(n=7349)	%	100.0	7.1	10.5	4.8	0.2	77.4
2回目Q3項目2	12月2日（月）19:30～のNHKスペシャル「ドラマ パラレル東京 DAY1 “あなたを襲う震度7の衝撃”」(n=7349)	%	100.0	6.3	8.8	6.2	0.3	78.4
2回目Q3項目3	12月3日（火）22:00～のNHKスペシャル「ドラマ パラレル東京 DAY2 “多発する未知の脅威”」(n=7349)	%	100.0	5.8	6.6	6.2	0.4	81.0
2回目Q3項目4	12月4日（水）22:00～のNHKスペシャル「ドラマ パラレル東京 DAY3 “命の瀬戸際 新たな危機”」(n=7349)	%	100.0	5.6	6.2	6.0	0.4	81.8
2回目Q3項目5	12月5日（木）22:00～のNHKスペシャル「ドラマ パラレル東京 DAY4 “危機を生きぬくために”」(n=7349)	%	100.0	5.7	6.3	5.9	0.3	81.8
2回目Q3項目6	12月7日（土）21:00～のNHKスペシャル「終わりの見えない被災」(n=7349)	%	100.0	5.1	6.7	4.3	0.4	83.5
2回目Q3項目7	12月8日（日）21:10～のNHKスペシャル「災害に耐える社会へ」(n=7349)	%	100.0	5.5	6.7	4.1	0.4	83.3

(MA)2回目Q4. 「ドラマ パラレル東京」を見たきっかけは何ですか。あてはまるものをすべて選択してください。

		%
全体 (n=1825)		100.0
1	テレビをつけたら放送していた	31.3
2	普段からNHKスペシャルは習慣で見ている	25.4
3	12月1日(日)のNHKスペシャル「プロローグ”あなたは生きのびられるか”」	18.3
4	NHKスペシャルの予告	46.7
5	NHKの他のテレビ番組	9.6
6	NHKのラジオ	0.7
7	新聞・雑誌	5.1
8	NHKのホームページ	3.7
9	NHKのスマートフォン・アプリ	1.4
10	NHK以外のホームページ	1.8
11	番組に連動したLINEアカウント「パラレル東京」	2.4
12	LINEの友達の投稿	0.8
13	Twitterの友達の投稿	0.9
14	Facebookの友達の投稿	0.5
15	LINEのNHK(公式)の投稿	0.9
16	TwitterのNHK(公式)の投稿	1.3
17	FacebookのNHK(公式)の投稿	0.7
18	LINEの友人以外の投稿(NHKの公式アカウントを除く)	0.5
19	Twitterの友人以外の投稿(NHKの公式アカウントを除く)	0.9
20	Facebookの友人以外の投稿(NHKの公式アカウントを除く)	0.7
21	家族や友人の会話	7.0
22	デジタルサイネージ広告	0.8
23	前回のアンケート調査での告知	14.4

(MA)2回目Q5. 「ドラマ パラレル東京」を視聴しているときに、以下のようなことをしましたか。あてはまるものをすべて選択してください。

		%
全体 (n=1825)		100.0
1	番組に連動したLINEを見ながら、視聴した	7.0
2	友達とLINEをしながら、視聴した	3.5
3	家族や友人と番組について話しながら、視聴した	25.6
4	視聴しているときに、番組内容をSNSに投稿した	2.2
5	Twitterを見ながら、視聴した	3.8
6	Facebookを見ながら、視聴した	1.2
7	番組について、インターネットで調べながら視聴した	6.1
8	災害や防災について、インターネットで調べながら視聴した	7.1
9	その他のことをしながら視聴した	3.9
10	テレビだけを見ている	57.0

(FA)2回目Q5_9FA. 「ドラマ パラレル東京」を視聴しているときに、以下のようなことをしましたか。あてはまるものをすべて選択してください。

		%
全体 (n=72)		100.0
回答者数 (n=72)		100.0

省略

(SA)2回目Q6. 「ドラマ パラレル東京」をご覧になって、以下のうち、何が最も印象に残りましたか。

		%
全体 (n=1825)		100.0
1	登場人物の心の葛藤や行動	17.5
2	延焼火災	14.0
3	火災旋風	22.1
4	都内の物的被害 (建物、道路など)	16.9
5	都内の人的被害 (遺体、群衆雪崩など)	17.9
6	デマや誤った情報によるパニック	8.7
7	レスキュー隊員などによる救助のシーン	1.0
8	その他	1.9

(SA)2回目Q7. あなたは「ドラマ パラレル東京」をご覧になって、どのようなことを感じましたか。あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。

		%	全体	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
2回目Q7項目1	こうした地震が本当に起こり得ると感じた (n=1825)	%	100.0	61.8	35.2	2.4	0.7
2回目Q7項目2	ちょっと大げさすぎると感じた (n=1825)	%	100.0	7.1	18.7	46.6	27.6
2回目Q7項目3	首都直下地震への不安を感じた (n=1825)	%	100.0	59.6	34.2	5.3	0.8
2回目Q7項目4	いくら内閣府の想定に基づいていたとしても、フィクションにすぎないと感じた (n=1825)	%	100.0	6.3	15.9	47.5	30.3
2回目Q7項目5	いざ首都直下地震が起きたとき、自分はどうすべきなのかを考えた (n=1825)	%	100.0	44.5	47.3	7.3	0.9
2回目Q7項目6	さすがにここまで被害は起きないだろうと思った (n=1825)	%	100.0	5.4	16.8	44.4	33.4
2回目Q7項目7	地震対策の必要性を感じた (n=1825)	%	100.0	55.8	38.6	4.9	0.7
2回目Q7項目8	首都直下地震ではこういう被害が生じるのだなとイメージできた (n=1825)	%	100.0	48.9	44.3	5.9	1.0
2回目Q7項目9	私たち一人一人がどのように動けば良いのか、具体的なイメージがつくようになった (n=1825)	%	100.0	25.0	52.7	20.1	2.2
2回目Q7項目10	過去の地震を思い出した (n=1825)	%	100.0	27.1	42.8	23.3	6.7
2回目Q7項目11	気が滅入った (n=1825)	%	100.0	22.2	42.1	25.8	9.9
2回目Q7項目12	改めて、東京は危ないところだと思った (n=1825)	%	100.0	37.3	46.4	13.9	2.4
2回目Q7項目13	帰宅困難になったら家に帰らず、その場に留まろうと思うようになった (n=1825)	%	100.0	35.1	48.4	14.0	2.5
2回目Q7項目14	首都直下地震が発生したら、火災を考えて避難をしようと思うようになった (n=1825)	%	100.0	42.5	48.1	8.3	1.2
2回目Q7項目15	これから首都直下地震に備えて、多くのことを学んでいこうと思うようになった (n=1825)	%	100.0	38.0	50.7	10.1	1.3
2回目Q7項目16	事前に家族との安否確認の方法や待ち合わせ場所を確認しておこうと思うようになった (n=1825)	%	100.0	37.1	49.5	10.9	2.5
2回目Q7項目17	備蓄などを常におきたいと思うようになった (n=1825)	%	100.0	46.1	43.6	8.8	1.5

(SA)2回目Q8. あなたは、「ドラマ パラレル東京」に連動したLINEのグループチャットを、この1週間にどの程度見ましたか。見ていなくて、フォローしていない場合は、「フォローしていない」を選択してください。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	1日数回以上見た	1.7
2	1日一回程度見た	2.2
3	1週間のうちで何回か見た	2.3
4	見ていない	18.1
5	フォローしていない	75.8

(MA)2回目Q9. 「ドラマ パラレル東京」に連動したLINEのグループチャットをフォローしたきっかけは何ですか。あてはまるものをすべて選択してください。

		%
全体 (n=1782)		100.0
1	NHKスペシャル	32.7
2	NHKの他のテレビ番組	10.4
3	NHKのラジオ	2.0
4	新聞・雑誌	4.7
5	NHKのホームページ	5.7
6	NHKのスマートフォン・アプリ	2.5
7	NHK以外のホームページ	1.7
8	LINEの友達の投稿	2.2
9	Twitterの友達の投稿	1.3
10	Facebookの友達の投稿	1.2
11	LINEのNHK（公式）の投稿	1.9
12	TwitterのNHK（公式）の投稿	1.4
13	FacebookのNHK（公式）の投稿	1.1
14	LINEの友人以外の投稿（NHKの公式アカウントを除く）	1.1
15	Twitterの友人以外の投稿（NHKの公式アカウントを除く）	1.0
16	Facebookの友人以外の投稿（NHKの公式アカウントを除く）	0.7
17	家族や友人の会話	12.9
18	デジタルサイネージ広告	1.5
19	前回のアンケート調査での告知	40.5

(SA) 2回目Q10. 「ドラマ パラレル東京」に連動したLINEのグループチャットで最後に表示される「診断結果」で表示された防災タイプは何でしたか。

全体 (n=1782)		%
1	診断結果を見ていない	65.7
2	診断結果を覚えていない	10.4
3	レスキュー隊員	3.3
4	ヒーロー	1.3
5	新米ボリス	0.7
6	情熱のアーティスト	1.2
7	孤高の作家	1.5
8	研究一筋の学者	0.7
9	見習い探偵	0.5
10	つきあい上手	0.6
11	冷静沈着なコメンテーター	1.9
12	知識先行の防災マニア	0.8
13	普通	5.5
14	インフルエンサー	1.1
15	防災ビギナー	4.7

(MA) 2回目Q11. あなたは、「ドラマ パラレル東京」に連動したLINEのグループチャットをご利用になって、いかがでしたか。あてはまるものをすべて選択してください。

全体 (n=1740)		%
1	ドラマと連動したチャットは新規性があり、好奇心が満たされた	15.7
2	ドラマの登場人物とやり取りしているようで、親近感がわいた	11.5
3	放送中にもチャットや災害に関する情報が流れてきて臨場感があった	9.8
4	クイズによって首都直下地震に関する知識が増えた	11.4
5	首都直下地震に関する関心が高まった	24.5
6	放送時間以外にもたくさんチャットがあり、見るのが大変だった	5.7
7	チャットのペースが早すぎて、ついていけなかった	9.4
8	災害関連の情報（文字、動画、画像）で、イメージがふくらんだ	6.3
9	ドラマを見る事が、より興味深くなった	10.4
10	防災行動につながった	38.0

(SA) 2回目Q12. あなたは、「ドラマ パラレル東京」に連動したLINEのグループチャットをご覧になって、どのようなことを感じましたか。あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。

		全体	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
2回目Q12項目1	こうした地震が本当に起こり得ると感じた (n=1782)	%	100.0	36.8	46.3	8.5	8.5
2回目Q12項目2	ちょっと大きすぎると感じた (n=1782)	%	100.0	7.3	27.3	44.3	21.2
2回目Q12項目3	首都直下地震への不安を感じた (n=1782)	%	100.0	37.0	44.2	10.7	8.1
2回目Q12項目4	いくら内閣府の想定に基づいていたとしても、フィクションにすぎないと感じた (n=1782)	%	100.0	7.4	29.3	42.2	21.0
2回目Q12項目5	いざ首都直下地震が起きたとき、自分はどうすべきなのかを考えた (n=1782)	%	100.0	26.0	50.4	14.8	8.8
2回目Q12項目6	さすがにここまでの被害は起きないだろうと思った (n=1782)	%	100.0	6.2	29.0	41.2	23.6
2回目Q12項目7	地震対策の必要性を感じた (n=1782)	%	100.0	33.4	46.2	11.7	8.8
2回目Q12項目8	首都直下地震ではこういう被害が生じるのだなとイメージできた (n=1782)	%	100.0	28.5	50.3	12.7	8.5
2回目Q12項目9	私たち一人一人がどのように動けば良いのか、具体的なイメージがつくようになった (n=1782)	%	100.0	21.0	50.6	19.8	8.5
2回目Q12項目10	過去の地震を思い出した (n=1782)	%	100.0	21.0	45.9	21.3	11.8
2回目Q12項目11	気が滅入った (n=1782)	%	100.0	19.9	41.6	25.9	12.6
2回目Q12項目12	改めて、東京は危ないところだと思った (n=1782)	%	100.0	27.0	46.9	17.2	9.0
2回目Q12項目13	帰宅困難になったら家に帰らず、その場に留まろうと思うようになった (n=1782)	%	100.0	23.2	49.0	18.3	9.4
2回目Q12項目14	首都直下地震が発生したら、火災を考えて避難をしようと思うようになった (n=1782)	%	100.0	26.3	51.4	13.6	8.8
2回目Q12項目15	これから首都直下地震に備えて、多くのことを学んでいこうと思うようになった (n=1782)	%	100.0	26.3	50.1	14.9	8.8
2回目Q12項目16	事前に家族との安否確認の方法や待ち合わせ場所を確認しておこうと思うようになった (n=1782)	%	100.0	26.8	48.3	15.3	9.6
2回目Q12項目17	備蓄などを常におきたいと思うようになった (n=1782)	%	100.0	30.7	48.1	12.5	8.6

(SA) 2回目Q13. あなたは、以下の災害について不安を感じていますか。 あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。

		全体	とても不安を感じている	やや不安を感じている	どちらともいえない	あまり不安を感じていない	全く不安を感じていない	
2回目Q13項目1	首都直下地震 (n=7349)	%	100.0	48.9	36.1	9.8	3.1	2.0
2回目Q13項目2	南海トラフ地震 (n=7349)	%	100.0	27.1	42.3	20.3	6.7	3.7
2回目Q13項目3	津波 (n=7349)	%	100.0	12.5	23.6	28.2	23.3	12.3
2回目Q13項目4	高潮 (n=7349)	%	100.0	10.7	21.5	30.0	23.6	14.2
2回目Q13項目5	富士山噴火・浅間山噴火などの大規模降灰 (n=7349)	%	100.0	17.7	37.4	27.6	12.4	5.0
2回目Q13項目6	首都圏での河川の大規模はん濫（荒川や多摩川など） (n=7349)	%	100.0	22.2	37.0	22.4	12.4	6.0
2回目Q13項目7	内水はん濫や中小河川のはん濫 (n=7349)	%	100.0	16.9	34.8	26.9	14.1	7.3
2回目Q13項目8	土砂災害 (n=7349)	%	100.0	11.4	23.9	31.7	21.9	11.2
2回目Q13項目9	台風 (n=7349)	%	100.0	27.5	44.8	18.6	6.2	2.9
2回目Q13項目10	台風による停電 (n=7349)	%	100.0	31.0	43.2	18.3	5.0	2.5

(SA) 2回目Q14. あなたは以下の災害に関する用語を知っていますか。 あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。

		全体	知っている	知らない	
2回目Q14項目1	避難勧告・避難指示（緊急） (n=7349)	%	100.0	94.8	5.2
2回目Q14項目2	マグニチュード (n=7349)	%	100.0	96.3	3.7
2回目Q14項目3	震度 (n=7349)	%	100.0	97.4	2.6
2回目Q14項目4	緊急地震速報 (n=7349)	%	100.0	96.6	3.4
2回目Q14項目5	延焼火災 (n=7349)	%	100.0	70.2	29.8
2回目Q14項目6	通電火災 (n=7349)	%	100.0	75.6	24.4
2回目Q14項目7	火災旋風（せんぷう） (n=7349)	%	100.0	63.9	36.1
2回目Q14項目8	群衆雪崩（なだれ） (n=7349)	%	100.0	72.4	27.6
2回目Q14項目9	一時（いつとき）避難場所 (n=7349)	%	100.0	71.1	28.9
2回目Q14項目10	広域避難場所 (n=7349)	%	100.0	85.5	14.5

(MA) 2回目Q15. あなたは12月に入ってから、次のような地震対策の中で、新たに行うようになったもの、もしくは改めて行ったものがありますか。 あてはまるものをいくつでもお選びください。

		%
全体 (n=6155)		100.0
1	火災から逃れるための広域避難場所の確認	25.4
2	「広域避難場所」に集まる前に一時的に集まる「一時（いつとき）避難場所」の確認	18.0
3	避難生活を送るための避難所の確認	16.5
4	水の備蓄	49.3
5	食料の備蓄	40.6
6	非常用持ち出し袋の準備	19.6
7	懐中電灯の準備	35.1
8	乾電池や充電器、モバイルバッテリー等の準備	35.2
9	ラジオの準備	20.4
10	カセットコンロの準備	20.4

(SA) 2回目Q16. あなたは同居する家族と地震で連絡が取れなくなった場合を想定して、安否確認方法や待ち合わせ場所を決めていますか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	安否確認方法と待ち合わせ場所の両方を決めている	15.7
2	安否確認方法のみ決めている	10.7
3	待ち合わせ場所のみ決めている	15.8
4	安否確認方法と待ち合わせ場所の両方とも決めていない	35.2
5	同居している家族はいない (一人暮らし)	22.6

(SA) 2回目Q17. あなたは火災について、次のことを知っていますか。 あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。

		%	全体	知っている	知らない	意味がよく分からない
2回目Q17項目1	首都直下地震が発生した場合、最大の犠牲者が火災による死者と想定されていること (n=7349)	%	100.0	69.8	27.4	2.9
2回目Q17項目2	首都直下地震が発生した場合、火災からの避難を第一に考えるべきであること (n=7349)	%	100.0	64.2	32.9	3.0
2回目Q17項目3	関東大震災では、火災で多くの人が亡くなったこと (n=7349)	%	100.0	82.9	14.5	2.5
2回目Q17項目4	住宅が密集している地域では火災の被害が大きくなる可能性があること (n=7349)	%	100.0	82.5	14.9	2.6
2回目Q17項目5	地震火災の事を考えて、「広域避難場所」に避難をして、延焼火災から難を逃れる必要があること (n=7349)	%	100.0	63.8	32.3	3.9
2回目Q17項目6	「広域避難場所」に避難をする前に、地域ごとで「一時 (いつとき) 避難場所」に集まってから「広域避難場所」に移動するべきこと (n=7349)	%	100.0	51.7	43.0	5.3
2回目Q17項目7	火災が発生しても、延焼火災の恐れがない大きな駅の近くやビル街 (地区内残留地区) にいる場合はそこに留まるべきであること (n=7349)	%	100.0	61.7	34.3	4.0
2回目Q17項目8	火災の可能性がなくなったら、自宅にいられる人は自宅に自宅にいるべきであること (n=7349)	%	100.0	63.7	32.8	3.5
2回目Q17項目9	首都圏で地震が発生した場合、速やかに帰宅をする必要はないこと (n=7349)	%	100.0	72.1	24.2	3.8

(SA) 2回目Q18. 災害時の対応、救援活動について、次のような二つの意見があります。 A. 災害時、まず自分や家族が助かるための対策を考えておくことが重要である B. 災害時、いかに被災者を支援したり、ボランティアをしたりするかが重要である

(1) あなた自身はAとBのどちらの意見に近いですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	A	44.6
2	Aに近い	33.3
3	どちらかといえばA	18.5
4	どちらかといえばB	2.6
5	Bに近い	0.6
6	B	0.4

(SA) 2回目Q19. (2) マスメディアの論調はAとBのどちらの意見に近いですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	A	14.6
2	Aに近い	27.0
3	どちらかといえばA	33.3
4	どちらかといえばB	17.9
5	Bに近い	5.0
6	B	2.2

(SA) 2回目Q20. (3) 世間の人はどうに考えている人が多いと思いますか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	圧倒的にAの意見の人が多い	34.9
2	Aの意見の人が多い	37.1
3	どちらかといえばAの意見が多い	22.4
4	どちらかといえばBの意見が多い	4.4
5	Bの意見の人が多い	1.0
6	圧倒的にBの意見の人が多い	0.2

(SA) 2回目Q21. 災害時の事前対応、事後対応について、次のような二つの意見があります。 A. 災害が起こってしまったからでは遅いので、災害発生前の対策を考えておくことが重要である B. 災害は防げないのだから、災害発生後の対応を考えておくことが重要である

(1) あなた自身はAとBのどちらの意見に近いですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	A	16.8
2	Aに近い	26.5
3	どちらかといえばA	23.6
4	どちらかといえばB	18.1
5	Bに近い	9.4
6	B	5.6

(SA)2回目Q22. (2) マスメディアの論調はAとBのどちらの意見に近いですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	A	16.1
2	Aに近い	29.6
3	どちらかといえばA	30.8
4	どちらかといえばB	16.0
5	Bに近い	5.2
6	B	2.3

(SA)2回目Q23. (3) 世間の人はどう考えている人が多いと思いますか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	圧倒的にAの意見の人が多い	12.1
2	Aの意見の人が多い	29.8
3	どちらかといえばAの意見が多い	30.9
4	どちらかといえばBの意見が多い	17.9
5	Bの意見の人が多い	6.9
6	圧倒的にBの意見の人が多い	2.3

(SA)2回目Q24. 災害対策を誰が中心的に実施するかについて、次のような二つの意見があります。 A. 災害時には、自治体や政府は何もできないので、まず自分や家族で自分たちの身を守るべきだ B. 災害時には、まず公的な機関である自治体や政府が住民の身を守るために何とかすべきだ

(1) あなた自身はAとBのどちらの意見に近いですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	A	30.3
2	Aに近い	33.2
3	どちらかといえばA	24.1
4	どちらかといえばB	8.3
5	Bに近い	2.4
6	B	1.7

(SA)2回目Q25. (2) マスメディアの論調はAとBのどちらの意見に近いですか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	A	11.9
2	Aに近い	26.3
3	どちらかといえばA	28.7
4	どちらかといえばB	21.2
5	Bに近い	7.8
6	B	4.1

(SA)2回目Q26. (3) 世間の人はどのように考えている人が多いと思いますか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	圧倒的にAの意見の人が多い	15.4
2	Aの意見の人が多い	29.5
3	どちらかといえばAの意見が多い	27.2
4	どちらかといえばBの意見が多い	16.9
5	Bの意見の人が多い	7.8
6	圧倒的にBの意見の人が多い	3.2

(SA)2回目Q27. あなたは、Q18～Q26まででお伺いしたような、救援活動、災害時の事前対応と事後対応、災害対策を誰が中心に実施するかなどの災害対策のありかたについて、もし意見を求められた場合、次のようなことをするつもりはありますか。あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。

		%	全体	するつもりがある	するつもりはない
2回目Q27項目1	Twitterで意見を述べる (n=7349)	%	100.0	9.3	90.7
2回目Q27項目2	Facebookで意見を述べる (n=7349)	%	100.0	6.5	93.5
2回目Q27項目3	LINEで友人・知人に意見を述べる (n=7349)	%	100.0	17.6	82.4
2回目Q27項目4	家族に積極的に意見を述べる (n=7349)	%	100.0	41.8	58.2
2回目Q27項目5	家族に意見を求められれば意見を述べる (n=7349)	%	100.0	62.7	37.3
2回目Q27項目6	友人に意見を求められれば意見を述べる (n=7349)	%	100.0	57.4	42.6
2回目Q27項目7	友人に積極的に意見を述べる (n=7349)	%	100.0	22.0	78.0
2回目Q27項目8	署名運動に協力する (n=7349)	%	100.0	26.3	73.7
2回目Q27項目9	街頭インタビューに応じる (n=7349)	%	100.0	18.9	81.1

(SA)2回目Q28. あなたは、首都直下地震によって被害を受けることを「自分ごと」としてとらえていますか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	強く「自分ごと」としてとらえている	31.4
2	やや「自分ごと」としてとらえている	40.5
3	どちらともいえない	17.7
4	あまり「自分ごと」としてとらえていない	7.8
5	全く「自分ごと」としてとらえていない	2.6

(SA) 2回目Q29. 今後30年以内に首都直下地震はどれくらいの確率で発生すると思いますか。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	100%	14.7
2	90%	9.1
3	80%	19.0
4	70%	26.4
5	60%	7.6
6	50%	13.8
7	40%	1.7
8	30%	4.1
9	20%	1.1
10	10%以下	2.6

(SA) 2回目Q30. 首都直下地震が起きた場合、以下のような被害にあうことに対して、どの程度不安を感じますか。

		全体	とても不安を感じる	やや不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	
2回目Q30項目1	自分自身の電話が繋がらなくなる (n=7349)	%	100.0	42.5	37.2	12.8	5.0	2.4
2回目Q30項目2	自分自身のメールやLINE・Twitterが使えなくなる (n=7349)	%	100.0	34.4	32.4	18.3	7.4	7.4
2回目Q30項目3	自分自身が大規模な延焼火災に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	38.8	36.5	18.0	4.6	2.1
2回目Q30項目4	自分自身が建物やエレベーター内に閉じ込められる (n=7349)	%	100.0	31.9	35.3	22.1	7.8	2.9
2回目Q30項目5	自分自身がデマ・流言にまどわされる (n=7349)	%	100.0	18.1	31.4	31.0	13.3	6.2
2回目Q30項目6	自分自身が土砂災害に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	17.2	22.5	28.9	21.5	9.9
2回目Q30項目7	自分自身が液状化被害に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	18.6	26.4	30.5	16.9	7.6
2回目Q30項目8	自分自身が群衆雪崩（なだれ）や将棋倒しに巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	20.9	29.7	28.6	13.4	7.4
2回目Q30項目9	自分自身が工場や建物の爆発被害に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	19.7	28.5	29.1	15.7	6.9
2回目Q30項目10	自分自身が川のはん濫や決壊被害に巻き込まれる (n=7349)	%	100.0	21.4	28.5	28.2	14.8	7.1

(SA)2回目Q31. 首都直下地震が起きた場合、以下のような被害に、どれくらいの確率であと思いますか。

		全体	100%	90%	80%	70%	60%	50%	40%	30%	20%	10%以下	
2回目Q31項目1	自分自身の電話が繋がらなくなる(n=7349)	%	100.0	32.5	16.9	21.1	11.2	5.7	8.7	1.0	1.1	0.5	1.3
2回目Q31項目2	自分自身、メールやLINE・Twitterが使えなくなる(n=7349)	%	100.0	27.5	15.6	20.8	12.1	7.3	9.9	1.5	1.6	0.7	3.1
2回目Q31項目3	自分自身が大規模な延焼火災に巻き込まれる(n=7349)	%	100.0	7.0	5.6	14.3	16.5	15.1	21.9	6.4	6.4	2.8	3.9
2回目Q31項目4	自分自身が建物やエレベーター内に閉じ込められる(n=7349)	%	100.0	5.3	4.9	10.4	13.7	13.2	22.5	7.9	9.5	5.5	7.1
2回目Q31項目5	自分自身がデマ・流言にまどわされる(n=7349)	%	100.0	4.5	4.9	9.6	11.4	13.3	22.1	7.6	10.3	6.0	10.3
2回目Q31項目6	自分自身が土砂災害に巻き込まれる(n=7349)	%	100.0	3.5	2.8	6.4	9.2	10.5	18.7	10.1	13.3	7.7	17.7
2回目Q31項目7	自分自身が液状化被害に巻き込まれる(n=7349)	%	100.0	4.1	3.6	8.2	10.4	11.3	19.9	9.0	11.7	7.6	14.2
2回目Q31項目8	自分自身が群衆雪崩(なだれ)や将棋倒しに巻き込まれる(n=7349)	%	100.0	4.1	4.3	9.5	11.5	11.7	20.5	8.6	10.6	7.1	12.2
2回目Q31項目9	自分自身が工場や建物の爆発被害に巻き込まれる(n=7349)	%	100.0	3.9	3.9	8.4	10.3	12.1	19.9	8.8	11.7	7.9	13.3
2回目Q31項目10	自分自身が川のはん濫や決壊被害に巻き込まれる(n=7349)	%	100.0	4.7	4.8	9.9	11.7	11.5	18.5	8.1	10.8	7.2	12.9

(SA)2回目Q32. 首都直下地震が起きた場合、以下のような被害が発生することに対して、どの程度不安を感じますか。

		全体	とても不安を感じる	やや不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	
2回目Q32項目1	首都圏内で電話が繋がらなくなる(n=7349)	%	100.0	45.1	36.2	11.9	4.5	2.3
2回目Q32項目2	首都圏内でメールやLINE・Twitterが使えなくなる(n=7349)	%	100.0	36.3	33.8	17.0	6.7	6.2
2回目Q32項目3	首都圏内で大規模な延焼火災が発生する(n=7349)	%	100.0	41.0	37.8	15.9	3.3	2.1
2回目Q32項目4	首都圏内の建物やエレベーター内に人が閉じ込められる(n=7349)	%	100.0	29.5	38.7	22.8	6.5	2.4
2回目Q32項目5	首都圏内でデマ・流言がまん延する(n=7349)	%	100.0	23.4	35.2	27.8	9.0	4.6
2回目Q32項目6	首都圏内で土砂災害が発生する(n=7349)	%	100.0	17.7	28.5	31.7	15.6	6.5
2回目Q32項目7	首都圏内で液状化が発生する(n=7349)	%	100.0	20.2	33.7	29.3	11.6	5.2
2回目Q32項目8	首都圏内で群衆雪崩(なだれ)や将棋倒しが発生する(n=7349)	%	100.0	25.1	33.7	25.6	9.9	5.6
2回目Q32項目9	首都圏内の工場や建物で爆発が起こる(n=7349)	%	100.0	21.5	35.3	27.7	10.6	4.9
2回目Q32項目10	首都圏内の川がはん濫したり決壊したりする(n=7349)	%	100.0	23.5	35.4	26.4	9.9	4.7

(SA)2回目Q33. 首都直下地震が起きた場合、以下のような被害に、どれくらいの確率であうと思いますか。

		全体	100%	90%	80%	70%	60%	50%	40%	30%	20%	10%以下	
2回目Q33項目1	首都圏内で電話がつかなくなる(n=7349)	%	100.0	34.0	17.8	19.3	10.7	5.8	8.0	1.3	1.1	0.6	1.3
2回目Q33項目2	首都圏内でメールやLINE・Twitterが使えなくなる(n=7349)	%	100.0	28.5	16.8	19.1	12.4	7.2	9.3	1.9	1.6	0.8	2.4
2回目Q33項目3	首都圏内で大規模な延焼火災が発生する(n=7349)	%	100.0	17.3	12.2	19.9	16.5	11.5	13.1	3.3	2.6	1.5	2.3
2回目Q33項目4	首都圏内の建物やエレベーター内に人が閉じ込められる(n=7349)	%	100.0	16.3	11.0	16.4	15.2	12.2	14.6	4.3	4.3	2.4	3.4
2回目Q33項目5	首都圏内でデマ・流言がまん延する(n=7349)	%	100.0	12.9	9.5	15.2	14.4	13.3	17.6	5.2	5.1	3.0	4.0
2回目Q33項目6	首都圏内で土砂災害が発生する(n=7349)	%	100.0	7.7	5.6	12.3	13.7	13.7	19.5	7.5	8.0	4.5	7.4
2回目Q33項目7	首都圏内で液状化が発生する(n=7349)	%	100.0	10.6	7.9	14.7	14.4	13.5	17.8	5.9	6.2	3.7	5.3
2回目Q33項目8	首都圏内で群衆雪崩(なだれ)や将棋倒しが発生する(n=7349)	%	100.0	11.0	9.0	14.8	14.7	13.0	16.7	5.3	5.7	3.8	6.2
2回目Q33項目9	首都圏内の工場や建物で爆発が起こる(n=7349)	%	100.0	9.7	7.4	14.6	14.9	14.1	17.7	5.8	6.3	4.4	5.2
2回目Q33項目10	首都圏内の川がはん濫したり決壊したりする(n=7349)	%	100.0	10.3	8.2	14.9	14.9	13.4	17.8	5.6	5.9	3.8	5.4

(SA)2回目Q34. 首都直下地震が起きた場合、以下のような被害にあうことに対して、どの程度不安を感じますか。

		全体	とても不安を感じる	やや不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	全く不安を感じない	
2回目Q34項目1	自宅が倒壊する(n=7349)	%	100.0	33.6	31.6	19.0	12.5	3.3
2回目Q34項目2	自宅が火災に遭う(n=7349)	%	100.0	36.2	34.5	19.3	7.9	2.1
2回目Q34項目3	自宅のインフラ(電気・ガス・水道)が止まる(n=7349)	%	100.0	53.7	31.0	11.8	2.3	1.2
2回目Q34項目4	自分や家族がケガをする(n=7349)	%	100.0	42.6	34.9	16.9	3.7	1.9
2回目Q34項目5	自分や家族が命を落とす(n=7349)	%	100.0	41.7	30.0	20.1	5.4	2.8
2回目Q34項目6	自分や家族が帰宅困難者になる(n=7349)	%	100.0	35.1	34.3	20.8	6.6	3.2
2回目Q34項目7	自分や家族が避難生活を余儀なくされる(n=7349)	%	100.0	37.2	35.7	19.9	5.0	2.2
2回目Q34項目8	自分や家族の食べ物・飲み物がなくなる(n=7349)	%	100.0	41.2	35.5	17.4	4.0	1.9

(SA)2回目Q35. 首都直下地震が起きた場合、以下のような被害に、どれくらいの確率であうと思いますか。

		全体	100%	90%	80%	70%	60%	50%	40%	30%	20%	10%以下	
2回目Q35項目1	自宅が倒壊する(n=7349)	%	100.0	7.5	7.5	14.6	14.4	11.4	18.7	5.7	8.6	4.3	7.5
2回目Q35項目2	自宅が火災に遭う(n=7349)	%	100.0	7.0	8.0	15.5	15.5	12.9	20.0	5.3	7.0	3.8	5.0
2回目Q35項目3	自宅のインフラ(電気・ガス・水道)が止まる(n=7349)	%	100.0	26.9	16.1	18.7	12.8	8.4	10.7	1.9	1.8	0.9	1.7
2回目Q35項目4	自分や家族がケガをする(n=7349)	%	100.0	8.3	8.5	16.2	16.0	13.3	22.0	4.4	4.8	2.5	4.0
2回目Q35項目5	自分や家族が命を落とす(n=7349)	%	100.0	6.5	5.9	11.6	11.9	11.8	24.2	5.6	7.3	5.1	10.1
2回目Q35項目6	自分や家族が帰宅困難者になる(n=7349)	%	100.0	12.2	11.2	15.3	13.7	10.7	18.6	4.1	4.7	3.6	5.9
2回目Q35項目7	自分や家族が避難生活を余儀なくされる(n=7349)	%	100.0	11.6	10.6	16.2	14.2	11.6	19.2	4.2	5.0	3.0	4.5
2回目Q35項目8	自分や家族の食べ物・飲み物がなくなる(n=7349)	%	100.0	13.8	11.9	17.6	14.5	11.3	17.1	3.7	4.1	2.4	3.5

(MA) 2回目Q36. あなたは12月に入ってから、首都直下地震に関する情報に接しましたか。 あてはまるものをすべて選択してください。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	テレビで首都直下地震に関する情報を見た	42.2
2	新聞や雑誌で首都直下地震に関する情報を見た	9.8
3	インターネットで首都直下地震に関する情報を見た	16.3
4	地震動予測地図を見た	5.6
5	市区町村の避難所などが書かれている防災マップを見た	8.8
6	東京都の『震災時火災における避難場所や避難道路』を確認した	5.0
7	東京都の『あなたのまちの地域危険度』を確認した	4.6
8	『東京防災』を見た	6.4
9	その他	0.3
10	上記の中であてはまるものはない	45.0

(FA) 2回目Q36_9FA. あなたは12月に入ってから、首都直下地震に関する情報に接しましたか。 あてはまるものをすべて選択してください。

		%
全体 (n=24)		100.0
回答者数 (n=24)		100.0

省略

(SA) 2回目Q37. 以下のメディアについて、12月に入ってから、1日平均どのくらい利用しましたか。 あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。 ※「ラジオ」はradikoも含みます。

			全体	8時間以上	5時間以上8時間未満	4時間以上5時間未満	3時間以上4時間未満	2時間以上3時間未満	1時間30分以上2時間未満	1時間以上1時間30分未満	30分以上1時間未満	30分未満	まったく利用しなかった
2回目Q37項目1	テレビ (NHK) (n=7349)	%	100.0	2.5	1.3	1.6	2.7	5.8	7.0	11.5	16.2	21.7	29.7
2回目Q37項目2	テレビ (NHK以外) (n=7349)	%	100.0	6.1	4.1	5.3	8.7	12.7	9.9	11.4	10.2	9.9	21.7
2回目Q37項目3	ラジオ (NHK) (n=7349)	%	100.0	0.6	0.4	0.8	1.0	1.3	1.4	1.5	2.6	6.9	83.6
2回目Q37項目4	ラジオ (NHK以外) (n=7349)	%	100.0	1.5	1.3	1.1	1.5	2.7	2.5	2.8	4.8	9.4	72.6
2回目Q37項目5	新聞 (n=7349)	%	100.0	1.1	0.7	0.6	1.2	1.7	2.4	4.2	10.8	23.2	54.1
2回目Q37項目6	雑誌 (n=7349)	%	100.0	0.4	0.4	0.6	1.0	1.3	1.6	2.2	5.6	19.8	67.1
2回目Q37項目7	パソコンでのインターネット (n=7349)	%	100.0	9.8	5.0	6.1	9.2	12.9	11.3	11.4	10.0	7.4	16.9
2回目Q37項目8	スマートフォン・従来型携帯電話でのインターネット (n=7349)	%	100.0	6.0	2.7	3.6	5.9	9.1	10.0	11.8	13.3	15.8	21.8

(SA) 2回目Q38. あなたは12月に入ってから、以下のNHKの番組を見ましたか。あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。

		全体	すべて見た	何度か見た	一回見た	まったく見なかった	
2回目Q38項目1	おはよう日本 (n=7349)	%	100.0	3.8	19.4	4.0	72.7
2回目Q38項目2	あさいち (n=7349)	%	100.0	2.1	14.8	5.6	77.4
2回目Q38項目3	まいにちスクスク (n=7349)	%	100.0	0.5	2.7	1.8	95.0
2回目Q38項目4	ごごナマ (n=7349)	%	100.0	0.5	5.9	3.0	90.7
2回目Q38項目5	シブ5時 (n=7349)	%	100.0	0.8	9.5	4.0	85.7
2回目Q38項目6	首都圏ネットワーク (n=7349)	%	100.0	2.0	21.7	7.3	69.0
2回目Q38項目7	沼にハマって聞いてみた (n=7349)	%	100.0	0.5	2.8	2.7	93.9
2回目Q38項目8	ハートネットTV (n=7349)	%	100.0	0.5	3.2	3.0	93.2
2回目Q38項目9	生きるスキル (n=7349)	%	100.0	1.3	3.2	2.7	92.9
2回目Q38項目10	巨大地震あなたの町の”地域リスク” (n=7349)	%	100.0	2.0	6.4	5.7	86.0
2回目Q38項目11	楽しく！防災クンレン (n=7349)	%	100.0	0.7	2.5	2.8	93.9

(MA) 2回目Q39. あなたは12月に入ってから、「体感 首都直下地震ウイーク」を何で見聞きしましたか。あてはまるものをすべて選択してください。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	NHKスペシャル	27.2
2	NHKの他のテレビ番組	18.2
3	NHKのラジオ	1.4
4	新聞・雑誌	4.9
5	NHKのホームページ	2.9
6	NHKのスマートフォン・アプリ	1.1
7	NHK以外のホームページ	1.4
8	LINEの友達の投稿	0.9
9	Twitterの友達の投稿	1.1
10	Facebookの友達の投稿	0.6
11	LINEのNHK（公式）の投稿	0.7
12	TwitterのNHK（公式）の投稿	0.9
13	FacebookのNHK（公式）の投稿	0.4
14	LINEの友人以外の投稿（NHKの公式アカウントを除く）	0.4
15	Twitterの友人以外の投稿（NHKの公式アカウントを除く）	0.8
16	Facebookの友人以外の投稿（NHKの公式アカウントを除く）	0.4
17	家族や友人の会話	6.4
18	デジタルサイネージ広告	1.1
19	どこでも見聞きしなかった	53.6

(MA)2回目Q40. あなたは12月に入ってから、災害・防災についてNHKの番組以外で見聞きしましたか。あてはまるものをすべて選択してください。

		%
全体 (n=6091)		100.0
1	Twitterアカウント「みんなで考える防災 (@nhk_ikiruskill)」	4.2
2	NHK以外のテレビ番組	25.2
3	新聞	20.9
4	インターネット上の記事	32.3
5	講演会	0.3
6	家族・友人との会話	39.2

(MA)2回目Q41. あなたの家はハザードマップや東京都の地域危険度でどのような危険性がある場所ですか。あてはまるものをすべて選択してください。

		%
全体 (n=7349)		100.0
1	火災	32.4
2	建物の倒壊	25.3
3	土砂災害	6.6
4	高潮	6.1
5	洪水	21.1
6	津波	6.2
7	ハザードマップや東京都の地域危険度では危険性が低い	26.4
8	ハザードマップも東京都の地域危険度も見たことがない	21.6

(SA)2回目Q42. あなたは、「首都直下地震ウィーク」のキャンペーンを見聞きして、あなたご自身および周囲の人の防災に対する意識は高まったと思いますか。あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。

		全体	非常に意識は高まったと思う	意識は高まったと思う	やや意識は高まったと思う	あまり意識は高まらなかったと思う	意識は高まらなかったと思う	全く意識は高まらなかったと思う	
2回目Q42項目1	あなたご自身 (n=7349)	%	100.0	11.0	22.1	36.0	18.7	4.4	7.8
2回目Q42項目2	周囲の人 (n=7349)	%	100.0	6.3	17.8	38.2	24.5	5.3	7.8

(SA)2回目Q43. あなたは「首都直下地震ウィーク」のキャンペーン（ドラマ、NHKスペシャル、関連番組、LINEなどの関連するもの）に接し、どのようなことを感じましたか。あてはまるものを、それぞれ一つずつ選んでください。

			全体	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
2回目Q43項目1	こうした地震が本当に起こり得ると感じた(n=7349)	%	100.0	34.4	45.1	11.2	9.3
2回目Q43項目2	ちょっと大きすぎると感じた(n=7349)	%	100.0	6.7	22.7	47.6	23.0
2回目Q43項目3	首都直下地震への不安を感じた(n=7349)	%	100.0	33.2	45.2	12.7	9.0
2回目Q43項目4	いくら内閣府の想定に基づいていたとしても、フィクションにすぎないと感じた(n=7349)	%	100.0	6.1	23.9	46.2	23.8
2回目Q43項目5	いざ首都直下地震が起きたとき、自分はどうすべきなのかを考えた(n=7349)	%	100.0	21.4	49.2	19.0	10.3
2回目Q43項目6	さすがにここまで被害は起きないだろうと思った(n=7349)	%	100.0	5.8	23.9	46.3	24.1
2回目Q43項目7	地震対策の必要性を感じた(n=7349)	%	100.0	31.0	46.6	13.3	9.0
2回目Q43項目8	首都直下地震ではこういう被害が生じるのだなとイメージできた(n=7349)	%	100.0	25.2	49.2	16.1	9.4
2回目Q43項目9	私たち一人一人がどのように動けば良いのか、具体的なイメージがつくようになった(n=7349)	%	100.0	16.8	46.8	25.4	11.0
2回目Q43項目10	過去の地震を思い出した(n=7349)	%	100.0	19.3	41.6	25.3	13.8
2回目Q43項目11	気が滅入った(n=7349)	%	100.0	18.2	37.1	29.0	15.7
2回目Q43項目12	改めて、東京は危ないところだと思った(n=7349)	%	100.0	22.9	43.8	22.2	11.1
2回目Q43項目13	帰宅困難になったら家に帰らず、その場に留まろうと思うようになった(n=7349)	%	100.0	20.2	46.5	22.0	11.2
2回目Q43項目14	首都直下地震が発生したら、火災を考えて避難をしようと思うようになった(n=7349)	%	100.0	23.5	49.1	17.5	9.9
2回目Q43項目15	これから首都直下地震に備えて、多くのことを学んでいこうと思うようになった(n=7349)	%	100.0	20.7	49.9	19.4	10.0
2回目Q43項目16	事前に家族との安否確認の方法や待ち合わせ場所を確認しておこうと思うようになった(n=7349)	%	100.0	22.0	48.0	18.8	11.2
2回目Q43項目17	備蓄などを常におきたいと思うようになった(n=7349)	%	100.0	28.7	47.1	14.7	9.6

平成 30 年 7 月豪雨における災害情報と住民の避難行動
Problems of Mitigative Action and Disaster Information and How to
Solve Them: the Heavy Rain Event of July 2018

安本 真也 Shinya YASUMOTO 横田 崇 Takashi YOKOTA
牛山 素行 Motoyuki USHIYAMA 石黒 聡士 Satoshi ISHIGURO
関谷 直也 Naoya SEKIYA

目 次

1. はじめに
2. 愛媛県西予市の対応
3. アンケート調査の概要
4. アンケート調査結果
 - 4.1 普段の防災活動
 - 4.2 被害の状況
 - 4.3 避難前の状況
 - 4.4 災害前の情報入手状況
 - 4.5 実際の避難行動
 - 4.6 避難をしなかった人の状況
5. まとめ

引用・参考文献

付属資料（アンケート調査の単純集計）

キーワード：平成 30 年 7 月豪雨、愛媛県西予市、避難行動、災害情報

執筆分担：

安本 真也 東京大学大学院情報学環 総合防災情報研究センター 1～5 章
横田 崇 愛知工業大学工学部土木工学科
牛山 素行 静岡大学防災総合センター
石黒 聡士 愛媛大学 法文学部
関谷 直也 東京大学大学院情報学環 総合防災情報研究センター

本研究で用いた調査は、一般財団法人河川情報センターの平成30年度研究助成を受けて実施したものである。

1. はじめに

平成 30 年 7 月 5 日から西日本で停滞した前線や台風第 7 号の影響により、8 日にかけて西日本を中心に広い範囲で大雨となった。気象庁は大雨に警戒を呼びかけるために、被害の出ていない段階の、7 月 5 日 14 時に記者会見を開催、また福岡県、佐賀県、長崎県（いずれも 6 日 17 時 10 分発表）、岡山県（19 時 39 分発表）、広島県、鳥取県（いずれも 19 時 40 分発表）、兵庫県、京都府（いずれも 22 時 50 分発表）、岐阜県（7 日 12 時 50 分発表）、高知県、愛媛県（いずれも 8 日 5 時 50 分発表）の 1 府 10 県に大雨の特別警報を発表するなど、多くの情報発信を行い、警戒を呼びかけた。そしてこの大雨で結果的に、九州北部、四国、中国、近畿、東海地方などの多くで 24/48/72 時間降水量の値が観測史上第 1 位を記録し、河川の氾濫や土砂災害、鉄道の運休などが発生した（気象庁ホームページ, 2018）。各自治体も避難に関する情報を住民に発出したが、それでも災害関連死 73 名をふくめ、14 府県で死亡・行方不明者計 304 名（2020 年 6 月 5 日現在）の犠牲者が出た（2019 年 8 月 20 日時点での消防庁の資料を基に、筆者が岡山県、広島県、愛媛県の最新データを合算）（消防庁ホームページ, 2020；岡山県ホームページ, 2020；広島県ホームページ, 2020；愛媛県ホームページ, 2020）。なお、被害の全容については牛山（2019）が詳しい。災害後には内閣府によって「平成 30 年 7 月豪雨による水害・土砂災害からの避難に関するワーキンググループ」が設置され、「水害や土砂災害が広域かつ甚大に発生し、平成に入り最大の人的被害をもたらした平成 30 年 7 月豪雨を教訓とし、激甚化・頻発化する豪雨災害に対し、避難対策の強化を検討」されるなど（内閣府ホームページ, 2018）、その住民の避難行動に注目が集まった。

この災害は広範囲にわたって被害が生じたのであるが、本稿ではその中でも愛媛県西予市に着目する。西予市を流れる肱川の上流には野村ダムという治水・洪水調整・利水の役割を果たすダムがある（図 1.1）。このダムが 7 月 7 日 6 時 20 分に異常洪水時防災操作という、ダムに流れ込んだ流入量と同量の放流を行うように操作を行った。それに伴い、野村ダムの下流に位置する西予市野村町の多くの世帯が肱川の氾濫によって浸水、死者 5 名、全半壊・床上浸水が 351 棟（西予市災害対策本部運用改善検討会, 2019）という被害がでた。それでも、早朝の 5 時 10 分という時間帯に避難指示（緊急）が発せられたにもかかわらず、多くの避難行動をとっていた。早朝のダムの緊急放流という異常な状況で人々はそのような避難行動をとったのか。その全容を明らかにすることを目的として野村町の住民に対してアンケート調査を行った。

なお、本調査データを用いた避難意図を予測する解析などに特化した詳細な分析は安本他, 2020a) に掲載されている。本稿では基礎的な集計に基づいて調査全般について記述する。



図 1.1 肱川と野村ダムの位置（出典：毎日新聞，2018年8月8日 大阪朝刊 28頁）

2. 愛媛県西予市の対応

本章では、西予市における平成30年7月豪雨時の状況と行政などの対応について述べる。

そもそも、今回の豪雨で大きな被害が出た西予市野村地区は台風によって家屋被害が生じることはあっても、多数の死者が出るような大きな浸水害に見舞われた経験は近年ではなく、洪水に関するハザードマップもなかった。消防団も、肱川の支川（山瀬川）で土嚢を積んだ経験がある程度で、水害に対する訓練も全く行っておらず、水害に対する意識が高いとはいえない地域であった。

西予市は発災前日の7月6日午前中に自主避難の呼びかけを行い、野村地区では午前11時30分に指定避難所である野村公民館が避難所として開設された。だが、この日の夕方時点で、この避難所に避難した人はおらず、消防団も夜には一度自宅待機となった。

だが翌7日早朝に事態は急変する。午前2時32分に、西予市に洪水警報、大雨警報（浸水害）が発表された（大雨警報（土砂災害）は7月5日午前9時14分から発表が継続されていた）。実際、この頃より降水量が急増し、ダムへの流入量が急増している（図2.1）。この直前の午前2時30分には国土交通省四国地方整備局が管轄する野村ダムから野村支所長に対して「異常洪水時防災操作は不可避」との連絡がなされた（国土交通省四国地方整備局ホームページ，2018）。そもそも、今回の豪雨前には洪水調節容量350万 m^3 を上回る600万 m^3 の空き容量を確保するなど、ダム側も対応を行っていた。それでも、48時間で365mmという計画規模を大きく上回る、48時間で421mmの雨量を記録し（国土交通省四国

地方整備局ホームページ, 2018)、さらに貯水量が増加している降雨最後期に 25~50mm/h の強雨が 6 時間にわたって降るといった状況もあり、ダム流入量がピーク (1942m³/s、計画高水流量の 1.49 倍) に達する前に異常洪水時防災操作に移行することとなった(角・野原, 2019)。この異常洪水時防災操作を行うことで、河道の流下能力を上回る流量となり、河川の氾濫が予想された。

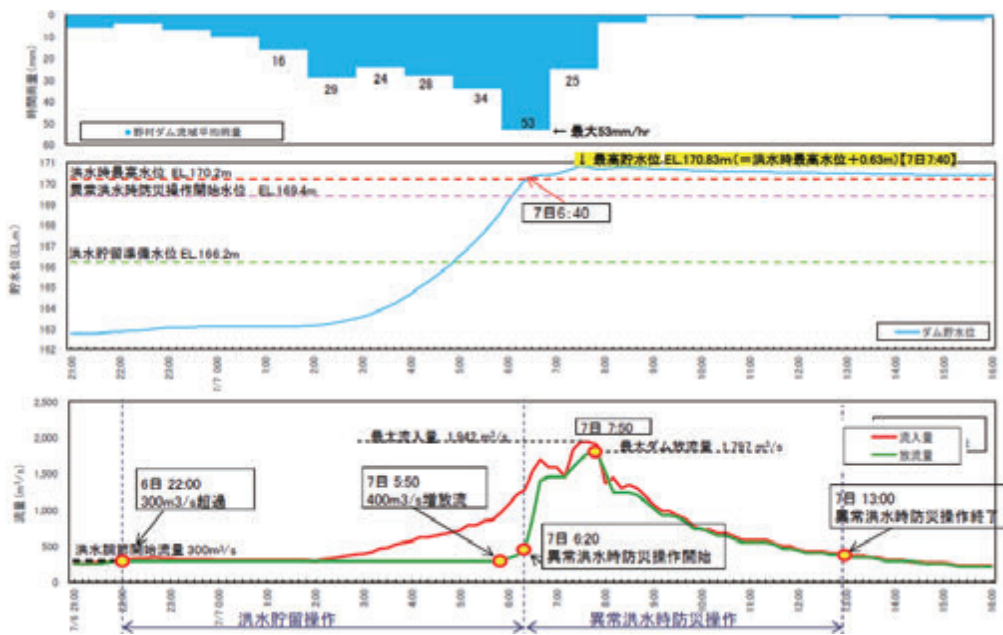


図 2.1 降水量と野村ダムの状況 (出典: 国土交通省四国地方整備局ホームページ, 2018)

一方、連絡を受けた西予市は、地元消防団の収集、野村中学校と野村小学校を追加の避難所として開設するなどの準備を行い、早朝の 5 時 10 分に野村町の中心地にある野村地区に対して避難指示を発出した。6 時 40 分頃から異常洪水時防災操作に移行する可能性が伝えられていたことから、市は防災無線や防災無線の戸別受信機などから「肱川が氾濫する恐れのある水位に達したので、野村地区に避難指示を発令。野村中学校、小学校及び野村公民館を避難所として開設。ただちに避難を開始してください」と避難の呼びかけを行い(国土交通省四国地方整備局ホームページ, 2018)、消防団も浸水しそうな家を長年の経験から割り出し、その地区に対して重点的に戸別の避難の呼びかけを行った。また、5 時 15 分には野村ダムからもサイレンやスピーカーなどを用いて、放流警報の通知がなされた。その後、6 時 20 分には異常洪水時防災操作が開始、13 時 10 分までゲートの操作が続けられた。参考までに、この時、ダムからの放流量は 7 時 50 分に最大の 1797m³/s を記録し、それまでの放流量 400m³/s (ダム流入量が増加中に水位が一定値を超えると、

300m³/s から放流量を増やすこととなっていた) から大幅に増加した。このときの西予市の対応の実態に関しては西予市の検討報告書 (西予市災害対策本部運用改善検討会, 2019) が詳しい。

なお、後述するが、避難時に西予市消防団が住民に避難を呼びかけるうえで非常に大きな役割を果たし、また、消防団員による犠牲者を出さなかった。その詳細に関しては、筆者らの研究グループが行った西予市消防団へのヒアリング調査を基にした拙稿 (安本他, 2020b) を参照いただきたい。

3. アンケート調査の概要

本章では、実施したアンケート調査の概要について述べる。

本稿で用いるアンケート調査は、野村地区で被災した住民に対して実施したものである。調査の概要は表 3.1 の通りである。本調査は実際の住民の避難行動を明らかにし、被災者の避難行動に対する意識を明らかにすることを目的として行った。調査票の配布は、愛媛大学の報告書を基に、自宅が浸水したと推定された地域、ならびに仮設住宅に対して調査員がポスティングで配布、郵送で回収を行った (図 3.1)。調査票の回答は世帯主またはそれに準ずる人に回答していただいた。

表 3.1 「西予市における西日本豪雨時浸水地域調査」の概要

調査対象	西日本豪雨時に愛媛県西予市野村町で浸水した地域に居住する世帯主
調査主体	東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター 愛知工業大学地域防災研究センター 静岡大学防災総合センター
調査方法	愛媛大学 ポスティング配布, 郵送回収 (世帯配布)
有効回答	139 サンプル (回収率 29.0%)
調査期間	2019 年 10 月 9 日～12 月 4 日



図 3.1 調査対象地域 (黒枠内、地理院地図に筆者加筆)

4. アンケート調査結果

4.1 普段の防災活動

本節では被災した住民の、事前の水害に対する備えの状況について述べる。

まず、「あなたは、現在の住所にお住まいになってから、おおよそ何年になりますか」と居住歴を聞いた結果が図 4.1.1 である。約半数の人が 30 年以上住んでいる、と答えており、地域のことをよく知っている人が多いと考えられる。平均では 36.0 年であった。

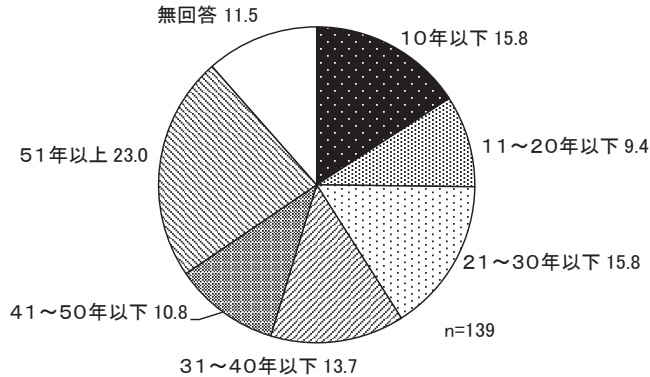


図 4.1.1 被災者の居住歴

次に、そうした人びとの水害に対する意識を問うた。「今回の災害が発生するまで、普段から水害に対してどのような対策をしていましたか」と、水害対策の状況を複数回答で問うた。その結果が図 4.1.2 である。普段から水害への対策は、「特に何も対策はしていなかった」が最も高く 60.4%であった。「水害時の避難場所を確認していた」は 15.1%であった。

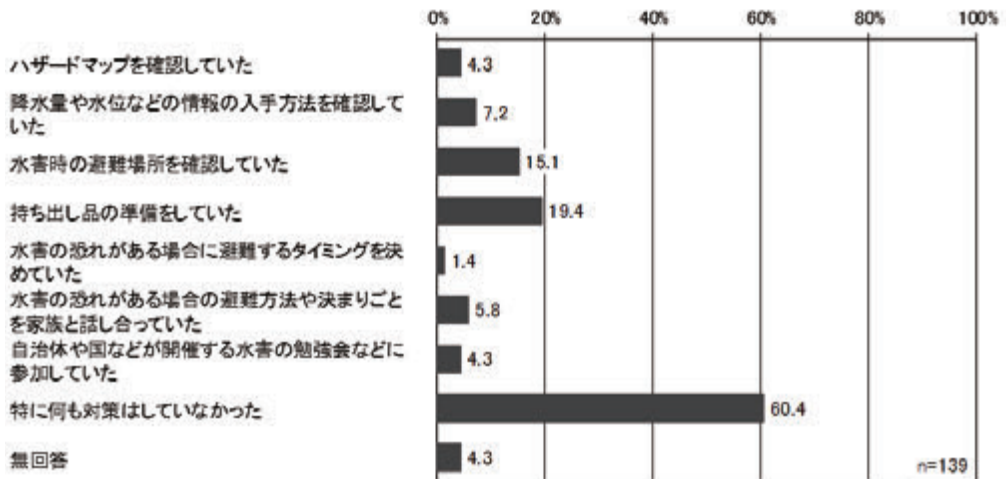


図 4.1.2 水害への対策状況

さらに「この災害の前に、洪水が発生し、自宅が浸水する可能性があると思っていましたか」と問うた結果が図 4.1.3 である。「洪水が発生しても、浸水しないだろうと思っていた」が 47.5%、「浸水するかどうか考えたこともなかった」が 38.1%とほとんどの人が自宅の浸水を予想していなかった。実際、西予市の消防団も水害に対する訓練を行っていないことから水害に対する意識が高い地域とはいえない。

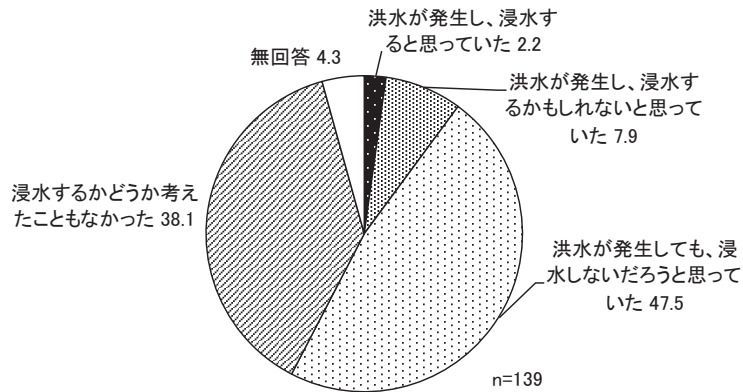


図 4.1.3 洪水による自宅の浸水可能性

4.2 被害の状況

本節では、実際にどのような被害を受けたのかを述べる。

まず、「西日本豪雨の水害の時、あなたの自宅は浸水しましたか」と浸水の状況を問うた。その結果が図 4.2.1 である。約 8 割の人が床上浸水の被害を受けた。

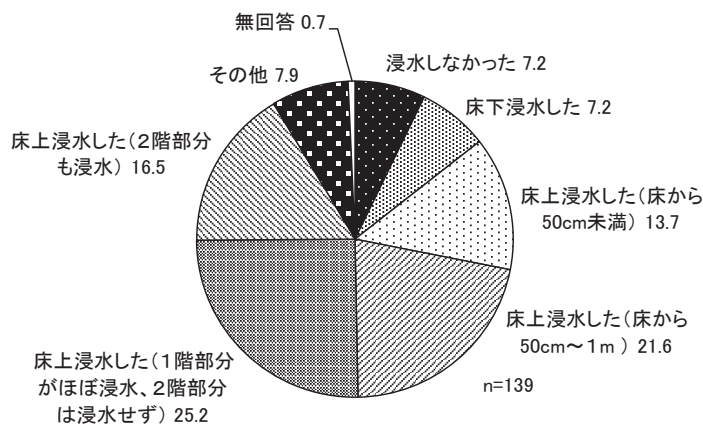


図 4.2.1 自宅の浸水状況

続いて、自宅以外の浸水状況について「今回の水害で、あなたの家の資産や財産はどのような被害を受けましたか」と複数回答で問うた。その結果が図 4.2.2 である。「畳・床が被害を受けた」、「家財道具が被害を受けた」、「戸・壁が被害を受けた」が7割を超え、高くなっている。

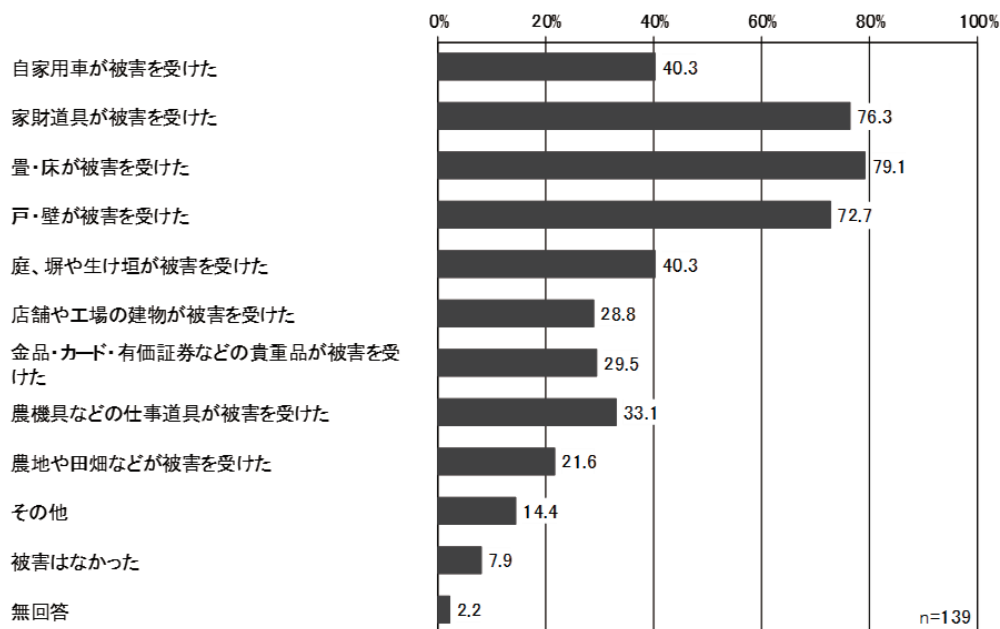


図 4.2.2 資産や財産の被害状況

4.3 避難前の状況

2章で述べたように、6日の夜までは災害をもたらすような雨ではなかった。だが、人びとが寝静まる時間帯の7日未明になり事態が急変し、早朝にダム of 緊急放流の情報、避難情報が出された。そこで本節では、災害前夜から避難前の状況を述べる。

なお、以下4章6節までは7月7日の早朝に野村町内（自宅もしくは町内の別の場所）にいた、と答えた132人を対象として回答していただいた。

まずは災害発生前夜の被災者の状況について「あなたは水害の前日7月6日の寝る前に、被害の発生に備えた対策を行いましたか」と複数回答で問うた。その結果が図 4.3.1 である。81.8%の人が「特に何もしていない」と答えており、翌日に備えた災害対策を行った人はほとんどいなかった。

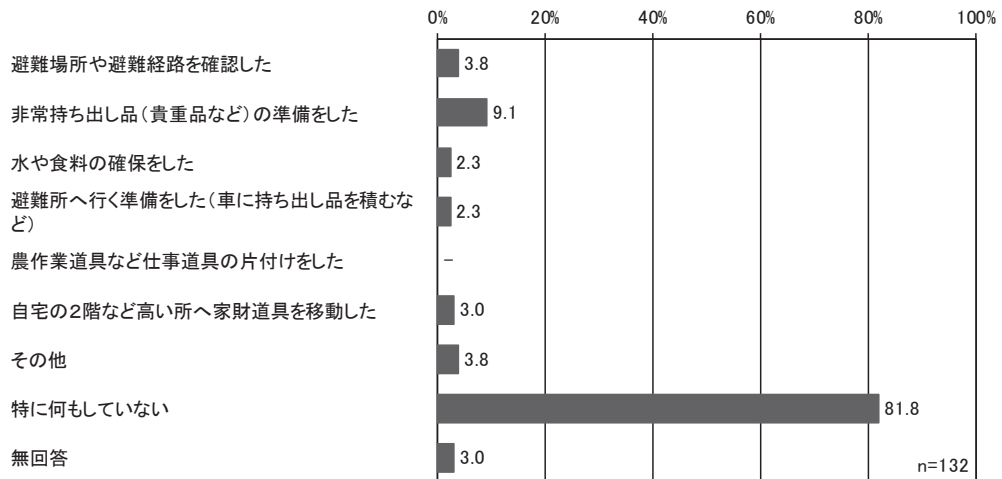


図 4.3.1 被災前夜の災害の備え

次に、「あなたは肱川がはん濫した7月7日は、何をきっかけに目を覚ましましたか」と起床のきっかけについて複数回答で問うた。その結果が図4.3.2である。最も多かったのは「消防署員・消防団が訪ねてきた」で37.1%、次いで、「雨の音」が28.0%であった。外の様子が普段と違うことが起床のきっかけとなった人も多かった。なお、「その他」は毎朝起きている時間なので起きた、という人などであった。

また、起床時間についても「7月7日のあなたが目を覚ました時間は具体的に、何時くらいでしたか。だいたい構いませんのでお答え下さい」と問うた。その結果、ほとんどの人が、避難情報が発出された5時から6時の間に目を覚ましている(図4.3.3)。

では、準備が出来ていない状況で起床した住民はどのように避難行動に至ったのか。情報の入手、避難行動について順を追って述べていく。

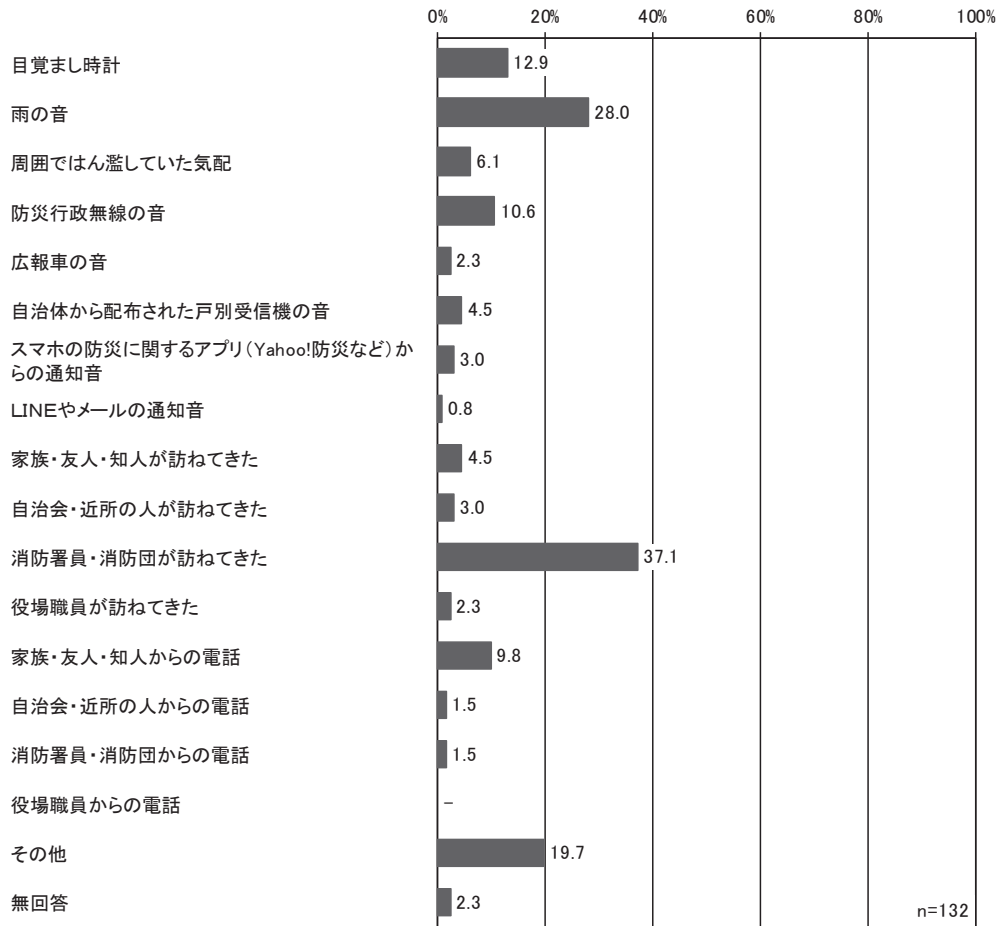


図 4.3.2 被災前夜の災害の備え

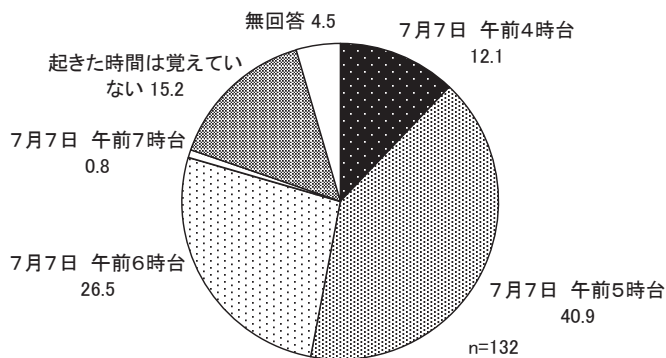


図 4.3.3 起床時間

4.4 災害前の情報入手状況

被害を受けた人は災害前、どのような情報を入手していたのか。本節では災害発生前の防災に関する情報入手の状況について述べる。

まず、「7月7日の早朝、肱川がはん濫する前に、あなたは次のような情報を入手しましたか」と様々な情報の入手状況を問うた。その結果が図4.4.1である。「入手して危機感を感じた」割合が最も高かったのは「西予市からの避難指示（緊急）」であった。全体の約3割の人が危機感を感じていた。また、「直接確認した肱川の状況」「近隣住民の避難状況」「ダムが緊急放流する（異常洪水時防災操作を行う）」という情報は情報を入手した人の割合が全体の約4割程度とそれほど多くはないが、情報を入手した人の約半数は「危機感を感じた」と答えている。これらの結果から、なにか一つの情報で全ての人が危機感を抱くことが難しい、ということがいえよう。

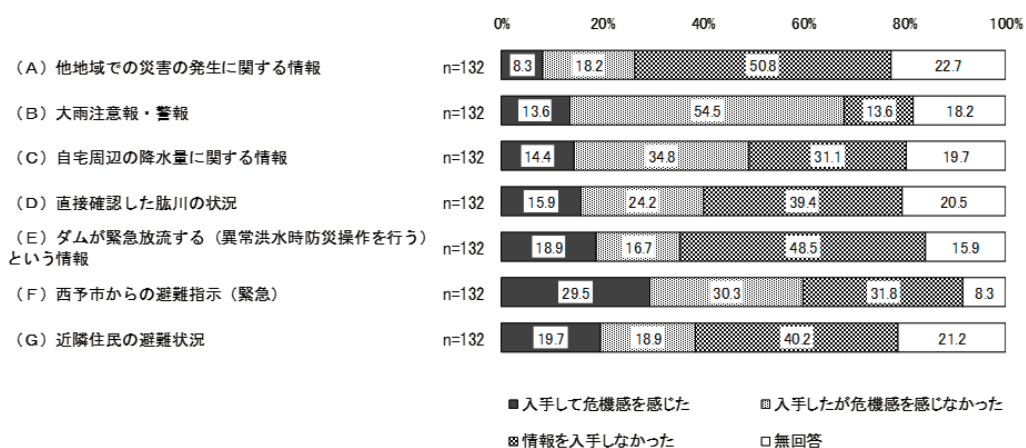


図 4.4.1 災害に関する情報の入手状況

次に、再度、西予市からの避難情報の入手状況について、改めて状況を説明した上で、「西予市は、7月7日朝5時10分に避難指示（緊急）を出しました。あなたは肱川がはん濫する前に、この避難指示（緊急）を聞きましたか」と問うた。その結果、40.9%の人が避難情報を聞いたと答えた（図4.4.2）。

上記で避難情報を「聞いた」と答えた人に「あなたは、避難指示（緊急）をどのような形で入手しましたか」と情報入手手段を複数回答で問うた。その結果が図4.4.3である。「消防署員・消防団から直接聞いた」が74.1%と突出して多く、それ以外の手段はあまり情報源として活用されていなかった。これは、消防署員や消防団が戸別に避難を呼びかけたことの影響が大きいといえる（呼びかけの実情は安本他、2020b）。

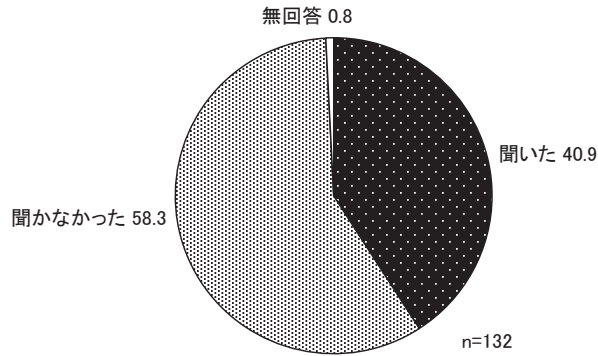


図 4.4.2 避難情報の認知状況

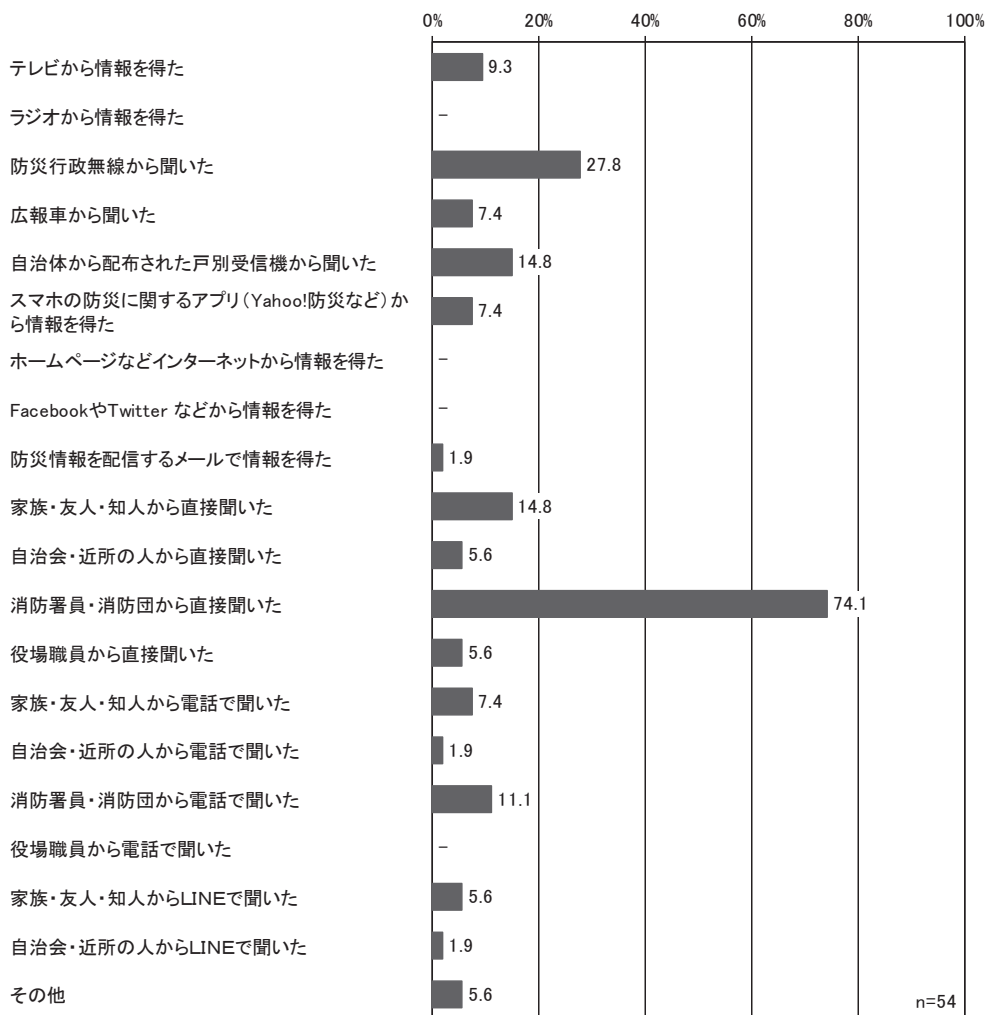


図 4.4.3 避難情報の入手手段

さらに、避難情報を「聞いた」と答えた人に「その情報を見聞きして、自宅周辺で浸水する可能性があると思いましたが」と問うた。その結果、53.7%は自宅周辺が浸水するとは思っていなかった（図 4.4.4）。約半数の人は避難情報で、自宅が浸水するとは思っていない。

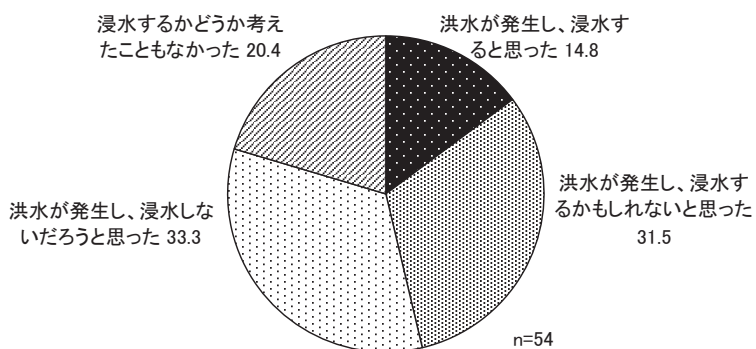


図 4.4.4 避難情報を聞いてからの自宅の浸水可能性

次に、緊急放流の入手状況についても改めて「野村ダムが緊急の放流を行う（異常洪水時防災操作）という情報が7月7日朝5時15分に出されました。あなたは、肱川がはん濫する前に、この情報を聞きましたか」と問うた。その結果、30.3%の人が緊急放流の情報を「聞いた」と答えた（図 4.4.5）。

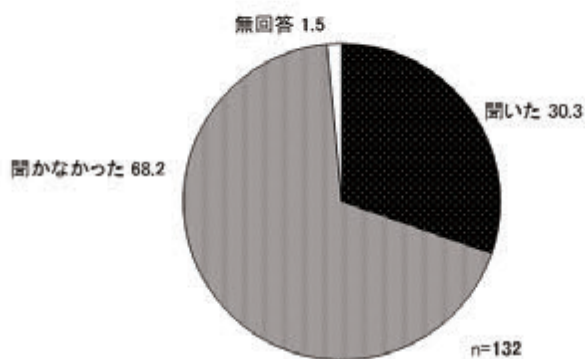


図 4.4.5 緊急放流の情報の認知状況

上記で緊急放流の情報を「聞いた」と答えた人に「あなたは、野村ダムが緊急の放流を行う（異常洪水時防災操作）という情報をどのような形で入手しましたか」と情報入手手段を複数回答で問うた。その結果が図 4.4.6 である。ここでも避難情報と同様に「消防署員・消防団から直接聞いた」が 75.0%と突出して多く、それ以外の手段はあまり情報源として活用されていなかった。

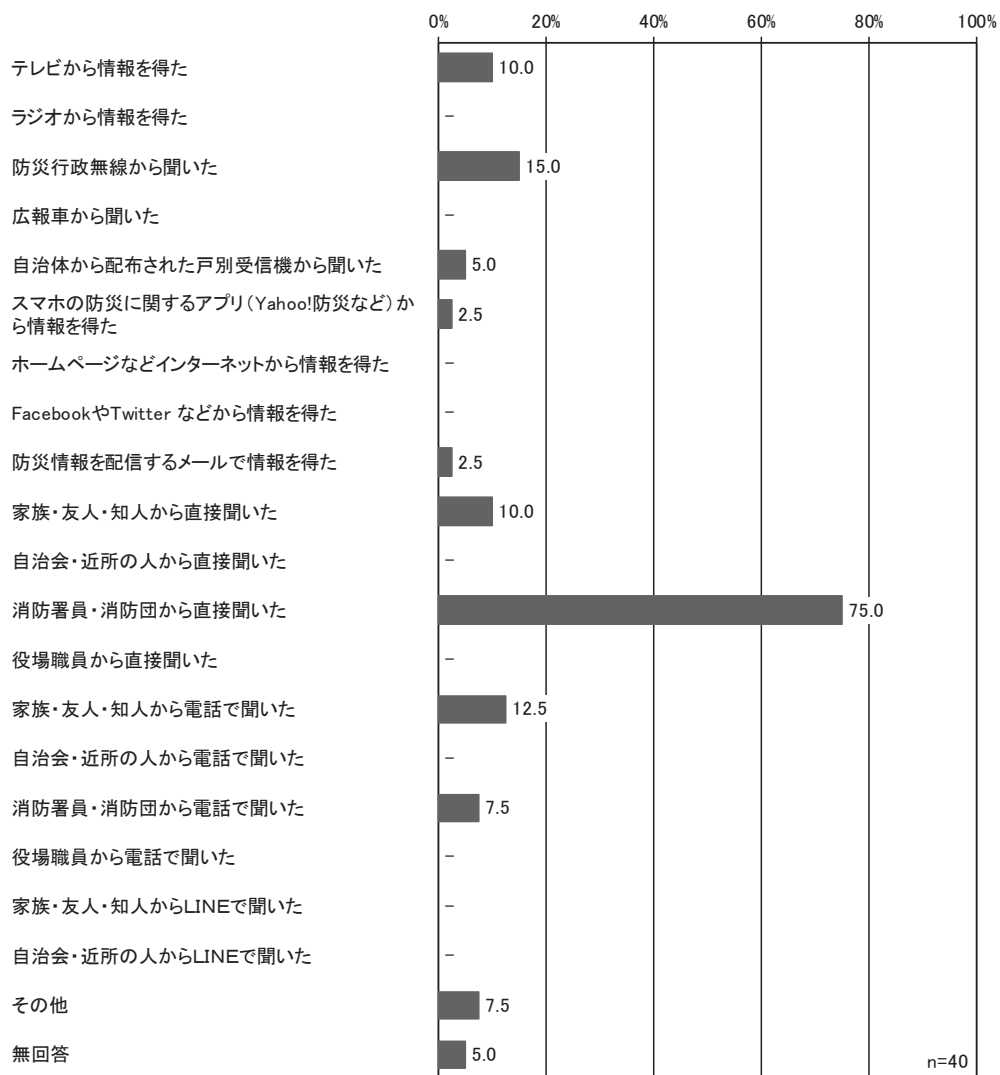


図 4.4.6 緊急放流の情報の入手手段

また、緊急放流の情報を「聞いた」と答えた人に「あなたは、その情報が、緊急の放流が行われることだと分かりましたか」と問うた。その結果が図 4.4.7 である。ここで情報の理解が出来た人は半分の 50.0%であった。

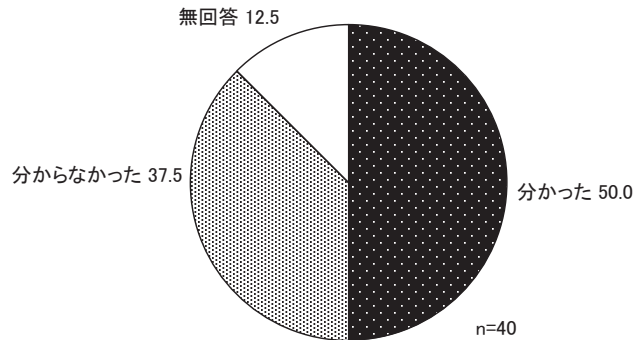


図 4.4.7 緊急放流の情報の理解状況

さらに、緊急放流の情報を「聞いた」と答えた人に「その情報を見聞きして、自宅周辺で浸水する可能性があると思えましたか」と問うた。その結果、52.5%は自宅周辺が浸水するとは考えておらず（図 4.4.8）、避難情報の時と同様の傾向である（図 4.4.4）。ただし、緊急放流の情報を理解した人に限れば、n 数は少ないものの（n=19）、31.6%の人が「洪水が発生し、浸水すると思った」、26.3%の人が「洪水が発生し、浸水するかもしれないと思った」と答えていた。緊急の放流が行われることの理解の有無によって自宅周辺の浸水可能性の認識に若干、差が生じたといえる。それでも、緊急放流の情報を理解した全ての人が、自宅周辺が浸水すると考えたわけではない。そして、そうした中でも住民の多くは避難行動をとった。

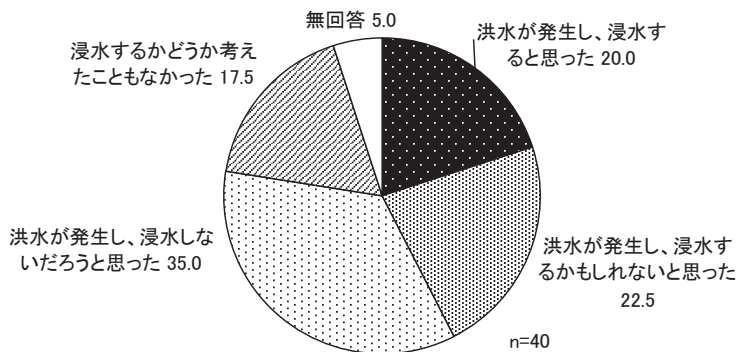


図 4.4.8 緊急放流の情報を聞いてからの自宅の浸水可能性

4.5 実際の避難行動

では住民の避難行動の実際について述べる。

まず、水平避難の状況について、「あなたは、7月7日早朝に自宅以外の場所へ避難をしましたか」と問うた結果が図 4.5.1 である。全体の 77.3%の人が「避難をした」と答えている。なお、避難情報や緊急の放流情報を聞いても自宅周辺が浸水しない、(それぞれ図 4.4.4 と図 4.4.8) と思った人でも避難行動をとっている。避難情報を聞いて「洪水が発生し、浸水しないだろうと思った」「浸水するかどうか考えたこともなかった」と答えた人 28 人のうち 21 人が、放流の情報を聞いて「洪水が発生し、浸水しないだろうと思った」「浸水するかどうか考えたこともなかった」と答えた人 20 人のうち 17 人が「避難した」と答えた。

なお、本節では、この「避難をした」人、102 人の避難行動について述べる。緊急避難を行ったものの一度自宅に帰り、再度避難所に避難したような、避難行動を複数回とった人に対しては、最初の避難行動に関して答えていただいた。

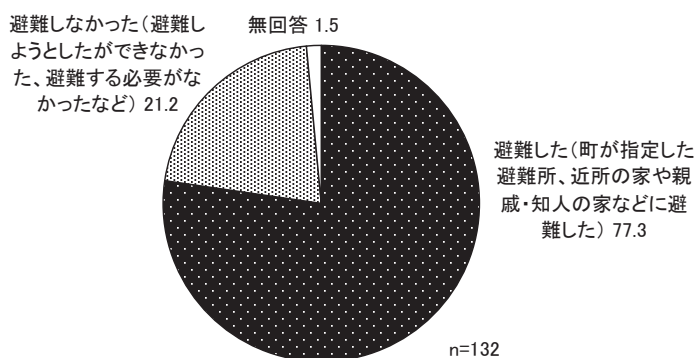


図 4.5.1 水平避難の有無

この避難行動をとった理由について「あなたはなぜ、避難をしたのですか」と複数回答で問うた。その結果が図 4.5.2 である。ここでも、4 章 4 節の避難情報や緊急放流の情報の入手手段と同様に、消防団員の影響が非常に大きく、それ以外の情報源では差があまりない。この地域では日常的に消防団員が住民とやりとりを行っていたこともこうした消防団員の呼びかけが住民の避難行動で重要な役割を果たした要因と言えよう。

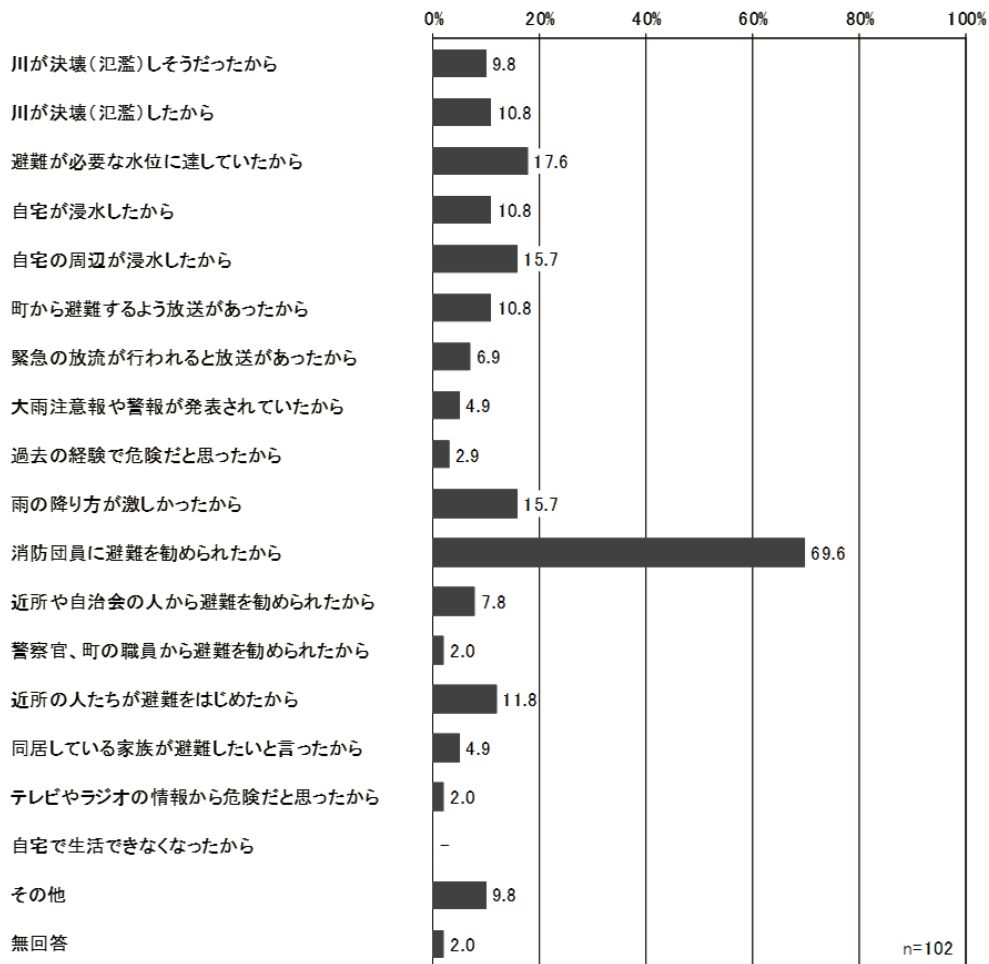


図 4.5.2 避難した理由

住民は確かに、起床してから短時間で避難行動をとった。そして、避難行動のきっかけとして消防団員からの呼びかけがあげられていた。だが、実際には消防団員からの呼びかけを受けて、すぐに避難行動にうつした人ばかりではない。そこで、「あなたは消防署員・消防団員に避難を呼びかけられたとき、すぐに避難しましたか」と問うた。その結果、「消防署員・消防団員に呼びかけられて、すぐに避難した」人は 45.1%いる一方で、「消防署員・消防団員に呼びかけられて、すぐには避難しなかった」人も 37.3%いた (図 4.5.3)。

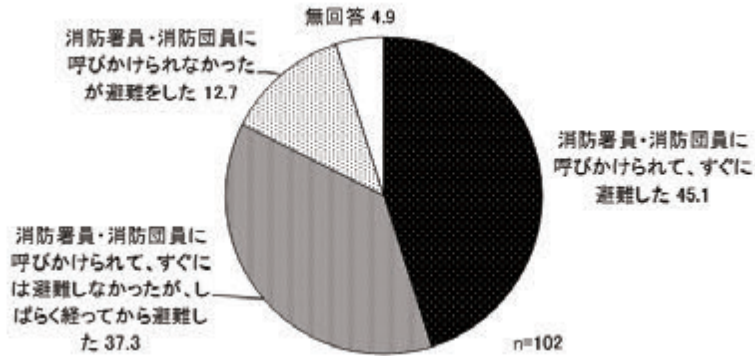


図 4.5.3 消防団員に呼びかけられてすぐに避難したか

消防団員は住民と顔見知りであり、かつ、かなりの切迫感をもって住民に対して避難の呼びかけを行ったのであるが（安本他，2020a）、すぐに避難しなかった理由は何か。そこで、「消防団員に避難をよびかけられたときに、すぐには避難しなかったのは、どのような理由からでしょうか」と複数回答で問うた。その結果が図 4.5.4 である。「自宅は浸水しないと思っていたから」が 50.0%、「川があふれるとは思わなかったから」が 36.8%と多くなっている。この状況を「正常化の偏見」ということは可能であろう。だが、長くこの地に住み続けた人が多く（図 4.1.1）、ダムもあり、水害に対する備えを日常的に行っていないこの地域ではある意味、当然の反応と考えられる。むしろ、住民と顔見知りの消防団員がかなりの切迫感をもって住民に対して呼びかけを行っても、避難をためらう人がいるという事実は重要であろう。水害時の住民の避難の難しさがうかがい知れる。

また、住民の避難時の状況について「避難を開始したとき、どのあたりまで浸水していましたか」と問うた結果が図 4.5.5 である。73.5%の人が浸水する前に避難しているが、22.5%の人は浸水している中、避難している。

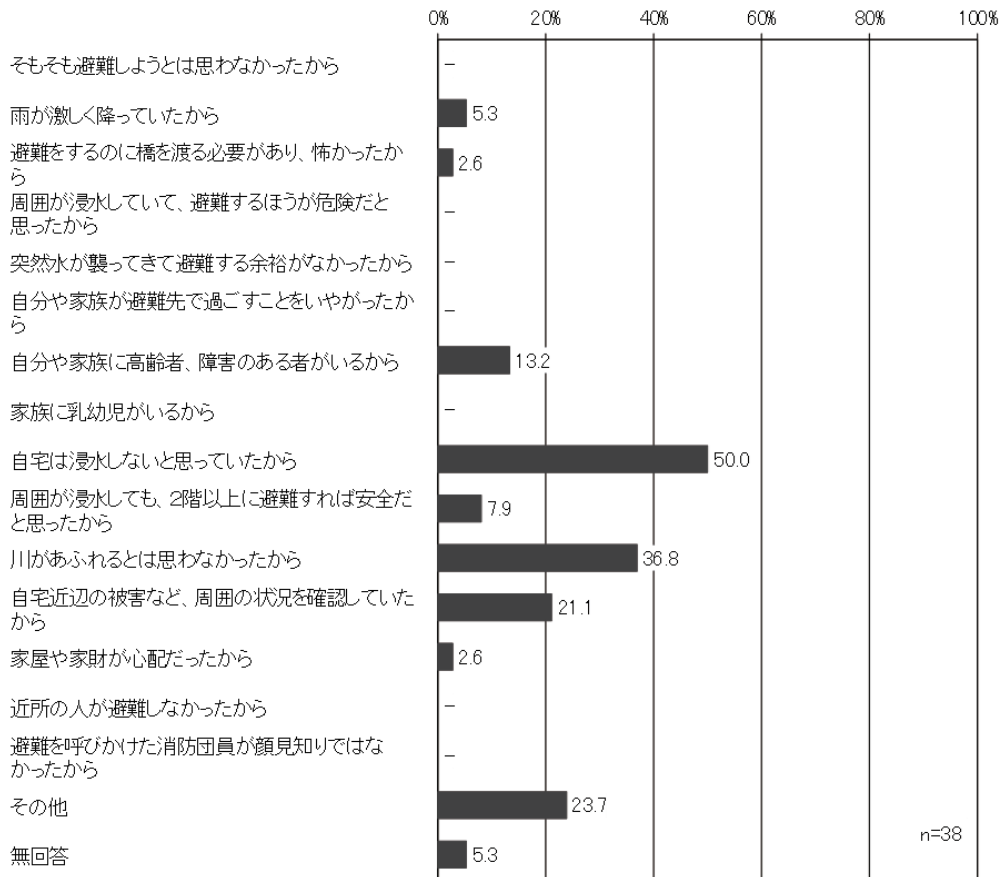


図 4.5.4 消防団員に呼びかけられてすぐに避難したか

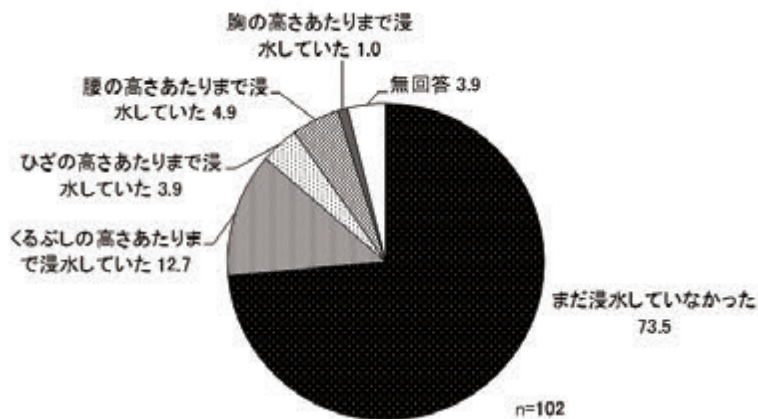


図 4.5.5 避難した時の周囲の状況

さらに、避難の手段を「あなたは、どのような手段で避難しましたか」と複数回答で問うた結果が図 4.5.6 である。74.5%の人が自動車を使って避難をしている。自動車を使った避難で多くの人が素早く避難できたと言えよう。

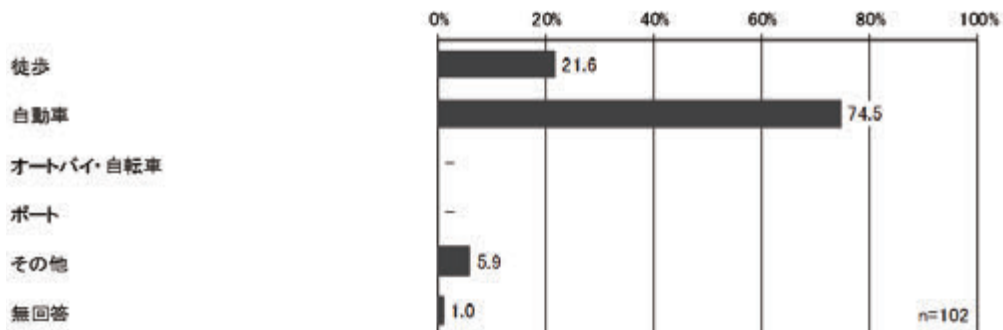


図 4.5.6 避難した時の周囲の状況

最後に、避難先について「あなたは最初、どこに避難しましたか」と問うた結果、78.4%の人が市によって開設された避難場所である、野村小学校・野村中学校・野村公民館に避難している（図 4.5.7）。

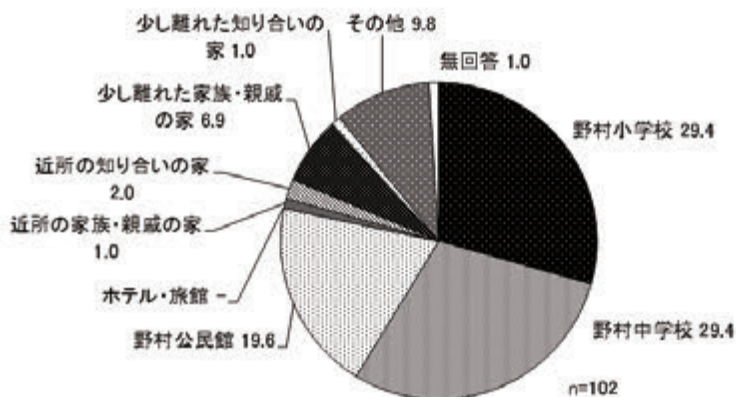


図 4.5.7 最初に避難した先

以上のように、多くの人が浸水前に避難をした結果、取り残された人を消防団が無理に助けに行くような状況になりにくかったといえる。地域全体でダムの放流前に避難を行ったという状況を生んだのも消防団の働きによるものであった。

4.6 避難をしなかった人の状況

次に、本節では、4章4節で自宅以外の場所に「避難しなかった」人（38人）について述べる（図4.5.1）。

避難をしなかった理由について「あなたは、なぜ避難しなかったのですか」と複数回答で問うた。その結果が図4.6.1である。「自宅は浸水しないと思っていたから」が53.6%、川があふれるとは思わなかったからが42.9%と高かった。その一方で、「突然水が襲ってきて避難する余裕がなかったから」が32.1%いるように、避難したくてもできなかった人もいたことがわかる。

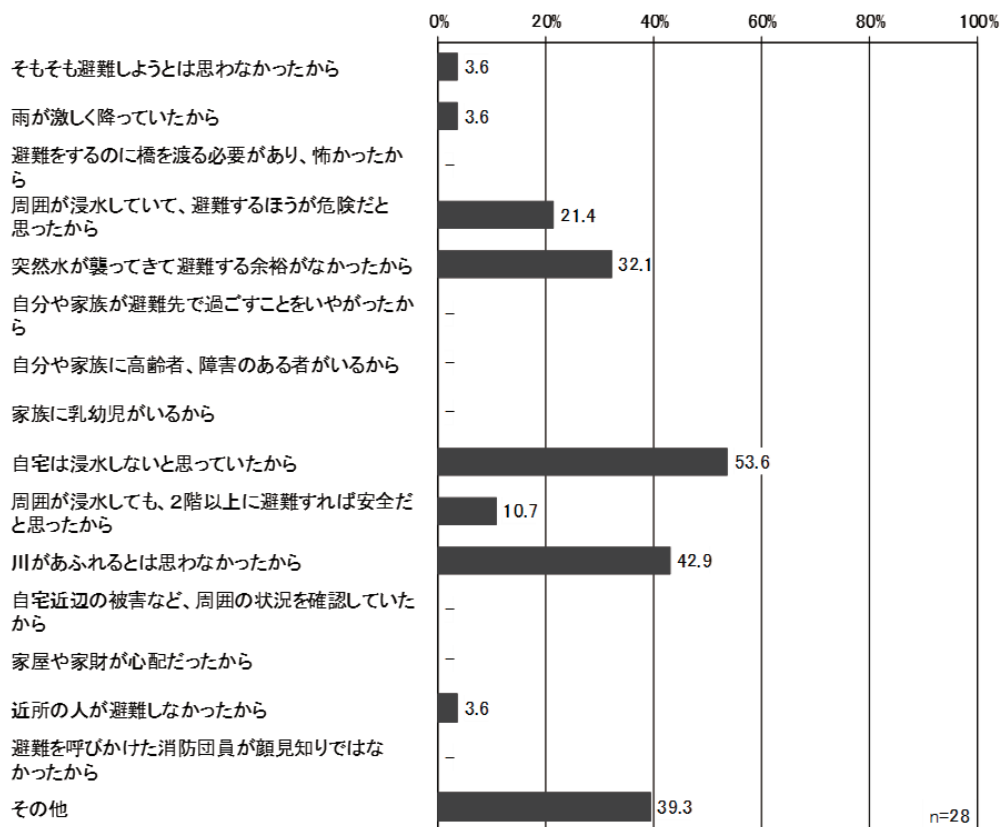


図 4.6.1 避難しなかった理由

5. まとめ

以上のように、西予市野村地区は長年住み続けている人が多く、水害に対する意識が高い地域ではない。いわゆる「経験の逆機能」と言われるような、今まで大丈夫だったから、ダムがあるからそのようなことは起こらないだろうと考え、避難しない人が多く出てもお

かしくない地域であった。それでも、早朝にダムの緊急放流という状況にあつて多くの人が避難行動をとったのはひとえに消防団の働きが大きいと言える。地域全体で避難行動につながり、それは多くの命を救うことにつながった。ただし、ダムの緊急放流と言う時間的猶予がない中で住民の避難を促進するためには、消防団が戸別に呼びかければ良い、というものでもない。戸別で、消防団が切迫感をもって避難の呼びかけを行っても、すぐに避難行動を行わず様子をみていた人が3割以上存在していたことから、避難の呼びかけだけでは不十分であるといえる。つまり、水害時の緊急避難を考えるうえで、なにか特定の情報の発出または呼びかけを行えば良い、ということはないことを表している。

今後、極端な気象条件が増加することにより、ダムの緊急放流を実施することが増加することが懸念される。その場合、なるべく早く情報を住民に伝達し（特に大雨が降っている状況では防災行政無線が聞こえない場合も多いため、そのことに留意する必要がある）、消防団が機能しているような地域では積極的な声かけ、避難の呼びかけを行うことで浸水する危険性がある地域全体で避難する必要がある。ただし、消防団の活動はその呼びかけを続けると、一歩間違えると消防団の命を失いかねない。ダムの緊急放流は開始時間が事前に判明していたため、危険な時間がピンポイントで把握することが可能であったこともあるが、そうした呼びかける側の命を守ることも考えていく必要がある。

引用・参考文献

愛媛大学，2019，平成30年7月豪雨愛媛大学災害調査団報告書，平成30年7月豪雨愛媛大学災害調査団，379p.

愛媛県ホームページ，2020，平成30年7月豪雨による人的被害，住家被害について（4月1日時点），https://www.pref.ehime.jp/h12200/documents/20190401jinteki_juuka.pdf，2021年1月24日

広島県ホームページ，2020，平成30年の災害状況，https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/life/645896_3928633_misc.pdf，2021年1月24日

気象庁ホームページ，平成30年7月豪雨
<https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/2018/20180713/20180713.html>，2020年12月11日

国土交通省四国地方整備局ホームページ，2018，野村ダム・鹿野川ダムの操作に関わる情報提供等に関する検証等の場とりまとめ 参考資料，

<http://www.skr.mlit.go.jp/kasen/kensyounoba/kensyounoba.html>，2020年7月7日
毎日新聞，2018年8月8日，大阪朝刊，p28

内閣府，2018，中央防災会議 防災対策実行会議「平成30年7月豪雨による水害・土砂

- 災害からの避難に関するワーキンググループ」、
http://www.bousai.go.jp/fusuigai/suigai_dosyaworking/index.html, 2021年1月24日
- 岡山県ホームページ, 2020, 平成30年7月豪雨災害による人的被害について 令和2年6月4日(木)14:00現在,
https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/667204_5835677_misc.pdf, 2020年7月7日(リンク切れ)
- 西予市災害対策本部運用改善検討会, 2019, 西予市災害対応に関する検討報告書, 225p
角 哲也・野原大督, 2019, 平成30年7月豪雨時のダムの洪水調節操作と今後の課題, 京都大学防災研究所年報, 第62号, pp.13-19
- 消防庁ホームページ, 2019, 平成30年7月豪雨及び台風第12号による被害状況及び消防機関等の対応状況(第60報),
<https://www.fdma.go.jp/disaster/info/items/190820nanagatugou60h.pdf>, 2021年1月24日
- 牛山素行・本間基寛・横幕早季・杉村晃一, 2019, 平成30年7月豪雨災害による人的被害の特徴, 自然災害科学 vol.38(1), pp.29-54.
- 安本真也・横田崇・牛山素行・石黒聡士・関谷直也, 2020a, 安本真也・平成30年7月豪雨における西予市での住民の避難行動と避難の意思決定構造, 日本自然災害学会 vol.39, 特別号, pp.71-85.
- 安本真也・横田崇・関谷直也, 2020b, 平成30年7月豪雨における野村ダム放流時の西予市消防団の対応, 愛知工業大学地域防災研究センター 年次報告書, vol.16, pp.37-43.

付属資料（アンケート調査の単純集計）

ここでは、注釈がない限り、N=132 である。

A. 西日本豪雨時の被害についてお伺いします

問1 西日本豪雨の水害の時、あなたの自宅は浸水しましたか。(○は1つ) N=139

1. 浸水しなかった	7.2%
2. 床下浸水した	7.2%
3. 床上浸水した（床から 50cm 未満）	13.7%
4. 床上浸水した（床から 50cm～1 m）	21.6%
5. 床上浸水した（1 階部分がほぼ浸水、2 階部分は浸水せず）	25.2%
6. 床上浸水した（2 階部分も浸水）	16.5%
7. その他（ <u>具体的に：</u> _____）	7.9%
無回答	0.7%

問2 今回の水害で、あなたの住家はどのような被害の認定を受けましたか。(○は1つ) N=139

1. 全壊	27.3%
2. 大規模半壊	12.9%
3. 半壊	31.7%
4. 一部損壊	13.7%
5. 住家の被害はなかった	9.4%
無回答	5.0%

問3 今回の水害で、あなたの家の資産や財産はどのような被害を受けましたか。(○はいくつでも) N=139

1. 自家用車が被害を受けた	40.3%
2. 家財道具が被害を受けた	76.3%
3. 畳・床が被害を受けた	79.1%
4. 戸・壁が被害を受けた	72.7%
5. 庭・塀や生け垣が被害を受けた	40.3%
6. 店舗や工場の建物が被害を受けた	28.8%
7. 金品・カード・有価証券などの貴重品が被害を受けた	29.5%
8. 農機具などの仕事道具が被害を受けた	33.1%
9. 農地や田畑などが被害を受けた	21.6%
10. その他（ <u>具体的に：</u> _____）	14.4%
11. 被害はなかった	7.9%
無回答	2.2%

問4 水害の発生した7月7日の早朝、あなたはどこにいましたか。避難された方は、避難直前にいた場所についてお答えください。(○は1つ) N=139

1. 自宅にいた	82.7%
2. 野村町内の別の場所（ <u>具体的に：</u> _____）にいた	12.2%
3. 野村町内にいなかった →7ページ問 17へ	3.6%
無回答	1.4%

B. 災害前の情報についてお伺いします

問5 7月7日の早朝、肱川がはん濫する前に、あなたは次のような情報を入手しましたか。
((A)～(G)の矢印方向に○は1つずつ)

		1 入手して 危機感を感じ た	2 入手したが 危機感を感じ なかった	3 情報を 入手しな かった	無回答
(A) 他地域での災害の発生に関する情報	➔	8.3%	18.2%	50.8%	22.7%
(B) 大雨注意報・警報	➔	13.6%	54.5%	13.6%	18.2%
(C) 自宅周辺の降水量に関する情報	➔	14.4%	34.8%	31.1%	19.7%
(D) 直接確認した肱川の状況	➔	15.9%	24.2%	39.4%	20.5%
(E) ダムが緊急放流する (異常洪水時防災操作を行う)という情報	➔	18.9%	16.7%	48.5%	15.9%
(F) 西予市からの避難指示(緊急)	➔	29.5%	30.3%	31.8%	8.3%
(G) 近隣住民の避難状況	➔	19.7%	18.9%	40.2%	21.2%

問6 あらためて、お伺いします。西予市は、7月7日朝5時10分に避難指示(緊急)を出しました。
あなたは肱川がはん濫する前に、この避難指示(緊急)を聞きましたか。(○は1つ)

1. 聞いた		40.9%
2. 聞かなかった	➔3ページ問7へ	58.3%
無回答		0.8%

【問6で「1. 聞いた」を回答した方のみ】

附問6-1 あなたは、避難指示(緊急)をどのような形で入手しましたか。
(○はいくつでも)(n=54)

1. テレビから情報を得た	9.3%
2. ラジオから情報を得た	-
3. 防災行政無線から聞いた	27.8%
4. 広報車から聞いた	7.4%
5. 自治体から配布された戸別受信機から聞いた	14.8%
6. スマホの防災に関するアプリ(Yahoo!防災など)から情報を得た	7.4%
7. ホームページなどインターネットから情報を得た	-
8. FacebookやTwitterなどから情報を得た	-
9. 防災情報を配信するメールで情報を得た	1.9%
10. 家族・友人・知人から直接聞いた	14.8%
11. 自治会・近所の人から直接聞いた	5.6%
12. 消防署員・消防団から直接聞いた	74.1%
13. 役場職員から直接聞いた	5.6%
14. 家族・友人・知人から電話で聞いた	7.4%
15. 自治会・近所の人から電話で聞いた	1.9%
16. 消防署員・消防団から電話で聞いた	11.1%
17. 役場職員から電話で聞いた	-
18. 家族・友人・知人からLINEで聞いた	5.6%
19. 自治会・近所の人からLINEで聞いた	1.9%
20. その他(具体的に：)	5.6%
無回答	-

附問6-2 その情報を見聞きして、自宅周辺で浸水する可能性があると思いましたか。(○は1つ)

1. 洪水が発生し、浸水すると思った	14.8%
2. 洪水が発生し、浸水するかもしれないと思った	31.5%
3. 洪水が発生し、浸水しないだろうと思った	33.3%
4. 浸水するかどうか考えたこともなかった	20.4%
無回答	-

問7 続いて、野村ダムが緊急の放流を行う(異常洪水時防災操作)という情報が7月7日朝5時15分に出されました。あなたは、肱川がはん濫する前に、この情報を聞きましたか。(○は1つ)

1. 聞いた	30.3%	2. 聞かなかった	→4ページ問8へ	68.2%	無回答	1.5%
--------	-------	-----------	----------	-------	-----	------

【問7で「1. 聞いた」を回答した方のみ】(n=40)

附問7-1 あなたは、その情報が、緊急の放流が行われることだと分かりましたか。(○は1つ)

1. 分かった	50.0%	2. 分からなかった	37.5%	無回答	12.5%
---------	-------	------------	-------	-----	-------

附問7-2 あなたは、その情報の中で「異常洪水時防災操作」という言葉を聞きましたか。(○は1つ)

1. 聞いた	7.5%	2. 聞かなかった	75.0%	無回答	17.5%
--------	------	-----------	-------	-----	-------

附問7-3 あなたは、野村ダムが緊急の放流を行う(異常洪水時防災操作)という情報をどのような形で入手しましたか。(○はいくつでも)

1. テレビから情報を得た	10.0%
2. ラジオから情報を得た	-
3. 防災行政無線から聞いた	15.0%
4. 広報車から聞いた	-
5. 自治体から配布された戸別受信機から聞いた	5.0%
6. スマホの防災に関するアプリ(Yahoo!防災など)から情報を得た	2.5%
7. ホームページなどインターネットから情報を得た	-
8. Facebook や Twitter などから情報を得た	-
9. 防災情報を配信するメールで情報を得た	2.5%
10. 家族・友人・知人から直接聞いた	10.0%
11. 自治会・近所の人から直接聞いた	-
12. 消防署員・消防団から直接聞いた	75.0%
13. 役場職員から直接聞いた	-
14. 家族・友人・知人から電話で聞いた	12.5%
15. 自治会・近所の人から電話で聞いた	-
16. 消防署員・消防団から電話で聞いた	7.5%
17. 役場職員から電話で聞いた	-
18. 家族・友人・知人からLINEで聞いた	-
19. 自治会・近所の人からLINEで聞いた	-
20. その他(具体的に:)	7.5%
無回答	5.0%

附問 7-4 その情報を見聞きして、自宅周辺で浸水する可能性があると思いましたか。(○は1つ)

1. 洪水が発生し、浸水すると思った	20.0%
2. 洪水が発生し、浸水するかもしれないと思った	22.5%
3. 洪水が発生し、浸水しないだろうと思った	35.0%
4. 浸水するかどうか考えたこともなかった	17.5%
無回答	5.0%

C. 当時の浸水や避難の状況についてお伺いします

問 8 あなたは水害の前日7月6日の寝る前に、被害の発生に備えた対策を行いましたか。(○はいくつでも)

1. 避難場所や避難経路を確認した	3.8%
2. 非常持ち出し品（貴重品など）の準備をした	9.1%
3. 水や食料の確保をした	2.3%
4. 避難所へ行く準備をした（車に持ち出し品を積むなど）	2.3%
5. 農作業道具など仕事道具の片付けをした	-
6. 自宅の2階など高い所へ家財道具を移動した	3.0%
7. その他（ <u>具体的に：</u>)	3.8%
8. 特に何もしていない	81.8%
無回答	3.0%

問 9 あなたは肱川がはん濫した7月7日は、何をきっかけに目を覚ましましたか。(○はいくつでも)

1. 目覚まし時計	12.9%
2. 雨の音	28.0%
3. 周囲ではん濫していた気配	6.1%
4. 防災行政無線の音	10.6%
5. 広報車の音	2.3%
6. 自治体から配布された戸別受信機の音	4.5%
7. スマホの防災に関するアプリ（Yahoo!防災など）からの通知音	3.0%
8. LINEやメールの通知音	0.8%
9. 家族・友人・知人が訪ねてきた	4.5%
10. 自治会・近所の人を訪ねてきた	3.0%
11. 消防署員・消防団を訪ねてきた	37.1%
12. 役場職員を訪ねてきた	2.3%
13. 家族・友人・知人からの電話	9.8%
14. 自治会・近所の人からの電話	1.5%
15. 消防署員・消防団からの電話	1.5%
16. 役場職員からの電話	-
17. その他（ <u>具体的に：</u>)	19.7%
無回答	2.3%

問 10 7月7日のあなたが目を覚ました時間は具体的に、何時くらいでしたか。だいたいでも構いませんのでお答え下さい。

1. 7月7日 午前_____時_____分頃	7月7日 午前4時台	12.1%
	7月7日 午前5時台	40.9%
	7月7日 午前6時台	26.5%
	7月7日 午前7時台	0.8%
2. 起きた時間は覚えてない		15.2%
無回答		4.5%

問 11 7月7日に起きてから、水害の発生に備えた対策を行いましたか。(〇はいくつでも)

1. 避難場所や避難経路を確認した	9.8%
2. 非常持ち出し品（貴重品など）の準備をした	21.2%
3. 水や食料の確保をした	6.1%
4. 避難所へ行く準備をした（車に持ち出し品を積むなど）	28.8%
5. 農作業道具など仕事道具の片付けをした	1.5%
6. 自宅の2階など高い所へ家財道具を移動した	7.6%
7. その他（ <u>具体的に：</u> _____）	12.9%
8. 特に何もしていない	45.5%
無回答	1.5%

問 12 あなたは、7月7日早朝に自宅以外の場所へ避難をしましたか。(〇は1つ)

1. 避難した (町が指定した避難所、近所の家や親戚・知人の家などに避難した)	77.3%
2. 避難しなかった (避難しようとしたができなかった、避難する必要がなかったなど)	21.2%
→6ページ問 14へ	
無回答	1.5%

D 1. 避難をした方にお伺いします (n=102)

【問 12 で「1. 避難した」を回答した方のみ】

問 13 あなたの避難行動についてお伺いします。複数回避難されている方は、最初の避難についてお答えください。

(1) 避難を開始したのは、具体的に、いつでしたか。だいたいでも構いませんのでお答え下さい。

1. 7月_____日 午前・午後 _____時_____分頃	7月7日 午前5時台	12.7%
	7月7日 午前6時台	47.1%
	7月7日 午前7時台	19.6%
	7月7日 時間不明	2.9%
2. 避難した時間は覚えてない		15.7%
無回答		2.0%

(2) あなたはなぜ、避難をしたのですか。(○はいくつでも)

1. 川が決壊（氾濫）しそうだったから	9.8%
2. 川が決壊（氾濫）したから	10.8%
3. 避難が必要な水位に達していたから	17.6%
4. 自宅が浸水したから	10.8%
5. 自宅の周辺が浸水したから	15.7%
6. 町から避難するよう放送があったから	10.8%
7. 緊急の放流が行われると放送があったから	6.9%
8. 大雨注意報や警報が発表されていたから	4.9%
9. 過去の経験で危険だと思ったから	2.9%
10. 雨の降り方が激しかったから	15.7%
11. 消防団員に避難を勧められたから	69.6%
12. 近所や自治会の人から避難を勧められたから	7.8%
13. 警察官、町の職員から避難を勧められたから	2.0%
14. 近所の人たちが避難をはじめたから	11.8%
15. 同居している家族が避難したいと言ったから	4.9%
16. テレビやラジオの情報から危険だと思ったから	2.0%
17. 自宅で生活できなくなったから	-
18. その他（ <u>具体的に：</u>)	9.8%
無回答	2.0%

(3) 避難を開始したとき、どのあたりまで浸水していましたか。(○は1つ)

1. まだ浸水していなかった	73.5%
2. くるぶしの高さあたりまで浸水していた	12.7%
3. ひざの高さあたりまで浸水していた	3.9%
4. 腰の高さあたりまで浸水していた	4.9%
5. 胸の高さあたりまで浸水していた	1.0%
無回答	3.9%

(4) あなたは最初、どこに避難しましたか。(○は1つ)

1. 野村小学校	29.4%	6. 近所の知り合いの家	2.0%
2. 野村中学校	29.4%	7. 少し離れた家族・親戚の家	6.9%
3. 野村公民館	19.6%	8. 少し離れた知り合いの家	1.0%
4. ホテル・旅館	-	9. その他（ <u>具体的に：</u>)	9.8%
5. 近所の家族・親戚の家	1.0%	無回答	1.0%

(5) あなたはなぜ、そこに避難したのですか。(○はいくつでも)

1. 行政によって決められていた避難先だったから	50.0%
2. 行政によって決められた場所ではないが、あらかじめそこに避難しようときめていたから	7.8%
3. 高台にあるから	18.6%
4. 避難先にいる人から、そこに避難するよう誘導されたから	2.9%
5. 避難をよびかけている人から、そこに避難するよう誘導されたから	18.6%
6. その他（ <u>具体的に：</u>)	20.6%
無回答	1.0%

(6) あなたは、どのような手段で避難しましたか。(○はいくつでも)

1. 徒歩	21.6%	4. ボート	-
2. 自動車	74.5%	5. その他(具体的に:)	5.9%
3. オートバイ・自転車	-	無回答	1.0%

(7) あなたは消防署員・消防団員に避難を呼びかけられたとき、すぐに避難しましたか。(○は1つ)

1. 消防署員・消防団員に呼びかけられて、すぐに避難した	⇒7ページ問 17へ	45.1%
2. 消防署員・消防団員に呼びかけられて、すぐには避難しなかったが、しばらく経ってから避難した	⇒附問(7)-1へ	37.3%
3. 消防署員・消防団員に呼びかけられなかったが避難をした	⇒7ページ問 17へ	12.7%
無回答		4.9%

附問(7)-1 消防団員に避難をよびかけられたときに、すぐには避難しなかったのは、どのような理由からでしょうか。(○はいくつでも) (n=38)

1. そもそも避難しようとは思わなかったから	-
【避難できなかった】	
2. 雨が激しく降っていたから	5.3%
3. 避難するのに橋を渡る必要があり、怖かったから	2.6%
4. 周囲が浸水していて、避難するほうが危険だと思ったから	-
5. 突然水が襲ってきて避難する余裕がなかったから	-
【避難しようとは思わなかった】	
6. 自分や家族が避難先で過ごすことをいやがったから	-
7. 自分や家族に高齢者、障害のある者がいるから	13.2%
8. 家族に乳幼児がいるから	-
9. 自宅は浸水しないと思っていたから	50.0%
10. 周囲が浸水しても、2階以上に避難すれば安全だと思ったから	7.9%
11. 川があふれるとは思わなかったから	36.8%
【そのほか】	
12. 自宅近辺の被害など、周囲の状況を確認していたから	21.1%
13. 家屋や家財が心配だったから	2.6%
14. 近所の人が避難しなかったから	-
15. 避難を呼びかけた消防団員が顔見知りではなかったから	-
16. その他(具体的に:)	23.7%
無回答	5.3%

⇒7ページ問 17へ

D 2. 避難をしなかった方にお伺いします (n=28)

【問 12 で「2. 避難しなかった」を回答した方のみ】

問 14 あなたは、避難せずどこに留まっていたか。(○は1つ)

1. 野村町内の自宅から避難せず、そこに留まっていた	78.6%
2. 野村町内の自宅以外(職場・学校など)から避難せず、そこに留まっていた	10.7%
無回答	10.7%

問 15 自宅や職場などで安全を確保しようとしたか。(○は1つ)

1. 2階以上に退避するなどした	53.6%
2. 2階以上に退避するまではしなかったが、情報に注意した	7.1%
3. 特に何もしていない	35.7%
無回答	3.6%

問 16 あなたは、なぜ避難しなかったのですか。(○はいくつでも)

1. そもそも避難しようとは思わなかったから	3.6%
【避難できなかった】	
2. 雨が激しく降っていたから	3.6%
3. 避難をするのに橋を渡る必要があり、怖かったから	-
4. 周囲が浸水していて、避難するほうが危険だと思ったから	21.4%
5. 突然水が襲ってきて避難する余裕がなかったから	32.1%
【避難しようとは思わなかった】	
6. 自分や家族が避難先で過ごすことをいやがったから	-
7. 自分や家族に高齢者、障害のある者がいるから	-
8. 家族に乳幼児がいるから	-
9. 自宅は浸水しないと思っていたから	53.6%
10. 周囲が浸水しても、2階以上に避難すれば安全だと思ったから	10.7%
11. 川があふれるとは思わなかったから	42.9%
【その他】	
12. 自宅近辺の被害など、周囲の状況を確認していたから	-
13. 家屋や家財が心配だったから	-
14. 近所の方が避難しなかったから	3.6%
15. 避難を呼びかけた消防団員が顔見知りではなかったから	-
16. その他(具体的に：)	39.3%
無回答	-

【ここからは全員がお答えください】

E. 水害が発生する前の、普段の防災活動についてお伺いします

問 17 今回の災害が発生するまで、普段から水害に対してどのような対策をしていましたか。
(○はいくつでも) N=139

1. ハザードマップを確認していた	4.3%
2. 降水量や水位などの情報の入手方法を確認していた	7.2%
3. 水害時の避難場所を確認していた	15.1%
4. 持ち出し品の準備をしていた	19.4%
5. 水害の恐れがある場合に避難するタイミングを決めていた	1.4%
6. 水害の恐れがある場合の避難方法や決まりごとを家族と話し合っていた	5.8%
7. 自治体や国などが開催する水害の勉強会などに参加していた	4.3%
8. 特に何も対策はしていなかった	60.4%
無回答	4.3%

問 18 この災害の前に、洪水が発生し、自宅が浸水する可能性があると思っていましたか。(○は1つ) N=139

1. 洪水が発生し、浸水すると思っていた	2.2%
2. 洪水が発生し、浸水するかもしれないと思っていた	7.9%
3. 洪水が発生しても、浸水しないだろうと思っていた	47.5%
4. 浸水するかどうか考えたこともなかった	38.1%
無回答	4.3%

問 19 この次、同じような水害が発生する危険性が高まったとき、あなたは水害に対してどのような行動をとると思いますか。

((A)～(G) 矢印の方向それぞれについて、あなたのお考えに最も近いものに○を1つずつ) N=139

		1 必ず避難 すると思う	2 たぶん避難 すると思う	3 たぶん避難 しないと思う	4 必ず避難 しないと思う	無回答
(A) 大雨が降った時	➔	16.5%	31.7%	37.4%	4.3%	10.1%
(B) 異常洪水時防災操作が行われると聞いたとき	➔	41.7%	37.4%	9.4%	1.4%	10.1%
(C) 自治体から避難勧告・避難指示(緊急)が発表されたとき	➔	36.0%	41.0%	13.7%	1.4%	7.9%
(D) 家族が避難しようと言ったとき	➔	36.7%	44.6%	6.5%	0.7%	11.5%
(E) 自治会・近所の人から避難を呼びかけられたとき	➔	36.7%	46.8%	6.5%	0.7%	9.4%
(F) 消防署員・消防団・役場職員などから避難を呼びかけられたとき	➔	54.0%	32.4%	5.0%	0.7%	7.9%
(G) 周囲の人たちが避難を始めたとき	➔	47.5%	36.7%	5.8%	0.7%	9.4%

問 20 あなたは、以下の考え方についてどのように思いますか。

((A)～(J) 矢印の方向それぞれについて、あなたのお考えに最も近いものに○を1つずつ) N=139

		1 強くそう思う	2 やや そう思う	3 あまりそう 思わない	4 まったく そう思わない	無回答
(A) 自宅がある場所は、水害に対して危険だ と思う	➔	34.5%	25.9%	26.6%	4.3%	8.6%

(B)	この地域に住んでいる以上、水害によって死んだり、大きな怪我をする恐れがあると思う →	18.0%	29.5%	30.9%	10.1%	11.5%
(C)	水害についてきちんと危険性を認識すべきだ →	47.5%	35.3%	5.8%	2.2%	9.4%
(D)	近所の人は私に対して「大雨の後は水害に備えて、必ず避難をするべき」と思っている →	22.3%	32.4%	29.5%	3.6%	12.2%
(E)	近所の人は、「大雨の後は水害に備えて、必ず避難をするべき」と考えていると思う →	21.6%	41.0%	22.3%	2.9%	12.2%
(F)	近所に住むほとんどの人は、川があふれたらすぐに避難すると思う →	47.5%	28.1%	10.8%	2.2%	11.5%
(G)	大雨が降り続くと、近所に住むほとんどの人は、すぐに避難すると思う →	23.7%	35.3%	26.6%	2.9%	11.5%
(H)	近所の人が避難するなら、自分も避難した方がいい →	38.8%	42.4%	7.9%	1.4%	9.4%
(I)	避難をすすめられたら、危険はないと思っても避難しなければならないと思う →	35.3%	46.8%	8.6%	1.4%	7.9%
(J)	避難する時には、できるだけ周りの人とも助け合って避難すべきだと思う →	55.4%	33.8%	-	1.4%	9.4%

問 21 あなたは、以下の水害に対する考え方についてどのように思いますか。

((A) ~ (N) の矢印方向について、あなたのお考えに最も近いものに○を1つずつ) N=139

		1 強くそう思う	2 ややそう思う	3 あまりそう 思わない	4 まったく そう思わない	無回答
(A)	大雨が降り続くと、洪水に備えて、すぐに地域みんなで避難をはじめべきだ →	23.0%	40.3%	25.9%	2.9%	7.9%
(B)	周りの人がほとんど避難していなくても、自分は避難すべきだと思う →	13.7%	25.2%	46.0%	5.0%	10.1%
(C)	水害による浸水がないと思って、避難しないと、周囲や役所の人に迷惑をかけてしまうから避難すべきだ →	19.4%	43.2%	28.8%	2.2%	6.5%
(D)	避難所（避難場所）に行くのは面倒だ →	5.8%	28.8%	39.6%	17.3%	8.6%
(E)	避難所（避難場所）での集団生活はいやだ →	18.7%	41.0%	23.7%	7.9%	8.6%
(F)	たいした浸水ではなかったら、避難するのは無駄だ →	5.0%	42.4%	32.4%	9.4%	10.8%
(G)	川があふれたり、浸水したりしたのを見てから避難するのでは、間に合わない →	50.4%	30.2%	7.2%	1.4%	10.8%
(H)	自分一人では、安全なところまで行くことができない →	15.1%	15.8%	29.5%	30.9%	8.6%
(I)	最寄りの避難所（避難場所）までは遠くて、時間がかかる →	7.2%	12.2%	39.6%	30.9%	10.1%

(J)	避難することで、命が助かるならば、いち早く避難すべきだ →	56.8%	26.6%	5.8%	1.4%	9.4%
(K)	水害において最大の防災対策は「避難」だと思う →	47.5%	33.1%	9.4%	0.7%	9.4%
(L)	水害に対して、地域の安全は、行政に頼らず自分たちで守らなければならない →	37.4%	44.6%	8.6%	1.4%	7.9%
(M)	水害から身を守るためには、自分で知識を持って、自分で判断して避難するようにしなければならない →	45.3%	43.9%	2.2%	0.7%	7.9%
(N)	避難の結果は自己責任だと思う →	41.7%	40.3%	8.6%	1.4%	7.9%

問 22 今回の水害を受けて、避難するために今後どのような情報に気をつけたいと考えていますか。(○はいくつでも) N=139

1. 避難を呼びかけるテレビなどの報道	60.4%
2. 自宅周辺の降水量に関する情報	59.0%
3. 肱川の上流域の降水量に関する情報	56.1%
4. 自宅近くの肱川の水位に関する情報	68.3%
5. 肱川の上流域の水位に関する情報	47.5%
6. 自宅周辺に発表された避難勧告や避難指示に関する情報	70.5%
7. 警戒レベルの情報	62.6%
8. 水害に関するハザードマップ	34.5%
9. その他(具体的に:)	11.5%
10. 気をつけたいと思う情報はない	0.7%
無回答	3.6%

D. 最後にあなた御自身とご家族のことについてお伺いします

F 1 昨年7月7日に西日本豪雨災害が発生した時に、あなたと同居している方（同じ建物に住んでいる人のみ）について、以下の項目を教えてください。また、回答者の方は回答者欄に○を付けてください。
N=139

【回答欄】

	回答者	続柄	性別	年齢	災害時の在宅	地震によるケガの有無	避難の状況
例	○	あなたの妻の父	① 男 2. 女	46歳	1. 在宅 2. 不在	1. ケガをした ② ケガをしなかった	1. 一緒に避難した ② 一緒ではないが避難した 3. 避難しなかった
1		あなたご自身	1. 男 2. 女	歳	1. 在宅 2. 不在	1. ケガをした 2. ケガをしなかった	1. 一緒に避難した 2. 一緒ではないが避難した 3. 避難しなかった
2		あなたの	1. 男 2. 女	歳	1. 在宅 2. 不在	1. ケガをした 2. ケガをしなかった	1. 一緒に避難した 2. 一緒ではないが避難した 3. 避難しなかった
3		あなたの	1. 男 2. 女	歳	1. 在宅 2. 不在	1. ケガをした 2. ケガをしなかった	1. 一緒に避難した 2. 一緒ではないが避難した 3. 避難しなかった
4		あなたの	1. 男 2. 女	歳	1. 在宅 2. 不在	1. ケガをした 2. ケガをしなかった	1. 一緒に避難した 2. 一緒ではないが避難した 3. 避難しなかった
5		あなたの	1. 男 2. 女	歳	1. 在宅 2. 不在	1. ケガをした 2. ケガをしなかった	1. 一緒に避難した 2. 一緒ではないが避難した 3. 避難しなかった
6		あなたの	1. 男 2. 女	歳	1. 在宅 2. 不在	1. ケガをした 2. ケガをしなかった	1. 一緒に避難した 2. 一緒ではないが避難した 3. 避難しなかった
7		あなたの	1. 男 2. 女	歳	1. 在宅 2. 不在	1. ケガをした 2. ケガをしなかった	1. 一緒に避難した 2. 一緒ではないが避難した 3. 避難しなかった
8		あなたの	1. 男 2. 女	歳	1. 在宅 2. 不在	1. ケガをした 2. ケガをしなかった	1. 一緒に避難した 2. 一緒ではないが避難した 3. 避難しなかった

F 2 差支えなければご住所をお書きください。

野村町

F 3 あなたは、現在の住所にお住まいになってから、おおよそ何年になりますか。N=139

約 年（平均： 36.0 年）

F4 あなたの職業を教えてください。(○はひとつ) N=139

1. 正規の職員・従業員	14.4%
2. 派遣社員	-
3. パート・アルバイト(契約社員・嘱託を含む)	10.8%
4. 会社などの役員	2.9%
5. 自営業主(自由業を含む)	20.1%
6. 農林水産業	7.2%
7. 無職(主婦・主夫を含む)	37.4%
8. 学生	-
9. その他(具体的に:)	2.2%
無回答	5.0%

F5 現在、あなた又はあなたのご家族は、次の状況に当てはまりますか。(○はいくつでも) N=139

1. 要支援者がいる	9.4%
2. 65歳以上の高齢者がいる	34.5%
3. 12歳以下の子どもがいる	5.8%
4. 65歳以上の高齢者のみの世帯である	29.5%
5. 単身世帯である	15.8%
無回答	20.9%

F6 あなたの家の住居について教えてください。(○はひとつ) N=139

1. 木造平屋建て	17.3%
2. 木造2階建て以上	53.2%
3. 木造のアパートやマンション(____階建の____階)	-
4. 鉄筋コンクリート平屋建て	0.7%
5. 鉄筋コンクリート2階建て以上	15.1%
6. 鉄筋コンクリートのアパートやマンション(____階建の____階)	-
7. その他(具体的に:)	10.1%
無回答	3.6%

F7 お宅では車を何台お持ちですか。(○はひとつ) N=139

1. 1台	28.8%	4. 持っていない	11.5%
2. 2台	33.1%	無回答	6.0%
3. 3台以上	21.6%		

F8 あなたは消防団や自主防災組織の役員の経験がありますか。(○はいくつでも) N=139

1. 自主防災組織の役員である	2.9%
2. 自主防災組織の役員だったことがある	5.0%
3. 消防団員である	2.9%
4. 消防団の幹部だったことがある	2.2%
5. 消防団員だったことがある	17.3%
6. 自治会の役員である	2.2%
7. 自治会役員の経験がある	21.6%
無回答	61.2%

F9 最後に今回の水害について、防災上の教訓として考えること、行政公共機関・報道機関に対してご意見などはありますか。ご自由にお書きください。

略

日本海の地震・津波に関する予知・想定に対する認識に関する調査研究
Survey Research on Perceptions about the Prediction and Estimation
of Earthquake and Tsunami around the Sea of Japan

関谷直也 SEKIYA Naoya

田中 淳 TANAKA Atsushi

目次

- 1 はじめに
 - 1.1 調査目的
 - 1.2 調査概要
2. 日本海地震・津波に関する認識
 - 2.1 日本海地震・津波に関する知識
 - 2.2 発生確率を示せない日本海地震・津波の公表に関する認識
 - 2.3 想定 of 認知度
 - 2.4 津波の巨大想定に関する評価・意識
 - 2.5 日本海側の津波避難・救助に関する認識
- 3 地震の予知や予測についての理解と素朴に持っている認識
 - 3.1 地震に関連する用語の認知率
 - 3.2 震度とマグニチュード
 - 3.3 地震の予知や予測についての認識
4. 「想定」の公表についての意見
 - 4.1 「最大、最悪の想定」に関する理解
 - 4.2 地震の予測精度と公表に関する認識
 - 4.3 表現技法に関する意見
5. 地震動予測地図の影響
6. 被害想定についての意見
7. 結論ならびに今後の課題

附属資料 単純集計結果

キーワード：津波防災、予知、被害想定、地震動予測地図

関谷直也（東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター） 0.～7.

田中 淳（東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター）

本研究は文部科学省「日本海地震・津波調査プロジェクト」の一環として行われたものである

0. 要旨

本研究では、日本海側住民の全体的な特性を明らかにするため、特に「想定」についてのアンケート調査を実施した。

結果、①日本海側の地震・津波に関する認識として、その発生の可能性や過去の履歴、特性について認知度が低く、想定もあまり周知されていないということ、②地震の予知や予測についての理解や認識として、様々なことを周知する以前に地震に関連する用語についての認知率が低く、震度、マグニチュードの違いが判らないという人が約半数いることなどが明らかになった。

また、想定公表に関する人々の一般的な意識として、①いわゆる「最大、最悪の想定」については肯定的であり、頻度の高い想定よりは、最大の想定を求めていること、②高い精度を求めているわけではなく可能性のあるものについては公表すべきと考えている人が多いこと、③表現技法として、定量的表現よりも定性的表現やレベルなどでの情報を求める人が多いこと、年確率表現や「m」「%」という表現のみではわかりにくいという人が多く、課題があることが分かった。

災害の被害想定については、参考程度に考えているという人が多いものの、情報としては有意義なものと捉えられている。ただ、現状では対策やとるべき行動がイメージしにくく、被害や対策についてイメージがわきにくいというのが課題として明らかになった。

1. はじめに

1.1 調査目的

本調査では、本研究の目的を達成するために、2013年度から14年度にかけて住民アンケート調査研究の実施および分析、日本海自治体と住民（新潟市）へのヒアリングの実施、2014年度から15年度にかけて日本海自治体郵送調査の実施および分析を行ってきた。2016年度は、日本海側住民の特性を明らかにするため、特に「想定」についてのアンケート調査を実施した。

具体的には、日本海地震・津波に関する認識、地震予知や予測についての理解と素朴に持っている認識、想定公表についての意見、地震動予測地図の影響、被害想定についての意見などについての意識を考えるべくアンケート調査を設計、実施した。

1.2 調査概要

調査概要は以下の通りである（表 1.1）。なお本調査は、同時期に、日本海以外の県でも同様の調査票を用いた調査を実施しており、各県 50 票を回収し全県調査とした。

なお各県 50 票に加え、兵庫県と京都府に関しては日本海と太平洋に接しており、日本海側の意識も今後分析することを考えて、兵庫県と京都府の日本海側の 8 市町村を加えた。山口・青森は調査対象者が太平洋側に寄っていたため、太平洋側として計算した。

本報告では、基本的には本プロジェクトで実施した日本海側の調査結果からみえてくる特徴のみを述べていくものであるが、参考値として、太平洋側、内陸側の結果も参考値として提示する（以降、それぞれを「日本海側」「太平洋側」「内陸側」と省略する）。

調査は全部で 54 問にわたる。本稿は本調査の主要部について記述する。

表 1.1 調査概要

調査対象：全国 20 代～60 代の男女個人、性・年代（20 代から 60 代）均等割付
調査方法：楽天リサーチのオンラインモニター調査
調査時期：2017 年 3 月 9 日（木）～3 月 13 日（月）
調査地域：47 都道府県各 50 票＋指定エリア 50 票、計 2,400 票
➤ 1. 日本海側道県（北海道、秋田、山形、新潟、富山、石川、福井、鳥取、島根、福岡、佐賀、長崎）600 票 ※日本海プロジェクトとして実施
※京都府日本海側市町村（舞鶴市、宮津市、京丹後市、与謝郡伊根町・与謝野町）32 票
※兵庫県日本海側市町村（豊岡市、美方郡香美町、美方郡新温泉町）18 票
➤ 2. 太平洋側都府県（青森、岩手、宮城、福島、茨城、千葉、東京、神奈川、静岡、愛知、三重、和歌山、大阪、兵庫、岡山、広島、京都、徳島、高知、愛媛、山口、大分、宮崎、鹿児島、沖縄）1,300 票 ※拠点間連携共同研究として実施
➤ 3. 内陸（そのほか、含熊本）450 票 ※拠点間連携共同研究として実施

2. 日本海地震・津波に関する認識

2.1 日本海地震・津波に関する知識

まず、日本海地震・津波に関する知識について問うた（図 2.1）。

「日本海側で津波が起こる可能性があること」を知っているという人は日本海側で 51.8%、「日本海側の津波は到達するまでの時間が短いこと」を知っているという人は日本海側で 34.9%、「日本海側の津波の発生確率の計算は難しいこと」を知っているという人は 18.0%、「日本海側の津波については大規模に広域で津波が発生する可能性は低いこと」を知っているという人は日本海側で 22.0%であった。ほぼ同じ傾向として、知っているという人の割合はこの 3 分類の中で最も高いものの、そこまでそのことを知っている人が多い訳ではないし、太平洋側や内陸側よりもいずれも少し高いというだけであった。

若干、詳細な知識についても問うた（図 2.2）。「日本海側では太平洋側と違いプレート境界が明白でないこと」を知っているという人は日本海側で 22.8%、「もっともはやく到達する津波の想定が最も大きな津波の想定という訳ではないこと」を知っているという人は日本海側で 37.2%、「日本海側の津波の想定は断層毎で最大クラスの津波を想定し、その津波があった場合に想定される浸水区域、推進、津波到達時間を示したものであること」を知っているという人は日本海側で 14.9%であった。やはり、これら想定の詳細についても、知っているという人の割合はこの 3 分類の中で最も高いものの、そこまで多い訳ではないし、太平洋側や内陸側よりもいずれも少し高いというだけであった。

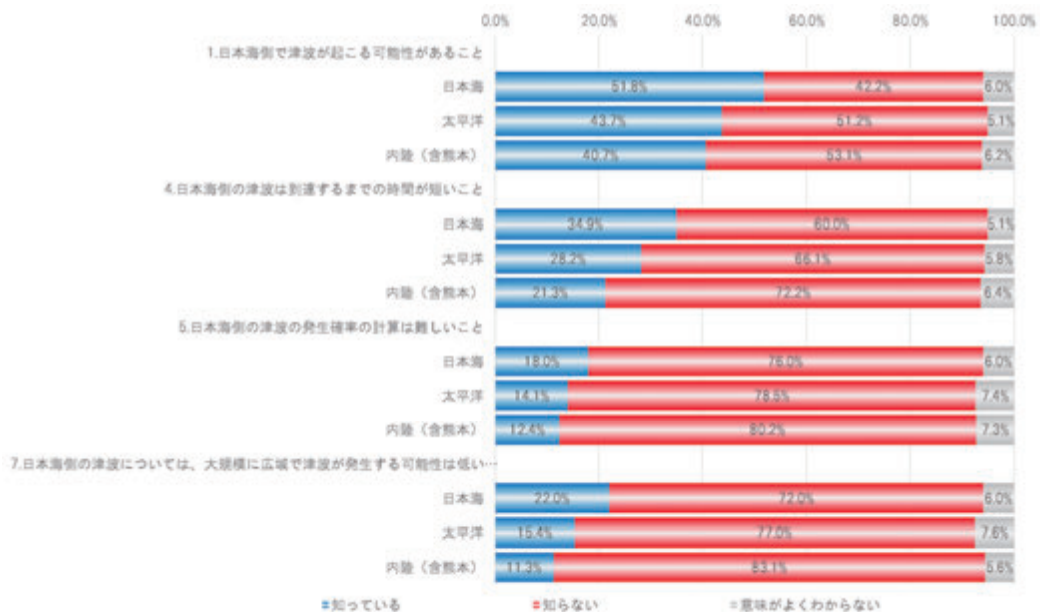


図 2.1 日本海地震・津波に関する知識①

また、単純な過去の津波の認知についても問うた（図 2.3）。「日本海側で過去、津波が発生してきたこと」を知っているという人は日本海側で 48.6%、「日本海側では、1964 年に新潟地震で津波が発生したこと」を知っているという人は日本海側で 27.4%、「日本海側では、1983 年に日本海中部地震で津波が発生したこと」を知っているという人は日本海側で 31.7%、「日本海側では、1993 年に北海道南西沖地震が発生し、奥尻町が被害を受けたこと」を知っているという人は日本海側で 50.6%であった。日本海側で津波が発生してきたということを認知している人は半分しかいないし、北海道南西沖地震のみ認知率が高いものの、それよりも過去になると 1/4 程度しか知らないという結果であった。

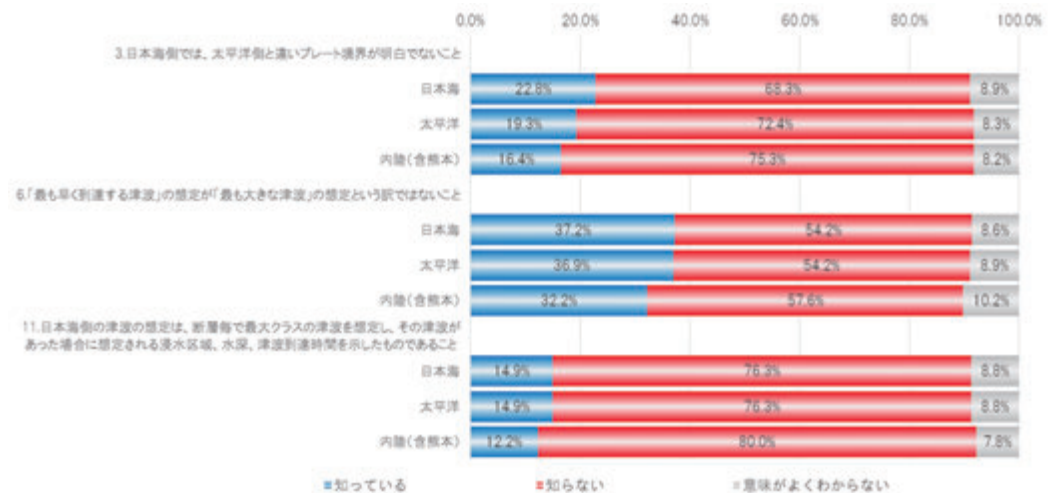


図 2.2 日本海地震・津波に関する知識②

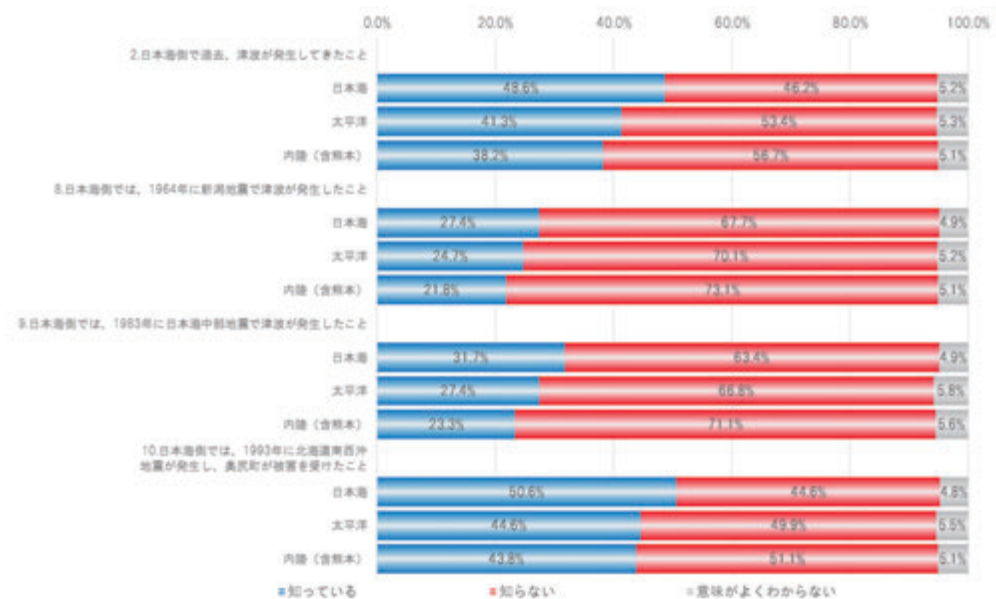


図 2.3 過去の日本海側の津波の認知

2.2 発生確率を示せない日本海地震・津波の公表に関する認識

次に、発生確率への認識について考える。津波防災地域づくりの推進に関する基本的な指針（平成 24 年 1 月告示）によれば、津波防災地域づくりに関する法律（平成 23 年 12 月公布・施行）の第 8 条 1 項定められた「津波浸水想定の設定」を「最大クラスの津波を想定」することになっている。このため 2014 年に「日本海における大規模地震に関する調査検討会」において、60 の断層モデルから最大クラスの津波を設定したものの、日本海側は過去の津波の履歴が少なく発生確率については計算できていない。これは太平洋側の地震・津波については、過去の繰り返しの履歴がある程度知見としてあることから、ハード設備も踏まえて備える L1（数十年～百数十年に 1 回）、主にソフト対策で備える L2（数百年～千年に 1 回）といった形の示され方がなされていることと大きく異なる点である。

これについて「日本海側の津波は過去の履歴がはっきりとわかっていないのでの発生確率（今後〇〇年に 1 回、〇〇年に〇%）という形で示すことはできません。あなたはこのことについてどう思いますか？」と聞いたところ、「発生確率がわからないなら公表しない方がよいと思う」が 26.0%、「発生確率がわからなくとも、公表した方がよいと思う」74.0%であった（図 2.4）。またこれは地域による差はなかったことから、発生場所（日本海側の津波であるかどうか）や自分の住んでいる場所かどうかにかかわらず、一般的に確率評価がしめされなくても、公開を多くの人が望んでいることがわかった。

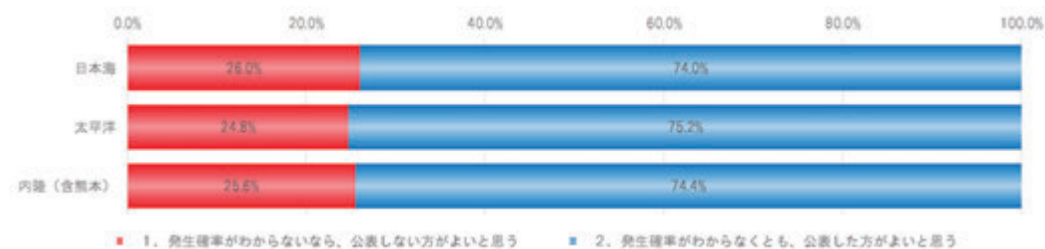


図 2.4 日本海側の津波が発生確率を示せないことについて

2.3 想定認知度

次に想定認知度について考える。「日本海津波の浸水想定」は、先行した新潟・秋田の他、2014 年の国の「日本海における大規模地震に関する調査検討会」での断層モデルおよび津波高・到達時間の計算の後、各都道府県で浸水想定が検討・策定されているところであり、これらが各県においてこの数年、報道されている。これら様々な想定について「政府、都道府県、市町村は災害で災害被害が考えられる災害について想定をしています。あなたはこのことを知っていますか？」と認知の度合いを聞いた（図 2.5）。結果、地域差は

あまりなく「南海トラフ地震の被害想定」「首都直下地震の被害想定」のみが飛びぬけて認知度が高いほか、質問文で提示した様々な被害などの想定のみで、日本海は最も認知度が低かった。

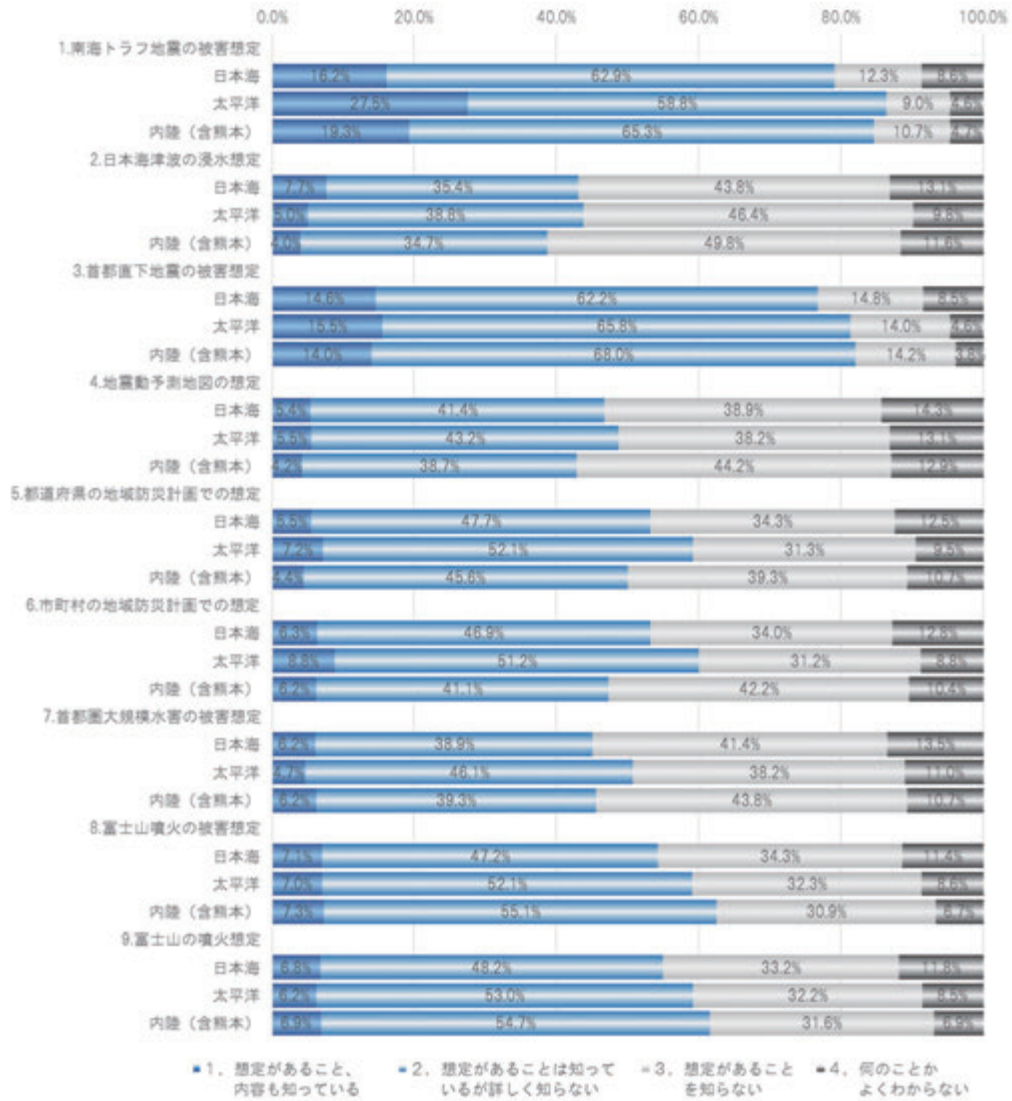


図 2.5 想定認知率

次に南海トラフ、日本海側の津波、地震動予測地図、首都直下地震について、詳しく説明し、同じ質問項目で認知度を問うた（表 2.2、図 2.6）。具体的には以下の通りである（それぞれ南海トラフ巨大津波、日本海津波、首都直下地震、地震動予測地図と略）。

しかしながら、それでも結果に大きく違いはなく、「想定があることは知っているが、詳しく知らない」という回答率が若干、上昇する程度であった。おおむね、日本海側の津波想定に関して、認知度は低いことがわかった。

だが、それぞれの想定について「あなたはこれらを知って、何か対策をとろうとおもいますか」と聞いたところ、日本海側の津波については、日本海側の住民は「対策をとろうと思う」という回答が 39.2 %、と回答している人は多く、「対策をとろうとは思わない」という人は 24.6 % と少なかった（図 2.7）。住民の多くは対策をとらなければならないということは認識しているのである。これらを総合すると、単純に、認知度が低いというのが最大の課題であり、想定周知不足が課題であることがわかった。

表 2.2 質問項目における説明

「巨大想定」や地震動予測地図についてお伺いします。	
A.	2012 年、政府は、南海トラフの巨大津波想定について、どのような地震・津波が発生するかについて、またその被害想定について公開しています。
B.	2014 年、政府は、日本海側の津波について、どのような地震・津波が発生するかについてモデルを示し、それを受け、現在、各県が被害想定を公表（もしくは公表しよう）としています。
C.	阪神・淡路大震災後、政府は地震動予測地図というものを示し、地震の発生確率を公表しています。
D.	首都直下地震の地震について、政府がモデルを公表し、都が被害想定を公表しています。

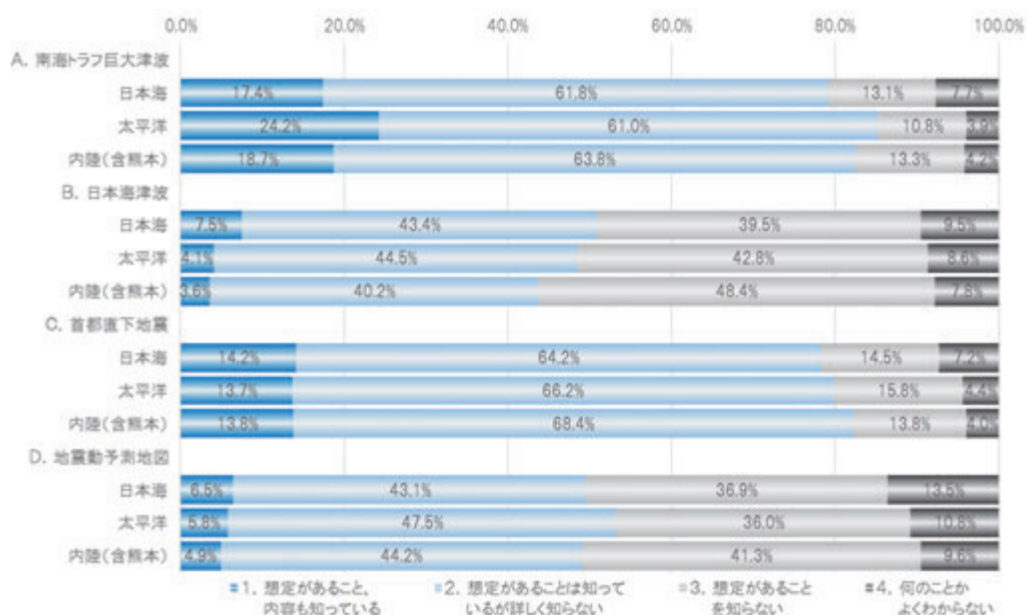


図 2.6 想定認知率（南海トラフ巨大津波、日本海津波、首都直下地震、地震動予測地図）

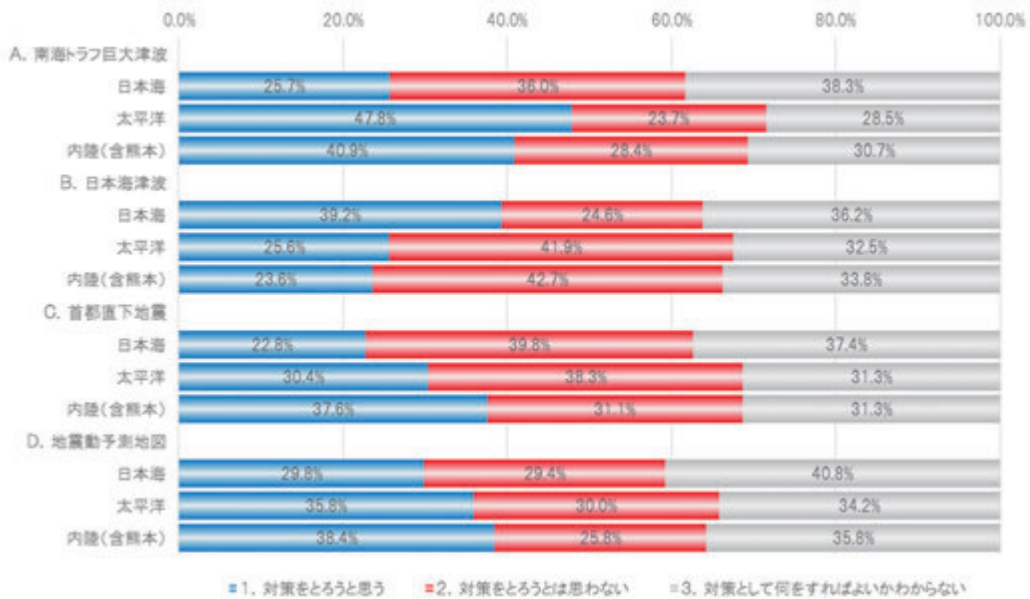


図 2.7 対策の意図（南海トラフ巨大津波、日本海津波、首都直下地震、地震動予測地図）

2.4 津波の巨大想定に関する評価・意識

また、津波の巨大想定に関する評価・意識についても問うた（図 2.8）。「日本海側の津波で巨大想定を出すことはいいことだと思う」という人は日本海側で 81.5 %（「強くそう思う」「ややそう思う」の合計、以下同様）、「日本海でも太平洋側と同規模の巨大な津波がくる可能性はほぼない」という人は日本海側で 40.7 %であった。日本海側の津波については巨大津波の可能性はきわめて低いのだが、巨大津波の可能性があると考えている人も多く、またそれゆえに、巨大津波の想定に肯定的な人が多いということがわかった。

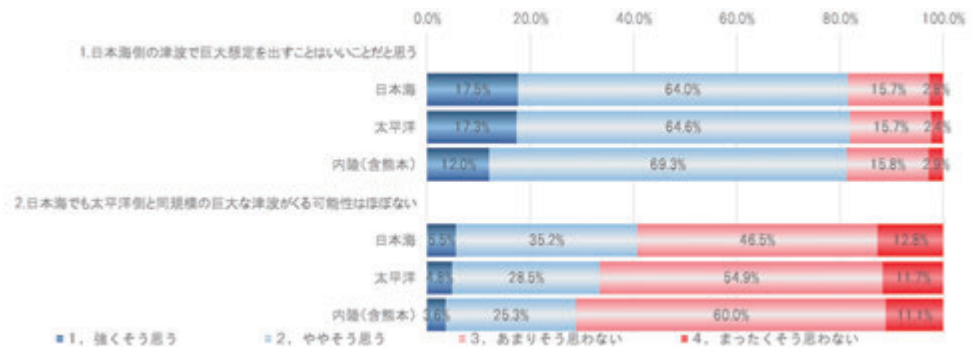


図 2.8 津波の巨大想定に関する評価・意識

2.5 日本海側の津波避難・救助に関する認識

避難に関する意識についても問うた（図 2.9）。「日本海側は地震の規模に比べて津波が高く、津波到達までの時間が早いので、津波警報をまっぴりではない」という人は日本海側で 75.0 %、「緊急時に沿岸部に救助に行くべきではない」という人は日本海側で 80.0 %と非常に多かった。ただし、これは日本海津波想定認知率が低い上での回答であるので、日本海側の津波の特徴の詳細をあまり踏まえずに、一般的な津波の知識として理解されている可能性が高く、その理解については若干の留保が必要である。

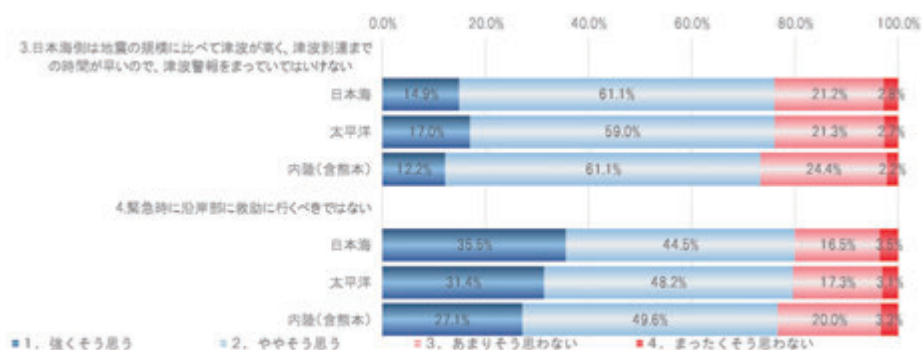


図 2.9 日本海側の津波避難・救助に関する認識

3 地震の予知や予測についての理解と素朴に持っている認識

次に、地震の予知や予測についての理解と素朴に持っている認識（しろうと理論 Lay Theory (Furnham, A.F., 1988) について検討した。

3.1 地震に関連する用語の認知率

まず、用語の認知率について問うた（図 3.1）。それぞれ日本海側での認知率は「本震/余震」68.2 %、「緊急地震速報」69.7 %、「震度」62.5 %、「プレート」57.7 %、「断層」56.5 %、「マグニチュード」56.0 %、「活断層」53.1 %、「地震動予測地図」21.7 %、「逆断層」14.9 %、「地震調査研究推進本部」6.5 %であった。おおむね日本海側、太平洋側、内陸で大きな差は見られなかった。報道やさまざまところで、地震に関する用語がつかわれるものの、それを理解している人は 7 割～5 割であり、認知していない人も多いことがわかる。

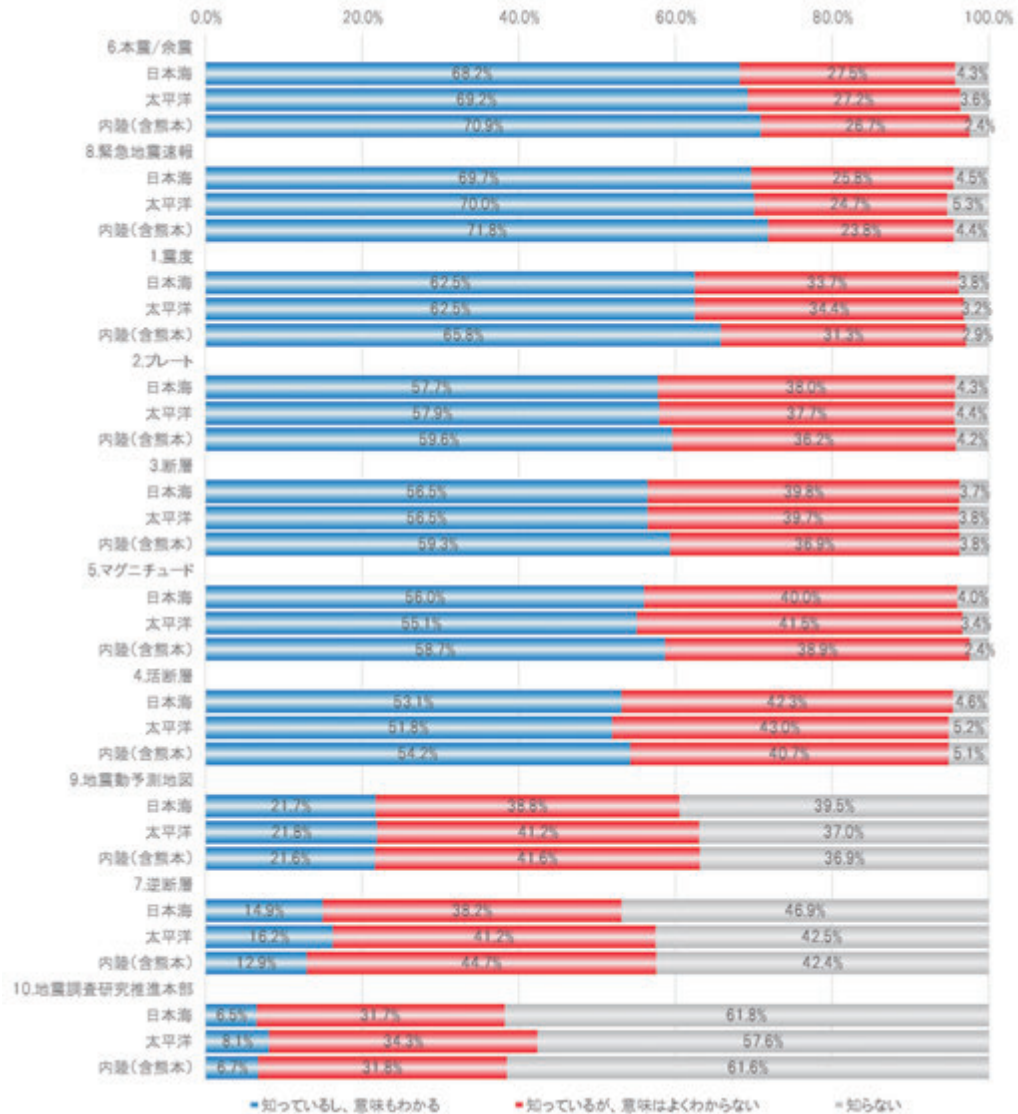


図 3.1 地震に関連する用語の認知率

3.2 震度とマグニチュード

地震で最も基本的な知識である「震度」「マグニチュード」について問うた(図 3.2)。「地震が発生したときに発表されるものには、震度の他にマグニチュードがあげられます。あなたは、震度とマグニチュードの違いについて、学校で習った記憶はありますか。」と問うた。日本海側において、「習った記憶があり、違いもわかる」という人は 16.5%、「習った記憶はないが、違いがわかる」という人は 36.0%、「習った記憶はあるが、違いがわからない」という人は 20.5%、「習った記憶もないし、違いもわからない」という人は 27.1%

であった。違いがわかる人は約半数で、約半数の人は報道でマグニチュードや震度を正確に理解していなかった。なお、内陸側、太平洋側、日本海側の順で理解はされているものの、全体として大きな差はなかった。

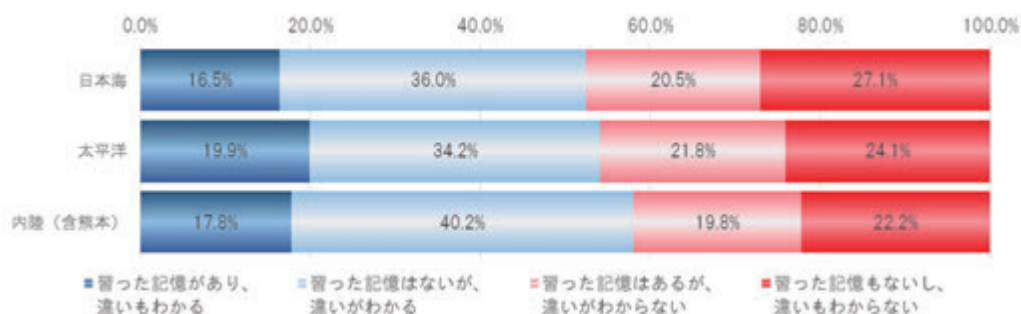


図 3.2 震度とマグニチュード

3.3 地震の予知や予測についての認識

次に地震の予測について「現在の地震学・科学での長期的な地震動の予測は可能だと思いますか」と問うたところ、「精度は極めて高く、ほぼ確実に予測できる」は 1.2 %、「精度は高く、ある程度の精度で予測できる」は 20.2 %、「予測できるものもある」は 47.4 %、「精度は低く、ほとんど予測できない」は 21.8 %、「精度は極めて低く、まったく予測できない」は 9.4 %であった。多くの人が、ある程度予測できると答えていた (図 3.3)。

また、それがゆえに、地震の予測に基づく様々な想定についても、多くの人が信頼をおいている。様々な公式の調査について、居住地域や対象によらず、8 割弱の人が信頼をおいていた (図 3.4)。

次に地震予知の認識について詳細に問うた (図 3.5)。日本海側では「地震予知研究を推進するのはよいと思う」という人は 89.7 %、「地震予知ができれば多くの人が救えるので、政府は全力をあげて、この研究を推進すべきだ」という人は 82.9 %、「現在の地震学の水準で地震を予測するには限界があると思う」という人は 73.5 %、「近い将来、短期の地震予知は可能になると思う」という人は 73.4 %、「地震予知は実現しつつあると思う」という人は 63.1 %、「純粋に科学の発展のために研究は進めるべきで、地震予知のようなものに研究資源を費やすべきではない」という人は 31.7 %、「地震予知をできる能力があるのに、難しいというのは研究者としての責任を果たしていないと思う」という人は 39.0 %であった。おおむね、現在の地震学の水準では限界があることを理解しつつも、地震予知に期待している人が多いことがわかった。

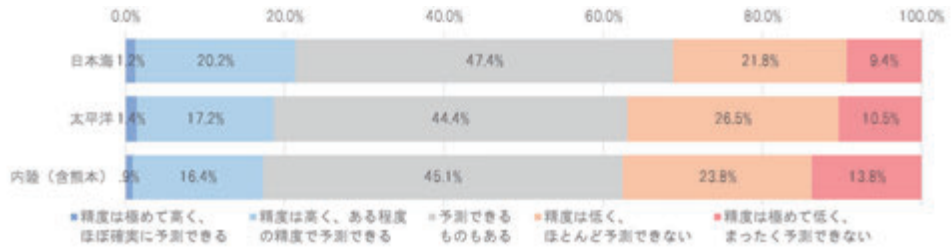


図 3.3 現在の地震学・科学での長期的な地震動の予測は可能と思うか

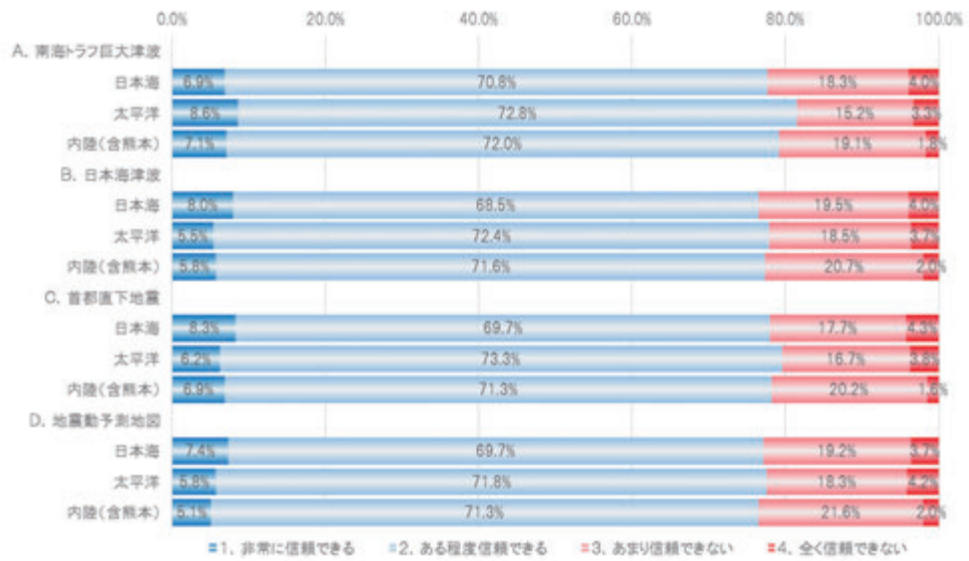


図 3.4 想定への信頼（南海トラフ巨大津波、日本海津波、首都直下地震、地震動予測地図）

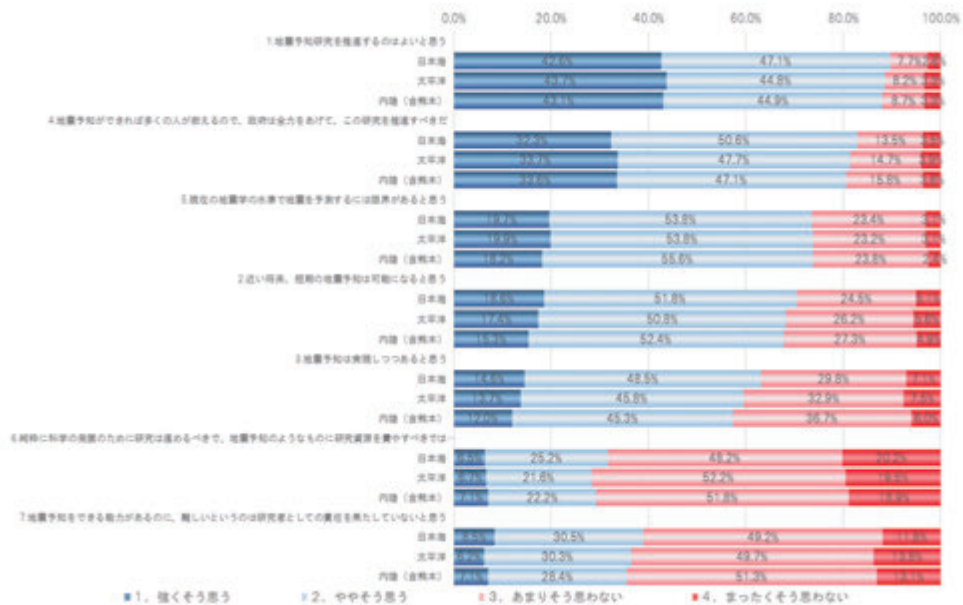


図 3.5 地震予知への認識

4. 「想定」の公表についての意見

4.1 「最大、最悪の想定」に関する理解

また、いわゆる「最大、最悪の想定」についても詳細に問うた(図 4.1)。「対策を進めるきっかけになるので、最大、最悪の想定を出すのはよいと思う」という人は 87.4%、「覚悟ができるので、最大、最悪の想定を出すのはよいと思う」という人は 83.9%、「インパクトを与えるという意味で、最大、最悪の想定を出すのはよいと思う」という人は 71.4%、「対策は後に考えればよいことなので、最大、最悪の想定を出すのはよいと思う」という人は 54.0%、「確実に起こる訳でないなら、最大、最悪の想定を出さない方がよいと思う」という人は 27.3%、「対策もとれないようなら、最大、最悪の想定は出さない方がよいと思う」という人は 29.0%であった。

東日本大震災の後、想定外を無くすとの旗印のもと「最大、最悪」の想定を行うことが基本となっている。そして自治体や具体的な防災対策を整える側はその扱いに苦労しているという課題がある。だが、一般的に多くの方は、「最大、最悪の想定」について肯定的であり、これらを情報として出すことについては肯定的であることがわかった。

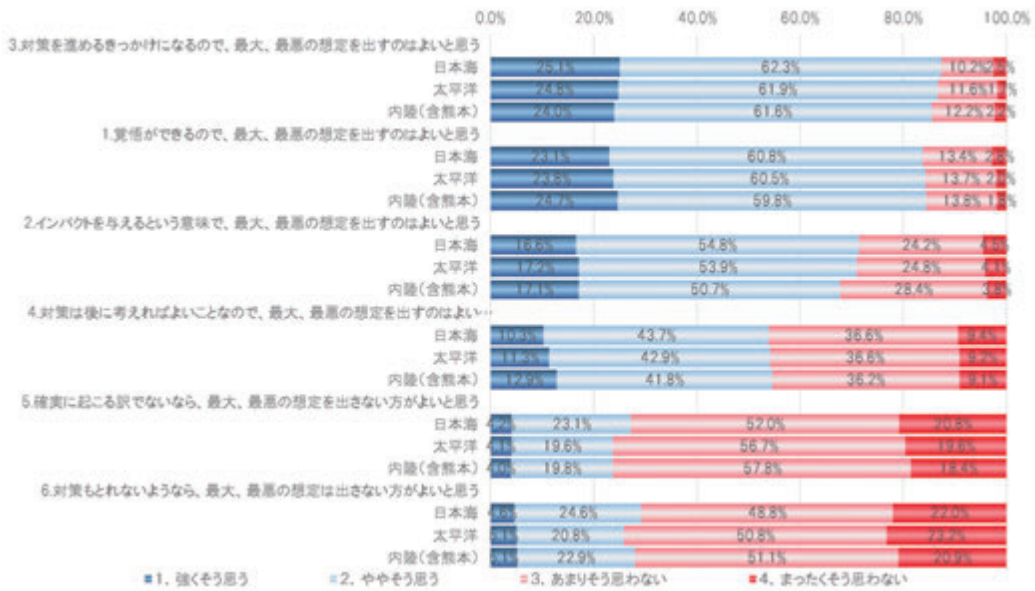


図 4.1 「最大、最悪の想定」に関する理解

4.2 地震の予測精度と公表に関する認識

地震予測の精度と公表について問うたところ、「必ず的中する確実な予測だけを公表してほしい」という回答が 8.0%、「必ずではなくても構わないので、少しでも可能性のあるものは公表してほしい」という回答が 84.0%、「少しでも不確実性のあるものは公表すべきではない」という回答が 8.0%であった。おおむね、住民は精度の高い予測を求めているわけではなく、可能性のあるものを欲していることがわかる（図 4.2）。

また、この想定については、表現の仕方について様々な意見がある。その中でも対立しやすい意見について、問うた（図 4.3）。

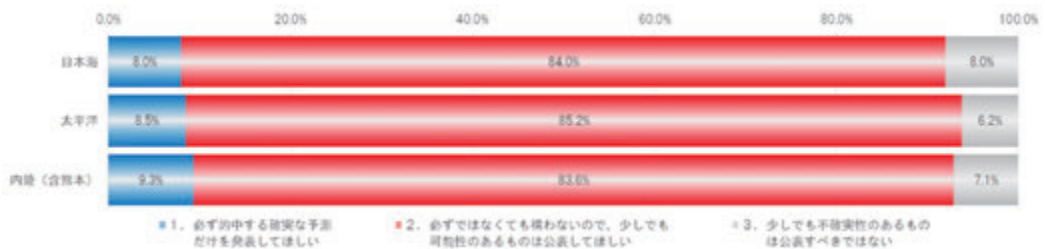


図 4.2 地震の予測の精度と公表

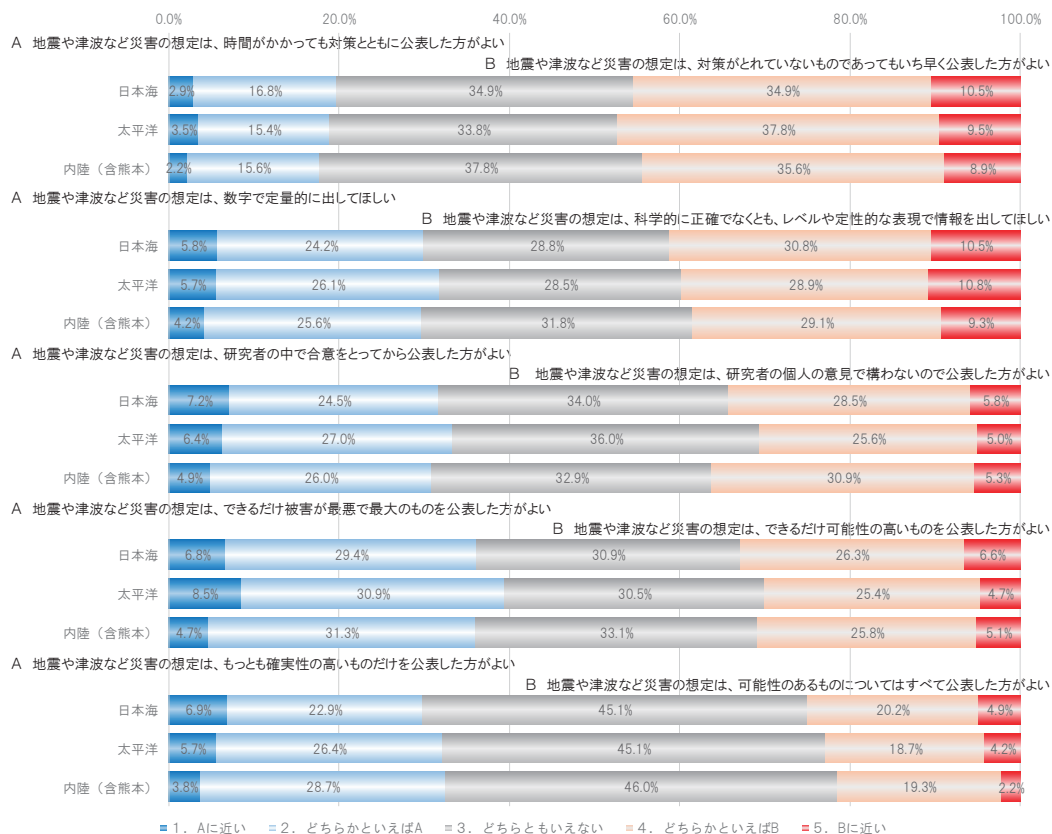


図 4.3 表現の仕方についての対立する意見

早めの公表がよいか、対策をセットで考えた方がよいか「A 地震や津波など災害の想定は、時間がかかっても対策とともに公表した方がよい」「B 地震や津波など災害の想定は、対策がとれていないものであってもいち早く公表した方がよい」という選択肢の、どちらに考え方が近いかを聞いたところ、多くの人が早めに公表した方がよいと答えていた。

定性的表現と定量的表現について、「A 地震や津波など災害の想定は、数字で定量的に出してほしい」「B 地震や津波など災害の想定は、科学的に正確でなくとも、レベルや定性的な表現で情報を出してほしい」という選択肢の、どちらに考え方が近いかを聞いたところ、定量的な表現よりは、定性的表現を求めている人が若干多かった。

想定に関して最大のものを公表した方がよいか、最頻のものを公表した方がよいかについて「A 地震や津波など災害の想定は、できるだけ被害が最悪で最大のものを公表した方がよい」「B 地震や津波など災害の想定は、できるだけ可能性の高いものを公表した方がよい」という選択肢の、どちらに考え方が近いかを聞いたところ、最大のものを公表した方がよいという人が若干多かった。

なお、「A 地震や津波など災害の想定は、研究者の中で合意をとってから公表した方がよい」「B 地震や津波など災害の想定は、研究者の個人の意見で構わないので公表した方がよい」という公式見解か、個人の見解かという点については議論が分かれていた。「A 地震や津波など災害の想定は、もっとも確実性の高いものだけを公表した方がよい」「B 地震や津波など災害の想定は、可能性のあるものについてはすべて公表した方がよい」という選択肢についても議論が分かれていた。

まとめると、「早めに」「定量的表現にこだわるよりは定性的表現」、「最も頻度の高いものを重視するよりは最も大きな想定を」出した方がよいという方向性であった。

4.3 表現技法に関する意見

次に、さまざまな被害想定や地震動予測地図などにおける表現の仕方について、意見を問うた（図 4.4）。「難しい用語が使われてもわからない」という人は 86.6%、「『今後 30 年に一回』という形で表現されても、わかりにくい」という人は 77.9%、「浸水想定が「〇 m」と示されてもイメージがわからない」という人は 60.9%、「『%』を使って確率で表現されても、わかりにくい」という人は 60.1%、「数値で示さなくてもよいと思う」という人は 24.2%であった。先述の知識の質問で見たように地震に関する用語を理解している人は必ずしも多くはない。また多くの人は数値で示してほしいが、必ずしも『今後 30 年に 1 回』などの年確率表現や『%』『m』などの表現だけでは、わかりにくいとも感じている。具体性をもちつつも、より定性的表現を併せ持って説明することが必要なことがわかる。

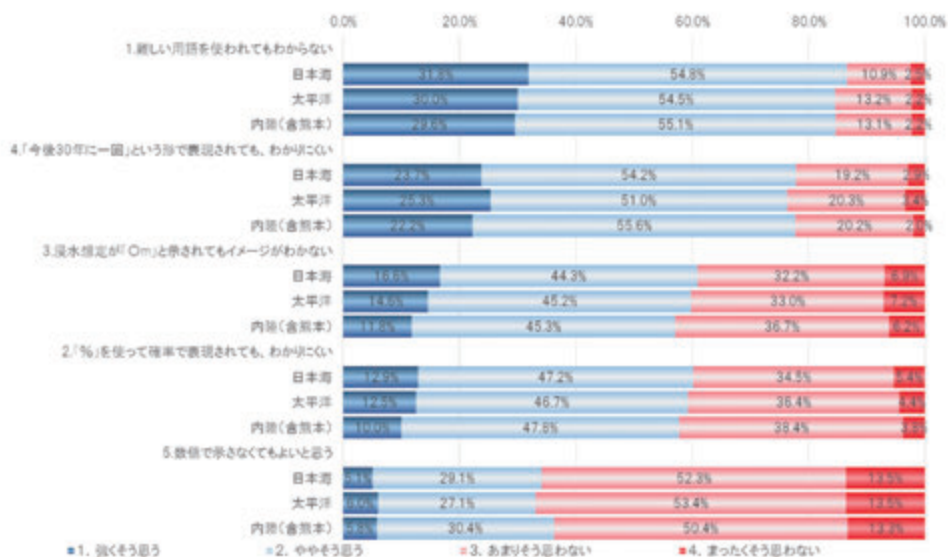


図 4.4 表現技法に関する意見

5. 地震動予測地図の影響

地震動予測地図は、太平洋側は赤く、日本海側は黄色く、相対的に日本海側の方のリスクが低いことを示している。その確率認知はどのようなものか、これについても地震に関する予測表現の理解の一つとしてこの影響を聞いた（図 5.1）。日本海側の人で、「日本中どこでも地震が起こる可能性があることがわかる」という人は 90.0 %、「黄色い部分でも地震が来ることがわかる」という人は 85.8 %であった。ある程度、日本のどこでも地震が起こり得るとい地震動予測地図の意図は伝わっているといえる。

ただし、地域別でみた場合の結果として、「場所によって地震発生確率がかなり異なることがわかる」という人は 90.5 %、「黄色い部分には地震が来にくいことがわかる」という人は 72.5 %、「太平洋側では地震が来やすいことがわかる」という人は 90.8 %、「日本海側では地震が来にくいことがわかる」という人は 75.7 %であった。結果的にこの地図は、地域による「差」を強く意識させることとなり、結果として日本海側は地震が発生しにくいという印象を与えてしまうことがわかる。これらは、地域によらず、日本海側、太平洋側、内陸側でほぼ同様の傾向となっており、どの地域に住んでいるかによらず、この地図を見た一般的な傾向であることがわかる。

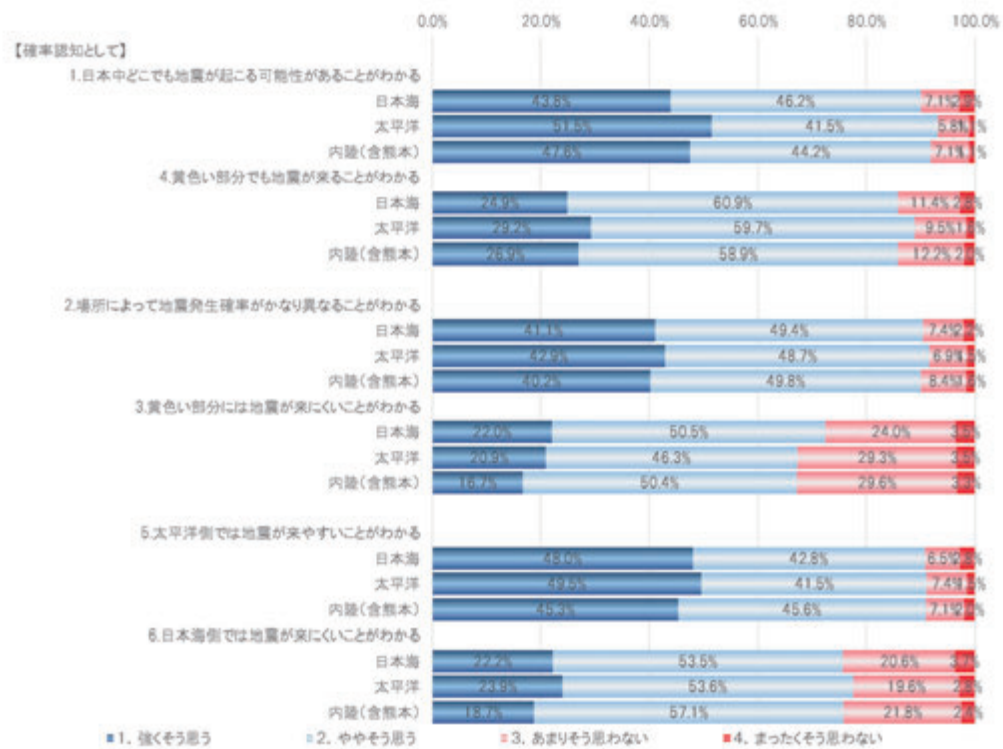


図 5.1 地震動予測地図と発生確率の認知

「地震の発生する確率がわかり、地震対策に有効だと感じる」という人は 83.2 %、「自分が住んでいるところの地震予測がわかる」という人は 86.3 %、「地震予測が可視化され、見ると改めてこわいと感じる」という人は 76.5 %と、この地図に対する一般的（客観的）な認識については、あまり大きな違いはなかった（図 5.2）。

ただし、自分自身に関連する危険／安全に関する認知になると大きく異なっていた。日本海側においては、「自分が住んでいるところはより危険であるとわかる」という人は 44.3 %と相対的に少なく、「自分が住んでいるところはより安全であるとわかる」という人は 57.2 %と相対的に多い。また割合としても多いものの「地震の発生する確率がわかり、不安や恐怖を感じる」との回答も相対的に少ない。結果として、地震動予測地図のような表現は、日本海側の住民にとって、太平洋側や内陸側と比べて、安心する方向への情報として機能してしまっていることがわかる。

なお、対策面でも若干、負の影響がみられる（図 5.3）。「地震が来ることがわかり、対策を考えた（防災グッズを買う、耐震化、避難訓練など）」との回答も 62.0 %であるが、他地域と比べて相対的に低く、具体的な防災対策としても、他地域と比べて負の方向での影響があることがわかった。

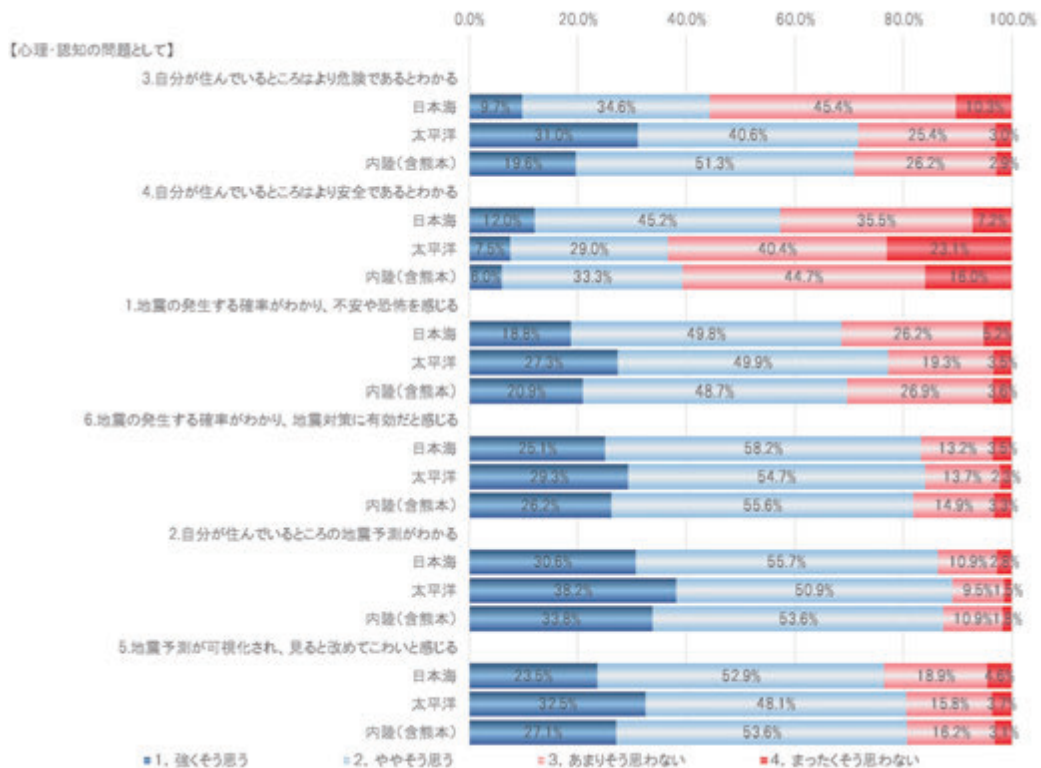


図 5.2 地震動予測地図と心理的影響

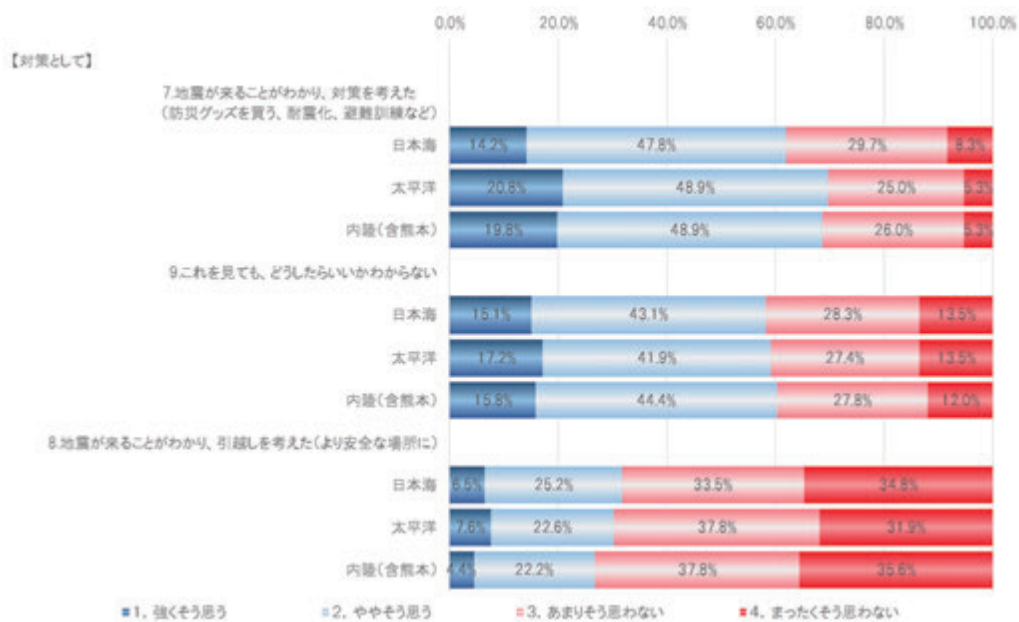


図 5.3 地震動予測地図の対策面での影響

6. 被害想定についての意見

最後に想定についての意見について考える。

全体としては、想定については参考程度に考えているという人が多いものの、情報としては意味を持つと考えており、知らなくてもよいと考えている人は少ないことが分かった(図 6.1)。

「機会があれば、家を買うときなどの参考にしようと思う」という人は 70.5%、「もっと詳細な地震災害などの被害想定を知りたい」という人は 75.1%、「あらゆる科学的な地震災害などの被害想定には限界があるので、参考程度に考えている」という人は 73.2%、「想定はおおざっぱな見通しが示されればよいと思う」という人は 51.8%、「そもそも住んでいる土地から簡単には動けないので、あまり意味がないと思う」という人は 51.1%、「地震災害などの被害想定を参考にしたことはない」という人は 51.7%、「別に、地震災害などの被害想定は知らなくてもよい」という人は 22.5%であった。

また、想定についての要望としては、対策やとるべき行動がイメージしにくい、確実性についてよくわからず、被害や対策についてイメージがわきにくいというのが課題であるようである(図 6.2)。

「対策やとるべき行動をイメージしやすいシナリオをつくってほしい」という人は 81.2 %、「地震の発生確率を示されても、この想定がどれくらい確実におこるか、よくわからない」という人は 81.7 %、「地震の発生確率を示されても、自分自身の生活において、どのような被害が生じるか、イメージができない」という人は 75.7 %、「地震の発生確率を示されても、自分自身として、対策として何をすればよいのか、イメージができない」という人は 75.7 %、「津波の最大限の浸水予測を示されても、この想定がどれくらい確実におこるか、よくわからない」という人は 76.5 %、「津波の最大限の浸水予測を示されても、自分自身の生活において、どのような被害が生じるか、イメージができない」という人は 71.4 %、「津波の最大限の浸水予測を示されても、自分自身として、対策として何をすればよいのか、イメージができない」という人は 74.5 %、「様々な想定をする人がでてくるので、よくわからない」という人は 70.0 %、「様々な想定をどう役に立てればいいのかわからない」という人は 68.5 %、「どのように活用すればよいかよくわからない」という人は 59.2 %であった。

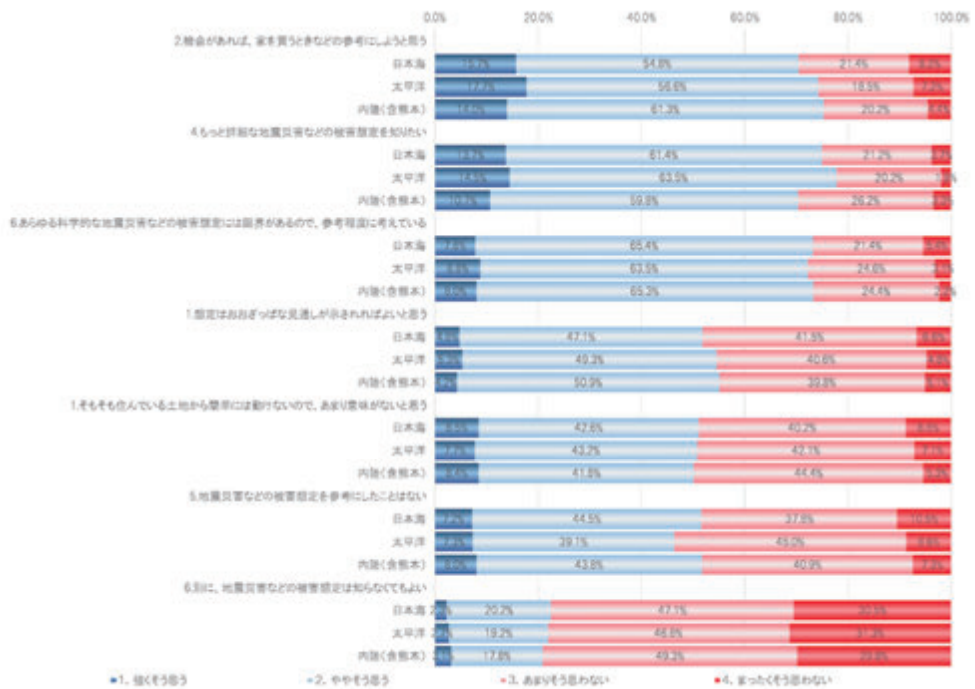


図 6.1 被害想定についての意見

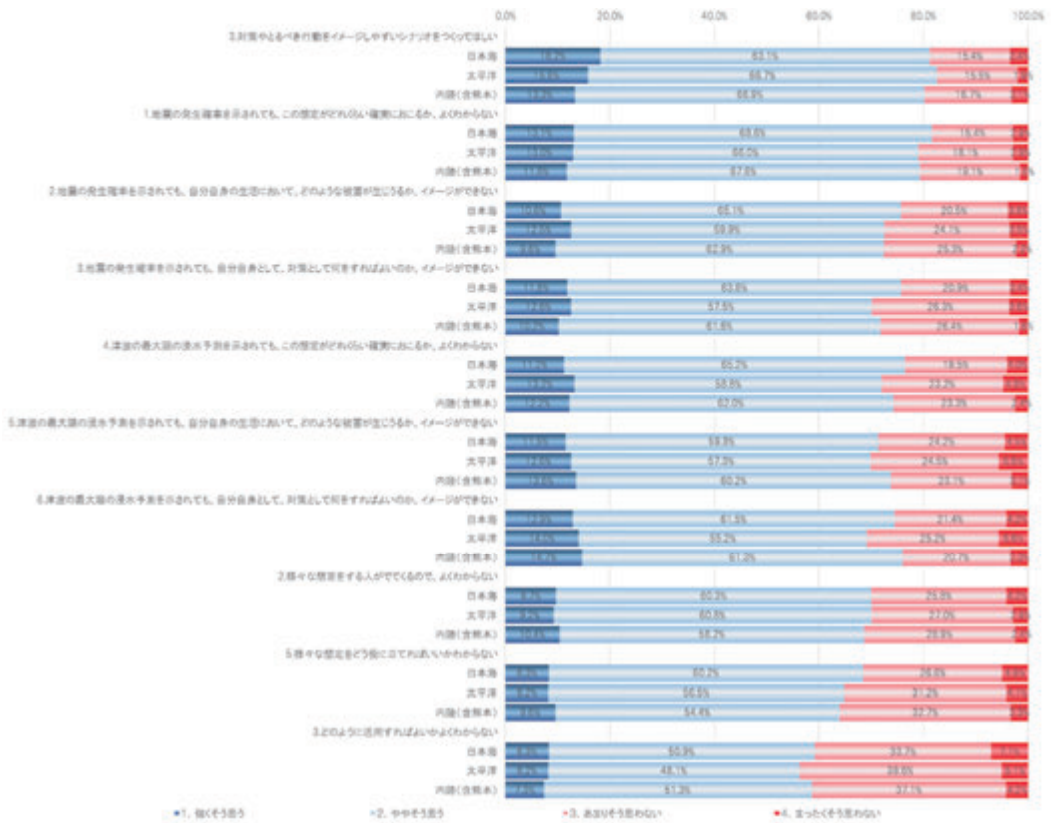


図 6.2 被害想定についての要望

7. 結論ならびに今後の課題

本調査結果をまとめると以下の通りである。

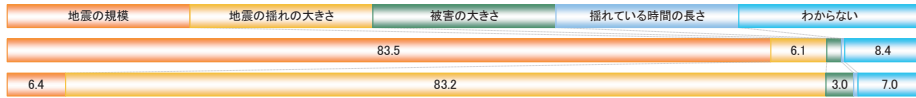
- ・日本海側の地震・津波に関する認識として、その発生の可能性や過去の履歴、特性について認知度が低く、想定もあまり周知されていないということが課題である。また発生確率が示されないことなどについては、否定的な人は多くはないことがわかった。
- ・地震の予知や予測についての理解や認識として、様々なことを周知するという以前に地震に関連する用語についての認知率が低い。震度、マグニチュードの違いが判らないという人が約半数いる。また、多くの人々が地震予知の限界を認めつつも、将来的に実現可能なものであると多くの人々が考えている。
- ・想定公表に関する考え方として、いわゆる「最大、最悪の想定」については肯定的であった。頻度の高い想定よりは、最大の想定を求めている。また高い精度を求めているわけではなく可能性のあるものについては公表すべきと考えている人が多かった。
- ・想定表現技法については、定量的表現よりも定性的表現やレベルなどでの情報を求める人が多いこと、年確率表現や「m」「%」という表現のみではわかりにくいという人が多く、現在の情報提供の仕方では課題が多くあることが分かった。
- ・地震動予測地図の影響として、日本海側はより安全であるとの認識に結び付いていた。
- ・災害の被害想定については、全体としては、参考程度に考えているという人が多いものの、情報としては有意義なものとして捉えられている。ただし、現状では対策やとるべき行動がイメージしにくい、確実性についてよくわからない、被害や対策についてイメージがわきにくいというのが課題といえる。

附属資料 単純集計結果

■地震の知識やイメージ、地震対策についてお伺いします。

Q1.「マグニチュード」「震度」の意味をあらわしているものとして正しいと思うものを、それぞれ一つずつお選びください。わからない場合は、最後の「5. わからない」をお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)

SA



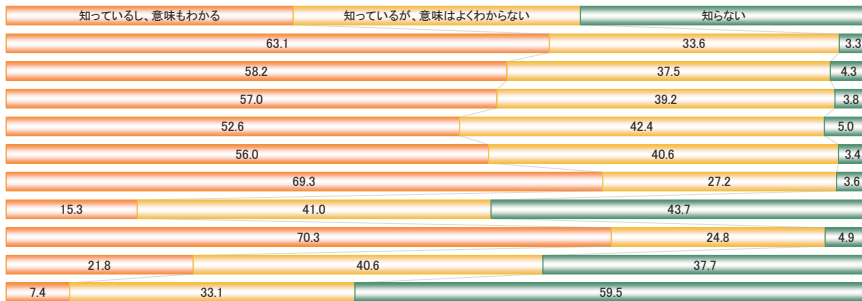
1.マグニチュード(n=2400)

2.震度(n=2400)

	n	地震の規模	地震の揺れの大きさ	被害の大きさ	揺れている時間の長さ	わからない
1.マグニチュード	2400	2004	147	39	8	202
	100.0	83.5	6.1	1.6	0.3	8.4
2.震度	2400	153	1996	73	11	167
	100.0	6.4	83.2	3.0	0.5	7.0

Q2.あなたは次の言葉についてご存じですか。あてはまるものについて、それぞれ一つずつお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)

SA

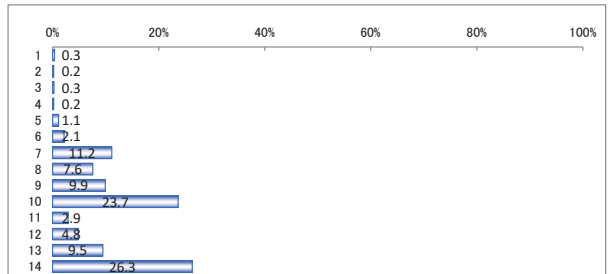


	n	知っているし、意味もわかる	知っているが、意味はよくわからない	知らない
1.震度	2400	1514	807	79
	100.0	63.1	33.6	3.3
2.プレート	2400	1396	900	104
	100.0	58.2	37.5	4.3
3.断層	2400	1368	941	91
	100.0	57.0	39.2	3.8
4.活断層	2400	1263	1017	120
	100.0	52.6	42.4	5.0
5.マグニチュード	2400	1344	975	81
	100.0	56.0	40.6	3.4
6.本震/余震	2400	1662	652	86
	100.0	69.3	27.2	3.6
7.逆断層	2400	366	985	1049
	100.0	15.3	41.0	43.7
8.緊急地震速報	2400	1686	596	118
	100.0	70.3	24.8	4.9
9.地震動予測地図	2400	522	974	904
	100.0	21.8	40.6	37.7
10.地震調査研究推進本部	2400	177	795	1428
	100.0	7.4	33.1	59.5

Q3.地震の大きさを示す単位として「震度」があります。震度は全部で何段階に分かれていると思いますか。あなたがこれだと思うものを1つだけお選びください。「6弱」や「5強」など強弱も分けて考えてください。

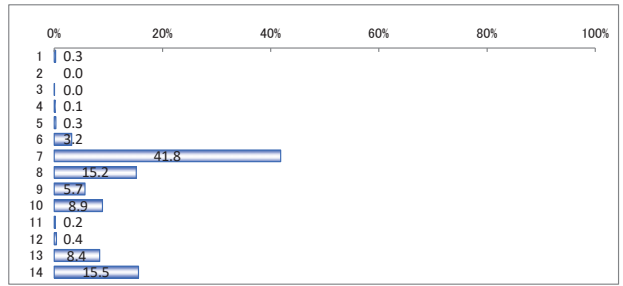
SA

	n	%
全体	2400	100.0
1 1段階	8	0.3
2 2段階	4	0.2
3 3段階	6	0.3
4 4段階	5	0.2
5 5段階	26	1.1
6 6段階	51	2.1
7 7段階	268	11.2
8 8段階	182	7.6
9 9段階	238	9.9
10 10段階	568	23.7
11 11段階	70	2.9
12 12段階	115	4.8
13 13段階	227	9.5
14 わからない	632	26.3



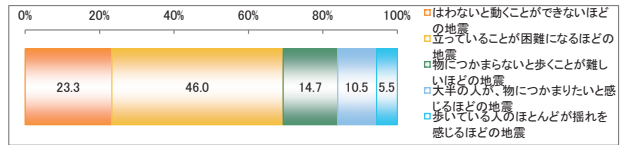
Q4「震度4」「震度7」という言い方をしますが、震度の中で最大のもは以下のうちどれだと思いますか。あなたがこれだと思うものを1つだけお選びください。

	n	%
全体	2400	100.0
1 震度1	6	0.3
2 震度2	0	0.0
3 震度3	1	0.0
4 震度4	3	0.1
5 震度5	7	0.3
6 震度6	77	3.2
7 震度7	1004	41.8
8 震度8	364	15.2
9 震度9	136	5.7
10 震度10	214	8.9
11 震度11	5	0.2
12 震度12	9	0.4
13 震度13	201	8.4
14 わからない	373	15.5



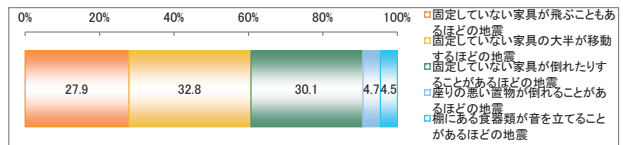
Q5-1.例えば「震度6弱」の地震ときいて、あなたはどれくらいの地震をイメージしますか。【体感】、【室内の様子】、【外の様子】、それぞれについて最もあてはまると思うものを1つずつお選びください。【体感】

	n	%
全体	2400	100.0
1 はわれないと動くことができないほどの地震	560	23.3
2 立っていることが困難になるほどの地震	1104	46.0
3 物につかまらなさと歩くことが難しいほどの地震	352	14.7
4 大半の人が、物につかまりたいと感じるほどの地震	251	10.5
5 歩いている人のほとんどが揺れを感じるほどの地震	133	5.5



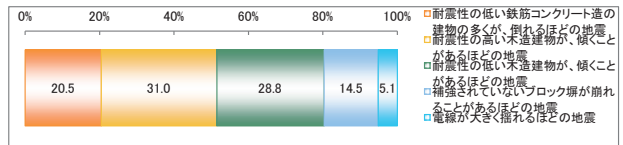
Q5-2.【室内の様子】

	n	%
全体	2400	100.0
1 固定していない家具が飛ぶこともあるほどの地震	670	27.9
2 固定していない家具の大半が移動するほどの地震	786	32.8
3 固定していない家具が倒れたりすることがあるほどの地震	723	30.1
4 座りの悪い置物が倒れることがあるほどの地震	112	4.7
5 棚にある食器類が音を立てることがあるほどの地震	109	4.5



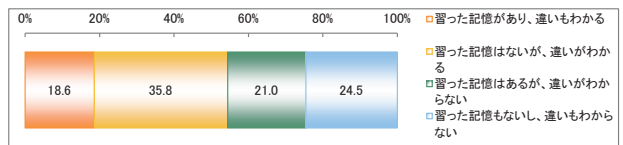
Q5-3.【外の様子】

	n	%
全体	2400	100.0
1 耐震性の低い鉄筋コンクリート造の建物の多くが、倒れるほどの地震	491	20.5
2 耐震性の高い木造建物が、傾くことがあるほどの地震	745	31.0
3 耐震性の低い木造建物が、傾くことがあるほどの地震	692	28.8
4 補強されていないブロック塀が倒れることがあるほどの地震	349	14.5
5 電線が大きく揺れるほどの地震	123	5.1



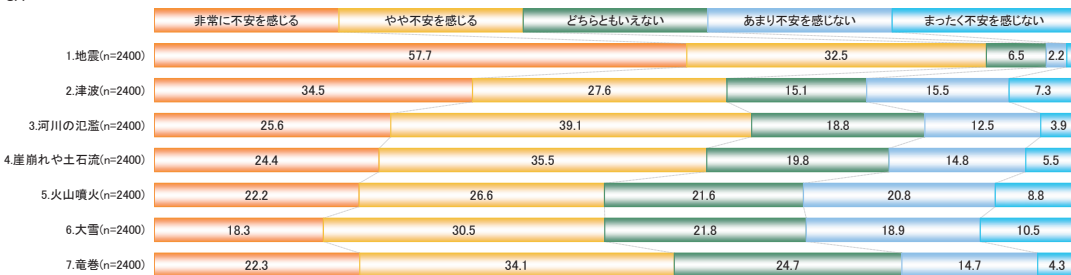
Q6.地震が発生したときに発表されるものには、震度の他にマグニチュードがあげられます。あなたは、震度とマグニチュードの違いについて、学校で習った記憶はありますか。あてはまるものを1つだけお選びください。

	n	%
全体	2400	100.0
1 習った記憶があり、違いがわかる	446	18.6
2 習った記憶はないが、違いがわかる	860	35.8
3 習った記憶はあるが、違いがわからない	505	21.0
4 習った記憶もないし、違いもわからない	589	24.5



Q7.それでは、自然災害の中で、不安を感じる災害は何ですか。次の項目それぞれについて、あてはまるものを1つお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)

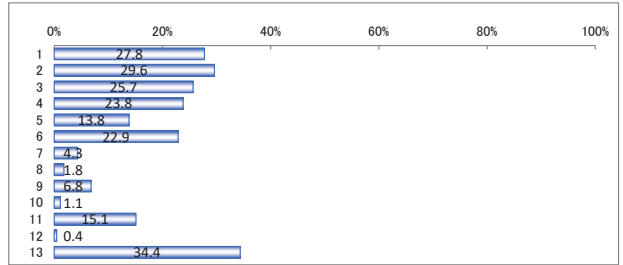
SA



	n	非常に不安を感じる	やや不安を感じる	どちらともいえない	あまり不安を感じない	まったく不安を感じない
1.地震	2400 100.0	1385 57.7	780 32.5	156 6.5	53 2.2	26 1.1
2.津波	2400 100.0	828 34.5	662 27.6	363 15.1	371 15.5	176 7.3
3.河川の氾濫	2400 100.0	615 25.6	939 39.1	451 18.8	301 12.5	94 3.9
4.崖崩れや土石流	2400 100.0	585 24.4	852 35.5	475 19.8	355 14.8	133 5.5
5.火山噴火	2400 100.0	533 22.2	638 26.6	518 21.6	499 20.8	212 8.8
6.大雪	2400 100.0	440 18.3	732 30.5	524 21.8	453 18.9	251 10.5
7.竜巻	2400 100.0	534 22.3	819 34.1	592 24.7	353 14.7	102 4.3

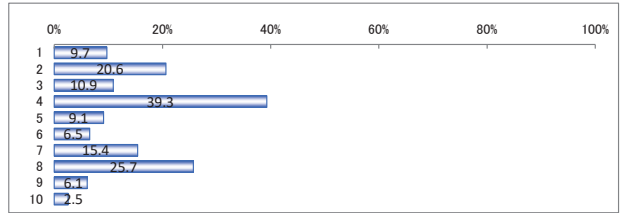
Q8.あなたはふだん、どのような地震対策を行っていますか。あてはまるものをいくつでもお選びください。(いくつでも)

	n	%
全体	2400	100.0
1 非常用持ち出し袋の準備	666	27.8
2 備蓄	710	29.6
3 家具転倒防止	616	25.7
4 地震保険への加入	571	23.8
5 出入り口の確保	331	13.8
6 避難場所の確認	549	22.9
7 ガラス飛散防止	104	4.3
8 ブロック塙転倒防止	42	1.8
9 耐震補強	163	6.8
10 転居	26	1.1
11 災害に備えた家族の話し合い	362	15.1
12 その他	10	0.4
13 地震対策は行っていない	825	34.4



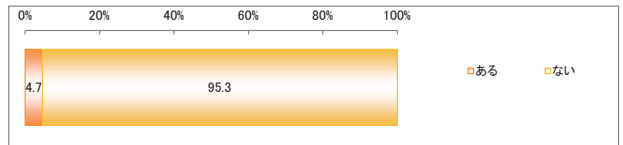
Q8-1.地震対策を行っていない理由を教えてください。(いくつでも)

	n	%
全体	825	100.0
1 十分な時間がないから	80	9.7
2 面倒だから	170	20.6
3 必ずしも自分が大きな地震の被害にあうとは思わないから	90	10.9
4 地震対策をしようと思いつつ、なんとなくできていない	324	39.3
5 自分にとって、地震対策の優先順位が低いから	75	9.1
6 地震対策よりも他にやるべきことが多いから	54	6.5
7 地震対策をするきっかけがつかめないから	127	15.4
8 十分なお金がないから	212	25.7
9 地震対策は個人ではなく、国や自治体、その他の組織がやるべきだと思う	50	6.1
10 その他	21	2.5



Q9.あなたは、生まれてから、地震がきっかけとなり、避難所に1泊以上滞在したことがありますか。

	n	%
全体	2400	100.0
1 ある	112	4.7
2 ない	2288	95.3



Q9-1.生まれてから、地震がきっかけとなり、避難所に1泊以上滞在したことがある方にお伺いします。その時期と場所について教えてください。※複数回、地震がきっかけで避難所に滞在したことがある方は、直近の事について教えてください。時期：__年

	値
全体	112
平均値	2007.07
最小値	1964.00
最大値	2016.00

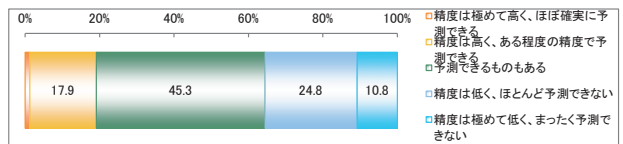
Q9-1.生まれてから、地震がきっかけとなり、避難所に1泊以上滞在したことがある方にお伺いします。その時期と場所について教えてください。※複数回、地震がきっかけで避難所に滞在したことがある方は、直近の事について教えてください。__月頃 ※半角数字でご記入ください

	値
全体	112
平均値	3.62
最小値	1.00
最大値	12.00

■地震の予測についてお伺いします。

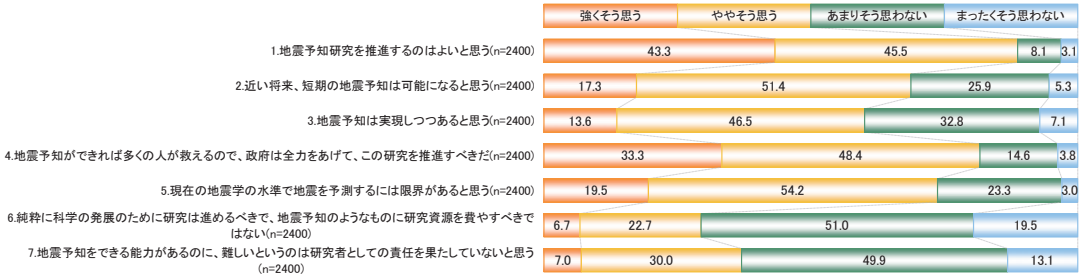
Q10.あなたは、現在の地震学・科学による地震動の事前の予測は可能だと思いますか。あなたの主観で構いませんので、あてはまるものを1つだけお選びください。

	n	%
全体	2400	100.0
1 精度は極めて高く、ほぼ確実に予測できる	30	1.3
2 精度は高く、ある程度の精度で予測できる	429	17.9
3 予測できるものもある	1088	45.3
4 精度は低く、ほとんど予測できない	594	24.8
5 精度は極めて低く、まったく予測できない	259	10.8



Q11.地震予知についてどう思いますか。それぞれ、あてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)

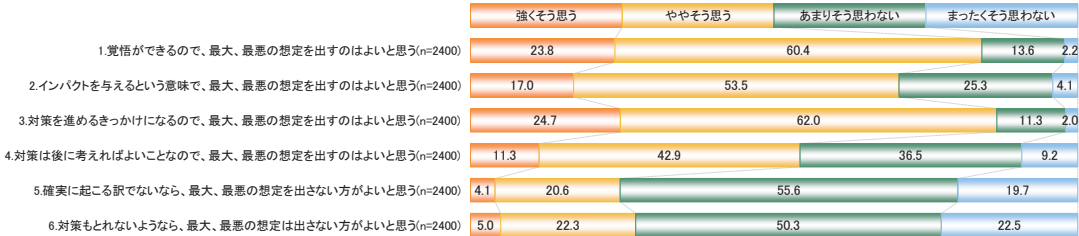
SA



	n	強くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1.地震予知研究を推進するのはよいと思う	2400 100.0	1039 43.3	1091 45.5	195 8.1	75 3.1
2.近い将来、短期の地震予知は可能になると思う	2400 100.0	416 17.3	1234 51.4	622 25.9	128 5.3
3.地震予知は実現しつつあると思う	2400 100.0	327 13.6	1115 46.5	787 32.8	171 7.1
4.地震予知ができれば多くの人が救えるので、政府は全力をあげて、この研究を推進すべきだ	2400 100.0	799 33.3	1161 48.4	350 14.6	90 3.8
5.現在の地震学の水準で地震を予測するには限界があると思う	2400 100.0	469 19.5	1300 54.2	560 23.3	71 3.0
6.純粋に科学の発展のために研究を進めるべきで、地震予知のようなものに研究資源を費やすべきではない	2400 100.0	161 6.7	545 22.7	1225 51.0	469 19.5
7.地震予知をできる能力があるのに、難しいというのは研究者としての責任を果たしていない	2400 100.0	168 7.0	720 30.0	1197 49.9	315 13.1

Q12.想定外をなくすために、最大、最悪の想定を行うことが多くなりました。あなたは、この最大、最悪の想定を出すことについて、どう思いますか。それぞれ、あてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)

SA



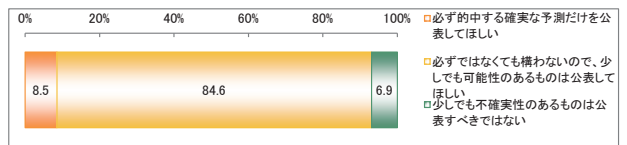
	n	強くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1.覚悟ができるので、最大、最悪の想定を出すのはよいと思う	2400 100.0	571 23.8	1450 60.4	327 13.6	52 2.2
2.インパクトを与えるという意味で、最大、最悪の想定を出すのはよいと思う	2400 100.0	408 17.0	1285 53.5	608 25.3	99 4.1
3.対策を進めるきっかけになるので、最大、最悪の想定を出すのはよいと思う	2400 100.0	593 24.7	1487 62.0	272 11.3	48 2.0
4.対策は後に考えればよいことなので、最大、最悪の想定を出すのはよいと思う	2400 100.0	272 11.3	1030 42.9	877 36.5	221 9.2
5.確実に起こる訳でないなら、最大、最悪の想定を出さない方がよいと思う	2400 100.0	98 4.1	494 20.6	1335 55.6	473 19.7
6.対策もとれないようなら、最大、最悪の想定は出さない方がよいと思う	2400 100.0	119 5.0	534 22.3	1208 50.3	539 22.5

■地震動予測地図や被害想定などの表現・情報公開についてお伺いします。

Q13.地震の予測の精度と公表についてお伺いします。あてはまるものを1つだけお選びください。

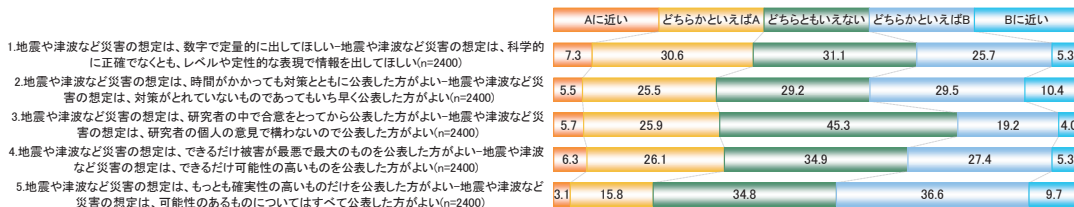
SA

	n	%
全体	2400	100.0
1.必ず的中する確実な予測だけを公表してほしい	205	8.5
2.必ずではなくても構わないので、少しでも可能性のあるものは公表してほしい	2030	84.6
3.少しでも不確実性のあるものは公表すべきではない	165	6.9



Q14.あなたは、次のAとBのどちらの意見に近いですか。それぞれ、あてはまるものを1つだけお選びください。（それぞれひとつだけ）

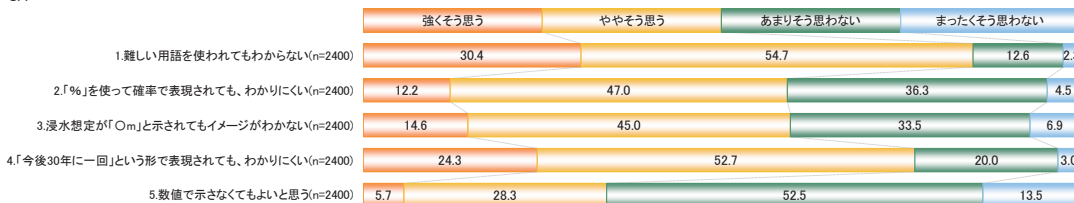
SA



	n	Aに近い	どちらかといえばA	どちらともいえない	どちらかといえばB	Bに近い
1.地震や津波など災害の想定は、数字で定量的に出してほしい-地震や津波など災害の想定は、科学的に正確でなくとも、レベルや定性的な表現で情報を出してほしい(n=2400)	2400 100.0	176 7.3	734 30.6	746 31.1	617 25.7	127 5.3
2.地震や津波など災害の想定は、時間がかかっても対策とともに公表した方がよい-地震や津波など災害の想定は、対策がとれていないものであっても早く公表した方がよい(n=2400)	2400 100.0	131 5.5	611 25.5	701 29.2	707 29.5	250 10.4
3.地震や津波など災害の想定は、研究者の中で合意をとってから公表した方がよい-地震や津波など災害の想定は、研究者の個人の見解で構わないので公表した方がよい(n=2400)	2400 100.0	136 5.7	621 25.9	1086 45.3	461 19.2	96 4.0
4.地震や津波など災害の想定は、できるだけ被害が最悪で最大のものを公表した方がよい-地震や津波など災害の想定は、できるだけ可能性の高いものを公表した方がよい(n=2400)	2400 100.0	152 6.3	627 26.1	837 34.9	657 27.4	127 5.3
5.地震や津波など災害の想定は、もっとも確実性の高いものだけを公表した方がよい-地震や津波など災害の想定は、可能性のあるものについてはすべて公表した方がよい(n=2400)	2400 100.0	75 3.1	379 15.8	836 34.8	878 36.6	232 9.7

Q15.さまざまな被害想定や地震動予測地図などの表現の仕方についてそれぞれ、あてはまるものを1つだけお選びください。（矢印方向にそれぞれひとつだけ）

SA

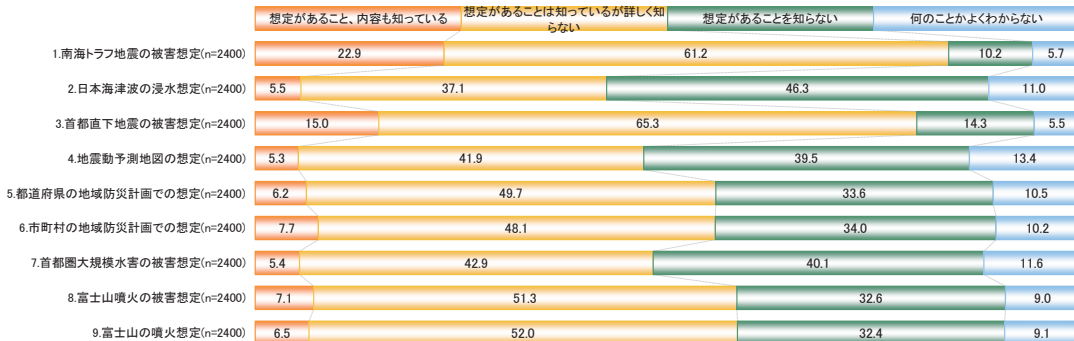


	n	強くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1.難しい用語が使われてもわからない	2400 100.0	730 30.4	1313 54.7	302 12.6	55 2.3
2.「%」を使って確率で表現されても、わかりにくい	2400 100.0	292 12.2	1129 47.0	870 36.3	109 4.5
3.浸水想定が「Om」と示されてもイメージがわからない	2400 100.0	351 14.6	1080 45.0	803 33.5	166 6.9
4.「今後30年に一回」という形で表現されても、わかりにくい	2400 100.0	583 24.3	1265 52.7	480 20.0	72 3.0
5.数値で示さなくてもよいと思う	2400 100.0	137 5.7	678 28.3	1261 52.5	324 13.5

■被害想定についてお伺いします。

Q16.政府、都道府県、市町村は被害が考えられる災害について想定をしています。あなたは以下の1~9について想定があることを知っていますか。あてはまるものを1つだけお選びください。（矢印方向にそれぞれひとつだけ）

SA

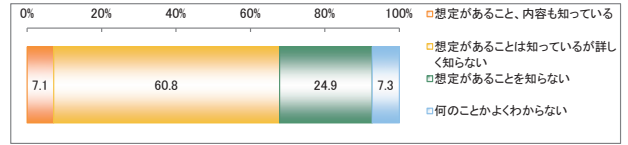


	n	も想定があること、内容	知っているが詳しく知らない	想定があることを知らない	何のこともよくわからない
1.南海トラフ地震の被害想定	2400 100.0	550 22.9	1468 61.2	245 10.2	137 5.7
2.日本海津波の浸水想定	2400 100.0	133 5.5	890 37.1	1112 46.3	265 11.0
3.首都直下地震の被害想定	2400 100.0	360 15.0	1566 65.3	342 14.3	132 5.5
4.地震動予測地図の想定	2400 100.0	126 5.3	1005 41.9	948 39.5	321 13.4
5.都道府県の地域防災計画での想定	2400 100.0	149 6.2	1192 49.7	807 33.6	252 10.5
6.市町村の地域防災計画での想定	2400 100.0	184 7.7	1155 48.1	817 34.0	244 10.2
7.首都圏大規模水害の被害想定	2400 100.0	129 5.4	1029 42.9	963 40.1	279 11.6
8.富士山噴火の被害想定	2400 100.0	170 7.1	1232 51.3	782 32.6	216 9.0
9.富士山の噴火想定	2400 100.0	156 6.5	1248 52.0	777 32.4	219 9.1

Q17-1.政府では大規模な災害について、また都道府県ではそれぞれの地域の災害について、防災の計画をたてる前提として、地域の災害被害の想定を行っています。それぞれあてはまるものを1つだけお選びください。まず、あなたは、被害想定をご存じでしたか。

SA

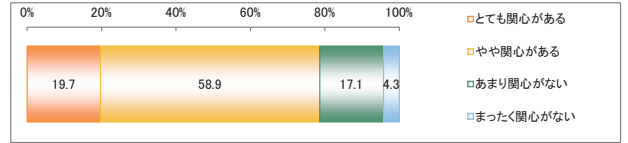
	n	%
全体	2400	100.0
1 想定があること、内容も知っている	171	7.1
2 想定があることは知っているが詳しく知らない	1458	60.8
3 想定があることを知らない	597	24.9
4 何のこともよくわからない	174	7.3



Q17-2.では、あなたは被害想定に関心はありますか。

SA

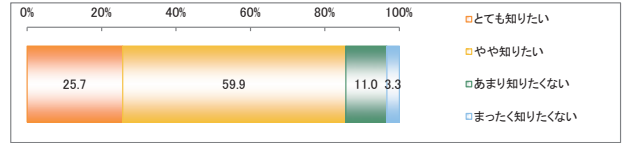
	n	%
全体	2400	100.0
1 とても関心がある	473	19.7
2 やや関心がある	1414	58.9
3 あまり関心がない	411	17.1
4 まったく関心がない	102	4.3



Q17-3.では、あなたは被害想定を知りたいと思いますか。

SA

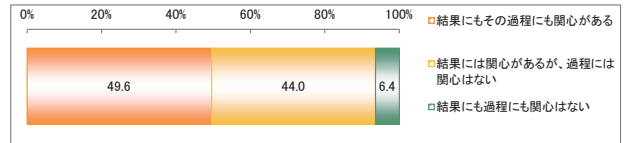
	n	%
全体	2400	100.0
1 とても知りたい	617	25.7
2 やや知りたい	1438	59.9
3 あまり知りたくない	265	11.0
4 まったく知りたくない	80	3.3



Q17-4.では、あなたはこれらの被害想定の結果や想定のプロセスについて、関心はありますか。

SA

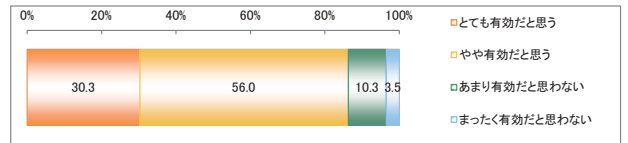
	n	%
全体	2400	100.0
1 結果にもその過程にも関心がある	1190	49.6
2 結果には関心があるが、過程には関心はない	1056	44.0
3 結果にも過程にも関心はない	154	6.4



Q17-5.これら被害想定は、災害対策という面であなたにとって有効だと思いますか。

SA

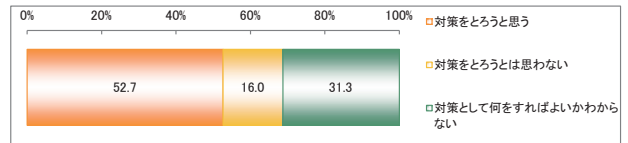
	n	%
全体	2400	100.0
1 とても有効だと思う	728	30.3
2 やや有効だと思う	1343	56.0
3 あまり有効だと思わない	246	10.3
4 まったく有効だと思わない	83	3.5



Q17-6.あなたはこれら被害想定を知って、何か対策をどう思いますか。

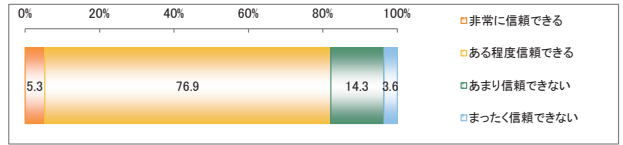
SA

	n	%
全体	2400	100.0
1 対策をどう思う	1264	52.7
2 対策をどうとは思わない	385	16.0
3 対策として何をすればよいかわからない	751	31.3

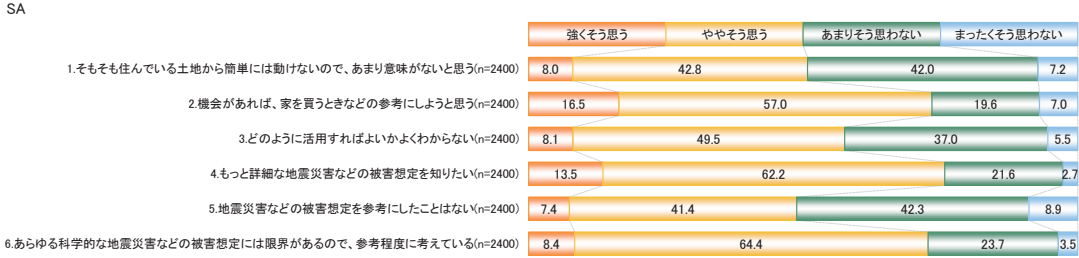


Q17-7.あなたはこれらの被害想定について、信頼できると思いますか。

	n	%
全体	2400	100.0
1.非常に信頼できる	127	5.3
2.ある程度信頼できる	1845	76.9
3.あまり信頼できない	342	14.3
4.まったく信頼できない	86	3.6



Q18.政府では大規模な災害について、また都道府県ではそれぞれの地域の災害について、防災の計画をたてる前提として、地震災害などの被害想定を行っています。あなたはこの地震災害などの被害想定についてどう思いますか。あてはまるものをお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)



	n	強く思う	やや思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1.そもそも住んでいる土地から簡単には動けないので、あまり意味がない	2400	193	1026	1008	173
	100.0	8.0	42.8	42.0	7.2
2.機会があれば、家を買うときなどの参考にしようと思う	2400	395	1368	470	167
	100.0	16.5	57.0	19.6	7.0
3.どのように活用すればよいかよくわからない	2400	194	1187	888	131
	100.0	8.1	49.5	37.0	5.5
4.もっと詳細な地震災害などの被害想定を知りたい	2400	325	1493	518	64
	100.0	13.5	62.2	21.6	2.7
5.地震災害などの被害想定を参考にしたことはない	2400	178	994	1015	213
	100.0	7.4	41.4	42.3	8.9
6.あらゆる科学的な地震災害などの被害想定には限界があるので、参考程度に考えている	2400	201	1545	569	85
	100.0	8.4	64.4	23.7	3.5

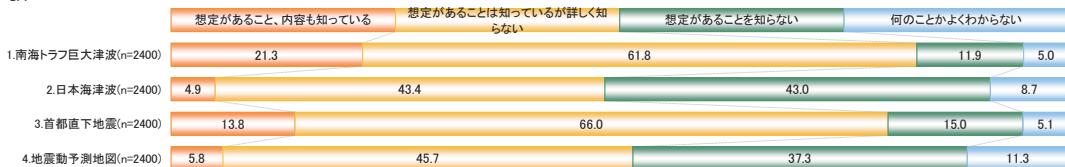
Q19.地震災害などの被害想定について、あなたはどう思いますか。あてはまるものをお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)



	n	強く思う	やや思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1.想定はおおざっぱな見通しが表示されればいいと思う	2400	119	1176	977	128
	100.0	5.0	49.0	40.7	5.3
2.様々な想定をする人がでてくるので、よくわからない	2400	230	1445	649	76
	100.0	9.6	60.2	27.0	3.2
3.対策やとるべき行動をイメージしやすいシナリオをつくってほしい	2400	384	1578	377	61
	100.0	16.0	65.8	15.7	2.5
4.大きな津波がきたときはあきらめている	2400	180	794	1023	403
	100.0	7.5	33.1	42.6	16.8
5.様々な想定をどう役に立てればいいのかわからない	2400	204	1371	725	100
	100.0	8.5	57.1	30.2	4.2
6.別に、地震災害などの被害想定は知らなくてもよい	2400	64	461	1136	739
	100.0	2.7	19.2	47.3	30.8

Q20-1.地震災害などの被害想定や地震動予測地図についてお伺いします。1.【南海トラフ巨大地震】2012年、政府は、南海トラフで発生する巨大地震について、どのような地震・津波が発生するかについてモデルを示し、それを受け、現在、各県が災害の被害想定を公表(もしくは公表しよう)としています。2.【日本海津波】2014年、政府は、日本海側の津波について、どのような地震・津波が発生するかについてモデルを示し、それを受け、現在、各県が災害の被害想定を公表(もしくは公表しよう)としています。3.【首都直下地震】首都直下地震について、政府がモデルを公表し、国や東京都が災害の被害想定を公表しています。4.【地震動予測地図】阪神・淡路大震災後、政府は地震動予測地図というものを示し、全国の地震の発生確率を公表しています。それぞれ、あてはまるものを1つだけお選びください。まず、あなたは、これら地震災害などの被害想定や地震動予測地図をご存じでしたか。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)

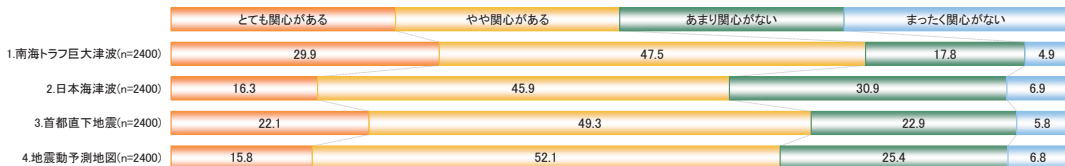
SA



	n	も想定がついてあること、内容	いて想定があるが詳しく知らない	ない想定があることを知らない	ないのこともよくわからない
1.南海トラフ巨大地震	2400	512	1482	286	120
	100.0	21.3	61.8	11.9	5.0
2.日本海津波	2400	118	1042	1031	209
	100.0	4.9	43.4	43.0	8.7
3.首都直下地震	2400	332	1585	361	122
	100.0	13.8	66.0	15.0	5.1
4.地震動予測地図	2400	139	1096	894	271
	100.0	5.8	45.7	37.3	11.3

Q20-2.では、あなたはこれら地震災害などの被害想定や地震動予測地図に関心はありますか。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)

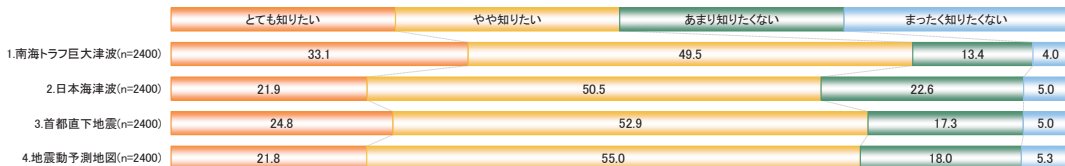
SA



	n	とても関心がある	やや関心がある	あまり関心がない	まったく関心がない
1.南海トラフ巨大地震	2400	718	1139	426	117
	100.0	29.9	47.5	17.8	4.9
2.日本海津波	2400	392	1101	742	165
	100.0	16.3	45.9	30.9	6.9
3.首都直下地震	2400	530	1182	549	139
	100.0	22.1	49.3	22.9	5.8
4.地震動予測地図	2400	378	1251	609	162
	100.0	15.8	52.1	25.4	6.8

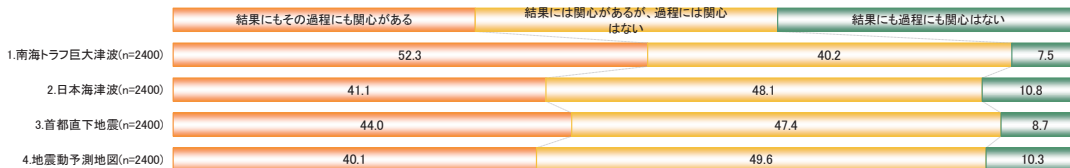
Q20-3.では、あなたはこれら地震災害などの被害想定や地震動予測地図を知りたいと思いますか。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)

SA



	n	とても知りたい	やや知りたい	あまり知りたくない	まったく知りたくない
1.南海トラフ巨大地震	2400	795	1188	322	95
	100.0	33.1	49.5	13.4	4.0
2.日本海津波	2400	525	1213	542	120
	100.0	21.9	50.5	22.6	5.0
3.首都直下地震	2400	594	1270	415	121
	100.0	24.8	52.9	17.3	5.0
4.地震動予測地図	2400	523	1320	431	126
	100.0	21.8	55.0	18.0	5.3

Q20-4.では、あなたはこれら地震災害などの被害想定や地震動予測地図の結果や発生確率などの推定の過程について、関心はありますか。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)
SA



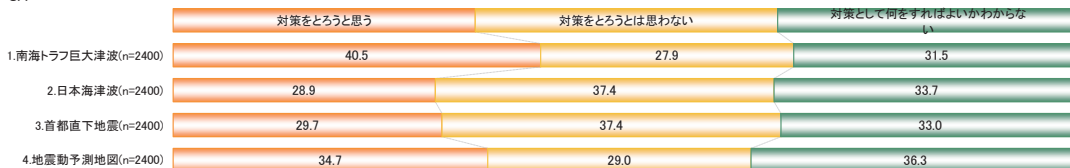
	n	結果にもその過程にも関心がある	結果には関心があるが、過程には関心はない	結果にも過程にも関心はない
1.南海トラフ巨大津波	2400 100.0	1256 52.3	964 40.2	180 7.5
2.日本海津波	2400 100.0	987 41.1	1155 48.1	258 10.8
3.首都直下地震	2400 100.0	1055 44.0	1137 47.4	208 8.7
4.地震動予測地図	2400 100.0	962 40.1	1190 49.6	248 10.3

Q20-5.これら地震災害などの被害想定や地震動予測地図は、災害対策という面であなたにとって有効だと思いますか。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)
SA



	n	とても有効だと思う	やや有効だと思う	あまり有効だと思わない	まったく有効だと思わない
1.南海トラフ巨大津波	2400 100.0	698 29.1	1217 50.7	379 15.8	106 4.4
2.日本海津波	2400 100.0	562 23.4	1183 49.3	515 21.5	140 5.8
3.首都直下地震	2400 100.0	595 24.8	1198 49.9	471 19.6	136 5.7
4.地震動予測地図	2400 100.0	558 23.3	1292 53.8	429 17.9	121 5.0

Q20-6.あなたは、これら地震災害などの被害想定や地震動予測地図を知って、何か対策をどう思いますか。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)
SA



	n	対策をどうと思う	対策をどうとは思わない	対策として何をすればよいかわからない
1.南海トラフ巨大津波	2400 100.0	973 40.5	670 27.9	757 31.5
2.日本海津波	2400 100.0	694 28.9	897 37.4	809 33.7
3.首都直下地震	2400 100.0	712 29.7	897 37.4	791 33.0
4.地震動予測地図	2400 100.0	833 34.7	697 29.0	870 36.3

Q20-7.あなたは、これら地震災害などの被害想定や地震動予測地図について、信頼できると思いますか。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)

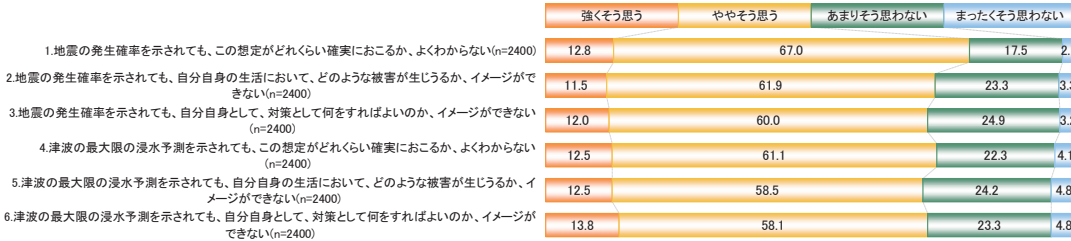
SA



	n	非常に信頼できる	ある程度信頼できる	あまり信頼できない	まったく信頼できない
1.南海トラフ巨大津波	2400 100.0	189 7.9	1731 72.1	403 16.8	77 3.2
2.日本海津波	2400 100.0	149 6.2	1708 71.2	460 19.2	83 3.5
3.首都直下地震	2400 100.0	166 6.9	1727 72.0	423 17.6	84 3.5
4.地震動予測地図	2400 100.0	146 6.1	1707 71.1	460 19.2	87 3.6

Q21.あなたは、これら地震災害などの被害想定や地震動予測地図についてどう思いますか。あてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)

SA

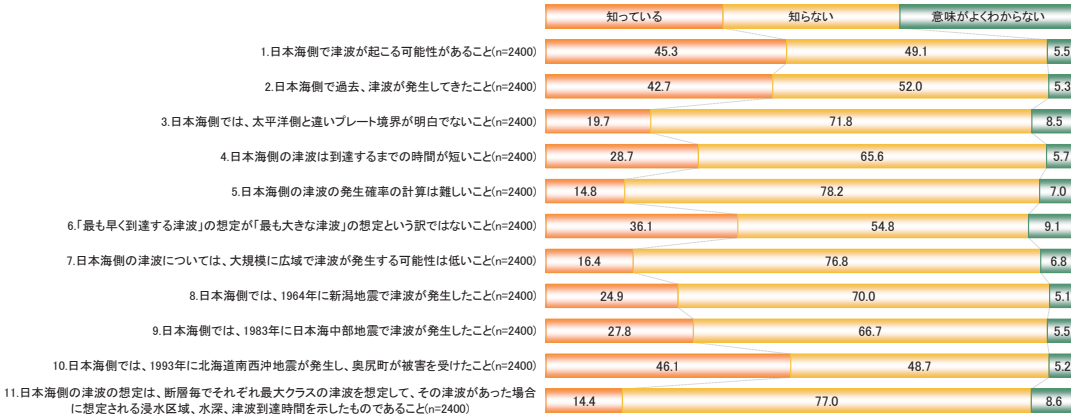


	n	強くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1.地震の発生確率を示されても、この想定がどれくらい確実におこるか、よくわからない	2400 100.0	307 12.8	1608 67.0	421 17.5	64 2.7
2.地震の発生確率を示されても、自分自身の生活において、どのような被害が生じるか、イメージができない	2400 100.0	275 11.5	1485 61.9	560 23.3	80 3.3
3.地震の発生確率を示されても、自分自身として、対策として何をすればよいのか、イメージができない	2400 100.0	287 12.0	1439 60.0	597 24.9	77 3.2
4.津波の最大限の浸水予測を示されても、この想定がどれくらい確実におこるか、よくわからない	2400 100.0	300 12.5	1467 61.1	534 22.3	99 4.1
5.津波の最大限の浸水予測を示されても、自分自身の生活において、どのような被害が生じるか、イメージができない	2400 100.0	300 12.5	1405 58.5	580 24.2	115 4.8
6.津波の最大限の浸水予測を示されても、自分自身として、対策として何をすればよいのか、イメージができない	2400 100.0	332 13.8	1394 58.1	559 23.3	115 4.8

■ 日本海の津波についてお伺いします。

Q22.あなたは日本海側の津波について次のことを知っていますか。それぞれ、あてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)

SA

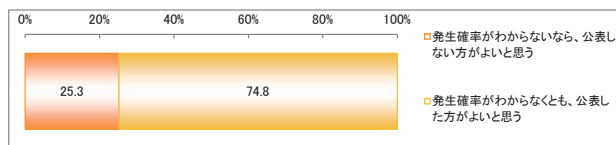


	n	知っている	知らない	意味がよくわからない
1.日本海側で津波が起こる可能性があること	2400 100.0	1088 45.3	1179 49.1	133 5.5
2.日本海側で過去、津波が発生してきたこと	2400 100.0	1025 42.7	1249 52.0	126 5.3
3.日本海側では、太平洋側と違いプレート境界が明白でないこと	2400 100.0	473 19.7	1724 71.8	203 8.5
4.日本海側の津波は到達するまでの時間が短いこと	2400 100.0	689 28.7	1574 65.6	137 5.7
5.日本海側の津波の発生確率の計算は難しいこと	2400 100.0	356 14.8	1876 78.2	168 7.0
6.「最も早く到達する津波」の想定が「最も大きな津波」の想定という訳で	2400 100.0	867 36.1	1315 54.8	218 9.1
7.日本海側の津波については、大規模に広域で津波が発生する可能性	2400 100.0	394 16.4	1843 76.8	163 6.8
8.日本海側では、1964年に新潟地震で津波が発生したこと	2400 100.0	597 24.9	1680 70.0	123 5.1
9.日本海側では、1983年に日本海中部地震で津波が発生したこと	2400 100.0	667 27.8	1600 66.7	133 5.5
10.日本海側では、1993年に北海道南西沖地震が発生し、奥尻町が被害	2400 100.0	1106 46.1	1169 48.7	125 5.2
11.日本海側の津波の想定は、断層毎でそれぞれ最大クラスの津波を想	2400 100.0	346 14.4	1848 77.0	206 8.6

Q23.日本海側の津波は過去の履歴がはっきりとわかっていないので発生確率(今後〇〇年に1回、〇〇年に〇%)という形で示すことはできません。あなたはこのことについてどう思いますか。あてはまるものを1つだけお選びください。

SA

	n	%
全体	2400	100.0
1.発生確率がわからないなら、公表しない方がよいと思う	606	25.3
2.発生確率がわからなくとも、公表した方がよいと思う	1794	74.8



Q25.あなたは日本海側の津波に関して、次のことについてどう思いますか。それぞれ、あてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)

SA

	強くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1.日本海側の津波で巨大想定を出すことはいいことだと思う(n=2400)	16.4	65.3	15.7	2.6
2.日本海でも太平洋側と同規模の巨大な津波がくる可能性はほぼない(n=2400)	4.8	29.8	53.6	11.9
3.日本海側は地震の規模に比べて津波が高く、津波到達までの時間が短い(n=2400)	15.5	60.0	21.9	2.6
4.緊急時に沿岸部に救助に行くべきではない(n=2400)	31.7	47.5	17.6	3.3

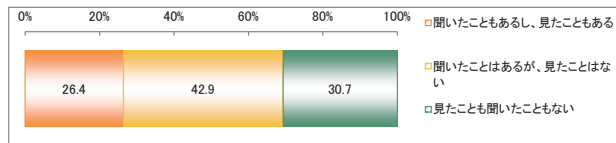
	n	強くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1.日本海側の津波で巨大想定を出すことはいいことだと思う	2400 100.0	393 16.4	1568 65.3	377 15.7	62 2.6
2.日本海でも太平洋側と同規模の巨大な津波がくる可能性はほぼない	2400 100.0	115 4.8	714 29.8	1286 53.6	285 11.9
3.日本海側は地震の規模に比べて津波が高く、津波到達までの時間が短い	2400 100.0	373 15.5	1439 60.0	525 21.9	63 2.6
4.緊急時に沿岸部に救助に行くべきではない	2400 100.0	761 31.7	1139 47.5	422 17.6	78 3.3

■地震動予測地図についてお伺いします。

Q26.あなたは「地震動予測地図」というものを見開きましたか。

SA

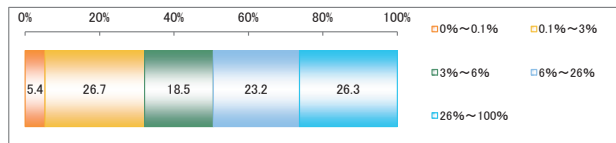
	n	%
全体	2400	100.0
1.聞いたこともあるし、見たこともある	634	26.4
2.聞いたことはあるが、見たことはない	1030	42.9
3.見たことも聞いたこともない	736	30.7



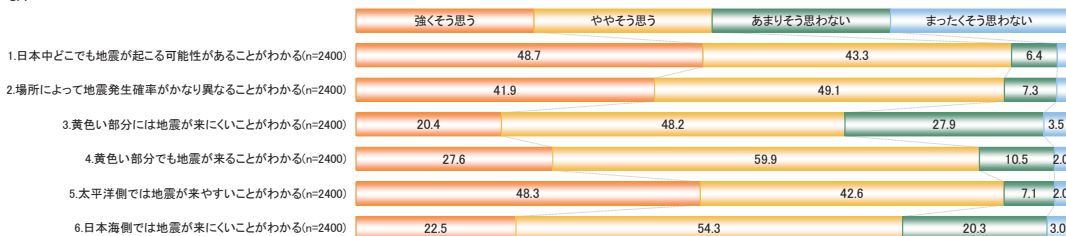
Q27.あなたの家のある場所の色は以下のどれですか。

SA

	n	%
全体	2400	100.0
1.0%~0.1%	129	5.4
2.0.1%~3%	641	26.7
3.3%~6%	443	18.5
4.6%~26%	557	23.2
5.26%~100%	630	26.3

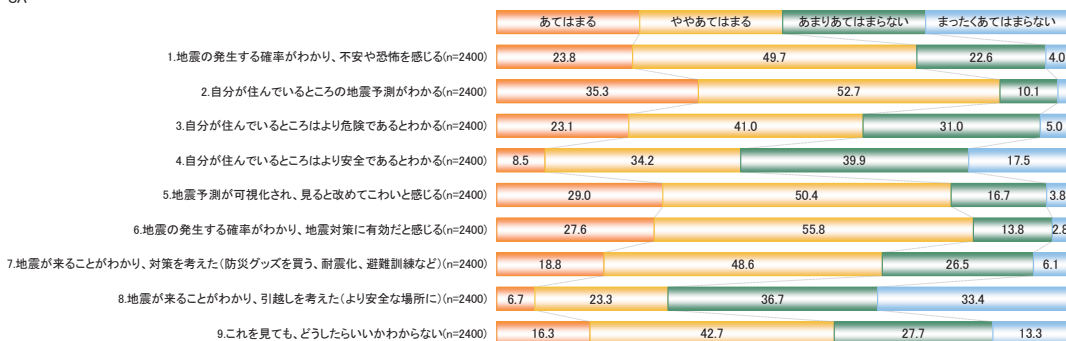


Q28.地震動予測地図を見て、地震の起こりやすさについて、あなたは次の項目についてどう思いますか。それぞれについて最もあてはまると思うものを1つずつお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ) SA



	n	強く思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
1.日本中どこでも地震が起こる可能性があることがわかる	2400	1169	1039	154	38
	100.0	48.7	43.3	6.4	1.6
2.場所によって地震発生確率がかなり異なることがわかる	2400	1006	1178	176	40
	100.0	41.9	49.1	7.3	1.7
3.黄色い部分には地震が来にくいことがわかる	2400	490	1157	670	83
	100.0	20.4	48.2	27.9	3.5
4.黄色い部分でも地震が来ることがわかる	2400	663	1437	252	48
	100.0	27.6	59.9	10.5	2.0
5.太平洋側では地震が来やすいことがわかる	2400	1160	1023	170	47
	100.0	48.3	42.6	7.1	2.0
6.日本海側では地震が来にくいことがわかる	2400	539	1302	487	72
	100.0	22.5	54.3	20.3	3.0

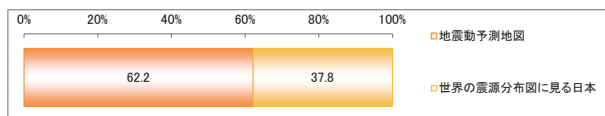
Q29.地震動予測地図を見て、あなた自身の捉え方として、次の項目についてどう思いますか。それぞれについて最もあてはまると思うものを1つずつお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ) SA



	n	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
1.地震の発生する確率がわかり、不安や恐怖を感じる	2400	571	1192	542	95
	100.0	23.8	49.7	22.6	4.0
2.自分が住んでいるところの地震予測がわかる	2400	847	1265	243	45
	100.0	35.3	52.7	10.1	1.9
3.自分が住んでいるところはより危険であるとわかる	2400	554	984	743	119
	100.0	23.1	41.0	31.0	5.0
4.自分が住んでいるところはより安全であるとわかる	2400	203	821	957	419
	100.0	8.5	34.2	39.9	17.5
5.地震予測が可視化され、見ると改めてこわいと感じる	2400	697	1210	401	92
	100.0	29.0	50.4	16.7	3.8
6.地震の発生する確率がわかり、地震対策に有効だと感じる	2400	662	1339	331	68
	100.0	27.6	55.8	13.8	2.8
7.地震が来ることがわかり、対策を考えた(防災グッズを買う、耐震化、避難訓練など)	2400	451	1167	635	147
	100.0	18.8	48.6	26.5	6.1
8.地震が来ることがわかり、引越しを考えた(より安全な場所に)	2400	161	558	880	801
	100.0	6.7	23.3	36.7	33.4
9.これを見ても、どうしたらいいかわからない	2400	392	1025	665	318
	100.0	16.3	42.7	27.7	13.3

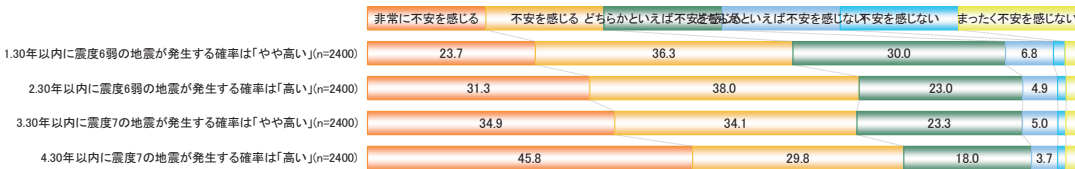
Q30.あなたはどちらの地図を見たときに、より危機感を感じますか。どちらか1つお選びください。※[画像を拡大]をクリックしていただくと拡大してご覧いただけます。

	n	%
全体	2400	100.0
1.地震動予測地図	1493	62.2
2.世界の震源分布図に見る日本	907	37.8



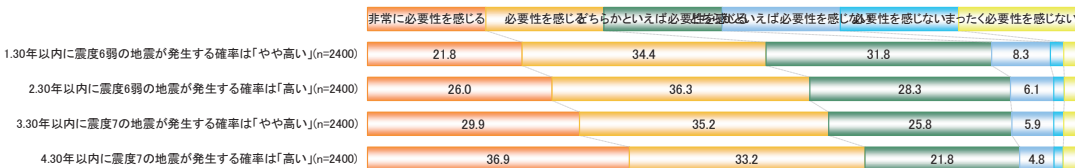
■地震の表現手法についてお伺いします。

Q31.地震の発生について次のような表現で示された場合、どの程度「不安」を感じますか。それぞれあてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ) SA



	n	非常に不安を感じる	不安を感じる	どちらかといえば不安を感じる	どちらかといえば不安を感じない	不安を感じない	まったく不安を感じない
1.30年以内に震度6弱の地震が発生する確率は「やや高い」	2400	568	872	719	162	40	39
	100.0	23.7	36.3	30.0	6.8	1.7	1.6
2.30年以内に震度6弱の地震が発生する確率は「高い」	2400	752	912	553	118	29	36
	100.0	31.3	38.0	23.0	4.9	1.2	1.5
3.30年以内に震度7の地震が発生する確率は「やや高い」	2400	837	819	560	120	27	37
	100.0	34.9	34.1	23.3	5.0	1.1	1.5
4.30年以内に震度7の地震が発生する確率は「高い」	2400	1100	715	432	88	28	37
	100.0	45.8	29.8	18.0	3.7	1.2	1.5

Q32.地震の発生について次のような表現で示された場合、どの程度「個人的に(自分自身の)対策の必要性」を感じますか。それぞれあてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ) SA



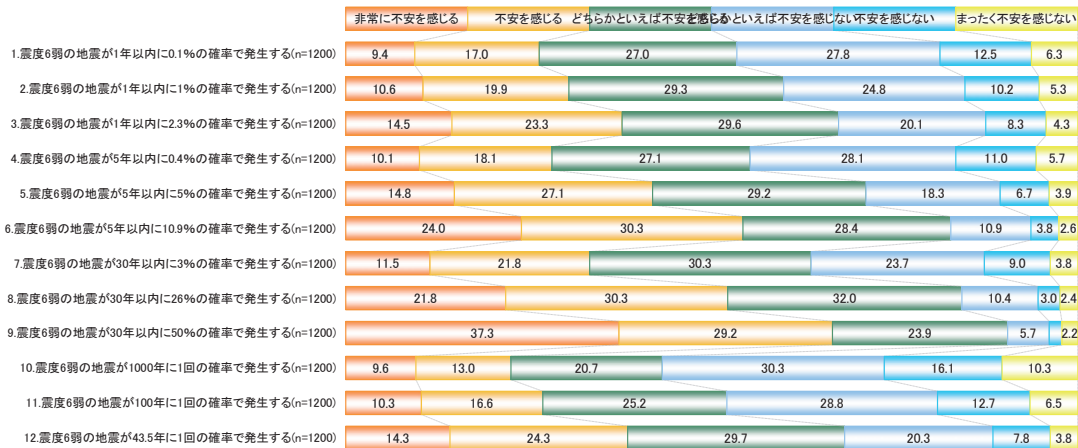
	n	非常に必要性を感じる	必要性を感じる	どちらかといえば必要性を感じる	どちらかといえば必要性を感じない	必要性を感じない	まったく必要性を感じない
1.30年以内に震度6弱の地震が発生する確率は「やや高い」	2400	523	826	763	199	45	44
	100.0	21.8	34.4	31.8	8.3	1.9	1.8
2.30年以内に震度6弱の地震が発生する確率は「高い」	2400	625	872	679	146	36	42
	100.0	26.0	36.3	28.3	6.1	1.5	1.8
3.30年以内に震度7の地震が発生する確率は「やや高い」	2400	717	844	620	141	34	44
	100.0	29.9	35.2	25.8	5.9	1.4	1.8
4.30年以内に震度7の地震が発生する確率は「高い」	2400	886	797	524	116	31	46
	100.0	36.9	33.2	21.8	4.8	1.3	1.9

Q33.地震の発生について次のような表現で示された場合、どの程度「国や自治体による対策の必要性」を感じますか。それぞれあてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ) SA



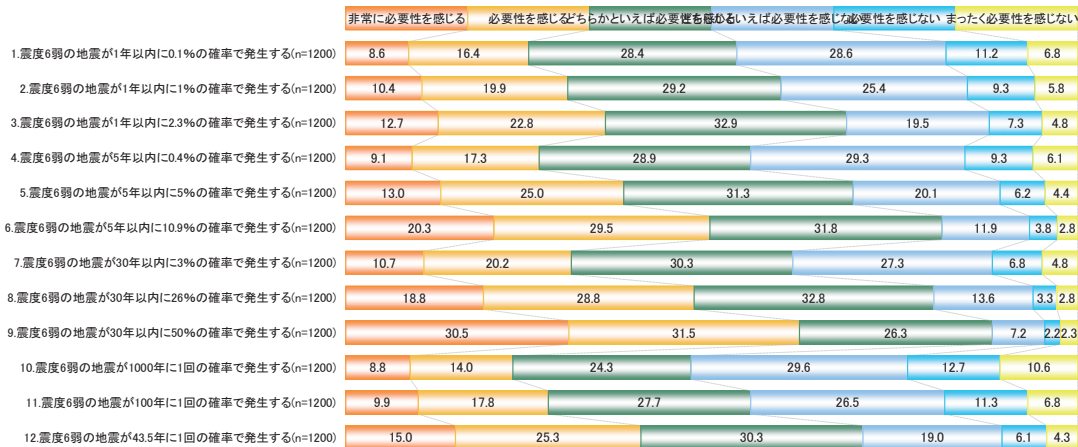
	n	非常に必要性を感じる	必要性を感じる	どちらかといえば必要性を感じる	どちらかといえば必要性を感じない	必要性を感じない	まったく必要性を感じない
1.30年以内に震度6弱の地震が発生する確率は「やや高い」	2400	740	873	618	105	27	37
	100.0	30.8	36.4	25.8	4.4	1.1	1.5
2.30年以内に震度6弱の地震が発生する確率は「高い」	2400	859	851	547	83	25	35
	100.0	35.8	35.5	22.8	3.5	1.0	1.5
3.30年以内に震度7の地震が発生する確率は「やや高い」	2400	956	789	508	84	28	35
	100.0	39.8	32.9	21.2	3.5	1.2	1.5
4.30年以内に震度7の地震が発生する確率は「高い」	2400	1091	731	449	70	23	36
	100.0	45.5	30.5	18.7	2.9	1.0	1.5

■地震の予測、被害想定についてお伺いします。震度の確率についてお伺いします。(注)年数と%を変えて多数、質問しています。似た質問が続きますが、それぞれイメージしながら、感じる通りにお答えください。震度6弱の地震についてお伺いします。※「震度6弱の地震」は、立っていることが困難になり、建物が傾くこともあるほどの地震です
 Q34.地震の発生確率について、次のような表現で示された場合、どの程度「不安」を感じますか。それぞれあてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)
 SA



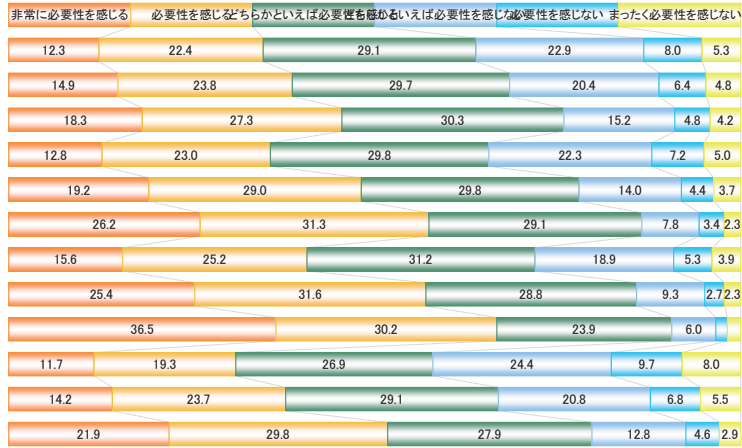
	n	非常に不安を感じる	不安を感じる	どちらかといえば不安を感じる	どちらかといえば不安を感じない	不安を感じない	まったく不安を感じない
1.震度6弱の地震が1年以内に0.1%の確率で発生する	1200	113	204	324	333	150	76
2.震度6弱の地震が1年以内に1%の確率で発生する	1200	127	239	352	297	122	63
3.震度6弱の地震が1年以内に2.3%の確率で発生する	1200	174	279	355	241	99	52
4.震度6弱の地震が5年以内に0.4%の確率で発生する	1200	14.5	23.3	29.6	20.1	8.3	4.3
5.震度6弱の地震が5年以内に5%の確率で発生する	1200	178	325	350	220	80	47
6.震度6弱の地震が5年以内に10.9%の確率で発生する	1200	288	363	341	131	46	31
7.震度6弱の地震が30年以内に3%の確率で発生する	1200	138	262	363	284	108	45
8.震度6弱の地震が30年以内に26%の確率で発生する	1200	262	364	384	125	36	29
9.震度6弱の地震が30年以内に50%の確率で発生する	1200	448	350	287	68	21	26
10.震度6弱の地震が1000年に1回の確率で発生する	1200	115	156	248	364	193	124
11.震度6弱の地震が100年に1回の確率で発生する	1200	124	199	302	345	152	78
12.震度6弱の地震が43.5年に1回の確率で発生する	1200	171	291	356	243	94	45

Q35.地震の発生確率について、次のような表現で示された場合、どの程度「個人的に(自分自身の)対策の必要性」を感じますか。それぞれあてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)
 SA



	n	非常に 必要性を感じ る	必要 性を感じ る	ど ちらか とい え ば 必 要 性 を 感 じ る	ど ちら か と い え ば 必 要 性 を 感 じ な い	必 要 性 を 感 じ な い	ま っ た く 必 要 性 を 感 じ な い
1.震度6弱の地震が1年以内に0.1%の確率で発生する	1200 100.0	103 8.6	197 16.4	341 28.4	343 28.6	134 11.2	82 6.8
2.震度6弱の地震が1年以内に1%の確率で発生する	1200 100.0	125 10.4	239 19.9	350 29.2	305 25.4	111 9.3	70 5.8
3.震度6弱の地震が1年以内に2.3%の確率で発生する	1200 100.0	152 12.7	274 22.8	395 32.9	234 19.5	87 7.3	58 4.8
4.震度6弱の地震が5年以内に0.4%の確率で発生する	1200 100.0	109 9.1	208 17.3	347 28.9	351 29.3	112 9.3	73 6.1
5.震度6弱の地震が5年以内に5%の確率で発生する	1200 100.0	156 13.0	300 25.0	376 31.3	241 20.1	74 6.2	53 4.4
6.震度6弱の地震が5年以内に10.9%の確率で発生する	1200 100.0	243 20.3	354 29.5	381 31.8	143 11.9	46 3.8	33 2.8
7.震度6弱の地震が30年以内に3%の確率で発生する	1200 100.0	128 10.7	242 20.2	363 30.3	327 27.3	82 6.8	58 4.8
8.震度6弱の地震が30年以内に26%の確率で発生する	1200 100.0	226 18.8	345 28.8	393 32.8	163 13.6	39 3.3	34 2.8
9.震度6弱の地震が30年以内に50%の確率で発生する	1200 100.0	366 30.5	378 31.5	316 26.3	86 7.2	26 2.2	28 2.3
10.震度6弱の地震が1000年に1回の確率で発生する	1200 100.0	106 8.8	168 14.0	292 24.3	355 29.6	152 12.7	127 10.6
11.震度6弱の地震が100年に1回の確率で発生する	1200 100.0	119 9.9	213 17.8	332 27.7	318 26.5	136 11.3	82 6.8
12.震度6弱の地震が43.5年に1回の確率で発生する	1200 100.0	180 15.0	304 25.3	364 30.3	228 19.0	73 6.1	51 4.3

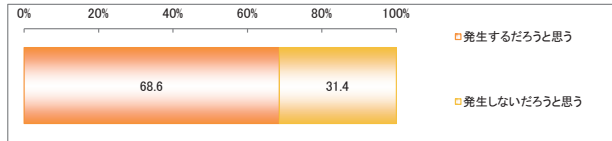
Q36.地震の発生確率について、次のような表現で示された場合、どの程度「国や自治体による対策の必要性」を感じますか。それぞれあてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ) SA



	n	非常に 必要性を感じ る	必要 性を感じ る	ど ちらか とい え ば 必 要 性 を 感 じ る	ど ちら か と い え ば 必 要 性 を 感 じ な い	必 要 性 を 感 じ な い	ま っ た く 必 要 性 を 感 じ な い
1.震度6弱の地震が1年以内に0.1%の確率で発生する	1200 100.0	148 12.3	269 22.4	349 29.1	275 22.9	96 8.0	63 5.3
2.震度6弱の地震が1年以内に1%の確率で発生する	1200 100.0	179 14.9	286 23.8	356 29.7	245 20.4	77 6.4	57 4.8
3.震度6弱の地震が1年以内に2.3%の確率で発生する	1200 100.0	219 18.3	327 27.3	364 30.3	182 15.2	58 4.8	50 4.2
4.震度6弱の地震が5年以内に0.4%の確率で発生する	1200 100.0	153 12.8	276 23.0	358 29.8	267 22.3	86 7.2	60 5.0
5.震度6弱の地震が5年以内に5%の確率で発生する	1200 100.0	230 19.2	348 29.0	357 29.8	168 14.0	53 4.4	44 3.7
6.震度6弱の地震が5年以内に10.9%の確率で発生する	1200 100.0	314 26.2	375 31.3	349 29.1	94 7.8	41 3.4	27 2.3
7.震度6弱の地震が30年以内に3%の確率で発生する	1200 100.0	187 15.6	302 25.2	374 31.2	227 18.9	63 5.3	47 3.9
8.震度6弱の地震が30年以内に26%の確率で発生する	1200 100.0	305 25.4	379 31.6	345 28.8	112 9.3	32 2.7	27 2.3
9.震度6弱の地震が30年以内に50%の確率で発生する	1200 100.0	438 36.5	362 30.2	287 23.9	72 6.0	19 1.6	22 1.8
10.震度6弱の地震が1000年に1回の確率で発生する	1200 100.0	140 11.7	232 19.3	323 26.9	293 24.4	116 9.7	96 8.0
11.震度6弱の地震が100年に1回の確率で発生する	1200 100.0	170 14.2	284 23.7	349 29.1	249 20.8	82 6.8	66 5.5
12.震度6弱の地震が43.5年に1回の確率で発生する	1200 100.0	263 21.9	358 29.8	335 27.9	154 12.8	55 4.6	35 2.9

Q37.あなたは今後、一生のうちに、現在住んでいる場所で震度6弱以上の地震が発生すると思いますか。

	n	%
全体	1200	100.0
1 発生するだろうと思う	823	68.6
2 発生しないだろうと思う	377	31.4



Q38.確率についてお伺いします。感覚でかまいませんので、数字でご記入ください。(半角数字でご記入ください)

(1)現在住んでいる場所で震度6弱以上の地震が発生する確率はどれくらいだと思いますか。 %

全体	1200	平均値	31.14
----	------	-----	-------

Q38.確率についてお伺いします。感覚でかまいませんので、数字でご記入ください。(半角数字でご記入ください)

(2)現在住んでいる場所で震度6弱以上の地震は、だいたい何年以内に発生するだろうと思いますか。 年

全体	1200	平均値	90.40
----	------	-----	-------

Q38.確率についてお伺いします。感覚でかまいませんので、数字でご記入ください。(半角数字でご記入ください)

(3)現在住んでいる場所で震度6弱以上の地震は、「〇〇年以内に〇%くらいの確率で発生する」という形で表現されることが多いのですが、あなたは、本気で災害対策をとるべき数字としては「〇年以内」と表現されるのがよいと思いますか。 年以内

全体	1200	平均値	20.16
----	------	-----	-------

Q38.確率についてお伺いします。感覚でかまいませんので、数字でご記入ください。(半角数字でご記入ください)

(4)現在住んでいる場所で震度6弱以上の地震は、「〇%以上」と表現されるのがよいと思いますか。 %以上

全体	1200	平均値	36.97
----	------	-----	-------

Q39.次に、あなたのお考えについてお聞きします。(半角数字でご記入ください)

(1)現在住んでいる場所で震度6弱以上の地震は、30年以内に何パーセント以上であれば、「高い」と感じますか。 __%以上

全体	1200	平均値	38.13
----	------	-----	-------

Q39.次に、あなたのお考えについてお聞きします。(半角数字でご記入ください)

(2)現在住んでいる場所で震度6弱以上の地震は、30年以内に何パーセント以上であれば、「不安」を感じますか。 __%以上

全体	1200	平均値	38.60
----	------	-----	-------

Q39.次に、あなたのお考えについてお聞きします。(半角数字でご記入ください)

(3)現在住んでいる場所で震度6弱以上の地震は、30年以内に何パーセント以上であれば、「国や自治体の対策の必要性」を感じますか。 __%以上

全体	1200	平均値	31.66
----	------	-----	-------

Q39.次に、あなたのお考えについてお聞きします。(半角数字でご記入ください)

(4)現在住んでいる場所で震度6弱以上の地震は、30年以内に何パーセント以上であれば、「個人的に(自分自身の)対策の必要性」を感じますか。 __%以上

全体	1200	平均値	36.90
----	------	-----	-------

Q40.では逆の聞き方をします。(半角数字でご記入ください)

(1)現在住んでいる場所で震度6弱以上の地震は、30年以内に何パーセント以下であれば、「低い」と感じますか。 __%以下

全体	1200	平均値	10.94
----	------	-----	-------

Q40.では逆の聞き方をします。(半角数字でご記入ください)

(2)現在住んでいる場所で震度6弱以上の地震は、30年以内に何パーセント以下であれば、「大したことない」と感じますか。 __%以下

全体	1200	平均値	9.53
----	------	-----	------

Q40.では逆の聞き方をします。(半角数字でご記入ください)

(3)現在住んでいる場所で震度6弱以上の地震は、30年以内に何パーセント以下であれば、「国や自治体の対策の必要性はない」と感じますか。 __%以下

全体	1200	平均値	9.53
----	------	-----	------

Q40.では逆の聞き方をします。(半角数字でご記入ください)

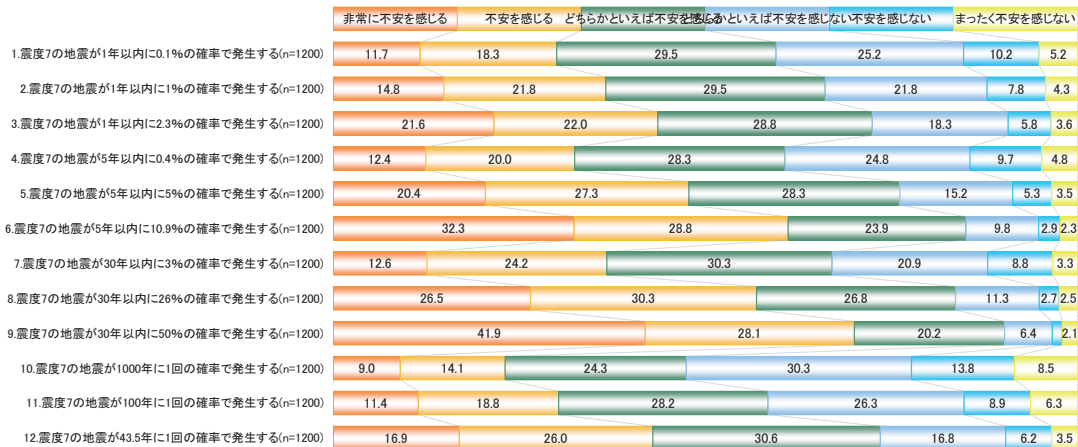
(4)現在住んでいる場所で震度6弱以上の地震は、30年以内に何パーセント以下であれば、「個人的に(自分自身の)対策の必要性はない」と感じますか。 __%以下

全体	1200	平均値	10.63
----	------	-----	-------

■地震の予測、被害想定についてお伺いします。震度の確率についてお伺いします。(注)年数と%を変えて多数、質問しています。似た質問が続きますが、それぞれイメージしながら、感じる通りにお答えください。震度7の地震についてお伺いします。※「震度7の地震」は、自分の意志で行動できないほどの揺れて、最大規模の地震です。

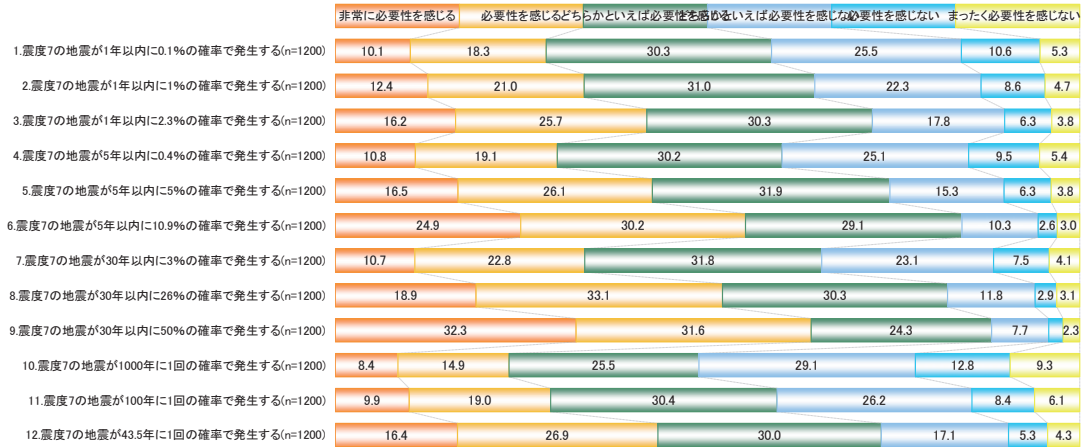
Q41.地震の発生確率について、次のような表現で示された場合、どの程度「不安」を感じますか。それぞれあてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)

SA



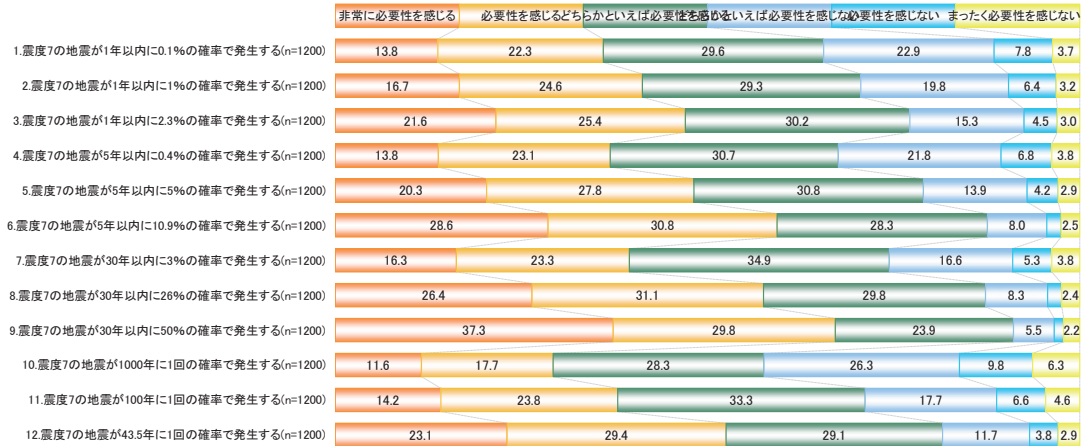
	n	非常に不安を感じる	不安を感じる	どちらかといえば不安を感じる	どちらかといえば不安を感じない	不安を感じない	まったく不安を感じない
1.震度7の地震が1年以内に0.1%の確率で発生する	1200 100.0	140 11.7	220 18.3	354 29.5	302 25.2	122 10.2	62 5.2
2.震度7の地震が1年以内に1%の確率で発生する	1200 100.0	178 14.8	261 21.8	354 29.5	261 21.8	94 7.8	52 4.3
3.震度7の地震が1年以内に2.3%の確率で発生する	1200 100.0	259 21.6	264 22.0	346 28.8	219 18.3	69 5.8	43 3.6
4.震度7の地震が5年以内に0.4%の確率で発生する	1200 100.0	149 12.4	240 20.0	339 28.3	298 24.8	116 9.7	58 4.8
5.震度7の地震が5年以内に5%の確率で発生する	1200 100.0	245 20.4	328 27.3	340 28.3	182 15.2	63 5.3	42 3.5
6.震度7の地震が5年以内に10.9%の確率で発生する	1200 100.0	388 32.3	345 28.8	287 23.9	117 9.8	35 2.9	28 2.3
7.震度7の地震が30年以内に3%の確率で発生する	1200 100.0	151 12.6	290 24.2	363 30.3	251 20.9	105 8.8	40 3.3
8.震度7の地震が30年以内に26%の確率で発生する	1200 100.0	318 26.5	364 30.3	321 26.8	135 11.3	32 2.7	30 2.5
9.震度7の地震が30年以内に50%の確率で発生する	1200 100.0	503 41.9	337 28.1	242 20.2	77 6.4	16 1.3	25 2.1
10.震度7の地震が1000年に1回の確率で発生する	1200 100.0	108 9.0	169 14.1	292 24.3	363 30.3	166 13.8	102 8.5
11.震度7の地震が100年に1回の確率で発生する	1200 100.0	137 11.4	226 18.8	338 28.2	316 26.3	107 8.9	76 6.3
12.震度7の地震が43.5年に1回の確率で発生する	1200 100.0	203 16.9	312 26.0	367 30.6	202 16.8	74 6.2	42 3.5

Q42.地震の発生確率について、次のような表現で示された場合、どの程度「個人的に(自分自身の)対策の必要性」を感じますか。それぞれあてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ) SA



	n	非常に必要性を感じる	必要性を感じる	どちらかかといえは必要	どちらかかといえは必要	必要性を感じない	まったく必要性を感じない
1.震度7の地震が1年以内に0.1%の確率で発生する	1200 100.0	121 10.1	219 18.3	363 30.3	306 25.5	127 10.6	64 5.3
2.震度7の地震が1年以内に1%の確率で発生する	1200 100.0	149 12.4	252 21.0	372 31.0	268 22.3	103 8.6	56 4.7
3.震度7の地震が1年以内に2.3%の確率で発生する	1200 100.0	194 16.2	308 25.7	364 30.3	213 17.8	76 6.3	45 3.8
4.震度7の地震が5年以内に0.4%の確率で発生する	1200 100.0	129 10.8	229 19.1	382 30.2	301 25.1	114 9.5	65 5.4
5.震度7の地震が5年以内に5%の確率で発生する	1200 100.0	198 16.5	313 26.1	383 31.9	184 15.3	76 6.3	46 3.8
6.震度7の地震が5年以内に10.9%の確率で発生する	1200 100.0	299 24.9	362 30.2	349 29.1	123 10.3	31 2.6	36 3.0
7.震度7の地震が30年以内に3%の確率で発生する	1200 100.0	128 10.7	274 22.8	382 31.8	277 23.1	90 7.5	49 4.1
8.震度7の地震が30年以内に26%の確率で発生する	1200 100.0	227 18.9	397 33.1	363 30.3	141 11.8	35 2.9	37 3.1
9.震度7の地震が30年以内に50%の確率で発生する	1200 100.0	388 32.3	379 31.6	291 24.3	92 7.7	23 1.9	27 2.3
10.震度7の地震が1000年に1回の確率で発生する	1200 100.0	101 8.4	179 14.9	306 25.5	349 29.1	153 12.8	112 9.3
11.震度7の地震が100年に1回の確率で発生する	1200 100.0	119 9.9	228 19.0	365 30.4	314 26.2	101 8.4	73 6.1
12.震度7の地震が43.5年に1回の確率で発生する	1200 100.0	197 16.4	323 26.9	360 30.0	205 17.1	63 5.3	52 4.3

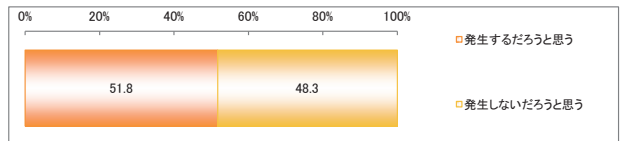
Q43.地震の発生確率について、次のような表現で示された場合、どの程度「国や自治体による対策の必要性」を感じますか。それぞれあてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ) SA



	n	非常に必要性を感じる	必要性を感じる	どちらかといえば必要性を感じる	どちらかといえば必要性を感じない	必要性を感じない	まったく必要性を感じない
1.震度7の地震が1年以内に0.1%の確率で発生する	1200	165	267	355	275	94	44
2.震度7の地震が1年以内に1%の確率で発生する	1200	200	295	352	238	77	38
3.震度7の地震が1年以内に2.3%の確率で発生する	1200	259	305	362	184	54	36
4.震度7の地震が5年以内に0.4%の確率で発生する	1200	166	277	368	262	82	45
5.震度7の地震が5年以内に5%の確率で発生する	1200	244	334	370	167	50	35
6.震度7の地震が5年以内に10.9%の確率で発生する	1200	343	369	339	96	23	30
7.震度7の地震が30年以内に3%の確率で発生する	1200	195	279	419	199	63	45
8.震度7の地震が30年以内に26%の確率で発生する	1200	317	373	358	100	23	29
9.震度7の地震が30年以内に50%の確率で発生する	1200	448	358	287	66	15	26
10.震度7の地震が1000年に1回の確率で発生する	1200	139	212	340	315	118	76
11.震度7の地震が100年に1回の確率で発生する	1200	170	285	399	212	79	55
12.震度7の地震が43.5年に1回の確率で発生する	1200	277	353	349	140	46	35

Q44.あなたは今後、一生のうちに、現在住んでいる場所で震度7の地震が発生すると思いますか。 SA

	n	%
1.発生するだろうと思う	621	51.8
2.発生しないだろうと思う	579	48.3



Q45.確率についてお伺いします。感覚でかまいませんので、数字でご記入ください。(半角数字でご記入ください)

(1)現在住んでいる場所で震度7の地震が発生する確率はどれくらいだと思いますか。__%

	値
全体	1200
平均値	23.24
最小値	0.00
最大値	100.00

Q45.確率についてお伺いします。感覚でかまいませんので、数字でご記入ください。(半角数字でご記入ください)

(2)現在住んでいる場所で震度7の地震は、だいたい何年以内に発生するだろうと思いますか。__年

	値
全体	1200
平均値	1995.56
最小値	0.00
最大値	1000000.00

Q45.確率についてお伺いします。感覚でかまいませんので、数字でご記入ください。(半角数字でご記入ください)

(3)現在住んでいる場所で震度7の地震は、「〇〇年以内に〇%くらいの確率で発生する」という形で表現されることが多いのですが、あなたは、本気で災害対策をとるべき数字としては「〇年以内」と表現されるのがよいと思いますか。__年以内

	値
全体	1200
平均値	32.07
最小値	0.00
最大値	2030.00

Q45. 確率についてお伺いします。感覚でかまいませんので、数字でご記入ください。(半角数字でご記入ください)

(4) 現在住んでいる場所で震度7の地震は、「〇〇年以内に〇%くらいの確率で発生する」という形で表現されることが多いのですが、あなたは、本気で災害対策をとるべき数字としては「〇%以上」と表現されるのがよいと思いませんか。__%以上

	値
全体	1200
平均値	33.71
最小値	0.00
最大値	100.00

Q46. 次に、あなたのお考えについてお聞きします。(半角数字でご記入ください)

(2) 現在住んでいる場所で震度7の地震は、30年以内に何パーセント以上であれば、「高い」と感じますか。__%以上

	値
全体	1200
平均値	35.25
最小値	0.00
最大値	100.00

Q46. 次に、あなたのお考えについてお聞きします。(半角数字でご記入ください)

(2) 現在住んでいる場所で震度7の地震は、30年以内に何パーセント以上であれば、「不安」を感じますか。__%以上

	値
全体	1200
平均値	35.36
最小値	0.00
最大値	100.00

Q46. 次に、あなたのお考えについてお聞きします。(半角数字でご記入ください)

(3) 現在住んでいる場所で震度7の地震は、30年以内に何パーセント以上であれば、「国や自治体の対策の必要性」を感じますか。__%以上

	値
全体	1200
平均値	29.89
最小値	0.00
最大値	100.00

Q46. 次に、あなたのお考えについてお聞きします。(半角数字でご記入ください)

(4) 現在住んでいる場所で震度7の地震は、30年以内に何パーセント以上であれば、「個人的に(自分自身の)対策の必要性」を感じますか。__%以上

	値
全体	1200
平均値	34.86
最小値	0.00
最大値	100.00

Q47. では逆の聞き方をします。(半角数字でご記入ください)

(1) 現在住んでいる場所で震度7の地震は、30年以内に何パーセント以下であれば、「低い」と感じますか。__%以下

	値
全体	1200
平均値	10.02
最小値	0.00
最大値	99.00

Q47. では逆の聞き方をします。(半角数字でご記入ください)

(2) 現在住んでいる場所で震度7の地震は、30年以内に何パーセント以下であれば、「大したことない」と感じますか。__%以下

	値
全体	1200
平均値	9.14
最小値	0.00
最大値	99.00

Q47. では逆の聞き方をします。(半角数字でご記入ください)

(3) 現在住んでいる場所で震度7の地震は、30年以内に何パーセント以下であれば、「国や自治体の対策の必要性はない」と感じますか。__%以下

	値
全体	1200
平均値	9.08
最小値	0.00
最大値	100.00

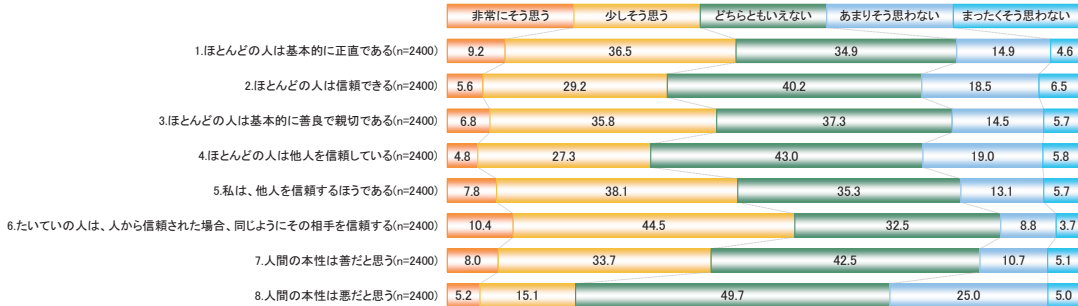
Q47. では逆の聞き方をします。(半角数字でご記入ください)

(4) 現在住んでいる場所で震度7の地震は、30年以内に何パーセント以下であれば、「個人的に(自分自身の)対策の必要性はない」と感じますか。__%以下

	値
全体	1200
平均値	10.12
最小値	0.00
最大値	99.00

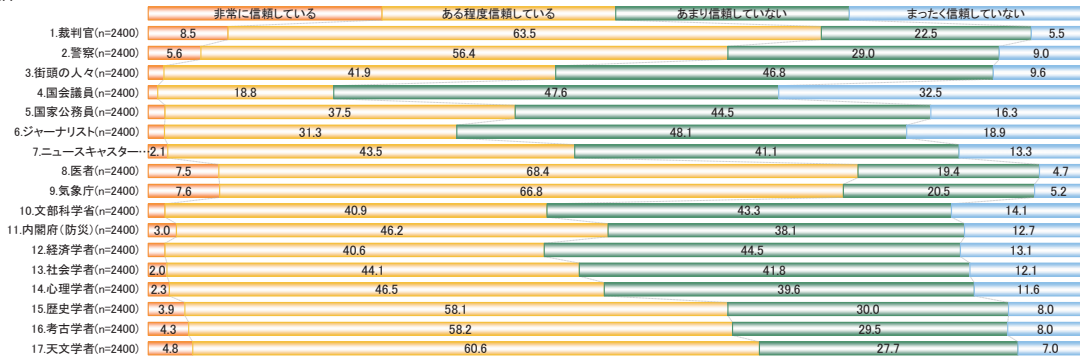
■ 信頼感についてお伺いします。

Q48. あなたは、次の1~8の考え方についてどう思いますか。以下の1~8それぞれについてそれぞれ、あてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ) SA



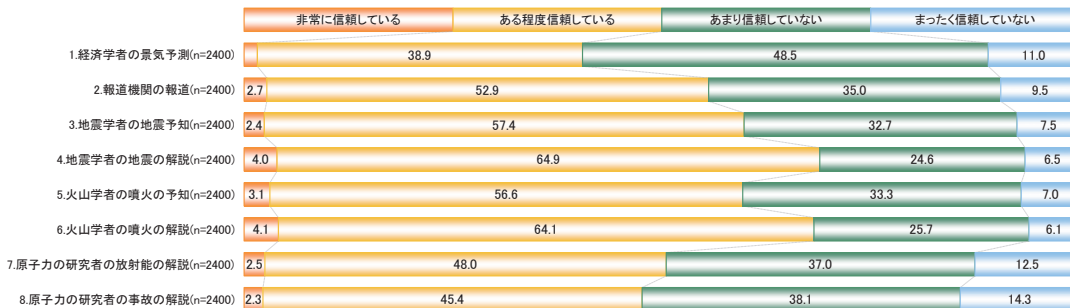
	n	非常に そう思う	少し そう思う	どちら ともい えない	あまり そう思 わない	ま ったく そう思 わない
1.ほとんどの人は基本的に正直である	2400 100.0	220 9.2	876 36.5	837 34.9	357 14.9	110 4.6
2.ほとんどの人は信頼できる	2400 100.0	135 5.6	700 29.2	965 40.2	445 18.5	155 6.5
3.ほとんどの人は基本的に善良で親切である	2400 100.0	162 6.8	860 35.8	894 37.3	347 14.5	137 5.7
4.ほとんどの人は他人を信頼している	2400 100.0	116 4.8	656 27.3	1033 43.0	455 19.0	140 5.8
5.私は、他人を信頼するほうである	2400 100.0	187 7.8	915 38.1	847 35.3	314 13.1	137 5.7
6.たいていの人は、人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する	2400 100.0	250 10.4	1069 44.5	781 32.5	211 8.8	89 3.7
7.人間の本性は善だと思う	2400 100.0	193 8.0	808 33.7	1020 42.5	257 10.7	122 5.1
8.人間の本性は悪だと思う	2400 100.0	124 5.2	363 15.1	1193 49.7	599 25.0	121 5.0

Q49.一般的に言って、次のような人や組織を信頼していますか。以下の1~20についてそれぞれ、あてはまるものを一つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)
SA



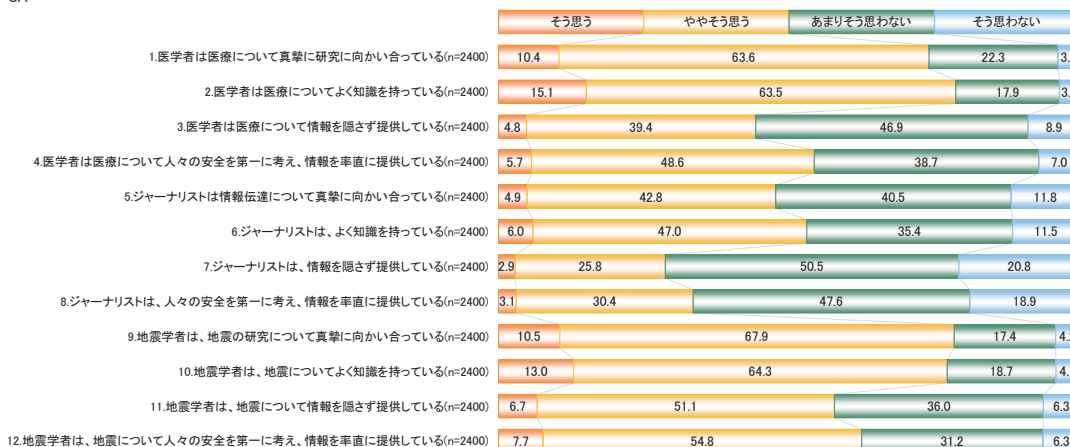
	n	非 常に 信 頼 し て い る	あ る 程 度 信 頼 し て い る	あ ま り 信 頼 し て い な い	い ま っ た く 信 頼 し て い な い
1.裁判官	2400 100.0	205 8.5	1523 63.5	539 22.5	133 5.5
2.警察	2400 100.0	135 5.6	1353 56.4	697 29.0	215 9.0
3.街頭の人々	2400 100.0	40 1.7	1006 41.9	1124 46.8	230 9.6
4.国会議員	2400 100.0	24 1.0	452 18.8	1143 47.6	781 32.5
5.国家公務員	2400 100.0	43 1.8	899 37.5	1067 44.5	391 16.3
6.ジャーナリスト	2400 100.0	42 1.8	750 31.3	1155 48.1	453 18.9
7.ニュースキャスター	2400 100.0	50 2.1	1045 43.5	987 41.1	318 13.3
8.医者	2400 100.0	181 7.5	1641 68.4	466 19.4	112 4.7
9.気象庁	2400 100.0	183 7.6	1602 66.8	491 20.5	124 5.2
10.文部科学省	2400 100.0	43 1.8	981 40.9	1038 43.3	338 14.1
11.内閣府(防災)	2400 100.0	72 3.0	1109 46.2	915 38.1	304 12.7
12.経済学者	2400 100.0	43 1.8	974 40.6	1068 44.5	315 13.1
13.社会学者	2400 100.0	48 2.0	1059 44.1	1003 41.8	290 12.1
14.心理学者	2400 100.0	54 2.3	1117 46.5	950 39.6	279 11.6
15.歴史学者	2400 100.0	94 3.9	1394 58.1	721 30.0	191 8.0
16.考古学者	2400 100.0	104 4.3	1396 58.2	707 29.5	193 8.0
17.天文学者	2400 100.0	114 4.8	1455 60.6	664 27.7	167 7.0
18.地震学者	2400 100.0	78 3.3	1395 58.1	741 30.9	186 7.8
19.火山学者	2400 100.0	81 3.4	1402 58.4	740 30.8	177 7.4
20.原子力の研究者	2400 100.0	53 2.2	1100 45.8	902 37.6	345 14.4

Q50.一般的に言って、下記に示すものを信頼していますか。以下の1～8についてそれぞれ、あてはまるものを1つだけお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)
SA



	n	非常に信頼している	ある程度信頼している	あまり信頼していない	まったく信頼していない
1.経済学者の景気予測	2400 100.0	38 1.6	934 38.9	1165 48.5	263 11.0
2.報道機関の報道	2400 100.0	65 2.7	1269 52.9	839 35.0	227 9.5
3.地震学者の地震予知	2400 100.0	58 2.4	1378 57.4	784 32.7	180 7.5
4.地震学者の地震の解説	2400 100.0	95 4.0	1558 64.9	590 24.6	157 6.5
5.火山学者の噴火の予知	2400 100.0	74 3.1	1358 56.6	800 33.3	168 7.0
6.火山学者の噴火の解説	2400 100.0	99 4.1	1538 64.1	617 25.7	146 6.1
7.原子力の研究者の放射能の解説	2400 100.0	60 2.5	1152 48.0	887 37.0	301 12.5
8.原子力の研究者の事故の解説	2400 100.0	54 2.3	1089 45.4	914 38.1	343 14.3

Q51.あなたは次のことについてどう思いますか。それぞれあてはまるものを1つずつお選びください。(矢印方向にそれぞれひとつだけ)
SA

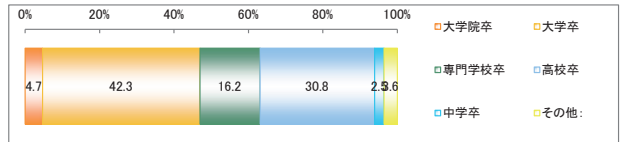


	n	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
1.医学者は医療について真摯に研究に向かい合っている	2400 100.0	250 10.4	1527 63.6	534 22.3	89 3.7
2.医学者は医療についてよく知識を持っている	2400 100.0	363 15.1	1525 63.5	429 17.9	83 3.5
3.医学者は医療について情報を隠さず提供している	2400 100.0	116 4.8	946 39.4	1125 46.9	213 8.9
4.医学者は医療について人々の安全を第一に考え、情報を率直に提供	2400 100.0	137 5.7	1167 48.6	928 38.7	168 7.0
5.ジャーナリストは情報伝達について真摯に向かい合っている	2400 100.0	118 4.9	1027 42.8	972 40.5	283 11.8
6.ジャーナリストは、よく知識を持っている	2400 100.0	144 6.0	1129 47.0	850 35.4	277 11.5
7.ジャーナリストは、情報を隠さず提供している	2400 100.0	69 2.9	620 25.8	1212 50.5	499 20.8
8.ジャーナリストは、人々の安全を第一に考え、情報を率直に提供して	2400 100.0	74 3.1	730 30.4	1143 47.6	453 18.9
9.地震学者は、地震の研究について真摯に向かい合っている	2400 100.0	253 10.5	1629 67.9	418 17.4	100 4.2
10.地震学者は、地震についてよく知識を持っている	2400 100.0	311 13.0	1542 64.3	449 18.7	98 4.1
11.地震学者は、地震について情報を隠さず提供している	2400 100.0	161 6.7	1226 51.1	863 36.0	150 6.3
12.地震学者は、地震について人々の安全を第一に考え、情報を率直に	2400 100.0	185 7.7	1315 54.8	749 31.2	151 6.3

■最後にあなた自身のことについてお伺いします。
Q52.あなたの最終的な学歴をお教えてください。

SA

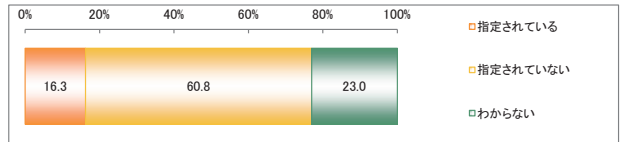
	n	%
全体	2400	100.0
1 大学院卒	113	4.7
2 大学卒	1014	42.3
3 専門学校卒	388	16.2
4 高校卒	739	30.8
5 中学卒	60	2.5
6 その他:	86	3.6



Q53.あなたのお住まいの地域は、津波の危険があると市から指定されていますか。あてはまるものを1つお選びください。

SA

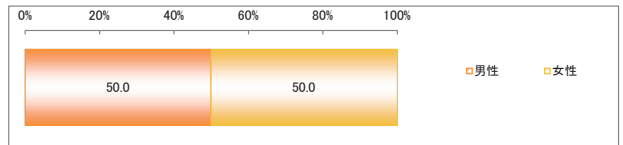
	n	%
全体	2400	100.0
1 指定されている	390	16.3
2 指定されていない	1459	60.8
3 わからない	551	23.0



性別

SA

	n	%
全体	2400	100.0
1 男性	1200	50.0
2 女性	1200	50.0



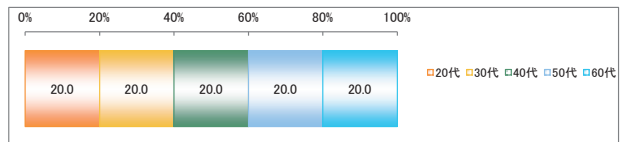
年齢

年齢	人数
全体	2400
平均値	44.94
最小値	20.00
最大値	69.00

年代

SA

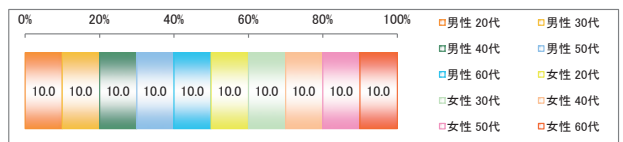
	n	%
全体	2400	100.0
1 20代	480	20.0
2 30代	480	20.0
3 40代	480	20.0
4 50代	480	20.0
5 60代	480	20.0



性年代

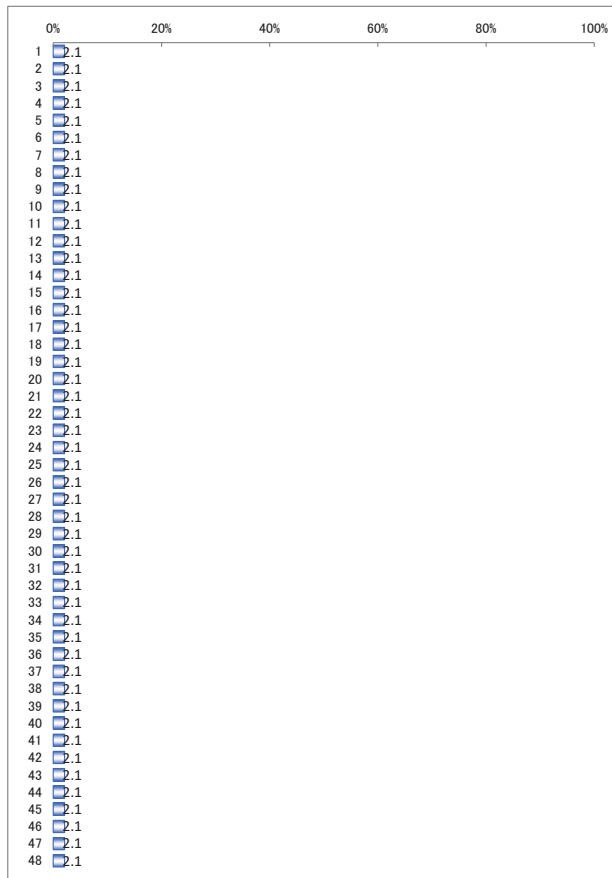
SA

	n	%
全体	2400	100.0
1 男性 20代	240	10.0
2 男性 30代	240	10.0
3 男性 40代	240	10.0
4 男性 50代	240	10.0
5 男性 60代	240	10.0
6 女性 20代	240	10.0
7 女性 30代	240	10.0
8 女性 40代	240	10.0
9 女性 50代	240	10.0
10 女性 60代	240	10.0



エリア(47都道府県+指定エリア)

	n	%
全体	2400	100.0
1 北海道	50	2.1
2 青森県	50	2.1
3 岩手県	50	2.1
4 宮城県	50	2.1
5 秋田県	50	2.1
6 山形県	50	2.1
7 福島県	50	2.1
8 茨城県	50	2.1
9 栃木県	50	2.1
10 群馬県	50	2.1
11 埼玉県	50	2.1
12 千葉県	50	2.1
13 東京都	50	2.1
14 神奈川県	50	2.1
15 新潟県	50	2.1
16 富山県	50	2.1
17 石川県	50	2.1
18 福井県	50	2.1
19 山梨県	50	2.1
20 長野県	50	2.1
21 岐阜県	50	2.1
22 静岡県	50	2.1
23 愛知県	50	2.1
24 三重県	50	2.1
25 滋賀県	50	2.1
26 京都府	50	2.1
27 大阪府	50	2.1
28 兵庫県	50	2.1
29 奈良県	50	2.1
30 和歌山県	50	2.1
31 鳥取県	50	2.1
32 島根県	50	2.1
33 岡山県	50	2.1
34 広島県	50	2.1
35 山口県	50	2.1
36 徳島県	50	2.1
37 香川県	50	2.1
38 愛媛県	50	2.1
39 高知県	50	2.1
40 福岡県	50	2.1
41 佐賀県	50	2.1
42 長崎県	50	2.1
43 熊本県	50	2.1
44 大分県	50	2.1
45 宮崎県	50	2.1
46 鹿児島県	50	2.1
47 沖縄県	50	2.1
48 指定エリア	50	2.1



ネット社会の個人情報と信用

How Should We Treat Personal Information and Credit Rating Systems in Modern Society?

篠田詩織	SHINODA, Shiori	堀川裕介	HORIKAWA, Yusuke
天野美穂子	AMANO, Mihoko	大野志郎	OHNO, Shiroh
間形文彦	MAGATA, Fumihiko	藤村明子	FUJIMURA, Akiko
橋元良明	HASHIMOTO, Yoshiaki		

目次

0. 調査の概要	橋元良明・大野志郎
0.1 調査の目的	
0.2 方法	
1. パーソナルデータの利活用に対する認知・期待・不安・不快感	篠田詩織
1.1 将来の先進的な IT 活用サービスに対する利用意向	
1.2 パーソナルデータ利活用の目的に対する不安と期待	
1.3 パーソナルデータ利活用にあたって重視すること	
1.4 実際に存在するプライバシーリスクの認知度	
1.5 プライバシーリスクに対する不快感	
1.6 不快に感じるが認知できていないプライバシーリスク (ハッピー高リスク)	
2. パーソナルデータ保護に対する不安と許容	堀川裕介
2.1 第三者によるパーソナルデータ収集に対する不安	
2.2 パーソナルデータを収集する企業などに対する不安	
2.3 ネット利用時のセキュリティ被害などに対する不安	
2.4 パーソナルデータの第三者提供に対する許容	
2.5 パーソナルデータの公開に対する許容	
2.6 ネットサービス利用時のプライバシー・セキュリティ設定	
2.7 本パートの知見	

- 3. ターゲティング広告・ステルスマーケティング・サクラレビュー 篠田詩織
 - 3.1 ターゲティング広告との接触
 - 3.2 ターゲティング広告に対する感じ方
 - 3.3 ステルスマーケティング・サクラレビューの存在の想定度
- 4. キャッシュレス決済 天野美穂子
 - 4.1 店舗での支払い方法
 - 4.2 QRコード決済サービスの利用
 - 4.3 支払い方法の嗜好（現金支払い・キャッシュレス決済）
 - 4.4 キャッシュレス決済の利用によるトラブル経験
- 5. 信用格付けサービス 堀川裕介
 - 5.1 信用格付けサービスの認知
 - 5.2 格付けにパーソナルデータを利用することへの賛否
 - 5.3 信用格付けサービスへの登録状況と今後の利用意向
- 6. ソーシャルメディア利用とプライバシー意識 大野志郎
 - 6.1 ソーシャルメディアの公開範囲設定
 - 6.2 ソーシャルメディアの自動検索機能の利用
 - 6.3 ソーシャルメディアによる個人的情報の公開

篠田詩織	NTT セキュアプラットフォーム研究所
堀川裕介	大妻女子大学ほか 非常勤講師
天野美穂子	東京家政大学家政学部
大野志郎	東京大学大学院情報学環
間形文彦	NTT セキュアプラットフォーム研究所
藤村明子	NTT セキュアプラットフォーム研究所
橋元良明	東京女子大学現代教養学部

本稿は、東京大学と日本電信電話株式会社セキュアプラットフォーム研究所との2019年度共同研究「パーソナルデータ利活用ビジネスの消費者受容性を高める手法構築に向けた研究」の成果の一環である。

0. 調査の概要

0.1 調査の目的

橋元等のグループが2020年3月に実施した全国無作為抽出訪問留置法による調査（「日本人の情報行動2020年調査」、N=1790）によれば、インターネット利用率、テレビ利用率は下記の通りである。

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
ネット	99.0%	99.0%	99.1%	99.7%	97.3%	87.6%
テレビ	97.1%	98.0%	94.4%	96.6%	97.3%	99.2%

つまり、2020年3月において、日本人のほぼすべてがテレビと同様にインターネットを利用しており、10代から40代までは微差であるが、ネット利用率がテレビ利用率を上回っている。もはや「ネット」は、我々にとって空気なのである。

とはいえ、この状況はこの数年のうちに現れたものであり、しかも「ネット」の内実は日々進化している。それにともなって、様々な新たな問題が次々に現出している。情報漏洩、ネット上の詐欺、ネット利用におけるトラブル、欺瞞的な商業活動、SNS利用と関連する性的被害、デマの流布、誹謗・中傷、炎上騒動、ネット依存等である。

我々は2020年3月中旬、ネット調査により上記のいくつかの問題に関し、かなり単刀直入に、問題の発生状況の実態と回答者の行動や意識を探った。そのうち、本稿では、個人データ活用、個人情報保護、ステマ、キャッシュレス決済、信用格付けサービスなど、「個人情報と信用」に関連した質問の分析結果を報告する。

0.2 方法

(1)調査対象者：株式会社NTTコム オンライン・マーケティング・ソリューションの日本全国のモニタのうち、15歳から69歳までの男女¹。（年齢層5歳刻み、登録時の性別で可能な限り均等になるように回収）

(2)調査方法：オンラインアンケート調査

(3)有効回答数：3,655票²（本調査回収数3,697票）

(4)調査期間：2020年3月9日から2020年3月16日

(5)性別・年代による分布：右表参照

性別	人数	割合
男性	1794	49.1%
女性	1817	49.7%
答えたくない	44	1.2%
年齢層別	人数	割合
10代	248	6.8%
20代	612	16.7%
30代	677	18.5%
40代	696	19.0%
50代	717	19.6%
60代	705	19.3%

¹ 性別の割付はモニタ登録時のものを使用。本調査であらためて回答を求め、男女に分類できないケースも全体の分析に含めている

² 不正な入力とみられる42票を削除した。

1. パーソナルデータの利活用に対する認知・期待・不安・不快感

近年、インターネット利用の拡大に伴ってユーザの多くのデータが多様な目的で使われるようになり、今後もさらなる活用が期待されている。本章では、それらのパーソナルデータの利活用に対するユーザの認知・期待・不安・不快感について探る。

1.1 将来の先進的な IT 活用サービスに対する利用意向 (Q3)

将来の実現が期待されている IT を活用した医療や自動運転などに対する利用意向を調査するため、Q3 にて、「以下のサービスやアプリケーションが提供された場合、あなたは利用したいと思いますか。もっともあてはまるものをお選びください。」という質問に対し、表 1.1.1 に示す各項目について「ぜひ使いたい」、「どちらかといえば使いたい」、「どちらかといえば使いたくない」、「まったく使いたくない」の 4 件法で答えてもらった。表 1.1.1 は、その「ぜひ使いたい」と「どちらかといえば使いたい」の 2 者を「使いたい」として集計し、その割合を年齢層別、性別で集計した結果である。

利用意向が高かったのは順に、「(1)遠隔医療サービス」65.4%、「(5)医療情報連携サービス」61.8%、「(4)屋内異常検知サービス」60.9%、「(2)健康管理サービス」59.0%と、ヘルスケアや安全に関わるものが上位を占めた。逆に低かったのは順に、「(8)モノのシェアリングサービス」37.9%、「(6)家事等のマッチングサービス」45.1%、「(7)駐車場シェアリングサービス」46.0%、「(3)介護ロボットサービス」49.7%と、シェアリングやマッチング等、モノや人の有効利用に関するものが下位のほとんどを占めていた。

「(5)医療情報連携サービス」以外は、どれも、年代が高くなるほど利用意向が低くなる

表 1.1.1 パーソナルデータなどの将来的な先進的活用に対し「使いたい」人の割合

	(1) インターネットと情報端末等を通じて遠隔に医療診断や相談ができるサービス	(2) インターネットと専用機器等を通じて日々の健康管理ができるサービス	(3) 介護施設などで職員の代わりにロボットが、家族を介護してくれるサービス	(4) 家の中にセンサーを設置し、人が倒れた、人の動きがない等の異常時に警備員が駆けつけて安否を確認するサービス	(5) 個人の医療情報が医療機関で連携され、病状の説明が省けるサービス	(6) 自分に合った条件の個人を、インターネットを通じて探し、家事等をお願いできるサービス	(7) 車で外出した際に、空いている他人が所有する駐車スペースに駐車できるサービス	(8) 個人間で使っていないモノをシェア(共有)できるサービス	(9) 運転手が関与することなく、すべて自動で運転できる機能
全体 (N=3655)	65.4%	59.0%	49.7%	60.9%	61.8%	45.1%	46.0%	37.9%	54.3%
10代 (n=248)	72.6%	68.5%	54.4%	69.0%	65.3%	58.5%	54.0%	51.2%	61.3%
20代 (n=612)	68.8%	64.5%	51.1%	61.6%	61.3%	51.0%	52.9%	46.4%	60.0%
30代 (n=677)	65.1%	60.1%	52.9%	59.2%	60.0%	48.6%	49.8%	44.3%	57.6%
40代 (n=696)	64.2%	56.9%	50.6%	62.5%	61.2%	44.3%	47.0%	39.7%	53.9%
50代 (n=717)	66.2%	58.0%	51.2%	63.3%	64.6%	42.4%	43.8%	32.9%	49.4%
60代 (n=705)	60.3%	52.8%	41.3%	54.9%	60.6%	35.5%	35.0%	23.3%	49.2%
カイ2乗検定	**	***	***	**	n. s.	***	***	**	***
男性 (n=1794)	65.1%	59.3%	50.2%	59.4%	60.8%	46.5%	48.5%	40.4%	56.2%
女性 (n=1817)	66.0%	58.9%	49.3%	62.7%	63.1%	43.8%	43.9%	35.4%	52.7%
カイ2乗検定	n. s.	n. s.	n. s.	*	n. s.	n. s.	**	**	*

※カイ2乗検定の結果「*」は5%、「**」は1%、「***」は0.1%水準でそれぞれ有意差が見られたことを、「n. s.」は有意差が見られなかったことを示す。残差分析にて5%水準で有意に高かったものを黒色太字、低かったものを赤色太字で表す。

傾向があった。自分の存命中にこれらのサービスが実現される可能性は若い人の方が高いこと、新しいものには若い人の方が親和性が高いこと（流行感度³は10代が最も高く、年齢層があがるごとに低かった。）等が影響していると考えられる。60代ではほとんどのサービスで他の年代よりも利用意向が低かったが、「(1)遠隔医療サービス」、「(5)医療情報連携サービス」は、60代でそれぞれ利用意向が60.3%、60.6%と高く、医療系サービスの高度化への期待が高いことがわかった。

性別では、「(4)屋内異常検知サービス」で女性の方が利用意向が高く、「(7)駐車場シェアリングサービス」、「(8)モノのシェアリングサービス」、「(9)自動運転サービス」で男性の方が利用意向が高かった。

1.2 パーソナルデータ利活用の目的に対する不安と期待（Q4）

パーソナルデータを利活用する際のいくつかの利用目的に対し、ユーザにとって期待・不安のどちらが上回るかを調査するため、Q4にて、「あなたは、以下のような場合の個人情報の活用に対してどのようにお考えですか。『期待』と『不安』のどちらが大きいか、についてお答えください。1にいくほど『期待』、5にいくほど『不安』が大きくなるよう、お気持ちに近いものをお選びください。」という質問に対し、表1.2.1に示す各項目について5件法で答えてもらった。表1.2.1は、その平均値を年齢層別、性別で集計した結果である。

いずれも不安よりも期待の方が高かったが、その中で最も期待が高かったのは、「(1)防災・緊急時活用」2.42、最も低かったのは「(5)教育活用」2.64、「(6)製品・サービス向上活用」2.64だった。有用な目的であれば期待が不安を上回ること、またその中でも命や安全に関わる防災・緊急時活用については特に需要が大きいことがわかった。

年齢層別では「(1)防災・緊急時活用」についてのみ有意な差があり、60代が、20代・40代よりも期待が高かった。性別では、いずれも期待感・不安感に有意な差はなかった。

また、本調査では、「プライバシー意識」の尺度も測定した。プライバシー意識は、「ネット企業が、自分の個人情報を求めるとき、イライラすることが多い」、「ネット企業に自分の情報を渡さないといけないとき、ためらうことがある」、「ネット企業に自分の情報を渡したあと、そのネット企業が自分の情報を第三者へ渡すのは、不快に感じる」、「ネットにおける消費者のプライバシーとは、自分の個人情報がどう集められ、使われ、共有されるかを自分で管理する権利のことだと思う」、「個人情報をオンラインで集めるネット企業

³ 「他の人とは、ひと味違う個性的生き方をしている」、「流行についての記事や話に関心がある」、「世の中の出来事や流行は人よりも早く知りたい方だ」、「変化のある生活は好きだ」、「新製品を買ったり、新しいサービスを利用したりするのが人より早い」の4点について4件法で測定した心理尺度（飽戸（1987）を元に項目を追加）。クロンバックの α 係数は0.822。数値が高いほど流行感度が高いことを示す。年齢層別の平均値はそれぞれ、10代で2.32、20代で2.21、30代で2.08、40代で2.04、50代で2.05、60代で2.03であった。

は、その収集方法や利用方法についてしっかり公開するべきだと思う」、「自分の個人情報
がどう使われているかについては、しっかりと知っておきたいと思う」の6点 (Malhotra
(2004)) について4件法で測定し、クロンバックの α 係数は0.917であった。この尺度と
各利活用目的に対する期待・不安との相関は、表1.2.2に示すように、全ての項目で有意
な弱い負の相関があり、プライバシー意識が高いからといってこれらの目的に対する不安
が大きくなる訳ではないことがわかった。

表 1.2.1 パーソナルデータの利活用の目的に対する不安と期待 (1:期待~5:不安)

	(1) 防災に関 わる内容や大 規模災害など の緊急時の情 報活用	(2) 国民の健 康・福祉に関 わる(医療・ 新薬開発等) 情報活用	(3) 交通渋 滞、道路や橋 の老朽化対策 等の社会課題 解決に関わる 情報活用	(4) 公共サー ビスの高品質 化、利便性向 上(公的手続 きの迅速化・ 公的サービス 拡充等)に関 わる情報活用	(5) 教育や研 究など学問の 発展に役立て るための情報 活用	(6) 製品・ サービスの品 質向上のため の情報活用
全体 (N=3655)	2.42	2.61	2.59	2.57	2.64	2.64
10代 (n=248)	2.37	2.54	2.64	2.60	2.60	2.59
20代 (n=612)	2.49	2.64	2.65	2.64	2.62	2.65
30代 (n=677)	2.47	2.59	2.56	2.55	2.64	2.62
40代 (n=696)	2.48	2.67	2.61	2.62	2.70	2.67
50代 (n=717)	2.36	2.57	2.56	2.56	2.64	2.64
60代 (n=705)	2.30	2.62	2.54	2.49	2.64	2.63
ANOVA	**	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.
男性 (n=1794)	2.40	2.62	2.55	2.56	2.63	2.63
女性 (n=1817)	2.41	2.59	2.61	2.57	2.64	2.64
t検定	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.

※年齢層別ではANOVA、性別ではt検定で、「**」は1%水準で有意差が見られたことを、「n. s.」は有意
差が見られなかったことを示す。年齢層別では、Tukey HSD法の多重比較により5%水準で有意差が見
られたペアで、高かったものを黒色太字、低かったものを赤色太字で表す。

表 1.2.2 各不安・期待とプライバシー意識との相関係数

	(1) 防災に関 わる内容や大 規模災害など の緊急時の情 報活用	(2) 国民の健 康・福祉に関 わる(医療・ 新薬開発等) 情報活用	(3) 交通渋 滞、道路や橋 の老朽化対策 等の社会課題 解決に関わる 情報活用	(4) 公共サー ビスの高品質 化、利便性向 上(公的手続 きの迅速化・ 公的サービス 拡充等)に関 わる情報活用	(5) 教育や研 究など学問の 発展に役立て るための情報 活用	(6) 製品・ サービスの品 質向上のため の情報活用
プライバシー意 識とのPearson 相関係数	-0.188	-0.083	-0.115	-0.117	-0.098	-0.055
	**	**	**	**	**	**

※「**」は1%水準で有意であることを示す。

1.3 パーソナルデータ利活用にあたって重視すること (Q6)

パーソナルデータの利活用にあたってユーザが重視する事項を調査するため、Q6にて、
「一般的に、個人に関する情報の利活用について、以下の事柄をどの程度重視しますか。
もっともあてはまるものをお選びください。」という質問に対し、表1.3.1に示す各項目に

ついて「非常に重視する」、「ある程度重視する」、「あまり重視しない」、「まったく重視しない」の選択肢で答えてもらった。「非常に重視する」、「ある程度重視する」を合わせて「重視する」とし、その割合を年齢層別、性別で集計したものが表 1.3.1 である。

いずれの項目も 80%超の人が重要視していることがわかった。最も重要視率が高かったのは順に、「(1)適切な同意取得」87.2%、「(2)提供する情報の種類」86.8%、「(6)情報の利用目的」85.7%だった。これらはいずれも、個人情報を取扱う事業者が個人情報の取得または第三者への提供をする際に要求される個人情報保護法上の義務の構成要素であり、事業者が遵守すべき法の規律と一般ユーザの関心事が合致するものと言える。

年齢層別では、全て年代が高いほどそれぞれ重視する傾向が高かった。性別では、全て女性の方が重視する傾向が高かった。女性・高齢層はプライバシー意識が高い傾向にあり、プライバシー意識が高いほどこれらのデータの取扱いを重視する姿勢も増すと考えられる。実際、表 1.3.2 の通り、プライバシー意識との相関係数は全てについて有意に正であった。

表 1.3.1 パーソナルデータ利活用にあたって重視すること

	(1) 適切な同意取得	(2) 提供する情報の種類	(3) 情報提供先の組織・企業がどこか	(4) 自分へのメリット還元（ポイントや割引の付与など）	(5) 利用目的の公共性	(6) 情報の利用目的	(7) 一定期間後の情報削除およびその規定	(8) いつでも情報の収集や使用を無効にできる仕組みの有無（オプトアウト）
全体 (N=3655)	87.2%	86.8%	85.2%	82.2%	82.9%	85.7%	84.9%	83.7%
10代 (n=248)	84.3%	83.9%	77.4%	80.2%	76.2%	79.4%	77.0%	75.0%
20代 (n=612)	81.5%	79.1%	77.5%	79.1%	77.3%	79.7%	78.1%	76.1%
30代 (n=677)	83.5%	83.2%	81.4%	79.6%	80.1%	81.1%	81.7%	78.9%
40代 (n=696)	86.1%	86.6%	85.8%	83.5%	82.3%	86.9%	84.8%	84.6%
50代 (n=717)	91.8%	92.1%	91.1%	86.8%	87.0%	90.1%	90.5%	89.7%
60代 (n=705)	93.0%	92.9%	91.8%	82.3%	89.4%	91.6%	91.1%	91.1%
カイ2乗検定	***	***	***	**	***	***	***	***
男性 (n=1794)	85.1%	83.4%	82.0%	79.3%	79.1%	82.4%	81.5%	80.0%
女性 (n=1817)	89.6%	90.5%	88.8%	85.4%	87.0%	89.2%	88.4%	87.7%
カイ2乗検定	***	***	***	***	***	***	***	***

※カイ2乗検定の結果「*」は5%、「**」は1%、「***」は0.1%水準でそれぞれ有意差が見られたことを、「n.s.」は有意差が見られなかったことを示す。残差分析にて5%水準で有意に高かったものを黒色太字、低かったものを赤色太字で表す。

表 1.3.2 各重要視率とプライバシー意識との相関係数

	(1) 適切な同意取得	(2) 提供する情報の種類	(3) 情報提供先の組織・企業がどこか	(4) 自分へのメリット還元（ポイントや割引の付与など）	(5) 利用目的の公共性	(6) 情報の利用目的	(7) 一定期間後の情報削除およびその規定	(8) いつでも情報の収集や使用を無効にできる仕組みの有無（オプトアウト）
プライバシー意識とのPearson相関係数	0.317	0.331	0.334	0.212	0.289	0.345	0.323	0.330
	**	**	**	**	**	**	**	**

※「**」は1%水準で有意であることを示す。

1.4 実際に存在するプライバシーリスクの認知度（Q40-1）

実際にインターネット利用時に存在するプライバシーリスクに対する認知と不快度を測るため、Q40にて、「以下のそれぞれの項目にあげるインターネット利用時の各状況について、そういう状況が実際にあると思いますか。また、もしあなたがそういう状況にあった場合、どう思いますか。それぞれについて、あてはまるものをお選びください。」という質問で、表 1.4.1 に示す 22 個の場面对し、「実際にあると思うもの」と「実際にあった場合、不快に思うもの」の 2 項目にそれぞれあてはまるものを複数選択で回答してもらった。表 1.4.2 は、「実際にあると思うもの」と答えた人の割合を「認知度」として示したものである。

表 1.4.1 Q40 で列挙したプライバシーリスクの項目と設問内説明文

番号	項目	設問文
1	SNS公開情報・採用活動への活用	SNSに公開した情報が収集され、企業の採用活動に使われる場合がある
2	SNSいいねボタン設置・ページ閲覧情報のSNSへの送信	一般のウェブページにSNSの「いいね」「Like」等のボタンがあった場合、ボタンを押さなくても、閲覧履歴がそのSNSに送信されることがある
3	スマートスピーカー・サーバー送信	Google Echo、Amazon Alexa、Apple Siri、NTTドコモ シャベってコンシェル等のスマートスピーカーに話しかけた声は、これらの会社のサーバーに送信されることがある
4	スマートスピーカー・AI機能向上のための従業員聴取	Google Echo、Amazon Alexa、Apple Siri、NTTドコモ シャベってコンシェル等のスマートスピーカーに話しかけた声は、機能向上のため、これらの会社の従業員が内容を聞くことがある
5	メール内容・広告提示のために内容読み取り	無料のウェブメールサービスでは、メールの内容は、広告の表示への活用のため、サービス提供者が内容を読み取ることがある
6	ウェブサイト閲覧履歴・第三者収集	ウェブサイトの閲覧履歴は、Cookieによって広告関連会社などの第三者に収集されることがある
7	ウェブサイト閲覧履歴・属性分析	ウェブサイトの閲覧履歴は、広告関連会社などの第三者によって分析され、それを元に閲覧者の属性が勝手に推測されることがある
8	ポイントサービスの購買履歴・サーバー送信と蓄積	ポイントカードやポイントアプリ等を利用したとき、購買履歴はポイントサービス提供者に収集・蓄積されることがある
9	ポイントサービスの購買履歴・従業員閲覧	ポイントカードやポイントアプリ等を利用したとき、購買履歴はポイントサービス提供者の従業員に閲覧されることがある
10	ポイントサービスの購買履歴・属性分析	ポイントカードやポイントアプリ等を利用したとき、購買履歴はサービス提供者により分析され、それを元に利用者の属性が推測されることがある
11	ポイントサービスの購買履歴・ポイント加盟店への提供	ポイントカードやポイントアプリ等を利用したとき、購買履歴はポイントサービスの他の加盟店へ提供され活用されることがある
12	ヘルスケアアプリデータ・サーバー送信	体重や歩数や睡眠時間等を記録するヘルスケア用アプリを利用したとき、それらの記録は、アプリ提供者のサーバーに送信されることがある
13	ヘルスケアアプリデータ・保険料変動への活用	体重や歩数や睡眠時間等を記録するヘルスケア用アプリを利用したとき、それらの記録は、アプリ提供者が分析してスコアが計算され、利用者の保険料の変動に活用されることがある
14	ネット商品購入時の連絡先情報・宅配業者へ提供	オンラインで商品やチケット等を購入したとき、購入者の入力した氏名・住所・連絡先等の情報は、宅配業者などの業務委託先へ提供されることがある
15	ネット商品購入時の連絡先情報・DM活用	オンラインで商品やチケット等を購入したとき、ユーザの入力した氏名・住所・連絡先等の情報は、ダイレクトメールの郵送や広告メールの配信のために使われることがある
16	アプリ操作履歴・再現される	アプリを操作した履歴は、アプリ提供者のサーバーに送信され、操作の様子を再現されることがある
17	SNS非公開ファイル・AI機能向上のため従業員閲覧	SNSにあげた非公開の写真や動画や文書は、AI（人工知能）の機能向上のためにサービス提供者の従業員が閲覧されることがある
18	スマホ位置情報・広告提示への活用	アプリ等で取得されたスマートフォンの位置情報は、広告表示に活用されることがある
19	ウェブサイト閲覧履歴・採用活動への活用	ウェブサイトの閲覧履歴は、人材会社などの第三者によって収集・分析され、それを元に企業の採用活動へ活用されることがある
20	SNS交友関係・スコアリング活用	SNSやメッセージングアプリでの交友関係は、スコアリングサービスを利用することで信用スコアの算出に使われることがある
21	通信料等料金支払い情報・スコアリング活用	通信料金や商品購入等の料金の支払い状況は、スコアリングサービスを利用することで信用スコアの算出に使われることがある
22	お悩み相談サイト閲覧履歴・広告提示への活用	お悩み相談サイトの閲覧履歴は、閲覧したカテゴリを広告関連会社等により取得され、広告の提示に活用されることがある

最も認知度が高かったのは順に、「(8)ポイントサービスの購買履歴のサーバー送信・蓄積」50.0%、「(1)SNS 公開情報の採用活動への活用」49.8%、「(6)ウェブサイト閲覧情報の第三者による収集」48.5%と、ポイントサービスやウェブ閲覧履歴・SNS のデータ収集と活用であった。逆に認知度が低かったのは順に、「(20)SNS 交友関係のスコアリングへの活用」28.1%、「(16)アプリ操作履歴の再現」28.9%、「(17)SNS 非公開ファイルの AI 機能向上のための従業員閲覧」29.0%など、まだ広く普及していないスコアリングサービスや、従業員によるデータ閲覧など、ユーザからは想像しにくいと思われるリスク事例であった。

年齢層別では、「(1) SNS 公開情報の採用活動への活用」と、「(2)SNS いいねボタン設置ページの閲覧情報の SNS 運営会社サーバーへの送信」の2つについては、10代で認知度が高く、30代で認知度が低かった。それ以外の(3)～(22)のリスクについては、若年層の認知度が低く、高齢層の認知度が高かった。これらは仕事経験・社会経験の豊富さが影響している可能性がある。性別では、12 のリスク事例で男性の方が女性よりも認知度が高く、それ以外の10のリスク事例では有意差はなかった。

表 1.4.2 プライバシーリスクに対する認知度

	1. SNS公開情報・採用活動への活用	2. SNSいいねボタン設置・ページ閲覧情報のSNSへの送信	3. スマートスピーカー・サーバー送信	4. スマートスピーカー・AI機能向上のための従業員聴取	5. メール内容・広告提示のために内容読み取り	6. ウェブサイト閲覧履歴・第三者収集	7. ウェブサイト閲覧履歴・属性分析	8. ポイントサービスの購買履歴・サーバー送信と蓄積	9. ポイントサービスの購買履歴・従業員閲覧	10. ポイントサービスの購買履歴・属性分析	11. ポイントサービスの購買履歴・ポイント加盟店への提供
全体 (N=3655)	49.8%	31.8%	33.3%	29.7%	33.8%	48.5%	39.9%	50.0%	41.1%	42.9%	39.3%
10代 (n=248)	61.3%	42.7%	37.9%	33.1%	32.7%	47.2%	39.9%	43.5%	40.7%	41.5%	35.9%
20代 (n=612)	51.0%	29.2%	26.8%	22.4%	25.2%	35.5%	29.4%	39.4%	31.9%	31.7%	29.2%
30代 (n=677)	43.1%	25.6%	29.5%	28.2%	29.2%	42.7%	31.3%	42.2%	35.7%	33.7%	31.0%
40代 (n=696)	50.1%	31.0%	33.3%	30.0%	32.8%	49.6%	39.9%	51.3%	44.5%	42.7%	41.8%
50代 (n=717)	50.8%	34.3%	37.5%	32.4%	38.8%	54.1%	46.4%	56.6%	46.4%	50.2%	45.2%
60代 (n=705)	49.6%	34.3%	36.5%	33.0%	41.8%	59.0%	60.8%	60.9%	45.8%	54.8%	48.7%
カイ2乗検定	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***
男性 (n=1794)	51.4%	35.4%	37.4%	33.4%	36.8%	49.5%	41.4%	50.3%	41.6%	42.6%	40.5%
女性 (n=1817)	48.3%	28.2%	29.3%	26.0%	30.8%	47.8%	38.6%	50.1%	40.8%	43.4%	38.2%
カイ2乗検定	n. s.	***	***	***	***	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.
	12. ヘルスケアアプリデータ・サーバー送信	13. ヘルスケアアプリデータ・保険料変動への活用	14. ネット商品購入時の連絡先情報・宅配業者へ提供	15. ネット商品購入時の連絡先情報・DM活用	16. アプリ操作履歴・再現される	17. SNS非公開ファイル・AI機能向上のための従業員閲覧	18. スマホ位置情報・広告提示への活用	19. ウェブサイト閲覧履歴・採用活動への活用	20. SNS交友関係・スコアリング活用	21. 通信料等料金支払い情報・スコアリング活用	22. お悩み相談サイト閲覧履歴・広告提示への活用
全体 (N=3655)	33.8%	29.6%	38.6%	39.1%	28.9%	29.0%	35.6%	31.8%	28.1%	31.6%	33.4%
10代 (n=248)	38.7%	30.2%	41.1%	40.3%	30.6%	32.3%	35.9%	32.3%	28.2%	32.7%	34.3%
20代 (n=612)	26.6%	21.9%	29.4%	28.8%	20.8%	22.4%	26.8%	21.7%	21.4%	23.9%	27.5%
30代 (n=677)	26.6%	23.3%	31.0%	30.0%	22.6%	21.4%	30.6%	26.1%	23.0%	25.3%	30.6%
40代 (n=696)	33.5%	30.6%	40.1%	39.2%	30.2%	29.3%	37.6%	32.0%	28.6%	32.3%	35.3%
50代 (n=717)	39.2%	35.1%	43.4%	44.1%	34.6%	34.7%	40.4%	36.5%	32.9%	37.0%	35.4%
60代 (n=705)	40.0%	35.3%	46.7%	51.1%	34.6%	34.9%	40.9%	40.6%	33.3%	37.7%	37.0%
カイ2乗検定	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***
男性 (n=1794)	34.5%	32.3%	37.9%	37.8%	31.4%	32.1%	37.5%	34.3%	30.9%	34.3%	36.0%
女性 (n=1817)	33.1%	26.9%	39.4%	40.4%	26.4%	25.9%	33.6%	29.2%	25.2%	28.8%	30.5%
カイ2乗検定	n. s.	***	n. s.	n. s.	**	***	*	**	***	***	***

※それぞれ、カイ2乗検定の結果「*」は5%、「**」は1%、「***」は0.1%の危険率で有意差が見られたことを、「n. s.」は有意差が見られなかったことを示す。残差分析にて5%水準で有意に高かったものを黒色太字、低かったものを赤色太字で表す。

1.5 プライバシーリスクに対する不快感 (Q40-2)

表 1.5.1 は、Q40 で「実際にあった場合、不快に思うもの」と選んだ人の割合を「不快感」として示したものである。

不快感が高かったリスク事例は順に、「(1) SNS 公開情報の採用活動への活用」41.7%、「(6) ウェブサイト閲覧履歴の第三者による収集」38.6%、「(22) お悩み相談サイト閲覧履歴の広告提示への活用」37.5%であった。不快感が低かったリスク事例は順に、「(12) ヘルスケアアプリのデータのサーバー送信」26.6%、「(11) ポイントサービスの購買履歴の加盟店への提供」28.1%、「(13) ヘルスケアアプリデータの保険料変動への活用」28.7%であった。ヘルスケアアプリ・ポイントサービスは、利用時にデータの扱いについて同意を得ている場合が多いのに対し、SNS データ、ウェブ閲覧履歴、お悩みサイト閲覧履歴などは明確な同意がないまま活用される場合もあるためにこういった結果になった可能性が考えられた。

年齢層別では、全てのリスク事例で高齢層の方が若年層より不快感が高かった。性別では、10 のリスク事例で女性の方が男性よりも不快感が高く、それ以外の 12 のリスク事例では有意差はなかった。

表 1.5.1 プライバシーリスクに対する不快感

	1. SNS公開情報・採用活動への活用	2. SNSいいねボタン設置・ページ閲覧情報のSNSへの送信	3. スマートスピーカー・サーバー送信	4. スマートスピーカー・AI機能向上のための従業員聴取	5. メール内容・広告提示のために内容読み取り	6. ウェブサイト閲覧履歴・第三者収集	7. ウェブサイト閲覧履歴・属性分析	8. ポイントサービスの購買履歴・サーバー送信と蓄積	9. ポイントサービスの購買履歴・従業員閲覧	10. ポイントサービスの購買履歴・属性分析	11. ポイントサービスの購買履歴・ポイント加盟店への提供
全体 (N=3655)	41.7%	35.6%	35.5%	36.4%	36.3%	38.6%	36.2%	30.3%	32.4%	29.7%	28.1%
10代 (n=248)	42.7%	39.9%	40.7%	44.8%	35.9%	37.9%	38.7%	29.4%	33.1%	27.4%	24.2%
20代 (n=612)	38.6%	32.5%	29.1%	30.4%	27.1%	29.7%	26.1%	19.9%	22.7%	21.2%	19.1%
30代 (n=677)	40.5%	32.6%	32.8%	32.3%	33.4%	35.3%	31.6%	28.4%	28.8%	26.3%	23.8%
40代 (n=696)	38.9%	33.8%	33.6%	34.2%	35.1%	40.2%	38.4%	31.5%	33.5%	28.6%	28.6%
50代 (n=717)	46.2%	39.2%	40.2%	40.9%	42.5%	41.7%	38.4%	34.7%	38.2%	34.3%	33.5%
60代 (n=705)	43.4%	38.0%	38.7%	40.3%	42.3%	44.8%	44.1%	36.0%	37.3%	37.6%	35.3%
カイ2乗検定	*	*	***	***	***	***	***	***	***	***	***
男性 (n=1794)	42.4%	34.3%	33.7%	34.6%	34.1%	36.7%	33.9%	28.4%	31.3%	27.6%	27.0%
女性 (n=1817)	40.7%	36.8%	36.8%	37.9%	38.2%	40.1%	38.0%	32.2%	33.4%	31.7%	29.0%
カイ2乗検定	n. s.	n. s.	n. s.	*	**	*	**	*	n. s.	**	n. s.
	12. ヘルスケアアプリデータのサーバー送信	13. ヘルスケアアプリデータの保険料変動への活用	14. ネット商品購入時の連絡先情報・宅配業者へ提供	15. ネット商品購入時の連絡先情報・DM活用	16. アプリ操作履歴・再現される	17. SNS非公開ファイル・AI機能向上のための従業員閲覧	18. スマホ位置情報・広告提示への活用	19. ウェブサイト閲覧履歴・採用活動への活用	20. SNS交友関係・スコアリング活用	21. 通信料金支払い情報・スコアリング活用	22. お悩み相談サイト閲覧履歴・広告提示への活用
全体 (N=3655)	26.6%	28.7%	29.9%	35.8%	30.9%	32.0%	30.7%	31.6%	31.4%	31.5%	37.5%
10代 (n=248)	27.4%	29.4%	30.6%	33.9%	33.1%	33.5%	29.8%	32.7%	31.0%	27.0%	36.7%
20代 (n=612)	19.1%	20.1%	21.4%	23.9%	22.5%	25.2%	24.8%	24.7%	24.5%	23.7%	30.9%
30代 (n=677)	23.0%	25.8%	25.3%	29.4%	28.1%	27.6%	27.2%	27.6%	26.4%	29.5%	35.3%
40代 (n=696)	25.0%	26.9%	28.7%	35.9%	31.2%	31.3%	30.5%	30.6%	30.9%	31.9%	38.2%
50代 (n=717)	31.2%	33.6%	34.4%	41.3%	37.4%	36.5%	35.1%	36.7%	36.8%	35.0%	39.5%
60代 (n=705)	33.3%	35.6%	38.2%	47.1%	35.2%	37.6%	35.2%	36.7%	37.3%	37.9%	42.7%
カイ2乗検定	***	***	***	**	***	***	***	***	***	***	***
男性 (n=1794)	25.1%	27.4%	27.1%	32.9%	29.6%	29.7%	28.6%	30.8%	30.5%	30.8%	36.1%
女性 (n=1817)	28.0%	29.9%	32.6%	38.5%	32.0%	34.1%	32.7%	32.0%	32.1%	32.1%	38.0%
カイ2乗検定	*	n. s.	***	***	n. s.	**	**	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.

※カイ2乗検定の結果「*」は5%、「**」は1%、「***」は0.1%水準でそれぞれ有意差が見られたことを、「n. s.」は有意差が見られなかったことを示す。残差分析にて5%水準で有意に高かったものを黒色太字、低かったものを赤色太字で表す。

1.6 不快に感じるが認知できていないプライバシーリスク（ハッピー高リスク）（Q40-1、Q40-2）

ユーザは、「実際にあったら不快だ」と感じるプライバシーリスクの存在を認知していないとき、適切に回避行動をとることができず、意図せずプライバシーが暴露される危険性がある。Q40-1とQ40-2から、各リスクについて、不快に感じるが認知できていない人の割合を算出したものを「ハッピー高リスク度」とし、表1.6.1に示す。「ハッピー」は、知らぬが仏の喩えもある通り、危険に曝されているかもしれないのに本人がそれを知らないため”幸せ”な気持ちでいられることから名付けた。

最もハッピー高リスク度が高かったのは順に、「(2) SNS いいねボタン設置ページ閲覧情報の SNS 運営会社サーバーへの送信」22.4%、「(4) スマートスピーカーデータの従業員聴取」21.9%、「(5) 広告提示のためのメールデータ内容読み取り」21.0%であった。ハッピー高リスク度が低かったのは順に、「(8) ポイントサービス購買履歴のサーバー送信・蓄積」

表 1.6.1 不快に感じるリスクを認知できていない人の割合（ハッピー高リスク度）

	1. SNS公開情報・採用活動への活用	2. SNS いいねボタン設置・ページ閲覧情報の SNS への送信	3. スマートスピーカー・サーバー送信	4. スマートスピーカー・AI機能向上のための従業員聴取	5. メール内容・広告提示のために内容読み取り	6. ウェブサイト閲覧履歴・第三者収集	7. ウェブサイト閲覧履歴・属性分析	8. ポイントサービスの購買履歴・サーバー送信と蓄積	9. ポイントサービスの購買履歴・従業員閲覧	10. ポイントサービスの購買履歴・属性分析	11. ポイントサービスの購買履歴・ポイント加盟店への提供
全体 (N=3655)	18.4%	22.4%	20.7%	21.9%	21.0%	15.3%	17.0%	14.4%	16.9%	15.2%	15.5%
10代 (n=248)	20.6%	27.8%	26.6%	28.2%	24.6%	19.0%	22.2%	21.4%	23.8%	20.6%	21.0%
20代 (n=612)	14.1%	19.4%	17.8%	19.0%	17.0%	13.7%	14.2%	11.3%	12.4%	11.8%	12.3%
30代 (n=677)	16.7%	18.8%	16.7%	16.1%	16.8%	12.0%	13.4%	12.4%	13.1%	12.6%	12.6%
40代 (n=696)	14.9%	20.0%	17.5%	19.4%	18.8%	13.5%	16.4%	11.6%	13.6%	13.2%	13.1%
50代 (n=717)	21.2%	24.1%	22.6%	24.3%	24.5%	16.6%	17.2%	15.6%	19.2%	17.0%	17.7%
60代 (n=705)	23.4%	27.1%	26.2%	27.7%	25.5%	19.3%	21.3%	18.3%	22.7%	19.0%	19.6%
カイ2乗検定	***	***	***	***	***	**	***	***	***	***	***
男性 (n=1794)	17.4%	20.1%	17.8%	19.0%	18.4%	14.5%	15.7%	13.3%	15.9%	13.9%	14.5%
女性 (n=1817)	19.2%	24.6%	23.4%	24.6%	23.4%	16.0%	18.2%	15.4%	17.7%	16.3%	16.4%
カイ2乗検定	n. s.	**	***	***	***	n. s.	*	n. s.	n. s.	*	n. s.

	12. ヘルスケアアプリデータ・サーバー送信	13. ヘルスケアアプリデータ・保険料変動への活用	14. ネット商品購入時の連絡先情報・宅配業者へ提供	15. ネット商品購入時の連絡先情報・DM活用	16. アプリ操作履歴・再現される	17. SNS非公開ファイル・AI機能向上のための従業員閲覧	18. スマホ位置情報・広告提示への活用	19. ウェブサイト閲覧履歴・採用活動への活用	20. SNS交友関係・スコーピング活用	21. 通信料等料金支払情報・スコーピング活用	22. お悩み相談サイト閲覧履歴・広告提示への活用
全体 (N=3655)	16.3%	17.8%	16.4%	16.8%	18.7%	18.8%	16.2%	17.8%	19.1%	18.4%	19.7%
10代 (n=248)	18.5%	21.8%	21.0%	19.8%	23.0%	23.8%	19.4%	22.6%	23.4%	19.4%	21.4%
20代 (n=612)	12.4%	13.6%	11.9%	12.3%	14.7%	14.5%	13.7%	15.8%	15.5%	15.4%	15.5%
30代 (n=677)	13.6%	15.4%	13.3%	13.4%	15.2%	16.2%	11.4%	14.2%	14.8%	17.0%	16.0%
40代 (n=696)	14.9%	14.9%	14.2%	14.8%	16.4%	17.2%	14.1%	15.9%	17.1%	16.4%	18.0%
50代 (n=717)	17.7%	19.8%	19.1%	20.1%	21.5%	20.8%	19.2%	20.5%	21.9%	19.5%	22.2%
60代 (n=705)	21.1%	23.1%	21.3%	21.4%	23.3%	22.8%	20.9%	20.6%	23.8%	22.8%	25.4%
カイ2乗検定	***	***	***	***	***	***	***	**	***	**	***
男性 (n=1794)	14.9%	15.9%	15.1%	15.9%	16.8%	16.0%	14.8%	16.6%	17.2%	16.8%	17.8%
女性 (n=1817)	17.5%	19.6%	17.7%	17.5%	20.4%	21.5%	17.6%	18.9%	20.8%	19.9%	21.4%
カイ2乗検定	*	**	*	n. s.	**	***	*	n. s.	**	*	**

※カイ2乗検定の結果「*」は5%、「**」は1%、「***」は0.1%水準でそれぞれ有意差が見られたことを、「n. s.」は有意差が見られなかったことを示す。残差分析にて5%水準で有意に高かったものを黒色太字、低かったものを赤色太字で表す。

14.4%、「(10)ポイントサービス購買履歴を用いた属性分析」15.2%、「(6)ウェブサイト閲覧履歴の第三者による収集」15.3%であった。最もハッピー高リスク度が高かった「(2)SNS いいねボタンに関わるデータ送信」については個人情報保護委員会も注意喚起を行っているリスク事例である（個人情報保護委員会（2018））。また、メールやスマートスピーカーなど、サービス利用に伴って内容を読み取られる事例についてもハッピー高リスク度が高かった。ポイントサービスについてはハッピー高リスク度が低かった。

また、1人あたりの認知リスク数、不快リスク数、ハッピー高リスク数のそれぞれの平均値を年齢層別、性別に集計したものを表1.6.2に示す。それぞれの平均値は、認知リスク数が7.99個、不快リスク数が7.27個、ハッピー高リスク数が3.95個であった。不快に感じるリスクのうち、ハッピー高リスクであったものの比は、平均で0.38と、4割ほどにも上った。

年齢層別では、認知リスク数は、20代・30代が10代・40～60代より2～3個程度少なく、不快リスク数は、20代・30代が10代・40～60代より2～3個ほど少なく、ハッピー高リスク数は、20～40代が、10代・50代・60代より1～1.5個ほど少なかった。10代・50～60代は20代・30代に比べて、認知数も多い一方、不快数がそれ以上に多かったためにハッピー高リスク数も多く見られたのだろう。

性別では、認知リスク数は、女性が男性より0.79個ほど少なく、不快リスク数は、男性が女性より0.56個少なく、ハッピー高リスク数は女性が男性より0.7個多かった。女性は、認知数が少なく、不快数が多い傾向にあったため、ハッピー高リスク数が男性に比べ多かった。

表 1.6.2 一人当たりの認知リスク数・不快リスク数・ハッピー高リスク数の平均値とハッピー高リスク数と不快リスク数の比の平均値

	認知リスク数	(多重比較で差のあったペア)	不快リスク数	(多重比較で差のあったペア)	ハッピー高リスク数	(多重比較で差のあったペア)	ハッピー高リスク数/不快リスク数	(多重比較で差のあったペア)
全体 (N=3655)	7.99	-	7.27	-	3.95	-	0.38	-
10代 (n=248)	8.33	a	7.40	a	4.90	a	0.47	a
20代 (n=612)	6.23	a	5.57	a	3.18	a	0.38	
30代 (n=677)	6.63	a	6.49	b	3.22	a	0.36	a
40代 (n=696)	8.16	a, b	7.17	a	3.46	b	0.32	a, b
50代 (n=717)	9.06	a	8.27	a, b	4.42	a	0.37	
60代 (n=705)	9.47	a, b	8.55	a, b	4.97	a, b	0.42	b
ANOVA	***	-	***	-	***	-	***	-
男性 (n=1794)	8.40	-	6.93	-	3.58	-	0.35	-
女性 (n=1817)	7.61	-	7.57	-	4.28	-	0.41	-
t検定	*	-	*	-	*	-	**	-

※年齢層別ではANOVAの結果、性別ではt検定の結果「*」は5%、「***」は0.1%水準でそれぞれ有意差が見られたことを示す。年齢層別では、Tukey HSD法による多重比較で差のあったペアをアルファベットで示す。いずれも、5%水準で有意に高かったものを黒色太字、低かったものを赤色太字で表す。

参考文献

飽戸弘 (1987) 『社会調査ハンドブック』 日本経済新聞社.

Malhotra, N. K., Kim, S. S., and Agarwal, J. (2004) "Internet Users' Information Privacy Concerns (IUIPC): The Construct, the Scale, and a Causal Model". *Information Systems Research*, 15(4), 336–355.

個人情報保護委員会 (2018) 『SNS の「ボタン」等の設置に係る留意事項』https://www.ppc.go.jp/news/careful_information/sns_button/ (2021 年 1 月 12 日閲覧確認)

2. パーソナルデータ保護に対する不安と許容

「1.」ではパーソナルデータの将来的な利活用に対する期待や不安、リスク認知などに関する調査・分析結果を紹介したが、本パートでは現在進行形で行われているパーソナルデータの収集や、企業による第三者提供も含めた利活用に対する不安ならびに許容意識について検討する。本調査では次のように、この課題について様々な角度から質問を行っている。以下の節では質問ごとに全体集計と性・年齢層別比較の結果を紹介する。

【不安意識】

- ・ Q5…第三者によるパーソナルデータ収集に対する不安
- ・ Q7…パーソナルデータを収集する企業などに対する不安
- ・ Q8…ネット利用時のセキュリティ被害などに対する不安

【許容意識】

- ・ Q32…パーソナルデータの第三者提供に対する許容
- ・ Q33…パーソナルデータの公開に対する許容

【セキュリティ対策】

- ・ Q24…ネットサービス利用時のプライバシー・セキュリティ設定

2.1 第三者によるパーソナルデータ収集に対する不安 (Q5)

Q5で「あなたは、次のような情報を第三者に収集されることに、どの程度不安を感じますか。もっともあてはまるものをお選びください。」と尋ねた結果が表 2.1.1 である（質問方法や回答対象者などの詳細は表の注釈を参照、以下他の質問も同様）。

「不安」側の回答を合算した表 2.1.2（次頁）がさらに分かりやすいが、氏名・住所・連絡先など個人の特定につながりうる情報が収集されることへの不安が、サイト閲覧履歴や通話履歴といった項目と比べてやや高めに出ている点が興味深い。

表 2.1.1 第三者によるパーソナルデータ収集に対する不安 (Q5)

質問項目	非常に不安	ある程度不安	あまり不安でない	まったく不安でない
(1) 動画サイト閲覧履歴	24.5%	44.8%	23.9%	6.8%
(2) アダルトサイト閲覧履歴	32.7%	34.2%	18.9%	14.2%
(3) 商品購入の際の氏名入力	30.5%	44.9%	20.3%	4.3%
(4) 商品購入の際の住所入力	33.6%	44.1%	18.1%	4.2%
(5) 通話履歴	29.3%	41.5%	23.6%	5.7%
(6) 電話の連絡先情報（電話帳など）	35.6%	42.5%	17.2%	4.7%

※表側の項目(1)～(6)について、表頭の選択肢4件によるSA方式で尋ねた。表は各質問項目について横に合算すると100%となる（ただし、四捨五入により表示上は100%を越す場合もある）。

※質問対象は本調査の回答者全体（n=3,655）。本表も回答者全員を母数として集計した。

男女別比較では「アダルトサイト閲覧履歴」以外は女性の不安が有意に高く、氏名・住所・連絡先などの個人を特定できる情報において特に差が顕著であった。

年齢層別の比較では「アダルトサイト閲覧履歴」以外は中高年層ほど不安が高い傾向が見られ、氏名・通話履歴・連絡先において特に顕著な差が見られた。

表 2.1.2 Q5 不安側回答の性別、年齢層別比較

	(1) 動画サイト閲覧履歴	(2) アダルトサイト閲覧履歴	(3) 商品購入の際の氏名入力	(4) 商品購入の際の住所入力	(5) 通話履歴	(6) 電話の連絡先情報 (電話帳など)
全体 (n=3655)	69.3%	66.9%	75.4%	77.7%	70.7%	78.1%
性別						
男性 (n=1794)	65.9%	71.5%	69.1%	71.8%	66.4%	72.6%
女性 (n=1817)	72.8%	62.3%	81.5%	83.7%	75.0%	83.8%
性別での χ^2 検定結果 CramerのV	*** 0.08	*** 0.10	*** 0.14	*** 0.14	*** 0.09	*** 0.13
年齢層						
10代 (n=248)	65.3%	62.9%	66.1%	74.6%	58.5%	67.7%
20代 (n=612)	63.1%	64.2%	69.1%	71.9%	62.6%	71.2%
30代 (n=677)	69.6%	66.0%	74.3%	75.2%	68.2%	74.3%
40代 (n=696)	72.4%	68.5%	78.2%	80.0%	74.1%	80.9%
50代 (n=717)	70.2%	68.2%	77.7%	79.4%	74.3%	82.7%
60代 (n=705)	72.1%	68.4%	79.9%	82.4%	77.3%	83.8%
年齢層別での χ^2 検定結果 CramerのV	** 0.07	n.s. 0.04	*** 0.10	*** 0.09	*** 0.13	*** 0.13

※数値はそれぞれの項目について「非常に不安」もしくは「ある程度不安」と回答した人の割合を表す。
 ※ χ^2 検定結果…*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, n.s. 有意な偏りなし
 ※CramerのVについては0.10(効果量少程度)以上のものを太字で表示した。
 ※年齢層別の比較では標準化残差±1.96(危険率5%水準)を基準に残差分析を行った。黒太字は期待度数より「有意に高い」ことを、赤太字は期待度数より「有意に低い」ことを示す。

調査グループでは個人の趣味嗜好やプライバシーにかかわるサイト閲覧履歴や通話履歴の収集に対する不安が高いのではないかと推測していたが、結果的に、人々の間では個人の特定可能性がより重く見られていることが示された結果だと思われる。

なお質問文で「第三者に収集」とあるものの、個人情報保護法における第三者提供の趣旨か否かを詳細に提示したわけではないため、本質問の回答が第三者提供への不安を示すのか、単にネット利用時のパーソナルデータ収集に対する不安を示すのかは必ずしも明確にはできない。この点は本質問の限界としてご留意いただきたい。

2.2 パーソナルデータを収集する企業などに対する不安 (Q7)

Q7では「個人情報収集する企業などに対して、不安や不満に感じることはありますか。以下のそれぞれについて、お考えに近いものをお選びください。」として、企業がパーソナルデータを収集する際のやり方に対する不安を尋ねた(次頁の表2.2.1)。

これも「あてはまる」側を合算した表2.2.2(次頁)が見やすいが、「(1)当初とは異なる目的で利活用される恐れがある」(84.8%)、「(2)利活用されたくない場合に、本人に拒

表 2.2.1 パーソナルデータを収集する企業などに対する不安 (Q7)

質問項目	非常に あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
(1) 当初とは異なる目的で活用される恐れがある	32.5%	52.3%	13.2%	2.0%
(2) 利活用されたくない場合に、本人に拒否権がない	35.2%	48.5%	14.3%	2.1%
(3) 利活用の目的や内容の説明が十分でない	30.2%	52.4%	15.5%	1.9%
(4) プライバシーの保護対策に積極的でない	32.3%	49.7%	16.1%	1.9%
(5) 自分に関するさまざまな情報を収集している	32.1%	49.4%	16.4%	2.2%
(6) 匿名化などの加工処理が十分に行われていない	30.1%	50.7%	17.3%	1.9%
(7) 自分が見られるメリットがない	30.0%	49.8%	18.1%	2.1%
(8) 利活用の目的や成果などに社会的な意義を感じない	25.2%	54.3%	18.3%	2.2%

※表側の項目(1)～(8)について、表頭の選択肢4件によるSA方式で尋ねた。表は各質問項目について横に合算すると100%となる(ただし、四捨五入により表示上は100%を越す場合もある)。
※質問対象は本調査の回答者全体(n=3,655)。本表も回答者全員を母数として集計した。

表 2.2.2 Q7 不安側回答の性別、年齢層別比較

	(1) 当初とは異なる目的で活用される恐れがある	(2) 利活用されたくない場合に、本人に拒否権がない	(3) 利活用の目的や内容の説明が十分でない	(4) プライバシーの保護対策に積極的でない	(5) 自分に関するさまざまな情報を収集している	(6) 匿名化などの加工処理が十分に行われていない
全体 (n=3655)	84.8%	83.7%	82.6%	82.0%	81.5%	80.9%
性別 男性 (n=1794)	82.7%	80.7%	79.6%	79.3%	78.4%	78.2%
性別 女性 (n=1817)	87.0%	86.9%	85.6%	84.9%	84.7%	83.6%
性別でのχ ² 検定結果	***	***	***	***	***	***
CramerのV	0.06	0.08	0.08	0.07	0.08	0.07
年齢層 10代 (n=248)	76.6%	77.8%	73.4%	72.2%	74.2%	71.0%
20代 (n=612)	76.1%	73.5%	73.9%	73.9%	74.4%	73.9%
30代 (n=677)	79.8%	79.2%	79.6%	78.1%	77.8%	77.6%
40代 (n=696)	86.5%	85.2%	84.3%	84.3%	81.6%	82.9%
50代 (n=717)	91.1%	90.0%	88.4%	87.3%	87.2%	85.9%
60代 (n=705)	91.9%	90.9%	88.7%	88.5%	87.7%	86.4%
年齢層別でのχ ² 検定結果	***	***	***	***	***	***
CramerのV	0.18	0.17	0.15	0.15	0.14	0.14
	(7) 自分が見られるメリットがない	(8) 利活用の目的や成果などに社会的な意義を感じない				
全体 (n=3655)	79.8%	79.5%				
性別 男性 (n=1794)	78.0%	78.1%				
性別 女性 (n=1817)	81.8%	81.1%				
性別でのχ ² 検定結果	**	*				
CramerのV	0.05	0.04				
年齢層 10代 (n=248)	72.6%	68.2%				
20代 (n=612)	74.4%	76.0%				
30代 (n=677)	75.9%	74.7%				
40代 (n=696)	80.8%	79.6%				
50代 (n=717)	85.1%	85.4%				
60代 (n=705)	84.4%	85.1%				
年齢層別でのχ ² 検定結果	***	***				
CramerのV	0.11	0.13				

※ 数値はそれぞれの項目について「非常にあてはまる」もしくは「ある程度あてはまる」と回答した人(不安側の回答者)の割合を表す。

※ χ²検定結果…*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, n. s. 有意な偏りなし

※ CramerのVについては0.10(効果量少程度)以上のものを太字で表示した。

※ 年齢層別の比較では標準化残差±1.96(危険率5%水準)を基準に残差分析を行った。黒太字は期待度数より「有意に高い」ことを、赤太字は期待度数より「有意に低い」ことを示す。

否権がない」(83.7%)、「(3) 利活用の目的や内容の説明が十分でない」(82.6%) など、**情報の自己コントロール権やインフォームド・コンセントの確保の観点からの不安・不満が高い割合を占めた**。それ以外の項目も不安側の合算ですべて 80%前後となっており、全般に企業などのパーソナルデータの扱い方に対して不安や不満が高いことをうかがわせる。

性別比較では全項目で女性の不安割合が高く、年齢層別比較では全項目で中高年層が高い結果が見られた。

2.3 ネット利用時のセキュリティ被害などに対する不安 (Q8)

セキュリティ被害をはじめ、ネット利用時に起きる様々なトラブルに対する不安を「パソコン(タブレット端末含む)やスマートフォン(携帯電話を含む)でインターネット(メールを含む)を利用する時に、起こるかもしれない以下のトラブルについて、あなたのお気持ちにもっとも近いものをお答えください。インターネットを利用していない方も、現在の感覚でお選びください。」との質問で尋ねた(表 2.3.1)。

表 2.3.1 ネット利用時のセキュリティ被害などに対する不安 (Q8)

質問項目	とても不安	やや不安	あまり不安ではない	まったく不安ではない
(1) 金融機関などを装ったメールで、偽のサイトに誘導され、クレジットカード番号などを入力させられる	39.6%	42.9%	14.4%	3.1%
(2) 利用した覚えのないネットサービス利用料金を請求される	39.6%	41.0%	15.9%	3.4%
(3) ネットショッピングで支払いに利用したクレジットカードの情報が悪用される	45.7%	38.9%	12.2%	3.2%
(4) ネットショッピングで購入した商品が届かなかったり、商品の状態が悪かったり、思っていたものと違ったりする	33.9%	46.8%	16.8%	2.6%
(5) メール宛先の間違えて情報が漏えいする	31.4%	45.0%	20.5%	3.1%
(6) 悪戯や不要な広告などの迷惑メールが大量に届く	36.6%	45.3%	15.3%	2.9%
(7) ウィルスや悪いソフトウェアの被害に遭う	44.5%	41.1%	11.9%	2.5%
(8) 出会い系サイトを利用して、犯罪の被害に遭う	27.8%	36.0%	22.3%	14.0%
(9) インターネット上で悪口・暴言・挑発的な言葉を書かれる	28.1%	41.8%	23.8%	6.3%
(10) 他人によって、自宅住所や電話番号を勝手にインターネットに載せられる	39.3%	42.9%	15.0%	2.8%
(11) 自分のIDやパスワードが勝手に使われる	48.8%	38.1%	11.3%	1.8%
(12) 住所や電話番号を登録したインターネットサービス事業者から、それらの情報が流出する	43.9%	42.0%	12.1%	1.9%
(13) パスワードを忘れてしまう	26.5%	46.7%	22.6%	4.3%
(14) 利用料金がいくらなのかわからない	31.0%	44.8%	20.3%	3.8%
(15) 公にしている健康状態、知られたくない趣味や嗜好などが推定されてしまう	29.8%	46.5%	20.0%	3.8%
(16) 自分の行動パターンが知られてしまう	32.5%	44.9%	19.0%	3.6%
(17) スマートスピーカーなどの音声入力機器により、自分の日常会話が他人の目に触れてしまう	31.1%	41.3%	20.5%	7.2%
(18) スマートフォンやパソコン内蔵のカメラにより、意図しない画像や映像が他人の目に触れてしまう	34.8%	43.2%	17.2%	4.8%

※表側の項目(1)～(18)について、表頭の選択肢4件によるSA方式で尋ねた。表は各質問項目について横に合算すると100%となる(ただし、四捨五入により表示上は100%を超過する場合もある)。

※質問対象は本調査の回答者全体(n=3,655)。本表も回答者全員を母数として集計した。

Q8の18項目を不安側回答（「とても不安」「やや不安」）の割合で多い順に整理したのが表2.3.2である。内容が多岐にわたるため一概に分類整理できない面もあるが、80%を超えた項目を見ると、官公庁の啓発、勤務先でのセキュリティ講習、学校での情報教育などを通じて注意喚起がなされている内容（項目(11)や(7)など）や、マスメディアを通じてしばしば被害が報じられる内容（項目(12)や(3)など）など、広く一般に認知されているであろうものが目立っている。

これに対して80%未満の下位グループを見ると、比較的最近になってから普及した技術・機器によって生じているセキュリティ上の問題（項目(18), (16), (15)など）や、自らの不注意や過失によって生じる問題（項目(5), (14), (13)など）が多いように見受けられる。

この結果を見ると、セキュリティリスクに対する不安は意識啓発や報道による認知度の高さが一定程度関係していると思われ、相対的に認知度の低いリスクに対してはあまり不安を感じない傾向があるものと思われる。不安が低いことの良し悪しは一概に言えないが、情報社会を生きていくうえで一定以上のリスク認識を持つべきだとする立場から見れば「リスク認識が甘い」とみなされる状況であろう。また、自らの不注意や過失によって引き起こされる類のリスクに対して不安が低いのは「自分がそんな間違いをするはずがない」といった思い込みを反映したものである可能性が考えられる。

なお、性別・年齢層別に比較したのが表2.3.3（次頁）である。これまで見てきた質問項目と同様に多くの項目で、女性および中高年層の不安割合が高い結果が見られた。

表 2.3.2 回答者全体での不安側回答の割合（降順）

(11) 自分のIDやパスワードが勝手に使われる	86.9%
(12) 住所や電話番号を登録したインターネットサービス事業者から、それらの情報が流出する	86.0%
(7) ウィルスや悪いソフトウェアの被害に遭う	85.6%
(3) ネットショッピングで支払いに利用したクレジットカードの情報が悪用される	84.5%
(1) 金融機関などを装ったメールで、偽のサイトに誘導され、クレジットカード番号などを入力させられる	82.5%
(10) 他人によって、自宅住所や電話番号を勝手にインターネットに載せられる	82.2%
(6) 悪戯や不要な広告などの迷惑メールが大量に届く	81.8%
(2) 利用した覚えのないネットサービス利用料金を請求される	80.7%
(4) ネットショッピングで購入した商品が届かなかったり、商品の状態が悪かったり、思っていたものと違ったりする	80.6%
(18) スマートフォンやパソコン内蔵のカメラにより、意図しない画像や映像が他人の目に触れてしまう	78.0%
(16) 自分の行動パターンが知られてしまう	77.4%
(5) メール宛先を間違えて情報が漏れやすい	76.4%
(15) 公にしていない健康状態、知られたくない趣味や嗜好などが推定されてしまう	76.3%
(14) 利用料金がいくらなのかわからない	75.9%
(13) パスワードを忘れてしまう	73.1%
(17) スマートスピーカーなどの音声入力機器により、自分の日常会話が他人の目に触れてしまう	72.4%
(9) インターネット上で悪口・暴言・挑発的な言葉を書かれる	70.0%
(8) 出会い系サイトを利用して、犯罪の被害に遭う	63.8%

※数値はそれぞれの項目について「とても不安」もしくは「やや不安」と回答した人の割合を表す。

表 2.3.3 Q8 不安側回答の性別、年齢層別比較 ※注釈は次頁

		(1) 金融機関などを装ったメールで、偽のサイトに誘導され、クレジットカード番号などを入力させられる	(2) 利用した覚えのないネットサービス利用料金を請求される	(3) ネットショッピングで支払いに利用したクレジットカードの情報が悪用される	(4) ネットショッピングで購入した商品が届かなかったり、商品の状態が悪かったり、思っていたものと違ったりする	(5) メール宛先を間違えて情報が漏えいする	(6) 悪戯や不要な広告などの迷惑メールが大量に届く
全体 (n=3655)		82.5%	80.7%	84.5%	80.6%	76.4%	81.8%
性別	男性 (n=1794)	77.8%	75.1%	79.8%	76.1%	72.5%	77.5%
	女性 (n=1817)	87.2%	86.2%	89.3%	85.1%	80.5%	86.4%
性別での χ^2 検定結果		***	***	***	***	***	***
CramerのV		0.12	0.14	0.13	0.11	0.09	0.11
年齢層	10代 (n=248)	80.7%	75.0%	79.8%	79.8%	73.0%	77.0%
	20代 (n=612)	75.7%	73.7%	78.1%	75.2%	73.0%	74.5%
	30代 (n=677)	79.2%	77.4%	77.4%	77.6%	73.3%	78.6%
	40代 (n=696)	84.3%	83.8%	86.8%	81.2%	78.2%	82.0%
	50代 (n=717)	86.2%	83.1%	89.5%	85.1%	78.5%	87.2%
	60代 (n=705)	86.5%	86.4%	91.4%	83.6%	79.9%	87.4%
年齢層別での χ^2 検定結果		***	***	***	***	**	***
CramerのV		0.11	0.12	0.16	0.09	0.07	0.13
		(7) ウィルスや悪いソフトウェアの被害に遭う	(8) 出会い系サイトを利用して、犯罪の被害に遭う	(9) インターネット上で悪口・暴言・挑発的な言葉を書かれる	(10) 他人によって、自宅住所や電話番号を勝手にインターネットに載せられる	(11) 自分のIDやパスワードが勝手に使われる	(12) 住所や電話番号を登録したインターネットサービス事業者から、それらの情報が流出する
全体 (n=3655)		85.6%	63.8%	70.0%	82.2%	86.9%	86.0%
性別	男性 (n=1794)	81.1%	61.8%	67.8%	78.4%	83.4%	81.1%
	女性 (n=1817)	90.2%	65.5%	72.0%	86.1%	90.5%	90.8%
性別での χ^2 検定結果		***	*	**	***	***	***
CramerのV		0.13	0.04	0.05	0.10	0.10	0.14
年齢層	10代 (n=248)	81.1%	71.0%	70.2%	82.3%	83.5%	84.7%
	20代 (n=612)	79.6%	62.1%	66.8%	76.5%	80.9%	78.8%
	30代 (n=677)	80.5%	64.4%	68.5%	77.0%	82.4%	79.0%
	40代 (n=696)	85.9%	65.5%	73.1%	82.9%	87.5%	87.6%
	50代 (n=717)	89.8%	62.8%	72.1%	86.3%	89.7%	90.2%
	60代 (n=705)	92.8%	61.3%	68.7%	87.2%	94.0%	93.3%
年齢層別での χ^2 検定結果		***	n.s.	n.s.	***	***	***
CramerのV		0.14	0.05	0.05	0.11	0.14	0.16
		(13) パスワードを忘れてしまう	(14) 利用料金がいくらなのかわからない	(15) 公にしていな健康状態、知られたくない趣味や嗜好などが推定されてしまう	(16) 自分の行動パターンが知られてしまう	(17) スマートスピーカーなどの音声入力機器により、自分の日常会話が他人の目に触れてしまう	(18) スマートフォンやパソコン内蔵のカメラにより、意図しない画像や映像が他人の目に触れてしまう
全体 (n=3655)		73.1%	75.9%	76.3%	77.4%	72.4%	78.0%
性別	男性 (n=1794)	68.1%	71.9%	72.2%	71.9%	67.6%	73.4%
	女性 (n=1817)	78.0%	80.1%	80.2%	82.6%	76.9%	82.6%
性別での χ^2 検定結果		***	***	***	***	***	***
CramerのV		0.11	0.10	0.09	0.13	0.10	0.11
年齢層	10代 (n=248)	67.3%	77.4%	75.0%	72.6%	79.8%	78.6%
	20代 (n=612)	67.5%	69.3%	70.6%	73.7%	68.5%	74.7%
	30代 (n=677)	70.3%	70.6%	73.3%	75.0%	69.6%	74.5%
	40代 (n=696)	75.3%	76.6%	77.9%	78.9%	73.3%	78.3%
	50代 (n=717)	77.3%	78.7%	79.4%	79.2%	74.3%	80.9%
	60代 (n=705)	76.5%	82.6%	79.7%	81.1%	72.9%	80.7%
年齢層別での χ^2 検定結果		***	***	***	**	**	***
CramerのV		0.09	0.11	0.08	0.07	0.07	0.07

表 2.3.3 注釈

※数値はそれぞれの項目について「とても不安」もしくは「やや不安」と回答した人の割合を表す。

※ χ^2 検定結果…*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, n. s. 有意な偏りなし

※Cramer の V については 0.10 (効果量少程度) 以上のものを太字で表示した。

※年齢層別の比較では標準化残差±1.96 (危険率 5%水準) を基準に残差分析を行った。黒太字は期待度数より「有意に高い」ことを、赤太字は期待度数より「有意に低い」ことを示す。

2.4 パーソナルデータの第三者提供に対する許容 (Q32)

Q32 では「あなたは、以下のような場合に、あなたに関する個人情報 (位置情報や病歴、行動履歴など) を第三者に提供することに対してどのようにお考えですか。もっともあてはまるものをお選びください。」との質問で、これまでと逆にデータ活用を許容する方向からの意見を尋ねた (表 2.4.1)。

表 2.4.1 パーソナルデータの第三者提供に対する許容 (Q32)

質問項目	提供してもよい	条件によっては提供してもよい	どんな場合でも提供したくない
(1) 銀行などの金融機関の利用情報	4.5%	27.0%	68.6%
(2) 病院の利用情報	5.1%	35.3%	59.6%
(3) 確定申告などからわかる収入の情報	3.1%	24.7%	72.3%
(4) 交通機関の利用履歴	7.7%	38.3%	54.0%
(5) 商品の購入履歴	7.1%	41.0%	51.9%
(6) GPSなどの位置情報	2.8%	25.8%	71.4%
(7) 防犯カメラで記録された情報	3.9%	29.4%	66.7%
(8) テレビの視聴履歴	12.4%	40.4%	47.2%
(9) DVDの視聴履歴	10.1%	36.1%	53.8%
(10) ネット動画 (YouTubeなど) の視聴履歴	8.7%	35.1%	56.2%
(11) ビデオオンデマンド (Netflix, Amazonプライムビデオなど) の視聴履歴	8.8%	34.1%	57.2%
(12) DVDの貸し出し履歴	9.1%	33.7%	57.1%
(13) 図書館の貸し出し履歴	10.8%	35.8%	53.5%
(14) 電子書籍 (マンガ) の購読/試し読み履歴	8.3%	33.9%	57.8%
(15) SNSの投稿履歴	5.4%	28.5%	66.0%
(16) 有料記事の閲覧履歴	6.1%	31.5%	62.4%
(17) ヘルスケア情報 (歩数、脈拍など)	8.8%	35.1%	56.1%
(18) 検索履歴	4.4%	30.1%	65.4%
(19) 自家用車の走行記録 (GPS、ドライブレコーダーの走行記録など)	6.1%	31.0%	62.9%
(20) メールやSNSメッセージの解析情報	3.7%	23.8%	72.6%
(21) DNA (遺伝子) 情報	3.5%	23.6%	72.9%
(22) 顔画像、指紋など、生体的な特徴に関する情報	2.4%	20.4%	77.2%

※表側の項目 (1) ~ (22) について、表頭の選択肢 3 件による SA 方式で尋ねた。表は各質問項目について横に合算すると 100%となる (ただし、四捨五入により表示上は 100%を越す場合もある)。

※質問対象は本調査の回答者全体 (n=3,655)。本表も回答者全員を母数として集計した。

これについて許容側回答（「提供してもよい」「条件によっては提供してもよい」）の割合が多い順にみたのが表 2.4.2 である。

これも多彩な情報を網羅的に尋ねているため一貫性を見出すことは難しいが、各種コンテンツの視聴履歴（項目(8), (10), (11)など）や商品・サービスの購入・利用履歴（項目(5), (13), (4)など）は比較的許容度が高い一方、生体データ（項目(21), (22)など）のようなセンシティブ情報や、家計に関するデータ（項目(1), (3)など）、現実ないしネットでの行動データ（項目(19), (18), (15), (7), (6)など）といったプライバシー情報の許容度が低い様子がうかがえる。

しかし生体情報である「(17)ヘルスケア情報（歩数、脈拍など）」の許容度が上位に位置していたり、商品・サービスの購入・利用履歴にあたる「(16)有料記事の閲覧履歴」がやや低位に位置しているなど上記の記述に反した結果もところどころ見られるため、一貫した傾向とは言い難いようである。

性・年齢層別の比較では、不安質問の傾向を裏返したように、男性の許容度が高く、若年層の許容度が高い傾向が見られた（次頁の表 2.4.3）。

表 2.4.2 回答者全体での許容側回答の割合（降順）

(8) テレビの視聴履歴	52.8%
(5) 商品の購入履歴	48.1%
(13) 図書館の貸し出し履歴	46.5%
(9) DVDの視聴履歴	46.2%
(4) 交通機関の利用履歴	46.1%
(17) ヘルスケア情報（歩数、脈拍など）	43.9%
(10) ネット動画（YouTubeなど）の視聴履歴	43.8%
(12) DVDの貸し出し履歴	42.9%
(11) ビデオオンデマンド（Netflix、Amazonプライムビデオなど）の視聴履歴	42.8%
(14) 電子書籍（マンガ）の購読／試し読み履歴	42.2%
(2) 病院の利用情報	40.4%
(16) 有料記事の閲覧履歴	37.6%
(19) 自家用車の走行記録（GPS、ドライブレコーダーの走行記録など）	37.1%
(18) 検索履歴	34.6%
(15) SNSの投稿履歴	34.0%
(7) 防犯カメラで記録された情報	33.4%
(1) 銀行などの金融機関の利用情報	31.4%
(6) GPSなどの位置情報	28.6%
(3) 確定申告などからわかる収入の情報	27.7%
(20) メールやSNSメッセージの解析情報	27.4%
(21) DNA（遺伝子）情報	27.1%
(22) 顔画像、指紋など、生体的な特徴に関する情報	22.8%

※数値はそれぞれの項目について「提供してもよい」もしくは「条件によっては提供してもよい」と回答した人の割合を表す。

表 2.4.3 Q32 許容側回答の性別、年齢層別比較

		(1) 銀行などの金融機関の利用情報	(2) 病院の利用情報	(3) 確定申告などからわかる収入の情報	(4) 交通機関の利用履歴	(5) 商品の購入履歴	(6) GPSなどの位置情報
全体 (n=3655)		31.4%	40.4%	27.7%	46.1%	48.1%	28.6%
性別	男性 (n=1794)	36.0%	42.4%	32.5%	47.6%	49.0%	34.0%
	女性 (n=1817)	26.9%	38.6%	23.0%	44.9%	47.7%	23.3%
性別での χ^2 検定結果		***	*	***	n.s.	n.s.	***
CramerのV		0.10	0.04	0.11	0.03	0.01	0.12
年齢層	10代 (n=248)	52.0%	65.3%	49.6%	63.3%	64.9%	40.3%
	20代 (n=612)	44.4%	52.6%	41.2%	54.7%	58.7%	36.1%
	30代 (n=677)	33.1%	41.8%	30.9%	42.7%	44.3%	28.4%
	40代 (n=696)	26.3%	34.6%	22.4%	38.4%	40.2%	24.3%
	50代 (n=717)	25.7%	34.2%	20.8%	42.1%	44.8%	24.7%
	60代 (n=705)	22.3%	31.9%	17.7%	47.2%	47.7%	26.4%
年齢層別での χ^2 検定結果		***	***	***	***	***	***
CramerのV		0.20	0.20	0.22	0.14	0.15	0.11
		(7) 防犯カメラで記録された情報	(8) テレビの視聴履歴	(9) DVDの視聴履歴	(10) ネット動画 (YouTubeなど) の視聴履歴	(11) ビデオオンデマンド (Netflix, Amazonプライムビデオなど) の視聴履歴	(12) DVDの貸し出し履歴
全体 (n=3655)		33.4%	52.8%	46.2%	43.8%	42.8%	42.9%
性別	男性 (n=1794)	37.1%	52.2%	46.0%	45.2%	44.0%	43.5%
	女性 (n=1817)	29.8%	53.8%	46.7%	42.7%	42.1%	42.8%
性別での χ^2 検定結果		***	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
CramerのV		0.08	0.02	0.01	0.03	0.02	0.01
年齢層	10代 (n=248)	44.8%	69.4%	62.9%	63.7%	59.7%	61.3%
	20代 (n=612)	40.9%	60.0%	54.1%	53.1%	51.1%	52.0%
	30代 (n=677)	34.6%	50.7%	43.9%	42.0%	41.8%	39.3%
	40代 (n=696)	28.0%	45.1%	38.4%	36.1%	34.2%	35.1%
	50代 (n=717)	31.4%	50.9%	43.2%	39.2%	39.8%	39.6%
	60代 (n=705)	28.9%	52.5%	46.4%	42.7%	42.3%	43.0%
年齢層別での χ^2 検定結果		***	***	***	***	***	***
CramerのV		0.11	0.13	0.13	0.15	0.14	0.15
		(13) 図書館の貸し出し履歴	(14) 電子書籍 (マンガ) の購読 / 試し読み履歴	(15) SNSの投稿履歴	(16) 有料記事の閲覧履歴	(17) ヘルスケア情報 (歩数、脈拍など)	(18) 検索履歴
全体 (n=3655)		46.5%	42.2%	34.0%	37.6%	43.9%	34.6%
性別	男性 (n=1794)	46.8%	44.3%	38.1%	40.2%	44.7%	37.2%
	女性 (n=1817)	46.6%	40.5%	30.1%	35.3%	43.3%	32.1%
性別での χ^2 検定結果		n.s.	*	***	**	n.s.	**
CramerのV		0.00	0.04	0.08	0.05	0.01	0.05
年齢層	10代 (n=248)	66.1%	58.1%	52.4%	53.6%	60.5%	44.8%
	20代 (n=612)	56.7%	49.8%	41.0%	46.9%	53.4%	40.9%
	30代 (n=677)	42.5%	38.4%	32.6%	36.9%	43.4%	33.4%
	40代 (n=696)	38.9%	35.2%	27.9%	31.0%	37.5%	29.2%
	50代 (n=717)	41.8%	39.1%	29.7%	33.5%	39.8%	32.4%
	60代 (n=705)	46.8%	43.8%	33.1%	35.0%	40.9%	34.2%
年齢層別での χ^2 検定結果		***	***	***	***	***	***
CramerのV		0.16	0.13	0.14	0.14	0.14	0.10

※数値はそれぞれの項目について「提供してもよい」もしくは「条件によっては提供してもよい」と回答した人の割合を表す。

※ χ^2 検定結果…*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, n.s. 有意な偏りなし

※CramerのVについては0.10(効果量少程度)以上のものを太字で表示した。

※年齢層別の比較では標準化残差±1.96(危険率5%水準)を基準に残差分析を行った。黒太字は期待度数より「有意に高い」ことを、赤太字は期待度数より「有意に低い」ことを示す。

表 2.4.3 続き

	(19) 自家用車の走行記録 (GPS、ドライブレコーダーの走行記録など)	(20) メールや SNS メッセージの解析情報	(21) DNA (遺伝子) 情報	(22) 顔画像、指紋など、生体的な特徴に関する情報
全体 (n=3655)	37.1%	27.4%	27.1%	22.8%
性別				
男性 (n=1794)	40.9%	33.1%	31.6%	28.2%
女性 (n=1817)	33.7%	21.9%	22.8%	17.6%
性別での χ^2 検定結果	***	***	***	***
CramerのV	0.07	0.13	0.10	0.13
年齢層				
10代 (n=248)	50.0%	40.3%	41.5%	34.7%
20代 (n=612)	43.6%	35.1%	40.0%	33.8%
30代 (n=677)	33.8%	28.5%	30.4%	24.7%
40代 (n=696)	29.9%	22.1%	23.4%	21.8%
50代 (n=717)	35.2%	24.8%	20.4%	15.9%
60代 (n=705)	39.0%	23.0%	17.9%	15.2%
年齢層別の χ^2 検定結果	***	***	***	***
CramerのV	0.12	0.13	0.19	0.17

2.5 パーソナルデータの公開に対する許容 (Q33)

Q33 では「あなたに関する以下の情報の公開について、どのようにお考えですか。もっともあてはまるものをお選びください。※該当しない項目がある場合も、想定してお選びください。」との質問文でパーソナルデータ公開への許容意識を尋ねた (表 2.5.1)。

許容側の回答を合算した割合を表 2.5.2 で見ると、「(7) 趣味」(33.4%)、「(9) 宗教」(20.4%)、「(8) 思想・信条」(18.6%)、「(10) 学歴・職歴」(17.2%) などの許容度が高く、逆に低かったのは「(5) 電話番号」(5.6%)、「(4) メールアドレス」(8.0%)、「(2) 会社名」(9.8%)、「(6) 居住地」(10.1%)、「(1) 氏名」(10.4%) などであった。

表 2.5.1 パーソナルデータの公開に対する許容 (Q33)

質問項目	どのような場合でも公開してもよい	どちらかといえば公開してもよい	どちらかといえば公開したくない	どのような場合でも公開したくない
(1) 氏名	1.6%	8.8%	29.7%	59.9%
(2) 会社名	1.5%	8.3%	29.3%	60.9%
(3) 会社・組織での役職名	1.9%	8.6%	29.4%	60.0%
(4) メールアドレス	1.2%	6.8%	27.3%	64.7%
(5) 電話番号	1.1%	4.5%	24.2%	70.3%
(6) 居住地	1.3%	8.8%	28.0%	61.9%
(7) 趣味	7.1%	26.3%	28.2%	38.4%
(8) 病歴・病状などのカルテ情報	2.0%	9.7%	26.5%	61.7%
(9) 宗教	5.9%	14.5%	25.1%	54.5%
(10) 思想・信条	4.4%	14.2%	25.8%	55.5%
(11) 学歴・職歴	3.3%	13.9%	29.4%	53.4%

※質問文は「あなたに関する以下の情報の公開について、どのようにお考えですか。もっともあてはまるものをお選びください。 ※該当しない項目がある場合も、想定してお選びください。」

※表側の項目(1)～(11)について、表頭の選択肢4件によるSA方式で尋ねた。表は各質問項目について横に合算すると100%となる(ただし、四捨五入により表示上は100%を越す場合もある)。

※質問対象は本調査の回答者全体 (n=3,655)。本表も回答者全員を母数として集計した。

この結果を見ると、まず **Q5** で見られたのと同様に個人を特定できる情報が守るべき情報として特に重視されている様子がうかがえる。一方で興味深かったのは、**信教や思想・信条**といったセンシティブ情報が（相対的にはあるが）予想に反して公開への許容度が高かった点である。先の Q32 で「ヘルスケア情報（歩数、脈拍など）」や「病院の利用情報」が相対的に高い許容度を示したと似た結果と言えるだろう。

一般に Q33 で挙げたような情報は（「趣味」を除いて）いずれも個人の安全や尊厳にかかわる重要な情報とみなされているが、詳細に人々の意識をみてみると「個人を特定できる情報」と「それ以外のセンシティブ情報」との間で微妙な認識の違いがあるのではないかと思われ、今後より詳細な検討が必要と思われる。

表 2.5.2 Q33 許容側回答の性別、年齢層別比較

		(1) 氏名	(2) 会社名	(3) 会社・組織での役職名	(4) メールアドレス	(5) 電話番号	(6) 居住地
性別	全体 (n=3655)	10.4%	9.8%	10.5%	8.0%	5.6%	10.1%
	男性 (n=1794)	14.1%	13.1%	13.8%	11.4%	8.3%	13.4%
	女性 (n=1817)	6.8%	6.5%	7.3%	4.5%	2.8%	6.8%
性別での χ^2 検定結果		***	***	***	***	***	***
CramerのV		0.12	0.11	0.11	0.13	0.12	0.11
年齢層	10代 (n=248)	24.2%	17.7%	17.3%	16.9%	10.9%	10.5%
	20代 (n=612)	14.7%	13.6%	14.1%	12.8%	9.0%	12.9%
	30代 (n=677)	8.7%	8.6%	11.1%	8.1%	6.2%	11.1%
	40代 (n=696)	5.9%	5.3%	6.3%	4.9%	2.9%	6.6%
	50代 (n=717)	7.7%	8.5%	9.2%	4.9%	3.6%	9.6%
	60代 (n=705)	10.6%	10.6%	10.1%	6.8%	4.7%	10.4%
	年齢層別での χ^2 検定結果	***	***	***	***	***	**
CramerのV		0.15	0.11	0.10	0.13	0.11	0.07
		(7) 趣味	(8) 病歴・病状などのカルテ情報	(9) 宗教	(10) 思想・信条	(11) 学歴・職歴	
性別	全体 (n=3655)	33.4%	11.7%	20.4%	18.6%	17.2%	
	男性 (n=1794)	35.0%	14.2%	22.1%	21.4%	20.0%	
	女性 (n=1817)	32.1%	9.4%	18.8%	16.0%	14.7%	
性別での χ^2 検定結果		n.s.	***	*	***	***	
CramerのV		0.03	0.07	0.04	0.07	0.07	
年齢層	10代 (n=248)	60.5%	19.8%	35.1%	33.9%	28.6%	
	20代 (n=612)	46.4%	20.9%	30.4%	28.4%	26.5%	
	30代 (n=677)	30.3%	13.2%	19.4%	17.1%	13.3%	
	40代 (n=696)	23.1%	7.2%	13.1%	12.2%	8.8%	
	50代 (n=717)	28.2%	7.7%	16.9%	15.5%	15.9%	
	60代 (n=705)	30.9%	8.2%	18.3%	15.7%	18.7%	
	年齢層別での χ^2 検定結果	***	***	***	***	***	
CramerのV		0.22	0.17	0.17	0.17	0.17	

※数値はそれぞれの項目について「どのような場合でも公開してもよい」もしくは「どちらかといえば公開してもよい」と回答した人の割合を表す。

※ χ^2 検定結果…*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, n.s. 有意な偏りなし

※CramerのVについては0.10（効果量少程度）以上のものを太字で表示した。

※年齢層別の比較では標準化残差±1.96（危険率5%水準）を基準に残差分析を行った。黒太字は期待度数より「有意に高い」ことを、赤太字は期待度数より「有意に低い」ことを示す。

2.6 ネットサービス利用時のプライバシー・セキュリティ設定 (Q24)

「あなたはネット上のサービスを利用する際に、プライバシーやセキュリティに関する設定をしていますか。以下のうち、あてはまるものをすべてお選びください。」の質問文でプライバシー・セキュリティ設定の状況を尋ねた(表 2.6.1)。

回答者全体でみると、「2. 位置情報のオンオフ」(35.7%)、「1. 投稿の公開範囲の設定」(28.1%)、「8. 不快なユーザーのブロック」(22.8%)、「3. 電話帳などスマホ内の情報へのアクセス」(19.5%)の該当率が高かった。項目2や3は機器やアプリを利用していると頻繁に確認通知が表示される類のものであるし、項目1などはSNSなどの利用開始時点で真っ先に行う設定であることから、該当率が高かったものと考えられる。

これに対して「5. 事業者側で利用情報を活用することへの許可」(9.6%)、「6. 情報の第三者提供の停止要請(オプトアウト)」(10.4%)といった項目は、設定が容易でなかったり事実上拒否するのが不可能である⁴⁾だけでなく、そもそも覚知自体が容易と言い難い。該当者が少ないのはこれらの設定を行うべき状況に遭遇するケースが少なく、そうした設定があることへの認知度が低いのではないかと考えられる。

プライバシー・セキュリティ設定の認知度に関して述べると、そもそも現在の情報機器

表 2.6.1 ネットサービス利用時のプライバシー・セキュリティ設定 (Q24)

	1 投稿の公開範囲の設定	2 位置情報のオンオフ	3 電話帳などのアクセス スマホ内の	4 利用情報のオンオフ 基にした広	5 事業者側で利用することへの許可	6 情報の第三者提供の停止要請(オプトアウト)	7 不快な投稿の表示に関する設定	8 不快なユーザーのブロック	9 初期状態のままにしておく	10 あてはまるものはない
全体 (n=3655)	28.1%	35.7%	19.5%	11.1%	9.6%	10.4%	11.8%	22.8%	17.0%	31.6%
性別										
男性 (n=1794)	25.5%	32.7%	19.6%	12.8%	10.4%	10.9%	10.8%	20.9%	17.3%	33.1%
女性 (n=1817)	30.9%	38.9%	19.5%	9.4%	8.6%	9.9%	12.6%	24.9%	17.1%	29.3%
性別での χ^2 検定結果 Cramer's V	*** 0.06	*** 0.07	n.s. 0.00	** 0.05	n.s. 0.03	n.s. 0.02	n.s. 0.03	** 0.05	n.s. 0.00	* 0.04
年齢層										
10代 (n=248)	50.0%	52.1%	33.9%	13.3%	11.3%	11.7%	26.6%	45.2%	4.8%	19.4%
20代 (n=612)	42.2%	45.6%	25.3%	11.6%	8.5%	9.5%	16.5%	33.2%	7.7%	28.8%
30代 (n=677)	26.6%	35.8%	18.2%	9.3%	8.4%	9.6%	11.2%	22.2%	13.2%	33.7%
40代 (n=696)	25.0%	34.6%	19.5%	13.1%	11.1%	12.6%	11.2%	19.8%	15.7%	35.3%
50代 (n=717)	23.2%	31.7%	18.7%	11.7%	9.3%	10.0%	8.7%	18.0%	19.9%	33.8%
60代 (n=705)	17.9%	23.1%	11.6%	9.1%	9.8%	9.7%	6.8%	14.3%	31.5%	30.4%
年齢層別の χ^2 検定結果 Cramer's V	*** 0.21	*** 0.21	*** 0.14	n.s. 0.05	n.s. 0.04	n.s. 0.04	*** 0.16	*** 0.20	*** 0.22	*** 0.09

※表頭の項目1~10についてMA方式で尋ねた。なお項目9・10は排他選択肢である。

※質問対象は本調査の回答者全体 (n=3,655)。本表も回答者全員を母数として集計した。

⁴⁾ 事実上拒否するのが不可能である場合…「利用情報を活用することへの許可」は通常、アプリ等の利用開始時に利用規約やプライバシーポリシーへの同意を通じて取り付けられるが、利用規約等に目を通すユーザーがそもそも少数派であることや、仮に読んだとしてもサービスを利用しようとする限り内容に関わりなく同意せざるを得ない状況があるなど、形骸化が指摘されている。利用規約等の読解や同意を巡る実態については篠田ほか(2020)を参照されたい。

やアプリにおけるそれは一般ユーザーにとって煩雑・難解であるため、多くの人々にとっては何かあるたびに表示される確認通知に場当たりの対処するので精一杯であり、系統的に設定を確認・操作する方が稀であろう。それが実情だとすれば、確認通知の来やすい部分とそうでない部分で設定の濃淡が生じることになりかねず、ユーザーのパーソナルデータ保護にとっては問題含みだと思われる。本結果はそうした課題の一端を垣間見せたものと言えるのではないだろうか。

2.7 本パートの知見

本パートではパーソナルデータがネット上のサービス事業者に収集・利用されたり、そこからさらに第三者提供されたりすることに対する不安と許容の意識を検討した。

その結果、人々が氏名・住所・電話番号といった個人を特定できる情報に対して特に敏感である状況が浮かび上がった（Q5、Q33 より）。また生体データのようなセンシティブ情報や、家計データ・行動データといったプライバシー情報も重視されていた（Q32 より）。しかしセンシティブ情報の中でも信教や思想・信条が個人特定情報より公開の許容度が高い結果も見られ、社会一般では重要性に甲乙つけがたいと考えられている個人特定情報とセンシティブ情報に対する認識に微妙な違いがある可能性がうかがわれた。

またセキュリティリスクに対する不安（Q8）やプライバシー・セキュリティ設定（Q24）の検討を通じて、人々は自分が見聞きした問題や日頃遭遇しやすい問題は重要度の高いものとして扱う（したがって不安を感じやすくなったり、対策を行ったりする）のに対し、認知度の低い問題や「自分がそんな不注意をするはずがない」と思い込みがちな問題に対してはあまり注意を払っていない可能性が浮かび上がってきた。もちろん人々が不安を高めるべきだというわけではないが、セキュリティ問題への認知・遭遇の可能性によってリスク認識が左右されるとしたらパーソナルデータ保護にとって看過できない状況だと思われる。本稿でそうした課題の一端が垣間見えたとすれば意義のあることだと思われる。

そして、セキュリティリスクの認識に問題自体への認知・遭遇が重要な意味を持つとしたら、そうしたリスクの周知に一定の責任を持つ事業者の役割も問われるであろう。この点では情報の自己コントロール権やインフォームド・コンセントの確保に関して、人々がパーソナルデータを扱う企業に不安と不満を感じていることが明らかになった（Q7）。事業者にはなお一層の努力が求められると思われる。

<本パート参考文献>

篠田詩織、橋元良明、天野美穂子、堀川裕介、間形文彦、藤村明子（2020）「スマートフォンアプリでの利用規約・プライバシーポリシー接触とプライバシー意識・行動の調査」, 東京大学大学院情報学環情報学研究調査研究編, 36, 321-374.

3. ターゲティング広告・ステルスマーケティング・サクラレビュー

インターネットショッピング・SNS等の利用の拡大に伴い、多くのウェブサイトでは個人の見聞履歴に基づいたターゲティング広告が表示されるようになり、プライバシーリスクが増大している（日本経済新聞（2019））。また、ステルスマーケティングやサクラレビューの存在が問題になり、消費者の意思決定に不適切な影響を及ぼしている（日本弁護士連合会（2017））。本章では、ユーザがこれらの存在を認知・想定しているか、およびどう感じているかを探る。類似の調査は2015年度にも実施している（橋元（2016））。

3.1 ターゲティング広告との接触（Q28、Q28-SQ1）

ターゲティング広告の認知を測定するため、「あなたのサイト閲覧、検索、登録情報などをもとに表示される広告を、ここではターゲティング広告と呼びます。」という説明を載せ、Q28にて「あなたは、ターゲティング広告をどの程度見ますか。」の質問で「よく見る」、「まあまあ見る」、「あまり見ない」、「まったく見ない」、「何がターゲティング広告なのか分からない」の5つの選択肢を提示し、調査した。表3.1.1は、「よく見る」と「まあまあ見る」と「あまり見ない」を「見ることもある」に集約した後に年齢層別、性別で集計した結果である。

全体で見ると、見ることもある人は42.8%であったのに対し、まったく見ない人は19.5%とその約半数であった。何がターゲティング広告かわからない人は37.7%だった。広告企業による追跡を止めてターゲティング広告を出さないようにする場合には、まずはその存在に気が付く必要があるが、4割もの人がターゲティング広告の区別がついていない。

ただし、ここで「まったく見ない」を選択した人については、何がターゲティング広告かをわかっていて広告が掲示されないよう対策をとっている人と、何がターゲティング広告かわからない人が混在している可能性がある。

年齢層別では、50代・60代の方が、10代・20代よりもまったく見ない人の割合が多かった。性別では、まったく見ない人は男性の方が割合が多かった。何がターゲティング広告かわからない人は、女性の方が割合が多かった。

また、Q28-SQ1にて、Q28で「よく見る」、「まあまあ見る」、「あまり見ない」と答えた1563人（42.8%）に対し、「ターゲティング広告を見た際、リンクをどのくらいの頻度でクリックしますか。」の質問で「半々か、それ以上の頻度でクリックする」、「ときどきクリックする」、「ほとんどクリックしない」、「まったくクリックしない」の4つの選択肢を提示し、クリック率を調査した。

表3.1.2は、「半々か、それ以上の頻度でクリックする」と「ときどきクリックする」を「クリックする」に集約した後、年齢層別、性別で集計した結果である。

クリックする人は、ターゲティング広告を見ることもある人のうち27.4%であった。こ

これは、調査参加者全体の割合にすると 11.2%になる。年齢層別、性別では違いはなかった。

表 3.1.1 ターゲティング広告を見るか

	見ることがある	まったく見ない	わからない
全体 (N=3655)	42.8%	19.5%	37.7%
10代 (n=248)	48.4%	13.3%	38.3%
20代 (n=612)	48.9%	11.1%	40.0%
30代 (n=677)	44.0%	18.3%	37.7%
40代 (n=696)	40.2%	22.0%	37.8%
50代 (n=717)	39.6%	24.4%	36.0%
60代 (n=705)	40.0%	22.7%	37.3%
カイ2乗検定	***		
男性 (n=1794)	44.5%	23.1%	32.4%
女性 (n=1817)	41.3%	16.1%	42.6%
カイ2乗検定	***		

※「***」は、カイ2乗検定の結果 0.1%水準で有意差が見られたことを示す。残差分析にて 5%水準で有意に高かったものを黒色太字、低かったものを赤色太字で表す。

表 3.1.2 ターゲティング広告をクリックするか

	クリックする
全体 (N=1563)	27.4%
10代 (n=248)	27.5%
20代 (n=612)	30.8%
30代 (n=677)	29.2%
40代 (n=696)	25.7%
50代 (n=717)	25.4%
60代 (n=705)	25.5%
カイ2乗検定	n. s.
男性 (n=1794)	29.3%
女性 (n=1817)	25.6%
カイ2乗検定	n. s.

※「n. s.」はカイ2乗検定の結果有意差が見られなかったことを示す。

3.2 ターゲティング広告に対する感じ方 (Q29)

ターゲティング広告に対する感じ方を調査するため、Q29にて、「あなたは、ターゲティング広告についてどのように思いますか。あてはまるものをいくつでもお選びください。」という質問に対し、表 3.2.1 に示す各項目について複数選択方式で選んでもらった。表 3.2.1 はその結果を表す。

もっとも多かったのは順に、「(12)自分のデータを誰が収集しているかわからない不安」27.7%、「(10)自分に関する情報の漏洩の不安」21.2%、「(11)自分のデータが集約されているような恐怖」20.6%と、ネガティブなものであった。ターゲティング広告のユーザからのわかりにくさや不透明性がこのような不安や恐怖を起こしていると考えられる。逆に少なかったのは順に、「(2)似たような商品を探すのに便利」8.4%、「(7)選択肢が狭まっている」

8.9%、「(3) 良い商品との出会い」11.6%であった。利便性を感じる人が少ない一方、自分の好みに合うものばかりを提示されて選択肢が狭まっていると感じている人も少なかった。

年齢層別では、(1)～(3)のポジティブな感じ方については若年層の方が高齢層より多く、(4)～(12)のネガティブな感じ方については高齢層の方が若年層より多かった。

性別では、「(6) 余計なお世話」、「(7) 選択肢の狭まり」と、自分の行動が制限されているような感じ方については男性の方が高かった。「(8) 仕組みがわからず不安」、「(9) 目的外利用の不安」、「(10) 情報漏洩の不安」、「(11) 情報集約の不安」、「(12) 収集主体がわからず不安」の5つの不安感情については女性の方が高かった。

表 3.2.1 ターゲティング広告に対する感じ方

	1. 自分の興味や好みにあった広告が見られるのは便利だ	2. 似たような商品と見比べたい時、探す手間が省けて便利だ	3. 思いがけず良い商品と出会えるのが良い	4. 自分の興味や好みを探られているようで不快だ	5. 自分の興味や好みを決めつけられているようで不快だ	6. 自分の欲しいものは自分で探したいので、余計なお世話だ	7. かえって選択肢が狭まっている感じがする
全体 (N=3655)	15.0%	8.4%	11.6%	18.9%	16.8%	18.5%	8.9%
10代 (n=248)	32.3%	10.1%	16.5%	15.3%	12.9%	11.7%	6.9%
20代 (n=612)	21.7%	11.3%	15.2%	14.2%	13.1%	11.9%	6.2%
30代 (n=677)	12.4%	10.2%	12.0%	20.2%	17.6%	17.6%	9.3%
40代 (n=696)	13.1%	6.5%	10.9%	18.0%	14.8%	18.1%	8.2%
50代 (n=717)	11.6%	6.0%	8.9%	20.1%	19.1%	22.0%	11.2%
60代 (n=705)	11.1%	8.1%	9.8%	22.7%	20.3%	24.4%	10.2%
カイ2乗検定	***	**	**	**	**	***	*
男性 (n=1794)	15.2%	8.7%	11.9%	18.2%	17.2%	19.9%	10.4%
女性 (n=1817)	15.1%	8.4%	11.4%	19.5%	16.3%	17.2%	7.5%
カイ2乗検定	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	*	**

	8. どのような仕組みで広告が表示されているか分からず不安だ	9. 広告表示に使った情報が他の目的に使われているか不安だ	10. 自分に関する情報が他に漏れているか不安だ	11. 自分の情報を集約されているようで怖い	12. 自分のサイト閲覧履歴・検索履歴・登録情報などが誰に収集されているかわからず不安だ	13. いずれもあてはまらない
全体 (N=3655)	16.0%	16.3%	21.2%	20.6%	27.7%	29.3%
10代 (n=248)	14.1%	9.7%	16.9%	14.9%	19.4%	27.4%
20代 (n=612)	12.3%	9.2%	14.7%	13.9%	17.8%	32.7%
30代 (n=677)	12.4%	15.4%	17.4%	19.9%	25.7%	30.4%
40代 (n=696)	18.5%	18.0%	20.8%	22.4%	28.0%	29.0%
50代 (n=717)	15.5%	18.0%	24.0%	22.0%	31.5%	29.7%
60代 (n=705)	21.1%	22.6%	29.5%	25.8%	36.9%	26.0%
カイ2乗検定	***	***	***	***	***	n. s.
男性 (n=1794)	12.5%	14.2%	18.1%	17.8%	22.7%	32.2%
女性 (n=1817)	19.5%	18.3%	24.3%	23.1%	32.5%	26.0%
カイ2乗検定	***	**	***	***	***	***

※「*」は5%水準、「**」は1%水準、「***」は0.1%水準でそれぞれカイ2乗検定で有意な偏りが見られたことを、「n. s.」は有意差が見られなかったことを示す。残差分析にて5%水準で有意に高かったものを黒色太字、低かったものを赤色太字で表す。

3.3 ステルスマーケティング・サクラレビューの存在の想定度（Q30）

ステルスマーケティングとサクラレビューの存在を想定している人の割合を測るため、Q30にて、「以下のそれぞれの項目について、書かれたような状況が、どの程度あると思いますか。もっともあてはまるものをお選びください。」という質問に対し、表 3.3.1 に示す各項目について「よくある」、「ときどきある」、「あまりない」、「ほとんどない」の4選択肢で調査をした。表 3.3.1 は、「よくある」と「ときどきある」を選択した人を、存在の想定をしている人とし、その割合を想定度として年齢層別、性別で集計した結果である。

想定度はそれぞれ、「(1) 芸能人の SNS での商品紹介」60.3%、「(2) 一般人の SNS での商品紹介」50.7%、「(3) ショッピングサイトでの褒めるサクラレビュー」47.9%、「(4) ショッピングサイトでのけなすサクラレビュー」38.8%だった。芸能人によるステルスマーケティングは6割の人に想定されている一方、けなすサクラレビューの想定度は4割程度で、他と比べると低かった。

年齢層別では、いずれの想定度も有意な差はなかった。性別では、(1)(2)(3)について、女性の方が男性より想定度が高かった。女性の方が、口コミ情報収集の際にそれが純粋な消費者によるものかの精査を慎重に行っていると思われる。

表 3.3.1 ステルスマーケティング・サクラレビューに対する想定度

	(1) 芸能人が SNS で商品をほめているときは、広告費を貰っている	(2) 一般人でも、SNS で商品をほめているときは、広告費を貰っている	(3) オンラインショッピングサイトで商品をほめているレビューは、関係者からならぬか対価を貰って書かれている	(4) オンラインショッピングサイトで商品をけなしているレビューは、関係者からならぬか対価を貰って書かれている
全体 (N=3655)	60.3%	50.7%	47.9%	38.8%
10代 (n=248)	56.9%	42.7%	48.0%	34.3%
20代 (n=612)	59.8%	51.8%	46.2%	37.7%
30代 (n=677)	58.8%	50.2%	45.9%	37.2%
40代 (n=696)	61.2%	53.2%	47.0%	40.2%
50代 (n=717)	59.7%	50.9%	48.3%	38.4%
60代 (n=705)	63.3%	50.4%	51.8%	42.0%
カイ2乗検定	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.
男性 (n=1794)	55.7%	46.0%	45.7%	38.7%
女性 (n=1817)	65.3%	55.5%	50.2%	39.0%
カイ2乗検定	***	***	**	n. s.

※「**」は1%水準、「***」は0.1%水準でそれぞれカイ2乗検定で有意な偏りが見られたことを、「n. s.」は有意差が見られなかったものを示す。残差分析にて5%水準で有意に高かったものを黒色太字、低かったものを赤色太字で表す。

参考文献

日本経済新聞（2019）『「五つ星」ずらり、それ本物？ 広がる偽レビュー』

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ052504170S9A121C1TJQ000> (2021年1月12日閲覧確認) .

日本弁護士連合会 (2017) 『ステルスマーケティングの規制に関する意見書』
https://www.nichibenren.or.jp/library/ja/opinion/report/data/2017/opinion_170216_02.pdf (2021年1月12日閲覧確認)

橋元良明, 山本太郎, 関谷直也, 天野美穂子, 堀川裕介 (2016) 『ネット利用に関する安心と不安』 東京大学大学院情報学環紀要.

4. キャッシュレス決済 (Q9)

商品の購入・サービスの利用の場面における現金を使用しない支払い方法（以降、キャッシュレス決済）は、近年、多様化している。本調査では、キャッシュレス決済としてクレジットカード、プリペイドカード、デビットカード、カード型の電子マネー（Suica、nanaco など）、非接触型モバイルアプリ決済（Apple Pay、おサイフケータイなど）、QRコード決済（PayPay、LINE Pay など）、仮想通貨（ビットコインなど）を取りあげ、利用実態を探った。本章では、このキャッシュレス決済の利用を中心に、店舗での支払い方法の実態についての調査分析結果を示す。なお、商品券での支払いも現金を使用しない支払い方法であるが、本調査での「キャッシュレス決済」には含んでいない。

4.1 店舗での支払い方法

店舗での支払い方法に関して「Q9 あなたがふだん、店舗での支払いの際に利用している支払い方法はどのようなものですか。以下の中であてはまるものをすべてお選びください。」と尋ねた。表 4.1.1 は「あてはまる」の該当率を示したものである。回答者全体では、「現金」（92.2%）の該当率が最も高く、次に「クレジットカード」（69.5%）、「カード型の電子マネー（Suica、nanaco カード、楽天 Edy など）」（47.0%）と続いた。性別では、「現金」に関しては女性（94.2%）の方が男性（90.5%）よりも有意に該当率が高かった。また、「商品券」に関しては該当率の差が大きく、女性が 29.7%であるのに対し、男性は 19.1%であった。年齢層別では、「現金」は 10 代の該当率が最も高く、95.6%であった。

次に、Q9 で現金・商品券以外の項目も選択していた人に対して（n=3061）、店舗での支払いで、現金及び商品券を除いて最もよく利用する支払方法を確認した。表 4.1.2 は、「Q9SQ1 あなたが、店舗での支払いの際に、現金や商品券を除いて、もっともよく利用している支払い方法はどのようなものですか。以下の中で、あてはまるものをひとつだけお選びください。」という質問に関して、「あてはまる」の回答の該当率を示したものである。全体では、「クレジットカード」（59.8%）の比率が最も高く、次いで「カード型の電子マネー（Suica、nanaco カード、楽天 Edy など）」（19.5%）の比率が高かった。また、「仮想通貨（ビットコインなど）」は該当率 0.0%であった。性別では、「クレジットカード」、「カード型の電子マネー」は女性の方が男性より有意に該当率が高かった。年齢層別では、「クレジットカード」は 60 代（69.6%）の該当率が最も高く、20 代より高い年齢層では 5 割を超えていた一方で、10 代では 8.1%と顕著に該当率が低かった。反対に、「QRコード決済（PayPay、LINE Pay など）」は 10 代の該当率が最も高く 35.1%、60 代の該当率が最も低く 4.0%であった。また、「クレジットカード」以外のすべての支払い方法において、10 代の利用が最も多いことも示された。

表 4.1.1 店舗での支払い方法（該当者率、MA）

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	3655	1794		1817	248	612	677	696	717	
現金	92.2%	90.5%	94.2%	***	95.6%	89.4%	89.4%	92.1%	94.1%	94.2%	***
クレジットカード	69.5%	68.5%	71.4%	*	8.9%	60.6%	69.3%	74.9%	80.2%	82.8%	***
プリペイドカード	11.7%	13.0%	10.3%	**	10.5%	7.8%	8.7%	9.2%	14.4%	18.2%	***
デビットカード	8.4%	11.4%	5.3%	***	10.5%	10.8%	8.4%	8.5%	8.8%	5.0%	**
カード型の電子マネー（Suica、nanacoカード、楽天Edyなど）	47.0%	45.8%	48.8%	†	33.9%	40.0%	41.5%	47.1%	53.4%	56.2%	***
非接触型モバイルアプリ決済（Apple Pay、おサイフケータイなど）	11.5%	16.1%	7.2%	***	9.3%	12.6%	11.4%	14.5%	12.3%	7.9%	**
QRコード決済（PayPay、LINE Payなど）	31.5%	33.9%	29.5%	*	31.5%	36.4%	35.9%	33.0%	31.5%	21.6%	***
仮想通貨（ビットコインなど）	0.8%	1.3%	0.3%	**	0.0%	1.8%	1.3%	1.1%	0.1%	0.1%	**
商品券	24.3%	19.1%	29.7%	***	5.6%	11.4%	21.9%	26.3%	26.6%	40.1%	***
その他	1.3%	1.6%	1.0%	n. s.	0.8%	1.1%	1.2%	1.4%	1.0%	1.8%	n. s.
店舗で支払いはしていない	2.0%	2.1%	1.5%	n. s.	3.2%	4.1%	2.5%	2.3%	0.4%	0.4%	***

※ χ^2 検定結果：***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05, n. s.:有意差なし
残差分析（5%水準、両側検定）の結果、有意に高いものを黒太字、有意に低いものを赤字で示す。

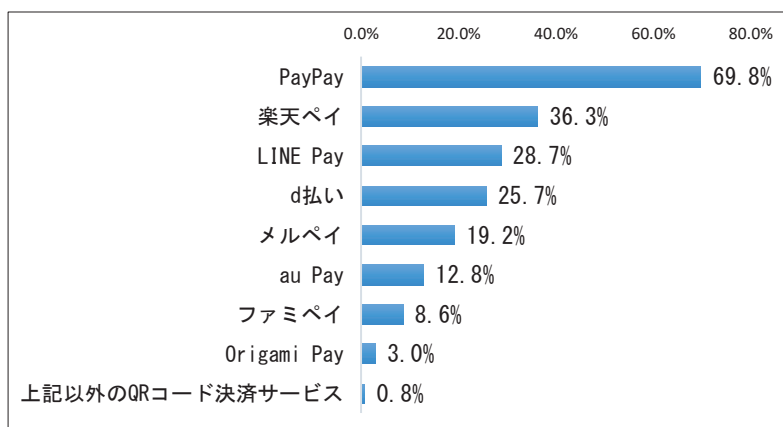
表 4.1.2 現金・商品券以外で店舗で最もよく利用する支払い方法（該当者率、SA）

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	3061	1490		1547	148	469	554	595	647	
クレジットカード	59.8%	57.2%	62.4%	***	8.1%	51.8%	61.7%	63.9%	62.4%	69.6%	***
プリペイドカード	2.0%	1.9%	1.9%		4.7%	2.6%	2.2%	0.7%	1.9%	2.0%	
デビットカード	3.6%	4.9%	2.2%		12.8%	5.5%	3.6%	2.5%	2.9%	1.5%	
カード型の電子マネー（Suica、nanacoカード、楽天Edyなど）	19.5%	18.6%	20.6%		32.4%	17.7%	15.3%	19.7%	19.9%	21.0%	
非接触型モバイルアプリ決済（Apple Pay、おサイフケータイなど）	2.6%	4.1%	1.2%		6.8%	3.4%	1.1%	3.0%	2.8%	1.9%	
QRコード決済（PayPay、LINE Payなど）	12.5%	13.2%	11.6%		35.1%	19.0%	16.1%	10.3%	10.0%	4.0%	
仮想通貨（ビットコインなど）	0.0%	0.0%	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	

※ χ^2 検定結果：***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05, n. s.:有意差なし
残差分析（5%水準、両側検定）の結果、有意に高いものを黒太字、有意に低いものを赤字で示す。
※分析母数はQ9で現金・商品券以外の項目も選択していた人（n=3061）

4.2 QRコード決済サービスの利用

Q9で「QRコード決済（PayPay、LINE Payなど）」を選択した人（n=1152）に対して、ふだん利用しているQR決済サービス(MA)を確認した。調査では、「Q9SQ2 以下のQRコード決済サービスの中で、ふだん利用しているサービスをすべてお選びください。」と尋ねた。図4.2.1は「あてはまる」の回答について該当率の高い順に示したものである。図の通り、「PayPay」の該当率が顕著に高く、69.8%に及んだ。以下、「楽天ペイ」（36.3%）、LINE Pay（28.7%）、d払い（25.7%）と続いた。



※分析母数はQ9で「QRコード決済」を選択した人 (n=1152)

図 4.2.1 利用している QR コード決済サービス (該当者率、MA)

表 4.2.1 最もよく利用している QR コード決済サービス (該当者率、SA)

	全体			χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	男性	女性		78	223	243	230	226	152	
PayPay	1152	608	536	n. s.	37.2%	47.5%	50.2%	55.2%	57.5%	60.5%	***
LINE Pay	6.7%	5.4%	8.2%		28.2%	10.8%	6.6%	2.2%	1.8%	3.9%	
楽天ペイ	16.8%	18.3%	15.3%		6.4%	17.9%	18.9%	20.9%	18.1%	9.2%	
メルペイ	4.3%	3.5%	5.0%		11.5%	7.2%	4.5%	2.6%	2.7%	0.7%	
Origami Pay	0.2%	0.2%	0.2%	n. s.	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%	***
d払い	13.1%	12.5%	13.8%		6.4%	9.0%	13.2%	16.5%	14.2%	15.8%	
au Pay	4.9%	4.6%	5.4%		6.4%	6.3%	5.8%	2.2%	3.5%	7.2%	
ファミペイ	0.9%	1.2%	0.6%		1.3%	0.4%	0.8%	0.0%	2.2%	0.7%	
上記以外のQRコード決済サービス	0.5%	0.5%	0.6%		2.6%	0.4%	0.0%	0.4%	0.0%	1.3%	

※ χ^2 検定結果：***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05, n. s.:有意差なし

残差分析 (5%水準、両側検定) の結果、有意に高いものを黒太字、有意に低いものを赤字で示す。

※分析母数はQ9で「QRコード決済」を選択した人 (n=1152)

また、同じ対象者 (n=1152) に対して、最もよく利用している QR 決済サービス (SA) を確認した。調査では、「Q9SQ3 以下の QR コード決済サービスの中で、もっともよく利用しているサービスをひとつだけお選びください。」と尋ね、その結果の該当率を示したのが表 4.2.1 である。全体では、該当率の上位 3 サービスは「PayPay」(52.6%)、「楽天ペイ」

(16.8%)、d 払い (13.1%) であった。性別では、有意差は見られなかった。年齢層別では、「PayPay」は 60 代で 60.5%、10 代では 37.2%であり、年齢層が高いほど該当率も有意に高かった。また、対象者全体では該当率が 1 割に満たなかった LINE Pay (6.7%) は、10 代においては 3 割弱 (28.2%) が利用していることが明らかになった。これは、10 代における LINE 利用率の高さに関係していると考えられる (SNS 利用率の詳細は「ネット社会のコミュニケーションを巡る諸問題」編の第 1 章を参照)。

表 4.2.2 QR コード決済サービスを利用しない理由 (該当者率、MA)

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	2503	1186		1281	170	389	434	466	491	
QRコード決済の仕組みを知らないため	16.1%	14.4%	17.6%	*	27.6%	18.3%	14.1%	9.7%	13.8%	20.3%	***
QRコード決済の不正利用が不安なため	16.5%	13.5%	19.6%	***	13.5%	15.2%	18.9%	15.9%	15.9%	17.7%	n. s.
QRコード決済利用に伴う情報漏洩が不安なため	13.3%	9.8%	16.7%	***	10.6%	11.6%	10.8%	13.5%	15.3%	15.2%	n. s.
QRコード決済利用だと利用履歴が残ってしまうため	3.6%	3.8%	3.5%	n. s.	2.9%	3.6%	2.8%	3.6%	3.7%	4.5%	n. s.
QRコード決済利用までの手続きがわからないため	7.0%	5.4%	8.7%	**	11.2%	9.3%	6.2%	4.3%	4.1%	9.8%	***
QRコード決済利用までの手続きが面倒なため	14.1%	12.4%	16.0%	**	17.1%	17.5%	12.2%	16.1%	11.2%	13.2%	*
QRコード決済を利用できる店舗が限定されているため	6.4%	5.5%	7.3%	†	9.4%	9.3%	3.9%	5.6%	6.1%	6.5%	*
QRコード決済にメリットを感じないため	21.0%	24.5%	18.2%	***	14.7%	16.5%	19.6%	21.2%	26.1%	22.6%	**
どのQRコード決済サービスを選択してよいかわからないため	8.0%	7.1%	9.0%	†	5.9%	8.5%	6.2%	8.4%	7.3%	9.8%	n. s.
QRコード決済利用に伴うアプリの容量・データ量に不安があるため	4.6%	3.9%	5.4%	†	4.7%	4.4%	4.4%	4.5%	5.5%	4.3%	n. s.
自分のスマートフォンがQRコード決済サービスに対応していないため	4.4%	5.0%	3.9%	n. s.	1.2%	1.5%	4.4%	4.7%	5.5%	6.1%	**
スマートフォンを買い替えた際にQRコード決済サービスが使用できなくなってしまう恐れがあるため	3.2%	3.5%	3.0%	n. s.	3.5%	2.6%	3.2%	3.9%	3.7%	2.7%	n. s.
QRコード決済サービスを使いすぎてしまう恐れがあるため	8.9%	7.2%	10.8%	**	12.4%	11.6%	8.3%	9.4%	8.1%	6.9%	n. s.
あてはまるものはない	32.2%	34.0%	29.7%	*	28.2%	35.2%	37.6%	32.6%	31.6%	27.5%	*

※ χ^2 検定結果 : ***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05, n. s. :有意差なし

残差分析 (5%水準、両側検定) の結果、有意に高いものを黒太字、有意に低いものを赤字で示す。

※分析母数は Q9 で「QR コード決済」を選択していない人 (n=2503)

次に、QR コード決済非利用者 2503 人 (Q9 で「QR コード決済 (PayPay、LINE Pay など)」を選択しなかった人) に対して、利用しない理由を確認した。調査では「Q9SQ4 あなたが QR コード決済サービスを利用してない理由として、下記の中であてはまるものをすべてお選びください。」と尋ねた。表 4.2.2 は「あてはまる」の該当率を示したものである。全体では、「あてはまるものはない」(32.2%) の該当率が最も高く、「QR コード決済にメリットを感じないため」(21.0%)、「QR コード決済の不正利用が不安なため」(16.5%) と続いた。性別では、「QR コード決済にメリットを感じないため」に関しては男性の方が有意に該当

率が高く、一方で、不正利用や情報漏洩にまつわる「不安」を伴う理由に関しては女性の方が有意に該当率が高かった。年齢層別では、「QRコード決済にメリットを感じないため」は50代(26.1%)、60代(22.6%)の年齢の高い層において該当率が高い一方で、10代(14.7%)、20代(16.5%)の若年層では該当率は低かった。また、若年層においては、「QRコード決済の仕組みを知らないため」、「QRコード決済利用までの手続きが面倒なため」、「QRコード決済サービスを使いすぎてしまう恐れがあるため」の該当率が比較的高く、メリットを感じていながらもQRコード決済の利用に至っていないことが示唆された。

4.3 支払い方法の嗜好（現金支払い・キャッシュレス決済）

これまで、店舗で利用している支払い方法についてみてきたが、ここでは、現金支払いとキャッシュレス決済（現金・商品券以外）のどちらの支払い方法を好むかについて確認する。調査では、「Q9SQ6 店舗での支払いの際、あなたは、現金での支払いと、キャッシュレス決済（現金や商品券以外での支払い）のどちらを好みますか。」と尋ねた。表4.3.1に示した通り、全体では「現金」が44.4%、「キャッシュレス決済（現金以外）」が55.6%で、キャッシュレス決済の方が好まれていることが明らかになった。「キャッシュレス決済（現金以外）」について、性別では男性58.3%、女性53.5%で男性の方が比率が高かった。年齢層別では、10代で32.3%、60代で65.0%であり、年齢層が高くなるにつれて比率も高く、年齢の高い層において好まれていることが示された。

表 4.3.1 現金支払いとキャッシュレス決済のどちらを好むか（該当者率）

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	3655	1794		1817	248	612	677	696	717	
現金	44.4%	41.7%	46.5%	**	67.7%	50.2%	45.5%	44.5%	39.2%	35.0%	***
キャッシュレス決済（現金以外）	55.6%	58.3%	53.5%		32.3%	49.8%	54.5%	55.5%	60.8%	65.0%	

※ χ^2 検定結果：***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05, n.s.:有意差なし

残差分析（5%水準、両側検定）の結果、有意に高いものを黒太字、有意に低いものを赤字で示す。

Q9SQ6で「現金」での支払いを好むと回答した人(n=1621)に対して、その理由を確認した。調査では、「Q9SSQ1 現金での支払いを好む理由として、あてはまるものをすべてお選びください。」と尋ねた。表4.3.2は「あてはまる」の該当率を示したものである。全体では、「お金を使いすぎてしまう恐れがあるため」が53.3%、「決済の不正利用が不安なため」が25.4%、「情報漏洩が不安なため」が24.2%と、キャッシュレス決済でのトラブル等を不安に思うが故の理由の該当率が高いことがわかった。性別では、「お金を使いすぎてしまう恐れがあるため」、「決済を利用できる店舗が限定されているため」については女性の方が有意に比率が高く、「メリットを感じないため」、「あてはまるものはない」については男性

の方が有意に比率が高かった。年齢層別では、「決済の不正利用が不安なため」、「情報漏洩が不安なため」、「利用履歴が残ってしまうため」に関しては年齢層の高い60代、50代において該当率が高く、10代、20代の若年層においては該当率が低かった。

表 4.3.2 現金支払いを好む理由（該当者率、MA）

n	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	1621	748	845		168	307	308	310	281	247	
お金を使いすぎてしまう恐れがあるため	53.3%	46.1%	59.9%	***	62.5%	52.1%	46.8%	50.3%	60.9%	51.8%	**
決済の不正利用が不安なため	25.4%	24.6%	25.8%	n. s.	17.3%	16.9%	24.7%	27.1%	26.7%	38.9%	***
情報漏洩が不安なため	24.2%	22.7%	25.8%	n. s.	13.7%	19.9%	23.4%	21.6%	26.0%	38.9%	***
利用履歴が残ってしまうため	10.5%	10.8%	10.1%	n. s.	4.8%	6.2%	10.7%	9.7%	11.7%	19.0%	***
決済の手順がわからないため	7.3%	6.6%	7.8%	n. s.	7.1%	9.8%	4.5%	5.5%	7.8%	9.3%	n. s.
手続きが面倒なため	19.5%	17.9%	20.9%	n. s.	32.7%	18.2%	14.6%	20.6%	19.2%	17.0%	***
決済を利用できる店舗が限定されているため	13.0%	11.2%	14.6%	*	10.7%	11.4%	12.3%	13.9%	15.7%	13.0%	n. s.
メリットを感じないため	15.1%	18.7%	12.0%	***	13.1%	13.4%	11.0%	15.5%	15.7%	22.7%	**
どの決済サービスを選択してよいかわからないため	7.6%	7.0%	7.9%	n. s.	11.3%	10.4%	4.9%	6.5%	7.8%	6.1%	*
あてはまるものはない	15.2%	17.4%	12.8%	**	11.3%	17.9%	20.1%	14.8%	11.4%	13.0%	*

※ χ^2 検定結果：***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05, n. s.:有意差なし

残差分析（5%水準、両側検定）の結果、有意に高いものを黒太字、有意に低いものを赤字で示す。

※分析母数はQ9SQ6で「現金」を選択した人（n=1621）

表 4.3.3 キャッシュレス決済を好む理由（該当者率、MA）

n	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	2034	1046	972		80	305	369	386	436	458	
支払いに時間がかからないため	55.8%	57.4%	54.0%	n. s.	73.8%	55.4%	50.1%	46.9%	55.7%	65.1%	***
一定期間の収支の管理ができるため	16.6%	17.2%	15.8%	n. s.	20.0%	15.4%	11.4%	11.7%	20.4%	21.6%	***
支払いの記録が残るため	28.5%	30.0%	26.9%	n. s.	32.5%	23.9%	18.2%	22.5%	30.7%	42.1%	***
割引やポイントがつくため	72.9%	69.7%	76.6%	***	68.8%	67.5%	72.1%	76.4%	75.5%	72.5%	n. s.
手元に現金を持たないで良いため	38.5%	38.4%	38.9%	n. s.	36.3%	31.5%	25.5%	34.7%	44.3%	52.0%	***
決済のタイミングを遅らせることができるため	8.9%	9.1%	8.7%	n. s.	5.0%	7.2%	5.1%	6.7%	10.8%	14.0%	***
手持ちのお金が足りなくなる心配がないため	19.5%	17.4%	21.9%	*	18.8%	11.1%	12.7%	15.8%	23.6%	29.9%	***
現金に対し不潔感があるため	5.5%	4.8%	6.4%	n. s.	5.0%	3.6%	4.9%	5.7%	6.4%	6.3%	n. s.
あてはまるものはない	4.4%	4.8%	3.8%	n. s.	6.3%	7.9%	6.2%	5.2%	2.1%	2.0%	***

※ χ^2 検定結果：***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05, n. s.:有意差なし

残差分析（5%水準、両側検定）の結果、有意に高いものを黒太字、有意に低いものを赤字で示す。

※分析母数はQ9SQ6で「キャッシュレス決済（現金以外）」を選択した人（n=2034）

次に、Q9SQ6で「キャッシュレス決済（現金以外）」を好むと回答した人（n=2034）を対象に、その理由を確認した。調査では、「Q9SSQ2 現金以外での支払いを好む理由として、あてはまるものをすべてお選びください。」と尋ね、表 4.3.2 に「あてはまる」の回答の該当率を示した。全体では、「割引やポイントがつくため」（72.9%）の該当率が最も高く、以下、「支払いに時間がかからないため」（55.8%）、「手元に現金を持たないで良いため」（38.5%）と続いた。性別では、「割引やポイントがつくため」は女性の方が男性よりも有意に該当率が高かった。年齢層別では、「支払いに時間がかからないため」は10代で最も比率が高く、「手元に現金を持たないで良いため」は60代の比率が最も高かった。また、収支の管理、支払いの記録を残す、決済のタイミングを遅らせることができるといった、支払いの管理に関係する項目は年齢層の高い50代、60代において比率が高いことが示された。

4.4 キャッシュレス決済の利用によるトラブル経験

既述の通り、キャッシュレス決済全体やQRコード決済サービスに関する不安・懸念によりQRコード決済サービスを利用しない、もしくは現金支払いを好むという傾向もみられたが（表 4.2.2、表 4.3.2を参照）、実際にキャッシュレス決済にまつわるトラブルは発生しているのだろうか。調査では、対象者全員（n=3655）に「Q9SQ5 あなたはキャッシュレス決済（現金や商品券以外の支払い方法）の利用でトラブルや困ったことを経験したことがありますか。」と尋ね、「経験がある」、「経験がない」の2件法で回答を求めた。表 4.4.1はトラブルの「経験がある」人の該当率を示したものである。トラブル経験者は全体の13.2%（483人）であった。性別では男性（14.7%、283人）の方が女性（11.7%、213人）よりも有意に多かった。年齢層別では、有意差はみられなかったが、40代において該当率が高い傾向がみられた。

表 4.4.1 キャッシュレス決済の利用によるトラブル経験

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	3655	1794		1817	248	612	677	696	717	
トラブル経験あり	13.2%	14.7%	11.7%	**	12.5%	11.8%	14.8%	15.7%	11.3%	12.8%	n. s.

※各属性(性別、年齢層)×「トラブル経験あり／経験なし」のクロス集計の χ^2 検定結果：***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05, n. s.:有意差なし

残差分析（5%水準、両側検定）の結果、有意に高いものを黒太字、有意に低いものを赤字で示す。

5. 信用格付けサービス

近年、日本でも「信用格付けサービス」の導入が進みつつある。2019年にはLINEの「LINE Score⁵⁾」(6月)、Yahoo! JAPANの「Yahoo! スコア⁶⁾」(7月)、NTTドコモの「ドコモ レンディングプラットフォーム⁷⁾」(8月)と、大手のICTプラットフォーム企業が相次いでサービスを開始した。サービス内容は各社で違いがあるが、顧客の属性とサービス利用履歴を組み合わせ、AIなどを活用しながら信用スコアを算出し、その情報を基に各種の優待サービスを提供する点で共通している。また、現時点では各社とも顧客が同意した場合のみ信用スコアの利用を行うとしており、顧客の意向やプライバシーに配慮したものとなっている。

一方、中国ではSNSなどのインターネット利用も含みつつ、官公庁や金融機関のデータなどを網羅した包括的なデータベースに基づく信用スコアで全国民を格付けする「社会信用システム」が導入されている。高スコアの人々は医療機関の受診、航空券や高速鉄道の予約、高級リゾートの利用、有利な不動産ローンや保険加入などで優遇を受けられるが、低スコアの人々にはそれらに制限が課されるといったことから、信用スコアが一種の社会的スティグマと化してしまっているかのような状況がある⁸⁾。これに対して日本の信用格付けサービスは、1) 基本的には当該企業グループが保有するデータに基づき、2) 利用は顧客の自由意思によるものであり、3) 信用スコアによってペナルティを課される性質のものではない、といった点で中国の社会信用システムとは大きな違いがあるが、監視社会化の懸念などと相まって今後人々の間で不安の対象となることも予想される。

そこで本調査では、導入が始まったばかりの信用格付けサービスを人々がどの程度認知しているのか、格付けにパーソナルデータが用いられることに賛否どのような意識を持っているのか尋ねることとした。ただし調査時点では信用格付けサービスへの社会的認知が不十分だと考えられたため、調査画面上で次のような事前説明文を回答者に提示したうえで質問を実施した。

事前説明文

「LINE スコア」のように、顧客のサービス利用に関する情報から「信用スコア」を算出して、金融・保険などの分野で商品の勧誘や優遇サービスの付与などに活用する、個人の格付け(スコアリング)の動きが進んでいます。これについて、以下の質問にお答えください。

⁵⁾ LINE 株式会社プレスリリース (19/6/27) <https://linecorp.com/ja/pr/news/ja/2019/2759> (最終アクセス 21/1/29)

⁶⁾ ヤフー株式会社プレスリリース (19/6/3) <https://about.yahoo.co.jp/pr/release/2019/06/03a/> (最終アクセス 21/1/29)

⁷⁾ 株式会社 NTT ドコモプレスリリース (19/8/29) https://www.nttdocomo.co.jp/info/news_release/2019/08/29_00.html (最終アクセス 21/1/29)

⁸⁾ 「社会信用システム」を紹介する記事の一例…NEWS ポストセブン (19/5/5) https://www.news-postseven.com/archives/20190505_1361436.html?DETAIL (最終アクセス 21/1/29)

5.1 信用格付けサービスの認知（Q25）

まず Q25 で、先ほどの事前説明文を前提に「このようなサービスの存在を知っていましたか。」と尋ねた。わずかでも知っていると回答した人は全体の **37.7%**に上り、性別では男性の、年齢層別では若年層の認知度がそれぞれ高かった。本調査が実施されたのは 2020 年 3 月であり、大手サービスのリリースから半年程度であることを考えると、思いのほか高い認知度と言えるのではないだろうか。

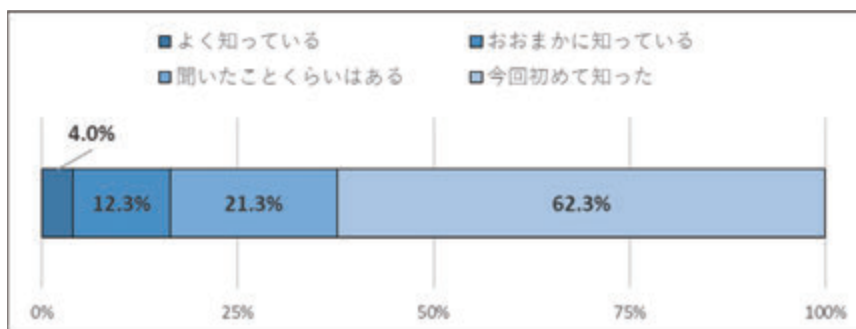


図 5.1.1 信用格付けサービスの認知（単純集計）

※図中の選択肢 4 件による SA 方式。

※質問対象は本調査の回答者全体（n=3,655）。本図も回答者全員を母数として集計した。

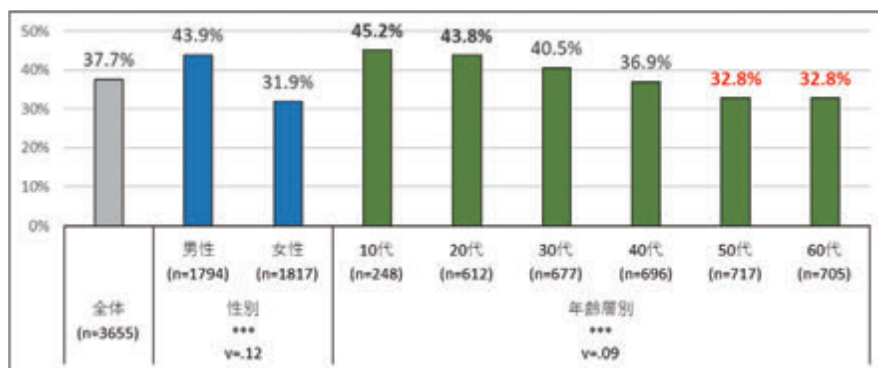


図 5.1.2 信用格付けサービスを知っている人の割合（性別・年齢層別比較）

※数値は「今回初めて知った」を除き、サービスを少しでも認知していた人の割合を表す。

※ χ^2 検定結果…*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, n. s. 有意な偏りなし

※年齢層別の比較では標準化残差±1.96（危険率 5%水準）を基準に残差分析を行った。黒太字は期待度数より「有意に高い」ことを、赤太字は期待度数より「有意に低い」ことを示す。

5.2 格付けにパーソナルデータを利用することへの賛否（Q26）

次に、格付けにパーソナルデータを利用することへの賛否を「あなたの個人情報こうしたサービスのために利用されることに、あなたは賛成ですか反対ですか。」と尋ねたところ、賛成したのは全体の 29.2%で**反対意見が多数派**となった。性別では男性の、年齢層別

では若年層の賛成割合が高い結果となった。

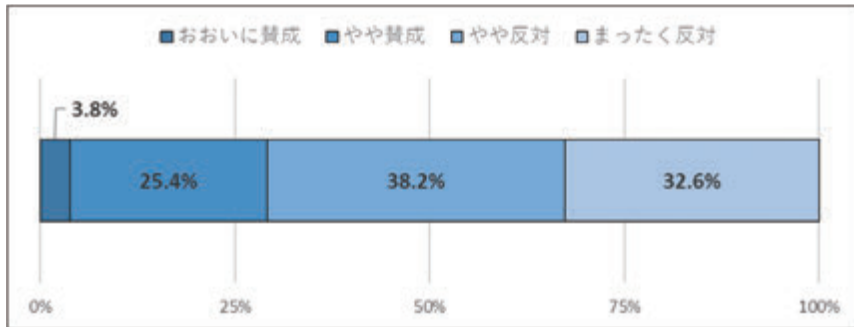


図 5.2.1 格付けにパーソナルデータを利用することへの賛否（単純集計）

※図中の選択肢 4 件による SA 方式。

※質問対象は本調査の回答者全体（n=3,655）。本図も回答者全員を母数として集計した。

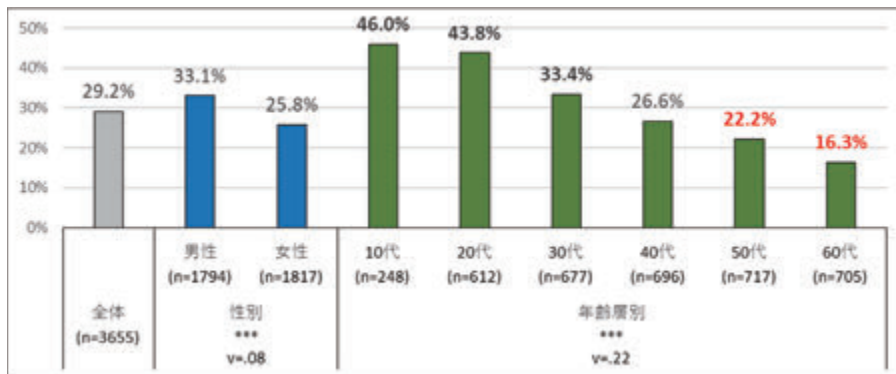


図 5.2.2 格付けへのパーソナルデータ利用に賛成する人の割合（性別・年齢層別比較）

※数値は「おおいに賛成」もしくは「やや賛成」に回答した人の割合を表す。

※ χ^2 検定結果…*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, n. s. 有意な偏りなし

※年齢層別の比較では標準化残差 ± 1.96 （危険率 5%水準）を基準に残差分析を行った。黒太字は期待度数より「有意に高い」ことを、赤太字は期待度数より「有意に低い」ことを示す。

賛成側の人にその理由を尋ねたところ、商品・サービスに関する有益な情報や購入・利用時の優遇を期待する意見（項目 1, 2）が多くあげられ、それ以外の項目も 20%以上の該当率となった（次頁の表 5.2.1）。ただ、性別・年齢層別比較では顕著な傾向はみられず、項目 1 で 10 代が高く、30 代・50 代が低い結果が見られるにとどまった。

反対する理由としては勧誘の煩わしさ（項目 1）や必要以上のパーソナルデータ利用への忌避感（項目 7）に多くの回答が集まり、格付けへの忌避（項目 3）や、格付けの主体・方法・結果への不安（項目 4～6）も 25%前後に上った（次頁の表 5.2.2）。格付けの方法などに対する不安を解消し、透明性を確保できるかが信用格付けサービスの今後にとって重要であることが示唆される。（本文は次々頁に続く）

表 5.2.1 格付けへのパーソナルデータ利用に賛成する理由

	1 が有益 な商品 と期待 できる 情報	2 待てる 商品に サスペ ンズ期 間に入 ると利 用	3 自分の 評価の 信用度 が目ま に見え るから 形	4 なる、 巡る、 から巡 るから	5 使し業 方者に は知ら れてい ないか らよう な	6 あては まるも のはい ない
全体 (n=1067)	35.4%	31.7%	22.0%	20.8%	25.1%	17.7%
性別						
男性 (n=593)	37.4%	32.6%	24.1%	20.9%	23.8%	17.4%
女性 (n=468)	33.3%	31.0%	19.4%	20.7%	26.7%	17.7%
性別での χ^2 検定結果 CramerのV	n.s. 0.04	n.s. 0.02	n.s. 0.06	n.s. 0.00	n.s. 0.03	n.s. 0.00
年齢層						
10代 (n=114)	47.4%	34.2%	17.5%	18.4%	26.3%	17.5%
20代 (n=268)	40.3%	35.1%	25.4%	21.6%	20.5%	18.7%
30代 (n=226)	29.7%	32.3%	23.0%	21.7%	24.3%	15.9%
40代 (n=185)	37.3%	27.0%	19.5%	22.7%	28.7%	21.6%
50代 (n=159)	24.5%	30.2%	22.6%	22.0%	27.0%	19.5%
60代 (n=115)	35.7%	29.6%	20.0%	14.8%	27.8%	10.4%
年齢層別の χ^2 検定結果 CramerのV	*** 0.14	n.s. 0.06	n.s. 0.06	n.s. 0.06	n.s. 0.07	n.s. 0.08

※表頭の項目 1~6 について MA 方式で尋ねた。なお項目 6 は排他選択肢である。
 ※質問対象は Q26 で「おおいに賛成」もしくは「やや賛成」に回答した人 (n=1,067)。
 ※ χ^2 検定結果…*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, n.s. 有意な偏りなし
 ※Cramer の V については 0.10 (効果量少程度) 以上のものを太字で表示した。
 ※年齢層別の比較では標準化残差±1.96 (危険率 5%水準) を基準に残差分析を行った。黒太字は期待度数より「有意に高い」ことを、赤太字は期待度数より「有意に低い」ことを示す。

表 5.2.2 格付けへのパーソナルデータ利用に反対する理由

	1 余の思 考が商 品の増 えにサ スペン ズ期間 に関し ない	2 から商 品にサ スペン ズ期間 に入ら ない	3 自分の 信用の 度は嫌 いから で	4 格付け の方法 が仕組 み	5 用格付 けする 業者が 信	6 も付け しにさ ついで まつた か格	7 る以上 の個人 情報に おとし やされ ない	8 <自分 の信用 度が高 い	9 あては まるも のはい ない
全体 (n=2588)	47.9%	13.0%	23.4%	26.6%	26.2%	22.0%	42.4%	8.0%	20.2%
性別									
男性 (n=1201)	43.6%	14.6%	22.7%	23.9%	29.3%	21.9%	38.6%	10.2%	23.4%
女性 (n=1349)	52.4%	11.5%	24.2%	29.3%	23.7%	22.5%	46.2%	6.2%	16.3%
性別での χ^2 検定結果 CramerのV	*** 0.09	*	n.s. 0.02	**	**	n.s. 0.01	***	***	***
年齢層									
10代 (n=134)	45.5%	12.7%	37.3%	30.6%	20.2%	16.4%	35.1%	9.7%	17.9%
20代 (n=344)	41.6%	11.9%	20.4%	20.6%	19.2%	17.7%	33.4%	8.4%	25.0%
30代 (n=451)	46.1%	16.0%	22.2%	22.4%	24.8%	17.7%	37.0%	10.9%	22.4%
40代 (n=511)	46.4%	12.7%	23.9%	22.9%	26.4%	19.8%	40.5%	8.8%	21.9%
50代 (n=558)	50.4%	12.7%	19.0%	27.4%	27.8%	26.0%	43.4%	7.4%	20.3%
60代 (n=590)	52.5%	11.9%	26.6%	34.6%	31.2%	27.3%	54.1%	5.3%	14.8%
年齢層別の χ^2 検定結果 CramerのV	*	n.s. 0.04	*** 0.10	*** 0.12	**	*** 0.09	*** 0.10	*** 0.14	*

※表頭の項目 1~9 について MA 方式で尋ねた。なお項目 9 は排他選択肢である。
 ※質問対象は Q26 で「やや反対」もしくは「まったく反対」に回答した人 (n=2,588)。

性別比較では項目によって傾向に違いが見られ、項目 1, 4, 7 は女性が有意に高い一方、項目 2, 5, 8 では男性が有意に高かった。年齢層別比較では項目 2 を除いて顕著な違いが見られ、特に項目 1 および 3~7 で 60 代の該当率が有意に高い結果が注目される。一般に高年齢層は新規サービスへの適応に困難を感じる人が多いと考えられることから、信用格付けサービスに対しても不安感が特に高く出たものと思われる。

5.3 信用格付けサービスへの登録状況と今後の利用意向 (Q27)

最後に「信用格付けサービスを導入する企業では、サービス対象になるか否かはそれぞれの顧客の意思にゆだねていますが、あなたは何らかの信用格付けサービスに登録していますか。」との質問文で、信用格付けサービスに現在登録している人の割合を調べた。

回答者全体では登録している人の割合は 4.1%(実人数では 148 人)であった(図 5.3.1)。サービスを少しでも知っていた人が回答者全体の 37.7%であったことを考えると、そのうち 9 人に 1 人程度しか実際には利用していないことになる。登場からそれほど時間を経えていなかった調査時点ではやむを得ない結果と言えよう。本結果だけで多い少ないを論じるよりは、今後同様の調査が行われた際に参考とすべき数字だと思われる。

性別比較では男性の、年齢層別比較では 20 代を中心とした若年層の登録割合が高い結果が見られた。

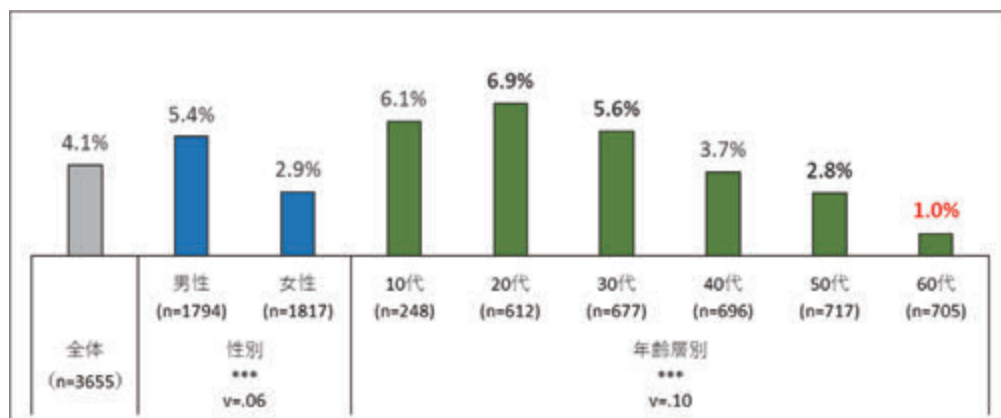


図 5.3.1 信用格付けサービスに現在登録している人の割合

※「登録している」「登録していない」の二択での SA 方式。質問対象は本調査の回答者全体 (n=3,655)。
 ※ χ^2 検定結果…*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, n. s. 有意な偏りなし
 ※年齢層別の比較では標準化残差 ± 1.96 (危険率 5%水準) を基準に残差分析を行った。黒太字は期待度数より「有意に高い」ことを、赤太字は期待度数より「有意に低い」ことを示す。

現在登録している人に対して「これからも信用格付けサービスを利用したいと思いますか」と尋ねたところ、あわせて 82.4%が「利用したい」と回答した(図 5.3.2)。現在登録

している人の多くが現状のサービスに概ね満足している様子がうかがわれる。

男女別では割合の差は見られなかったが、年齢層別では 60 代で特に今後の利用意向が低い結果が見られ、年齢層によっては適応の難しい面があることもうかがわれた。

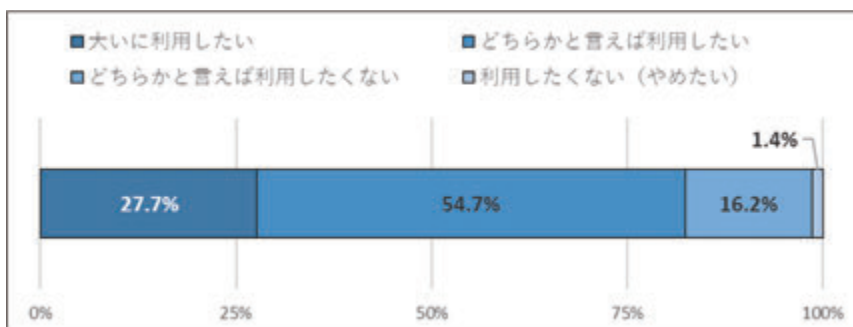


図 5.3.2 今後の利用意向（現在登録している人，n=148）

※図中の選択肢 4 件による SA 方式。質問対象は現在信用格付けサービスに登録している人（n=148）。

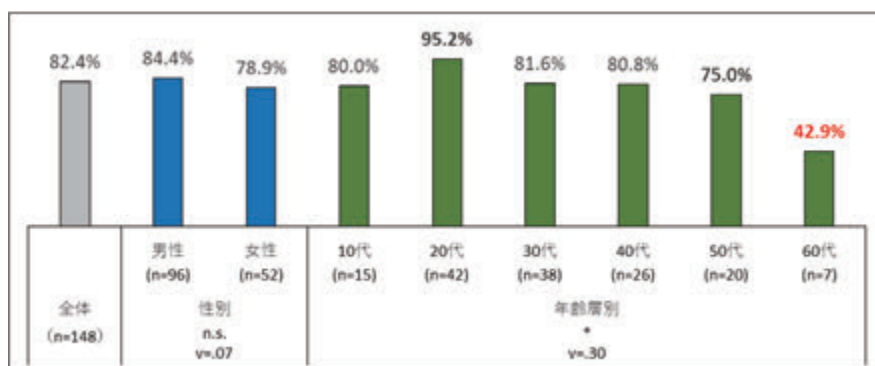


図 5.3.3 今後「利用したい」と考える人の割合（現在登録している人，n=148）

※数値は「おおいに利用したい」もしくは「どちらかと言えば利用したい」に回答した人の割合を表す。
 ※期待度数の少ないセルが多いため Fisher の正確検定を行った… * $p < .05$, n. s. 有意な偏りなし。
 ※年齢層別の比較では標準化残差 ± 1.96 (危険率 5%水準) を基準に残差分析を行った。黒太字は期待度数より「有意に高い」ことを、赤太字は期待度数より「有意に低い」ことを示す。

現在登録していない人にも「今後、信用格付けサービスを利用したいと思いますか。」と尋ねたところ、こちらでは「利用したくない」の側に回答した人が合わせて 86.6% 以上、「利用したい」と答えた人は少数派にとどまった。

性別では男性の、年齢層別では若年層の利用意向が高い結果が見られ、逆に 50 代・60 代では利用意向が顕著に低かった。現状ではパーソナルデータの収集・活用を伴うサービスは若年層の利用が中心なこともあって、かつてないサービスの登場に対する中高年層の不安感・警戒感はやはり根強いものがあると思われる。しかし少子高齢化の中でサ

ービス人口の裾野を広げようとするならば、これら中高年層にどう訴求するかも問われることになるだろう。

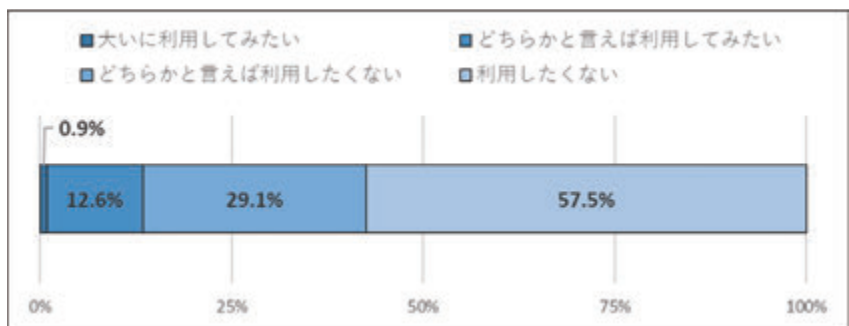


図 5.3.4 今後の利用意向（現在登録していない人，n=3507）

※図中の選択肢 4 件による SA 方式。質問対象は現在信用格付けサービスに登録していない人(n=3,507)。

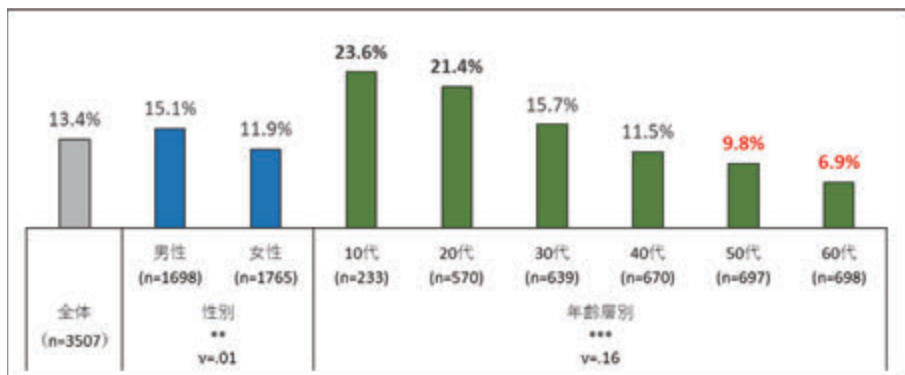


図 5.3.5 今後「利用したい」と考える人の割合（現在登録していない人，n=3507）

※数値は「おおいに利用してみたい」「どちらかと言えば利用してみたい」に回答した人の割合を表す。

※ χ^2 検定結果…*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, n.s. 有意な偏りなし

※年齢層別の比較では標準化残差±1.96（危険率5%水準）を基準に残差分析を行った。黒太字は期待度数より「有意に高い」ことを、赤太字は期待度数より「有意に低い」ことを示す。

6. ソーシャルメディア利用とプライバシー意識

LINE、Twitterなどの主要なSNSおよびYouTubeの利用頻度について、「Q19 あなたは現在、次のアプリをどのくらいの頻度で利用しますか」の設問により、LINE、Twitter、Facebook、LinkedIn、Instagram、TikTok、Pinterest、TwitCasting、YouTubeのそれぞれの利用者を選別した。本章では、これらのソーシャルメディア利用者の、情報公開設定および公開意識について概観する。

6.1 ソーシャルメディアの公開範囲設定

ソーシャルメディアの公開範囲設定について、「Q19 であなたが利用していると答えたアプリについて、投稿・コメント等の基本的な公開範囲はどう設定していますか。それぞれについてあてはまるものをお選びください。複数のアカウントをお持ちの場合は、もっともよく利用するアカウントについてお答えください」の設問に対し、「すべてのユーザーに公開」「友だち・フォロワーなどに限定して公開」「非公開」「設定したかどうかわからない」「アカウントを持っていないので設定もしていない」の選択肢により回答を得た。それぞれのアプリに関する設定の該当率を表6.1.1に示す。

LINEは「友だち・フォロワーなどに限定して公開」が39.3%と最も高く、「すべてのユーザーに公開」は13.9%であった。Twitterは「すべてのユーザーに公開」が41.4%と最も高く、「友だち・フォロワーなどに限定して公開」は25.4%であった。Facebookは「友だち・フォロワーなどに限定して公開」が46.0%と最も高く、「すべてのユーザーに公開」は22.5%であった。Instagramは「すべてのユーザーに公開」が33.6%、「友だち・フォロワーなどに限定して公開」が31.4%と同程度であった。YouTubeは「すべてのユーザーに公開」が17.1%、「友だち・フォロワーなどに限定して公開」が8.3%であった。

表 6.1.1 投稿・コメント等の基本的な公開範囲設定（単位：％）

	n	すべてのユーザーに公開	友だち・フォロワーなどに限定して公開	非公開	設定したかどうかわからない	アカウントを持っていないので設定もしていない
(1) LINE(ライン) ※タイムラインの機能	2545	13.9	39.3	23.0	18.3	5.6
(2) Twitter(ツイッター)	1714	41.4	25.4	17.2	8.3	7.7
(3) Facebook(フェイスブック)	1162	22.5	46.0	15.5	9.0	7.0
(4) LinkedIn(リンクイン)	133	25.6	30.8	17.3	16.5	9.8
(5) Instagram(インスタグラム)	1176	33.6	31.4	16.8	9.7	8.5
(6) TikTok(ティックトック)	255	25.9	28.6	22.0	13.3	10.2
(7) Pinterest(ピンタレスト)	215	28.4	16.7	20.0	22.3	12.6
(8) TwitCasting(ツイキャス)	163	30.7	20.9	17.8	18.4	12.3
(9) YouTube(ユーチューブ)	2506	17.1	8.3	23.8	21.3	29.4

※数値は該当者率

表 6.1.2 に、性別、年齢層別の限定公開設定率（「友だち・フォロワーなどに限定して公開」を選択した率）を示す。

LINE の限定公開設定者は、性別では女性が 41.2%と有意に高かった。年齢層別では有意な差は見られなかった。Twitter の限定公開設定者は、性別に有意差はなく、年齢層別では 20 代が 30.8%と有意に高かった。Facebook の限定公開設定者は、性別では女性が 50.2%と有意に高かった。年齢層別では 30 代が 54.1%と最も高く、10 代が 21.2%と最も低かった。Instagram の限定公開設定者は、性別に有意差はなく、年齢層別では 20 代が 35.9%と最も高く、40 代が 20.8%と最も低かった。YouTube の限定公開設定者は、性別では男性が 9.8%と高く、年齢層別では 30 代が 11.8%と高く、60 代が 5.1%と低かった。

表 6.1.2 投稿・コメント等の限定公開設定率

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
LINE(ライン)※タイムラインの機能 n 2545	39.3%	37.2%	41.2%	*	41.5%	40.7%	38.1%	35.9%	40.1%	40.6%	n.s.
Twitter(ツイッター) n 1714	25.4%	23.9%	27.4%	n.s.	22.3%	30.8%	24.0%	21.2%	23.5%	27.3%	*
Facebook(フェイスブック) n 1162	46.0%	42.5%	50.2%	**	21.2%	44.2%	54.1%	45.1%	46.8%	45.1%	**
LinkedIn(リンクトイン) n 133	30.8%	31.8%	28.9%	n.s.	11.1%	31.4%	36.8%	25.0%	22.2%	50.0%	n.s.
Instagram(インスタグラム) n 1176	31.4%	28.7%	33.3%	n.s.	31.9%	35.9%	34.5%	20.8%	30.4%	29.5%	*
TikTok(ティックトック) n 255	28.6%	32.8%	23.7%	n.s.	15.4%	29.0%	40.4%	34.4%	26.3%	30.8%	n.s.
Pinterest(ピンタレスト) n 215	16.7%	24.8%	9.2%	**	8.3%	14.0%	27.3%	17.9%	15.0%	5.0%	n.s.
TwitCasting(ツイキャスト) n 163	20.9%	21.9%	19.7%	n.s.	6.3%	20.8%	31.0%	21.7%	27.3%	0.0%	n.s.
YouTube(ユーチューブ) n 2506	8.3%	9.8%	6.8%	**	8.2%	9.0%	11.8%	6.3%	8.9%	5.1%	**

※数値は限定公開設定への該当者率，*：p<0.05，**：p<0.01，n.s.：有意差なし，黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す（5%水準、両側検定）。

6.2 ソーシャルメディアの自動検索機能の利用

ソーシャルメディアの、同じアプリを利用している知り合いを自動検索する機能の利用について、「最近のアプリでは、利用者の携帯電話・スマートフォンの電話帳から電話番号やメールアドレスを取得して、同じアプリを利用している知り合いを自動検索する機能が備わっています。Q19 であなたが利用していると答えたアプリであなたはこのような機能を使っていますか。使っているものがあればいくつでもお選びください」の設問により回答を得た。それぞれのアプリに関する設定の該当率を表 6.2.1 に示す。

LINEの自動検索機能の利用者は、アプリ利用者の41.7%であり、性別では男性が47.2%と有意に高かった。年齢層別では有意な差は見られず、60代でも40.8%と高水準であった。Twitterの自動検索機能の利用者は、アプリ利用者の14.7%であり、性別では男性が16.7%と高く、年齢層別では20代が20.0%と最も高かった。Facebookの自動検索機能の利用者は、アプリ利用者の22.0%であり、性別、年齢層別で有意差は見られなかった。Instagramの自動検索機能の利用者は、アプリ利用者の15.6%であり、性別、年齢層別で有意差は見られなかった。

YouTubeの自動検索機能の利用者は、アプリ利用者の7.3%であり、性別では男性が9.1%と高く、年齢層別では30代が9.7%と高く、次いで20代が9.4%であった。

表6.2.1のいずれのアプリでも自動検索機能を使っていないのは、いずれかのアプリの利用者(n=3,141)の44.6%であり、性別に有意差は見られなかった。年齢層別には60代が49.0%と最も高く、20代が38.3%と最も低かった。また、全体の18.1%は「使っているかどうかわからない」と回答した。

表 6.2.1 ソーシャルメディアの、知り合いの自動検索機能の利用者率

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
LINE(ライン)	41.7%	47.2%	37.3%	***	40.7%	44.7%	45.5%	39.7%	37.2%	40.8%	n.s.
n	2545	1168	1355		236	541	483	459	444	382	
Twitter(ツイッター)	14.7%	16.7%	12.8%	*	17.2%	20.0%	15.0%	12.3%	9.5%	8.7%	***
n	1714	875	820		215	461	333	269	264	172	
Facebook(フェイスブック)	22.0%	24.0%	19.8%	n.s.	21.2%	26.2%	23.1%	19.6%	20.6%	20.5%	n.s.
n	1162	650	504		52	233	229	235	218	195	
LinkedIn(リンクドイン)	20.3%	13.6%	33.3%	**	22.2%	20.0%	23.7%	25.0%	0.0%	10.0%	n.s.
n	133	88	45		9	35	38	32	9	10	
Instagram(インスタグラム)	15.6%	16.8%	14.9%	n.s.	19.3%	17.9%	16.2%	13.0%	11.2%	11.4%	n.s.
n	1176	494	672		166	340	229	192	161	88	
TikTok(ティックトック)	14.9%	13.9%	16.1%	n.s.	12.3%	18.8%	14.0%	25.0%	0.0%	7.7%	n.s.
n	255	137	118		65	69	57	32	19	13	
Pinterest(ピンタレスト)	9.3%	10.5%	8.3%	n.s.	4.2%	10.5%	10.9%	15.4%	5.0%	0.0%	n.s.
n	215	105	109		24	57	55	39	20	20	
TwitCasting(ツイキャス)	11.7%	10.4%	13.6%	n.s.	0.0%	11.3%	11.9%	30.4%	9.1%	0.0%	*
n	163	96	66		32	53	42	23	11	2	
YouTube(ユーチューブ)	7.3%	9.1%	5.4%	***	7.7%	9.4%	9.7%	7.1%	4.6%	5.1%	*
n	2506	1292	1195		233	502	476	462	438	395	
上記のどのアプリでも、その機能は使っていない	44.6%	43.9%	45.1%	n.s.	43.8%	38.3%	41.3%	47.2%	48.0%	49.0%	**
n	3141	1541	1571		242	575	603	587	589	545	
使っているかどうかわからない	18.1%	16.2%	19.8%	*	14.0%	15.8%	18.6%	19.4%	19.9%	18.3%	n.s.
n	3141	1541	1571		242	575	603	587	589	545	

※割合は自動検索機能の利用者率、nは各アプリの利用者数(「その機能は使っていない」「使っているかどうかわからない」においてはいずれかのアプリの利用者数)、*:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001, n.s.:有意差なし、黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す(5%水準、両側検定)。

6.3 ソーシャルメディアによる個人的情報の公開

ソーシャルメディアによる個人情報やプライバシー、内面に関する情報の公開状況について、「Q19 であなたが利用していると答えたアプリ（LINE を除く）で、次のようなことはどのくらいありますか。お使いのアプリ全体を通じての状況をお答えください。なお「投稿する」は、Twitter における「リツイート」のような、他人の投稿を再投稿することも含めてお考えください」の設問に対し、「よくある」「たまにある」「あまりない」「まったくない」の4件法により回答を得た。性別、年齢層別の該当率（「よくある」または「たまにある」を選択した率）を表 6.3.1 に示す。

プライバシー情報の投稿として、「家族や友人・知人が写った写真・動画を投稿する」には 18.2% が該当し、性別では女性が 20.1% と高く、年齢層別では 10 代が 29.0%、20 代が 28.1% と高かった。「自宅の様子や場所が分かるような写真・動画を投稿する」には 12.1% が該当し、性別では男性が 13.4% と高く、年齢層別では 30 代が 19.4%、20 代が 18.3% と高かった。「外出先（学校・職場など普段の生活の場も含む）が分かるような写真・動画を投稿する」には 18.5% が該当し、性別に差はなく、年齢層別では 10 代が 30.7%、20 代が 29.0% と高かった。「自分の個人情報を含むメッセージを投稿する」には 10.5% が該当し、性別に差はなく、年齢層別では 10 代が 17.0%、20 代が 15.6% と高かった。「家族や友人・知人の個人情報を含むメッセージを投稿する」には 9.3% が該当し、性別に差はなく、年齢層別では 20 代が 14.2%、30 代が 13.1% と高かった。「個人を特定できない範囲で、自分のプライベートに関するメッセージを投稿する」には 22.1% が該当し、性別では女性が 24.0% と高く、年齢層別では 10 代が 41.1%、20 代が 34.8% と高かった。「個人を特定できない範囲で、家族や友人・知人のプライベートに関するメッセージを投稿する」には 15.5% が該当し、性別では女性が 16.8% と高く、年齢層別では 10 代が 27.0%、20 代が 23.5% と高かった。「自分について、身近な人には知られたくない内容のメッセージを投稿する」には 10.6% が該当し、性別に差はなく、年齢層別では 10 代が 20.7%、20 代が 17.0%、30 代が 15.0% と高かった。「家族や友人・知人の秘密を暴露するようなメッセージを投稿する」には 7.4% が該当し、性別では男性が 8.7% と高く、年齢層別では 20 代が 12.9%、30 代が 10.9% と高かった。

主張や感情に関する投稿として、「政治的な主義主張に関するメッセージを投稿する」には 10.2% が該当し、性別では男性が 12.7% と高く、年齢層別では 20 代が 14.5% と高かった。「怒りや不平不満の感情がこもったメッセージを投稿する」には 11.3% が該当し、性別に差はなく、年齢層別では 20 代が 19.2%、10 代が 17.8% と高かった。「楽しみや喜びの感情がこもったメッセージを投稿する」には 23.8% が該当し、性別では女性が 27.3% と高く、年齢層別では 10 代が 46.9%、20 代が 34.8% と高かった。

表 6.3.1 ソーシャルメディアによる個人的情報の投稿への該当率

	全体	男性	女性	X ² 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	X ² 検定
	n	2794	1406		1364	241	558	541	513	498	
家族や友人・知人が写った写真・動画を投稿する	18.2%	16.4%	20.1%	*	29.0%	28.1%	20.5%	13.5%	11.6%	9.9%	***
自宅の様子や場所が分かるような写真・動画を投稿する	12.1%	13.4%	10.6%	*	13.7%	18.3%	19.4%	9.2%	6.0%	5.0%	***
外出先(学校・職場など普段の生活の場も含む)が分かるような写真・動画を投稿する	18.5%	18.2%	18.5%	n.s.	30.7%	29.0%	19.2%	14.4%	12.7%	9.3%	***
自分の個人情報を含むメッセージを投稿する	10.5%	11.0%	9.6%	n.s.	17.0%	15.6%	12.0%	8.0%	5.6%	6.8%	***
家族や友人・知人の個人情報を含むメッセージを投稿する	9.3%	9.9%	8.6%	n.s.	12.4%	14.2%	13.1%	7.6%	4.2%	4.5%	***
個人を特定できない範囲で、自分のプライベートに関するメッセージを投稿する	22.1%	20.0%	24.0%	*	41.1%	34.8%	22.6%	16.8%	14.1%	10.4%	***
個人を特定できない範囲で、家族や友人・知人のプライベートに関するメッセージを投稿する	15.5%	14.0%	16.8%	*	27.0%	23.5%	18.1%	10.3%	10.0%	7.9%	***
自分について、身近な人には知られたくない内容のメッセージを投稿する	10.6%	10.3%	10.6%	n.s.	20.7%	17.0%	15.0%	7.8%	3.4%	3.2%	***
家族や友人・知人の秘密を暴露するようなメッセージを投稿する	7.4%	8.7%	5.9%	**	8.7%	12.9%	10.9%	6.0%	2.2%	2.9%	***
政治的な主義主張に関するメッセージを投稿する	10.2%	12.7%	7.4%	***	12.4%	14.5%	11.6%	9.6%	6.2%	6.8%	***
自分の投稿に対して、非難や誹謗中傷のコメントがつく	6.9%	7.9%	5.9%	*	7.5%	11.5%	10.2%	6.6%	2.4%	2.5%	***
IDなどを教えていない友人・知人から友だち申請がくる	15.8%	15.1%	16.6%	n.s.	26.1%	21.5%	16.3%	11.5%	12.2%	11.3%	***
投稿内容から、見知らぬ人々に自分の素性を知られてしまう(いわゆる「身バレ」)	7.3%	8.4%	6.0%	*	11.6%	10.9%	10.5%	5.3%	3.2%	3.2%	***
投稿内容から、家族や友人・知人に自分の居場所や行動を知られてしまう	8.6%	10.3%	6.7%	**	11.6%	13.3%	11.3%	7.0%	5.4%	2.9%	***
怒りや不平不満の感情がこもったメッセージを投稿する	11.3%	11.3%	11.1%	n.s.	17.8%	19.2%	13.1%	8.6%	5.4%	5.2%	***
楽しみや喜びの感情がこもったメッセージを投稿する	23.8%	20.3%	27.3%	***	46.9%	34.8%	25.3%	17.5%	15.9%	11.5%	***
授業中・仕事中の自分やその場の様子を写した写真・動画を投稿する	7.2%	8.0%	6.0%	*	12.4%	11.5%	10.4%	6.4%	1.8%	1.8%	***
自分が属する学校や職場などの秘密にかかわるメッセージ・写真・動画を投稿する	6.9%	8.1%	5.6%	*	12.0%	10.6%	10.7%	6.8%	1.6%	0.9%	***

※数値は該当者率、*:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001, n.s.:有意差なし、黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す(5%水準、両側検定)。

学業や仕事に関する投稿として、「授業中・仕事中の自分やその場の様子を写した写真・動画を投稿する」には7.2%が該当し、性別では男性が8.0%と高く、年齢層別では10代が12.4%、20代が11.5%、30代が10.4%と高かった。「自分が属する学校や職場などの秘密にかかわるメッセージ・写真・動画を投稿する」には6.9%が該当し、性別では男性が8.1%と高く、年齢層別では10代が12.0%、30代が10.7%、20代が10.6%と高かった。

情報流出に関する経験として、「IDなどを教えていない友人・知人から友だち申請がくる」には15.8%が該当し、性別に差はなく、年齢層別では10代が26.1%、20代が21.5%と高かった。「投稿内容から、見知らぬ人々に自分の素性を知られてしまう（いわゆる「身バレ」）」には7.3%が該当し、性別では男性が8.4%と高く、年齢層別では10代が11.6%、20代が10.9%、30代が10.5%と高かった。「投稿内容から、家族や友人・知人に自分の居場所や行動を知られてしまう」には8.6%が該当し、性別では男性が10.3%と高く、年齢層別では20代が13.3%、30代が11.3%と高かった。

誹謗中傷被害の経験として、「自分の投稿に対して、非難や誹謗中傷のコメントがつく」には6.9%が該当し、性別では男性が7.9%と高く、年齢層別では20代が11.5%、30代が10.2%と高かった。

全体として、10代から30代までの該当率が高く、40代から60代までの該当率は低かった。また、就業形態別に見ると（表6.3.2）、ほとんどの項目で学生・生徒が最も高い該当率となり、次いでフルタイムであった。パートタイム・アルバイト、専業主婦（夫）、無職では、比較的低い該当率となった。特に、「自分が属する学校や職場などの秘密にかかわるメッセージ・写真・動画を投稿する」についてフルタイムの8.4%が該当すると回答しており、SNS投稿による情報流出に対しては各組織で何らかの取り組みが必要であろう。

表 6.3.2 就業形態別の、ソーシャルメディアによる個人的情報の投稿への該当率

	フルタイム	パートタイム	専業主婦(夫)	学生・生徒	無職	χ ² 検定
	n 1310	441	398	325	320	
家族や友人・知人が写った写真・動画を投稿する	20.4%	14.5%	17.1%	29.2%	4.7%	***
自宅の様子や場所が分かるような写真・動画を投稿する	15.3%	8.8%	10.1%	15.4%	3.1%	***
外出先(学校・職場など普段の生活の場も含む)が分かるような写真・動画を投稿する	20.2%	14.3%	14.3%	32.6%	8.8%	***
自分の個人情報を含むメッセージを投稿する	12.1%	7.9%	7.8%	16.9%	4.1%	***
家族や友人・知人の個人情報を含むメッセージを投稿する	11.6%	6.3%	7.0%	12.6%	3.4%	***
個人を特定できない範囲で、自分のプライベートに関するメッセージを投稿する	22.1%	18.1%	16.3%	40.9%	15.3%	***
個人を特定できない範囲で、家族や友人・知人のプライベートに関するメッセージを投稿する	16.4%	11.1%	13.6%	26.5%	8.8%	***
自分について、身近な人には知られたくない内容のメッセージを投稿する	11.6%	8.4%	6.3%	19.7%	5.9%	***
家族や友人・知人の秘密を暴露するようなメッセージを投稿する	10.1%	3.9%	4.5%	11.1%	1.3%	***
政治的な主義主張に関するメッセージを投稿する	12.5%	7.0%	5.5%	14.5%	6.3%	***
自分の投稿に対して、非難や誹謗中傷のコメントがつく	8.5%	5.9%	5.0%	8.3%	2.8%	**
IDなどを教えていない友人・知人から友だち申請がくる	15.4%	13.2%	15.1%	27.7%	9.7%	***
投稿内容から、見知らぬ人々に自分の素性を知られてしまう(いわゆる「身バレ」)	8.5%	4.8%	5.0%	12.3%	3.4%	***
投稿内容から、家族や友人・知人に自分の居場所や行動を知られてしまう	10.9%	5.9%	4.5%	12.9%	3.1%	***
怒りや不平不満の感情がこもったメッセージを投稿する	12.6%	7.0%	8.5%	18.5%	7.8%	***
楽しみや喜びの感情がこもったメッセージを投稿する	22.5%	20.4%	19.3%	44.0%	18.4%	***
授業中・仕事中の自分やその場の様子を写した写真・動画を投稿する	8.6%	5.0%	4.5%	13.5%	0.9%	***
自分が属する学校や職場などの秘密にかかわるメッセージ・写真・動画を投稿する	8.4%	4.1%	4.8%	12.3%	1.9%	***

※数値は該当者率，*：p<0.05，**：p<0.01，***：p<0.001，n.s.：有意差なし，黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す（5%水準、両側検定）。

ネット社会のコミュニケーションを巡る諸問題
Problems of Communication in the Internet Society

大野志郎 OHNO, Shiroh 天野美穂子 AMANO, Mihoko
橋元良明 HASHIMOTO, Yoshiaki 堀川裕介 HORIKAWA, Yusuke
篠田詩織 SHINODA, Shiori 間形文彦 MAGATA, Fumihiko
藤村明子 FUJIMURA, Akiko

目次

0. 調査の概要 橋元良明・大野志郎
- 0.1 調査の目的
 - 0.2 方法
1. ソーシャルメディアの利用と影響 大野志郎
- 1.1 ソーシャルメディア利用者率と利用頻度
 - 1.2 ソーシャルメディアのアカウント数、フォロワー数
 - 1.3 SNS 利用の影響
 - 1.4 スマートフォンの利用場面
2. 異性との交流 天野美穂子
- 2.1 ネットでの異性との出会い
 - 2.2 ネットで知り合った異性と会った経験
 - 2.3 ネットでの出会いの危険性に関して啓発を受けた経験
3. フェイクニュース・デマ、炎上 橋元良明
- 3.1 フェイクニュース／デマ
 - 3.2 炎上
4. 自撮り熱中とネット依存 大野志郎
- 4.1 自撮り投稿の状況
 - 4.2 自撮り熱中の状況と自撮り投稿の目的・影響
 - 4.3 インターネット依存傾向と自撮り熱中
5. eスポーツへの参加と心理社会的影響 大野志郎
- 5.1 eスポーツの認知度と青少年の利用への印象
 - 5.2 eスポーツへの参加状況と利用時間
 - 5.3 eスポーツ利用の影響

大野志郎	東京大学大学院情報学環
天野美穂子	東京家政大学家政学部
橋元良明	東京女子大学現代教養学部
堀川裕介	大妻女子大学ほか 非常勤講師
篠田詩織	NTT セキュアプラットフォーム研究所
間形文彦	NTT セキュアプラットフォーム研究所
藤村明子	NTT セキュアプラットフォーム研究所

本稿は、東京大学と日本電信電話株式会社セキュアプラットフォーム研究所との2019年度共同研究「パーソナルデータ利活用ビジネスの消費者受容性を高める手法構築に向けた研究」の成果の一環である。

0. 調査の概要

0.1 調査の目的

我々のグループでは2020年3月中旬にウェブ調査を実施し、「ネット社会」における諸問題に関する実態を分析した。その中で「個人情報と信用」に関連した質問については、本稿と対になる「ネット社会の個人情報と信用」（本紀要に掲載）で分析結果を報告した。

本稿では、同調査で取り上げた質問のうち、SNSを通じた異性交遊の実態、「フェイクニュース」と「デマ」への接触、ネット依存等に関する調査結果を報告する。

0.2 方法

- (1)調査対象者：株式会社NTTコム オンライン・マーケティング・ソリューションの日本全国のモニタのうち、15歳から69歳までの男女¹。（年齢層5歳刻み、登録時の性別で可能な限り均等になるように回収）
- (2)調査方法：オンラインアンケート調査
- (3)有効回答数：3,655票²（本調査回収数3,697票）
- (4)調査期間：2020年3月9日から2020年3月16日
- (5)性別・年代による分布

性別	男性	1794	49.1%
	女性	1817	49.7%
	答えたくない	44	1.2%
年齢層別	10代	248	6.8%
	20代	612	16.7%
	30代	677	18.5%
	40代	696	19.0%
	50代	717	19.6%
	60代	705	19.3%

¹ 性別の割付はモニタ登録時のものを使用。本調査であらためて回答を求め、男女に分類できないケースも全体の分析に含めている

² 不正な入力とみられる42票を削除した。

1. ソーシャルメディアの利用と影響

1.1 ソーシャルメディア利用者率と利用頻度

SNS の利用状況について、「Q18 あなたは、LINE（ライン）、Twitter（ツイッター）、Facebook（フェイスブック）、Instagram（インスタグラム）などの SNS を、現在利用していますか」の設問に対し、「利用している」「利用していない」の 2 件法で回答を得た。性別、年齢層別、就業形態別の利用者率（「利用している」を選択した率）を表 1.1.1 に示す。全体の利用者率は 75.8%であり、性別で有意差は見られなかった。年齢層別では 10 代が 97.2%、20 代が 91.8%と高く、50 代でも 69.7%、60 代でも 60.7%が利用していた。就業形態別では学生・生徒が 97.0%と高く、無職が 61.2%と低かった。

表 1.1.1 SNS 利用者率

	全体	男性	女性	χ ² 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ ² 検定	フルタイム	パート タイム	専業主 婦(夫)	学生・ 生徒	無職	χ ² 検定
	n	3655	1794		1817	248	612	677	696	717		705	1683	574	594	337	
SNSを、現在利用している	75.8%	74.7%	77.1%	n.s.	97.2%	91.8%	79.2%	72.3%	69.7%	60.7%	***	76.9%	75.8%	71.9%	97.0%	61.2%	***

※数値は利用者率，***:p<.001，n. s. :有意差なし，黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す（5%水準、両側検定）。

LINE、Twitter などの主要な SNS および YouTube の利用頻度について、「Q19 あなたは現在、次のアプリをどのくらいの頻度で利用しますか」の設問により回答を得た。その結果を表 1.1.2 に示す。

表 1.1.2 ソーシャルメディアの利用頻度（単位：％）

	n=3655	1日10回 以上	1日数回 程度	1日1回程 程度	週に数回 程度	週に数回 未満	利用して いない
(1) LINE(ライン)		12.1	30.2	10.5	9.2	7.5	30.4
(2) Twitter(ツイッター)		7.3	17.0	9.2	6.6	6.8	53.1
(3) Facebook(フェイスブック)		1.3	5.9	6.8	6.5	11.3	68.2
(4) LinkedIn(リンクedin)		0.3	0.7	0.7	0.8	1.1	96.4
(5) Instagram(インスタグラム)		4.7	10.4	6.3	4.2	6.5	67.8
(6) TikTok(ティックトック)		0.7	1.3	1.2	1.8	1.9	93.0
(7) Pinterest(ピンタレスト)		0.2	0.7	1.1	1.8	2.1	94.1
(8) TwitCasting(ツイキャス)		0.2	0.8	0.9	0.8	1.8	95.5
(9) YouTube(ユーチューブ)		7.3	16.6	11.3	15.2	18.2	31.4

LINE は 1 日 10 回以上が 12.1%、1 日数回程度が 30.2%、1 日 1 回程度が 10.5%であり、全体の約 7 割が利用していた。Twitter は 1 日 10 回以上が 7.3%、1 日数回程度が 17.0%、

1日1回程度が9.2%であり、全体の半数近くが利用していた。Facebookは1日10回以上が1.3%、1日数回程度が5.9%、1日1回程度が6.8%であり、利用者は全体の32%ほどであった。Instagramは1日10回以上が4.7%、1日数回程度が10.4%、1日1回程度が6.3%であり、利用者は全体の32%ほどであった。YouTubeは1日10回以上が7.3%、1日数回程度が16.6%、1日1回程度が11.3%であり、利用者は全体の約7割であった。

表1.1.3に、性別、年齢層別、就業形態別の、SNSおよびYouTubeの毎日利用者率（1日1回程度以上利用すると回答した率）を示す。

表 1.1.3 ソーシャルメディアの毎日利用者率

	全体			χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定	フルタイム	パート タイム	専業主 婦(夫)	学生・ 生徒	無職	χ^2 検定
	n	3655	1794		1817	248	612	677	696	717		705	1683	574	594	337	
LINE(ライン)	52.9%	47.3%	58.8%	***	79.8%	72.4%	55.1%	50.0%	44.6%	35.6%	***	54.5%	50.7%	53.0%	83.7%	27.2%	***
Twitter(ツイッター)	33.5%	34.2%	33.0%	n.s.	75.4%	60.9%	35.9%	28.3%	22.3%	11.2%	***	32.9%	29.6%	20.4%	73.0%	28.9%	***
Facebook(フェイスブック)	14.0%	16.9%	11.2%	***	5.2%	16.7%	14.6%	16.2%	15.2%	10.5%	***	18.6%	11.3%	9.9%	7.4%	10.3%	***
LinkedIn(リンクトイン)	1.7%	2.1%	1.3%	n.s.	1.6%	3.6%	2.5%	2.0%	0.7%	0.0%	***	2.7%	0.5%	0.5%	3.0%	0.2%	***
Instagram(インスタグラム)	21.5%	16.7%	26.5%	***	59.3%	43.5%	21.7%	15.7%	1.3%	5.0%	***	20.9%	19.5%	14.3%	55.5%	10.7%	***
TikTok(ティックトック)	3.3%	3.1%	3.6%	n.s.	17.7%	5.1%	3.4%	2.2%	0.3%	0.7%	***	3.1%	2.1%	0.7%	14.5%	0.6%	***
Pinterest(ピンタレスト)	2.0%	1.9%	2.2%	n.s.	2.8%	3.9%	2.7%	1.7%	0.7%	1.1%	***	2.6%	1.0%	1.2%	3.3%	1.3%	*
TwitCasting(ツイキャス)	1.9%	2.2%	1.7%	n.s.	4.4%	4.2%	3.0%	1.4%	0.4%	0.0%	***	2.4%	0.9%	0.5%	5.3%	0.6%	***
YouTube(ユーチューブ)	35.2%	40.6%	30.2%	***	80.2%	56.0%	35.7%	28.6%	21.8%	20.7%	***	33.9%	31.5%	20.9%	74.5%	34.0%	***

※数値は毎日利用者率、*: $p<0.05$, ***: $p<0.001$, n.s.:有意差なし、黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す（5%水準、両側検定）。

LINEの毎日利用者は全体の52.9%であり、性別では女性が58.8%と有意に高かった。年齢層別では10代が79.8%と最も高く、60代でも35.6%が毎日利用していた。就業形態別では学生・生徒が83.7%と最も高かった。

Twitterの毎日利用者は全体の33.5%であり、性別に有意差はなく、年齢層別では10代が75.4%と最も高く、20代は60.9%、60代になると11.2%であった。就業形態別では学生・生徒が73.0%と最も高く、専業主婦（夫）は20.4%と最も低かった。

Facebookの毎日利用者は全体の14.0%であり、性別では男性が16.9%と有意に高く、年齢層別では20代が16.7%と最も高く、10代が5.2%と最も低かった。就業形態別ではフルタイムが18.6%と最も高く、学生・生徒が7.4%と最も低かった。

Instagramの毎日利用者は全体の21.5%であり、性別では女性が26.5%と有意に高かった。年齢層別では10代が59.3%と最も高く、次いで20代の43.5%であった。就業形態別では学生・生徒が55.5%と最も高く、専業主婦（夫）は14.3%にとどまった。

YouTubeの毎日利用者は全体の35.2%であり、性別では男性が40.6%と有意に高かった。年齢層別では10代が80.2%と最も高く、20代は56.0%、30代は35.7%と差があっ

た。就業形態別では学生・生徒が 74.5%と最も高く、専業主婦（夫）が 20.9%と最も低かった。

続いて、SNS アプリ、YouTube の投稿頻度について、「現在利用しているアプリについて、どのくらいの頻度でメッセージや写真・動画などを投稿しますか。なお投稿については、Twitter における「リツイート」のような、他人の投稿を再投稿することも含めてお考えください。」の設問により回答を得た。その結果を表 1.1.4 に示す。

表 1.1.4 ソーシャルメディアの投稿頻度（単位：％）

	n	1日10回以上	1日数回程度	1日1回程度	週に数回程度	週に数回未満	利用していない
(1) LINE(ライン) ※トークを含む	2545	9.5	19.2	9.6	9.5	13.0	39.2
(2) Twitter(ツイッター)	1714	5.9	10.9	8.2	10.7	21.5	42.7
(3) Facebook(フェイスブック)	1162	2.5	5.3	7.0	7.7	25.6	51.9
(4) LinkedIn(リンクedin)	133	7.5	16.5	15.0	15.0	12.0	33.8
(5) Instagram(インスタグラム)	1176	2.8	6.6	7.2	12.2	28.7	42.3
(6) TikTok(ティックトック)	255	4.7	9.4	9.8	12.2	11.0	52.9
(7) Pinterest(ピンタレスト)	215	4.2	7.4	10.7	11.6	12.1	54.0
(8) TwitCasting(ツイキャス)	163	6.1	13.5	9.2	15.3	19.0	36.8
(9) YouTube(ユーチューブ)	2506	1.9	3.8	2.9	3.7	6.5	81.3

※各アプリの利用者のうち、投稿機能の利用頻度。投稿機能を利用していない場合は「利用していない」に該当

LINE 利用者の投稿頻度は、1日10回以上が 9.5%、1日数回程度が 19.2%、1日1回程度が 9.6%であり、約 6 割が投稿機能を利用していた。Twitter 利用者の投稿頻度は1日10回以上が 5.9%、1日数回程度が 10.9%、1日1回程度が 8.2%であり、6 割弱が投稿機能を利用していた。Facebook 利用者の投稿頻度は1日10回以上が 2.5%、1日数回程度が 5.3%、1日1回程度が 7.0%であり、投稿機能の利用者は半数程度であった。Instagram は1日10回以上が 2.8%、1日数回程度が 6.6%、1日1回程度が 7.2%であり、投稿機能の利用者は 6 割弱であった。YouTube 利用者の投稿頻度は1日10回以上が 1.9%、1日数回程度が 3.8%、1日1回程度が 2.9%であり、投稿機能の利用者は約 2 割であった。

1.2 ソーシャルメディアのアカウント数、フォロワー数

SNS のアカウント数について、前述の主要アプリのいずれかの利用者(n=3,140)に対し、「Q19 であなたが利用していると答えたアプリについて、アカウントはいくつお持ちですか。1つのアプリで複数のアカウントをお持ちの場合は、すべて足しあげてお答えください。また、そのうち実名で登録しているアカウントの数についてもお答えください」の設問により、数値入力で回答を得た。性別、年齢層別のアカウント数を表 1.2.1 に示す。

利用しているアプリのアカウント数は、平均 3.54 アカウントであり、性別、年齢層別に有意差は見られなかった。そのうち実名で登録しているアカウント数は平均 1.80 アカウントで、性別に有意差はなく、年齢層別では 30 代が 1.46 と実名アカウント数が最も少なく、60 代が 2.42 と最も多かった（30 代と 60 代の間にのみ有意差あり：Bonferroni, 5% 水準）。

表 1.2.1 ソーシャルメディアのアカウント数

		全体	男性	女性	検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	検定
利用しているアプリのアカウント数	M	3.54	3.30	3.79	n.s.	5.36	3.91	2.82	2.57	3.37	4.38	n.s.
	SD	14.94	13.24	16.56		4.57	3.42	3.81	3.39	21.03	27.50	
	n	3140	1540	1571		242	575	603	586	589	545	
上記のうち、実名で登録しているアカウント数	M	1.80	1.68	1.94	n.s.	2.00	1.74	1.46	1.53	1.84	2.42	*
	SD	5.22	3.51	6.51		2.29	1.48	1.41	2.44	5.97	10.25	
	n	3141	1541	1571		242	575	603	587	589	545	

※男女は t 検定、年齢層は分散分析の結果***:p<0.001, n. s.:有意差なし

友だち・フォロワー数について、前述の主要アプリのうち、LINE 以外のいずれかの利用者 (n=2,793) に対し、「Q19 であなたが利用していると答えたアプリ (LINE を除く) のうち、あなたが最もよく利用するアプリ (LINE は除く) で、友だち・フォロワーなどの人数は合わせてどのくらいになりますか。またそのうち、あなたの普段の生活や職業などについて知っている人はどのくらいいますか。おおよそで構いませんので、それぞれの人数をお答えください」の設問に対し、数値入力で回答を得た。性別、年齢層別のアカウント数を表 1.2.2 に示す。

表 1.2.2 ソーシャルメディアの友だち・フォロワー数

		全体	男性	女性	検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	検定
友だち・フォロワーなどの人数	M	156.27	188.61	117.46	*	346.07	284.93	102.26	123.89	63.38	99.11	***
	SD	774.23	993.21	371.18		795.61	1351.48	282.60	671.22	224.98	640.72	
	n	2793	1405	1364		241	557	541	513	498	443	
上記のうち、普段のあなたについて知っている人の数	M	30.59	24.77	36.95	***	83.34	54.29	25.53	18.80	14.54	9.89	***
	SD	86.06	68.47	101.28		150.63	119.23	62.74	73.30	39.12	25.73	
	n	2793	1405	1364		241	558	541	513	498	442	

※数値は利用者率、*:p<0.05, ***:p<0.001, 黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す (5% 水準、両側検定)。

友だち・フォロワー数は、平均 156.27 であり、性別では男性が 188.61 と有意に多かった。年齢層別には 10 代が 346.07、20 代が 284.93 と多く、30 代以降は有意に少なかった (Bonferroni, 1% 水準)。有意差は見られなかった。そのうち知り合い (普段のあなたについて知っている人) の数は平均 30.59 で、性別では女性が 36.95 と多く、年齢層別では

10代が 83.34 と有意に高く、次いで 20代が 54.29 と有意に高く、30代以降は有意に少なかった (Bonferroni, 0.1%水準)。

1.3 SNS 利用の影響

SNS 利用者 (n=2,770) の SNS 利用の影響について、「Q22 あなたは、SNS を利用したことにより、次のような経験をどのくらいしましたか」の設問に対し、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の 4 件法により回答を得た。性別、年齢層別の該当率(「とてもあてはまる」または「ややあてはまる」を選択した率)を表 1.3.1 に示す。

表 1.3.1 SNS 利用の影響

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	2770	1340		1401	241	562	536	503	500	
身体的健康を損ねて通院した	7.4%	10.4%	4.5%	***	4.1%	11.0%	10.8%	7.4%	4.8%	3.5%	***
精神的健康を損ねて通院した	7.0%	8.9%	4.9%	***	9.5%	10.7%	10.4%	5.4%	3.6%	2.1%	***
学業、家事、仕事の大事な役割や作業をおろそかにした	9.8%	10.3%	9.1%	n.s.	20.3%	15.5%	11.9%	8.0%	4.4%	2.1%	***
約束事に遅刻したりすっぽかしたりした	7.0%	8.8%	5.4%	***	10.8%	10.0%	10.1%	5.4%	4.6%	2.1%	***
学業、家事、仕事での失敗を人に指摘された	6.7%	8.3%	5.1%	**	10.4%	10.5%	8.8%	6.0%	3.4%	1.9%	***
親しい友人との交流が減った	8.3%	9.8%	6.8%	**	13.7%	12.3%	10.6%	6.0%	5.2%	3.3%	***
家族との交流が減った	8.4%	10.0%	6.7%	**	15.8%	12.3%	10.4%	5.8%	5.2%	3.3%	***
大切な人間関係に問題が生じた	7.8%	9.6%	6.1%	**	11.6%	12.8%	10.3%	5.8%	5.4%	1.4%	***
多額のムダ使いをした	8.5%	9.8%	7.1%	*	9.1%	12.3%	13.1%	7.6%	5.0%	2.6%	***
外出しなくなった	11.3%	11.5%	11.0%	n.s.	20.3%	16.5%	12.7%	9.3%	6.8%	4.9%	***
睡眠時間が減った	15.1%	14.3%	15.6%	n.s.	31.5%	25.1%	16.2%	9.5%	9.6%	4.0%	***
食事の時間や回数が減った	6.5%	8.2%	4.9%	**	9.5%	10.9%	9.1%	4.4%	3.4%	2.1%	***
他の趣味が減った	9.2%	10.3%	8.1%	*	11.6%	12.3%	13.4%	8.2%	6.0%	3.5%	***

※数値は該当者率, *:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001, n.s.:有意差なし, 黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す(5%水準、両側検定)。

健康への影響として、「身体的健康を損ねて通院した」には SNS 利用者の 7.4% が該当し、性別では男性が 10.4%、年齢層別では 20代が 11.0%、30代が 10.8% とそれぞれ有意に高かった。「精神的健康を損ねて通院した」には SNS 利用者の 7.0% が該当し、性別では男性が 8.9%、年齢層別では 20代が 10.7%、30代が 10.4% とそれぞれ有意に高かった。「睡眠時間が減った」には SNS 利用者の 15.1% が該当し、性別に差はなく、年齢層別では 10代が 31.5%、20代が 25.1% と有意に高かった。「食事の時間や回数が減った」には SNS 利

用者の6.5%が該当し、性別では男性が8.2%、年齢層別では20代が10.9%、10代が9.5%、30代が9.1%とそれぞれ有意に高かった。

社会的役割への影響として、「学業、家事、仕事の大事な役割や作業をおろそかにした」にはSNS利用者の9.8%が該当し、性別に差はなく、年齢層別では10代が20.3%、20代が15.5%と有意に高かった。「学業、家事、仕事での失敗を人に指摘された」にはSNS利用者の6.7%が該当し、性別では男性が8.3%、年齢層別では20代が10.5%、10代が10.4%、30代が8.8%とそれぞれ有意に高かった。

人間関係への影響として、「約束事に遅刻したりすっぱかしたりした」にはSNS利用者の7.0%が該当し、性別では男性が8.8%、年齢層別では10代が10.8%、30代が10.1%、20代が10.0%とそれぞれ有意に高かった。「親しい友人との交流が減った」にはSNS利用者の8.3%が該当し、性別では男性が9.8%、年齢層別では10代が13.7%、20代が12.3%、30代が10.6%とそれぞれ有意に高かった。「家族との交流が減った」にはSNS利用者の8.4%が該当し、性別では男性が10.0%、年齢層別では10代が15.8%、20代が12.3%とそれぞれ有意に高かった。「大切な人間関係に問題が生じた」にはSNS利用者の7.8%が該当し、性別では男性が9.6%、年齢層別では20代が12.8%、10代が11.6%、30代が10.3%とそれぞれ有意に高かった。

日々の生活への影響として、「多額のムダ使いをした」にはSNS利用者の8.5%が該当し、性別では男性が9.6%、年齢層別では20代が12.3%、30代が13.1%とそれぞれ有意に高かった。「外出しなくなった」にはSNS利用者の11.3%が該当し、性別に差はなく、年齢層別では10代が20.3%、20代が16.5%と有意に高かった。「他の趣味が減った」にはSNS利用者の9.2%が該当し、性別では男性が10.3%、年齢層別では30代が13.4%、20代が12.3%とそれぞれ有意に高かった。

全体として10代、20代の若年層ほどネガティブな影響を経験していた。特に、10代の31.5%が睡眠時間が減った、20.3%が外出しなくなった、学業、家事、仕事の大事な役割や作業をおろそかにしたと回答していることについて、SNSの過度の使用についての注意喚起が必要である。

1.4 スマートフォンの利用場面

スマートフォンの利用場面について、「Q36 あなたのスマートフォンの使用状況について、あてはまるものをお選びください」の設問に対し、「あてはまる」「あてはまらない」の2件法により回答を得た。性別、年齢層別の該当率（「あてはまる」を選択した率）を表1.4.1に示す。

移動中のスマートフォン利用状況として、「移動中にスマートフォンを使う」には全体の53.3%が該当し、性別に差はなく、年齢層別では10代が85.5%、20代が70.9%、30代が

表 1.4.1 スマートフォンの利用場面

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	3655	1794		1817	248	612	677	696	717	
移動中にスマートフォンを使う	53.3%	52.8%	54.5%	n.s.	85.5%	70.9%	58.3%	52.2%	44.9%	31.3%	***
駅で電車が到着し、乗り込むまでにスマートフォンを使う	34.4%	35.7%	33.2%	n.s.	54.8%	49.2%	40.2%	34.5%	28.0%	15.2%	***
ひとりきりの時間ができると、スマートフォンを使う	57.4%	54.1%	61.3%	***	83.5%	75.5%	61.9%	56.5%	50.5%	36.3%	***
すきま時間ができると、すぐにスマートフォンを使う習慣がある	44.8%	40.7%	49.1%	***	73.4%	63.7%	53.3%	43.4%	34.9%	21.8%	***
食事中にスマートフォンを使う	19.1%	18.2%	19.9%	n.s.	32.3%	38.2%	25.8%	14.7%	10.7%	4.3%	***
入浴中にスマートフォンを使う	9.5%	9.4%	9.6%	n.s.	24.6%	19.6%	10.9%	7.5%	4.5%	1.1%	***
スマートフォンで1時間以上の暇つぶしをすることがよくある	31.1%	27.3%	35.1%	***	77.4%	58.5%	36.6%	25.1%	14.8%	8.4%	***
何もしていないときも、スマートフォンでのやりとりが気になることがよくある	20.4%	18.7%	22.3%	**	44.8%	37.3%	24.5%	16.7%	11.4%	6.2%	***
寝る前にふとんの中でスマートフォンを使う	38.6%	34.7%	42.8%	***	64.9%	62.4%	48.9%	35.9%	26.6%	13.5%	***

※数値は該当者率，**：p<0.01，***：p<0.001，n.s.：有意差なし，黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す（5%水準、両側検定）。

58.3%と有意に高かった。「駅で電車が到着し、乗り込むまでにスマートフォンを使う」には全体の34.4%が該当し、性別に差はなく、年齢層別では10代が54.8%、20代が49.2%、30代が40.2%と有意に高かった。

スマートフォン利用のタイミングとして、「ひとりきりの時間ができると、スマートフォンを使う」には全体の57.4%が該当し、性別では女性が61.3%と高く、年齢層別では10代が83.5%、20代が75.5%、30代が61.9%と有意に高かった。「すきま時間ができると、すぐにスマートフォンを使う習慣がある」には全体の44.8%が該当し、性別では女性が49.1%と高く、年齢層別では10代が73.4%、20代が63.7%、30代が53.3%と有意に高かった。「スマートフォンで1時間以上の暇つぶしをすることがよくある」には全体の31.1%が該当し、性別では女性が35.1%と高く、年齢層別では10代が77.4%、20代が58.5%、30代が36.6%と有意に高かった。

生活時間の中のスマートフォン利用として、「食事中にスマートフォンを使う」には全体の19.1%が該当し、性別に差はなく、年齢層別では20代が38.2%、10代が32.3%、30代が25.8%と有意に高かった。「入浴中にスマートフォンを使う」には全体の9.5%が該当し、性別に差はなく、年齢層別では10代が24.6%、20代が19.6%と有意に高かった。「寝る前にふとんの中でスマートフォンを使う」には全体の38.6%が該当し、性別では女性が42.8%と高く、年齢層別では10代が64.9%、20代が62.4%、30代が48.9%と有意に高かった。

また、日ごろスマートフォンのことを考えている状況として、「何もしていないときも、スマートフォンでのやりとりが気になることがよくある」には全体の20.4%が該当し、性別では女性が22.3%と高く、年齢層別では10代が44.8%、20代が37.3%、30代が24.5%と有意に高かった。

全体として10代から30代までの若年層において高い該当率となり、日々の生活でスマートフォンを利用する状況が多くなっていることが分かる。また10代と30代の違いとして、「スマートフォンで1時間以上の暇つぶしをすること」「何もしていないときも、スマートフォンでのやりとりが気になる」「入浴中にスマートフォンを使う」において、10代はポイント数において倍程度の該当率になっている。就業形態別の該当率（表1.4.2）をみると、「スマートフォンで1時間以上の暇つぶしをすること」は学生・生徒が72.1%であるのに対し、フルタイムは29.3%と有意に低かった。また「何もしていないときも、スマートフォンでのやりとりが気になる」については学生・生徒が43.3%であるのに対し、フルタイムは21.7%、「入浴中にスマートフォンを使う」については学生・生徒が24.0%であるのに対し、フルタイムは10.0%であった。これは、学生はスマートフォンで長時間過ごし、またそこで（代表的にはゲームやSNS上で）行われている交流が重要なものとなっていることを反映しているものと思われる。

表 1.4.2 就業形態別のスマートフォン利用場面

	フルタイム	パートタイム	専業主婦(夫)	学生・生徒	無職	χ ² 検定
	n 1683	574	594	337	467	
移動中にスマートフォンを使う	58.0%	45.5%	45.1%	83.7%	34.3%	***
駅で電車が到着し、乗り込むまでにスマートフォンを使う	40.7%	26.3%	24.6%	57.0%	17.8%	***
ひとりきりの時間ができると、スマートフォンを使う	58.7%	57.1%	52.7%	84.6%	39.6%	***
すきま時間ができると、すぐにスマートフォンを使う習慣がある	46.4%	43.7%	39.1%	73.3%	27.4%	***
食事中にスマートフォンを使う	21.4%	17.1%	11.4%	34.4%	11.8%	***
入浴中にスマートフォンを使う	10.0%	9.2%	3.9%	24.0%	4.5%	***
スマートフォンで1時間以上の暇つぶしをすることがよくある	29.3%	29.3%	24.1%	72.1%	19.5%	***
何もしていないときも、スマートフォンでのやりとりが気になることがよくある	21.7%	19.5%	15.3%	43.3%	7.1%	***
寝る前にふとんの中でスマートフォンを使う	39.0%	40.6%	33.3%	63.5%	23.1%	***

※数値は該当者率，***:p<0.001，黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す（5%水準、両側検定）。

2. 異性との交流

ソーシャルメディアを介して異性と知り合い、事件に巻き込まれる若年女性の増加をふまえて、本共同研究グループでは 2014 年 3 月にネット上での異性との交流に関するオンラインアンケート調査を実施した³。調査では、どの程度の若い女性がネットで異性と知り合っているのか、また、その後どの程度実際に会っているのか、出会いを求める心理はどのようなものなのか、等について探った。

その後、2020 年に至るまでの数年の間、日本においてソーシャルメディアの利用率は増加傾向にあり、また、ソーシャルメディアでの出会いに起因した事件も変わらずに発生している。本調査では、2014 年調査で使用した質問項目の一部分をベースに一部修正を加えて、2020 年時点でのネット上での異性との出会いや、その後実際に会った経験等の実態を探った。本章では、その調査分析結果を示す。

2.1 ネットでの異性との出会い (Q15)

調査対象者全員 (n=3655) に、ネット上での見知らぬ異性とのやりとりの経験を確認した。調査では、「Q15 あなたは、ネットではじめて知り合った異性とやりとりをしていますか。あてはまるものをひとつだけお選びください。仕事上のやり取りは除きます。」と尋ね、表 2.1.1 に示した 4 択で回答を求めた。対象者全体では、「やりとりしている」は 7.6%、「やりとりした経験はあるが、今はしていない」は 15.4%で、最も該当率が高いのは「やりとりしたことはなく、今後もやりとりするつもりはない」(69.8%)であった。性別では、現在もしくは過去にやりとりの経験がある(あった)のは男性の方が多く、やりとりの経験がなく今後もするつもりがないのは女性の方が多かった。年齢層別では、「やりとりしている」は年齢層が低いほど該当率も高くなっており、最も該当率の高い 10 代においては 17.7%が見知らぬ異性とのやりとりの経験があることが示された。

表 2.1.1 ネット上で見知らぬ異性とやりとりをした経験 (該当率、SA)

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n 3655	1794	1817		248	612	677	696	717	705	
やりとりしている	7.6%	8.1%	7.0%	***	17.7%	14.4%	8.4%	5.7%	4.7%	2.1%	***
やりとりした経験はあるが、今はしていない	15.4%	16.1%	14.9%		19.4%	21.6%	18.0%	17.5%	11.9%	7.5%	
やりとりしたことはないが、今後やりとりしてみたい	7.2%	10.6%	3.7%		13.7%	9.5%	7.8%	7.9%	5.0%	3.7%	
やりとりしたことはなく、今後もやりとりするつもりはない	69.8%	65.1%	74.5%		49.2%	54.6%	65.7%	68.8%	78.4%	86.7%	

※ χ^2 検定結果：***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05, n.s.:有意差なし
残差分析 (5%水準、両側検定) の結果、有意に高いものを黒太字、有意に低いものを赤字で示す。

³ 調査結果の詳細は、橋元他 (2015) を参照されたい。なお、本共同研究グループは、2014 年調査時と 2020 年調査時では一部メンバーが異なる。

ネットで見知らぬ異性とやりとりをするのはどのような理由があるのだろうか。調査では、Q15で「やりとりしている」、「やりとりした経験はあるが、今はしていない」を選択した人(n=840)を対象に「Q15SQ1 仕事以外のネットで、知らない異性とやりとりをした理由として、あてはまるものをいくつでもお選びください。」と尋ねた。表2.1.2に示した通り、全体では「共通の趣味や嗜好を持っていることがわかったから」(53.7%)が最も比率が高く、以下、「顔が見えない相手の方が、気兼ねなく話せるから」(19.3%)、「共通の友だちがいることがわかったから」(17.1%)と続いた。性別では有意差はみられなかった。年齢層別では、「リアルな世界では出会えないような遠くに住んでいる人と交流したかったから」に有意差がみられ、30代(13.4%)の比率が最も高かった。

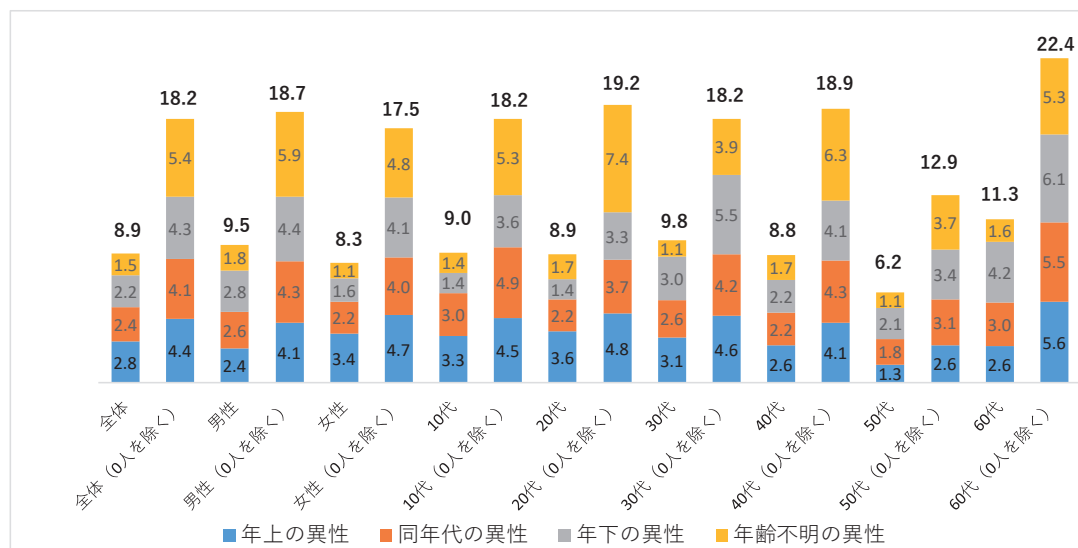
表 2.1.2 ネットで異性とやりとりをした理由（該当率、MA）

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	840	435		397	92	220	179	162	119	
共通の趣味や嗜好を持っていることがわかったから	53.7%	54.0%	52.6%	n. s.	63.0%	56.4%	48.6%	46.3%	59.7%	52.9%	n. s.
共通の友だちがいることがわかったから	17.1%	15.9%	18.6%	n. s.	26.1%	17.7%	19.0%	13.6%	13.4%	13.2%	n. s.
居住地や出身地、出身校（在校）が同じもしくは近いことがわかったから	11.0%	12.0%	9.8%	n. s.	9.8%	10.5%	12.3%	11.7%	10.1%	10.3%	n. s.
顔が見えない相手の方が、気兼ねなく話せるから	19.3%	17.5%	21.2%	n. s.	23.9%	19.1%	22.3%	16.7%	12.6%	23.5%	n. s.
リアルな世界では出会えないような職業や学校の人と交流したかったから	10.0%	9.9%	9.6%	n. s.	9.8%	10.9%	12.8%	11.1%	3.4%	8.8%	n. s.
リアルな世界では出会えないような遠くに住んでいる人と交流したかったから	9.4%	9.9%	8.6%	n. s.	5.4%	5.9%	13.4%	11.1%	7.6%	14.7%	*
リアルな世界では出会えないような年代の人（かなり年上の人など）と交流したかったから	5.8%	5.7%	5.5%	n. s.	2.2%	5.0%	7.8%	8.6%	4.2%	4.4%	n. s.
付き合う相手を探していたから	13.8%	13.6%	14.4%	n. s.	5.4%	15.9%	16.2%	15.4%	14.3%	7.4%	n. s.
結婚する相手を探していたから	5.2%	5.3%	5.3%	n. s.	1.1%	4.1%	7.8%	7.4%	5.0%	2.9%	n. s.
ネットで友だち募集をしていたから	8.3%	8.0%	8.3%	n. s.	9.8%	10.5%	10.6%	6.8%	3.4%	5.9%	n. s.
相手からアクセスがあって承認したから	9.5%	9.0%	10.1%	n. s.	6.5%	13.6%	8.9%	6.2%	7.6%	13.2%	n. s.
好奇心でなんとなく	16.4%	17.7%	15.1%	n. s.	8.7%	20.0%	14.0%	21.0%	13.4%	16.2%	n. s.
あてはまるものはない	6.8%	6.0%	7.6%	n. s.	8.7%	5.9%	6.1%	8.0%	3.4%	11.8%	n. s.

※ χ^2 検定結果：***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05, n. s.:有意差なし
 残差分析（5%水準、両側検定）の結果、有意に高いものを黒太字、有意に低いものを赤字で示す。
 ※分析母数はQ15で「やりとりしている」、「やりとりした経験はあるが、今はしていない」を選択した人（n=840）

Q15で「やりとりしている」、「やりとりした経験はあるが、今はしていない」を選択した人(n=840)に対して、ネット上で知り合いになった異性の人数を確認した。調査では、「Q15SQ2 仕事以外のネットでやりとりをして知り合いになった異性の、おおよその人数をお答えください。なお、ネット上だけのやりとりで実際に出会ったことがない方は含め、もともとのお知り合いだった方は除いてください。該当しない場合は「0」と入力してください。」と尋ね、年上、同年代、年下、年齢不詳それぞれの人数の回答を得ている。図2.1.1に、対象者全体、性別、年齢層別に、ネット上で知り合いになった異性の人数の単純平均

（「0人」を含む）と、行為者平均（「0人」を除く）のそれぞれを示した。年上、同年代、年下、年齢不詳をあわせた人数（棒の上に表記）は、全体の単純平均で8.9人、行為者平均で18.2人であった。行為者平均を性別で見ると、男性の方が多く、年齢層別では60代が最も多かった。また、全体の行為者平均18.2人の内訳をみると、年齢不明の異性が最も多いことが分かる。年齢不明の異性と知り合ったのは、年齢層別行為者平均では20代が7.4人で最も多かった。



※分析母数はQ15で「やりとりしている」、「やりとりした経験はあるが、今はしていない」を選択した人 (n=840)

※「(0人を除く)」と記載があるものは行為者平均、他は単純平均を示す。棒の上の数値は各層の合計。

図 2.1.1 ネット上で知り合いになった異性の人数（単純平均、行為者平均、単位：人）

Q15SQ2でネット上で知り合いになった異性が年上、同年代、年下、年齢不詳のいずれかで1人以上いた人 (n=756) に対して、知り合うきっかけとなったネット上のサービスを確認した。調査では、「Q15SSQ1 ネットで知り合った異性とは、以下のどのサービスを使っているときに知り合いましたか。あてはまるものをすべてお選びください。」と尋ねている。表 2.1.3の通り、全体ではTwitter (32.0%) が最も多く、次にLINE (23.3%) が多かった。性別で見ると、LINE、Facebook、デートアプリ・サイトは男性の方が女性よりも有意に比率が高く、「あてはまるものはない」については女性の方が男性よりも有意に比率が高かった。年齢層別で見ると、LINE、Twitter、Instagramは10代~30代の比率が高く、40代~60代の比率が低かった。Twitterは10代で63.9%、60代で10.8%というように、年齢層で顕著な差がみられた。恋活アプリ・サイト、デートアプリ・サイトは20代に多く、婚活アプリ・サイトは30代で多かった。また、オンラインゲームは40代で約2割みられた。

表 2.1.3 ネットで異性と知り合うきっかけとなったサービス(該当率、MA)

	n			χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	全体 756	男性 382	女性 367		83	203	153	143	109	65	
LINE	23.3%	28.8%	17.4%	***	30.1%	28.6%	26.8%	18.9%	11.9%	18.5%	**
Twitter	32.0%	31.4%	32.7%	n. s.	63.9%	45.3%	30.7%	19.6%	13.8%	10.8%	***
Facebook	14.4%	18.1%	10.6%	**	1.2%	10.8%	24.2%	12.6%	14.7%	23.1%	***
Instagram	12.7%	13.1%	12.3%	n. s.	24.1%	14.3%	19.0%	6.3%	6.4%	3.1%	***
TikTok	2.5%	3.1%	1.9%	n. s.	7.2%	2.0%	3.9%	1.4%	0.9%	0.0%	*
KakaoTalk	2.5%	2.4%	2.7%	n. s.	1.2%	4.4%	2.6%	2.8%	0.9%	0.0%	n. s.
恋活アプリ・サイト(ペアーズ、withなど)	13.5%	11.5%	15.8%	†	0.0%	22.7%	19.0%	10.5%	11.0%	0.0%	***
婚活アプリ・サイト(ゼクシィ縁結び、マッチドットコム、マリッシュ、Omiaiなど)	8.3%	9.4%	7.4%	n. s.	0.0%	6.4%	14.4%	11.9%	8.3%	3.1%	**
デートアプリ・サイト(タッブル誕生、dine、tinder、CROSS ME、東カレデートなど)	7.8%	10.2%	5.2%	**	2.4%	12.3%	9.2%	6.3%	7.3%	1.5%	*
オンラインゲーム	13.0%	15.2%	10.6%	†	15.7%	7.4%	17.6%	19.6%	11.0%	4.6%	**
YouTube	5.7%	7.1%	4.4%	n. s.	4.8%	6.9%	6.5%	8.4%	1.8%	1.5%	n. s.
ブログ	8.5%	9.2%	7.6%	n. s.	1.2%	3.9%	5.9%	14.0%	12.8%	18.5%	***
あてはまるものはない	22.5%	19.4%	26.2%	*	9.6%	10.8%	20.3%	30.8%	35.8%	40.0%	***

※ χ^2 検定結果：***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05, n. s.:有意差なし
残差分析(5%水準、両側検定)の結果、有意に高いものを黒太字、有意に低いものを赤字で示す。
※分析母数はQ15SQ2で年上、同年代、年下、年齢不詳のいずれかにおいて1人以上いた人(n=756)

2.2 ネットで知り合った異性と会った経験(Q15)

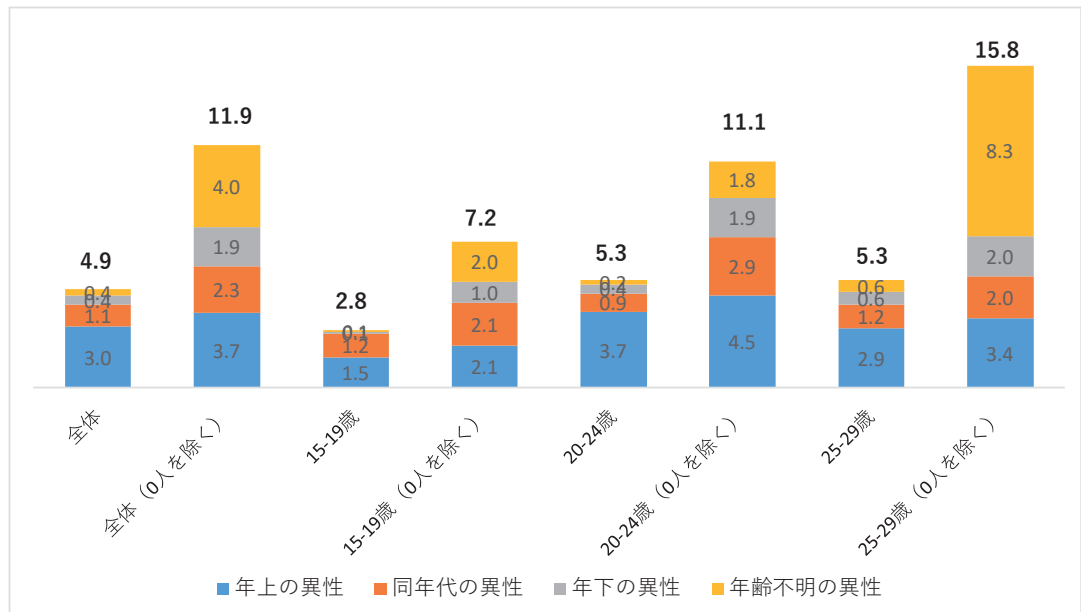
本節では、ネットで知り合った見知らぬ異性と実際に会った経験についてみていく。また、本節以降は、「ソーシャルメディアを介して異性と知り合い、事件に巻き込まれる若年女性の増加」という本研究の元々の動機・背景をふまえて、分析対象を「10代～20代の女性」に限定して分析する。本調査対象者3655人の中で、10代女性は127人、20代女性は319人、合計446人であった。

調査では、Q15においてネット上で知り合った異性と「やりとしている」、「やりとりした経験はあるが、今はしていない」を選択した人に対して、「Q15SQ3 ネットで知り合いになった異性と、実際に会ったことはありますか。あてはまるものをすべてお選びください。」と尋ねた。表2.2.1は、10代～20代の女性に絞った回答(n=183)を示したものである。全体では、「会ったことがある」人は55.7%であった。すなわち、ネット上で異性と知り合いやりとりした経験がある人の約半数においては、実際に会った経験もあるということになる。一方で、「これまでに会ったことはないし、これからも会うつもりはない」は約3割(32.2%)であった。年齢層を5歳刻みでみていくと、「会ったことがある」のは「20-24歳」(68.3%)、「25-29歳」(67.2%)では7割弱、「15-19歳」(30.5%)では約3割と、該当率に大きな差がみられた。「これまでに会ったことはないし、これからも会うつもりはない」は「15-19歳」(47.5%)において最も多く、5割弱であった。

表 2.2.1 ネットで知り合った異性と実際に会った経験（該当率、MA）

	n	全体	15-19歳	20-24歳	25-29歳	χ^2 検定
		183	59	63	61	
会ったことがある		55.7%	30.5%	68.3%	67.2%	***
会う約束をしたが、実際には会えなかったことがある (相手が来なかった、待合せ場所や時間を間違えたなど)		8.2%	6.8%	9.5%	8.2%	n. s.
会う約束をしたが、結局会わなかったことがある(ドタキャンした、相手を見て会うのをやめたなど)		8.2%	6.8%	6.3%	11.5%	n. s.
これまでに会ったことはないが、会ってみたい人がいる		9.8%	8.5%	6.3%	14.8%	n. s.
これまでに会ったことはないし、これからも会うつもりはない		32.2%	47.5%	25.4%	24.6%	**
あてはまるものはない		5.5%	10.2%	0.0%	6.6%	*

※ χ^2 検定結果：***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05, n. s.:有意差なし
 残差分析（5%水準、両側検定）の結果、有意に高いものを黒太字、有意に低いものを赤字で示す。
 ※分析母数は10代～20代女性の中でQ15で「やりとりしている」、「やりとりした経験はあるが、今はしていない」を選択した人（n=183）



※分析母数は10代～20代女性の中でQ15SQ3で「会ったことがある」を選択した人（n=102）
 ※「(0人を除く)」と記載があるものは行為者平均、他は単純平均を示す。棒の上の数値は各層の合計。

図 2.2.1 実際に出会った異性の人数（単純平均、行為者平均、単位：人）

Q15SQ3で「会ったことがある」を選択した人に対して、実際に出会った異性の人数を確認した。調査では、「Q15SSQ2 ネットで知り合い、実際に出会ったことがある異性のおおよその人数をそれぞれお答えください。(もともとのお知り合いだった方は除いてください) 実際に出会っていない場合には「0」と入力してください。」と尋ね、年上、同年代、年下、年齢不詳それぞれの人数の回答を得ている。図 2.2.1 には、10代～20代の女性全体（n=102）

及び年齢層別（5歳刻み）に、実際に会った異性の人数の単純平均（「0人」を含む）と、行為者平均（「0人」を除く）のそれぞれを示した。年上、同年代、年下、年齢不詳をあわせた人数（棒の上に表記）は、全体の単純平均で4.9人、行為者平均で11.9人であった。行為者平均を年齢層別（5歳刻み）でみると、25-29歳が最も多く、15.8人であった。また、その内訳をみると、年齢不明の異性（8.3人）が最も多かった。一方、20-24歳は、行為者平均11.1人の中で年上の異性（4.5人）が最も多いことがわかった。

Q15SQ3で「会ったことがある」を選択した人に対して、実際に会って良かったことを確認した。表2.2.2は10代～20代の女性全体（n=102）の該当率を降順で示したものである。

「趣味が合う人と深い話ができた」が最も該当率が高く46.1%、次に「彼氏・彼女候補を見つけられた」が29.4%であった。一方で、「良かったことは特にない」が17.6%で、他の良かった点を示す項目を凌いでいた。また、良かった点を示す項目には、「欲しいものを買ってくれたり、ごはんをおごってくれたりする人を見つけられた」、「リアルの人間関係の中より、チャホヤしてもらえた」といった援助交際的な充足感も1割強みられた。

表 2.2.2 ネットで知り合った異性と実際に会って良かったこと（該当率、降順、MA）

趣味が合う人と深い話ができた	46.1%
彼氏・彼女候補を見つけられた	29.4%
良かったことは特にない	17.6%
リアルの世界では知り合えない人と会うことで世界が広がった	16.7%
寂しさを埋められた	16.7%
リアルの人間関係の中より、チャホヤしてもらえた	14.7%
親やリアルの友だちには話せない話や悩みを相談できた	13.7%
結婚相手候補を見つけられた	12.7%
一緒に出掛ける遊び友だちを見つけられた	12.7%
欲しいものを買ってくれたり、ごはんをおごってくれたりする人を見つけられた	12.7%
その他	4.9%

※分析母数は10代～20代女性の中でQ15SQ3で「会ったことがある」を選択した人（n=102）

Q15SQ3で「会ったことがある」を選択した人に対して、会おうと思った理由を尋ねた結果を示したのが表2.2.3である。調査では、「Q15SSSQ2 あなたがネットで知り合った異性と実際に会おうと思った理由は何ですか。あてはまるものをいくつでもお選びください。」と尋ねた。10代～20代の女性全体（n=102）で該当率の高かった上位項目は「相手の顔写真が出ていたから」（35.3%）、「話の内容から信用できる人だと思ったから」（31.4%）、「趣味が同じだったから」（27.5%）、「相手が自分の情報を詳細に明らかにしていたから」（22.5%）であった。これらは、相手についての何らかの情報や、やりとりによる信用をふまえていることがわかるが、一方で、「とにかく会ってみる」、「好奇心でなんとなく」、「さみしかったから」というような特に明確な判断基準もなく会うケースも1～2割みられた。

表 2.2.3 ネットで知り合った異性と実際に会おうと思った理由（該当率、降順、MA）

相手の顔写真が出ていたから	35.3%
話の内容から信用できる人だと思ったから	31.4%
趣味が同じだったから	27.5%
相手が自分の情報を詳細に明らかにしていたから	22.5%
とにかく会ってみて、その後やりとりするかどうか決めようと思ったから	20.6%
知り合いの知り合いだったから	13.7%
好奇心でなんとなく	13.7%
ネットで彼氏彼女候補を探していたから	11.8%
さみしかったから	10.8%
ネット上で知り合った相手の方が、気兼ねなく話せるから	8.8%
近所だったから	7.8%
自暴自棄（やけ）になっていたから	7.8%
あてはまるものはない	7.8%
日常生活がつまらないから	5.9%
お金を持っていそうだから	4.9%
リアルな世界では出会えないような年代の人と交流したかったから	4.9%
相談相手が欲しかったから	3.9%
リアルな世界では出会えないような職業や学校の人と交流したかったから	2.9%
リアルな世界では出会えないような遠くに住んでいる人と交流したかったから	2.9%
家族や友達とトラブルがあったから	0.0%

※分析母数は10代～20代女性の中でQ15SSSQ1で「会ったことがある」を選択した人（n=102）

表 2.2.4 ネットで知り合った異性と会ったことを第三者に話したか（該当率、MA）

会う前に友人に相談した	26.5%
会う前に家族に相談した	11.8%
会ったことを友人に話した	31.4%
会ったことを家族に話した	12.7%
会う前に友人や家族に相談していない	12.7%
会ったことを友人や家族に相談していない	21.6%
あてはまるものはない	23.5%

※分析母数は10代～20代女性の中でQ15SSSQ1で「会ったことがある」を選択した人（n=102）

ネット上で知り合った異性と会ったことを、第三者に話しているかについても確認した。調査では、Q15SQ3で「会ったことがある」を選択した人に対して「Q15SSSQ3 あなたは、ネットで知り合った異性と実際に会ったことを、第三者に話しましたか。あてはまるものをすべてお選びください。」と尋ねている。表 2.2.4 には、10代～20代の女性全体（n=102）の該当率を示した。表の通り、「会う前」も「会った」後も、話す相手としては家族よりも友人の方が多く、「会う前に友人に相談した」は 26.5%、「会ったことを友人に話した」は 31.4%であった。また、「会う前」も「会った」後も、そのことを友人・家族に話していない人は 1～2 割程度みられた。「会う前」に誰かに相談することで、見知らぬ異性と会うリ

スクの軽減につながると思われるが、「ネット上」で知り合った「異性」であることが、事前の相談を妨げていると推測できる。

Q15SQ3で「会ったことがある」を選択した人に対して、実際に会う際に注意していることを確認した。調査では、「Q15SSSQ4 あなたは、ネットで知り合った異性と実際に会う際に、注意していることはありますか。あてはまるものをいくつかもお選びください。」と尋ねた。表 2.2.5 には、10代～20代の女性全体（n=102）の該当率を降順で示した。「相手の家に行かない」が最も多く、54.9%であった。また、「相手に関する情報をよく調べておく」、「自分の個人情報をなるべく相手に伝えない」、「一緒に車に乗らない」も3割以上みられ、ネット上で知り合った見知らぬ異性と会う際に自分なりのルールを設けている人が一定数存在することがわかる。

表 2.2.5 ネットで知り合った異性と会う際に注意していること（該当率、降順、MA）

相手の家に行かない	54.9%
相手に関する情報をよく調べておく	37.3%
自分の個人情報をなるべく相手に伝えない	35.3%
一緒に車に乗らない	32.4%
夜は会わない	29.4%
二人きりで会わない	24.5%
相手に高価なものをもらわない	17.6%
会うことをネット上も含め誰かに伝えておく	14.7%
あてはまるものはない	13.7%

※分析母数は10代～20代女性の中でQ15SSSQ1で「会ったことがある」を選択した人（n=102）

表 2.2.6 ネットで知り合った異性と会うことの危険性の認識（該当率、MA）

	全体	15-19歳	20-24歳	25-29歳	χ^2 検定
	n 102	18	43	41	
場合によっては危険なこともあると思っていた	71.6%	50.0%	79.1%	73.2%	n. s.
自分に限って危険なことはないと思った	8.8%	5.6%	7.0%	12.2%	n. s.
自分は人を判断できる自信があるので、会っても大丈夫だと思った	18.6%	44.4%	7.0%	19.5%	**
あてはまるものはない	6.9%	11.1%	7.0%	4.9%	n. s.

※ χ^2 検定結果：***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05, n. s.:有意差なし

残差分析（5%水準、両側検定）の結果、有意に高いものを黒太字、有意に低いものを赤字で示す。

※分析母数は10代～20代女性の中でQ15SQ3で「会ったことがある」を選択した人（n=102）

ネット上で知り合った異性と会うことについて、どの程度危険性を認識しているのだろうか。調査では、Q15SQ3で「会ったことがある」を選択した人に対して「Q15SSSQ5 あなたは、ネットで知り合った異性と会ったことについて、次のことがあてはまりますか。あてはまるものをすべてお選びください。」と尋ね、表 2.2.6 の4択で回答を求めた。10代

～20代の女性全体（n=102）では、約7割が「場合によっては危険なこともあると思っていた」（71.6%）ことが示された。年齢層別（5歳刻み）でみると、「自分は人を判断できる自信があるので、会っても大丈夫だと思った」についての15-19歳の該当率が他の層と比べて顕著に高かった（44.4%）。すなわち、15-19歳層女性の、ネット上で知り合った異性と会うことについての危険性の認識は、20代女性と比べて低いと考えられる。

Q15SQ3で「会ったことがある」を選択した人に対して、実際に会って良くなかった点を確認した。調査では、「Q15SSSQ6 あなたがネットで知り合った異性と実際に会って、良くなかったことはありますか。あてはまるものをいくつでもお選びください。」と尋ねた。表2.2.7に示した通り、10代～20代の女性全体（n=102）では「良くなかったことは特にない」（47.1%）の該当率が最も高く、約5割であった。良くなかった経験としては、「事前のやりとりでイメージしていた人と違う感じだった」（27.5%）、「性格があわなかった」（24.5%）、「相手との会話がはずまなかった」（16.7%）といった印象の相違やミスマッチが比較的多い中で、「手を握られたり、体を触られたりした」（10.8%）が約1割、また、比率は低いながらも「性的被害にあった」（4.9%）、「裸の写真を要求された」（3.9%）、「そういうつもりがなかったのに、性的関係になった」（2.9%）といった性的トラブルも発生しており、若年女性がネット上で知り合った見知らぬ異性と実際に会うことのリスクが示された結果となった。

表 2.2.7 ネットで知り合った異性と会って良くなかったこと（該当率、降順、MA）

事前のやりとりでイメージしていた人と違う感じだった	27.5%	
性格があわなかった	24.5%	
ネットの写真と実物がまったく違っていった	15.7%	
事前に聞いていた情報が嘘だった	6.9%	
相手との会話がはずまなかった	16.7%	
つきまとわれたり、ストーキングされた	4.9%	
変わった人だった	14.7%	
やたらとなれなれしくされた	8.8%	
本名や電話番号、住所などをしつこく聞かれた	2.0%	
手を握られたり、体を触られたりした	10.8%	性的トラブル
そういうつもりがなかったのに、性的関係になった	2.9%	
性的被害にあった	4.9%	
裸の写真を要求された	3.9%	
宗教に勧誘された	1.0%	
その他	2.9%	
良くなかったことは特にない	47.1%	

※分析母数は10代～20代女性の中でQ15SQ3で「会ったことがある」を選択した人（n=102）

2.3 ネットでの出会いの危険性に関して啓発を受けた経験（Q16）

本節でも、分析対象を「10代～20代の女性」に限定してみていく。調査では、ネットでの見知らぬ異性と交流することの危険性について、どのような媒体から啓発を受けたのか、そうした啓発はためになったのかを確認した。実際には、「Q16 ネット上で知らない人とやりとりをすることの危険性について、あなたには、次のようなことがあてはまりますか。またその中で、ためになったものはどれですか。それぞれ、いくつでもお選びください。」と尋ねた。

表 2.3.1 は、10代～20代の女性（n=446）に限定して該当率を示したものである。「あてはまるもの」（誰から危険性に関する啓発を受けたのか）は、「学校で、注意・説明・アドバイスを聞いたことがある」（56.3%）が最も多く、次に「ニュースや噂話を通じて危険性を知った」（49.6%）が多かった。「ためになったもの」は、「上記にあてはまるものはない」（37.0%）が最も多かった。これは、提示した選択肢の中でためになったものはない、もしくは、啓発自体を受けた経験がない、ということが考えられる。危険性を知ったのは「ニュースや噂話を通じて危険性を知った」（30.0%）が最も該当率が高く、「学校で、注意・説明・アドバイスを聞いたことがある」（26.2%）を凌いでいた。既述の通り、ネット上で見知らぬ異性と知り合ったことから実際に「会う」ことに至り、その結果として性的トラブルに発展しているケースがあった。また、特に15-19歳層においては、ネット上で知り合った異性と会うことに対する危険性の認識が低いことが示されていた。こうした調査結果を鑑みると、学校での啓発活動において、若年女性がネット上で見知らぬ異性とやりとりする危険性を強く認識させるような取り組みをさらに検討していくことが期待される。

表 2.3.1 ネットでの出会いの危険性に関して啓発を受けた経験（該当率、MA）

	あてはまるもの	ためになったもの
学校で、注意・説明・アドバイスを聞いたことがある	56.3%	26.2%
警察の人や携帯会社の人などから、注意・説明・アドバイスを聞いたことがある	26.5%	11.4%
親から、注意・説明・アドバイスを聞いたことがある	31.6%	11.0%
家族から、注意・説明・アドバイスを聞いたことがある	22.9%	7.6%
知り合いから、注意・説明・アドバイスを聞いたことがある	22.4%	8.1%
その他の人や組織から、注意・説明・アドバイスを聞いたことがある	16.1%	6.5%
知り合いなどの、危険な目にあったという体験談を聞いたことがある	18.4%	7.0%
ニュースや噂話を通じて危険性を知った	49.6%	30.0%
自分の経験を通じて学んだ	20.6%	12.1%
上記にあてはまるものはない	23.1%	37.0%

※分析母数は10代～20代女性（n=446）

<参考文献>

橋元良明・千葉直子・天野美穂子・堀川裕介（2015）「ソーシャルメディアを介して異性と交流する女性の心理と特性」, 東京大学大学院情報学環情報学研究調査研究編, 31, 115-195.

3. フェイクニュース・デマ、炎上

3.1 フェイクニュース／デマ (Q10)

フェイクニュースとデマは定義次第であり、またどのような定義でも明確に弁別するのは困難である。調査では、まず表 3.1.1 のような選択肢 (MA) でフェイクニュース／デマに相当するニュースへの接触を訪ねた。設問は「Q10 あなたが知っているニュースのうち、以下にあてはまるものはありますか。いくつでもお選びください」である。

すなわち、そもそもフェイクニュースとデマは弁別困難であり、「誤報」「デマ」「ジョーク」などを包摂する曖昧情報の一種、という考えである。ここで「ジョーク」を入れていることに違和感をもたれる方もおられようが、たとえば「熊本地震の際のライオン逃亡」などの情報は、一部の人は真実と信じ、一部の人は最初からジョークとして受け取っている。

Q10 の結果、「後から誤報だとわかった情報」に接触した人は全体の 25.7%、「後からデマだとわかった情報」に接触した人は 34.9%、「後からジョークだとわかった情報」に接触した人は 7.7%等であった(表 3.1.1)。

表 3.1.1 フェイクニュース／デマ情報への接触(全体、性別、年齢層別)(単位:%、該当率)

	全体	男性	女性		10代	20代	30代	40代	50代	60代	
1.後から誤報だとわかった	25.7	26.3	25.0	n.s.	22.6	23.2	23.9	25.6	28.3	27.9	n.s.
2.後からデマだとわかった	34.9	31.4	38.6	***	41.5	32.2	32.5	35.3	36.4	35.2	n.s.
3.後からジョークだとわかった	7.7	9.8	5.7	***	13.3	9.2	8.0	6.8	7.1	5.7	**
4.最初から誤報だとわかった	16.1	19.2	13.0	***	14.9	15.4	15.2	16.8	17.6	15.9	n.s.
5.最初からデマだとわかった	23.0	24.9	21.4	*	25.8	21.1	19.9	24.7	23.8	24.3	n.s.
6.最初からジョークだとわかった	9.8	11.5	7.9	***	14.1	11.6	9.6	9.9	9.2	7.4	*
N	3655	1794	1817		248	612	677	696	717	705	

※表 3.1.1 の数値はそれぞれ「あてはまる」と答えた人の割合。アスタリスクは、各属性(性別、年齢層)×各回答[あてはまる／あてはまらない]のクロス集計の χ^2 検定結果 ns:no significant, *:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001

残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が黒太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

このうち、最初から誤報、デマ、ジョークであるとわかっていたものを除き、**あとから誤報、デマ、ジョークだとわかったもの**(選択肢 1~3)をとりあげ、この種の情報を本稿では以降の分析対象とした(接触者 1622 名)。

その対象者に「Q10SQ1 お選びいただいた次のニュースのうち、もっとも印象に残っているニュースはどれですか。ひとつだけお選びください」という質問をした。その回答分布は次の通りである。

表 3.1.2 あとから誤報／デマ／ジョークだとわかった情報のうち、最も印象に残った情報（全体、性別、年齢層別）（単位：％、SA）

	全体	男性	女性		10代	20代	30代	40代	50代	60代	
後から誤報だとわかった	31.3	35.8	26.5	***	19.2	27.2	29.6	29.4	34.8	38.2	**
後からデマだとわかった	63.2	56.6	69.5		72.8	64.4	64.6	65.4	60.4	58.0	
後からジョークだとわかった	5.7	7.7	4.0		8.0	8.4	5.7	5.3	4.8	3.8	
N	1622	758	849		125	261	280	303	336	317	

※表中、各列で、それぞれ縦に合計して100%。アスタリスクは、各属性(性別、年齢層)×3択回答(SA)のクロス集計の χ^2 検定結果 **: $p<0.01$, ***: $p<0.001$
 残差分析の結果5%水準(両側検定)で数値が黒太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

表 3.1.2 に見られる選択肢のうち、最も印象に残ったものは「後からデマだとわかった」情報であり、特に女性、10代の回答比率が高かった。

次にその具体的な内容について自由記述を求めた。表 3.1.2 の回答者は 1622 人であるが、有効な記述があったのは 1344 件である。

表 3.1.3 自由記述の内訳

	N	%
1 トイレットペーパー品薄	821	61.1
2 ××が予防効果がある	43	3.2
3 ○○でコロナ感染者が出た	11	0.8
4 発生源は中国の研究所	2	0.2
5 漠然と「予防法について」	10	0.7
6 漠然と「コロナについて」	36	2.7
7 その他のコロナ関連	56	4.2
9 コロナ以外のテーマ	365	27.2
計(記述有りの件数)	1344	100.0

自由記述で最も多かったのは「トイレットペーパー品薄」関連である。この中には「トイレットペーパーは、中国で生産されており、輸入がストップするから不足する」など、詳細な記述もあった。これが有効自由記述の 61.1% (821 件) を占める。

2月27日に安倍首相が全国の小中学校に対し、臨時休校措置をとるよう要請した。翌28日には各地の店舗でトイレットペーパーの購買数が急増し、不足する事態に陥った。一部ネット上ではTwitterの影響が指摘されていた。2月27日の10時過ぎ、米子医療生協職員が「コロナで品薄になる品予測を根拠付きでお伝えします。次は、トイレットペーパーとティッシュペーパーが品薄になります。製造元が中国です。生産元がティッシュペーパー

ーやトイレットペーパーを生産をそもそもしてないのが根拠になります(原文ママ)」とのツイートを流している。しかし、それを追うように27日のうちにそれがデマであるとの情報も流れている。たとえばある経済評論家が流した「嘘を拡散する人がいるので、警告 トイレットペーパーの原料のパルプは、中国から輸入されていません。また、ほとんど国産であり、輸送コストの問題から輸出しても意味がない」というツイートである。後者のデマ打ち消し情報の方が反応は大きかった。

2月28日の午前中から、テレビのニュース、情報番組がこぞって、人々がトイレットペーパーを求めて店舗に押しかけ、品不足が生じていることを報道した。このことが後述するように、「最初の情報源」でテレビが最も比率が大きくなった背景である。なお、本稿の調査は2020年3月9日から2020年3月16日である。

自由記述の他の回答もコロナ関連が多くを占めた。「××が予防効果がある」として括った情報(43件)の「××」には、「納豆」「あさりのり」「湯」などが複数の回答を集めた。「○○で感染者が出た」も11件を数える。「○○」には地元ないしその近所と思われる地名、学校名が多く挙げられていた。また、漠然と「コロナについて」(36件)、「コロナの予防について」(10件)とだけ記述されていた回答も多かった。その他のコロナ関連は雑多であり、「子供はかかりにくい」「マスクが不足」「中国では日本肺炎と呼んでいる」「東京五輪中止」などが複数の回答であった。興味深いのは、この時期に「志村けん死亡」というのが3件あったことである。彼の陽性判明は3月23日、死亡は29日、報道は30日である。調査は上記のとおり3月の9～16日なので、この「死亡」は1996年ころから周期的に広められた「志村けん死亡デマ」の一つであろうか。

コロナ以外では熊本地震のときに流布された「ライオン逃亡」が24件と最も多く、あとは「北朝鮮ミサイル誤発射」「慰安婦報道」なども複数の回答があった。

自由記述の分類と「誤報/デマ/ジョーク」のクロス集計結果が表3.1.4である。「トイレットペーパーの品薄」の82.3%、「××が予防効果がある」の93.0%が「デマ」と認識されている。一方、「○○でコロナ感染者が出た」は45.5%が誤報という認識である。

表 3.1.4 あとから誤報/デマ/ジョークだとわかった情報のうち、具体的内容と誤報/デマ/ジョークの判断 (単位: %, N=1338)

	誤報	デマ	ジョーク	N
トイレットペーパー品薄	16.8	82.3	1.0	818
××が予防効果がある	4.7	93.0	2.3	43
○○でコロナ感染者が出た	45.5	54.6	0.0	11
発生源は中国の研究所	50.0	50.0	0.0	2
漠然と「予防法について」	30.0	70.0	0.0	10
漠然と「コロナについて」	38.9	58.3	2.8	36
その他のコロナ関連	30.4	64.3	5.4	56
コロナ以外のテーマ	54.7	35.6	9.7	362

Q10SQ3では「そのニュースをはじめに知ったのは、どこからでしたか。もっともあてはまるものをひとつだけお選びください」というワーディングで最初の情報源を質問している。情報によって情報源も異なるため、ここでは「トイレットペーパー品薄」情報の情報源を表3.1.5で示した。

表 3.1.5 「トイレットペーパー品薄」情報を始めに知った情報源(単位：%、SA、N=813)

	全体	男性	女性		10代	20代	30代	40代	50代	60代	
新聞	1.6	3.5	0.4	**	0.0	1.5	1.5	0.6	1.8	3.2	***
雑誌	0.2	0.3	0.2		0.0	0.0	0.8	0.6	0.0	0.0	
テレビ	41.7	39.6	42.6		35.0	27.8	32.8	49.7	50.9	45.2	
ラジオ	0.2	0.6	0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	
Yahoo!ニュース	14.7	15.3	14.4		3.3	11.3	17.2	17.4	17.4	14.0	
LINEニュース	0.7	0.6	0.8		3.3	1.5	1.5	0.0	0.0	0.0	
その他のネットニュース	8.1	7.4	8.6		1.7	2.3	7.5	7.8	9.6	14.7	
Twitter	19.4	21.7	18.2		51.7	39.9	28.4	10.8	9.0	2.6	
LINE (LINEニュースを除く)	1.3	1.3	1.4		0.0	0.0	0.8	2.4	2.4	1.3	
Instagram	0.2	0.0	0.4		0.0	0.8	0.8	0.0	0.0	0.0	
Facebook	0.4	1.0	0.0		0.0	0.8	0.8	0.0	0.0	0.6	
上記以外のSNS	1.1	1.3	1.0		0.0	2.3	0.8	1.2	1.2	0.6	
その他	10.3	7.4	12.0		5.0	12.0	7.5	9.6	7.2	17.2	

※数値は各列で縦に合計して100%。アスタリスクは、各属性(性別、年齢層)×13 択回答 (SA) のクロス集計の χ^2 検定結果 **: $p<0.01$, ***: $p<0.001$

残差分析の結果 5%水準(両側検定) で数値が黒太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

表に示される通り、全体の41.7%がテレビであり、Twitterは19.4%である。テレビに関しては男女差はない。年齢層別では20代でテレビよりTwitterが多い。40代以上になるとTwitterの回答比率は激減する。

表 3.1.6 「トイレットペーパー品薄」情報を知った後の行動(単位：%、N=813)

	全体	男性	女性		10代	20代	30代	40代	50代	60代	
1. 真実かどうか、チェックした	37.8	41.2	36.0	n.s.	48.3	45.9	36.6	37.7	37.7	28.0	*
2. 真実だと思って、SNS上で拡散した	2.0	4.5	0.4	***	5.0	1.5	4.5	1.2	1.8	0.0	*
3. 真実だと思って、家族や友人に話した	8.8	7.0	10.0	n.s.	1.7	9.8	14.9	9.6	6.0	7.6	*
4. 真実かどうかわからないが、SNS上で拡散した	1.2	2.6	0.4	**	5.0	0.8	1.5	1.8	0.0	0.6	n.s.
5. 真実かどうかわからないが、家族や友人に話した	17.4	15.3	18.8	n.s.	23.3	12.0	15.7	18.0	16.8	21.0	n.s.
6. 真実ではないと思ったが、SNS上で拡散した	0.5	1.3	0.0	*	0.0	1.5	0.7	0.0	0.6	0.0	n.s.
7. 真実ではないと思ったが、家族や友人に話した	15.6	15.3	16.0	n.s.	20.0	15.0	11.9	15.0	15.0	19.1	n.s.

※表3.1.1の数値はそれぞれ「あてはまる」と答えた人の割合。

アスタリスクは、各属性(性別、年齢層)×各回答[あてはまる/あてはまらない]のクロス集計の χ^2 検定結果 ns:no significant, *: $p<0.05$, **: $p<0.01$, ***: $p<0.001$

残差分析の結果 5%水準(両側検定) で数値が黒太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

Q10SQ4 では、「そのニュースを知った後、あなたは以下のような行動をとりましたか。あてはまるものをいくつでもお選びください」という質問をした (MA)。ここでも「トイレットペーパー品薄」情報に限定して回答結果を示す (表 3.1.6)。表に示されるように全体の 37.8%の人が「真実かどうか、チェックした」と答えた。この回答に関しては、20代の比率が最も高く、60代が低い。また、「真実かどうかわからないが、家族や友人に話した」と答えた人が 17.4%いる。「真実だと思って、家族や友人に話した」8.8%、「真実ではないと思ったが、家族や友人に話した」が 15.6%で、計 41.6%の人が情報を家族や友人に話したことになる。「SNS 上で拡散した」は合計 3.7%と少ない比率にとどまっている。

3.2 炎上 (Q34、Q35)

Q34 では、「あなたは、人や組織に対する批判が集まっている (炎上している) ネット上の投稿を読むことが、どのくらいありますか」という質問で炎上投稿への接触を聞いた。質問自体は頻度を問うものであり、「毎日 1 回以上」から「月に 1 回未満」まで、ともかく炎上投稿を読むことがある、と答えた人が 43.1% (「毎日 1 回以上」2.5%、「週に数回」7.4%、「月に数回」11.0%、「月に 1 回程度」6.1%、「月に 1 回未満」16.2%)、「まったくない」が 56.9%であったので、本稿では以降、「みた (読んだ) ことがある」「みた (読んだ) ことがない」の 2 値で分析を進める。

表 3.2.1 炎上投稿への接触の有無 (単位: %、N= N=3655)

	全体	男性	女性		10代	20代	30代	40代	50代	60代	
炎上投稿をみたことがある	43.1	44.5	42.0	n.s.	65.7	59.5	47.3	43.1	33.3	27.0	***

※アスタリスクは、各属性(性別、年齢層)×2 値回答 (みたことがある/ない) のクロス集計の χ^2 検定結果 n.s.:no significant, ***:p<0.001
残差分析の結果 5%水準 (両側検定) で数値が黒太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

表に示される通り、「炎上投稿をみたことがある」と答えた人は 43.1%であり、とくに 10代は 65.7%とかなり高い数値を示している。年齢層が高くなるにつれ比率は減少していく。

次に Q34SQ1 で「あなたが読んだ炎上事例について、炎上していたのは次のうちどの人 (または組織) でしたか。最近見た 1 件についてお答えください。(SA)」という質問をし、その回答分布 (全体、男女別、年齢層別) を示したのが表 3.2.2 である。

表 3.2.2 炎上の対象（単位：％、SA、N=1576：炎上投稿に接触した人）

	全体	男性	女性		10代	20代	30代	40代	50代	60代	
テレビの有名人	18.6	17.0	20.5	n.s.	20.3	17.0	18.4	22.7	20.9	11.1	***
ネットの有名人	5.0	4.4	5.8		15.3	6.6	3.1	5.0	0.0	2.6	
企業・グループ	3.2	4.0	2.2		6.1	1.7	1.9	2.7	2.9	7.4	
知らない個人	63.0	63.5	62.5		53.4	65.1	69.1	58.7	63.6	63.2	
知人・友人	4.7	4.9	4.5		3.7	5.2	3.4	5.3	3.8	6.8	
その他	5.5	6.3	4.6		1.2	4.4	4.1	5.7	8.8	9.0	

※数値は各列縦に合計して 100%。アスタリスクは、各属性(性別、年齢層)×6 選択肢回答 (SA) のクロス集計の χ^2 検定結果 **: $p<0.01$, ***: $p<0.001$
 残差分析の結果 5%水準(両側検定) で数値が黒太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

表に示される通り、「知らない個人」が 63.0%と最も高く、「テレビの有名人」が 18.6%でそれに次いでいる。

Q34SQ1 では「接触した」と答えた人に対し、それぞれのカテゴリーごとに自由記述を求めている。

まず、テレビの有名人 (N=293) について、有効な自由記述があったのは 273 件であり、その内訳は次のとおりである。

表 3.2.3 炎上の対象(自由記述) (単位：件、Q34SQ1 で「テレビの有名人」と答えた 293 件中有効 273 件)

木下優樹菜	51	村本大輔	8
東出昌大	44	沢尻エリカ	5
宮迫博之	31	唐田えりか	4
加藤紗里	10	その他	111
辻希美	9	計	273

有効回答で最も多かった木下優樹菜は 2019 年 11 月 18 日に、実姉が勤務していたタピオカ店の経営者に対して、自身の Instagram で恫喝的なメッセージを送ったことで炎上した(のちに芸能活動の自粛を表明)。東出昌大は 2020 年 1 月 23 日、映画で共演した唐田えりかとの不倫が『週刊文春』に報じられた。宮迫博之は 2019 年 6 月、週刊誌上で 2014 年に反社会勢力の忘年会へ闇営業に複数人の芸人とともに参加していた事が報じられた。

「ネットの有名人」(79 件) では自由記述の有効回答が 54 件、「ヒカキン」16、「よりひと」10、「ホリエモン」4、「ひかる」4、「その他」29 という内訳であった。

「企業・グループ」(51 件) では自由記述の有効回答が 49 件、「吉本興業」9、「NHK」3、「テレ朝」3、「その他」34 という内訳であった。

「知らない個人」(993 件)、「知人・友人」(74 件)、「その他」(86 件) については具体的に特定しうる固有名の記述はなかった。

Q34SQ2 では、「炎上している人や組織に対するネット上での投稿を読む際の、あなたのお気持ちはどのようなものでしたか。最近読んだ1件について、お答えください」という質問を行ない（選択肢は「あてはまる」「あてはまらない」）、その回答分布（全体、男女別、年齢層別）は表 3.2.4 の通りである。

最も比率の高い回答は、「他の人のコメントや記事がもっともであると感じた（31.5%）」であり、ついで「対象の人や組織に失望した（28.2%）」であった。他に「他の人のコメントや記事が間違えていると感じた（25.2%）」「対象の人や組織が許せないと思った（25.1%）」「読んでいたのが楽しかった（19.4%）」などの回答も一定の比率を集めている。

表 3.2.4 炎上投稿を読む際の気持ち（単位:%、N=1576）

	全体	男性	女性		10代	20代	30代	40代	50代	60代	
(1) 多くの人が書き込んでおり、自分も参加したいと感じた	9.7	12.6	6.7	***	6.7	12.4	12.8	9.7	4.6	8.4	**
(2) 他の人のコメントや記事がもっともであると感じた	31.5	31.2	31.7	n.s.	33.1	31.0	34.4	31.0	31.4	27.4	n.s.
(3) 他の人のコメントや記事が間違えていると感じた	25.2	27.9	22.5	*	20.9	25.3	24.7	23.7	23.0	34.7	*
(4) 対象の人や組織が許せないと思った	25.1	26.2	24.0	n.s.	31.9	23.4	24.4	23.0	23.8	28.4	n.s.
(5) 対象の人や組織に失望した	28.2	28.5	27.7	n.s.	30.1	30.2	23.8	26.7	29.3	31.6	n.s.
(6) 対象の人や組織に罰を与えたいと思った	15.5	18.4	12.6	**	16.6	17.9	17.8	14.0	10.5	14.7	n.s.
(7) 炎上する前から、対象の人や組織が気に入らなかった	16.7	18.6	14.5	*	16.6	18.1	18.4	15.7	11.3	19.5	n.s.
(8) 優越感を得たかった	7.9	9.4	6.2	*	9.2	9.1	10.3	7.0	3.8	6.8	n.s.
(9) 読んでいたのが楽しかった	19.4	20.7	18.1	n.s.	24.5	23.1	22.2	17.3	13.4	13.7	**
(10) ストレスを解消したかった	13.0	15.3	10.4	**	9.8	17.0	14.1	14.3	6.3	12.6	**
(11) 他の問題を抱えており、現実逃避したかった	10.6	11.8	9.4	n.s.	11.0	12.4	12.8	9.7	7.9	7.9	n.s.

※表 3.2.4 の数値はそれぞれ「あてはまる」と答えた人の割合。
 アスタリスクは、各属性(性別、年齢層)×各回答[あてはまる/あてはまらない]のクロス集計のχ²検定結果 ns:no significant, *:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001

残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が黒太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

Q34SQ3 では「炎上している人や組織に対するネット上での投稿を読んだ後の、あなたのお気持ちはいかがでしたか」という質問で読んだ後の気持ちを訪ねた(表 3.2.5)。

提示した選択肢で最も多かったのが「時間をムダにしたと感じた」の 40.1%であった。これには男女別年齢層別とも有意差はなかった。

表 3.2.5 炎上投稿を読んだ後の気持ち（単位:%、N=1576）

	全体	男性	女性		10代	20代	30代	40代	50代	60代	
(1) 満足できた	11.7	14.5	9.0	***	16.0	14.3	13.4	10.3	7.1	8.4	*
(2) ストレス解消になり、スッキリした	11.8	14.4	9.2	**	15.3	13.5	15.6	9.3	6.7	9.5	**
(3) 優越感を得ることができた	7.9	9.0	6.6	n.s.	7.4	9.1	11.6	7.0	5.0	5.3	*
(4) 投稿者との一体感を得ることができた	11.4	13.3	9.4	*	12.9	11.3	15.3	12.0	6.3	9.5	*
(5) 前向きな気持ちになれた	8.2	11.0	5.4	***	8.6	9.6	11.3	7.0	3.8	7.9	*
(6) 罪悪感があった	11.4	12.4	10.4	n.s.	11.7	15.1	11.3	6.7	9.2	14.7	*
(7) 後ろめたい気持ちになった	13.5	14.8	12.2	n.s.	11.7	15.1	14.7	11.3	9.6	18.4	n.s.
(8) 時間をムダにしたと感じた	40.1	39.3	40.9	n.s.	36.2	36.5	41.3	38.3	43.1	47.4	n.s.

※表 3.2.5 の数値はそれぞれ「あてはまる」と答えた人の割合。

アスタリスクは、各属性(性別、年齢層)×各回答 [あてはまる／あてはまらない]のクロス集計の χ^2 検定結果 ns:no significant, *:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001
 残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が黒太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

Q35 では「あなたは、人や組織に対する批判が集まっている(炎上している)ことを知りながら、不特定多数が閲覧できるネット上のサービスで批判的な投稿を行ったことが、どのくらいありますか。最近の回数についてお選びください」という質問で炎上への参加頻度を尋ねた。質問自体は頻度を問うものであり、「毎日1回以上」から「月に1回未満」まで、ともかく炎上投稿を行う(炎上に参加した)ことがある、と答えた人が11.3% (「毎日1回以上」0.6%、「週に数回」2.1%、「月に数回」2.5%、「月に1回程度」1.7%、「月に1回未満」4.4%)、「まったくない」が88.7%であったので、本稿では「参加したことがある」「参加したことがない」の2値で分析を進めた。

表 3.2.6 炎上参加の有無 (単位: %、N=3655)

	全体	男性	女性		10代	20代	30代	40代	50代	60代	
炎上に参加した	11.3	13.8	8.6	***	17.3	18.0	14.5	10.1	7.4	5.5	***

※アスタリスクは、各属性(性別、年齢層)×3択回答(SA)のクロス集計の χ^2 検定結果

** : p<0.01, *** : p<0.001

残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が黒太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

炎上参加は全体の11.3%であり、単に「見た(43.1%)」の4分の1程度である。性別で女性より男性の方が有意に比率が高く、また年齢層別に見た場合、20代、10代、30代の若年層の比率が高くなっている。

表 3.2.7 炎上参加投稿の対象 (単位: %、SA、N=413: 炎上参加した人)

	全体	男性	女性		10代	20代	30代	40代	50代	60代	
テレビの有名人	9.9	8.1	12.7	n.s.	9.3	10.0	11.2	11.4	11.3	2.6	**
ネットの有名人	3.4	2.4	5.1		16.3	2.7	2.0	2.9	0.0	0.0	
企業・グループ	2.9	3.2	1.9		4.7	1.8	2.0	2.9	3.8	5.1	
知らない個人	64.9	66.9	61.8		46.5	66.4	69.4	64.3	69.8	64.1	
知人・友人	16.0	16.5	15.3		18.6	19.1	14.3	14.3	11.3	18.0	
その他	2.9	2.8	3.2		4.7	0.0	1.0	4.3	3.8	10.3	

※数値は各列で縦に合計して100%。

アスタリスクは、各属性(性別、年齢層)×6択選択肢(SA)のクロス集計の χ^2 検定結果

** : p<0.01, *** : p<0.001

残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が黒太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

炎上参加したという人(N=413)に対して Q35SQ1 では「あなたが、炎上している人や組織に関して、不特定多数が閲覧できるネット上のサービスで批判的な投稿を行った際に、炎上していたのは次のうちの誰か(または組織)でしたか。最近投稿した1件についてお答えください」という質問をした。その結果が表 3.2.7 であり、「知らない個人(64.9%)」が最も多い。さらに問では、それぞれ具体名を自由回答で訪ねている。

まず「テレビの有名人」の回答結果が表 3.2.8 である。最も多かったのは「見た」と同様に「木下優樹菜」の7件であり、「東出昌大」が4件でこれに次いでいたが、いずれも回答は少数にとどまった。

表 3.2.8 炎上参加投稿の相手(自由記述)(単位:件、Q35SQ1 で「テレビの有名人」と答えた41件中有効31件)

木下優樹菜	7
東出昌大	4
安倍晋三	3
ホリエモン	2
その他	22
計	31

なお、炎上投稿した「ネットの有名人」「企業・グループ」「知らない個人」「友人・知人」「その他」のカテゴリについての自由記述は、ほとんどが「忘れた」「覚えていない」などの記述であり、具体的な記述は「ネットの有名人」3件、「企業・グループ」11件、「その他」9件あった。「その他」で「安倍晋三」が3件あったほかは、いずれも複数の同じ回答はなかった。炎上参加に関しては、その対象者をあまり答えたくないというのが本音であろう。

Q35SQ2 では「炎上している人や組織に関して、不特定多数が閲覧できるネット上のサービスで批判的な投稿を行った際の、あなたのお気持ちはどのようなものでしたか。最近投稿した1件について、お答えください」という質問で炎上の際の気持ちを質問した。表 3.2.9 に示される通り、最も比率が高かったのが「(1)自分の考えを誰かに知ってほしかった」と「(9)対象の人や組織が許せなかった」の35.4%であり、次いで「(10)対象の人や組織に失望した」が34.1%であった。

表 3.2.9 炎上参加した際の気持ち（単位：％、N=413：炎上参加者）

	全体	男性	女性		10代	20代	30代	40代	50代	60代	
(1) 自分の考えを誰かに知ってほしかった	35.4	41.9	26.1	**	46.5	34.5	38.8	40.0	26.4	20.5	n.s.
(2) 自分の持っている情報を誰かに伝えたかった	31.0	34.3	25.5	n.s.	39.5	32.7	30.6	32.9	22.6	25.6	n.s.
(3) 有名人に自分のコメントを見てもらいたかった	21.5	27.4	13.4	***	23.3	22.7	24.5	24.3	13.2	15.4	n.s.
(4) 多くの人が書き込んでおり、自分も参加すべきだと感じた	27.1	32.7	17.8	**	25.6	28.2	28.6	31.4	22.6	20.5	n.s.
(5) 自分のコメントにより、他の人の意見を正せると思った	23.0	27.0	15.9	**	27.9	24.5	24.5	30.0	7.5	17.9	n.s.
(6) 他の人のコメントや記事がもっともであると同調したかった	31.7	37.1	23.6	**	30.2	31.8	36.7	32.9	18.9	35.9	n.s.
(7) 他の人のコメントや記事が間違えていると反対したかった	22.3	30.6	10.2	***	30.2	26.4	22.4	17.1	17.0	17.9	n.s.
(8) 他の人に褒められたかった	18.2	21.0	14.0	n.s.	18.6	24.5	17.3	18.6	11.3	10.3	n.s.
(9) 対象の人や組織が許せなかった	35.4	41.1	26.8	**	32.6	32.7	42.9	37.1	35.8	23.1	n.s.
(10) 対象の人や組織に失望した	34.1	39.9	25.5	**	39.5	30.9	38.8	35.7	30.2	28.2	n.s.
(11) 対象の人や組織に罰を与えたかった	27.6	32.3	20.4	**	30.2	35.5	26.5	25.7	20.8	17.9	n.s.
(12) 炎上する前から、対象の人や組織が気に入らなかった	27.1	30.6	22.3	n.s.	30.2	28.2	28.6	25.7	28.3	17.9	n.s.
(13) 優越感を得たかった	19.9	25.4	11.5	***	16.3	23.6	25.5	18.6	13.2	10.3	n.s.
(14) 書き込むのが楽しかった	22.8	29.4	12.7	***	18.6	30.0	24.5	22.9	11.3	17.9	n.s.
(15) ストレスを解消したかった	24.9	31.9	14.6	***	20.9	30.9	24.5	28.6	18.9	15.4	n.s.
(16) 他の問題を抱えており、現実逃避したかった	23.0	27.4	17.2	*	20.9	26.4	27.6	21.4	20.8	10.3	n.s.

※表 3.2.9 の数値はそれぞれ「あてはまる」と答えた人の割合。
 アスタリスクは、各属性(性別、年齢層)×各回答[あてはまる／あてはまらない]のクロス集計の χ^2 検定結果 ns:no significant, *:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001
 残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が黒太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

Q35SQ3 では「炎上している人や組織に関して、不特定多数が閲覧できるネット上のサービ
 ビスで批判的な投稿を行った後の、あなたのお気持ちはいかがでしたか。最近投稿した 1
 件について、お答えください」という質問で、炎上参加後の気持ちを尋ねた。

表 3.2.10 で示される通り、「(8)時間をムダにしたと感じた」が 37.0%で最も比率が高か
 った。

表 3.2.10 炎上参加したあとの気持ち（単位：％、N=413：参加者）

	全体	男性	女性		10代	20代	30代	40代	50代	60代	
(1) 満足できた	24.9	30.2	17.8	**	37.2	28.2	30.6	20.0	13.2	12.8	*
(2) ストレス解消になり、スッキリした	26.9	30.2	22.3	n.s.	34.9	33.6	23.5	30.0	17.0	15.4	n.s.
(3) 優越感を得ることができた	22.3	25.0	18.5	n.s.	16.3	31.8	22.4	27.1	11.3	7.7	**
(4) 他の投稿者との一体感を得ることができた	25.9	31.5	17.8	**	23.3	26.4	32.7	25.7	17.0	23.1	n.s.
(5) 前向きな気持ちになれた	23.2	29.4	14.0	***	25.6	26.4	29.6	21.4	9.4	17.9	n.s.
(6) 罪悪感があった	24.9	29.0	18.5	*	27.9	28.2	25.5	22.9	18.9	23.1	n.s.
(7) 後ろめたい気持ちになった	26.4	31.5	17.8	**	23.3	30.9	27.6	25.7	20.8	23.1	n.s.
(8) 時間をムダにしたと感じた	37.0	41.5	29.9	*	27.9	35.5	34.7	45.7	37.7	41.0	n.s.

※表 3.2.10 の数値はそれぞれ「あてはまる」と答えた人の割合。
 アスタリスクは、各属性(性別、年齢層)×各回答[あてはまる／あてはまらない]のクロス集計の χ^2 検定結果 ns:no significant, *:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001
 残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が黒太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

4. 自撮り熱中とネット依存

強迫的に自撮りおよび SNS への投稿を行う行為について世界的に問題視されており、Selfitis（セルフイティス：自撮り熱中）として注意喚起が行われている。Balakrishnan & Griffiths(2017)は Selfitis 行動尺度を開発し、この概念の検証を課題としている。SBS は必ずしも否定的な項目により構成された尺度ではないが、その程度が高い場合には、強迫的自撮り行動をもたらし、ネガティブな結果に結びつく可能性がある。

4.1 自撮り投稿の状況

SNS の現在利用者（n=2,770）の自撮り投稿状況について、「Q23 あなたは最近、自分自身を撮影した写真や動画（以降、自撮り）を SNS に投稿しましたか」の設問に対し、「最近投稿した」「最近投稿していない」の 2 件法で回答を得た。性別、年齢層別、就業形態別の行為者率（「最近投稿した」を選択した率）を表 4.1.1 に示す。

表 4.1.1 最近自撮り投稿をした率（行為者率）

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定	フルタイム	パートタイム	専業主婦(夫)	学生・生徒	無職	χ^2 検定
	n	2770	1340		1401	241	562	536	503	500		428	1295	435	427	327	
投稿した	10.5%	11.3%	9.8%	n.s.	16.6%	14.9%	11.9%	8.3%	7.2%	5.6%	***	12.8%	9.2%	3.5%	16.5%	5.2%	***

※数値は行為者率，***:p<0.001，n.s.:有意差なし，黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す（5%水準、両側検定）。

最近自撮りを SNS に投稿した率は、現在 SNS 利用者全体の 10.5%であり、男女に有意差は見られなかった。年齢層では若年であるほど高く、10代では 16.6%、20代では 14.9%であった。また、50代では 7.2%、60代では 5.6%と、中高年層でも一定の自撮り投稿者がいることが分かった。就業形態別には学生が 16.5%、フルタイムが 12.8%と有意に高く、学生だけでなくいわゆる社会人にも一般的な情報行動になっていると言える。

続いて、最近自撮りを SNS に投稿した回数について、「あなたは、自撮りを SNS にどのくらい投稿しますか」の設問により、自撮り投稿の行為者（n=290）から回答を得た。その結果を表 4.1.2 に示す。毎日 10 回以上という高頻度の投稿者は 3.8%であり、毎日 1 回程度以上投稿するのは、行為者全体の 23.1%であった。

表 4.1.2 自撮り投稿頻度（単位：%）

	n	毎日10回以上	毎日数回	毎日1回程度	週に数回程度	月に数回程度	月に1回未満
自撮りをSNSに投稿する回数	290	3.8	8.3	11	20.7	20.3	35.9

4.2 自撮り熱中の状況と自撮り投稿の目的・影響

「あなたの、自撮りや SNS への投稿について、お答えください。」の設問について、Balakrishnan & Griffiths(2017)の Selfitis 行動尺度から抜粋した 6 項目(筆者訳)を用い、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の 4 件法で回答を得た。性別、年齢層別の該当者率(「あてはまる」または「ややあてはまる」を選択した率)を表 4.2.1 に示す。

「自撮りをするストレスが軽減できる」に該当したのは、自撮り投稿行為者全体の 38.6%であり、性別では男性が 46.4%と女性の 30.7%に対して有意に高かった。年齢層別では 30 代が 54.7%と最も高かった。「自撮りをする自信が持てる」に該当したのは、自撮り投稿行為者全体の 35.5%であり、性別では男性が 41.1%と女性の 29.9%に対して有意に高かった。年齢層別では 30 代が 48.4%と最も高く、10 代は 17.5%と有意に低かった。「自撮りを SNS で共有すると、仲間のグループの間でより受け入れられる」に該当したのは、自撮り投稿行為者全体の 37.9%であり、性別に有意差はなく、年齢層別では 50 代が 16.7%と低いのみで顕著な差は見られなかった。「自撮りにより、出来事や経験が、より良い思い出になる」に該当したのは、自撮り投稿行為者全体の 44.5%であり、性別、年齢層別に有意差は見られなかった。「SNS でより多くの「いいね」やコメントを得るために、頻繁に自撮りを投稿する」に該当したのは、自撮り投稿行為者全体の 34.1%であり、性別に有意差はなく、年齢層別では 30 代が 50.0%と最も高かった。「自撮りを投稿することで、友達に評価されることを期待している」に該当したのは、自撮り投稿行為者全体の 34.8%であり、性別に有意差はなく、年齢層別では 30 代が 51.6%と最も高かった。

表 4.2.1 自撮り熱中関連項目の該当者率

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	290	151		137	40	84	64	42	36	
自撮りをするストレスが軽減できる	38.6%	46.4%	30.7%	**	30.0%	39.3%	54.7%	47.6%	22.2%	16.7%	**
自撮りをする自信が持てる	35.5%	41.1%	29.9%	*	17.5%	44.0%	48.4%	38.1%	22.2%	16.7%	**
自撮りを SNS で共有すると、仲間のグループの間でより受け入れられる	37.9%	41.7%	34.3%	n.s.	35.0%	45.2%	45.3%	38.1%	16.7%	29.2%	*
自撮りにより、出来事や経験が、より良い思い出になる	44.5%	47.0%	41.6%	n.s.	32.5%	47.6%	54.7%	35.7%	36.1%	54.2%	n.s.
SNS でより多くの「いいね」やコメントを得るために、頻繁に自撮りを投稿する	34.1%	38.4%	29.9%	n.s.	22.5%	41.7%	50.0%	35.7%	13.9%	12.5%	***
自撮りを投稿することで、友達に評価されることを期待している	34.8%	37.7%	31.4%	n.s.	27.5%	39.3%	51.6%	28.6%	19.4%	20.8%	**

※数値は該当率，*：p<0.05，**：p<0.01，***：p<0.001，n. s.：有意差なし，黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す(5%水準、両側検定)。

続いて、「あなたの、自撮りや SNS への投稿について、お答えください」の設問に対する

自撮り投稿の目的や影響に関する8項目について、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で回答を得た。性別、年齢層別の該当者率（「あてはまる」または「ややあてはまる」を選択した率）を表4.2.2に示す。

表 4.2.2 自撮りの目的と影響

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	290	151		137	40	84	64	42	36	
自撮りは楽しい	44.8%	43.7%	46.7%	n.s.	50.0%	54.8%	53.1%	35.7%	25.0%	25.0%	**
自撮りは面倒だが、友人関係のために仕方なくやっている	31.4%	38.4%	23.4%	**	12.5%	35.7%	54.7%	26.2%	19.4%	12.5%	***
優越感を得るために、自撮りの投稿をする	32.1%	37.1%	26.3%	*	20.0%	34.5%	50.0%	35.7%	3.9%	16.7%	**
自撮りの投稿が、現実逃避のための手段になっている	29.3%	34.4%	23.4%	*	12.5%	34.5%	53.1%	23.8%	3.9%	8.3%	***
自撮りの投稿をすることが、心理的な負担になっている	25.9%	31.1%	19.7%	*	10.0%	28.6%	40.6%	28.6%	13.9%	16.7%	**
自撮りの投稿をすることが、金銭的な負担になっている	23.4%	31.1%	15.3%	**	7.5%	29.8%	35.9%	26.2%	13.9%	4.2%	**
自撮りの投稿により、友人に嫌われたことがある	21.7%	27.2%	16.1%	*	12.5%	23.8%	34.4%	26.2%	11.1%	4.2%	**
自撮りで良く写るための食事制限などにより、健康を損ねている	24.1%	31.1%	16.8%	**	15.0%	25.0%	40.6%	26.2%	1.1%	8.3%	**

※数値は該当率，*：p<0.05，**：p<0.01，***：p<0.001，n. s.：有意差なし，黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す（5%水準、両側検定）。

「自撮りは楽しい」に該当したのは、自撮り投稿行為者全体の44.8%であり、性別に有意差はなく、年齢層別では20代が54.8%と最も高く、次いで30代が53.1%、10代が50.0%と高かった。行為者全体の約55%は、楽しくないのに自撮り投稿を行っているという状況にあるようである。「自撮りは面倒だが、友人関係のために仕方なくやっている」に該当したのは、自撮り投稿行為者全体の31.4%であり、性別では男性が38.4%と女性の23.4%に対し高かった。年齢層別では10代、60代が12.5%と有意に低く、30代が54.7%と最も高かった。男性が高く、10代が低く、30代が高いという関係性は「自撮りの投稿が、現実逃避のための手段になっている」（男性34.4%、10代12.5%、30代53.1%）「自撮りの投稿をすることが、心理的な負担になっている」（男性31.1%、10代10.0%、30代40.6%）「自撮りの投稿をすることが、金銭的な負担になっている」（男性31.1%、10代7.5%、30代35.9%）においても同様であり、特に30代、また男性にとって、自撮り投稿がストレスから逃れる手段や、ストレスの原因そのものになっている可能性がある。

「優越感を得るために、自撮りの投稿をする」に該当したのは、自撮り投稿行為者全体の32.1%であり、性別では男性が37.1%と女性の26.3%に対し高かった。年齢層別では30代が50.0%と高く、50代が13.9%と低かった。

「自撮りの投稿により、友人に嫌われたことがある」に該当したのは、自撮り投稿行為

者全体の 21.7%であり、性別では男性が 27.2%と女性の 16.1%に対し高かった。年齢層別では 30 代が 34.4%と高く、60 代が 4.2%と低かった。

「自撮りで良く写るための食事制限などにより、健康を損ねている」に該当したのは、自撮り投稿行為者全体の 24.1%であり、性別では男性が 31.1%と女性の 16.8%に対し高かった。年齢層別では 30 代が 40.6%と高く、50 代が 11.1%と低かった。

自撮り熱中と自撮り投稿の目的・影響について、参考までに就業形態別の分布を見ると（表 4.2.3）、学生は娯楽として楽しむ要素が高く、熱中度合いはほどほどであり、ストレスとの関連（現実逃避の手段としての利用や、自撮り投稿により心理的負荷を感じるなど）が低いのに対し、フルタイムでは熱中度が高く、またストレスとの関連性が高い傾向が見られる。これらの結果から、自撮り熱中の程度が高いのは青少年ではなくフルタイム勤務の 30 代であり、また女性ではなく男性であることが示唆された。自撮り投稿者のうち男性の約 3 割、30 代の約 4 割が、写真に良く写るための食事制限を行っており、またフルタイム勤務の 30 代、特に男性にとって、自撮り投稿がストレスから逃れる手段や、ストレスの原因そのものになっている可能性がある。

表 4.2.3 自撮り熱中と自撮り投稿の目的・影響（就業形態別）

	フルタイム	パートタイム	専業主婦(夫)	学生・生徒	無職
	n	166	40	15	54
自撮りをするとストレスが軽減できる	47.6%	20.0%	26.7%	31.5%	26.7%
自撮りをすると自信が持てる	44.0%	27.5%	33.3%	22.2%	13.3%
自撮りをSNSで共有すると、仲間のグループの間でより受け入れられる	43.4%	25.0%	33.3%	29.6%	46.7%
自撮りにより、出来事や経験が、より良い思い出になる	50.0%	47.5%	33.3%	31.5%	33.3%
SNSでより多くの「いいね」やコメントを得るために、頻繁に自撮りを投稿する	41.6%	22.5%	26.7%	22.2%	33.3%
自撮りを投稿することで、友達に評価されることを期待している	41.0%	27.5%	26.7%	25.9%	26.7%
自撮りは楽しい	47.6%	35.0%	33.3%	48.1%	40.0%
自撮りは面倒だが、友人関係のために仕方なくやっている	39.8%	22.5%	33.3%	18.5%	6.7%
優越感を得るために、自撮りの投稿をする	40.4%	22.5%	33.3%	20.4%	6.7%
自撮りの投稿が、現実逃避のための手段になっている	37.3%	22.5%	26.7%	14.8%	13.3%
自撮りの投稿をすることが、心理的な負担になっている	31.3%	22.5%	33.3%	13.0%	13.3%
自撮りの投稿をすることが、金銭的な負担になっている	31.9%	15.0%	13.3%	13.0%	0.0%
自撮りの投稿により、友人に嫌われたことがある	30.7%	10.0%	6.7%	13.0%	0.0%
自撮りで良く写るための食事制限などにより、健康を損ねている	31.9%	17.5%	13.3%	14.8%	0.0%

※数値は該当率

4.3 インターネット依存傾向と自撮り熱中

インターネット依存状況について、Young(1998)をもとに橋元ら（総務省，2014）により作成された次の8項目のインターネット依存傾向尺度を用い、「Q12 あなたの現在のインターネット利用に関して、以下のようなことはあてはまりますか。仕事を除くプライベートな利用について、お答えください」の設問に対し、「あてはまる」「あてはまらない」の2件法で回答を得た。「あてはまる」に5項目以上該当した場合に依存傾向あり、該当数が5項目未満である場合に依存傾向なしとした。

- (1) ネットを利用していない時も、ネットのことを考えている
- (2) より多くの時間、ネットをしないと満足できない
- (3) ネットの利用時間をコントロールしようとしても、うまくいかない
- (4) ネット利用を控えようとする、落ち着かなくなったり、いらいらしたりする
- (5) もともと予定していたよりも長時間ネットを利用してしまう
- (6) ネットのせいで、家族・友人との関係が損なわれたり、仕事や勉強などがおろそかになりそうになっている
- (7) ネットを利用している時間や熱中している度合いについて、家族や友人に嘘をついたことがある
- (8) 現実から逃避したり、落ち込んだ気分を盛り上げるためにネットを利用している

性別、年齢層別の依存傾向者率を表 4.3.1 に示す。全体の依存傾向者率は 12.0%で、性別では有意差は見られなかった。年齢層では、10代が 27.0%、20代が 20.3%、30代が 17.7%と有意に高く、40代が 9.3%、50代が 5.4%、60代が 3.1%と有意に低かった。

表 4.3.1 インターネット依存傾向者率（性別・年齢層別）

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	3655	1794		1817	248	612	677	696	717	
インターネット依存傾向者率	12.0%	11.5%	12.3%	n.s.	27.0%	20.3%	17.7%	9.3%	5.4%	3.1%	***

※数値は該当率，***:p<0.001, n. s.:有意差なし，黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す（5%水準、両側検定）。

就業形態別の依存傾向者率を表 4.3.2 に示す。学生・生徒の依存傾向者率が 24.3%と最も高く、専業主婦（夫）が 7.9%と最も低かった。

表 4.3.2 インターネット依存傾向者率（就業形態別）

	フルタイム	パートタイム	専業主婦(夫)	学生・生徒	無職	χ ² 検定
n	1683	574	594	337	467	
インターネット依存傾向者率	11.4%	11.8%	7.9%	24.3%	10.3%	***

※数値は該当率， ***:p<0.001， 黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す（5%水準、両側検定）。

インターネット依存傾向と自撮り熱中との関連をみるため、自撮り熱中に関する6項目（4.2節参照）の4件法による回答の計（「あてはまる」を4点、「ややあてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点とした）を自撮り熱中得点とし、平均値を算出した（Cronbachのα=0.93）。インターネット依存傾向者と非依存傾向者の平均得点を表4.3.3に示す。

自撮り投稿行為者（n=290）のうち、インターネット依存傾向者は15.27ポイントであり、非依存傾向者の11.32ポイントよりも有意に高かった。自撮り投稿への熱中はインターネット依存傾向と結びつく可能性や、またインターネット依存のひとつの形として自撮り熱中が生じている可能性が考えられる。インターネット依存に関しては様々な問題が生じることが数多く報告されているため、自撮り投稿への過度な熱中は早い段階で抑制することが望ましい。

表 4.3.3 インターネット依存傾向有無と自撮り熱中得点

	n	M	SD	検定
依存	92	15.27	5.19	***
非依存	198	11.32	4.91	
全体	290	12.58	5.32	

※ ***:p<0.001, t検定

参考文献

- Balakrishnan, J and Griffiths, M. D. (2017) An Exploratory Study of “Selfitis” and the Development of the Selfitis Behavior Scale, International Journal of Mental Health and Addiction volume 16, pages722-736.
- Young, K. S. (1998). Internet Addiction: The Emergence of a new Clinical Disorder. CyberPsychology & Behavior, 1(3), 237-244.
- 総務省（2014）平成25年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査 http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2014/h25mediariyou_3report.pdf（2021年1月27日閲覧）

5. eスポーツへの参加と諸問題

eスポーツは全世界で1兆円規模の大きな市場を獲得しており、巨大な賞金額の大会や、政府の支援を得て開催される大会もある。学校教育の場でeスポーツを取り入れるケースもあり、向社会的な活動として受け入れられつつある。日本のeスポーツ市場は2017年の約4億円から、2019年には約61億円と増加しており（KADOKAWA Game Linkage, 2020）、今後の利用人口の拡大が見込まれる。そんな中、eスポーツが健康を害する可能性（van Hilv oorde, 2016; van Hilv oorde and Pot, 2016）や、ゲーム依存者を増やす可能性がある（G riffiths, 2017）一方で、健康への影響についてほとんど確認されていないこと（Thomas Chun g, Simmy Sum, Monique Chan, Ely Lai, Nanley Cheng., 2019）が指摘されている。本章では、2020年3月時点における我が国のeスポーツに関する意識や利用状況について分析を行う。

5.1 eスポーツの認知度と青少年の利用への印象

eスポーツの認知度について、「Q11 eスポーツについて、あてはまるものをひとつだけお選びください」の設問により回答を得た。性別、年齢層別の該当率を表5.1.1に示す。言葉だけでなく「eスポーツがどういうものか知っている」と回答したのは全体の47.9%であり、性別では男性が58.1%、女性が37.8%と、男性が有意に高かった。また、年代では10代が58.9%と最も高く、60代が44.1%と低かった。20代から60代まではほぼ横ばいであり、10代で認知度が急速に高まっていることが分かる。また、言葉自体を知らないと回答したのは全体の11.8%であり、60代でも言葉を知らないのは10.9%にとどまる。全体として、全年齢層で半数近くがどういうものか認知しており、特に10代での認知度が高いといえる。

表 5.1.1 eスポーツの認知度

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	3655	1794		1817	248	612	677	696	717	
eスポーツという言葉を知らない	11.8%	9.1%	14.2%	***	7.3%	4.4%	4.5%	9.9%	11.3%	10.9%	***
eスポーツという言葉は知っているが、どういうものかよくわからない	40.3%	32.8%	48.0%		33.9%	36.8%	39.6%	41.8%	40.2%	45.0%	
eスポーツがどういうものか知っている	47.9%	58.1%	37.8%		58.9%	48.9%	45.9%	48.3%	48.5%	44.1%	

※***: $p < 0.001$, 数値は各列縦に合計して100%, 黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す（5%水準、両側検定）。

eスポーツを青少年が利用することに関しての印象について、「eスポーツがどういうものか知っている」を選択した回答者（ $n=1751$ ）から、「ゲームで競技を行うeスポーツにつ

いて、あなたの考えをお選びください」の設問により「どちらかといえば良い」「どちらかといえば悪い」の2択で回答を得た。性別、年齢層別の「どちらかといえば良い」への該当率（肯定率）を表5.1.2に示す。

「eスポーツを青少年に推進すること」については、全体の44.8%が良い、55.2%が悪いと回答した。性別では男性が、年齢層では若年であるほど寛容であり、特に10代・20代は60%以上が「どちらかといえば良い」と回答したのに対し、60代では27.3%にとどまった。青少年の精神的・身体的健康についての肯定率は、やはり男性、若者であるほど寛容であるが、全体でもそれぞれ38.0%、28.8%と低水準となった。特に身体的健康については、実際にプレイヤーが多い10代においても肯定率は33.6%にとどまり、全体の約2/3は「どちらかといえば悪い」と考えているようである。

小中学生がプロ選手として活動すること、および課外活動として練習することについては、全体として中学生では44%程度、小学生では38%程度の肯定率となった。当事者に近い年齢の10代では、中学生については60%程度、小学生については47%程度であり、特に小学生がプロとしての活動や課外活動としてeスポーツを行うことについては意見が分かれる。

全体として、eスポーツを青少年が行うことに対して、女性であるほど、また高年齢であるほど（特に60歳以上であるほど）否定的であり、女性の6割、60代の約7割は、eスポーツの青少年への推進を好ましくないと回答した。

表 5.1.2 青少年の e スポーツ利用への印象（肯定率）

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	1751	1043		687	146	299	311	336	348	
eスポーツを青少年に推進することは…	44.8%	47.9%	40.0%	**	63.7%	62.2%	49.5%	38.4%	39.4%	27.3%	***
eスポーツは、青少年の精神的健康に…	38.0%	41.5%	32.6%	***	53.4%	55.9%	42.1%	33.6%	32.2%	20.9%	***
eスポーツは、青少年の身体的健康に…	28.8%	31.8%	23.9%	***	33.6%	41.1%	36.0%	25.9%	25.0%	14.8%	***
中学生がeスポーツのプロ選手として活動することは…	43.9%	45.7%	40.9%	*	62.3%	63.5%	48.9%	38.1%	38.2%	24.1%	***
中学生が課外活動としてeスポーツの練習を行うことは…	44.6%	47.3%	40.8%	**	60.3%	62.2%	46.9%	42.0%	38.8%	27.3%	***
小学生がeスポーツのプロ選手として活動することは…	37.2%	38.6%	34.6%	n.s.	47.3%	57.5%	42.4%	33.0%	31.9%	18.0%	***
小学生が課外活動としてeスポーツの練習を行うことは…	38.7%	41.3%	34.8%	**	47.9%	56.9%	44.4%	36.6%	34.8%	17.7%	***

※数値は「どちらかといえば良い」の率、*:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001, n. s.:有意差なし、黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す（5%水準、両側検定）

5.2 e スポーツへの参加状況と利用時間

e スポーツへの参加状況について、「e スポーツがどういうものか知っている」を選択し

た回答者（n=1,751）から、「あなたのふだんのeスポーツへの参加状況について、お答えください」の設問（複数選択可）により、回答を得た。性別、年齢層別の該当率を表5.2.1に示す。

表 5.2.1 eスポーツへの参加状況

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	1751	1043		687	146	299	311	336	348	
大会やイベントに、競技者として参加することがある	5.9%	6.5%	4.9%	n.s.	5.5%	13.0%	9.6%	4.8%	2.9%	0.3%	***
周囲の仲間と競技や練習をすることがある	6.3%	7.7%	4.4%	**	12.3%	11.0%	9.0%	6.5%	2.9%	0.0%	***
ネット上の相手と競技や練習をすることがある	6.9%	8.4%	4.4%	**	13.7%	13.7%	8.7%	6.5%	2.0%	1.0%	***
一人でeスポーツの練習をしている	7.4%	9.1%	4.7%	**	13.7%	15.1%	9.6%	6.5%	3.2%	0.3%	***
会場で観戦する	6.1%	7.6%	3.9%	**	8.9%	10.7%	8.0%	6.5%	2.9%	1.6%	***
ネット動画で観戦する	17.3%	22.3%	9.9%	***	37.0%	32.1%	22.5%	16.7%	5.7%	2.3%	***
テレビやビデオ(DVD/Blu-rayを含む)で観戦する	10.2%	11.7%	8.0%	*	11.6%	15.7%	11.9%	12.2%	7.8%	3.2%	***

※数値は該当率，*：p<0.05，**：p<0.01，***：p<0.001，n.s.：有意差なし，黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す（5%水準、両側検定）。

大会やイベントへの参加率は、eスポーツの認知者全体の5.9%、年齢層別では20代が13.0%と最も高かった。周囲の仲間との練習による参加率は、eスポーツの認知者全体では6.3%であり、性別では男性が7.7%、年齢層別では10代が12.3%と最も高かった。ネット上の相手との練習による参加率は、eスポーツの認知者全体では6.9%であり、性別では男性が8.4%、年齢層別では10代・20代が13.7%と最も高かった。一人でのeスポーツ練習は、eスポーツの認知者全体では7.4%であり、性別では男性が9.1%、年齢層別では20代が15.1%と最も高かった。

観戦について、会場での観戦者率はeスポーツの認知者全体では6.1%であり、性別では男性が7.6%、年齢層別では20代が10.7%と最も高かった。ネット動画での観戦者率は、eスポーツの認知者全体では17.3%であり、性別では男性が22.3%、年齢層別では10代が37.0%、20代が32.1%と特に高かった。テレビやビデオでの観戦者率は、eスポーツの認知者全体では10.2%であり、性別では男性が11.7%、年齢層別では20代が15.7%と最も高かった。

eスポーツを知らない人も含めた全体(n=3,655)における、参加者（「大会やイベントに、競技者として参加することがある」「周囲の仲間と競技や練習をすることがある」「ネット上の相手と競技や練習をすることがある」「一人でeスポーツの練習をしている」のいずれかへの該当者）の率は5.0%であり、性別では男性の7.5%、女性の2.6%、年齢層別では

10代の11.3%、20代の10.5%、30代の5.9%、40代の4.7%、50代の2.2%、60代の0.4%、就業形態別ではフルタイムの6.3%、パートタイム・アルバイトの3.0%、専業主婦(夫)の1.7%、学生・生徒の12.5%、無職の1.9%となっており、10代・20代の学生、特に男性が主要なプレイヤー層であるといえる。また、「会場で観戦する」「ネット動画で観戦する」「テレビやビデオ(DVD/Blu-rayを含む)で観戦する」のいずれかに該当した観戦者の率は、全体の10.0%、男性の15.4%、女性の4.8%、10代の24.2%、20代の17.3%、30代の11.4%、40代の10.5%、50代の4.9%、60代の2.1%であった。

e スポーツをする・観戦する時間について、何らかの形で参加・練習または観戦していた回答者(n=397)から、「あなたが、ふだんの平日1日に、e スポーツに費やす時間はどのくらいですか。もっともあてはまるものをお選びください」の設問に関する3つの項目「1.e スポーツの練習のためにゲームをする時間」「2.e スポーツのために、ゲーム以外のトレーニングをする時間」「3.動画などでe スポーツの観戦をする時間(テレビ、ビデオ、ネット動画を含む)」に対して回答を得た。性別、年齢層別の該当率を、表5.2.2、表5.2.3、表5.2.4にそれぞれ示す。

e スポーツの練習のためのゲーム利用時間(表5.2.2)について、平日に練習をしない(観戦のみ、あるいは休日のみ練習する、練習せずに大会に出る等)回答者は、参加・観戦者全体の69%であった。平日に1時間未満の練習をするのは14.6%、1~2時間は9.6%、2~3時間は4.3%、3~5時間は1.8%、5~8時間は0.5%、8時間以上は0.3%であり、ふだん平日に練習をする回答者のおよそ半数は1時間未満、約8割は2時間未満の範囲内であった。性別、年齢層別では、10代にやや3時間以上の長時間使用者が多く、在宅起床自由時間の長い青少年のゲーム利用時間の管理には注意が必要である。

表 5.2.2 e スポーツの練習のためにゲームをする時間

	全体	男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	60代
n	397	299	95	62	115	88	76	41	15
あてはまらない	69.0%	67.9%	72.6%	69.4%	60.9%	62.5%	75.0%	82.9%	100%
1時間未満	14.6%	14.7%	14.7%	14.5%	17.4%	14.8%	15.8%	9.8%	0.0%
1時間以上、2時間未満	9.6%	10.0%	8.4%	3.2%	14.8%	15.9%	3.9%	4.9%	0.0%
2時間以上、3時間未満	4.3%	4.7%	2.1%	4.8%	5.2%	5.7%	2.6%	2.4%	0.0%
3時間以上、5時間未満	1.8%	2.0%	1.1%	4.8%	1.7%	1.1%	1.3%	0.0%	0.0%
5時間以上、8時間未満	0.5%	0.7%	0.0%	3.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
8時間以上	0.3%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	1.3%	0.0%	0.0%

※数値は該当率、数値は各列縦に合計して100%

eスポーツのためにゲーム以外のトレーニングをする時間（表 5.2.3）について、平日にトレーニングをしない（観戦のみ、トレーニングをしない、あるいは休日のみトレーニングする等）回答者は、参加・観戦者全体の 70.5%であった。平日に 1 時間未満のトレーニングをするのは 13.4%、1～2 時間は 10.8%、2～3 時間は 2.5%、3～5 時間は 2.3%、5～8 時間は 0.3%、8 時間以上は 0.3%であり、ふだん平日にトレーニングをする回答者の 45%は 1 時間未満、約 8 割は 2 時間未満の範囲内であった。性別、年齢層別では、主要な e スポーツ利用者層である 10 代～30 代で大きな違いは見られなかった。

表 5.2.3 eスポーツのために、ゲーム以外のトレーニングをする時間

	全体	男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	60代
n	397	299	95	62	115	88	76	41	15
あてはまらない	70.5%	68.6%	76.8%	67.7%	67.0%	63.6%	76.3%	78.0%	100%
1時間未満	13.4%	14.7%	9.5%	14.5%	13.0%	14.8%	14.5%	12.2%	0.0%
1時間以上、2時間未満	10.8%	12.0%	7.4%	11.3%	15.7%	13.6%	6.6%	2.4%	0.0%
2時間以上、3時間未満	2.5%	2.7%	2.1%	4.8%	1.7%	5.7%	0.0%	0.0%	0.0%
3時間以上、5時間未満	2.3%	2.0%	2.1%	1.6%	2.6%	1.1%	1.3%	7.3%	0.0%
5時間以上、8時間未満	0.3%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%
8時間以上	0.3%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	1.3%	0.0%	0.0%

※数値は該当率、数値は各列縦に合計して 100%

表 5.2.4 動画などで e スポーツの観戦をする時間（テレビ、ビデオ、ネット動画を含む）

	全体	男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	60代
n	397	299	95	62	115	88	76	41	15
あてはまらない	31.7%	28.1%	42.1%	24.2%	33.9%	26.1%	28.9%	41.5%	66.7%
1時間未満	49.9%	52.5%	43.2%	56.5%	47.8%	45.5%	57.9%	46.3%	33.3%
1時間以上、2時間未満	9.6%	11.0%	5.3%	6.5%	9.6%	18.2%	6.6%	4.9%	0.0%
2時間以上、3時間未満	5.0%	5.0%	5.3%	4.8%	7.0%	6.8%	2.6%	2.4%	0.0%
3時間以上、5時間未満	3.0%	3.0%	2.1%	8.1%	1.7%	3.4%	1.3%	2.4%	0.0%
5時間以上、8時間未満	0.5%	0.3%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	1.3%	2.4%	0.0%
8時間以上	0.3%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	1.3%	0.0%	0.0%

※数値は該当率、数値は各列縦に合計して 100%

動画などで e スポーツの観戦をする時間（表 5.2.4）について、平日に観戦をしない（参加のみ、休日のみ等）回答者は、参加・観戦者全体の 31.7%であった。平日に 1 時間未満の観戦をするのは 49.9%、1～2 時間は 9.6%、2～3 時間は 5.0%、3～5 時間は 3.0%、5

～8時間は0.5%、8時間以上は0.3%であり、全体の81.6%は0分または1時間未満、3時間以上の観戦は3.8%にとどまった。性別、年齢層別では、10代で3～5時間の観戦者が8.1%と多く、ゲーム利用時間同様、青少年のゲーム観戦時間の管理には注意が必要である。

5.3 eスポーツ利用の影響

eスポーツによるポジティブ・ネガティブな影響について、何らかの形でeスポーツに参加・練習または観戦していた回答者(n=397)から、「あなたがeスポーツにより受けた影響について、お答えください」の設問に対する22項目について、「あてはまる」「あてはまらない」の2択で回答を得た。性別、年齢層別の該当率(「あてはまる」の率)を、表5.3.1に示す。全体として、多くの項目においては性別、年齢層別で有意な差は見られなかった。

視力について、参加・観戦者全体の13.4%は良くなった、31.5%は悪くなったと回答した。反射神経について、参加・観戦者全体の30.2%は良くなった、12.3%は悪くなったと回答した。運動能力について、参加・観戦者全体の15.4%は良くなった、17.4%は悪くなったと回答した。親しい友人数について、参加・観戦者全体の27.7%は増えた、10.1%は減ったと回答した。毎日の楽しさについて、参加・観戦者全体の46.1%は楽しくなった、11.3%はつまらなくなると回答した。身体的健康について、参加・観戦者全体の15.4%は健康になった、20.7%は不健康になったと回答した。精神的健康について、参加・観戦者全体の19.6%は健康になった、13.4%は不健康になったと回答した。睡眠について、参加・観戦者全体の15.9%は健康になった、20.2%は不健康になったと回答した。自己肯定感について、参加・観戦者全体の23.4%は自分を認められるようになった、13.9%は自分を認められなくなると回答した。他者肯定感について、参加・観戦者全体の24.9%は他人を認められるようになった、11.6%は他人を認められなくなると回答した。学業や仕事の成績について、参加・観戦者全体の15.9%は良くなった、14.9%は悪くなったと回答した。ポジティブ・ネガティブの間で5ポイント以上の差がついた項目をみると、eスポーツのポジティブな影響としては、反射神経が良くなった、新しい友人が増えた、毎日が楽しくなった、精神的に健康になった、自分を認められるようになった、他人を認められるようになった、の項目が挙げられる。一方でネガティブな影響としては、視力が悪くなった、身体的に不健康になった、の項目において顕著であった。

年齢層別で見ると、毎日が楽しくなったというポジティブな影響は、10代の該当率が61.3%と最も高く、次いで20代の50.4%であり、50代は26.8%、60代は20.0%と有意に低かった。また精神的に健康になったというポジティブな影響は、20代が27.8%と最も高く、50代は9.8%、60代は6.7%と有意に低かった。

10代への影響を見ると、新しい友人が増えた(41.9%)、毎日が楽しくなった(61.3%)、

自分を認められるようになった (30.6%)、他人を認められるようになった (29.0%) といった好ましい影響が大きく、向社会的な効果が期待できる。一方で、視力が悪くなった (41.9%)、運動能力が下がった (24.2%)、身体的に不健康になった (19.4%)、よく眠れなくなった (21.0%)、学業や仕事の成績が悪くなった (21.0%) といったネガティブな影響について、対策や管理を行う必要がある。

表 5.3.1 e スポーツ利用の影響 (該当者率)

	全体	男性	女性	χ^2 検定	10代	20代	30代	40代	50代	60代	χ^2 検定
	n	397	299		95	62	115	88	76	41	
視力が良くなった	13.4%	14.7%	8.4%	n.s.	9.7%	16.5%	20.5%	9.2%	4.9%	6.7%	n.s.
視力が悪くなった	31.5%	31.8%	31.6%	n.s.	41.9%	27.8%	33.0%	28.9%	31.7%	20.0%	n.s.
反射神経が良くなった	30.2%	31.8%	25.3%	n.s.	43.5%	32.2%	28.4%	22.4%	22.0%	33.3%	n.s.
反射神経が悪くなった	12.3%	13.4%	8.4%	n.s.	8.1%	10.4%	15.9%	13.2%	14.6%	13.3%	n.s.
運動能力が上がった	15.4%	17.4%	9.5%	n.s.	14.5%	13.9%	18.2%	14.5%	19.5%	6.7%	n.s.
運動能力が下がった	17.4%	17.7%	15.8%	n.s.	24.2%	17.4%	19.3%	17.1%	9.8%	0.0%	-
親しい友人が増えた	27.7%	27.8%	27.4%	n.s.	41.9%	29.6%	25.0%	23.7%	24.4%	0.0%	-
親しい友人が減った	10.1%	10.0%	9.5%	n.s.	8.1%	11.3%	10.2%	11.8%	4.9%	13.3%	n.s.
毎日が楽しくなった	46.1%	46.5%	45.3%	n.s.	61.3%	50.4%	46.6%	42.1%	26.8%	20.0%	**
毎日がつまらなくなった	11.3%	11.4%	11.6%	n.s.	8.1%	11.3%	12.5%	10.5%	14.6%	13.3%	n.s.
身体的に健康になった	15.4%	17.1%	10.5%	n.s.	19.4%	15.7%	15.9%	14.5%	9.8%	13.3%	n.s.
身体的に不健康になった	20.7%	20.7%	20.0%	n.s.	19.4%	21.7%	19.3%	25.0%	17.1%	13.3%	n.s.
精神的に健康になった	19.6%	18.1%	23.2%	n.s.	21.0%	27.8%	20.5%	13.2%	9.8%	6.7%	*
精神的に不健康になった	13.4%	14.4%	9.5%	n.s.	12.9%	10.4%	14.8%	15.8%	14.6%	13.3%	n.s.
よく眠れるようになった	15.9%	16.7%	13.7%	n.s.	24.2%	13.0%	19.3%	14.5%	9.8%	6.7%	n.s.
よく眠れなくなった	20.2%	19.7%	21.1%	n.s.	21.0%	20.9%	18.2%	19.7%	19.5%	26.7%	n.s.
自分を認められるようになった	23.4%	23.7%	22.1%	n.s.	30.6%	25.2%	21.6%	19.7%	22.0%	13.3%	n.s.
自分を認められなくなった	13.9%	15.4%	9.5%	n.s.	9.7%	10.4%	18.2%	15.8%	19.5%	6.7%	n.s.
他人を認められるようになった	24.9%	25.1%	25.3%	n.s.	29.0%	27.0%	23.9%	25.0%	22.0%	6.7%	n.s.
他人を認められなくなった	11.6%	12.7%	7.4%	n.s.	8.1%	7.8%	15.9%	15.8%	9.8%	13.3%	n.s.
学業や仕事の成績が良くなった	15.9%	16.4%	14.7%	n.s.	19.4%	17.4%	19.3%	13.2%	9.8%	0.0%	-
学業や仕事の成績が悪くなった	14.9%	15.1%	14.7%	n.s.	21.0%	7.8%	17.0%	18.4%	14.6%	13.3%	n.s.

※数値は該当率, *:p<0.05, **:p<0.01, n.s.:有意差なし, -:検定なし, 黒太字、赤太字は残差分析の結果それぞれ有意に高い・低いことを示す (5%水準、両側検定)。

e スポーツの参加者 (プレイヤー: n=184) に限定した該当率を表 5.3.2 に示す。反射神

経が良くなった(45.7%)、親しい友人が増えた(42.9%)、毎日が楽しくなった(55.4%)、精神的に健康になった(32.1%)、自分を認められるようになった(38.6%)、他人を認められるようになった(39.1%)の項目において30%を超えており、また学業・仕事の成績が良くなった(29.9%)も高い水準であることから、適度にストレス解消になり良い影響をもたらす可能性を示唆している。一方ネガティブな影響として、視力が悪くなった(44.6%)、身体的に不健康になった(34.2%)の項目において30%を超えており、やはりゲーム使用の時間管理が必要である。特に、eスポーツの推進や青少年の活動への組み込みを行う際には、それらの問題の解決や抑制・予防についての取り組みが行われることが望ましい。

表 5.3.2 eスポーツ参加の影響(該当者率)

	ポジティブ	ネガティブ
視力	25.5%	44.6%
反射神経	45.7%	21.7%
運動能力	28.3%	28.8%
親しい友人数	42.9%	17.9%
毎日の楽しみ	55.4%	20.7%
身体的健康	28.8%	34.2%
精神的健康	32.1%	23.4%
睡眠	27.7%	29.9%
自己肯定感	38.6%	26.1%
他者肯定感	39.1%	22.3%
学業・仕事の成績	29.9%	23.9%

※n=184, 数値は該当率, ポジティブ・ネガティブはそれぞれ、良くなった・悪くなった、上がった・下がった、増えた・減ったに対応している。

参考文献

- Griffiths, M. (2017). The psychosocial impact of professional gambling, professional video gaming and eSports. *Casino & Gaming International*, 28, 59-63.
- KADOKAWA Game Linkage (2020) <https://kadokawagamelinkage.jp/news/pdf/news200213.pdf> [Access ed 2021.1.27]
- Thomas Chung, Simmy Sum, Monique Chan, Ely Lai, Nanley Cheng., (2019). Will esports result in a higher prevalence of problematic gaming? A review of the global situation. *Journal of Behavioral Addictions.*, 8, Issue 3, Pages 384-394., DOI10.1556/2006.8.2019.46
- van Hilvoorde, I. (2016). Sport and play in a digital world. *Sport, Ethics and Philosophy*, 10(1), 1-4.
- van Hilvoorde, I., & Pot, N. (2016). Embodiment and fundamental motor skills in eSports. *Sport, Ethics and Philosophy*, 10(1), 14-27.

東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究
調査研究編 No.37

発行日 令和3年3月31日

編集・発行 東京大学大学院情報学環

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

製作 株式会社創志企画